

AC Zoku Gunsho rulju 145 G856 1923 v.17 pt.2

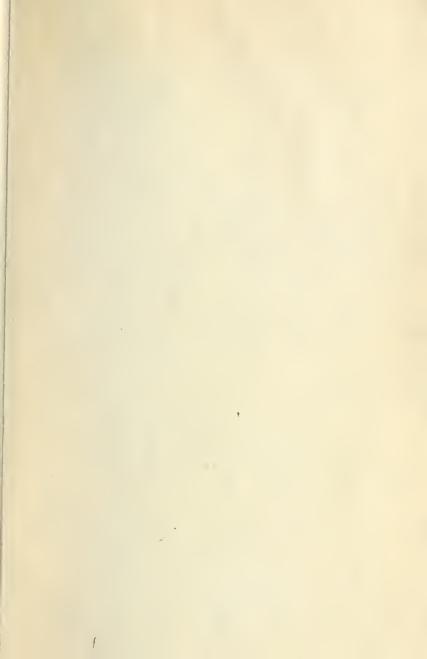
East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE

CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY







東

京

绩老

看事

書類

續 群 淺

類從完成會







AC 145 G856 1923 v.17 pt.2

第十七輯下目次

<b>續</b> 群書類從第十七輯下目次終	連歌執筆次第	胸中抄(連歌極秘之書)卷第五百	定乃和當理	集	卷第四百九十八

## 連歌部十四

男

源

忠

賫

校

總

檢

校

保己一

集

春

老葉第一

春たつとおもへは山も色みえて かすみにこもる花のおもかけ

朝かすみ納ふる山に春はきて みとりの柳うちなひくいろ けふそむかしのかたみとはなる

山かすむさほの川風あけそめて つっあやをる水のしろき野に かへるはいつこ雲とりのあと

去年のあらしのかすむやま里 散ゆきし花は又吹春のきて

ほる七日の月のさやけさ

卷

第

四 百 八 + 四

> 梅をもかさせわかなつむひと 白馬をみはしに袖のつらなりて とめても花にあはすはかひもなし

春しらぬ谷を氷やたのむらん 木かけにしはし水むすふころ をとする水はこほりとけるり

はる風かよふ雪のしたいほ 雪らつむ深谷のを川春さえて うれしくもいつかと待し年越て 目かけしつかにうくひすそ鳴

昨日まて雪をえしまの朝かすみ 山里のかすむ朝とにゆきはれて つらしと見るいまの一筆

六百二十七

葉 第

老

卷第四

ないらむかと」や駒はす」むらんを重なひくあをやきのかけにあるらんりへをきし人はむかしの宿のむめんっへをきし人はむかしの宿のむめんっへをきし人はむかしの宿のむめん。こうのではなのかけにあるらんないらむかと」や駒はす」むらんを育なひくあをやきのかけったかきにもよらす悪はうる物をたかきにもよらす悪はうる物をたかきにもよらす悪はうる物をたかきにもよらす悪はうる物を

山風のたゆめは月のかすむよに こゝろをとめはおなし古さと 歸るなよかすむしかつの春の鴈 古さとは月日をへても行へきに 花を見はてよかへるかりかね ちるとを風なをしへそ春の花 としさくらのひと本のかけ 権か香のいつくよりかは匂ふらむ 朽木にさける花のあはれさ むかしのとをこゝろにそとふ うへし世を花はしるやとひとり見て 春は夢かとおとろかれけり 幸にするたのでむもれき なさくやまのたにのむもれき

まったりますしてしばしまるしたさくやまのたにのむもれき なくさむほとの夢もやはみむ ときしもあれけふ咲花に山おろし 人のなさけそ戀となりぬる 友なきやまのはるかなる道 友なきやまのはるかなる道

かたふく月にらくひすのとる

もふ事なき花をいつ見ん

わかねぬ花にらくひすそなく

よるひるに茶の心やかはるらん

花によのあくる棺をまち俗て

白たへのとろもはる雨今朝晴

雪はかすみににほふ山のは

かけたかき御階のさくら春をえて

あらしはきかし雲の上人

なを面かけは去年のしら雪

陰ふかき花にくるまの音はして

たもとにかすむ有明のそら 鳥の摩花のにほひに山こえて うたかはしきも契りなりけり 山もりもいさや告しの花にきて 雲をわけゆくしかのやまこえ よしのなる嶺の花そのいかはかり いつ住そめむ嶺の木のもと

頼こし身はふり花は又さきて 待おしむ花にとしく身はふりて かすむのゝ竹ひとむらに花咲て 老ねとておもひすつへき花もなし 岡の邊のなきさの櫻花さきて 布留野のさくらむかし戀しも 盛なるはなはらき身の友ならて たれか住花より遠の草の庵 はなさく陰にすめるやまさと 玉すたれまきのと山に花さきて うづらになれば夢もはつかし いつかはさても思ひはつべき とひすてらると世をそうらむる 春のころはいにしへのいる 花も世も移ひはてし山にきて らつろふ色をわれそしたへる 打なかむれはとふ暮もなし るなかをとへは物そかなしき やしかる我といろとそかなしけれ のちのうちやあらましの山

花香ほるみやまの苔路ふみなれて

ともなふ鳥のゆふくれのとる

深山きを分こしみちに花さきて

花見にといくしら雲にまよふらん

宮古にちかくこしろとそなれ

歸るへきはなにこよひの雨きして

か」るうらみもこ」ろなりけり

めくれる雲はいく重なるらん

淺茅原おい木の花に露おちて

四

六百三十

花やたゝ老にわかるとおもふらん 古鄕はおいきの花にまつのか 又いつと胸うちさはく計にて ちきりのすゑをたのむはかなさ なくさめかたきこの世なりけり 43-

里は荒て花のみひとり匂ふ野に のちはゆふへはなはやまかせ むかしを忍ふそての露けさ

花鳥をみ山の庵に又なれて 人なみに花みてかへる草のいほ 捨たるよをは忘れはて」き といろほそきも誰かしらまし

夕ま暮露けき花にかせすきて の音も花にしほる、日は暮て 草むらくになひく木かくれ 露しつかなる谷のしたかせ

尾上の宮のさくらちるとろ 立かへりいつかみなせの春の暮

花を風いつよりちらし初つらん いつはりなきや色にいつらむ とをきむかしはなをきかまほし

> ちらすは花をいつまてか見ん 散そめし其世を花のうらみにて あらしの花にたれをまつらん またあはて人のうらみはよもあらし かりの世とおもふも心と」まりて

ちれは門さすはなのふるてら さくらちる野のやとのまつ風 陰たかき尾上の相に風吹て 見し人のなきを日毎にきゝ俗ご

山里の花ちりはてム人やとむ てふ鳥のあそへる庭は長閑にて

たよりもあらはかくとつけはや

儲けきそのに花おつるくれ さくらうちょりかすむやまさと 竹の葉もかすめる風の音よはみ いつくの人そとゝろはつかし

山里の花にたゝすむ夕まくれ 櫻さくみやまかくれの岩こすけ 花は根にちる比のさひしさ ふきたによはれしほるまつ風

散はてん事は花もやらかるらん

木の本に昨日の花をたつねきて

のこると蝶そ見るもあたなる

かきりとおもへけふの夕くれ

身を頼む人や花をも惜らん

吹くれし風もしつまり雨過て

山かすむきのふの花の朝ほらけ

はなちれは心くのかへるさに

うきはかりこそ身にたくひあれ

見しはなにゝかあとののこれる

花そうきなにの心にちりぬらん

をさかぬ花もいつれか残るらむいろく、わたる世のなかそうきいろく、わたる世のなかそうきだかせをいとへは雨ふりてうらみふかくてやみなむそうき花の役なと雨風のよはるらむはかなの春やなにムたとへんはかなの春やなにムたとへんがとふとて今はうらみむ方もなしたよろともちる花のやまかせた。

かへす田のくろの春野に牛かひて 花も見よ散あとしたふ我とゝる 櫻散ふるの山たに水せきて 駒かける野の水ののとけさ 水なかれ桃さく谷のおくふかみ あらしたに花のあとしへ夕ま暮 風もはやをとせぬ庭に花くちて やまさとの庭行水に花落て 残るはなをも夢かとそ見る 深山ゆくいはかきし水花落て ちりし花もやみちらつむらむ 又うちしたふ春のおもかけ 遊ふてう春に心のたのしみて 古里さひしたれか又とむ らたかた人のとはしとやする 里なきやまにいぬほふるこゑ 人にをくれてとまる山みち 木かくれふかき山もとのさと わか薬凉しき木々のした露 つか手ひきのいとまなき比

舟さゝぬ水草に春の池あせて

雲雀鳴にはの淺字にさとふりてかた山棒するかすむころかた山棒するかすむころ おつさ弓八嶺のゝ雉子けさ鳴て花そさくいつれの山か宿ならん 様子てし園はと蝶のやとりにて せすにょれゆく谷のした水 せなく岩まの小川はなうきて むすほうれゆく谷のした水 せなく岩まの小川はなうきて かっともをしほの山のあけほの あともをしほの山のあけほの

になった。 かきれの草にすみれさく見ゆ あはれにかすむよもきふの宿 たそかれの梢の月に藤咲て ちれはおくなきみよし野の花 ちればおくなきみよし野の花

根ちるみかきか原に巻くれて

## 老葉第二

蝉の羽にうす花衣けふかへて ボ川なれや月すめる影

となくのもりはうらみある袖 ななくの月につれなき郭公まつ夕くれに月出て 郭公まつ夕くれに月出て いかなる鳥そ雨になく摩 いかなる鳥を雨になく摩

はと、きずまつ森の夕かけ うとき心かしのふならひか なれこそは山里とはめ郭公 月いてわかけし心を忘るなよ

時鳥こゑまつ月にたちわひて

葉第

ないは野へに宿りをやせんよそにうつろふ事なしらせそれれもねはのやまほと」きすなれもねはのやまほと」きすなれもねはなのやまほと」きすなれもねなよのやまほと」きするとふり残るいそのかみてらあとふり残るいそのかみてら

しける木の葉のやまふかきかけ

みてれは

かくることはりをしれ

むら雲に聲も跡なきほとゝきず、いつさためてかなをも待らん

郭公あしたの雨に山こえて

神はのこゑをも神は詩つへし 付とゝきす鳴かたをかのもり

のとるさくらをおれるひとえたかさしさす祭のつかひはなやかに 今にのこるそとりの跡なる 目影もしるく夏はきにけり あふひにや神のこゝろもなひくらむ たかのであるしるくりはするのよをかけて なかけていまっています。

五月雨は小田のしめ繩長ひきて した露す」しあふちさくやと 橋にふるき雲井のあとみえて 橋も人のむかしをしのふらん 橋のにほひわすれぬ軒ふりて 河上の山たの早苗みつとえて 水くらきまこもかくれの舟にねて のる駒に水かふ澤のあやめ草 水鷄なく庭のやり水音深て さやかなる月もさかりの短夜に いり日影色とき雲にかたふきて 朽木に残るかけはしのする をくれてさける花のひともと それともわかぬ五月雨の空 とめなは袖のうつり香もあれ 外面のあふち月も」りとす むすふいほりの草もくちけり 去年みし花そくさに又咲 まくら凉しくほたるとふ影

卷

とふ螢もえてはなにを思ふらん 影たかく螢とふよの夕やみに カリ雨は山風おろすをのく里 ものいふ鳥の聲もこそあれ さそ郭公よそのむらさめ 見れはあをはの露そす」しき

おもひをいはぬむしの哀さ よなくあきの風そおとする

ほと」きす鳴聲過るこかくれに

鳴むしをまちて螢やみたるらん

さをしかのよらぬともしをさし捨て 月ゆへにこそめをもあはせね なしをく罪のかすはかくれす

夜~~のほくしを嶺にさしすて」

かすかなる鐘をよ川の知へにて

鵜介さしすてかへるあかつき むなしき夜半をなけく哀さ

てる月のかつらの鵜舟さしすてる さよのほたるそあをく明たつ

たへの雲のは山にせみなきて のはうすくめくるむら雨

> ゆふかほかいるわひ人のやと 花におるかめの夏草うちしほれ 雨をいのれるみな月のそら 夕風に蟬なく梢露おちて 野原のいろのかる」ほとなさ よろとひのまゆをはいつかひらかまし いつくよりたちきて雲のらかるらむ

山みれは夕立すきてふく風に 夕たちに天津しら雲嶺とえて とをちの里の秋のさひしさ 松風きよし水無月の影

水のうへにや夏をおくらん あさゆふは浪の枕に松の風

影あつき西日にしはし戸をさして くるれは明る夏のよのそら なとやかなりし聲も忘れす

朝霞はるふくほとの風もかな

ぬきすつるよるの衣もむつましく

玉しま川の月のすゝしさ 月たちのほる雲のすゝしさ みか」ねといしも鏡のかたちにて

さいしとていとへは萩に風もなしさいしとていとへは萩に風もなしるへなれましたむけのつゆの玉つさまいく真に萩のはのこゑなくさめかねつ山里の秋なくさめかねつ山里の秋

立す」む泉ににはの月ふけて

とぬ秋の壁をあらはす山おろし

あきをはやしる虫のしのひ音

は、京田のへのさとの夕園目かけも寒し鴈のなく空間の邊の本あらの小萩露ふかみ

柳や風もまたでちるらむ

らへなる山に月かくる見ゆ 明をまつかりほのと萩花さきて 田のもの色を露そいそける

ま萩散野邊のさをしかけさ鳴て

本をゆく末も夢の身をやしるらむ なをゆく末も夢の秋の夜 なをゆく末も夢の秋の夜 あさかほの花なと種を残すらん

第四百八十四 老葉

第

六百三十五

らへをきし庭の色草花さきて

第三

雲なかくしそあき山の色 おる人見えぬ萩のひともと おる人見えぬ萩のひともと 花すゝき袖ふれよとやまねくらむ 露こそのこれあきのたまくら 山遠く月はいるのゝ花すゝき むかし戀しき秋風そふく

するのよになれば聞る、斗にてむかししのふのやとのあきかせ ほのかにも雲に秋の目かたふきてかれも月まつ夕くれの聲

むら雨にかれのゝ薄露おちて

人はたれをかまたうらむらん

うすき日影やさしておつらんさしのほる桁の月にかねなりている竹の月にかねなりて

もろき木の葉に虫の鳴摩 もろき木の葉に虫の鳴摩

もみちにふかき鑄はみえけりとよひなかはのあきのよのつき

月かけに夕露か」る庭ふりて

やとすとも水はおもはぬ月澄て をのつからなることはりをみよ

○よろそしるへいにしへの道 舟とむるいり江のひかし月いてよ 日もくれかたの水のさひしさ

かさしまいかにと思ふあけほの舟さしてとは、1や月のよはの女

なにはわたりのあり明のそら古郷のあきをも人の忘れめや盛かまや月に浦とく舟を見て

川なみ遠く舟のほるかけ

月すみて川かせ荒き秋のよにおより打作なきてゆく摩

夕波にあしやの奥の月出て

でとしまや限りとあきの月を見て なさし野に秋のいく日を送るらむ かやか軒はのありあけの月 かやか軒はのありあけの月

露のそこなるふか草のつき

山

かけさひしたかさこのつき

たれをからまつ虫の音に忍ふらむ

みるうちに住こし里は野と成て

山本の月のあさ露むら消て花もしとろになひく秋草

した葉ちるこすゑの月に虫鳴で 山本の月のあさ露むら消て

夕風にむしの音まよふ里ふりて露みたれぬるはなの草むら

命なとかきりのあるにならひけんむしのねに行かた暮て宿もなし

きり~くすかたふく月に摩更て松虫のこゑにことしもうつろひて松虫のこゑにことしもうつろひてなったったの夢にすくるよの中

なみたの月にたのむおくやま

いはすともころの色は知らめや

深ぬるかみるく月に雲もなし

ゆくかたしらすなれる秋風

世のうきも我からなれや出て見ん

おひのねさめのあきのよの月

老のまくらそなみたおちそふ

待ほとは心らかれし月すみて

さよふけゆけは物を淋しき

月たかく山風ふけて夢もなし

古きかきねに鳴きりくす

秋風にふるき都の月を見て

宮古より月はをは捨明石かた

きくもむかしのなみたならすや

いにしへのなからの宮に月を見て

ねぬ夜に朽る夢のうきはし

おもひかけても見すや成なん

六百三十七

老葉第三

古郷はうつら臥のゝ月を見て 舟にかり鳴あかつきのなみ 腐のぬる汀にあしの花くちて 朝日さすつ」みの霜にかりおちて 鴈のとふとを山かつらあけやらて 隠のなくほりえの沖に月ふけて 残る日も色とき稻に鴈なきて をやま田に臨おふ夜はの摩更て 自妙のころもうつよに月いて」 ころも擣すそ野の梢色つきて 移ろふやまそ袖のいろなる をさしのまくら秋風そふく 枕をもさためぬひまに月更て ふく風さひしはま河の秋 鳥いろくのいけの長閑けさ 宮この秋も夜のなかきころ あかつき遠き舟のかちをと をの」ゆふへはた」秋のかせ **殿かあはれもね覺にそ知る** はつ霜まよひか くゆふ暮かむしも鳴らん リのなく壁

岩木をみるもあきのゆふくれ 秋といへはいかなる時そ夕ま暮 庭そなく妻とふ野へや明ねらん 笛をつまなるしかのあはれさ aなのをゆけはをしか鳴摩 夕ま暮鹿なく山の月おちて 野へ見れは霧に鳴たつ夕ま暮 里もなきいなの 心なき秋のねさめをいか」せむ 身にそしむ心にやとれあきの色 をしか鳴草のいほりの窓のまへ ゆふへのものとあばれなりけり からるいほりの秋をとへかし 身を疑になしても袖はぬれつへし 人のころのかはるよのなか もとのなみたにかへるおく山 身にそはぬ心は人にあくかれて やまのはいつく秋霧の中 霧かいるみなとの山やしくるらむ 支款さく野に人そやすらふ もろこしまても知人そしる ム月に鳴なきて 釣ふねに心をよする秋の海

ららかれさひし霜の村あし

きり立て木の葉らつろふ山里に 霧渡る曉月にかせ吹て 霧わたる夕しほ風に田鶴なきて 野分ののちの秋のさひしさ なきたつ鳴の聲のさひしさ かけもはつかの月のさひしさ

たつたのやまのあきのいろく 人にさていかにかたらん與つ浪 われからそたしおもひこかる

秋はムやいなのあを山らつろひて

松の葉も露けき山の下もみち 木のまに白きおくの瀧なみ

かつ散を見れは昨日の若葉にて 大井河すゑはあらしに紅葉して おとろくほとに秋そふけ行

もみちをかさし菊をおるやま 紅葉ちるあとはをしかの音もなし 宮古をはか」る秋にもわすれめや ゆるされぬれはとかやなからむ くる」はやしの陰のしつけさ

舟のほる秋の山もと鐘なりて

水くれわたる遠の川つら

舟とむるなたの鹽やのあきの暮

かなる人もつみははなれ

もひのけふりそれとたにみよ

まきたつ嶺の露のしたいほ

かはる色ありともすまむ山の奥

眞木のした葉の秋のしら露

つれなきにいかて心を見えつらむ

椎のはしほる嶺のあきかせ

こすゑ露けきもしその」あき

月のいる字治の山本物淋し

草も木も葉にしたかへる露の世に

かけの残る朝かほ花もなし

なにとなみたの袖にあまれる

風わたる秋の草木の露をみて

らくつらき秋は心のなになれや

月もするろにしほるわ

かっ

袖

長閑にたれか身をはたのまん

六百三十九

しめゆひし菊一えたをけふおりて

卷

住かたきかへなたのみそきりくすいつまて草の髭の世の中 りをおとろかす鐘はすさましくろかみも今は霜よの秋更ていとゝはけしきこからしの風いたれゆくふか草山に秋ふけていつくにか又うき秋の立ねらんけふをかきりのなか月のくれ

老葉第四

時雨ふる深やまの庵に旅ねして さとまくら時雨も風も夢さめて まなき月のあかつきの空 雲なき月のあかつきの空 雲なき月のあかつきの空 でとまくら時雨も風も夢さめて

> 松かせさむきかた岡のさと 霰まつならの枯葉のちりやらて 音かはるしくれ霰のふくるよに 木の葉ちり人も移ふ山さとに かすくのふること思ふさよすから いのちまつ間 くれあられのあかつきのこゑ 年の花のあらしにちる木のは さむきあらしになる」冬の日 さひしくむかふうつみ火の本 露としる身に吹風は物かなし ららみいくたひ身につもるらん 又みる夢もやかて覺けり つまきとる山みちふかく分いりて く度か篠 ふく庵のかはるらん に木葉ちる山

哀にかる 4冬くさのいろ 露霜もしらぬ常葉の森の陰 露霜もしらぬ常葉の森の陰

影寒きひのくま川の夕わたり

こほれる水は駒もすさめす

たかなみたとて袖ぬらすらん

舟つなけ雪の夕の渡しもり 雪のよのあかつきさひし宇治の里 みやまさくらにつもるしら雪 山鳥のおろのはつ雪ふりそひて あやらき嶺をはしる狩人 とふ鷹はみえぬ茂みの山からす 心のみゆきのかり場のある」日に あはれことしも霜ゆきのそら 住かたき太山かくれにをし鳴て すへ出す御狩の鷹は髻はれて 鳴をしの別かせさひしき冬のよに うかふもうれしきみかよのかけ たかためさのみ身をはつくさむ きけはちとりのね覺とふ聲 おるを見て花にうらみむ風もなし かゝみに年そうつりもてゆく なれぬれはおそるへきをも忘けり わらふらちにそまことありけ なさぬつみもや身につもるらむ 草の戸はさせもか下葉朽はてよ 水のこゝろもしらぬ早川

卷

薬第四

卷

六百四十二

四 百 八 --四

山らつむ雪にゆふへや替らん そことなきよるのとを山雪ふりて まきあくるとすの遠山ゆきふりて かりねせし野のさむき朝風 いりたつ窓の風のさむけさ くらをたとる鳥のこゑく

薪きる尾上の雪のひとつ松 まことの鬼にいかゝむかはん のこすと」ろのほとはみえけり

鳥の音も猶すさましき雪の山

山ふかき雪を鹿のみふみ分て 尾上のみやのあとのかなしさ ふ山からすうかれ行路

河波もおなし深雪のよし野山 雪たかきいり江の北のみねさえて ふりわたりけり八重の芦かき

ゆきに友なき老か身のやと おもひやる夕としらし雪の庵 冬ともる年のくれこそ哀なれ こゝろのあとはなにゝ殘らん

車もみつのこをおもふみち

北祭かけしあふひも忘れめや たけの葉青きやまあいの袖 ゆく名殘大井の宿の雪の さやかなる日影や霜を拂ふらむ りねの野邊にさゆる山か 日に 반

らたふ夜のほしの光に空澄 たく火ほのみえ人を摩する いて、見すは雪もや恨まし

山里の木の葉のあとに梅咲て かなや年もはや暮にけり やま風よはるうつみ火のもと

梅香ほる冬のかきほの山おろし やまかくれそかすみそめぬる むきは かりに春をこそまて

としの暮老もかきりとおもふ世に たく炭のけふりに年の末みえて 名残あまたの春にこそなれ るかにかへる山でらのみち

とゝのへに佛となふる年暮て

第

百 八十

おもひやれよはひの末の旅の空 故郷もしも夜のたひね つくくまてはいきそくるしき のちあらはとかたりてそなく いか斗

高ねよりをのゝ音きく旅の道 すゑかすかなる山もとのみち やすくはたれか山にいるらむ 杖よりも山路は友をちからにて

旅人の弓はりもてる野はくれて をちかた人を」くる秋かせ

よる出てゆくくれふる馬の 月白き山路に駒の音はして かふ日影もしらぬ山もと

上

山越し駒をふもとの野にかひて か」る深山にやとりかるあき やすむ木かけの水の凉しさ

かり枕むすへは月のおつる夜に 旅はたゝ庭のふしともたよりにて はるけき旅そうきしつみあり やすらふ野へをいつるたひ人

とふ宿に心への人を見て

おき侘ぬ月は旅ねのさよまくら

ひとりはこえしをしか鳴山

よこ雲に遠かた人やわかるらん 草の原まて我そかなしき

古さとさひしあけほのい山

旅そうき雲は山をもたのむらん

へらぬ空をかこつ古さと

昨日まて故郷見えしやまとえて

みるほとは近き山路をめくりきて

やとりをとへは日こそ暮ぬれ

後のあしたそいといかなしき

あふ坂や越ていつみん富士の嶽

闘のひかしの山そはるけき

しらす此別やかきりたひの空

したふなよとまるも旅の宿そかし

ありはてん身とおもふはかなさ

世のあはれをも思ふあかつき

道とをき別はいはふほともうし

こゝろよしはしなみたおとすな

六百四十三

葉第五

第

みやまの雨のあきの 山もとの荻ふく風にたひねして 夏苅のあしやの雨にたひねして やとりかるたみのゝ島の雨のくれ みの引かけていつるたひひと ふりくちす山 物おもひ息けたものも知らめや けふよりあすをなけかれそする たよりはあれと遠き古里 ほたるをみるも物そさひしき まことならぬをなに賴むらん もる日はそれとも分す雪の庵 ムねむ秋 もたまらぬ芦の がは時 路 の雨にふし俗て 雨のするか山 かり庵 かりふし

草きたに知はまれなる山越て 埋火に雪の旅ねものとかにて 旅枕しつか焼火にまとろみて 吹かはる霞のせきの秋かせに 雲鳥をしる人にする山とえて **嶺たかみ雲を一よのまくらにて** 草まくら野寺の鐘におき出て 人さはくかりねの月や明ぬらん とえかたき關に空音の鳥もかな 人さはくよるのせき山月おちて ゆふ付鳥のこゑくそする 霧ふる山を又やこえまし なさけなりけ むかひのむらに舟わたるみゆ 夜ふかき山におもふいにしへ 身のゆく末をおもふ哀さ といろほそさのまさる夕暮 さくも契る事のかなしさ ふもとのするのやまこえ ひにゆく道をは送る人もなし れにひと夜の春はわすれ る夢はわすれす

旅ねするたかねに秋のよは更て

となたかなたの山水のこゑ

草もむすはぬ道いかゝせん

かりねのやまの

あ

かつきの電

はれくもる雨の旅人いてかねて

戸ほそをし明むかふおほ空

もろともにこれや限と立別れ

第五

大ほふる山路や里に成ぬらむたひのかとてをいそくこゑ / へを中の宿には鳥なけは犬ほえてをいるけば犬ほえてもすれは泪ならては身にそはすいともすれは泪ならては身にそはすにと近く袖ふる山を歸り見て

古郷はとを島國にあけくれて海をもわたる思ひねのゆめ

月をあはれむ秋のやまこえ

よふかきみちに舟まよふなり

花にみししかのうら波たちかへり

箱崎やまつを往來の舟に見て八幡の宮ゐあふかねはなし

いたらんにしの國ねかふなりゆくゑなきもろこし舟の興つ波たちかへらんもいさやふるさと

もろこし舟のさほのをひかせゆく末をたのめと神やまもるらむ追風をもろこし舟にまつらかた

といろならすも又やわかれん

古郷になを松風をきょあかてみぬ床におもふ舟路のいかならんねの床におもふ舟路のいかならん

からなくさむうらく のあき かいなくさむりん かんてょく 陰にを舟やとまるらむかい とっかい しょうしん いんき

古郷は三の千里も過つへしいつれの雲そとしかたの山山風さむし霜やをくらん

見すしらぬにもなきはうからしなからへけりとつたへやらはやなる里に身を有物とよもしらしふる里に身を有物とよもしらし

卷節門

旅まくら夢なとひとり歸るらん かへりても都やわれそ旅ならん 身をうら風に袖はぬれつゝ みやここそ歸る浪にも戀しけれ われを宮古にさそへ面かけ

なくさめし野山をかたる古郷にかへり見かちのかへるさのみち山路よりなれし風ふく軒の松

たひは物かは古さとのあき

## 老葉第六

戀上

おもひらかる」空もはつかしなみたの床そらくはかりなるなみたの床そらくはかりなるあまを舟はつかにみしを戀そめてあまを舟はつかにみしを戀そめてらかれ心のすゑもおほえすらかれ心のすゑもおほえす

身のうきまゝにかとつゆふくれ

たか袖としらても露やしほるらか

夕暮やしらす泪のぬしならん まよひきやむかしもか」る戀の道 天地もしるはかりなる物おもひ 草木たにみしにもあらぬ物おもひ 戀路をもまた若草の下もえに ほのかにもみしをなけきの二葉にて 心しむみちゆきふりのおも影に きけかしな世にこそ忍ふ思ひなれ いたつらに身をなす物や戀ならん いかて身に物おもはする人ならん こくろともなき秋かせのころ しらぬもつらししらる」もうし 見れは心もそらになりけり ぎても此身になにとかくさむ しらすころろやかはりゆくらん なにのといろの人をまつらん 戀ちのおくのはやましけ山 ふみはしめぬるみちはあやうし たれにかふるきあとをとはまし

葉第六

待くれに光のかけもわすられて

まよひさとりは心にそある

夕暮の野寺の鐘に人まちて

野分たつ夕に人をまち侘てはつ鴈の摩にも人を待侘てはつ鴈の摩にも人をまち侘て

夕暮はとひもとはすもたえ侘ていつの一日かやすくすきける

はやうつろへる葛のはのいろまつを見つゝもくる人はなしなるとはすはいかゝせんが暮はとひもとはするたえ侘て

契てや常ならね道を忘るらむ おもへは神そ人をなやます もかれむみちよ霧とふたかれ とふ暮はうき中神もなき物を とふ暮はうき中神もなき物を

はかむもくるし歸らんもうしたそかれのしのひかよひのゆふやみのそらまよはぬは我心こそしるへなれまなはねは我心こそしるへなれまなはねは我心こそしるへなれまない。

物いふほとのたよりをそきくあはすとてかよひはやまし夜半の空あはすとてかよひはやまし夜半の空

いひよれはこたふる聲をたのむよに臭ふかくきぬ打そよく橇の戸に臭ふかくきぬ打そよく橇の戸にするいこそやれ

第六

と、ろ建なるすゑをしらはやあた人はとのはをさへいひけちて思ふをしらてらたかふもうしとかむなよしのひにたゝくよはのかと身をかくす柄いつくに尋ましかよふそつらき忍ふよのみち

闘もりのゆるさぬ中はあふもうしいつあらはれてちきりむすはんたまさかの契りとかむなとのる人

まれにとふよはに岩戸の闇もかな

わすれやせましかるるかりふし一夜とそうき身にあまる契なれ

さもあらぬ名のたつ事をなけくみに頼ますよみちゆきふりのひとよ妻

ゆく求のさためなき世をかたるよにひと夜のまことなをいかゝせん

又かきくらしなみたおちけり

きぬくに恨し鳥のあとをみて

のりも心のさはりとそなるかはる世のならひをなとか語るらんかはる世のならひをなとか語るらんまれにあふよはに恨をいひいて、

さのみなとわかれを鳥のさそふらむたゝひと聲にことたりぬへし具鐘の聲もあふ夜はららみにて

水のひゝきもつらきあかつきあふよはのとりの八摩に鐘の音

かたふかて月もひかふるきぬくに

かたならぬなみたなりけり けさのみかつねの別をいかムせん ゆくかたしらすわかるムはうし ひかふるとおもへは夢のよはの袖 いかにともいはれぬほとの中なれや いかにともいはれぬほとの中なれや

おもひかねつとうらみやらはやいそく夜のあした侘しき獨ねになれるかみの又いかならんなものま山の名残にて

契ても空おほれせはいかゝせん夢になせいつかおもひのはてならん夢のすさみのとのはもかななかめ侘いたつら臥の朝ほらけ

うき身ひとつそたのむかたなきあらしのみおもひよはるを又とひてかりねかなしき月のさむけさ

あらましのいたつら臥に月をみて

浸きえをうき水鳥の香に鳴てわするへきなみたの月に猶おちて

一つらきなみたそ目にはあまれる 補の上はた x 浪とゆるなきさにて と x ろにひまのなきやあまの子 浸きえをうき水鳥の誓に鳴て

替るならひの世をなるけきそれでや河いさといひてやあはさらかと現名もらさし

松山をわれやはこさむ沖つ波なかれてやあふ濃にならん飛鳥川

戀はたゝふしより上のけふりにておもふこゝろはいかゝをよはんおもふこゝろはいかゝをよはんとはぬにうきを何とこたへむ

ひとり片敷そてそぬれそふ 人は岩木のやまそ苦しき のいと絶やらて

\*\*よそなからみえこし色を戀ちにて \*\*認力になりませい。

戀しさの心ほそくも月おちていまやとまては鐘のなる空中はとをちのかつらきの雲

**大かたの空も身にしむ物おもひ** 

t

花に恨との葉に人をまち侘て

まつにをそきは人やとむらん

忍ひつる文をけふりになすもうし 手やふれしとはかりかへす文をみて たまく見れはひと筆のあ 秋はふけ人は難而よることに 獨 これ人もみるらんものを空の月 つるの身の夢をもおもふ獨ねに 館の跡こそせめて命なれ たちゆく鳥の跡も残らす とはすは明日もなにム類 なかき夜つらくまちそ侘ぬる ぬる霜よの空に秋 身にしむ風よまつ心しれ こゑよはり行虫のあはれさ こ」ろをすますよはをとへか にをなさけとなをしたふらむ かの間もやすむ時なき思ひにて ふけて 2

形見とも人はおもはしあきの空 なくさめぬ物から月を形見にて つらさこそおもへは人の形見なれ 夢かとよーよふた夜の其ゆくる あひ見しはたゝ秋風の夢にゝて 有明にいひしはかりの月をみて みし人は雲井の月を名殘にて 我かたを忘れてこすは花もうし かれた」それも形見と成やせん あさからすとてそひはてんかは なみたにむかふきぬくの跡 燃化るとはほのかにも なにを名残となくさみもせん そはぬなさけそろうらみなる かけは手にもたまらす又消て これそかたみの袖のうつり香 袖もほしえむ館のまそなき 思ひそまさる秋ふくるとろ も身にしむ戀しさそし しれ

老葉第七

戀下

たゝ一すちのおもひなりけり

薬第七

るはなるでは、ないなく身や過なまし、 あはなる深き契りとそなる かたつらに歸る夜にしも名の立て いたつらに歸る夜にしも名の立て いたつらに歸る夜にしも名の立て いたっといかてかかくはちらすらむ たゝはふたりのうき名ならすや

はかなしや松をしくれの我おもひいかなる種そわかおもひくさいかなる種そわかおもひくさいかなる種そわかおもひくさいかなる種をおかおもひくさいかなる種をおかおもひくさいかなる種をあかれるからなるも夢とけりなさよ衣

風のみさまく夕くれの状たえねたゝはふ木はよその玉葛たえれたゝはふ木はよその玉葛けからまし

物おもへとはなとちきるらんたのめしは桐の下葉のをともせて風のみさはく夕くれの秋

及のよをなすくこなすも色かえて あふよにいつかとかむ下ひも わすれかたみの風そみにしむ 今のみとはれし秋の空にムて うきに佛の名をもとなへす

今とんと世の情にやいひつらんとはれむまでの身をな頼みそとはれむまでの身をな頼みそとはれむまでの身をな頼みそ

道芝に人のとたえをみるもうし

きりつくさぬや歎なるらん

つれもなき我戀草のねを茂み

いつちゆきてか枕さためんとはれてたにもなみたおちけり

ふた道におもひうかれて夜も更ね

ひとりくしにねぬるよのとこ

継そむる身のゆく末のいかならん 無そむる身のゆく末のいかならん

らき人襲にこゝろくたくな

卷

大妻におもひみたれは名やたゝむ 夢にもたのむかたそ稀なる 夢にもたのむかたそ稀なる 月をみるにはおもひこそやれ たか袖か秋につれなきとかむなよ

ねぬよのとこにおもひこそやれ とはれむ物か秋ふくるころ とはれむ物か秋ふくるころ 露のまの夢路によとむ我なみた

今あひみるやかきりならまし

人そうき身のあらはとはおもふなよけふとたのめし暮もかひなし

おもひなつけそゆふ暮の空わすれねといひしも誰そ我こゝろなにをかことになを待てみん人そうき身のあらはとはおもふなよ

戀しさもたかなす事そ我おもひおもひなつけそゆふ暮の空

いくほとありて戀もうからむいくほとありて戀もうからむなを戀しくは身をいかにせん

のちの世かけてちきりをく中昨日けふかくる契のはやたえていくほとならぬ身をそ侘ぬる

たのめしはたゝとふ鳥のあとにゝてそのたまつさそゆくゑしられぬほともへすなと目のまへにかはるらん

露の間のえにこそあれなたえねた♪木の葉ふりしく秋のかよひ路

あはぬまもありつる身そとなくさめてわすれんとすれは人の面かけ

人にいつつらきを見せてうかるらんしはかなきちきりさきの世をしれつれなきを余所にわするゝ人もかなったくせのほとのはてをたにみん

ことの葉にかゝるはかりを命にてうつせみのよに物なおもひそうき中や又生れてもうとからんさためぬ夢のよをはちきらし

たれをこくろのおもひ出らん

なにょちきりのすゑをさためんないつまてとてか身をはたのまんといっまでしたのまといったのまんですきにしかたのまとをそしるあた人と聞つ」類むすゑたえておもひかへせは身そうらみなるあた人と聞つ」類むすゑたえておもひかへせは身そうらみなるあた人もひと毎にやはつらからんかこたんよりはおもひすてはやかこたんよりはおもひすてはやかこたんよりはおもひすてはしっきむもひをも月やのこさんなかめしようらみにかへる秋の空れかめしようらみにかへる秋の空

命よりうらみははてもなき物をおよりららみにかへる秋の空かかめしようらみにあておもし世にたのますは替るうらみもあらし世にたのますは替るうらみもあらし世にかつのときにか思ひすてまし

きえんかきりをなと忘るらん がきとゝめつることのはをみよ がきとゝめつることのはをみよ だしなん後はおもひもいてやせん ある世をせめてとふ人もかな しらさらん後のまとはなにかせん つれなくてこそ終にすきぬれ でれなくてこそ終にすきぬれ

我思ひ來ん世にせめてつくさはやひとりのつらさいつよりの身そさきの世もおもひ有てやはてつらんさきの世もおもひ有てやはてつらん

との世には今ひと度やあはさらんわかれしまるの人の戀しされたはない人の戀しさ

つをかきりに人をおもはん

おもひつゝけて音をのみそ鳴ったかはしきもちかひにそある契りはや我にはてたる身をしらて

あちきなや世々にしつまん戀の道

歸るなよとこよもかりの宿そか

憂中はさらになき世の 盡さはや世 命にむかふ袖のわかれ路 つあひみてか納をほさまし ねた」つらなる枝のはてもうし かに結ふと契りはかなや もひすてぬそ戀は 々のうらみとなりやせん わかれにて かなしき

かたみをもやかて見すてはいか」せん 君しきは身をもおしまし藤 かなしや羽をならへし鳥へ山 のこすこゝろを人よかたら 人のこゝろのかはる世 の中

は

夏の日 はかなさやあすはかたみの春ならむ 花を風 花とをき山のすそのゝ草の 花に人なきあかつきの庭 **嶺の檜原のはるのさひし** 螢とふ夕川を舟さし捨て ねさめ 郭公まつとや空にきしつらん 世こそたゝ風まつ花の一さかり かくはかり人はきかしなよるの 人目たえたるおくの山かけ なかめくらせる空としらすや 時をうるにもあやうきをしれ さひしさやけに古寺の松か 梅の花手折てかさすかへるさに とほれておしき花の夕露 は しきかせのするのさひしさ かけせ この夕山 ふみやこに尋きにけ わか物とてやのこすらん の里のやまほと」きす ぬさみたれの空 からすみねとえて 3 1) 施 本 雨

老葉第八

雜上

子日せし野へも人なきふる郷に

つれの春にこくろとくめん

撃まちしゆふ付鳥に年とえて

春とも見えぬ松の葉の色

らくひすさそふ遠こちの里

はやきりくす袖たのむこる

ほしまつる夜半のともし火かけそひて 茅の輪きる御被のかはら暮はてよ た、む石井の水のすゝしさ 木陰にをそき夕闇の月 春とあきとにうつろひにけり をと聞水によるそ凉しき 住なれて心うこかぬ古寺に

弓はり月にむかふ山のは 色なきはもた」あきの空 打かすむ雲井の何階まうのほり 籍火に秋のやり水こゑ深て

夏むしと見しはこの比ねを鳴て 鴈のとふゆふへの山のひとつ松 ともす火すつる月のくれかた

すゝき散末野の山に雲引て みたる」露の月そかくる」

世々のするには生れする哉

身を秋のおち葉を誰かひろはまし あやめひく袂に菊を又つみて けふもくと年そくれぬる

> いつ住て深山にきかむさよしくれ 神ぬらす老會の杜の夕時雨 露のくれ霜の ねさめの露に身こそしらるれ 木の葉をみれは難面もなし あしたに野 は枯

作山しものおち葉をかきすてい あかつきふかくをしの鳴聲 古き草紙の文字の墨かれ

鼠ふくとなせの月の氷るよに 千鳥なきたつ雪の暮かた

野をひろみ御狩の人のさはく日に すてかぬるこそ戀はつらけれ

箸鷹のつかれをおしむ野は暮て とはれぬをたゝ隱家に住なして

もみちのにしき花のしら雲 みやまに」たる雪のした庵 春より後も夢の一とせ らたのさまその時々を分置て

春秋はた」時による哀にて いつの光いつのかけをか賴むらん かはるころろをなにと頼まん

第

色にはみせていふ事はなし 春秋を草木にうつす天つ空 いかにして宮こをおもひ離まし いときなき程とそ全は戀しけれ らへしこ松はやまかせのやと まなひてや古き風をもつたふらむ

満殿にはやくの跡を獨みて山した水の音はすさまし 強のうへゆく雲のひとむら

たつた川なかる」すゑの山こゑて

奥山の岩のとたえに水すみて雲間の月の陰そすくなき

すみぬるさまもかはる家々水淺き古井の井けた苔むして

庭にせく水のなかれを田にうけて

世の中に絶たる峯は誰かこん

鎖なるはしをわたる松か たかき山なかる」水もたえぬ世に かけろふの岩かきし水草しけみ しらさりき都にか しつかなる身は雲水もさはりにて すまはひとりとおもふ柴の戸 ことのをたちし人はかへらす つ草きよき谷のした道 あるかなきか 陰のさとは木葉に道絶 かしおもへはなみた落けり の山 ムる山 かけ 0 4}-0 \$0 2 5

暮わたる橋のむかひに鐘なりて 等のまへ行たに川の水

雨はれて遠山のこるまとのまへしのへめの山の端うすく雲引てしのへめの山の端うすく雲引ているの人の空

あはれとをきけあかつきの雨さひしきもうきも心と草の応

柴の戸のあはれは身こそ主なれ 軒ちかき山に柴かる人みえて 応結ふ太山の苔に水おちて 立出るやままつの戸に雨すきて 住人のむかししらるゝ庭ふりて たく柴にほふたにのした道 さひしさにならふ山里友もなし わかやまさとをあらす松風 ひとりたくすむ山さとのくれ 誰きかむ夕の雨の草の庵 松ふく風のすみわたるとゑ ほたるの陰そともし火と成 わかゆふ暮と鹿やなくらん 山かつの過ゆく袖に風吹て 庭浅くなる冬の木のもと わかれし後そありしにも似ぬ 契ても情のなくはいか」せん かすみなて都のかたの見えよかし ほたるとひゆく暮の凉しさ 岩のかたちも水きよきやま 忍ひねもらせ山ほとしきす

里とをみ犬ほふる夜の月さえて 獣のはしるや弓にをそるらん むさゝひのさはく深山に目は暮て 深山の月に猿さけふ聲 さまくのかたちをみする空の雲 明ぬ間の雲のとを山眉に似て 麓ゆく舟にすなとる火はみえて 屋すさましく犬ほふるこゑ いかり猪も命をそれよあつさ弓 あらはれそめつあくる遠しま 蘆原にあまの釣せし舟朽て 旅人さそな雪のあかつき 家々の灯きえて更る夜に なきてむかはゝあはれとやみん もとのさとりに身こそ遠けれ ねくらを出るとりのこゑく 瀧津なみよるの巖の床寒て なにとかならんまよふ行末 あらはれぬれはかきたえにけり 住よしのはま松か根をこす波に ふく笛さひしかよふ山みち

百八十四 老葉第八

第四

绾 29 Ħ

秋のいり日にからすなく聲 蓬生を我さへかれはいかならん 聲さひし霞の中の夕からす 籠のうちを頼むやとりと鳥のねて 雲鳥の歸るをみねにともなひて 梓弓とふしら鳥をなとりにて 竹ふかき陰をね鳥やたのむらん たまさかの友まちえたる古郷に **撃遠きゆふ付鳥に月落て** 夕さひしと山ないとひそ 心をうつすなくさめもかな 春の鳥たになかぬ奥山 山かけの月や兎の臥所 くる」さかひそ猶あはれなる ちきりの末そ雲となり行 弓弦をとせぬ代はしつかへ 人はたつねぬやとの秋風 まくらかる野のむらの明ほ

木草なき砌はたれかあらすらん

たのむにこそはうつる世もあれ

ともの木するの春のうつし給

みえす成ねる古郷の山

凌茅生やふるき都の月のもと ともなひてられへを酒のたはふれに かた山の市のかりやの夕まくれ 人もねぬ市のかりやに夜の明て あらそひはかな小車のみち ね覺にとをき小車のをと あかつき月にくるまやるをと 遠さかる車のをとに月寒て 住はてよ古き都の草の庵 のほる人あるらつし繪のやま 淀路よりはや都なる心ちして つみいかにともたれかしらまし よろつのみちそ末に成行 きのふに替る世の中のさま とくをそく終にはめくりはつる世に たれか此おもひの家を出ぬらん きけはふきさすすのうちの笛 此ましにときはなれかし花さかり 面影をまこと、見れはくるしくて かれし人そみるはかりなる

昔たに名をうる事はかたき世にはかなき物はものムふの道 たかあとムしも見えぬ古郷 人はたゝ名をしらるゝもある世にて うる事なにそかりの世の中 とゝめてもなからん後の名はつらし 見れはなみたのおつるうつしゑ かしこきも求ぬすゑの世はかなし あふまてはなくともしはしなくこめよ 身のよしあしにたのむうらかた 佛法僧と鳥もこそなけ とゝろにねかふ事はつきせす とゝろにねかふ事はつきせす

## 老葉第九

雑下

かけ高き天のかく山月すみて雲ものこらぬ夕たちのあと

第四百八十四 老

卷

老葉第九

六百五十九

水ならて聲はなからの橋はしら 難波のあしに春風そふく たれか対鎌倉山のはるの草 音きけはしのたの森の夕あらし あはれ朽木をみをのそまやま 朽殘る松からら島なみこえて あふけはいと」たかさこのまつ 松浦山かけにおさまる風をみて 去年の秋おもへは夢のわたりにて 神のちかひのふかきをもしれ 佛ともなるてふ事の有なるに みるさへらしや一筆のあと とのははなけくに安き道ならて とをきあかたも君あふくなり はむかしのとの葉もうし れもみち葉をうつろはてみん

恨つるをは捨山

の月はれて

つきの宮はのりをやは聞

大ひえや我たつ法の跡とめて

でしにか

へれしかのうらなみ

ちにそ法の心をも得し

世の中はよしあしともにといまらて 幾程もあらしわかよをすみ侘て をの」える我有増にくちやせん 津の感のなからへくるをうき世にて 鹽合のあはとはるかに日は落て 浦かけて夜半の鐘なる三井の寺 よしあしのとはり分ぬするのよに まてしはし世にあるへしのわか心 高砂のまつこともなくなからへて あしのかれ葉のかりの世のなか かすむなよ雲の林のかねの壁 あへは中しく言のはもなし は うきとも嬉 こゝろを千々につくすかなしさ はやく恨てのちやかはらん 身にもおほえす時そ去ゆ わたりかたくも橋そふりぬる ことしも老のなみそよりくる 漕ゆく舟そなみに消ぬる たつの宮古もをとにこそきけ かなき夢のなをやみえまし しきふしも夢なれ 1

第九

夢になせ世はうつゝこそくるしけれいつの夢とか身はきえなましいつの夢とか身はきえなましれかりのうちはいとなみもなし

世の中のかはるはしほのみちひにてなみあれ風のをともすさましいつまての身とてうき世を渡るらむ

人のわさこそみなあはれなれ

夢つゆのみかあたのことはり

しられすよ獪いかさまにかはらましはらふかせまつちりのよの中たか夢を苔の莚にさますらん

わかみるうちもあらぬ世のなかわたる人なき雪のかけはし

あさましき心をなとかまなふらん身にかきるうき世之ともいかゝせんよしやしてしはおもひなくさめたれもたゝうきょの道にふりはてゝ

では、か秋のさひしかるらん 他のうきにかへはつらさはなき物を 有増もつねにむなしく成やせん よはなに事か我こゝろなる よはなに事か我こゝろなる

又もかく生れは世々のうき身にて いつくを旅のゆく末にせん いつくを旅のゆく末にせん

生れこし天の御鉾のすゑのよにかりなる身とは露やなるらん

うれしき夢のすゑもたのもしなにかわか形となりて生るらんないみやとなりて生るらん。

あるもかひなしおもひきえはやありはてん物とて身やは生むらんのはかなさ

六百六十一

つれなきも人のためさへらき身にて

卷

中への山かつならぬ身はつらし 侘人の袖はくらへん露しなし 身はすてすとも心あれかし おもひたつ身を一きはに拾もせて 何をまち誰をたのまむ身の向後 露の身をゝかはいつくか安からん 身のやすきにそ人はなくさむ 心あらは身のいかはかりつらからん たか上か身のうきほとはつらからん なにか身のおもふによらはうからまし ことはりしれはなみたおちけり すみならかれそ秋のふる里 ものゝ哀もしらし山かつ きくもひとりとおもふ世の中 あるにまかせよよしや世中 つまきの賤のうちわふるくれ をとに聞芳野の花をいつかみん 又らき事に袖やしほらん 友もすくなくなれる世中 山里はなにはの事もともしくて 秋のしくれや里をわくらん

かくす身は賤か恵木のつてもなし 石の火のかけにこの身を忘るらん せめて身に人のられへをみすもかな ひとりやすくと身をなおもひそ 世間をおもひかへすな苔ころも 鳥の音もきこえぬはかりかくす身に さまくの有軽つきて拾る身に すつる身は心ありてもなにかせん 心なと世のうき事にとはるらん **墨染をなみたは本の袖にして** 桑門かへらぬ水をとゝろにて かたらふ友もよしやおく山 なみたす」むる世とそ成ねる かしこきや民の上をも祈るらむ おもひなれぬる暮そかなしき 窓に瀧みる雲のした庵 すてはつる身を夢やとはまし なをうき事は奥山もなし おもへはむかした」夢そかし とりけた物もなかぬおく山 いか」はすまん冬のおく山

第九

遠山とりのおいのいにしへ

たつる人もさのみかこたし

老か身よ誰もかきりはある物を

たつるや永き恨と成ぬらん

我はかりにやつくるいりあひ

老ねれは又いとけなくわか成て

身にふる事のかへるあはれさ

とかむなよ老のくせなる物うらみ

人をうしとはいかておもはむ

たえぬは袖のなみたなりけり よそにみるうれへも老のおもひにて 山にすむ身のいつを待らん まなひえぬこそ身にくやしけれ のかる」も有世に老のなをすみて こ」ろほそさそ更にまきれぬ ましはれる人にも老はなくさまて とにかくに逢かたきこそ恨なれいまはのおいのするのはる秋 あひかたきこそ後の春なれ あひかたきこそ後の春なれ

身ならすは我もいとはむよはひにて

うきわかこゝろ誰にかこたん

親をさへ遠き別にわすれきて 我なくはいかにといひしおやもかな 親になとなをさりにては過つらむ なからへてこそうき事もあれ 夢路のみかへるむかしは猶戀し 秋風にかしらの雪はなをふりて 霜は今ふり分かみの遠き世に 忍ふとてそのなに事かかへるらん くらふれはいにしへはうき事もなし しらす身のかきりや近く成ねらん そのこと」なく物そかなしき そなたはさても何をうらみむ おもひあはするなみたこそあれ かへらぬ事のつらきいにしへ 身をもすて命をも人おしむなよ おきていたらむあかつきもかな 月のひかりにあたる身もらし おとろく時そ身のとかをしる むかしの秋にものはおもはし

卷第四

先たつはらからぬ世にも生るらん なき人の跡にはらへし忘草 大かたの月日もかなしおやのあと 取たひに薪つきなむ日を待て なかき夜やこむ世の闇にむか あすはたかなからん事もしらぬよに 誰もた」おもへは夢のかたちにて 子を見すはしらてやすきんおや心 みとり子のおもきらひこそあはれなれ いときなき子をいかにいさめむ うきをたよりと類むおく山 すきしをおもふ心はかなさ 忍ふこそなをふかきみちなれ わすれよとてそ遠さかり行 秋のまくらに身も消つへし おもふ友ある日とそおしけれ 給にかくのみかもろこし おもふむかしそ又いまになる といろのなきも見てやしるらむ それとたにしらはいひてもみまくほし むまる」道を今つくさは 3. 300

おそろしやゑみの中なるその刀 はかりことある國のあらそひ 人の世はかゝみのうちのかたちにて 心なと月のかくみにくもるらむ 山に住人はかすみをいのちにて 山寺におもふあと」ふ日の日數 立かへりまよふなつ井の かけ遠くしたふ鏡の山しなや **蹄とし身を**うら島か玉くしけ わたり河かへらぬ水と聞もうし とふ跡に七日 そふほともなく歸らんそ憂 よの中はまさる方にやなひくらむ たゝありなしの契りなりけり むなしくむかふ秋のよの空 君かやとりそくつのあとある あくれは雲やたちわたるらん なみたの雨よゆく人にふれ むかしと成をなをかへさはや 心にこめておほきいつはり たく火もみえぬ くのらつりきて かたの」とけさ 夕煙 葉第九

新島守をきみに見せはや 野島守をきみに見せはや はけしき心虎はものかは

つもれる年に身を不忘るゝ子は親のつかふる道をうけつきて子は親のつかふる道をうけつきて

つらき身の恵にあふも命にて

ゆく末いのれ春のみや人生れてはたのしむ國と聞物を

すてたる身にはたれをさそはん杖によるおこなひ人の年ふりてみちは岩ふむかた山の寺

ゆふへさひしき露のふる道おもひ入みち一すちのてらめくり

とりけた物そ心かたらふす木をさらに佛とそ見る古寺は露のみ玉のかさりにて

法にきく名も高かりき三笠山 ところそかよふやまともろとし山ふかき夕の寺の法のこゑ

法にこそひかれて出めならすや法にきく名も高かりき三笠山

道淺き法こそ庭の車なれらしのちからを我はからはやいかて身にはるけき道そ法の場

ゆかむとすれは足もするます

法の水ちかつく袖のうるほひてほると見えてそ土はうきたる

はてはた A 佛もかりの親なれやかくれても佛や人をすくふらむかくれても佛や人をすくふらむのこす御法のするの世の中

おいかはれるやすみよしの松誰を神人の人とはおもふらんいつくにすむも君かくになり

石清水かけもくもらぬ月いてゝかさす櫻を見せんられしさ神垣に杉のこたかき八幡やま

枯し木もめくむ日吉の神心 さやけき月の夜をな忘れそ を日野に神の悪の露をみて 作のうてなそ岸のほかなる

老葉第十

此みちいのる住よしの松

むかし知ころとはかりをたよりにて

發句

月の秋花の春たつあした哉 春たちける日

**はるのはしめに質を** 

**草庵の會に梅を** 山やけさめのうちつけの春霞

太田備中入道の許にて

権の強句のうちに

**梅か香を空にしめゆふ嵐かな 白たへの梅に色ときにほひ哉** 

梅の花色にとられぬにほひかな二葉より匂ふ木もいさむめの花

二月はかりにある山里にひとへなる梅の咲そめたむめかゝよ色は千しほも染つへし

春なかは冬のむめ吹太やま哉

春の雪を

朝なく、山のは遠しはるの雪山みれはふるより寒し去年の雪

**ふりそめしほとたにのこれ嶺の雪車なく、止のは遠しはるの雪** 

柳を

春雨をあは緒によれる柳哉新川のけふるや柳春の水朝川のけふるや柳春の水

第 +

かすむ夜そおほろけならぬ春の月 はらふへき風たにかずむ月よ哉 春月を 太田備中入道のやとりにて心敬僧都なと侍し千句

まゆにほふ遠山あをし春の海 遠くみてゆけはかすまぬ春野哉 鎌倉にて二月のはしめに

おもひくまなくてまたるなはるの花 寺井四郎兵衞尉許にてまつ花のこゝろを

おなし心を

さかて先あらしをつくせ春の花 いかにせん花をいそけは嶺の雪 待人を花にかすめよとりの聲 またて見んさてもやをそき春の花

朝霞かくさは花のしるへかな 花をたつぬといへる心を

花をみは人なき雨のゆふへ哉 花はいさとしに色そふころかな みるはかりいはれはおらしやまさくら はなの發句の中に

> かすみぬと見しや春雨花の露 よるや雨花に露けきあさかすみ 小笠原美濃入道の宿所にて おなしく花を

色をすかた匂ひを花のころる哉 よそに見は軒はや雲井花の 上杉戸部の亭にて千句に夕花 濱豐後守亭にて花を カコ け

長閑なる世は花にたに風もなし 夕暮をみるや見る人はなの陰 鎌倉管領の亭の千句に花を

みる人を風もまちけり花さかり しら雲のたてるやいつと花さかり 大内京兆の亭にて 細川聰明丸の亭の千句に 同京兆の花見にさそはれ侍て

鳥の音も花のそこなる深山かな 花やひくかへる袖見ぬ木かけ哉 櫻かりかへさは野へのすみれかな 長尾々張守許にて花の比 よし野の花見にまかりて

六百六十七

第

御 3 よし野 南都成身院にて春の比 つやほか には花 の山 もなし

おる人を花にうらみむ風もなし かさ山ふもとも花の雲居かな 同春覺律師の許にて

さかぬ木も風やららみむ花さかり 時は今花のよなれや風 は るの發句 の中に もなし

みねの雲かくすも花のすかた哉 花さかり雲井に見えぬ山もなし 一とせの風やいま吹はなさかり

花をまつ見すは 山里にさけるを花のこゝろ哉 かすみの 包ひかな

水せきて風をやまたん山さくら さかぬ木に花をなくさむ心かな

見ぬ人をうらやむ花のあらし哉 人にかはりて花を

Ш かすむ夕はちらぬ花もなし 佐 々木近江守の亭にて落花を

つはりのある世にちらぬ花もかな

おなしこ」ろを

るのみをこの 花の雲といふ心を 世のも 0 か春の花

花と見はこゝろもまよへ嶺の雲

す かへ花そをたに後の春の雲

をそさくらを

待 人にひと容まけよをそ櫻

花にかせよはるやまちしをそさくら

池田若狭守千句し侍し時彌生にうるふ月ある年遅

を

日にもくは ムるとおもふ春日 哉

花のへむ千世は八墨の椿 東野州の山家にて春のすゑつかた祝のとゝろを か な

上杉戸部亭の月 次に

さく 膝に白ふや北の家のか はるの發句の中 it 世

道芝に包ふ花つむ茶野 たか袖そうらやまふきのにほひ哉 か ts

春よまてちる櫻あれはをそ櫻 慕春のとゝろを

け ふの 浦生藤兵衞尉舘にて三月盡に みとおもはてのこれ春の花

+

杜若花に水ゆく川邊かな

水鶏なく谷に夜ふかき朝戸かな 水鶏を

月のさすとほそもしらぬ水鶏哉

摩とをみまたぬはきかしほといきす

心敬僧都の旅宿の坊にて郭公

おなし心を

ちらて花またはまたれよ郭公 夏きぬとあらしなつけそやま櫻

おなし所にて餘花を

あすやみむらふる早苗のすゑの秋

こしへまかりし時榎並三郎左衞門尉許にて早苗を

おなし心を

秋かせの面かけそよく早苗かな 夏の發句のうちに

五月雨は花のおち栗風もなし 下露もさみたれ髪の柳 かな

ゆく水にひくや夏その糸柳

橋におもふは神のむかしかな 住吉の社家にて侍し會に

するいく世いはほの小まつ石竹 浦上美作守許にはしめてまかり侍しとき

下草をすそこにちれるあふち哉 の亭の千句に樗を

細川の典廐

おなし心を

夏衣らす色しるきあふち哉 あつまへくたり侍し時北野の會所の月次に

月やけさいる山さそふほと」きす 二こるの今そき」しもほといきす 郭公とを山ならぬこゑもなし まつを聞人つてもかなほと」きす 題しらす 上杉典廐の亭にて

いつきくをふる壁にせんほと」きす いつなかむをのか五月の郭公 心敬僧都の旅宿にて

さ月の比郭公を

卯花と色には見せぬさかり哉 新樹のこゝろを

秋風をおもはてしける木葉哉 さきこすかららむらさきのかきつはた

六百六十九

--

卷

題不知

山松の外にある場がない。一部保宗右衛門尉許にて扇を

夏の月を

おなし心を

夏の發句の中に りょうれは月そなからよ夏の空

**柳かけちらて秋たつし水かな** タたちに見ゆる木草の心かな

花もかなあらしやとはむ夏の庭 砂勢國司舘にて千句侍しに納京のと→3を

おなし心を

雨凉し雲のあなたや秋のかせかけ凉し苔に鹿なきにはの松かけ凉し苔に鹿なきにはの松むすへ露篠分る袖のあさするみ

雲をかせはらふも原し御設川

三井寺佛地院にて秋のはしめに風やしる散あと見えぬ一葉かな水からしのはつかせしるき一葉哉秋たちける日

水きよき池は一葉の塵もなし

散をみてきけは風なき柳哉

柳ふく川かせするし秋の水杉次郎左衞門尉許にて

七夕を

あさかほの名におふほしの契哉

あふ 夜半やことし二の天津 是 関七月七夕の心を

萩を

敬散山もと涼しかはらかせ 松風もほに出るあきを萩のこゑ を々木信濃守の亭にて千句に 佐々木信濃守の亭にて千句に

盤川修理進許にて

山水もゆふ暮ふかしあきの摩 かり鳴て獣色つく濱邊かな 横河安築寺にて 秋の登句の中に

露におき霧に朝たつ山路かな 朝霧のまつやうきしまあきの海 萩を

露なから見るともおらし萩か花 のこれけさ月をする葉の萩の露 本能寺にておなし心を

にほはぬをうらむらさきの小萩かな

露もおし夕かけまたぬ秋の花 草庵の會に槿を

すしきを

秋といは」朝露なひくす」き哉 八月十五夜の心を

秋の月名もとはりのひかりかな 月の名を雲井に名のるひかり哉 草も木も月まつ露の夕かな

あひにあひぬをはすて山に秋の月 をはすての月見にまかりて

> 月そゆく袖に闘もれ清見かた 太神宮法樂の千句に月を 清見か關にといまりし夜

神代にもかくやすめるを空の月 つくしにくたり侍し時豊浦の宮にておなし心を

月にみつ夕鹽さむし秋のらみ

秋の發句の中に

らす霧の月や春の夜朝ほらけ 白雲も月によ渡るあらし哉

雨しくれ風野分たつ夕かな 野分せしはなの袂やしのふすり

題しらす

鴈なきてをく霜さむし菊の庭 實中禪師の與行千句に菊を

うつろはぬ菊や北なる天津星 旅宿にておなし心を

山路をもかさしてこえんやとのきく

かはる潤もなき淵なれや菊のかけ 九月十三夜に 上杉武庫の亭にて同心を

秋を月なかはにかへすこよひかな

卷

四

八

名やおもふ 遊佐新右衛門尉許にて長月はかりに千句侍しに月 こよひくもらぬ秋の H

もる月にあくるや闘 奈良京にて千句侍 のとなみ 山

した

秋の雨を下葉にもらせ 三笠山

嶺の松そめぬ 池 H 民部亟許にて秋の發句 も雨のこゝろ哉 K

時雨より心はそめぬ山 長尾肥前守許にて時 もなし 南を

字準の山 宇津 こ」もたつ の山こえ侍し時萬のはの色こきを見侍りて たのもみち哉

木戶 参州の山 家 へまかりて

苔をうつ雨や太山 川豐前守許 0 にて秋の時雨 あきのとゑ を

染わたせまたむら山 の初しくれ

26

なし心を

そめやらて松風になる時 雨 カコ 75

松の葉や秋のちしほ 蘆のはゝみつしほしらぬ 秋の發句の中 K の遠ひかた 紅 葉か 72

> 千しほをもまたし夕日のらす紅 鹿 千しほとや露は染けんらす紅葉 の音をきかすは山やらす紅 葉 葉

Щ 露やしるいつれ 色みえは心やち 姫のおも は 82 枝 昨 L ほ秋の Ė からすも のらすもみち あ みち 83

心とや木々は紅葉の霜の 色こきはしくれのおもふ片 松 枝哉

た

秋更ぬ松の葉か 染川の 筑紫のは わたりに かたに たの 7 興 て秋の末 つか 반 つか

染川はしくれし山の雫 專順法眼 の坊にて葬秋のといるを カン 15

露にきえ木葉にちりて秋 もなし

長尾左衛門尉

のもとへはしめてまかり侍し時九月

秋をせけ花はお 十月一日 0 いせ 會 K 12 菊 水

神無月けふや八雲の 羇中にて時雨 を 初しくれ

をくりきてとふ宿すくる時間かな

卷 第 白菊や秋をとをくの雪のえた

藤澤の道場にて冬の菊を

葉

第 +

世にふるもさらにしくれのやとり哉 月やしる有明の夜のゆふしくれ 鳥の音も雲にしくる」太山 題しらす おもふ事侍しころおなし心を おなし心を

そめくてちるも時雨の木葉かな

吹たひの風の色わくおち葉哉 色ときはあらしに近き落は哉 花をさへ忘れぬ風の木葉かな 雨とのみ散しもしるき朽葉哉 夜の雨を木の葉にはる」あした哉

木枯の庭はもみちの千種か こからしに水の秋たつもみちかな 冬の發句の中に 75

木枯におもふ宮との青葉かな しら川の關にて

凩にふくや下葉の松の かせ

> 夕月よ宿りし水かあさこほ 清水すみ冬草あをき岩ね哉 おなし心を 伊丹兵庫助許にて氷を 題しらす ŋ

雨寒し雲のいつくかみね 氷より引まゆならし瀧の 冬の發句の中に 朝倉弾正左衞門尉舘にて の雪

川番はあらしに残るこほりか

する

詠つ」ととしる雪のこすゑ哉 降はまたらす雪ふかし月の庭 紅葉せぬ心やゆきをまつの色 空にちれ霰につほむゆきの花 あつまに侍し比ふしの雪を見侍りて

しら雪にそめ色の山かふしの嶽 泉みの堺にて千句侍しに雪を

雪にかせ嶺のあらしの宿のまつ 雪の松ひとり浪こす鹽干かな 武田光禄亭の千句に夕雪 おなしころろを

六百七十三

绾

鳥の音もきかぬを雪の夕かな 鳥羽にて人のこひ侍しに雪を

しら鳥のとは山しるし雪のまつ 同心を 奈良の京近き所よりとてある人のこひ侍し發句に

**雪はれて川晉さむき山路かな** しら菅をぬふや三笠のみねの雪 冬の發句の中に

世を知やつもれはおつる木々の雪

松梅院にて早梅を

とぬ春にたちえは見えよ宿の梅 おなし心を

> 吹てまて春やいそかむ梅の花 冬の半よりむめの花あまねく咲侍し年

ひと」せを見るは氷のかしみかな さくらにや春をはまたん梅のはな 大内京兆の亭にてとしの暮に

たちかへり春秋もおし年のくれ 北野の會所にて歳暮の心を

おなし心を

年くる」ほとも一日のゆふへ哉

[右老葉以內閣記錄課本校合]

## 萱草 連歌部十五

あま小舟はつかに見しを戀そめて あめつちを人の戀路のはしめにて 秋はなに」もねる」とろもて なみたの味そうくはかりなる あらむかきりはおもひやまめや 戀の連歌第五

とゝろしむ道行ふりの面影に つらねし袖の香こそ忘ね しらす心やかわりゆくらむ

夕くれをわか物おもふはしめにて

草木たに見しにもあらぬ物おもひ おもひなつけそ夕くれの空

> 生あふ時たに人はつれなきに 戀しさもたかなすとそわかこゝろ めにも見ぬちきりにかるの戀はうし さきの世よりもなとかすてさる たのみかたしやつらき後の世

らき人つまにころろくたくな うき中や又生れてもうとからむ 様そむる身の行末のいかならん さためぬ夢の世をはちきらし

まよひきやけふるもか」る様の道 きのふのなみた又けふのくれ

誰にかふるきあとをとはまし

つれなきはおもひにきえぬ命にて

萱 草

卷

第

四 百 八 + 五

卷

総はた」ふしよりうへのけふりにて 天地もしるはかりなる物おもひ 木玉さへやとるはかりの戀の山 たれゆへに物おもふ身と成ぬらん 山よりも紙そあさまの夕けふり さらはそのふしとも見えよ戀の山 とはきらつろふ色を物らき とはぬにらきをなにとこたへん とはすとよしやうらめしき中 さてもこの身よなにとかくさん しのはしいまはきえぬまをとへ の立 もふこくろはいかしおよはむ ほ とのお もひとそなる

暮とにきのふをしのふ物おもひ しのはしよさりとていつかとはれまし あはて名のた」ぬはかりはいか みるめなみみち來るしほをたもとにて との葉にかいるはかりをいのちにて けふりも見ゆな戀しなんあと 懸しぬとよそにはしらんあともらし 後の世になりてあはすはいか」せむ 戀たにもしなれすはなをいか さきの世を誰にて人はうかるらむ あさき江をうき水鳥の音に鳴て うつせみの世に物なおもひそ すつる身にゆかりのあるをうらみにて 强面てこそつねに過ぬれ 戀しきとそいやまさりなる かりのこの世に物なおもひそ つれなやいのちきえはてねた」 まつにうらみのかすやそふらん なみたも露も人おもふほと しのふかひなく身や過なまし かくうらみてもまちはよはらす ムせん かしせん

來ぬ人やさためなき世を忘るらむ

のちをさへにららみてそまつ

ころひとつはやすくもそある

うらやむもはかなの中やあまの川

ふ瀬あるそとき」ならひつ」

我袖に吉野の瀧のをともれて

玉川をなみたくたくる袖に見て

名のたつはかりあふ事はなし

卷

萱

草

夕暮はとひもとはすもた」わひて まつ里をいかにといそく人もかな おくふかくきぬらちそよく真木のとに ある人はとの葉をさへいひけちて 我ならてか」る雨夜にいか」せん いひよれはこたふるこゑをたのむ夜に いたつらに歸る夜にしも名は立て ありはてぬ玉のをはかりなくさめよ 人にいつつらさを見えてらかるらん しらす來て歸るもいもゐ目もつらし きくはかりにておもひこそやれ とゑはなやかに目くらしそなく さすかに人は見えんともせす らたかふこ」ろあるはららめし あはぬもふかきちきりとそなる 我とゝろ人のうきをや忘るらむ あはむといか」身をもおしまし はかなきちきり前の世をしれ こゝろそらなるすゑをしらはや かなる風のまたしくるらん つのひとひかやすく過ぬる

よもつきせしな人のとの葉

しのふ身は神なる夜半もたよりにて 月をくもれとしのひゆくみち かすならぬ我りへ君かなやた 身にそしむ風やおもひをもらすらむ さためなき人を忘れてまつ暮に 一たひの玉章にたに名の立て 露ときゆとも人にしらせし 想しきそてよ露もしくるな あひ見るとやいなつまのかけ かきりをいそく世のほとそうき のちとたのまんとの葉もなし こん

まつ暮にひかりの陰もわすられて 尋ねれとあはてとし夜のあり明に あはすとておもひはやまし夜半の空 いさや川いさといひてもあはさらん なき名をや又もた」ましいか」せん あられみたる」道のさ」はら おもへは神そ人をなやます と」ろを見てやいと」つれなき たつねもゆかし我名もらさし

稀にとふ夜半に岩戸の闇 とは」とへ命はあすの暮もなし 闘守のゆるさぬ中はあふもうし 玉さかの契とかむなとのひ人 つるの身の夢をもおもふひとりねに ひとりぬる霜夜の空に秋ふけて つはりにならへはねぬる夜半に來て つかたのたよりに我をとひつらん すれすはこよひならてもとは」とへ 夜こそうき身にあまるちきりなれ とゑよわりゆくむしのあわれさ うらみてまつとつけもやらはや 心をすます夜半をとへか 人のこしろにかきりやはある はかなやころろ末なたのみそ あふとする間にあけはつる空 人のとかをしなともとむらん ふりはへて來ぬ人はうらめし たゝ一こゑにことたりぬへし つあらはれてちきりむすはん よふそつらき忍夜のみち もかな

ひかふるとおもへは夢の夜半のそて ゆめやさむるとおもふわかれち したふまの鳥は八とゑにはや成て あふ夜半に人はかこたぬ鳥鳴て あふ夜しもはねをならふる鳥鳴て さのみなとわ けさのみかつねのわかれをいかいせん としむるやつるのわかれを忘るらん 千鳥なくさ夜のわかれち月さえて 夢になせとはかりつらきわかれちに まてしはしさらは何ゆへとひつらん なみたを見てもさらにとまらす とわりしるになにうらむらん 我のみ物をおもふはかなさ ゆくするしらぬとそあたなる 水のひょきもつらきあ 行かたしらすわかる」はうし ては何その中のかたらひ かたならぬなみたおちけり かにともいはれぬほとの中なれや ふをかきりのなみたほさはや かれを鳥のさそふらむ つかつき

(E

ひとりしも人はそのま」よもはてて

さりともの人もうらめし世もつらし

なをとひしくは身をいか」せむ

我より後はたれをかこたん

かすめとてそなたにいそく暮もかな 歸るさのあとにうらみの又ありて わかれつる鐘をおもへはけふもうし さらはそのあふ夜の夢となりもせて ゆふへはいと」うかふおも影 とはれんまての身をはたのみそ こゝろひとつは春そかなしき むかふときにはとのはもなし かれていなは かたもおほえす

らかれた」それも形見と成やせん 契うき人ゆへ雲もかとたれて あた人と聞つ」たのむ末たえて 程もへすなと目のまへにかはるられ きのふけふかへるちきりのはやたえて きのふけふ見そむるかたにうつろいて いくほとならぬ身をそわひぬる あさからすとてそひはてんかは たのめしするやたえくの霊 過にしかたのまとをそしる 後の世かけてちきりをく中

あとたえて戀路にいらむ山もかな けふも夢うときもかりの世の中に たのむへき命もしらす人もうし いくほとありてころもうからん おもひよたえぬ身をいかにせむ いのちつれなく見えんさへらし 中へに立名もいまはいとはめや ふかき戀路も人そわする」 なに」ちきりの末をさため いつまてとてか身をはなけかむ

たのめをくほとはちのはの露の世に

つねにあふせは御祓をそする

懸わふるをはほのかにもしれ

見し人は雲ゐの月をなこりにて

うき身一そたのむかけなき

わするへきなみたの月になを落て

あふとは今をかきりといひ置て

いまこんと世のなさけにやいひつらん

我うらみいはすはなきに成つへし 契はやわれにはてたる身をしらて なかめしようらみに歸る秋の空 形見とも人はおもはし秋のそら 夕のみとはれし秋のそらにして 我にうき人とてなとかうらむらん あた人と中にちさへやうらむらん 里はあれてとはれし暮もしらぬ世に うき中はさらになき世のわかれにて 露の世にうらみをいかてむすふらん うきおもひをも月やのこさん 月も身にしむ無しさとしれ ころとおもい忍はてめや たか身のらへもたゝ夢のらち やはらくるこそとろろ成けれ いひあわせても世は定めなし おほつかなしやとをきおもかけ わすれかたみの風を身に つあひ見てか納をほさまし つをかきりに人をおもはん

> つくさはや世々のうらみと成やせん うらみをなかく誰かのこさん 我かおもひこん世にせめてつくさはや 我かおもひこん世にせめてつくさはや 我のとゝろのかはる世の中

一世の中にふれは年さり年こえて世の中にふれは年さり年こえて雪ちりまよひ春さむきそら山はまた去年の鼠に月すみてまつ人よりも身を恨なる我か庵にさかすは花やとばれまし我か庵にさかすは花やとばれましむもひ入山も花ちり鳥なきてもかちもきくの舞人のそてもかちもきくの舞人のそて

おもひすてぬそ戀はかなしき

花ちりし野寺をとへは春暮て 月のとりさくらちる夜の有明に たかの山のこるやよひの花ときて ちれは又色なる礼をおりかへて のきはのはやし道そ木たかき けふの日まてもおしまれそする ほと」きすなかはなけかし

のる駒も水かふ澤のあやめ草 露はたもとに五月雨のとろ とめなは袖のうつり香もあれ ほと」きす山こえ來すはよもきかし

かくるたよりもたひにこそあれ

まともがるよとの」かへさ日は暮て 見せはやか」る山の下ふし

いるやをもしらぬかのこのあはれにて す」しき風のすゑのさひしさ

夏の日の夕山からすみね越て

月をわけゆく夕たちの空 あつさ号いそへのし水てにくみて 雲か」る嶺とおもへは風ふきて ふくかせふかき松陰のもと

> そてさへ秋の月よみの とゑとをきゆふつけ鳥に月落て 水に浮一葉を舟のはしめにて と」ろものへぬ秋の夜の床 ちはやふる神を衣にやとし來て 枕かる野のむらの明ほの のりのまなひそふかき道なる かけ

ナムきちるする野の山に雲引て 行て見んまくらしほるなはなす」き なくさめよ月こそしらめわかむかし うへなる山に月か」る見ゆ みたる」露に月そかくる」 ほのめく月にわたる鹿の音

鹿なしやまのあかつきのあめ 小萩ちる野へのさをしかけさ鳴て うくつらきかりねの秋をいか」せん

露よるや身をある物とおもふらん 八十字治川のするの秋かせ 世々のすゑには 月そはかなく野にはやとれる

武士のあらきは情すくなくて

身を秋のおち葉は離かひろはまし まくらの露やまたしくるらむ まくらの露やまたしくるらむ かつきの木葉過行柴の庵 ゆふ川の月はふたつの影ありて ゆく水さむく目のゝこるやま 草木を見るも心とそあれく豊 ふかき野やかりはの鳥をかへすらむ 千島鳴たつ雪のくれかた 手島鳴たつ雪のくれかた かのたよりにいつわりそある ともし火にたのむはかりの窓の雪 いかにして都をおもひはなれまし

我年のほしまつまてはめくるらんなみたに見れは大空もうし

旅の連歌

とをきかとてのなみたおとすな 世をあはれをもおもふあかつき 世をあはれをもおもふあかつき しらすこのわかれやかきり旅の空 闘のひかしの山そはるけき あふさかやこえていつみんふしのたけ なみたも雲もたえ/~にして なくさめと都の山や見えぬらん のちのあしたそいとゝかなしき 昨日まて古郷見えし山こえて わかれのあとの月そかたふく かりねせしたかねをけさは雲に見て こゝろほそさのまさる夕暮

さょしひさへに身にそはぬころ草木たにしるは稀なる山こえて 身のゆくすゑを思ふあわれさ なれたにしるは稀なる山こえて

**春と秋とそうつろひにける** 

月にあはれむあかつきのくも

およひなき歌に心をなをかけて

ゆみはり月にむかふやまのは

打かすむ雲あのみはしまゝのほりあかなくに月はかくれて山もうし

す」むるさけに夜半そ深行

らきたひを誰しらぬひのつくしかた

なみたさへもろこし舟のわかれ路

10

夜ふかき道に舟よはふなり

おひかせをもろこし舟にまつらか

たらんにしの国ねかふなり

いてやすらひしたひのあわれさ

の戸や鳥の空ねに明ぬらん

まなへる道に人いそけかし

夜ふかき山におもふいにして

ないこひしくとまる山みちずまはやな旅に我とふ泉の庵族のかとてといそくこゑといつるとないのではたいってとないのでは大ほえていつみとかやもちかき難波準かればたか旅れの夢にかよふらんかすめる里の人のよそほひかすめる里の人のよそほひかすめるりのといそく火は見えて

ありはてん古郷にたに住わひて ほともなく入相のかねに夜の明る 雨はれて遠山のこるまとのまへ おもひやれよはひの末の旅の空 古里のともをはかなく聞なして 誰にそのおしへをまたん族の道 しの」めの山のはらすく雲引て いかにせん都をいつる老の末 のちの世もかくやと獨族立て ふるさとは草木もいかにたひの暮 くち木の中にすめる山かけ うき身の行衛いか」定め かすみの庭のくれのさひしさ こ」ろほそきはきぬくの空 いのちあらはとかきりてそなく たひは身をしるかきり成けり といろほそくもこゆる山道 山かせさむし霜やをくらん つりくとおくりこそゆけ もしやと送るふみの一筆 あふさかちかき三井の古寺

度にせく水のなかれを田に懸て きのふにかはる世の中のさま きのふにかはる世の中のさま

行人のおほちの卯木陰ふかみ たつぬれは又道まよふなり たつぬれは又道まよふなり は、木々の遠きよそめはさたかにて きみかくるまの跡のこれなを もみかくるまの跡のこれなを

しつかなる時代をさる」心にて

おそろしやゑみのうちなるとの刀かしこき人はそふもはつかし

すくならぬ道にもさすかしたかひてかなしきはつみをたゝさぬ時代にてかなしきはつみをたゝさぬ時代にて

なみよりかよふそてのした風神と人ともたゝこゝろから

ひく人やからことの名をのこすらん

野にむすふ道芝くちて人もなし

いつくへゆけはほたるとふらん

人もねぬ市のかりやに夜の明て

你さくかけはふゑのねもうし 一しきり竹ふきしほる風あらみ引ひすむせふなみたにこゑ絕て

さえわたる夜そはしに霜ふるともし火に夜半の笛竹摩ふけてあそふやいとのみたれたる色笛竹の鳥のまひ人打むれて

とゑのにほひをふくむらくひす

誰來てか心とゝめんしはのいほ古里の松かせおもふ柴のいほお!まて山をもしやとひこん

からすなく太山の雲に日は暮て

秋さわかしく時雨

ふる空

きの嵐にまよふこゑわひて

を を を を とりやと らんさくらかり人 でとりやと らんさくらかり人 に なぶく風のすみわたるこゑ に ないと のこけに水おちて

いそくは人のまたや來さらん 山里は雲の歸る軒に見て 「そ既想」

はやしの鳥なるゝやまさと とはをもかわすはかりにむつましく 山里に心とむへきゆへもかな

我山里をあらすまつかせ、我山里をあらすまつかせ

山里に身をうき雲のきえわひて (た脚)

かくれかとてもすみはさため老ねれは今はとおもふ山里に

卷第四百八十五

萱草

六百八十五

大原やのほるをひえの貴たかみ りき事はありとも山のおくなれや むかしおもへはなみたこそあれ しらさりきみやこにかゝる山の奥 水のみちかき山もとのさと

明ねるか上に鐘なる志賀の海山路は水をゆくくへそ見る

おもふと立居に付て見えやせん

たいます 大月に誰か心をつくしかた 大月に誰か心をつくしかた 大月に誰か心をつくしかた

大よとの松ものとらぬうらさひてありしむかしそ見る計なる

たまのゆかとふまつ山のかけたまのゆかとふまつ山のかけ

難波かたきのうみ懸て明わたり はふりをたにもたやすかなしさ しほかまや名ある跡そとあまもしれ 遠山もとそかねにしらる、

渡邊や大江のにしの夕日かけあす川舟そきしのらへなる

むかしをのこすさかのふる道水ならてこゑはなからのはし~~ら

はし柱くつるもあるになからへてか、 るうき身はいふかたそなき

雲ものこらぬ夕立のあとうらみつるおはすて山の月晴てのちにそのりの心をはえし

いやしきも大君の代を始にてぶしの雪あかしの月もいつか見ん影高きあまのかく山月すみて

卷 第

八

といめてもなからんのちの名はつらし

わかのうらあまにとはん道ならて しらぬ汀をたとりこそゆけ またとしなみのわかのうら人 おもはさらめやとの葉のみち まなへあさか 命あらはいかなる名をか残さまし 久かたの天地にしも生來て のやまととの

おろかなる身はたれををしへん 道あらはれて雪はきえけり 住人は我をとなりのかひあらし たらちねのをしへをうけし窓ふりて

なきおやのいさめし道をまなふみに

てにふれて返す文もなつかし

ほたるの影のとをきわかれち

老てたにせめて名をえん道もかな はかなきは今はの老のまなひにて いつまてらき身くたしはつへき

人はたゝ名をしらるとも有世にて らる事なにそかりの世の中 たかあとくしも見えぬ古里

> 物とに人とおなしくあらはれて 生れ來しあまのみほこの末の代に かりなる身とは露や成らん はかなきつゆはあともと」めす

うきとのはしめとなにか成ぬらん か」る身をいつくより來てらけぬらん 世をいとふ身のこゝろとは

しのはし宿やゆめの中道

くらふれはいにしへはうき事もなし 秋もおもひのかすとこそなれ そなたはさてもなにをうらみそ

うきとのなくはあはれやしらさらん うき時やゆかぬとしさへ積らん すまれぬ物と世をなうらみそ きえもはてぬはいのち成けり

ひとりやすると身をなおもひそ おろかなるわかといろより身を知て いく千たひ身はうきとに相ぬらん ゆくすゑおもふ子をそいさむる かしこさやたみの上をも祈らん あるもかひなしおもひきえはや

中 かけならぬ身とこそならめおろかにて 数ならぬ身はとわりもうつもれて 数ならぬ身をもうらやむ人有て 見し人の時をうるにも身をはちて すてぬへき身をさりともに憑來て 人とにわか身のとかはわすられて てならひに身のうきふしをかきすさみ いしの火のかけに此身をわずるなよ 又とすはけふを我身のなき日にて 難面は人のためさへらき身にて とわりしれはなみたおちけり 人におくる」あらましそうき うらみんほとにある世ともかな へたてはなをやおもひあるらん くやしく過しなみたこそあれ もしやこなたをうらみはつらん とゝろをすみにいつかそめまし 妻木をしつのうちわふる暮 (に山かつならぬ身はつらし にくらふれはうき事もなし まのわかれをのちまてもとへ

人は身を世のさかへにやわするらん なか 他の中はよしあしともにといまらて 世になひき人にしたかふ袖ぬれて わひぬれは世をたのむこそ習なれ わびぬれはいける計になくさみて しらす身のかきりやちかく成ぬらん よしやたし名さへなき身と誰もみよ わたる世はしつからみ絡のあさましゃ まよひゆくちまたのちりの世の中に うき身はたのむかけもさためす としもとかく暮しこそゆけ そのとしなくそてそしほる かっ はかなき夢のなをや見えまし あわれをかけぬ人はうらめし 人のわさこそみなあわれなれ なとかと」ろのつみにひかる」 やそちときくもた」夢のかす いはんとすれはなみたおちけり つかにともるいほりとも らへん物 りのいほりのあるとほとなさ とおもは ぬ他の中に

萱草

れたる人なき雪のかけはし れたる人なき雪のかけはし れたる人なき雪のかけはし ましやしはしはおもひなくさめ 身にかきるうき世なりともいかムせん いにしへなれしともそ戀しき ゆくゑさためぬ身をいかムせん

おもふ友ある日こそおしけれ一日の夢の身をなたのみそ

ほともなく一日のうちにかはる世に

きえわひてうらやむ雲のあたし世にいかゝはせまし身を秋のかせ

したひとめつるこゝろくやしさあらましや苔むす道に成ぬらん

皆人のいとふはたくひある世にてつらさくらふる身ともなさはや

身はすてすともこゝろあれかしかたらふともはよしやおく山すつる身は心ありても何かせんむかしかたりをいかゝつくさんむかしかたりないからなともはよしやおく山

松かせは世のうき計身にしみていか」はすまん冬のおくやまいか」はすまん冬のおくやまかくす身はしつかつま木のつてもなしかくす身はしつかっま木のつてもなしかくすりはしていか」はすまん冬のおくやま

世の中をおもひかへすなこけ衣世の中をおもひかへすなこけ衣

るにかくのみかもろこしの人 ・ 我身かりやにあるもいつまて ・ なりかりやにあるもいつまて

此もた」おもへは夢のかたちにて

六百八十九

卷 等 四 百

我なくはいかにといひし親もかな しらさりしおやのおやさへ懸しきに かたちさへおやには生れおとりきて か」る身になを親なくはいか」せん おやのそたてし身をあたにすな 見すもかな我のちの世のますか」み 後の世にならはむかしの人や見ん おくれしの後の世とてもしらぬ身に のちの世のことをたのまん友もかな 身はたのみなや此世後の世 .わかれし後の戀しさそそふ 生れぬさきのふる里も 0 玉くしけふたりの心ひとつにて おもふはかりはなにかあらまし 聞てもむかふ心ちこそすれ とはん人なくなれるふる里 しのふもくるしたえね玉の緒 もひあわするなみたこそあれ かふか」みのつらき後の世 こるおしへもあれはこそあれ におやしあらはと納ぬれて かな

みとりこの人なんみちはしらまほ みとり子をさむきはたへに猶そへて なけはころをそふるみとり子 子やおやにいつもそふへくおもふらむ たらちねやか」る我をもいのるらん おやをさへ遠き別に忘れ來て ひとりたに残ると親をおもは」や あはれさきたつあとのみとり子 みとり子にとしをいそけは身の おやになとなをさりにては過つらむ とかわすほとたちならふ中 なに」よるへきこ」ろ成らん おとろく時そ身をなけきける あたに過ぬる身をなたのみそ わひぬるそても身をはくたさし おとろくときそ身のとかをしる 憑むかけなき身をいかにせむ うき中にかたみのなくはいか」せん ゆくするしらぬとそはかなき ねぬほとは夜の枕もさたまらす 歸らぬとのつらきいにしへ ふりて

をの身は風の上なるちりに、て 老の身は風の上なるちりに、て つれなの人やらすむ明ほの やまとひの暮そかなしき ともすれは明日ともおもふ老の末 たゝかりの世はあるにまかせよ 湿面もいくほとならん老のすゑ いかてなみたのかはらさるらむ やはた、日とにあらぬ身と成て なにかこ、ろをとむる世の中 ゆくを見るもかへらぬ[\_\_\_\_\_ ゆくを見るもかへらぬ[\_\_\_\_\_ かれひとりかはよしや世の中 ゆくを見るもかへらぬ[\_\_\_\_

瀧のよとみのしるきかみすち

としへてや水の行末も替らん

うきわかとくろ誰にくらへん

いとけなき子のおとしいのかたらひて

八十五 萱

草

卷第四百

第 四

行末の心ほそくも老はてて 老ぬれはころのにかなかともなし 老のかきりやつゆ しるしらすいにしへ人をかそへ來て 思ひのとさぬあかつきの雲 すこきねさめのあかつきの鐘 すつるをせめて身にそまかせん 8 おくれん

立歸りまよふなつ井の夕けふり 取たひに薪つきなん日を待て 先立はうからぬ世にも生るらん 生る」道を今つくさはや うきをたよりと憑むおく山

過しをしのふ心はかなさ

先立をかわりてとめん道もかな 忍ふるとそせん方もなき

夕暮やとけのしたにもらかるらむ 一日たにあらしとおもふおやのあと 心もしらす松かせそふく ぬ世になと我はすむらん

大かたの月日もかなし親の跡

すれよとてそ遠さかりゆく

よしやた」なきをはなきに慰めて とふあとに七日くのうつり來て なき人の跡にはらへしわすれ草 しのふとそなをふかき道なれ よその むかしと成を猶かへさは わ 力 れもうきはかわらし p

わひぬれはとふらふあとにとたえて らか上につらき世の中 (g)戦別 会職等)

我よりも なき人の秋の手向に納 派に似たる野へのゆふ露 くるやこすやを露もしらはや みしかき末をなけく玉の絡 あるへき人のあととひ ねれて て

わたり川かへらぬ水を聞もうし 涙の雨よゆく人もふれ みたの水のすみはいいのない。 にやわかれし袖をわするらん いつはり

秋風にきえにし人のあととひて

萱草

答

いはすともめくはせてたに憑まはや

ひくとゝろこそおもふかたなれ

夜さむの枕おもかけもねよ

あかさりし別

の跡のあきの

床

君しこはしけくもおかし庭の草

みとり子は後のおやをも又しらて いた」ける我大空のはてもうし みとり子のあゆみもやらす親を見て となりよりかきのくつれをふみ分で 人はなをいそくみた恭打かね(5歳) 遠くなる人をもふじや送るらん 村雨のかささすはかりふりいて」 ふしをさへかくすは旅のなみたにて 折にふれかへぬる袖もわつらはし あしとをきこえゆく山にうらやみて いしの上にも時をこそふれ なかめにこゆるうつの山道 我につらきをしたふはかなさ おもふそなたにいつかゆかまし あれたる里そ道あまたなる たかねおろしはふきもよはらす いつの間にとをくは人のかわるらん ころもはあるにまかせてそきん かきりあれはや雲もきゆらむ かけたちなれん住吉の松 おろかにまなふ道そはかなき 7

六百九十四

4: 物うしや年をなとひそ老の 歸るなとうき世や人をおもふらん みとり子は人のらきにもなく計 らき身さへいまは なからんあとをたのむのりの おこなひ人のかくるおふみね すてかたきいのちに松の葉を敷寄て 子そつきく 夜る出てゆくく いるやをもねたる鳥にはころもせよ 道かすかなるさかのふる寺 なととふしも 隱家もさすかけふをたてそやせん およふへき山こそなけれ老 えそやすからぬかるる世 の子のおや 人のとくろのか おそきまなひは人もおしへす もひのかすは かふ日影もしらぬ山も れはのかれぬ のあゆむに行つれて のいはす成らん 生 はる世 0 いはれさりけり れ あみのうろくつ ねふる馬のらへ おとれる 時やおしからん の中 0 0 1[1 坂

待人の 住つきて今はたのむ山のおく「た脱黙」 杣人の おれは花あるしをさへやうらむらん 生れつるけふのほとけの跡とめて 夜る人の鐘の御嶽はきく計 あとさひしこゑみたれつる鞠 里近く山のたき」をもちわひ たき物の袖のした風打 あし村、 今さらおもひよはるへしやは はるかにとふやいつみ成ら 人につくすはあたのこゝろか 一般や夏をたよりなるら 付樣誹諧外 ひ見んまてとおもひてそゆ ひふく時のうつるほとなさ つかほとけを夢にたに見 ひちらしなはそれもはつか おのにくたくる木はちりて おほつかなさに立いて」 人の眞砂地 の連 のする カン ほ ŋ の庭 W

卷

つかふるを我しろかみにくちもせて

君やしる代をかさねてのつかへ人

おやよりも子をはこくみそます

君をおもふに身をそわする

とのゐする時のかはれは鳥鳴て

たゝにぬるをや風もいさむる

あしよはくるまおくれてそゆく

年たけて君かめくみをうくる身に 君をおもふ此宮川のゆふはらへ 此君の代こそ長非のうらとをみ 干たひおもふもおなしあらまし いにしへよりのすみ古のまつ 此世ならてもわすれやはせし

年をへし身をうら島か玉くしけ

されとも夢はつれなからすよ

きけはそのよはひそ遠き天津人

袖のせはきは玉もかくれす

こゑをひく法のおこなひきかまほし

あくれは雲やたちわかるらん

おちかみの白きに老の名をしりて

はかせの道はいかったかはん

後の世をいのれと神や思ふらん 神かきに杉の木高き八幡山 かれし木もめくむ日吉の神心 雲きゆる天津神路の山はれて たのむ心にすみよしの神 けにあたなりや今はたのまし との葉は我身はなれぬ契にて おもひはれるやすみよしの松 たちもはなれぬこの法の庭 月日やうけむ君かとの葉 神祇之連歌の内に

武士は名をたひくにあらはして

心やかへるわかかたのみち

から人の身を花やかにかさりきて

おらぬこくろそつるき成ける

もの」ふは文より弓をわさにして

末に孰法のはしめをしたふらん

つもれるつみをなにかけたまし 釋教之連歌の内に

萱草

六百九十六

住わふるいほりの上のみねの寺 川めくる山さしおほふ寺ふりて 我庵もおなし野寺の松の風 カン おろかにきけは法そかひなき うらやむ人の身をもあわれめ ふねよるみきわ人かへるなり U Z) > ねも きか 82 1 3 かに明暮

たれかその心の月を三井の水 古寺は露のみ玉のかきりにて 人歸るあとに野寺の松をみて 夕さひしき露のふる道 なからの山のうちかすむ比 草木をさらにほとけとそ見る をいとふ人のやとりか谷の奥

格なかる」やまの井のする

こゑを鳥もす」めよ山のおく すむかくれ家にいそく彼國 まとの色はおもふにそある ほると見えてそ土はらきたる のこす御法のするの世の中 と」ろは空にらかれてそゆく かてかふかきつみをけたまし つくみしこそ四方にみちぬれの山御法の庭もうつろひて

## **遊歌部十六**

下草第一 泰連歌 世をのとかにと年やこゆらん ゆかは花いつれとからんをそからむ

かすむ江しまは行てみまほしかすみとくあまのつり舟遠江にかすみとりの春ふかきいろ

カヘリもやらす鳥のなくこゑといるをけたぬ雪のつれなさ

春はこくろそいろ (になる野とをしきえずは山やかすむらんちる花のとかをは風になしはて かおるれにかすむ谷のむもれ木あはれにかすむ谷のむもれ木

花はたくかけもうこかす咲そひて たなったはいの花のはかなさ なのいほりの花のはかなさ をことにえたおる梅のなをさきて なりはつるかきほの花のうちかほり かたえつたはふ山さとのむめ かたえつたはふ山さとのむめ

四百八十六 下草

第

卷

第

山はなを雪さむけにてかすむ野に

草第

當

道のへのつゆの春草花さきて 水さむき谷のふる道梅さきて 久かたの月のいく世かかすむらむ 青柳の露のうき草たくよひて 天津鴈いつかのとけきたひならん あさほらけかすみの月に鴈なきて さえし夜の月にはるかせ又吹て おほろ月夜にふくる川をと またれてはるをはな」をくりそ まよふやとみれはかすみにかへる順 池の水さひとむめもこそちれ 手おるさくらのかけのやすらび れし野の春の草やく夕けふり 雨しふらすはたちもとまらし ほのくかすむあけかたのそら 春とてもかすみははてし嵐やま ふるきみやこのはるのあけほ くるほともなく春そわかる」 かそふれはなかはも過る年なれや りぬる海にたかき山 つのしほりのみちのこるらん のは 0

遠山さくらなをたつねみん うつろはんゆくるもしるく花開て かすみのせきを花にこえはや 我いほの花によしのをわするなよ おらはやさくら流なくもかな 山 奥山にいれは花さき人すみて 吉野なる瀧津川つら花さきて 老木をかくす花のあはれさ かへらすは山はさくらとおもひやれ けふをはしめの春風そふく むさしの」末に雲引山みえて さく花にさかしき山の峯こえて 玉をみかけるいにしへのみや 花をあるしに人のゆくやま なさけにをくるむめの一えた いまこんとてそみやこいてぬる といろふかきもあさくこそなれ おもふへきこそやまの奥なれ むかしにはかへるためしのなき物を ふかみみるをや花にいとふらん つくかは都にまさる春の花 ちらせた」さくらにつらき鳥もなし

草

第

柴の戸もさくら一木は植まほ 人なみに花らへをける草のいほ はかなかれとや花はらへけん わひてのうへも都なりけり 雪とのみふるの」櫻ふくかせに かにせむしるてとひくる柴の庵

花のなたてのみねのしら雲 花に門さすゆふくれの山 芳野川よしやつらくはたえねた」

花にてしりぬ世々の春かせ をきわふる露こそ花にあはれなれ うつろはんとはかねてしらすや おもひやたえんうらみもやせん 人の身やむまる」たひにらからまし

花さけはふかぬ春なき山おろし 爪木おる山ちを花にわすれ來て へさの袖は手にもたまらす

鳥やさくらに身をまかすらん へらは花にあらしもそふく るにすきさくにやすらふ花の春

> 花にらかる」てふのはかなさ うつろひはてはたのむへきかは あそふとて遠き野へにもゆきやせん

花みれはうき世の人になりはてゝ ちらぬまと風にや花をたつぬらん といろふかくも身をかくすやま

ちらぬまにいらはや花のよしの山 なをすてかたき世とやならまし かたの」さくらいつかわすれん

山さくらをちかた人はいつかみん かすみつく花は雪ちるありあけに まれにとひきてわかれいそくな たれもちり行花の夕くれ

花もたい身をうらむやとうつろひて 山さくらさそへかせとやのこるらん なみたなそへそよはひもそうき

やと」せは花よとするにやすらはて いるやまことの花のはるかせ いかなるゆめのしはしとふらん おもはぬを思ふに我身つかれきて あやにくに待しうらみのかひもなし

第 四 百 八

たま!~さけは花にやまかせ

七百

とりあへぬまてみしか夜の空

花に人風も吹あへす散はて」 花もた」みえしらきめとちる物を 苔むしろ露ひや」かに花おちて ふるきみきりの花おつるくれ をそくきてみれはうちちる花のかけ 山かせに花は旅たつかけにきて 松かせはららむる花になをふきて さくらの山のはなのゆふかせ ほとなさを花はられへの色に出て しられしの花のころをかせもみよ なけきしゆめの跡のはかなさ 情にやくは」る春もなかるらん うちむかふにも風そはけしき きけはふけゆく松かせのをと ひとりかすみをたのむ山 雨過てこけはいろそふ木の本に 日をもをくらていかょうらみん ころとまらぬかりふしの床 おしめははやく月の入やま こゝろもなしや世にすめる人 カン け

雲風の山は花おち月いりて 山さくらおしむをけふのかたみにて さくらかりちる花ことにあくかれ おしまてをみん花やつれなき 袖にかれ宿なき花やまよふらん ならふやと一木つれなき花もかな ちりのとる花になを松の ふる里よちるはらくとも花もかな おもへは花はかせにちるころ たひなるわれを思しるくれ 世の中はゆくもとまるも哀にて 嵐にむかふ駒のあしなみ あはれ世はあさはかなるやまさるらん くる」はやしのおくそさひしき 表よりはるそうつろひてゆく あまりさひしき松風のくれ ちれとこと葉の花そのこれる つをみ さかりはいまよ雨かせのは とつにも命はきえぬ物なれや んた」ちりまよへ山さくら て

下六 下草第二

春したふ花の一もとちりやらて ことしもすゑにうつるまそなき 木々はみなたゝはつ花に散はてゝ いまよりはおもひのこさし我うらみ はなのあとをも風のみそとふ みそめしよりの在明の月

野をとをみわけまよひぬる春の雲みよしのゝ花のふる里とひ捨て

いつのこる花とて春をうらむらん

人はこゝろとまよふなりけり

我またてうつりなはてそ山さくられたのあるしのたれをまつらんれのあるしのたれをまつらんおつるやいつくひはりなくなり

とはゝや花の後にさくはなすみれつむまの道のやすらひ

立かへり田子の藤なみいつかみん気ををしるへにかへる春はらし

春をあらすな志賀のふるさとおもかけをわすれぬ花の山蔵おもかけをわすれぬ花の山蔵のはないます。

ちリにし後の花のふるさと 春よこゝろと夢なさましそ 天津鷹夜はの別の壁間て

春過ぬいてし吉野の奥もうしちりにし後の花のふるさと

今日のみとおもはて夏を花もまてあたらさくらそ一かたにちるあたらさくらそ一かたにちる

## 下草第一夏連歌

はなはあを薬になをのこるとろ時鳥はるをいつくにかへすらんあることのめつらしきこそあはれなれあることのめつらしきこそあはれなれぞくはいく重の卯花のかけれくはいく重の卯花のかけ

卷

夏山の月しろうすきよひのまに ほと」きす月さし出て過夜に 時鳥わすれは草の名もつらし かへるにはしかしと鳥もなく山 かたとをりすなゆく郭公 ほとゝきすとていつちすくらん ほと」きすなのりそれとも誰わかん ふけぬまのはつ音やいつら郭公 山ほとゝきすみねこえてなけ ほとゝきす我らたかひに聞わひて かりねしてかたしく草のみしか夜に けしきはかりの夕たちの雲 雲ははれても身こそうきたれ ふるき軒はのさみたれの比 おほつかなしや行末のみち らくひすは飛かへりつ」なく物を ゆふへのなみのあらいそのこゑ なをはれかたきなか雨のそら 過にしかたのおもひもそそふ わすれすよ道行ふりの一こと葉 つかほたるの袖にいりけん K

応りもる<br />
裎もあらしと<br />
うふる田 野をかけて水の海なる五月雨に 樗さくはやしつゝきに山みえて こゝろのあさのすゑのよもきふ 山かけやさらても茂る草の戸に ふか田をうふるしつかあはれさ たち花にかわらぬかけをふみなれて ともしするかた山川の鵜かひ舟 あふちさく外面のは山蟬なきて ことし生とみれは千ひろのそのゝ竹 ひかりもかけもけにそはかなき 雲もうこかぬさみたれのころ ゆふ露す」し道のへのさと 御階のもとにとしをふるみち わかきになとかをくれはつらん ましわりもなかりし軒はつらからて らへてくやしき軒の下荻 澤水のなかるゝ土にうつもれて むすはぬ水はにとりこそゆけ わたるそとをき志賀のうらふね 命にはなにをかたのむかけならん

第三

秋またてむし鳴宿のうた」ねに

おもひによるのむしのかなしさにしに「こ」るゝ星のかす! にしに「こ」るゝ星のかす! 影うすき河邊の登志けそめて 影うすき河邊の登志けそめて にしきょき夜にのこるむら雲 ほしきょき夜にのこるむら雲

山路やすらふゆふたちの雲み」なれぬるもつらき松風かっなれぬるもつらき松風

月ないそきそゆふたちのあと

雲かせはさはくをおのかならひにて

クす、みあらしも水もことかたれ りす、みあらしも水もことかたれ 日かけも、らぬゆふたちの雲 凉しさを月まちいてんしるへにて 棚のかりやはあとものこらす 棚のかりやはあとものこらす

水よりはやしあくる夏の夜

| いろ風のけしきに秋は來て | かちあらわる 1 野邊のはるける | かちあらわる 1 野邊のはるける

中たちも思ふほとをはよもしらしはやあつき日もよそのあきかせ

月ないそきそほしあひのそら月ないそうさわかれし星の後の暮かよへるは野分のこゑと聞物をかふへすくしきあきのむら雲

腐なきてかせは萩ふく山里にひとり月みる床そかなしき

のはん月やとの比のそら

いなつまを我かけになとわするらん

いとふもしらす秋は來にけり

七百三

卷

小获ちり萩に風ふく夕まくれ 色つけはむかしもわけし野へにきて 植置しその 月影に花のやとかす草のはら 薄ちる野は夕かけのをくら山 ひとむらす」きゆふかせそふく しの」めならぬあさかほもかな しほれすは何あさかほの花ならん いねかてに小萩ちるの」月をみて しら露か」る野へのむらはき えらひもあへすかる」むしの音 人とはぬ露の古里むし鳴て うらみのとすな夜半の下ひも あらしの露に月なまたれそ ひとり版たつ秋かせのそら たからへもいまを秋とや思ふらん ふりすは我身露もなけかし おもふとちとやましるあはれさ たひのあふ夜はあるもはかなきに ムいろ草野分して

すか

のねの露のかたしき長夜につやのかりね月そさひしき

ありやすきかけに椎のうつろひて 袖きむし草葉の露やおもるらん 淡茅生にまくらむすはて虫もなけ かりおつるすそは つり舟の夜るの海つら順なきて すみわたる月にいそくな天つ脳 きえわひていくあさ露をなかむらん あしたの鍵に身をそなくさむ 夕日かくれのもりのしら露 かたしきの衣かりかねとゑふけて 腐わたるあまのはしたて浦さひて 人もまたねし秋かせのそら 雲はきえゆく秋風のそら 月はふけつ」きゆるともし火 はまなのはしをたゝにやはみ はつかしきまてのこる世の中 あさかほの花のあたなる色をみて 精らすき夜のみねの秋風 下もみちする松風もうし まのうらみにたえんとやする ▲しろく□る窓の月かけ の山田きりたちて

よしやふせやとなくさめてすめ ふくるまてみる空つらき秋の月 いくほともなくよはるむしの音 ふくるともおほえぬ月にたゝすみて 木のはふりゆくあかつきの庵 かけさひし嵐や月にのとるらん 今間し事も心にとゝまらて 月しつかなる夜はの山風 草葉のこらぬ雪のしたおれ むとするはしよたれわたるらん おとするはしよたれわたるらん 月しろく風はとたえてふくる夜に 入山みつそ清くなかるゝ

はつ霜のゆふへにならへ虫のこゑ

なれにし秋そなこりはかなき

卷第四百八十六 下草為

您 第

四

第 四

秋風をふるき都のあるしにて ふる宮人の秋のゆふくれ 忍ふとて遠さかりゆく人はうし 又みえくるもおもかけの人 たひ來で跡を都の秋風に おもかけとをし夢や野らん

あらさすは宿にやはみん野への秋 おくやますみの秋風のくれ くもらぬ月にものなおもひそ

夜ふけ風ふく秋のかなしさ にふけゆく四のをのこゑ

吳竹のひまもる月はさやか

にて

秋の夜は子を思ふ鶴もうらむらん

字治山のあかつきさひし秋 又もあはなんありあけの月 0

ふきおろしの秋さむきそら いそけ月は と山の あさわたり

水にまつふく秋のはつか すむ山 いつからくれなるに龍 しらて雲もとまらす П 4 河

龍

田姫よその時雨やららむらん

とまるやまなくまよふもみちは 紅葉せぬかけはあらしのつてにみて らら みさひましりの秋のやり水 秋風に須磨の關守らかるらん みのはてそ秋のゆ ふくれ

露さむき岩根の木葉朽初て

涙をさそふ秋風はふけ

月さひしひかりに秋や深ぬら 露みたれ木葉とまらぬ夕くれ みるもこかる」もみちはのい はしもをくねやもすさまし 3

海 士小舟はつせおろしに秋暮て

下草第四多連歌

神無月たむけの山も道たえて 下紅葉かけをたのめはちりはて 浅茅にみし色もなく枯はてい きけはさるなく夜るの山 折あとさひしくつるもみちは つかなる月に木葉の音は なとりの山はかせもすさまし かけ

七百六

四

つれなき霜ののこるなよ竹

草の戸に枕をからはいかムせん 草の戸に枕をからはいかムせん

すゑかすかなる瀧のした道かた糸の一むらすゝきかるゝ野に

あはれことしも木からしのかせ

露のまに夢なと今朝は覺ぬらん

もらぬ岩屋のしくれたにうし

さえとをる袖のみなとのうら風に柴の戸に岩もとすゝきかれたちて

りをわふるしつか家 く 夜やさむきりをわふるしつか家 く 夜やさむき

今夜もふけぬひとりかもねん 日しろき小條が霜の手まくらに しくれはけしき夜るの山風 むら雲に月は中く一影さえて 水ほそき岩間のつら、むすほよれ

を買っちらやり改子為これの、こさえし夜の雲井に鶴のけさ鳴てのこれる友のかたるいにしへのこれる友のかたるいにしへのこれる友のかたるいにして

霜あさの増ねにあをき小草哉

小山田のおくてのひたの冬かけてゆふわたりする千鳥なくなり橋たてや松ふく風にきりはれて志賀のうらや夕波千鳥とゑく、に

鹿なくみねに雪ないそきそ

あるしさへもよほす宿をかく出てん まるしさへもよほす宿をかつむらん といくる人をかへすやまさと といくる人をかんすかまさと

七百七

五

卷 第

四

ふらはた」あつめてをみん富士の雪 なかむへき雪はあさまの夕煙 夕日かくれの雪のとをしま 舟みえすなる雪のやまかけ 雪わくるしつかつま木を待くれに 出てみよ柴のと山 千里をしのく馬のあは 雲こそしるへ川ははるけ おもふにかわる山のさひしさ 松風かたふくま」にうつもれて さそわれし月にやぬると歸り來て たよりとなるもわひつ」やふる 0 3 ね 0 雪

あしからや雪の八重山末にみて 竹のは山の道 心のさか しさ

下とほる雪のかたそに応ふりて かきりなき千里の波に目は暮て

暮わたる雪の山もとかり鳴て 山かけくらき雪のあけか たつや千鳥の又さはくこゑ つほりいてん我法の水 た

あち小川の春待わふる民の戸に

かなしきは老のしはすの空なれや 霜かれの草のはつかに梅さきて 埋火をかへる木とりやたのむらん こえぬとも身にはかへらん年もなし あふきのかせも身にさむき比 道も野中にかすかなるむら しつか 容もわかしの谷のむもれ木 K ねふる夜るの山さと

下草第五旅連歌

出たつもらきあし引の山 つらさをはみするなみたにまかせ來て 千さとはかりの末はおほえす たか

嶺とえて雲やは送る袖ならん みちしるへするよひのいなつま 山路にわくるふるさとの露 人になくさむたひのゆ らつろへる草木も人の形見にて あたなるは我にらつるも恐まれず やまちに人のまたれすもかな く末

たのまぬほとのつてははかなし

みやことみしは中空の雲

ほのかなる夢よ都のたれならん かたりゆく人よ都のたれならん 遠くおもひし宮こをもみつ われなくさめるたひの夜なし

夢こそはなくさめ草の枕なれ もろこしに行をもみれと夢はらし 人たのめなる旅はいつまて

秋風に遠かた人はつてもなし あはれをしらはたったひの暮 いつくの露の身にはしむらん

たつぬともか」らし花にかり枕 とえにし峯は八重のしら雲

興つ波月の千里に舟出して らからぬ旅とつけもやらはや

わすれすは古里人やなけくらん さそふってまつわひ人そうき

住はなれいまは程さへ雲井路に なにを闘とかたつねこさらん

夢にもと宮こにおもへらつのやま たえは身のわすれはてぬる暮ならて

> 都田し事や身のうきはしならん 都にといつはたかへる空ならん 佐野のわたりにまよふ旅人 とえてあらちの山 のくやしさ

とふるともしらしなとをき都鳥 山里」ひしいか」をくらん 心を人になしてとは」や

ゆふへの山につる」旅人 我出し都ならすはかへらはや うき時や思はぬ身をも歎くらん

をくれさきたつ道のたひ人 待ほとはたかひにおそき夕へにて

したひ來てかけはつれゆく深山ちに せめてはほ 我のみあるもたのまれそする しの契ともかな

とえわひぬ月なき山の秋の雲

都にはらつらん物を旅ころも

夕しもはらふ山のさむけさ 身のうへをみれは昨日の雲□

あさたつ山に納そしくる 都はいつらまよふあつまち

H

山ちの月に水おつるこゑ 清見か闊の月のかりふし 旅やと心とまるもなからめ 雲のころもをかりふしの山 月はさえかせはあら野のかりふしに あまならて音せぬ雪の磯まくら らきかりふしのあかつきの雨 くる」まてぬれく 一夜おりしくみねの椎しは 月にたに木の下くらき山 うきもさこそとやとりをそかす ぬへき道を日くれていそく野に おき出たれにやまちとはまし あはれむはいかなる人そ旅の くる」夜ことにさのみらからし かれゆくかた岡山 Ŀ まのとかなる心をそしる ひなしやなれし一夜のうかれ妻 なのなかちの枕かなしも の宿とひ行は目の入て もこよひにかき ・雪の山 に日は暮て 越て 里 かは To やと 武野や草葉を山の露わけて (離脱界) 鐘とをき岩のかけ道くれそめて そ (ことが) わかぬ夜こそふかけれ舟よせ □時雨にか」るみなと川 古郷のかすみに駒やなつむらん また過ぬ夜るの馬屋のすゝか 舟わたる夜なかに月はかたふきて まちくし日よりをけふの舟にえて 水けふる江にふねかへる見ゆ ふねよせよゆふ付鳥や里ならん 人すまぬ

蘆屋の
奥に

舟とめ ほしすさましき夜るく 河音さひしみよしの ゆくたひに心のとまる前渡り あかしかた浦なみ近くすむやたれ なれもうしとやをしか鳴らん 伊吹おろしそ波にのこれる あしはやくゆけ春のとを山 ふり出ていつそれとしられん まより道の末たいしかれ

て 0

空

щ

第

舟ときかへれしほかまのうらなけるなけんですみなは法もえつへしたのみつゝわたりにくれは舟もなしたのみつゝわたりにくれは舟もなしたのみつゝわたりにくれは舟もなしんですかなは法もえつへし

我とゝろ昨日はいかにすきつらん古郷をみつゝ山ちに又やねん夕暮おしく鐘ひょくとゑタ暮れしく鐘ひょくとゑ

かへらすは雲やはかたみたひの空

又ゆふへとて戀しきや]

なかめしよ心のかよふ山の奥

わたし守ゆき」たえたる舟さして

下草第一八戀連歌上 いかさまにせん我身ともなし

かへれはちかく思ふやまこえ

待空を月に見ゆとも名やたゝん なひくとも人やは雲にさそはれん 初草にうちなひく色を待もうし 草葉にもまたみぬ色を我おもひ わか影をたれそと月にしのひきて さのみなと壁ひきいれて忍ふらん しのひわひ夕やみをたに待ものを とは」とはらふ庭草の露 いもせ山いれはまよはぬ人もなし 度の名をはあらすとしのふ世に ふすかとはかり夜こそ深ぬれ 春やなみたにまかせさるらん もれてはかすの文もうらめし たかしるへとてほたる飛らん われをとふとてふくあらしかは 日くらしのなかぬ夕もまつ物を いかなる道を戀といふもの あかてゆく身と何おもひけん 露き」しらぬ人のことの葉 いつより袖の露と成らん

わかれしとこそ身はおもひつれ

六

っれては、戦 はらへ七ふのさむしの露 (気既然) いもかりと駒にまかする夜はの道 うき身をみてはとはんともせ ぬきをける衣の人香をしたふ世に とひよるねやのおくふかきこゑ いたつらにかへさは今夜いかならん しられしのけしきよ誰を返すらん つれなき戸さしたれをまつらん 一夜たにまたれていつかとひつらん 涙なと人のためには落ぬらん いつくにゆきて身をかくすらん 戸ほそのなるもむねさはく也 くらきよりくらきにいらはいか」せん **空たきも衲にはふれし名もつらし** おも うらむとも数ならぬ身は問もせし いもかりゆくも物そかなしき よそには思ふかたもさためす ふあたりも行とまれか てといひかくいふはてもうし 一するやさせるねやの戸

草 第 بر かさねしもうき衣しへの秋風に

らすく成ゆくよこ雲の月

今こんといひていそくをたのまめや

ひきわかれ雲さへいそくしの」めに

人はといろそおろかなりける

やすらふ空はこまもしるんでの香を袖のわかれの名残にて

君になすらへ春もわすれ

あさきりの空をかことに又やねん やと つれはのこる秋の夜いまはのわかれこゝろともなし とふ夜とて道行ふりをしたはめや したふ夜はたかねまくらの秋の空 ねくたれかみのにほふまゆすみ おほつかなたかころろにてとひつらん 契かは君にかたよるわかといろ あかつきにならはおきんと夜はにねて かりねのやとりいかるあかさん 床をはなる」鳥の音そする のこるこそ猶あさかほは哀なれ 遠さかりぬる人はうらめ

道芝や月をもすその露もおし 別ちをムし明かたの朝ほらけ たえぬへくらかりし世をも忍きて らつろはて量のしるしはしはしまて かれゆかは悲しつらしもいついはん ふかくしもあらしとみつらなれ初て 石の火のまよいかにみえけん 今さらいかてわすれはてまし ちかひてはなとかわりゆくらん 思し事よすつる身のはて 打つけに思ふ心はつくされす といろのほとを文にのこさし ひきわかれつる夜こそ深けれ らき人からに月をこそみれ

おもかけはたしいにしへの月

遠からぬ夜はのとたえもらき秋に

わりなしやいはてうらむるこの夕 たのめし口哀もてかる」よひくに 露を一つねる月のあはれさ おもひをしらは人やとひこん

七百十三

とたふるを君はいかてかいさめまし

四

とゝろ□するにたのむゆふくれ

たちわかれてはしらぬゆく求 たちわかれてはしらぬゆく 水 かいのゆくに身をたのむとや人もみん 心のゆくに身をはまかせし 心のゆくに身をはまかせし おやしきことはたれにかたらん をよひなき夢をもみれは悪む身に 又あふまてとたのみこそせめ かくれぬ物そおもひなりける かくれぬ物そおもひなりける かくれぬ物そおもひなりける かくれぬ物そおもひなりける かくれぬりたおもとかたるらん 優む世にあばれもなとかなからまし人ばひとにもものおもふらむ

下草第七卷連歌下 忘るとてそれにならはんこともなし 作もせし□もせしといひすてム 世こそた」もにすむ山のおもひなれ 我中はなみたを年のわたりにて もにすまぬ我から何をうらむらん あさましや老もてきての的おもひ はかなくて物思ひ初し年もへぬ あた人をおもへは雲もなにならて なみたのゆふへはつ間もなけ ともにあはれむちきりとも故 身をこそしらめ人は憑まし ほとはへめともまちなよはりそ めにはみれともなひかぬそうき なを標準のねをのみそなく 戀しつらしとなにをうらみん 戀のはしめよさても身のはて たのめしはよし忘るとも秋の空 ことしの春も又くれにけり

みな人のしるも中へく契にて

いなつまのまもあはしとやせん

しのひかよひの道やたゆらん

なる神もさはりとそきく思ふ中

下帯のむすひもはてすたえやせん

ふたみちをわかぬはむねの思ひにて

とけなきよりちきるゆく末

こなたかなたのけふり立なり

第

とは、そ雪に跡もおしまんとは、そ雪に跡もおしまんとは、そ雪に跡もおしまん組はつる人の情をしるもうしおもひいてよのあたのことのはしたふをや猫あやにくにいとふらんしたふをや猫あやにくにいとふらん

ほともへす心のかきりみゆる世に けっめをくへきことのはもなし 消かへり雲のはたてに戀わひて

わするとすれは夕へにそなる

あらし世といひしも戀のはてならてなくさめや又玉のをならんかたれ月古里人やうらむらむ

うき中はねて心みん暮もなし

途ことにかへはせめての夕けふり かえてたにゆけかしいつち通らん かえてたにゆけかしいつち通らん

双とはれすは身をいかにせん 想はむなしき空さへそうき

零てもめくりあはすはいかゝせんたのむ夜をいつくの月に忘らんたのむ夜をいつくの月に忘らん神に人ひと夜めくりをならふなよ

つれなどとないらり、つかとりなどのようらみのはては又そ戀しき くれにゆるす我とよろ

空ゆく月におもひうかれし

物思ふ比は空さへあはれにて物思ふ比は空さへあはれにてあくるいたまをたのむひとりねに

草木にもあらぬことのはうつろいて花すゝきほのかにみつる末たえて

取くさめてた♪あはしとやする と る物かなし末のあきかせ

風まつ花に人なならひそ

七

かれぬまは露の末葉の浅芽生に うしやいもせのをちこちの山 よそにみはたれからき人忘は 遠山とりのおもひねはらし たか上のちきりかかたき夢になせ はかなしなたのむいく夜の夢の告 我身こす浪のむもれ木朽ねた」 は わすらる」身を秋風の空の雲 かけすてはくめの岩橋名もつらし とたえはさらにかつらきのは 逸みるといふ 斗なる名はたちて うきおもかけの月はかくれ ふくる夜もかくやあらんと永日に 後をおもふに身とそつらけれ 契し事を憑むはかなさ おもふからにそ補もしほる」 夜をこそたのむ契りなりけれ てはたム我のみしつむ思川 一言もなとかけさらんらきこゝろ あふくま川もなかれてそうき あはにむすふを契とやせし

雪よりも人の心にみちたえて 山水のわれてあはんもしらぬ世に 戀そちひろのふちにのそめる あしつ」のらすきへたてもらき中 あやにくの物うたかひをはるけはや ともすれはものうたかひの文もらし なからへん心ともみぬ世の中に たかためのなみたを我にこほすらん つれなきをみのくせならはかこためや つれなかりしそおもかけにたつ ΙÌ 忘られぬるにおもひきえはや するたのみつることろはかなさ なをうきふしを人やかさねん た」われのみに人もらからし まかれるこくろすてもはてはや 懸そめしよりむねそくるしき あすをもしらす何をまつらん ふかきもよそに心みえけり かなしや身をかへりみぬ物おもひ もふとしらはうきやなからん かにしてつらき心を忘れまし

戀しにて身をためしにもひかれは あわをならすはおもひたえはや あふ事にかへし身のやはおしからん わするへく引さへなりきてらき中に わすれねとふりにし人はかひもなし 命こそきゆとも世々の物おもひ 物おもふ命はきえぬくれもなし それもらし戀や命と成ねらん うたかひてこそと」ろをもみめ 懸しなはたゝ一きはのお 人のこくろよかくるものかは おもひかへさは夢にたにとへ はかなき道もあさくなるころ なかき世の人にほたしと成つへし たかまことをかことのはに見ん 又いかならん夢をかもみん もとのまよひはいつかつきせん いくたひかくは生かわらん せめてはいまのつらさともかな た人も口かためてははちつへし のるたのみに日をよくる比 もひにて ch.

卷

つらしとていはょうらみのはてもなし

念

君ゆへといひてはきえし夕けふりなき世まてさりともえやはにくからん

下草第八雜地歌上

表ののそみそさま ( にある が変の跡なき霜に春はきて

**順そゆくえやは花なきかたならん** おもひやらるゝ古里のはる

かくなるものか山かすむかけ

けふ毎にひとりくの跡をみて

はなの宮とのあとの松かせんにおもびをつけつらんえたおる花そしほれもてゆく

おくやますみのはるのあはれさのこるや木の葉山かせのこる

そことなき峰にはたやく火はみえて

山にわらんもしらぬゆくすゑれちるむめをたれかおるらむ

タす 4 み月にらかれぬ宿もなし はと 4 きすらはの復音を開捨て た 4 すむ門の犬なとかめそ

はるゝもいてぬさみたれの宿めにみえぬなにか涼しくむかふらん

五月雨すくるあとのしつけさりそうき雲のいつこにふけぬらん

**製消で月たちのほる山のはに** 

秋やまたま茗か露にかへるらん心こそなくとも月にゆめやみん

いとみたる一むらすゝき風みえてむしの音よはしたえんとやするはるはうらみしはつ鴈のこゑ

とゝろみえつゝなにゝやむらむたつらにゆふへ時雨るゝときは山

つれなからすは名をもゝらさし

色かえぬ尾上の松の一しくれ起したとしまみねのあはゆきあはれことしまみねのあはゆきあはれたとしまみねのあはゆきあけれたかた誰もうとからて

袖のためとやしくれきぬらんわかこゝろしる友のあはれさ

大かたになるれはあしき友もなし

なをるしつはた山の秋の雲

契られはなくに物うき鳥もなしわか染ぬかすみの袖は友ならて

おく山すみのかりの世の中

いつれの道を身にはたのまんはかなや夢はたいあらしのみ

行末をこゝろのうらにたのむなよひとりさとるもまことならめや

もろとしの文はこゝろもえかたきにいか、たつれんよそのはる秋

音よはしなかれやあさく成ねらんがした、巻をひらくをたよりにてかしてきはしるもろこしの人

なにのひとつをまなひともせん 風をつたへよ和歌のうら人

いつはりとおもひなからもみる文にかなふへきあらましやたゝ山ならんたのむゆくゑも世にはのこらしわきかたき道はむくさのみたれあひ

山かららやむ女のあはれさ

たのむもあさき心なりけり

内もとかけてはるかなるさと 内もとかけてはるかなるさと

かさなれるさかひもなしや天つ空なにたつ名はいつかきえまし

山の 野寺のかねのあさゆふのこゑ 北にさり南にさりて舟もなし 寺見えて嶺は木ふかきはつせ山 かなしくも新島守のかすそひて ゆくとしを新島守のたのみにて たれすみてふるき都になかむらむ 草葉さへふるき都のうらみに 日くるれはさひしきまっに宿出て 里はあれて夕しほちかき浦風 つすみて遠里小野に成ぬらん 名をきょきかぬ人もこそあれ うつれは夢のはる秋のそら そのおもかけはにたるたになし 草の花つむみちのかたはら 真萩かもとの人もかけせす きょえぬ 入江のむらそくれてさひしき く世の きりあるにそ身はのとりぬる まのたくもの いくつをふしにたとへん は何のむくひそ法の道 かけそふたもとの杉 かすかなるかけ

> 海をちかひの住よしの神 時をわる法の庭人うちちりて 聞えしと思ふ法をやかくすらん 法にたい道とてあらは絶やせん まよふ世にあふを佛のこゝろにて ひとつをいへはみつをこたふる いくたひ人を思ひきぬらん ふしとおもへはつらき味もなし 岩のうへをもたのむあはれさ ふしの老の坂とすみ 名もたか」れや此北の祭 山風きよく雲はのこらす 舟にのる人やおもひもなかるらん 鐘なりくる」ふる寺のみち たつぬる人もとをき古寺 めくるも夢のはる秋 ね

山風きよく雲はのこらす あふけ人みもすそ川の目の御影 名もたか」れや此北の楽 影消き雲井の星をまつる夜に 又ほと」きすまきれてそゆる 月はた」雲間斗の有明に 第八

花ならて入もなからし吉野山

月かすむ夜はのうへ人軽深て をふかき空にあくるこすの戸 みるやたれ月おほろなる雲の上 ねぬとてかほを引そいれたる 庭島の羽の下にもこゑはして 松杉を下葉に雪や晴ぬらん 夜からす鳴て月さゆるらう ねむれるうちもしつかならめや ねむれるうちもしつかならめや

さょかにの物はかなくも引系に さょかにの物はかなくも引系に するく山のゆふくれのくも

さし

おほふ竹の中こそ住らけれ

ともし火にあすの雨しる間深てかすむひかりそはやうつり行はにふのこやをたのむはかなさ

うき世はいてつ何をさそはんなきさのさくらむかしともかな

世をも花をもいつかへりみんわかる」をいまはと思ふ旅はらし鳥の音もゆふ暮ふかき花に来て

人は思へは世をもなけかす

うきもあはれも誤とそなる がせしの思ひのねさしいか斗 いやしからぬやおとろへもうき

野への庵我ゆきゝたに道もなし
いったらまこれた。

一坂ものほりくたるはくるしくてけふるたにみえぬ深山のをのゝ音いかなる里に人はすむらん

高砂や我さへ松の老の世にむかし思ふも友となりの草の庵 むかし思ふも友となりけり

ちかきとなりもらとき山さと

七百二十一

風をきくにも袖を露けき

ゆけはたム千里の道もかたからて 松すきの雲ゐるはかり高き野に は、木々はとをきふせやの跡古て 色かはる下葉はさらに松ならて まつなららみそかへるあたなみ かけ深き檜原に老の身を侘て 立よりてあはれ憑まん陰もなし みるにあやしきあまの橋たて 石間をせはみ魚そやすらふ みとりの山 つみえてかも名にはたつらん のかけのすゝしさ

> Ц 身にまことなくてはたれを想まし 世をわふる身はたし夜るをひるにして あかつき人のをくる柴の戸 かつのあさゆふなる」ひとつはし おもひし事のするもたかふな たれともなはんわたるはや川

下草第九雜連歌下 わかれし雲のかへるゆふくれ 日はゆふなみのをちの遠やま はる」夜の高根の朝日さしのほり それともわかすとをき山のは つらしとていつくにゆかん山の奥 おほ海やかすみに渡る舟の道 むかへは月のかけそかた ふく

敬の 施木のはの後も住あかて 覺あへぬ夢ちの末に雲引て 人すまぬ宿は水のみもる壁に 雪にさやけき四方のとを山 松ふくかせや木のもとの方 ては するやとりともない

ふむたひにあやらき谷の一はし 朽なからおもひわたるを橋なれや たえすらたかふ中はたえけり またたえせぬ難波津の跡 宮こより雲を横川の嶺にみて

ししらぬ軒はの雨のやすらひに

世をそむきにし跡のあはれさ

なくさむほとを契りとやせん

は、やきゝわたりても遠き世に澤行水のこゑのさひしさ

九

日は入ぬ月なと空にまたるらんたへねたゝ思ふにかなふ人もなしたへねたゝ思ふにかなふ人もなしわかためつらきはる秋のそらめくるむくひのありとこそきけいためつらきはる秋のそら

たさむるやと思ふも夢の内にして さむるやと思ふも夢の内にして さむるやと思ふも夢の内にして

夏をくらせは冬のやまさと

をろかにやむくひをしらて歎らん

打かすむ都の市の朝またき

ましあしははしめよりしる道ならて さかつきにこそこ 4 ろみたるれ なからふる身や世をは祈らん となからふる身や世をは祈らん

窓に雨きく老のかなしさともし火の消るを露の身に知てよしあしははしめよりしる道なら

老をのこすなはなもおしましらき世にはこゝろをとめぬ身そ安きあちきなし人にも老をみはてはやあるとしへて契る中のかなしさ

老そうき待ことありと人やみん我身世にふるほとのはかなさおもふにうとき老のかなしさ

身は老ぬ誰いとふをか恨ましことわりにのみ袖そぬれそふ

超なことかよる はかなしや老にみえしの我ことろ

身はかくしても又やとはれ

絶ねた」か」るおもひの身のゆくる

うつり行そなたはなにかとかならんたえぬへき心も老はつきはてゝをひかふるあたの玉の緒

さかりなる人も老やはとをからんのらきをつらき身に成てしれる!

生れくる身はなに事か安からて

筘

四

百

おもふ事とすれはか」る老か身に とに おもひいてるいはるむ かへる道なきを昔に忘れ來 みるそうきか」みは雪の朝ほらけ おもへ霜をくくろかみのはて らかれめのねやもいらす明□夜に (↑) (↑) さりとて老やつれなかるへき みれはた」かすみのうちの朝ほらけ そのこと」なくあはれなる空 夕の雲になをそ戀しき たかはるならし身には愚ます 都には雪とてつもる事もなし あたなりと我世はみつるかひもなし 日のひかりたに老ははつか 我世の中そたのむかたなき 心もいはすしのふくやしさ 身のゆくするよなに」さためん きか かくにふるもむかしは安かりき きりに \$6 いそなくさむ かしよ何ならん

たかしらん我むかしそと涙をち

昔たにきけはまれなる年のをに 遠つあすか むかしたにうき身のゆくゑいか斗 つらけれとむかしを知はなみたにて みたれおさまりうつる世の中 しつめはらかむたのみたになし あるはみなしつみらかへる世の中 くもるなようらみやおやのかけならん みとり子のなにといろなく打ゑみて 立浪 思ひのみかさなりてなとうかるらん すきにし事そまのあたりなる をろかなれはそ道もをしへぬ あはれもよほすあかつきの 解のいのちのか」るあはれさ 鎖はわか昨日をかへす軽もうし おもひしらる」するのふたみち おもひつ」けぬことわさもなし わるを見てもたのむはかなさ ふ事たれにか親の後からむ たるをみれは友とこそなれ やしつけき色を残すらん のいに しへ の夢 ic

九

世中よたれむつましき人ならん

とたりての世やよしあしをわかさらん 我こそうけれおもひたつみち のかれてもしのふかた ( おほき世に うき事つくす人の行末 世中は夢の千種のあたし野に

たゝまほろしを契なる人世をいとふ道やはたえんいてゝみよればやはたえんいてゝみよればやの心はひとつ世の中に

らき世いとふね覺をあすや忘まし

人のつらさのほとそおとろく

とはすかたりに世をわふる人 待ともとはん友はおほえす たれもみなひとり!への愛世にて たれもみなるとはん友はおほえす

なれぬをたのむ旅のあはれさいつくとて露の身ひとつつらからんいつくとて露の身ひとつつらからんなけくなよたれもさこそはらき身なれなけくなよたれもさこそはらき身なれ

世はまほろしのゆくすゑの空世はまほろしのゆくすゑの空

あつき目をくるしむ道のやすらひにとらのふす山より世やはつらからんしらぬといろはからくにの人

かりの世をは

しめなき世とうけ初て

**ちから車のうしや世の中** 

いつわりのみのあけ暮はうしたゝ世の中は風まつ舟のとのふねせの中はなみの上のふね

おり世の中になるのようとなる。まのあちきなくものおもぶにかなふ道ならて誰も世はおもふにかなふ道ならて誰もかに身をやはすてんまてしはしあさはかに身をやはすてんまてしはし

きかすかほなりいかにうらみん霞さへうき世の空のほたしにて春の山ちに日をやをくらん

七百二十五

卷 第 四

ほたしおほき世をつれなくも我出て らき事はあまのたくなはくり返し 捨はつる身のよしあしは誰いはん すてしわか身とおもふはかなさ みたるとも心なるへき世の中に こん世をはしらぬにもあらす迷ひ來て たつねしよ身をかくす人やつらからん とけむすらめやあらましの庵 おとろかはこん世の夢も覺つへし おほつかな心のぬしよ誰ならん つかにと思ふはかたきねかひかは すみ家ありとは見ゆるかよひち 哀にもかへぬ衣はしほりきぬ とゝろたにわか身にもしたか しるしらす君かあはれむ時をえて いつより人のかわりゆくらん おとろかすともかひやなからん 我をもさそへ山にゐる人 名にもた」しと忍ふられしさ みやと戀しきひるのあさり ねははるかにあけぬとそきく

なきかけのかたみはかゑし墨の袖 はかなやなきもあることちする らき身かひなきたらちねのあと あらましかはとうちなけくあと はてをたゝいへは身もなく人もなし たか玉かあはれこてふとなりぬらん 常ならぬ世にしもたれかにくからん 忘るなよなき跡ちきるけふの友 さきたつもかりの別のこゝちして たか ほとふれはかへらぬ旅を思わひ かたはかりた」いにしへの祭して かにせんむかしたにらき親の跡 心よりそむるはまれのすみの袖 夢かとそおもふさてもなになる 人に見えなは夢よことわれ かりにも人そと」ろあるへき たれをかとはんしらぬゆふくれ 藤衣ぬきてはなにゝかゝらまし かひもなき世を我にへよとや もひあまれは忘れてやまつ いさめに か世をものかれん

卷 第 おもひやる千世のふる道いつたえん

さまくの家をあらわす君か代に

あへるも風のたよりならすや

とをきかり庭もふみはまよはし

しろかみにならすは世をも待やせん

下 草 第 +

> 松山や君かよはひはとをき世に 我としなみそ末になりぬ

たつとしもみえぬや四方の朝霞 朝かすみきのふたちしや去年の春 みすもあらぬ遠山いくへらすかすみ 饅の發句の中に

衣をるかすみもしろし瀧のいと 高雄尾崎坊の所望に霞を

雪なから山もとかすむゆふへか たか筆の春の木末そ朝かすみ 水無瀬の御廟法樂に

73

残雪のこゝろを

うねかふふりにひと」なる人

名をとけて後や心のかはるらん

かくす身の心を君にひかるなよ

出すはしらし世の中のうさ

いてん道なき雪のやまさと

たれか千とせの松のことのは

うへてみぬ花に人とそあはれなれ

るたつらにせん身とや思ひし

低とおもひてはなとたのむらん

ありなしもみぬ世の人を懸わひて

かすむらしけさはきゆ人債の雪しろきかすみやすたれ債の雪 消やらて花の女まてみねの雪

Щ や春かすまぬ方の雪もなし 梅發句中に

雪に梅やみはあやなきにほび哉

下草第十發句 正月二日春立侍し年持是院法印坊にして

身もいつかつねならぬ風にさそわれん

とゝろのゆくはそふやそはすや

あらし世といひしを人におとろ心で

わかれてのちそおもひあわする

たなひく雲そ空にわかる」

わたるみさほもしらぬ顔やうき

七百二十七

卷 第

梅いつく袖はらつしのにほ た」のみか此とろの 風 に梅のはな ひ哉

山 崎に知人侍所にて

梅か香もありとや袖の夕月夜 おなしと」ろを

たほるなと袖にや匂ふ梅の花 宗聞とて朋友の侍るか草庵して沙汰ありし時の會

いひなして花の名ならぬにほひかな

にほへ梅身にこそよその春 おなし草庵會に 志賀のわたりにて侍 L

0

風

**春はまつ梅や花その志賀の前** 

一座に

道しはのあさ露はらふ柳かな 内國正覺寺の陣に して

骨柳のかつらき遠しあさかすみ 同 ところの會

夜るは月さそ住の江の夕かすみ 水かすみ春草にはふつ」み 住吉参籠の時春月を か 75

おなしこ」ろを

まひとへ月に色そふかすみかな 待花のこゝろを

たれを世のまつ人にせん春花

二月の半に俄に雪ふりし朝三富の豐前守の許にし

花やあらぬきのふは雪の山さくら 蕁花といふこ\A

花に入山くちしるき一木かな 右京兆の亭の毎年千句

夜るもみよ戸さしせぬ世の春 池田兵庫助宿に して の花

植しらへは庭や春てふ春のは 青蓮院殿坂本に おはしまし侍る時 75

花の水山とそ千しほ志賀の海 三河國より或人のほりて花の比旅宿の會に の御會に

春はた」花薗ならぬ 花の發句 の中に

山もなし

花を見は千世 あさ露は花にみたれて風 花にたて色わくほとの 鳥の音に花の宿とふやまちかな もへぬへき木かけ哉 あさかすみ もなし

+

卷

跡に人みるやとはなやちりぬらん 人 0 所に花の比やすらひて又旅たちし侍し時

人にかわりて

5 つかみぬ都は花の常世 草庵 の會に か

な

老木にもさかすや心はなもかな

花鳥をあらそへる世は風もなし

千葉中書の亭にて

とふへき人のもとにさはりありて後花の比まかり

らくひすの羽風はちらせ花さかり 花さかり跡も雲井の深山かな 花に月夜は春なれや朝ほ

いつれそとみれはたをらむ花もなし

らけ

おる人に鳥なく花

の山ち

かな

いとはすは花こそうらみ春の風 ちりちらすおくみえぬ花の心 うつろふかかすまぬ花の朝くもり カン

とくちるもまたれし花の ちらはちれさくら斗の花 うらむなと花の跡とふあらしかな 心哉 もかな

瀧なみに花も岩こすあらしかな 大内京兆瀧のもとに花の散をみて所望し侍時

ちらぬ野へさかぬ山

なきさくらかな

九重の外山

も花の雲井かな

能勢賴則許にて侍

し千句

K

花に我おもふいろそふ老木かな

花さかりちらさぬ

ほとの風もなし

花ににほひみとりにかすむ千里

丧

池田兵庫助許にて侍し

一座に

景瑞庵にして花の比侍會に

かねてみぬさはりもうれし花盛

たりし

暮春こゝろを

カン ゆく春も花さそふ風のやとりかな 道しらはひとりかへらん春もなし へれと□思なたちそ春かす み

新樹としろを

ちる花に木の下ふ」く鼠かな 花の發句中に

花を見はよしや芳野も都人 花やあらぬおもひかへせは世々の春 右京兆の亭の千句 K

七百二十九

池田民部永綱正宿所にしていつとみん花のわか葉のらす紅葉

精中笠岡といふ所にて卯花を 和の花のひまさきかこへかきつはた のがある。

卯の花に木の下はるく山路かな

書寫に上り侍し時卯の花の初に

特時島のといろを おり返か木はしけ山の下つよし

おもふをはおもはぬ世かはほとゝきすおもはぬをわかはそまたん郭公

山ふきをこゝろのいろかほとゝきす

薪生刑部大輔時島十の題にて千句し侍し時まつ人に心かへせよほと、きす

同千句に人にかわりてまたしはやれたる摩せよほと」きす

備中國にて庄春養のもとに罷侍しに晋高の山此所のみや時はたそかれほとゝきす

なるよしをきょて

ったかの山とや忍ふほと\きす をかはいつ月は在明のほと\きす

老の後會所々奉行承侍し時其會に

をとにきく山か木すゑのほとゝきすあらぬ名をかるや天ひこほとゝきす

樽取山や下葉のむらかしは

江州にて侍

し千句の十番めに

むかふひもさわれはみすのあふひむ

まのこうと見こまいろいうか

存を風つたへてにほふあふちかな 遊佐懶九郎□衞の舘にて同心。 露おちてあさ風にほふあふちかな

たち花の露にかほるや玉のえたたち花の露にかほるや玉のえた

五月まつ花をもよほす郭公

五月雨は山かさなりて雲もなし宮若狭守の城梁高き所にて侍し會に五月雨を

夏の發句中に

くゐな鳴月は明ゆくと山かなくゐななく梢は眞木の外山哉

今年生はみななよ竹の林かな

大内京兆つき山の館のさまを發句にすへきよし侍らふる田の雨になひくや秋の雲

し時

池はうみ木すゑは夏の深山かな

明し夜や月にくやしき夏の空夏の月こゝろを

おつるあさしほはやし夏のらみ和泉堺引揮寺にて同こよろを

婚川修理進太神宮法築千句に

おくや瀧雲に□しき谷のこゑ 朝倉貞景舘にておなしこゝろを はない。

た□里にまつ夕立そ天津雲 の要

夏山に秋の水せく岩ねかな見ぬ山のおもかけ凉し苔の庭納涼の發句中に

下露のつもるや泉庭のまつ庭に松植水おとしなとしたる所にて

夏發句中に

思あまり風や秋まつ获のこゑ風なから雪を袖なるあふきかな

山上にて小倉將監實澄山家にてはらへする水は心のちりもなし

製水を色に秋たつ深山かな

一秋の初つかた侍し會に 秋の初つかた侍し會に

ちるかけをみすは柳や春の風秋はたゝ松や下風おきの聲

人の雨請し侍しころ

七夕こゝろを

百八十六 下草第十

卷第四

ほしあひや名のみ七日の一夜つま 棍をとに草の露とるあしたかな 波とさは契やいく世天の JII

天川昨日もとをきわたりか 題しらす 75

おなし後朝に

秋風のふかぬやにほび萩の露 荻すゝきみたれていはん秋もなし

根やひとつ岩もとすゝきさゝれ获 さ夜風もけさや在明荻のこゑ 越前國岩本の道場にして

小笠原宗元旅宿にて槿を

露をみはたくあさかほのまかき設 **草** 能の會にかるかや を

風をいきて順のこゑまで萩の露 おきてみん夜るや 題しらす **⊅**≥ 3 かや露のやと

殘侍を草庵にらつしをき侍しに花の比其國の人き 西行法師宮城野の萩を慈鎭和尚に奉し其種 て會侍しに いまに

露けさや宿も宮城野萩かはな

荻にまつほのめく 村山利重旅宿にして 順の 羽風かな

日やよはき花らすくもる野への露 秋發句中に

らすくこき野は花そめの衣 かな

上杉相州の亭□月次に人にかわりて

あすもこん比は花野の小鷹か 志賀わたりにて侍し會に

波にさけ花そのとをき秋の海

天王寺住侶ゐさなひて景おもしろき所にて侍し其

難波津の秋にことは 野分のところを の海もかな

納にこそちきる花おる野分か むら雲にふくや野分の 初尾 花

霧さむき庭は野分のあした哉

みしやこれ今夜やあらぬ 秋 の月

八月十五夜平新左衛門尉宿所の會に

名そたかき月や桂をおりつらん 定家卿の墓所にて名月の夜善都聞の催され侍し會

卷

らへたて」みるや仙人庭のきく

+

あけはまたいつかは今夜秋 住吉社に詣て月をみて 0 月

あさほらけ月にわかる われみてもいく久かたの秋 越中放生津にて おなし月を 7 U の月 かり哉

月やふねあしそよく江 遊佐加賀守舘にて千句侍しに の秋 0 水

もる月に あくるや闘のとなみ山

山 みねはれて川きりしろき朝 鹿の音を山なるきりのあ みれは霧に秋たつ朝戸かな したか 目かな 72

露 de いつ空をらかふる秋のらみ 心敬僧都の旅宿にて

す」きちり松に霜ふる岩根かな 秋の發句中に

染そめす草木やをのか秋のい 木葉さへ都は柳さくらかな 九月の初に或人の許にて菊を ろ

淵せなくあすも猶みよ庭の菊 家へにくむや菊さく谷の水 長月九日の會に なしこゝろを

秋のいろを松にあらそへ夕しく 松の色も秋にはあへぬ下葉かな みちせはいつれ深山 の木 4 0 露 れ

秋發句中に

山姬 かつそめて時雨にみえよ木々の しくるともいま一たひそうす紅葉 の手染にかわれはつ時

染川はしくれし山のしつくかな つくしへ下侍 し秋

露にみよ青葉の山そ初 そめて又しくれやあらふらす紅葉 武田光錄小濱にて千句し 南昌院にて和漢の發句に しく 時

風はおきしくれはまきの板や 攝州中島にて侍し千句 10 カン 72

野山より夕やちしほ秋の

V

3

かつちらせもみちはみねの朝あらし

七百三十三

郭 +

あま衣霜に順なくあし邊か へる秋身はいつは おなしこ」ろを 設前に久しく侍し比秋の暮に た 0 Щ らかかな

カコ

風にたちし秋は木葉に暮にけり 初冬の比本能寺にて

秋そめぬ山もあかきやはつしくれ

秋を」きて開やはつ霜庭の菊 残弱こゝろを

木枯をよそけに菊の匂ひか 松梅院にておなしといろを な

冬の發句中に鹽川豐前守許にて

木々は木する松は下葉の時 散音も染かねし雨からすもみち 村田肥前守旅宿にて 丽 哉

ちりそむる木葉か雨かひとしくれ 吾妻に侍し比落葉の心を なしこゝろを

ちれはきぬ袖 もあらしの木葉哉

雨の染しししもなき朽葉かな おなしこゝろを

> 夜るの雨をけさふりかくす木葉かな ちらすなよ風や染し 湯山にて有馬羽州宿坊にして したもみち

木葉くち水草きよき川邊哉 伊丹兵庫助宿所の會に 風やちる庭は木葉の音もなし

冬の發句中に

木枯にとへは葉守の神もなし 草施にて千句し侍 し時

われもとてちるか葉守の神無月

月に いま待ともえやはひとしくれ 人の月待し侍しとき

今朝もふれみやこは月の北しくれ 浦上美作守俄に所望侍し發句に

[i] 心を

のほる水ありてやこほる空の月 あさほらけ時雨にめ 本能寺間光院にて侍 くる月もか L 座に

室の八島の松を見侍

霜きえて松のはけふる朝日 若狭守正種秋といふ字を入て予に發句をさせて千 ÿ> 75 くれ

まきのやの玉水さむし雪のこゑ 風やなき竹にまちとるけさの雪 池田若狭守宿所にて侍し會に

はつ雪も秋をはけたぬもみちかな

句すへきよしの夢を見けるよし申侍し其會に

湯山にて侍し會にこほりを

水しろき庭はみそれの名残かな

題しらす

月なからうす雪くもるあしたかな 月をけさみはてぬ雪のひかりかな

住吉法樂會□雪を

□に□れ鹽 和泉堺にておなしこゝろを 一の浅かかた

雪なからいつれの山そおきつ波

細川典配千句し給ひしときおなし**こ**くろを

ふもとまて塵なき雲の高根かな 早梅發句中に

雪にのみさかせてやみん梅 またてみよ梅ならぬなにか花の茶 の花

梅さけは年もこすゑになりにけり 杉原宗伊身まかりて後年の暮に小笠原宗元名號連

歌し作し時

なれ□世は夢に暮ゆく今年哉 [右下草舊本関今以岡書寮本補之]

百 八 + 六 下 草 第 +

卷 第

第

## 群書類從卷第四百八十七

續

## **園塵第一** 連歌部十七

吳竹 松しまの松よりかすむ朝ほらけ 春かすみ袖ふる山にたなひきて かけひ 石 つの の一よあくれは打かすみ 連歌 のうへに ふりやたえん願かまの 王の春やみやとにいそくらん は夜はの空よりそたつ のすゑに春はきにけ 衣の残りきぬらん や春か へるらん 前 ij

末かすむ千里の濱の

春はけかり

0

の強のおきつ浪

他にはみなきえぬる物をふしの思

長閑なる春の中はの又さえて

吹こそのこれ花の一もと

たなひくを又たちとむるあき間はなれ小鳥の花のしら雲山の端をひたす霞は海に似てのこすさへ花にあらしの恨にて木すゑにさむき春のしら雪すゝふくかせのをとはいつまてよし野山雪のふる郷春さへて古きふすまそ打もをかれぬ雪をふく白山風は春ならて響をふく白山風は春ならて

塵 第

宇治川や汀の氷らちとけて 松ふくも一木の風はのとかにて 長閑なるさよのあらしの明ほのに 又ほといきすつれなきもうし あとはむかしのみやのおもかけ となりもみえすなをかすむ比 もひもかけぬ 春 0 しら雪

らくひすの摩より月の色きえて 霞より谷のらくひす聲もれて 梅にほひくるあけほの」空

らくひすのあたら春のよなきもせて かすかなる住居なからもとし越て

道のへに色よくさける梅の花 ゆき」の人のめをやはつらん とのさとまても春はきにけり

籠のうちになく驚のこゑ らくひすのまたる」雪の山さとに しれぬ柴のまかきも梅さきて 花にねにけることろかなしさ むもれ木となれは春さへ花さかて 雪にほのめく朝あけの空

> 若草山にはるさめそふる 手すさみに種まきすてし春の草 かきねのむめに真紫つむ山 春日野の雪はむらくさえ初 おひぬるをみておとろかれぬる

雨かすむ苔のみとりに鳥なきて 真砂よりこまかに存の雨ふりて にほふさくらの残る木のもと 人もをとせぬぼそかすめる

き」すなく荻のやけ原雨おちて ねぬ壁しけき門のよそほひ くる」かすみはらす」みの色

鷺のゐる柳か末はふく風に

柳におつるはるのあさつゆ あさまたき様さく宿に人特て 糸よりも憑むはよはき心にて

門をしひらく青柳のかけ さやかなる月のふもとのタかすみ さくらににほふ初のおひかせ のほるもくるしみねの一むら

から衣日も夕月夜らちかすみ

谷

第

[19]

百

住 山 節るへきものかは花にあまつかり たか夢のかへるに順のつれぬらん 月ひとりかすみつはれつ更るよに さかりよりとへみよし野のは 間そなくわれもみやこにかへらはや わひし草のいほりに花さきて らひ生る野に先くらす櫻かり よろつとたることろなりけり 10 とりのおのへのさくらまちわひぬ こゝろなかくもたのめゆくする といろになにと身をまかすらん のとかにすめるやとの 8 はぬ りしを花もさそうらむらん に送る」あ 0) くたひなと秋にあ つなく前 れせすみるへきものそ山さくら ひまのあけほのしそら ひたつ道に おりにや花はちらまし 夜 はれをもと の月のかけ更て 幾日をよくらまし ふらん 6. け水 ts

もひかへせはまつ人もなし

色 花の香に登ぬる夢はおしからて 花にのみなとするの世のなか」らん 衰とは花もしるへきあめにきて 花もしれたかためいらんよし野 HD カン 跡さきもかすむ廣野の花にきて さきにけり櫻の宮のさくらはな さくら一木にとまるはかなさ 野 きてみ かならすつらき名をはおもは なをおもひますくれとこそなれ ふかきかすみのおくやはないらん つはさやすむるとりの一つれ 化に鎖の長閑なるとゑ 名をあらはすは折にこそあへ つかにてみるとそ花のといろなれ へるへき花の山 かくしあらはすをしへもそある なれ カコ ふ人もなくかすみ への違いくもと」なく分くらし しの 12 んあらしの山 ま」の梅か」そする くにゝまよふあはれ のは月いて」 ねるやま のさくら花

奥第

さくら花おられし宿は春もなし

あひみるうちもこゝろくるしさ

くやしくことろ人にとけけり

花はたか老のかさしになりぬらん 山さとのはなは夕に色きえて をの」えも朽木のさくらあかすみて 何かそのうてなは春のはないらん たをらはやわれもしつえのさくら花 歸るさの花に夕日をおりそへて 唉はなのいろやいり日をかへすらん あま人のからぬは花のみるめにて いろくの花に玉つさ引むすひ かくすともやは身のかくるへき 夕のゝちのおもかけのやま ふるさとしらぬはるの山みち 後の世まてをちきるはかなさ ほとにしたかふのそみこそあれ 鐘なるとろにとふ人そうし たれにかとはんいその山とえ 行かへるさのしけきみやこち か身にかけのつれてこそ行け

川なみいつらはなのしら等 茶さくもた」あさかほの花なれ 露たにものこれる枝に花落て ちりにしはなのかいるあさちふ 草むらに木末わかれし花吹て はなにきく朝のあらしよるの雨 ふるさとの庭 おれは花らつろひやすくなる物 あをはなる花に檜皮の軒みえて 青葉にももしやのこれる春の花 さかりなる花はらつろふはしめにて とはりしらぬ人のはかなさ 苔の鳥居やすきのむら立 さ」かにのいと引みたす故郷に 野はらをゆけは雪そ打ちる らきはつくさん言のはもなし なひく柳のいとみたすそら 水のをときとえて深きよしの山 日かけ露けくかすむ木の本 深川にむかふはるのおもかけ はてしのちも猶そこひしき に花おち島 なきて co

第四

七百四十

花をふく風にとゝろはあらまほし かせふけはよもにちり行山さくら かっすともみえぬあらをた水澄て 待わひし花を世になき折にきて 人ならぬはなのきぬくとめかねて 夕まくれ春の山さと門さして わかなつむ野へに菫を又つみて らくひすもなきてや花にわかるらん 人をまつやとに花ちり春くれて さく花にかくれし軒は春くれて しける木すゑに露そ残れる とふそ質のなさけなりける いは」やものをかせのをとつれ かこつもなにのゆへとしられす 月も三月もうつりこそゆけ ある」住かにかへるあはれさ 今は花なきさともあらしな 舟をらかふるはるの木のもと かさしのはなをちらせぬはらし 今年もはるのすくるほとなさ つらかりけるは今のられしさ

つき島にやまふきにほひ藤吹てけふこのやとにやすらひやせんと」まらぬならいなりともおしめ春夏連歌
こころもいまやきよくなるらんと」のできてみなあたらしきころもかへきちゃうまてみなあたらしきころもかへきちゃうまてみなあたらしきころもかへきてもいつよりさみたれの空ってもいつよりさみたれしほと」もす

いにしへもかくやまたれしほとゝきす うち解てなかぬみやこのほとゝきす 待てこゝろをつくす川ふね たへてまちぬる道はつきせす たへてまちぬる道はつきせす ほとときすいく言葉にかゝるらん ほとときすいく言葉にかゝるらん

あふひ草あやめの水に色かれて

すいしきいろに水そをとする

卯月のあめのゝらの五月雨

塵第

みれはこすゑに舟そよりくる 吉川にみさりしいしのさし出て されにみさりしいしのさし出て

透芽生のかけにうつらの伏かとよ 五月雨の古川柳水こえて

竹の子やまつ土くれをうかつらん、みきりさひしくのこるたちはな

**蚊やりた**く草の戸ほそをおし明てすゝみに人のいつる道のへ

かやりたくそともにしつかまとゐして涼しきいろは何にあるらん

社会のでは、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、なるは、<

夏くさのかけにしられぬ花さきて とれみよとてやともす戀火。

さみたれにみはや月かけ日の光

野への草末葉ほのかにあらはれて

五月雨はゝれて養かに成ぬらんりをたゝ月みるよはのうらみにていくむら竹のしけり行やと

空にさやけきみな月のかけ五月雨はゝれて幾かに成ぬらん

空すさましき稻妻のかけ

夏はたゝ木のね岩ねにおきふしてをむきはかりのなつの太山ちとろもをやつす松の夕風とろもをやつす松の夕風

きょそへはやなはつ鴈の廃ぬるみ行かた山清水くみ捨て

卷

秋連歌

夕露の古都に秋たちて うかるへきをそとはりとしる

うきもたゝ心つからの秋のくれ 露に狩とゝろのとまる小萩はら

何ゆへに月は涙をたつぬらんきく人にふくおきのうは風

**鰯をつらぬるさゝかにのいと** 朝ほらけ雨こまかにて風もなし しけき草木の露の夕暮

うへしにあらぬ松むしのこゑ

暮いかならんきりのをくらの道たえて露けき小田のむら薄

前のそこなる書ですくなき朝露にぬれて色とき花すくき

いろかはりゆく野へのあき風色がはるのへに二葉の松みえて草のそこなる露そすくなき

たく一草のするの小松原

野分のあとの野へのあはれさらちつ」もつ」わたるかりかねのあさきり末晴て

おかくれてゆく秋の山水 朝ほらけ薄霧わたり日の出て 朝ほらけ薄霧わたり日の出て

| 一切霧にむかひのふもと鐘なりて| タ霧に助うち渡す一はし

をくれ先たつ隠の聲くかのえや浦島風に霧はれているとり老せぬいにしへの月

末の露もとあらの小萩うつろひて

とを山の端の秋のさひしさむかふ朝日にわたるかりかね

天津風おきこくふねの網引て

くるゝ野にをしかの聲を又きゝて、かへりかねたるあきのかり人たつ鴨に我もおとろく草かくれたっちましくくるゝさはのへ

ふるとはさらにかすむともなし

撃はたかはす秋のゆふくれ 野はらのすゑに月そかたふく りょうとの薄霧かくれ鹿なきて

秋かせの舟路のするや山ならん晩館をつけのゝ鹿の夢さめては鳥をつけのゝ鹿の夢さめて

松むしにするの聲をもふりそへてみたれあひたる露の草むらおもはぬうらのさをしかの聲

遠野にえらふ松むし籠にいれて命のうちにみやこならはや明むしの音もむら薄かせ吹て

かくれあらはれとをき山の端

太山ちや行するくらく月いてム霧にかけしく松の下水

たくひもなに波すみの江の月 たくひもなに波すみの江の月

篠田のもりの木のまもる月

むらさめかゝるやまのはの月むらさめかゝるやまのはの月

いくたひ苔のしたをとふらん 清瀧や月の川波岩こえて

おこなふはよるもしきひの薬をつみて水ゆけは巖をく」る月のかけ

草をたのめる松むしのこゑとふ人なれやゆふくれの月とふ人なれやゆふくれの月

月しろき真砂の庭の更るよにはる~~とおろすしとみに月更てはる~~とおろすしとみに月更て

月にたか秋のあふきをあけつらん

第

七百四十四

亄 塵

さやかなる月の たつれと恨も今はのこらぬに しるものははつ鴈の摩 しら雪秋ならて

雲こそ月をさやかにもなせ もへは露のやとりなりけり

霜にみる色すさましき野への月

きゆれはおもかけの月

入山をわれにをしへよ夜はの月

松の葉さはるありあけの月

月そつもりてありあけのかけ 夜の間にも淵瀬やかはるみなの川

朝日をまつや秋さむき宿 月のゝち窓をそのまゝをしひらき

秋さむみ浅茅かやとの夕ま暮 れてや露に人かへるらん

さひしやをちの山たもる際

天地も月のひかりはひとつにて 難面も又つれなきやうらむらん 秋にと」ろのさそはれやせん あまたの國のぬしに成へく ひみつる名残にしはしなくさみて

> 秋ふかき廣野のすゑにふしをみて 枕よりあとより秋の風ふきて 秋さむきさとのかた原水おちて あきのよのなからの山に鐘なりて 露としもとのせむるころもて きりにあけゆくしかのからさき 日もくれなるのうす雪のいろ

秋かせに衣かたしきひとりわて なかきよは又あかつきにまとろみて 身にしられけり木のはちる秋 ありつる夢のすゑをこそみれ をしかの壁をあはれとそきく

秋の風はすの枯葉にをと更て 露らちはらふをしの一こゑ 月すみわたる古郷の いいけ なかき夜と老のなけきしね覺して

古郷は池に浅茅のいろ付て

なきあとにかへりもやらぬ秋の暮

とてふはいつらたをるしらきく 波にほのめく月の夕かけ

露しろき門田のいなは風たちて

冬連歌

つくりみかくもあきの田の庵 かりのこすわさ田や霜になひくらん 打なひく稻はきのふのさなへにて を田もるしつや隙なかるらん 稻妻のてらすにあたの世をしりて 鹿の醛まつ山のしつけさ かてそ人のあきかせの音

雨にきるみのム中山色付て 住なれし山ともみえす秋のきて

うへをきし庭の秋草うらかれて

野へのすかたにふれる露霜

わくる野かみは秋風そふく

引拾ぬ草のいほりの露ふかし

もみちはの青かなかにましはりて 錦をかくるみねのもみちは 苔におちたる秋の山風 かせあらき川つらのさと

世はいととうちの渡りの秋更て しくれは松に露はたもとに まくらかる真葛か原に秋更て

> 色かへぬ竹のよのまに冬のきて 山さとはよそにふらぬを打しくれ きえてもなひく雲はららめし 雨のあめをはらふあさかせ

風ませにしくるゝ木陰笠さして 霜よの月をたれかみるらん ゆくや誰なる山てらのみ 5

木葉ふむ音更渡る道のへに ほろくと木葉うちちる山さとに 心ほそきは露のあきかせ

片山さとに木からしそふく 人もこぬ柴のたな橋うつもれて

かけろふのいはかき水はをとさえて 結ひすてたる水のたえく あるかなきかのみねのはつ雪

冬はまたあさかのぬまのあさ氷 雪ふみわくるをのし山もと

氷てやなを音なしの瀧の水 といろしらるい歌の一ふし

寒き江のあしの枯葉に風をみて ふりにしま」の文の一ふて

第

正さ」にまた朝霜の落やらて 風わたるつ」みの柳冬かれて 小松につ」く通ちのする や枯の野へのかや原むらくに を枯の野へのかや原むらくに をはのあらしそあけてしつまる まくしけ二見の月に浦さえて 二夜あひみしのちの夕くれ 冬はなと名のある月のなかるらん けふをかきりの春とこそなれ となから日の長閑なる折ありて

雪に今朝みわたす淺間ふしの嶽 かきくらし伊駒の山すふる雪に(H) みわたせはよもの高根に雪ふりて 千鳥なく

會我の川原に

川寒て ひとりなくあはちのせとの夕千島 雪の目はちかき真染をとりかねて 人なきかりはとりのなくこゑ たき」つみをき冬こもる人 おへるたき」につもるしら雪 しろたへの雪の山のは隠なきて か」みのうへになみたおちけり となりとなるも程とをき山 うちかとみつ」冬こもるやと ますけの枯葉夕かせそふく 鹿の壁こそかさなりにけれ 山さとや後の非まておもふらん 磯にゐるまにしほや引らん しられしの心を今や忘るらん 常よりもなをくるしきはかへさにて にてもなを身をそ侘ぬる

雪のあしたの木々のむらたち

山

はふりについくをちとちのさと

山きはにをのれくの家みえて

けさそみる風さむかりし夜はの雪

雪はけさかのとまたらにふり初て野山をしなみ夏はきにけり (冬乗)

ムく戸細をあけぬくやしさ

霜のふるかとおもふあけかた

人まつとしろつけもやらはや

また冬なからはるのくるころ 水鳥の高岩ほのうへにゐて 我としの数をいくつといひかねて まれにといろく冬のなる神

**稻妻のひかりのらちに年くれて** 

若草のはつかにみしをおもひにて 野は春なから袖の露けさ 戀連歌 おもへはつらき戀ちなりけ

おもひあまりほのく人にいひいて とゝろのおくをいつかしらせん しのはすは月のひかりをいとはめや

忍ふ身はつらつえつくもさはりにて か」るおもひそやすむ間もなき

高砂の松そてしほる秋風に しる人もかなふかきよの月

難さのかきりみぬ世にはてやせん

松むしにころのほとやしらるらん 岩ねにおふるまつとつけはや 名のるもかなしたそかれの空

> 待人のさはりしらる」文のきて 物おもかよはに門さすをともうし またみぬさきにむねさはくなり

とは」た」過にしつらさうち捨よ 命をはころろのなきもおもからん 又うらむへき中としもなし

わかれてふことなきかせそ新枕 こひよはる身をさすかとふくれ みぬ人をおもふこそ猶床しけれ あかつきおきにまたなれぬ比

あふよにくらき閨のともし火 くるかとおもふむねそくるしき

まれに逢夜はそむかへのなくもかな よそにきくわかれを今夜身にかけて おつるなみたをいかにまかへん けにあはれなり鳥のなく際

又ひかへぬるきぬくのそて 命あらはとはかりするを契るみに 契をく暮とはなきに立出て かれし人そやかて懸しき

むは玉のよもしろたへのきぬくに

七百四十七

第

たをやかにうへはみゆれとつれなくて つれなき中にこゝろよはるな 我いのちきえぬからちに問ひもこよ 我哀つれなき人にならは」や はつ秋と契し人に立らかれ さまくにいかなる名をかいひたてん わかれつるきは、心もそれならて かり初のとたえをなかき別にて わかれちに書をく文も名残にて とむるにとまる人ならはこそ た」人ゆへの」ちの世もうし 夢にも人のこひしさそます はては身の物思ふとやしられまし 有明の月をはてまてそみる 忘かたみになれる一ふて 打なかめつ」なかぬ日はなし かれちに駒のあしをと聞もうし こほりもうすきありあけの へたて、継し古郷のそら つのゆふへかまたもたのまん たちには似めこへろなりけり 月

立なからかへる夕はなくさまて 草木にはこほる」物をそての露 みたれたる夜はの黒かみ打かほり うらみしよ月のしるへき思ひかは 夢のうちにおほえすぬる」夜はの訓 とはをもかはさて覺る夜の夢 しはし先こへろみんとやかへすらん 袖にのみ涙の玉の枝をりて しほれたるたもとをよるはかたしきて 面かけは身にそふ物のなくさまて とくろのみ人にかよふはかひもなし 新玉つさはうちもをかれす ひとりなみたにむかふ夕暮 心のなきもあはれをやしる ふりにし人そみるはかりなる 猶戀しさそわぬにまされ みちいつちともみえぬ雪の日 わかいつはらぬ程をあはれめ あまの衣そまたかへもなき 人につらさをのとすあき風 よそのかへさに人やきぬらん 3

第

かたみかほなるよもきふの月 かけもとまらぬ 庭にむしなきて

人もをとせぬ夜をやあかさん

ふたりねし床はむかしの手枕に あひみつる去年を戀つゝ月にゐて たれにきけとか鐘ひしくらん

かたみとはむなしき空もなる物を かり初のえにしを末の契にて

おもかけとめよあけほの」雲

心よりねをさすものそおもひ草 あし分を舟ちきりにそうき 露もなみたもたれをうらみん

生田川幾度人をうらむらん とゝろに隙もなみのうき鳥

するかなる田子のうらみを身にかけて 迷ふと」ろはらつの山とえ

末の世や人のおもひもあさま山 雪にけふりのともしくそたつ

石川の水のたゆへき契りかは 帶こそかたみやとやたつねん とたえんかたもなみたおちけり

> 戀ちの上のあきの夕くれ 彦ほしもとしの渡りはたえぬ世に とにかくにおさへかたきは誤にて

人は今よもきか庭に秋更て なれし月さへらとくなるころ

我中はふしのしけ糸くり返し 夜ふくるまてにかたりこそすれ かたれはなかき夜も更にけり

とふ人はむなしき階の雨の音 人はこて登はかりの影もうし 鐘きくまてはたのむいつはり うつみ火きえて更るよの床

鳥かねになみたの衣かたしきて

らききの龜に似たるわか中 聞てのみなみたをおとす法の庭

やる文をひらかてなとかかへすらん のちの世のか」みにふたりむかはいや うきもつらきも中にこそあれ

とても戀ちをあらはしそせん

それならぬ文は手に取かひもなし とひしきかたのたよりこそあれ

百四十

むねにたく火は消ぬへき物ならてなみたはかなく雨とこそなれなみたはかなく雨とこそなれなみたはかなく雨とこそなれなみたはかなく雨とこそなれるとなったはかなく雨とこそなれる。

人はみな花に心のうつろひて

引かれてや身もあた人になりぬらん

我ならぬ人には人のうちとけてかたるをきけはおほき言のはかたるをきけはおほき言のはかたるをされなる空そ悲しき

たりぬへき事をしさのみ思ふなよとけやす意心はするもとをらめや

紀はつる中とてよそにうつらめやかたちもよしやこゝろなりけりかたちもよしやこゝろなりけりかたちもよしやこゝろなりけり

水のきよきをこゝろ共かな

さすかゆかりも戀し柴の戸かひなきは程につけたるよすかにてかひなきは程につけたるよすかにてわかるれはつかはぬをしを人もみよ

うき住る俄にとふにおとろきてさらはつてをもなとかきかせぬ

いつの夕かまたもあひみんなきあとゝはん日そちかくなる

雑連歌

みちのくの忍ふはかりは何かせん花うかひ紅葉なかる、龍田川 時のうつるや水にしるらん

難波江やあしふく小屋を立出てみれは夕日にうかふつり舟

鹽みては汀の松をおきにみてたゝ時の間にかはるうみつら

うへにかすめるまつの一もと

うみを見つ」もやすむ松の 鐘ひょくをちの家居のらす煙 鐘ひくくをちの山もと鹽みえて 又越る山 海にいり目のかけの」とけさ のかけちのくるしきに ね

浦とをくもしほのけふり打なひき なとまよからんあまのつりか おもひてもなきためし成けり こ」ろほそきは旅の夕暮

忘めやなにはの夕朝ほらけ

あかしかたあまのみすめる家人に もしほたれ俗にし浦に今住て 待人いつら月はいてけり

かり初にかよふもあまの舟さして

興中の小嶋にあまの家ありて 家ひとつつ」みゆるしまく いつるとみればかへるつり舟

鳴やせはき内にも里ありて 住世に水の哀をそしる

あしのやは戸ほそとつるも関からて なかめやらるゝ浦のとを山

> 谷あひのなかれに細き橋みえて 春秋さむしあら磯のやま 霜うちそよき篠そかれそふ 冬しらて立陰青き一

ふもとの雲にくる」あまひこ いつのちりつもりて山と成ぬらん 衣らつ音こそーふたつなれ かすむはかりのいにしへの跡

山路のあめ 山かけは人も音せすがにて あと先に笠のはならへ行つれて に杣木引入

さやかなる尾上の松の夕日影 尾上の相木雲や引らむ 入はす」しき山もとのさと

まつはらに行人かくれあらは あかれるちりに空そくも 笠のはしけくみゆる海きは 礼 3

れて

月かけのおしきは馬のひつめにて

鐘をしるへの夕くれの道 くさのいほりはかきりしられす かる鎌の音して深き野に

七百五十一

第

をの雨はる」ときけは又ふりて 水うちけふり雲は晴けり 水うちけふり雲は晴けり よへとこたへぬをちの川舟 かせのをと波の摩にやまかふらん がせのをと波の摩にやまかふらん

**野かひにとやせたる駒を引出てなくさめくさも便ならすや** 

籠のうちのとりの出へき道とめて

京にも釣のいとまに木をこりて うらかれのすか養一身にかけて うらかれのすか養一身にかけて なの入江に小舟さす人

梯を直柴こりつむ際にみて

とりし

みちのとをき谷川

世にあはれなる契りなりけりとりためぬ爪木の山に又いてゝとりためぬ爪木の山に又いてゝとりためぬ爪木の山に又いてゝとりためぬ爪木の山に又いてゝとりためぬ爪木の山に又いてゝ

夕まくれ渡りかねたる一はし 薪とりはたやくしつか草の庵

めくるひかりそとをくかすめるを車のわたちの草葉打しほれをすかにかれぬ二道のすゑ

しほ

ひのとかに鷺の飛

くれ

江をとをみ雪をすかたの春

の山

あ

はれにみゆるさまくのわさ

かりにこそむかしもくたれ天津人心とめつゝすましよの中心とめつゝすましよの中

世をうち山のたかきことのは数あまたみえぬ庵りの古残り

是もまた法のほかゝは大和歌をおらふにはふりぬる歌もあらはれてをかったるをけるかられてはふりぬる歌もあらはれて

はらにきていかなる玉のやとるらん

くたるそとをきあまの羽

人のをしへそちからとはなる 人のをしへそちからとはなる 小ときなくおもひみたれ暮うち侘て 世にはこゝろをいかゝとめまし うつし繪にかたちかはらぬ人をみて こゝろのなきそこゝろありける のむさけの酔のまくらに目は覺て 花もいろにやいてん岩かね 花もいろにやいてん岩かね

> けぶりともしきをちかたのさと こてふに似たる身をそなくさむ 古郷はさらに野はらの花にねて 状の葉にきけは雲吹秋の風 かやまに似たるつゆのふるさと むらく、みゆる住ゐさひしも とゝまるや古きみやこをしたふらん

古宮のせんさいみたれ人もなし住こそはてめふるみやのうちせんさいみたれ人もなしむかしをは吹もかへさぬ秋風に

たちいて 3 うちなかむれは雲霞 性宿もさひたるしやうを明やらて たかへてた 3 く門のかへるさ たかへてた 3 く門のかへるさ か 4 に かやとはるかにすめるおく山

八十七 園塵第

卷第四百

哀にもいやしき里に住馴て

とりの摩しる人のかしとさ

しる人おほき市のかへるさ

むら雨をとをすやまかけ

まれ 我ありとたれもおもはぬ山のおく 山かけのさとは庭さへ廣からて ひとり門さすやまかけの施 ふたりともすまぬ庵りのおきふしに あしのやの軒はの山に瀧落 やま水の軒のかけひにつたひきて 山さとはむくらからたち枝しけみ ٤ \$6 なれにし人をおもふ秋の夜 ほしやわふらんしつか青柴 あまは際なく波になれけり かなくもを篠を ほそくなりゆく ろきしはをもはこひかねけり のふる門はた」かれもせす もたえたる値をやとりにて ほつかなきは老のたらちね にきく話もつらきおく山に はれしの夕の 人安きわ つる戸ほそに袖をこそとれ か身なりけ 雨 月かけはらし 軒 に我出 にかりふきて

ふけふ山さと住の世すて人

露をも世をもはらふ草の戸 ゆふくれふかきみねいまつか 山ふかく住とてこゝろゆるすなよ 谷としにゆく人かたる嶺の庵 人のたき」をたのむかくれ家 人の中にもむすへかくれ はては友なるやまのまつ風 おりくのなくさみおほき山 窓のしたゆく谷川の水 住そむるといろ悲しき柴の応 らたてわか心みしかくららみきて とりもせて又夕暮を待やせん 朽はては何かみやとの我ならん とふ人のなとり悲しき山里に うき世のかせのいつかさそはん こすともよしやしはしとゝまれ さてらき事はいく彼のみそ やまかつのまへ渡りする柴の庵 たちよるかたもやま下の道 このまゝならはさていかゝせん にしへのおもひなそへそきりくす 47 の奥

卷第

太山ちや名もしらぬ木の陰分て

嶺にまきれす松はたちけり

をしへし山にふみ通ふくれ

やとるへき野中の門にさし入て

行人をやかてそ戀る旅の道

そてにそはらふ山のしら雪

行杣のおもかけとをく野は枯て

雨よりも岩の雫に抽ぬれて はけしくて面をむけぬ山風に かへりみるあとの山端月入ぬ 宮こもつれていつるおもかけ やかてあらしのをとそきこゆる やかてあらしのをとそきこゆる かへるなみにもたのむわかれち めくりあはしとおもひこそすれ めくりあはしとおもひこそすれ とそくたひたつ人に抽ぬれて 人はかへらす古郷のそら

草のまくらにこふるふるさと 名のみしてかひなき物そ都鳥 かくてしも明されけるよ草まくら 草まくら夕の露に風たちて 旅れのやまのあきの初風 とひしやみやことりもなかなん 飛鳥のうらやましきは旅の空 山へを越はてぬれはくる」日に とりたにも宿ある物を旅の暮 里もありけり村も有けり 夢のなこりになみた落つく ほりえこくを舟静にさよ更て おもふとかなふも夢の内なれや 怒しさのみのまさるふるさと 古郷を草葉の露や荒らん わかかたをとふ人になさは かりそめにゆく道もはるけし おもふもくるし冬の川こえ むかふもかなし雲かへるやま 野となるよりや鳥もねぬなり

送しやそのまゝ旅に出ぬらん

草葉の露の自妙の色

卷 第 四 百

秋は あくる夜をまつちの山のかり枕 明る夜を草のまくらの命にて すみた河原に鳥もむつまし かすむする野のとりの一聲 はやする野にむすふ草まくら

夢にさはらぬはるのうらなみ

打賃む難波の里にかりねして

行もゆかれぬ道そかなしき

わか かりまくらたのむいほりはもる雨に いほ一たのむたひ」と かにせんやるかたもなき秋の暮

雲引月に旅ねする山 なかる」水の音のさむけさ さはりなき道をはよるも猶行て

そことなく聴月に宿いて」 8 かけむかふよと雲の空

有明にそゝろさむくも宿出 は るくゆけは野 へそしつけき

足をいたむやとりをけふは出もせて やと出るあしたは駒の足はやみ とをくきにけるとのくやしさ

> 秋かせやとをきみやこをはこふらん 秋の日のかたふく末の野を分て すくなるみちをたれもつたへよ ゆめの跡とふ手まくらの月 ~ 1 みすれは山 0 は の月

しら川を霞の關に先越て をくるしはしらしな谷の一はし 分ゆくするのとをき武蔵野

はるかなるみやこに安くかへらめ 松しまをみやとのつとにさそはゝや らつ」にまさる夢もこそあれ もへとつれぬ別ちはらし de

東路の秋に宮こを戀铭て 杣にさて幾瀬の波をかけつらん 月のつたふるなみたともかな

とをかたより耐あふくなり(\*\*脱戦) 海まてきぬるよとの川ふね かせにけふりのすくならぬいろ

みてるかくるならひとそきく松たてるはまの鳥ゐを舟にみて

七百五十六

塵第

身を拾にしもいてつかへけり

ゆかりやたひをいひ出すらんけふは又みやこわかれし其目にてたひのおもひを忘れこそすれたひらくより物あはれなる文をみてなしときゝしそなからへにけるなしときゝしそなからへにけるなしときゝしそなからへにけるなしときゝしそなからへにけるなしときゝしそなからへにけるなしときゝしそなからへにけるないとである。

いとなみにさはく家とへ夜にていたなみにさは小なしわか忍ふ草はかなしわか忍ふ草はかなくも又かへりみる露の宿はかなくも又かへりみる露の宿

あかつきちかくね覺するころいとなみにさは(家 ( ) 家にてなく!、いつる世そ哀なるなく、家にてなく!、いつる世そ哀なる

はかなしや猫いにしへをしのふ人 、身もいつかはとおもふ行すゑ めくみある人をうらやむ君かよに なをさりの君か言を打憑み かすならねともつかへぬる人 おもふほとにはさすかいはれす 君をさへいさむるは世のならひにて 日を重年をふるとも忘めや 別のいきめし言の葉のすゑ

つらかりし人も戀しく潮ぬれて れさくころは山さともなし 花さくころは山さともなし 老のなみたは人もとかめす すみ染になせやこの世はかり衣 最楽の袖もかなしき夕間暮 さまかへなんとおもひたつころ きくもかなしき曉の鐘 なみた忘るゝ苔の衣手

塵

七百五十八

拾る身の人にあはしも迷にて 世中にたれを憑みて送るらん 事しけき世には住へき物ならて おしまれぬ身は拾かぬる世中に 拾しよりなけかし 中人に苔のころもは寒からて 迷ひぬる身を捨衣うらやま 立かへり在にまかする世捨人 罪あるをおもふとゝろに身を捨て すつる身にみやこの心らかふなよ 露ひんと何おもひけん苔ころも 拾る身にさへ子をそおもへる すつるもうき身さていか」せん 住かへはやとおもふかくれ家 凉しき色は苔にこそあれ なをもこしろをのとす古郷 なれつ」すめる山の松風 といろに夢やいふれはつらん おきのこしまに葬くる人 おもひやるには山そすみうき み山のさとはなを秋の暮 物と 杉 もふよに

> ひとり捨るはあちきなの身やな人の子をおもふこそ哀なれ また一とゆるとしこそ哀なれ とけの衣にかくる玉のを いときなき古郷人の年長て はやあけかたになれる冬のよ つれなしと人やみるらん我姿 みし筆ならぬ便とそあれ とくろなきもや法を知らん

里の子の重あけたるさしれいし たらちねのあとは家さへかたみにて さまをかへんはさすか成けり

おとるいの内白のみあはれにて 物本 後先いまはわすれはてけり わかるれは面影こそは形みなれ

親よりのちに憑むはらから 水のあは草の上なる露をみて ゆかりなき身はから崎の松に」て 袖にそかへるしかのうら波 か身にしれる法のとのは

おもへは山はこくろありけり

塵 第

はそのみちにやおもふ後の世 とそのみちにやおもふ後の世にて でいなる身に又やむまれん とろかなる身に又やむまれん しらさりし世もしらるゝはこの世にて でいるながなる身に又やむまれん しらさりし世もしらるゝはこの世にて

人はた」との世はかりの物なれや

のちの世を今はの時にをとろきて

昨日けふこそおもひ初ぬれ

けふりとなして跡をやはみる

さのみかく歎もいかゝこけの下忍ふとも命のうちは遙かたしをくれし人をのちの世やみんをの水に身をやしつめむ。

のも人のためそおしかる はなくは誰かはとはん草の跡 まをのみ玉のかさしの草の原 はないないないならん

箱崎の松かせさそな八幡山 ちきりこめをく神そひとしき

野中をゆけは鐘もきこえす 野中をゆけは鐘もきこえす 最たかみ岩の隙より寺みえて

さよふかく花皿するく音はしてったの人の道となる者もよりで流なき野寺に草のはをつみてったからのはの語

世はこのころそ道まとふなる もり入雨を軒をかこりと成ぬらん 中のまへなる馬牛の摩 門のまへなる馬牛の摩

七百五十九

第 四 百

佛もとゝろ世につくすらし 罪をもき人は佛も道ひかて また出す ひとつ子をさへはく」みそえぬ うくつらき人をもおもひ捨るせて

里とをく佛となふる夜はふかし 又出にけり薪とる人

寺かとみえてともす火のかけ

とく人のとはに法の花ふりて いく度か御法の庭をめくるらん その二月の

たらちねのいとき無より放きて

法の師にそふ人のかしこさ となたかなたにかすむ山寺

新れるや君のよはひと**成**ぬらん かたいとの逢かたきこそ御法なれ おとなひ人そ年をかさぬる

との図は人の図よりおさまりて 神のちかひそけにあらたなる つはりになさしとのみや思ふらん

とふきしるく御代そ久しき

春はまた朝日いろこき霞か 石清水社にて正月七日 千句連歌侍しに初春の心を 72

若菜つむ野も雪ならし嶺の松 木戸三川前司家にて

雨に今朝霞も青む末野哉 東大寺正根法師の房にて

春さむみ雲や天きる朝**賃** 春日社に奉ける連歌に

常葉木の時雨は春の霞かな 祇園社中千句「霞を

冬なから深雪とけゆく山ち哉 おくふかくみゆるかすみの外山かな 理家法印の日吉社に奉る

藤原國重家にて

のこれるは色さへらすし春の雪 初春の發句に

待人に立枝やかすむ宿の梅 梅花二木にほしき色かかな 「重にもとめける梅の匂ひ哉

館

上杉の亭にて松と梅とを題にて侍る連歌に

あひにあひぬ五葉の松に八重の梅 か た田舎にて侍し會に

梅しろく竹の葉けふる末野哉

露むすふおもかけめく 一葉つく又もえ出る柳かな む柳か

75

相國寺藏集軒にて

みとりさへひとつ色かは春の草 比叡の東坂本にて

早川は汀にのこるとほり哉 文明八年畠山左金吾法築とて北野の社にて千句侍

しに春雨

春雨をしらする露の草木哉

春の心しらすは曇月夜かな

春月を

飛鳥非大納言家にて和歌會侍し きよし侍しかは花を待心を つねてに發句すへ

宿からや花待とをの春もなし またれしを理花の色からな 藤原貞秀蒲生の家にて

> 初花に又いそかるしさかりかな 公佐隆業ともなひて立田に罷て

おなし心を

咲いて」のとるやさそふ山さくら

咲けりといひあへぬ花の盛かな 北野社にて

**賃ふくあらしや花の朝きよめ** 太田備中入道千句連歌侍しに朝花を

春の發句

花さきて松原うすき山邊哉 宇治山のおくなる所にて

花さけはわかゆならぬ山もなし 兵庫助盛郷家に罷て

袂引にほひやと葉花の陰 花の下にて

雨に又花をやとさん陰もかな 花の發句に

国をあらみ花ふさおつる木陰かな ちらしつ」花をやつさん風もかな 鳥はまつちらぬ花ふむ木すゑかな 春をおしめさかりの花に風もなし

七百六十

第 四 百

ちりにしも花は又さくこの世かな 三月三日海邊旅宿にて 韵の連歌さたし侍しに 文明十四年の春前十住心院心敬僧都の墓所にて百

春をへし松のかさしや若みとり 引題はかすみをかきり春の海 圓明法印の房月次連歌に

さ」波にたつや若枝のふちの花 南都の訓英律師の房にて

志賀の浦にて藤を

さくらちる世やわかさかり藤花 三月はかり比叡の山にて

初はなに春くれか」る太山かな 武田大膳大夫入道家月次に

暮てゆく春はとはり花もなし 三川霊

ためしにはなさしよとまれ今日の客

せめて春へたて」かよへ花ころも 四月一日平顯忠長尾家にて 日吉社に奉ける連歌に

花のこる卯月は後の三月かな

卯花の雪けの水か庭のあめ 細川淡州亭の月次に 高倉黄門亭にて月次會に

うのはなの雪の雫や露のえた

おなし心を

うの花よいつみて雪をならふらん 卯花は山かけしらぬ月夜かな 唉そむるらつきや花の夕月夜

新樹を

木本にしける柳のする葉かな しける葉におくふかけなる一木かな あめならてぬる」いろなる若葉哉

郭公を

郭公一はなさけるはつ音かな

小野景類家にて

ちる花や摩におさめしほと」きす

夏の發句に

まれになく音もとはりそ郭公 またて世に聞へき摩の時島

名を冠に置て百韵の連歌沙汰しけるに 文明十九年四月十二日心敬僧都の十三廻に佛の御

古聲も人に初音そほと」きす 大舘刑部家にて千句に夏草

しけらぬはみちある宿の草葉哉 新田禮部家にてあやめ

軒のあめに又水こゆる菖蒲哉 橘賢仲許にて同心を 水に晴軒はにくもるあやめ哉

春秋の中川ふかき長雨かな 千句連歌に五月雨を題にて

同心を

さみたれの眞砂の庭のたまり水 雨もかく空にありけるさ月かな

五月雨と知をこゝろのはれ間かな 吉良常陸介北野社にて連歌沙汰し侍りけるに

あめあらくなりても晴ぬさ月かな 日吉社に奉ける

一夜にもしけるか雨の朝かしは

早苗を

**員あをく渡るさなへのする葉かな** 

夏の夜は月かけ更る朝かな 人にかはりて登を

夏のむしのひかりに秋の 藤原査直家にて

平助正家にて

しら雲に照そふ夏の日影かな

みてもまつ凉しき嶺の木陰かな

千句連歌に納凉を

水きよみ春秋冬のやとりかな 月次の連歌に获

露ふくかあらしの茲の朝し 获にかせやとれはやとる露もなし

同心を

狭の葉に朝霜なから風もかな おきにとひ松にこたふる鳥かな 江田宗辨法師もとにて萩を

あひおもふ色なる萩の錦かな 今年生は若むらさきの小萩かな 水谷禪林家にて

初秋の心を

七百六十三

八 + ť 園 廛 第

卷 第 四 百

第

卷 第 四

百

初秋は松むしの音の二葉哉

朝霧にむら雨ましる山ちかな 山の端も空行霧の朝かな

夕霧を槇のは山の干しほかな 専済律師の山上の坊にて

露やほす槙のは山 の朝日影

をそさくら花やくやしき初 秋の發句に 紅

明日の名に月もあらそふ光かな 八月十四日の會に

雲霧も月にかくる」今夜かな

-五夜

九のほしか今日みる菊の花 長享二年重陽日

菊さける庭はこかね 西方行者の住ける庵にて の眞砂かな

にほひくるきくや川上谷の水 藤原眞純家にて

菊の日にいつかと待し月夜かな 九月十三夜

> 名をそわくかつらや二木秋の月 千句に野月を

空よりや月に契しのへの 字治山のおく白川と云所にて 月

谷ふかみ月や夏の夜秋の空

平朝景家にて

月に吹あき風ほそき雲間かな

名そきえぬ露は風ふく草のかけ 元用大徳身能て後人々するめてとふらひし連歌に

秋の發句に

山姫の染ならふいろか薄紅葉

松にふる時雨や情き薄 ちらて今あらは一葉や初もみち 紅葉

秋の風くれなねく」る木間 春日の社にともり侍し時 かな

秋の色はいつくの雨そ三笠山 紅葉さへありける浦のとまやかな 海近きやとりにて紅葉を

秋 はまた木葉まかはぬ時雨 細川野州亭にて千句に かな

九月盡

好かし時雨打それき神さひ渡りたるに神つかさの好かし時雨打それき神さひ渡りたるに神つかさの

有間溫泉鎮守は三輪明神にてましますとなん率る うき雲の宮めくりする時雨かな

木からしや尋ね杉の下紅葉

冬の發句に

なかれせく落はや便うすとほり

和泉のさかひにて朝霜の草葉うこかす日影かな

空はれてふるは軒端のあられ哉玉あられ空さへ濱の真砂かな

備中守元重家にて

霜に菊又さかりなるまかき哉

**参草の菊さき出すまかきかな** 伊丹兵庫助家にて

泰湛法橋の東山なる坊にて

とほらめや山はあさ日のふもと川字治橋寺にて 、

名こそ秋ひかりは冬の月よかな

横瀬雅樂助干句に冬月

冬の發句に

種やかる冬草青き松の陰とあをしけに木枯の庭の草といれて色をおさむる冬野かな

□の葉にふらぬ雪みるあらし哉冬そとや先一しほの雪の松

金澤といふ浦にて

紅葉はに雪ちりましるみ山かなある山家にて

谷風に雪ふりのほる高ねかな 時雨かは山めくりする四方の雪 宗悅千句與行に

山家にて千句に

七百六十五

百八 十七 園塵第

卷第四

Lie. 第

ふりそむる雪さへふかき山 霜月廿三夜月を待とて 5 200 7.0

月をそし光待とれ嶺の雪 薄しとて月やかさなる庭の雲 雪の發句に

空に月雪もさやけきあしたかな 慈鎭和尚の御影のおはします小島といふ所にて永 玉法師するめ侍しに

雪はれて遠山さえる軒端かな 雪の發句に

ちりそなき雪や千郷の水鏡

武田安房守家にて

冬の日をふりつく雪の光 慈惠大師に泰る連歌 かな

Щ

たかみ雪も八重たつ雲あかな

摩ちかしつはさや雪の天津 残鴈と云題にて かり

花を冬さくむめのさかりかな 歳暮に寒梅を

行年もころやのとす梅のは ころとめてみれは梅さく冬野か 72

72

| 原電第一 | 春部 第一 | 春部 | 春の 後句に

Ш 花もみちこむるや木 本のかすみにならふ木すゑかな 正月五日北野の會所にて會はしめ侍 々の朝霞

しに

けふひらく梅は千年のかさしかな

有ところにての會に

雲にのみ春なしらせそむめの花 にほへ梅のちはあまたの春の花

雪をつむいろなる澤のね 若菜の發句に せり哉

若草に花もおもはし春の庭 赤澤兵庫助家にて

人にかはりて

**契竹に驚なひくまかきかな** 石清水法樂千句二月初卯

色消 獨吟連歌に しかすみもゆるせ夕月夜

月ならし霞のにほふ夜はの空 細川房州亭月次會に

おしまぬは花待春 花の發句に 0 日數かな

櫻さく春は色なき草木かな 吹まて花にはちきれ春 の雨

世に一木さかは都や花の陰 一花やふもとの塵の山さくら

朝とにすくなき花のつほみ哉 まかへた」雲も遠山さくらはな 山さくらうす紅のつほみかな

さくころや空にもあそふいとさくら 細川右京兆亭千句二月廿五 日

糸櫻有ける家にて

青柳にふかすはさむし春のかせ

ゐる鳥のしたりおそふる柳かな

獨吟連歌に

しろたへを花にまかせぬりかな 千句の發句に夕花といふ題にて

春寒みはなもおくあるみ山かな

横川にて

待おしむ牛や我世春のはな 千句連歌に花盛と云事を

> 花さかり落葉にかへる桁 落花を かな

うつろふか花に色つくあさ霞 花そちるか」らんとての色か」な 防州に清水と云山寺の花見に罷て

花に流この清水の山おろし

春風のふかすははなや雪の枝 人發句してをこすへきよし中侍しに遺す

大内左京兆亭にて

花をねにをしふる聲の春の鴈 月次會に

花にぬる鳥やこくろのあひやとり

法泉寺の花の本にて

下水は花もめつへき鏡かな 有所にて

散よりもおしきは花のさか かさしくる都ははなの山路 千代菊丸するめて連歌し待しに り哉 かな

2 やとには青葉花まつみ山かな おなしころ 森赤に比叡山にて

七百六十七

第

第

三月三日 こりこり

紅の雪のそのふのも<sub>1</sub>のはな

三月霊日雨のふりけるに 行春に花もなしとやをそ櫻 っ幾か有明のこせあさかすみ

人ならは雨とやいはん今日の春

付句

今朝よりの道は一のゆくゑにて清みかた咲ともいはす年こえてかすみをよする田子の浦波

山ちもかせの」とかなるころ

雪や今山のこしちもとけぬらん帯引すてゝかりそわかるゝ

瀧のいと春の氷のくり初て山の半にかすむ一すち

立こめし軒端のかすみ風ふきて

み渡せは冬のけしきの寒き野に ひとりのむらにさむき梅かゝ

**青やかに石間の小草崩初て** すゑよりぬるむ山川の水 をちこち人のわかなつむ袖

柳むらく くる 4 やまさと 春雨のあとに夕日の又出てのほるかすみのなひく夕山

花にあさ日のにほひそふかいつはめなく軒の春雨静にて

尋ねれと花の山かつ物いはてみとりなる春の遠山まゆに似て

妄にけるとにはるの明ほの

子日せし小松かはらに花さきて世にひかれてや梅にほふらん空寒み遠山さくら待わひて

朽木の松もみとりにそたつかすみたつたや花に成ぬらん櫻さくなるかつらきの山

朝

世は花のほのめく色にさそはれて さくはなの秋のはやしは風もなし とふこ」ろやあめ風の空 ムろのま」にをくるふる寺

峰おほ た」木のもとそ花のうつり 面影はわかれもしらす身にそひて ひ谷めくる陰に花吹て

立そよる人をいとはぬはなの陰 れは木をうる人もありけり

やしき身とておもひ捨めや

み山ちはこその落葉を花にみて **嶺たかき花とてなとかとはさらん** なをくちのこるさくら木のかけ

としく、に花によしの」おくをみて 今きて住は世の外の山 はしとて立よる宿の木隱に

今日まていくかはなになれけ

明ほの 拳には月のおほろなるかけ

ととろ 山 本の杉のむら立雲おりて ム花のおくより鐘なりて 0 あけほの ムはな

> のこれ猶はなの木末の入日かけ かりねせし遠山さくら跡にみ くるゝかすみに月をいつみん 0) ふの の木々に雨そ」くころ 雲となるちきりか は

人かへる花の山かけ目はくれて

惜へき花をかさしに我おりて 春はこゝろそあらす成ゆく

折のこす花にも春の風ふきて つくくしれは人もうからす

それとなき哀を花やすゝむらん たをやめのかさしの袖に花落て おほえす袖に露そこほる」 り目のよはくかすむ夕かけ

なみたに似たるはなのゆふ露 かっ むかしはとろへとも更に物いはて ムる世に又たれをたのまん

古郷の花はよもきか木末にて 草の戸に一木の花を友なひて よひなれても道そ露けき

又たちかへるすまの浦波

七百六十 JL

四 百 八 + 七 園 塵 第

卷

第

卷 第 四

散まよふ花の手まくらあくる夜に なかれては花の色なきよし野 花ちりとまるいし川の水 花をわか心まかせのはるのかせ 今朝みれは夜なかき雨に花もなし 花はた、ゆふへの雨を限にて 析はつる跡に若 かと家さくらあらしかくらん あらしにも猫のこりけるさくら花 風ふけはちりし梢に花をみて うらむるをたにさそいとふらん 若葉はさらになよ竹の陰 さ夜ふく風はきかしとやする 夢をやらつし現をやゆめ 包へともかたみの帮はかひもなし 植をきて陰にと憑む軒の松 はてはいかなるつらさをか見ん もとのみちにやまよひ行らん た」大かたの水のうたか 夜のまの雪やさそづもるらん 木のさくら花 た

嵐ふくはなの朝戸を出てみよ

浅茅原 昨 花ちれは鳥のねくらもさたまらて 花ちれはかたみの月もおほろにて さくらにもろきいり會の鐘 は 雨そ」く青葉の花の夕まくれ とりの鳴木陰の庭に花落て 今は」やかせさへ戀し花の跡 ひとつつム靜に花のちるをみて 日みし花も青葉の朝あらし 立わかれたる半天の雲 うらむる程そいひ盡しつる かへさやまよふ夜も深きみち 山とをく雲をはらへは日も暮て かそふるほとの 猶ふかく住へかりける山のお なは青葉のかけの山さと しのふたもとそなみた落そふ か し人もなくなるそ悲しき に苔むすおく山の庵 しかたりになみた落けり かたみの花に風吹て にとも人のとひこん暮ならて V ŋ あひの鐘 色

還 塵 第 かすめとも古すに落る夕ひはり きかはたく霞む初瀬の鐘の摩 霞よりはつか餘の月いて」 くれゆく春に花をみましや おもふころは春もへたてす みまくほしきはみよし野の花 らくひすつくるよと雲の空

うへしやおもひねての山吹 百千度なくや太山のよふこ鳥 た」大かたにおもふはるがは 橋の香もなつかしく里古て

我やはよふこ鳥のなくこゑ

心からおもひなさる」春の空

首夏の發句に

待とゝろしらは千聲そ郭公 昨日みし木間消行若葉かな 千句連歌に

四方にちれ聲も花ある時息 今朝そとふ有明いつれほとゝきす 仁木兵部大輔亭にて

年の後や古聲ほといきす

蒲生刑部大輔家にて時鳥な題にて千句連歌侍し十

光勝院にて五月の比

郭公いつを五月の初音かな おなし心を

郷なれよいまは五月の時 やとりとへ郷のあま夜の郭公 阿州里のあまと云浦に留りて

春さかぬ花やころのふかみ草 牡丹題にて

明日はたか軒端に水のあやめ草 浦上美作守家にて千句にさなへ 五月四日の發句に

せはき田にやとす千郷の早苗哉

おなし心を

夏山や木たちにみすは松もなし 幡磨律部許にて

夏山のよそめはこけのみとりかな うき草もねをさためたる早苗哉 細川右京兆千句連歌に 鳥

夏山の木陰夜ふかきあしたかな 漁青し山やかけすむ夏の海 武庫山の麓にて育侍しに

夏の發句に 遊集軒會に

**らきみるの真砂におふる鹽干哉** 

あきや引しほひの松の下凉み 夏の日に色とき山や雲のかけ

世に凉し草木にそゝく夏の雨

納凉を

杉左衞門尉家にて六月晦日色凉しこゝろやゆらく玉かしは

凉しさにけふや千度の御秋川

**凉しさや一夜をまたぬ秋のかせ** 畠山左金吾亭にて

別にとりのこゑなきかせそ

若葉かさなる木々のしたいほ間ひすてたるを又待そする 明花の雪はかきほに散はて A

ない音を のまま いきか 花は昨日紅葉も明日か夏こたち

平にさむる夢もうらめし 又はつ音きくやまほとゝきす

きくも名たかき言のはの道 きくも名たかき言のはの道

薄きちきりやなみた成らん足引の山邊すくるほとょきす

宿とはんかたもおほえすふる雨にほとょきすせみのは山に音をそへて

ほとは雲ゐのやまほとゝきすっれなさをかこちやるへき傳もなし

やよほとゝきすこのさとになけ

おもへはひさし五月雨の比をのつからなく音まれなる郭公

かれぬへき軒のあやめの青やかに

いつかほたるの袖にいりけん 飛ほたるまた影薄き夕ま暮 夕露に芝生のほたるあらはれて やり水に似たる朝澤末遠み しらさりし衣のうらの玉をみて 野はした萠そ色深なる

見も馴ぬ姿をかさる神まつり

むかしおほえて袖そしほる」

いく度か待夜むなしく明ねらん

やめにましる水のうき草

さそはれてけふや都に出ぬらん

おもふもおしきさみたれの月

今もた」おもへは神の世に住て

夕立の跡の山水いはこえて みれはほたるのかゝりたくか 塵なき庭の露の流しさ 17

ゆふ立の空より早く日はてりて ともなふ雲も水もとまらす

雲はたム軒はをうつむ五月雨

K

となりにたにもうとき山

植し田面のはつ鴈の摩

月日をこむるさみたれの空

五月雨の凉しき水におり立て

夕たちのはるれは出る中宿に つらからん我身の後を今しらて なをかけあつく照す夏の日

はるかなる郷の茂木の夕凉み あきかせいそく木本のやと かけにわつ」も民そたのしむ

あつき日の空に一むら雲もなし いくかてるらし夏の日のかけ 雨とをき梢にかへる雲をみて

月のひかりはさやかにてよし

七百七十三

五月雨の名残の日影軒もりて ともしにまよふ鹿のあはれさ あつさ弓おもひかへさん道しらて

はれてたにその名残ある五月雨に 若葉の竹になひく朝露

志賀の浦や波をふもとの五月雨に

うなはらとをくかへるつり舟

にこりなかれはくむとしもなし

道たえくの木本のかけ

芭蕉葉にきけはまたこぬ秋の風 月もかな岩かき水のゆふ凉み 岩つたふなかれ凉しく音更て 凉しくも村雨はれて更るよに かたしろのなかれもやらぬ秡川 たよりにかとふ古寺のみち らつる折をもしらぬ奥山 朽ねるふねの水のさひしさ 雲にほたるの何こかるらん あめよりのちの夏の夜の月

初秋に花はさかりの小萩かな 慈雲院にて 陶兵庫頭家にて

秋部

野へにぬる小萩やをのか草まくら 錦にも玉やはおりし萩の露 妙法院月灰會に

花のいろは古枝もしらぬこ萩かな 千句連歌に

山とりのおきにへたてぬ嵐かな

春さえし日影やあつき秋の空 發暑の心を 龍朔院(三條入道右相府)御會に七月七日

天津星一夜のなかき契かな

初秋のもみちは月のかつらかな 大内左京兆閑居の亭にて會侍しに おなしきころろ

花もまたむら草かくせ庭の露 折人の住やかつらの花のかけ 波々伯部兵庫助家にて七月

松原の秋のしるしや風の 筑州箱崎にて神代紀伊守するめ侍し一座に 音

波にふく秋風きよし西 鷺ねふり淺茅色付川邊かな 江口左衛門尉家連歌に 遊行上人西國に御座の時 慈雲院にて八月十五夜 の海

すむ月もさすか百枝の松の露 おしまれし月は今夜の光かな 西行歌ニ云太神宮法樂に 石清水社法樂千句に月を

卷

朝かせに雪ちる庭のおはな哉

江にまねくおはなや袖の湊風

四宮家にて

こえやらぬ波やおはなか末

の松

秋の後句に

轉多にて

野分せし垣ほにしろき真葛かな 伊 勢守北白川山庄にて

櫻の紅葉を

散さくら音もありける紅葉かな

朝霧にさ」ぬ舟ゆく川邊かな

山ふきを秋のよそへや女郎花野外の巻にみえたり 朝きりに隠かねはるム雲井か

むしの音に月

かけしるし雪の庭

在明を夕の庭の眞砂

かかな

伊勢のかみ亭にて洒宴次に

秋の發句の中

氷ける秋とは

v

はし水の月

石清水執行坊にて

72

九月十日

小蝶とふ菊にきの ٤. の花 もか

長月の名やしらきくの花盛

有山寺にて

色かはる山は夜さむの朝か 九月十三夜飛鳥井亭にて和歌會侍し後 な

花す」きかりいたす秋の山田かな

月灰發句に

千句第十番

ちしほよりあまたに染よ木々 の雨

麻生兵部大輔家にて發句すへきよし侍しかは

川霧の山をらかふるあしたか

暮秋に

うつろふも花はつきせぬ千草哉

なしころろを

胸中務少輔家にて草花を

いつくにかおはなをこめし糸薄

田部松本もとにて

世にちらせ六のむくさの花の種

卅六人の歌仙に奉る連歌に

薄紅葉しらてや晴し 紅葉」に月も照そふ今夜かな 秋の 雨

興福寺訓英律師坊にて

七百七十五

第

付句

山さとに一葉ちるより絶俗で 東行秋のちきりともかな 更行秋のちきりともかな あんかを星合の空の恨にて かんかをを昼合の空の恨にて なみたを秋の暮になさはや

道芝に夕目色とく露はれてをく露も小萩か色にらつろひてをく露も小萩か色にらつろひて

野邊のうつらの壁そさひしき

茨の葉深き山下のみち さをしかの妻とふ野への萩か花 さをしかの妻とふ野への萩か花

花も下葉も萩そうつろふをしかなくおのへの小萩らつろひて

山

の端に夕の月は出初て

川上過るかりのひとつれ立つ」きたる半天の雲ではわか身の雨とおもへた」でない。

下帯の公によか、疾から 時雨行山ちの鹿の摩ねれて 村の鰐に秋ふくるころ おの鰐に秋ふくるころ

をしかなくかた山郷は野をかけて軒端の松になひく萩かえ

身にしれは戀てふ戀もくるしきに

あつさ弓入野の小鹿妻問ひて 要身をしらぬ戀そはかなき 山田はもらしさをしかの摩

秋かせをつまとふしかの限にて雪に跡なきをのゝ山かけ

のきやわひんあきの山

去年まては一むら薄むし鳴てあれて猶すむ古郷の秋

あるとゝちする月のみや人

つくよりたつ雲の一むら

しら雲は薄霞にみえすきて

年の中にも分て秋の月

舟人のあかつき月にさほさして しらさりし夜の松原月更て 月澄て空はみとりの秋のよに 水のをとさへあきふかき比 あふけはたかきわかの浦

山川の月はあまたに影みえて 時雨るころのかせはすさまし すむもにこるも水の行末

河音も月よりたかき夜は更て ふりにける都の跡と誰かみん

月かけきよきしかのうらなみ 残れる木々の猫にほふころ

とくいてムタにきゆる月はおし

をそきを待につらさこそませ

今夜いかなる夢に寢なまし

なかめつ」あかせ牛の秋の月

舟こきまよふもろこしの海

くまもなき月にうしほのくもりきて

いかにみえてか名はもれぬらん

山とをく月待浦

夜に

影はやく東や月の出ぬらん

一筋みゆるおきの中川

かすかにそ雲井に月をみかの原

みやとへたつなあふさかの山

みち芝に虫の音枯て人もなし

なひくお花に露そみたる」

みやこ出しはあき風の空

露更る野への虫の音数そひて

人はぬるよの月しろきかけ

月かくす神代の山を恨にて 長月の名にあふひかりきえやらて かてむまれし秋津すの秋

なくきりくすかすかなる比

薄墨の繒嶋か磯を霧にみて をちこちの村の夕霧タけふり 蓬茅の宿は月さへすみ侘て たか秋よりか月もくもらん あはちの月そ波にかたふく

七百七十七

第

うき身とは人の上にも知ものを 草色つけるもりの下かけ なしさややかて野分にかはるらん 木下まても草そいろつく

野漫みれは昨日の若菜らら枯てりをしおもへはあさかほのはな夢こそあらめ月たにもなし夢こそあらめ月たにもなしいつの目をかき秋くれてものしほる」まかき秋くれて

すさましやすそ野に残る入日かけ身につる、秋のゆふへはいとふなよ狩人のゆふ露分てかへる野に

うつらころもはほしや俗らん

草のいほりをとはんとはせしあきかせさむきみねの杉むら影たかく残れる月に鐘なりて柴のかれはにあきかせそ吹

月こそおなし光なりけれ 月こそおなし光なりけれ 月こそおなし光なりけれ 今そなくさむ月をみるそら 今のあかつきかたに雨晴て 初の夜のあかつきかたに雨晴て むら雨の跡の松かき露をきて むら雨の跡の松かき露をきて

かりはつる田中の庵り隙有てかきほ荒たるあきの山さとかきほ荒たるあきの山さといきほ荒たるあきの山さと

摩やゝさむみ干とりなくころ かる跡は水のみすめる小山田に 一むらすゝきゆふ風そふく

もみちも今はあらしふく山 必とたのめし物を秋の暮

月かけもはつせの山ち秋更て

露を分ゆく風そはけしき

松の葉に着つれなきは時雨哉 初春食に

手向せはいつれの宿か神無月 浦上美作家にて法榮の官に

横の葉に木枯くもる高ね哉 有山家にて

比叡山にて

ふる雪の音きくみねの小篠哉 眞野にて人のす」めし一座に

月次會に

雪ふりてお花にかへる冬野かな

雲にこそつもれ千尊の雪の竹 若槻民部丞家にて

とを山の雪ふり分よ庭の松 大内左京兆亭にて千句連歌侍しに松雪

興福寺にて

松におつる雪は風なきふゝきかな

雪しろしかはらの軒は峰の松

春もみぬ花の木たちや雪の松 聖庿法樂に

> 春もやは木毎にさきし雪の松 田舎より人のとひ侍しに

先ちりてさくや梢の雪の松

こほりにも底あらはなる清水かな 山水をしつくにのこす氷かな 大内別駕亭にて月次の會に

際とはひ駒いはふ野の嵐かな

延徳はしめの年松梅院にて御法樂の千句侍しに神

うたふ夜はさ」も摩する霰かな

らくひすのなかぬそ冬木梅の花 としの暮に

月に雲しくればてめやまてしはし 松たてる遠山本のゆふしくれ 村す」きみところまさる冬のきて しつかにつる」雲風のそら まよへはめくる道もこそあれ とまりとてこそかもよるらめ むしの音かるゝ野とそおしけれ

七百七十九

24 百

枯木にみれは月もすさまし さはらすは月に時雨をいとはめや かなしや落葉の庭の朝清め ちるおもかけをみするはつ雪 明かたの霜の夜からす立らかれ たえせしものよ家への風

霜しろきふもとの鳥るかたふきて 山川のみなかみあさく木は枯て あとなき雪の橋のたえく 雪のうちこそおもひやらるれ おち葉朽ゆく杜の木からし

初霜にいろあはれなる野への草 夕霜の色をかさねて更る夜に 雪になるかとさえわたる空

飛鳥のさとにさむき川風 石はしるてふ水そはけしき なれるし秋も昨日に成にけり

とまり舟我も千鳥の音に鳴て 河原風さむき夕の方ちとり しの葉みたす風の白波

> 水もまたへたてぬ程の薄とほり 日かけ待間の庭のあさ霜 きゆるそはやきけさの初雪

苔ったふ岩ほの雫つらいねて 薄とほる池の水鳥岩にゐて らす雪しろし庭の松かえ

月さむみあられはしりて深き夜に をとにのみきく百敷の内

さゆれともまた初雲の空たのめ **猶雨ならん雲のをちかた** 

はつ雪ふりぬよこ墨のやま 昨日まてたのまさりつる夜の明て

空さむみ雪を翅の夕からす みなれぬとりのかへる山本

かたふく軒につもるしら雪 岩かねつたふふるてらの道

さゆる日にたく火のなくはい

かならん

ふる雪になかは」ひらく笠さして

雪にはれたるまとのくれ竹 とき出し跡を舟ちに歸りみて よこをれる山はさたかにあらはれて 塵第

その天乙女いつ下りけん

基るとおもふとしは越けり 素るとおもふとしは越けり ないきねやを忘るム埋火に こムにありても遠き山風 あたりしつけき雪の下庵

しのふ名もけに理と世をしりて、えらひのこせるやまととのはそなたのかせよしたふかひなし

人まつころのやまほと、きす 関をのみ契りになして思ひけん

待わひぬ月をいつくにおしむらんもらすなといひしを色にはや出て、

待れびむ月をいつくにおしもら 大のめし人に更る秋の夜 たのめし人に更る秋の夜

名をいひけちて猶やしのはんちらむへき数つもる夜に人のきてむかへのくるまなとかへすらんなかへすらんならずをふみてもとはん人ならず

玉くしけ二たひ人はとひもこてったく一夜露のほのかにあふひ草

在明にわかれの車引出て かかんかたなく霜ふかきみち

わかなみたこそ雲にうきたれがまないっくにがまくらからましかからでにかへるは名残よもあらしなかき夜にかへるは名残よもあらしないっくにがまくらからまし

むなしくもかへるか上に夜の明てあはゝたつ名をいかていとはん引かさねつるきぬ~~のあと

衣への道は空行心ちして

さむき夜は猶いねかての我思ひ

七百八十

第

卷

第

なくくね 獨ねに夕つけとりの聲き」て ひとりつ」ねたる朝けの物思ひ 文にはいかむとのはもなしてはりはないではいかむとのはもなし 折くにつれなき人をしたひみて なをさりのうさより思ひ拾もせて つれなさのこゝろかはらん人ならて うつりかを我補のかにいひなして とのはの残りおほきに鐘なりて くろかみも別の」ちやかはらまし みとり子のおやのいさめを聞しらて きしを待てふ程のさひしさ らかれゆくともおなし夕暮 やかてもことろかはるものかは よそのかへさの音信はらし たか火をとりてほたるとふらん あはぬららみも今そ忘るし ましはる法の庭の節るさ 親あるほとよ身をあたにすな たふころや物ぬらすらん ぬる夜やふけにけり

別にしあしたの雲の消もせて 覺的れと夢の面 殘まゝれる身そ恨なる 「toky」 なもかけのそはゝそれにもなくさまて あひ思ふならひなきこそ懸ちなれ 色みえすせめていとへる人もかな くやしきはいとふをしらぬ恨にて おもかけは人のかはるに友なはて 面かけも夢のたゝちは消やらて 夢にとふころまてやはいとはれん 夢こそは人もとかめぬ契なれ 我のみとむねくるしくもねたる夜に らからしとてや身をは捨らん とひしさまさる夕暮の雨 枕の月のさ夜ふかきそら あやしきものはおもひ成けり それかとらすき明ほのム雲 人もしらしなおもかけはねよ といろそ心とひの中たち れなき中もさのみ恨 けしやいか」とひもよらなん かけ間まりて

1

契りても蓮のうてないかならん

おなし人とは又もむまれし

玉さかにたに又あはんかは

白糸のなかきちきりをかくる世に

わすれ草君からへにも宿ふりて

たえぬる中よ何をたのまん

花よりは人のとゝろはうつろひて

去年のまゝにやにほふ梅かえ

情かほにもむしそをとする

ねぬるまに涙をしのふ袖ぬれて おもかけをなみたの水の下にみて 落あへす袖に涙の色付て むねに立けふりもさそなあさま山 たかむねにかはりてふしのもえぬらん た」せとも名をいひたてし主もなし まれなるは中へ長き契にて よそにはやえにしさたむと聞物を ちきりさへはや薄曇の玉札に はかなきは後世まての契にて 契しは大宮人になるもうし 名もはつかしや忍ひぬる中 こひはたかきも衰とやおもふ 我うきなみたたれにはれなん なれはそ人のつらさをもみ なみたにみれは面影もうし 戀よいつかはこゝろゆるさむ 我のみうしと身をな思ひそ 友なふみちを行やわかれ つよりつもるおもひなるらん もひ捨ぬそ猶はかなかる

解行はみるらん物を雪氷

はかなくや月を形見とおもふらん

かへる空より夜は切にけり

春さへなとか人のつれなき

まち侘る有明の月に音信

7

過るあらしの冷しき空

月かけはぬれたる袖をたとりにてしほくむかたに又や出らん

月かけをなみたの袖にやとしをきて

戀せしの御秡こそ猶はかなけれ

おも

かけ

はい

かて忘れん

つちゆくらん手枕の夢

念

第

勢よといひしはいつら三わの かきりそとかこちやりてもなからへ したひつることろなきまてよはる身に よはるもしらすことろみんとや **空よりも補は隙なき五月雨に** よしたえはてね恨たにせし 月に 市のなかにも人そかくるい はつへき物はこくろなりけり く夕行ともあはぬらさつらさ しなくは j, でりに たに ٤ 12

とはんとおもふこゝろはかなさとはんとおもふこゝろはかなさ

ける身なからうときとの

た」一すちの道そかすめる 年との暑は東の山とえて その」とてふのかすみ行かけ でとの者は東の山とえて

名もしらぬしつやの小草みとりにて

本陰さひしく梅はちりけり 水の河出そ今もなくなり 水の河出そ今もなくなり 本の草おふるはかりに池あせて

右すゑの石まの菫苔にみて 古き宮こも春になるころ

秋きてせみは日くらしの塵本の名をかゆるとそ聞山のかけいにしへは陰にすゝみし松朽ていたしては陰にすゝみし松朽て

大もみね住家にうつる月はおし 岩のはさまのあきの山水

木本すみのつゆの夕くれ

鳴のなく野澤の月にあこかれて と 入ろ有身に秋やなすらん 宿かさぬ里は月みる音もせて あまの川原に更るあきかせ 塵第

むさし野の末に雲引山みえて 村雨の空かとみれは日の出て 朝の雲にあをきとを山

山に今みる海川の末

いた」くのみかみねのしら雲

おもひつ」窓にあつめぬ雪もなし

折くのつらさを山になくさめて

よむ歌も幾姿にかかはるらんいつよせて舟間の名をとゝむらん

山のあけほの海の夕暮

なかるゝかけもあをき山水水はふもとのはしの一筋

打渡す朽木のはしに苦むしてなかるゝかけもあをき山水

石はしる瀧の水上はけしくて香すみわたるみつのをの山来にかけひをうくる山水

けふりのするに水そみえたる 満おつる片山もとの一いほ 入江のを舟人もかよはす おこくたくるあら磯の波 岩にくたくるあら磯の波

江の水や舟さすさほにうこくらん影さたまらぬゆふくれの月

本来にちるや瀧の岩波 本来にちるや瀧の岩波

一方でい、リン首の落ける。 音初川をとはかりする日は暮て

行てかへりし道の露けさ、 しむともみえぬ水のさひしさ しむともみえぬ水のさひしさ がたつらに波とそかられ海士を舟

たつのみやこも住ははてしよせにうらみあらしと君や思ふらんはなれ小島のあはれみせはや

卷第

四

浦しまかこの國とをく島りきて 朝市に憂もつらきも敷みえて 哀にうほをわくるつりふね なをおもかけののこらんもうし おとろへはそれとなみえそ都人 かり傷のとりの哀なる摩 かりものとりの哀なる摩

澄生のおくには残る道なくて
うつほなる木のムこる浅芽生

うへ水のこれるよもきふの秋

すさましき野原の末の夕ま暮

雲うつむ稍はるかに日は暮て 太山の猿のすさましき 辟

山本のいはほは庭にみまくほし職漫をとをみ松も立なり

苔をしく玉のみきりのつきしまにふるき住家のおもかけそたつ

草の半のはるの池水 草の半のはるの池水

作れる民そ水をたのしむ

及かへらんもはるかなるみちなかるにやつりを翁の忘るらん みとりの海に舟もうこかす みとりの海に舟もうこかす からんもはるかなるみち なかへらんもはるかなるみち

タしほや濱の真砂をひたすらんりなみのよせてはかへるあら磯にりなりたつあしやの里の海士を舟けふりたつあしやの里の海士を舟けふりたつあしゃの里の海士を舟けるりたった。

れは舟こく夜るの松原

塵第二

玉川によりくる波やくたくらん 神士そかひなきしほかまの浦 神士そかひなきしほかまの浦 いがてかはありのまゝにはいひ出ん かせはや人にしほかまの浦 なにゝこゝろの又うつるらん 松鳥をかへる舟人おほつかな 夏川や淺瀬凉しき夕渡り

別ちは人のうへさへ哀にて布引の瀧こそさらに天川たか補ならし舟の行みゆたか補ならし舟の行みゆ

なひきぬる霞の袖も三重かさね

昨日もとをきとゝちこそずな旅人を送る限もあはれにてなくなれる海原

しゐてなととめし都を出つらんかくとひしきもむくひ成けり別るれはやかて戀しき古郷に

おもひたつけふの旅人まてしはしおもひたつけふの旅人まてしはし 想しくなるは何のこゝろそ 想しくなるは何のこゝろそ 名殘なく侘て出にし古郷に 身の行末をそ思ひおとろく 能をとひたれをたのまん歳の空 松の葉つもる山かけの道

岩越るあら磯波の香閉てたなふをしらぬ山ちのたよりにて大なふをしらぬ山ちのたよりにてけるないをしらぬ山ちのたよりにて

たなひき初る最のよこ雲とまりふね川かせ吹て間夜にとまりふね川かせ吹て間夜にとまりふね川かせ吹て間夜に

海をふもとにのほる山みち

すくなる道そ法にられしき限あれは舟ちの月に山みえて

卷第

駒わたすはしは朽木のあやらきに 舟まてをくるよとのたひ人 宿をはかしてねたる郷人 夕けふり憑てくれは宿にさて 行すゑは郷なきみちの夕日影 かりねするあしやの郷の秋風に 何かその露もいとはん草まくら しらてねししつかやとりにめは覚て 河なみふくる夜はの舟人 ありあけの月待浦のとまり舟 鹽干ゆく人を小舟に友なひて うきにはならふ古郷もなし かたるへきたよりもなしや心さし 有にもあらぬ郷そかなしき 残やとりを人やとふらん 我みる月ははるへ夜もなし 今朝はまくらのつらきをそみる 撃して人の過る山もと 月は今曇影なくさしのほり 夜ふけてゆけは千鳥鳴なり 西に行東にさるも哀にて

板まあらみ空もへたてぬ宿ふりて また残身ともしらしの古郷に にはとりの摩待出る旅の宿 いそくへきやとりを」そく今朝出て 古郷の軒は庭まてかたふきて かさりたる家ねにしるくみすかけて 道たゆる我古郷にかへりきて あすははやかへらん露の古郷に また花と古郷人もあはさらん をとにのみ聞こし郷に今住て 夜なかきころのかりね悲しも 誰なきあとの玉まつるらん きみにつかへし心ちこそすれ たゝ心からくらき夜の道 あやめなかるく五月雨のあと 定なき世はつらき身のはて よるのゆめこそ物忘れせね をくれてかへる順もこそあれ つらきまくらの又ねをそする みつしねよとの月そ悲しき な一もとそおくにみえたる

塵第

獨たにやとるにせはき草の応 里はあれて排人なき庭の面 いつらつろはん我おもひ草 野となれと古き都にまた住て 冬野にたてるこらの哀さ みちに心をはこふなりけり

なのりをさへにおほめくはうし

いく度かつらきとなりをかへつらん

をろかなるこそ岩木成けれ

草深き門田あれたるしつか庵 す深き門田あれたるしつか庵 の前・「は野」

篠かにのはかなくつくる家(へにひま)へみえてたつる蚊はしらみち細き田中のわらやかたふきて

糖の内の鳥のねふりも哀にて夢にいく皮すめるおく山

「「「「「「「「「」」」」」である。 「「「」」」である。 「「」」である。 「」」である。 「」である。 「」である。 「「」」である。 「」である。 「」である。 「」である。 「」である。 「 「 」である。 「 」では、 」では、 「 」では、 」では、 「 」では、 「 」では、 「 」では、 」では、 「 」では、 」では、 「 」では、 」では、 「 」では、 」では、 」では、 「 」では、 」では、 」では、 」では、 」では、 「 」では、 」では、 」では、 」では、 「 」では、 」では、 」では、 」では、 」では、 」では、 「 」では、 」では、 」では、 」では、 」では、

暮るまてむかひの岡に草かりて人なき舟をつなく川つら草かりなる、むさし野の郷

.人のつらさも今そしらるゝ かへらすは我もと山にやすらひて

むかへは人の面かけそうきいにしへはよそに聞つる老のきて

なくさめぬるも我はたのますなをなからへは世をいかゝせんなをなからへは世をいかゝせんいにしへの我姿にはますかゝみ

暮とに待はこゝろのうき物を放ならぬ身もたひなるをまたしらて放ならぬ身もたひなるをまたしらてとのはにわかくなゝしそ老の友

第二

卷

我か世のかきりいつとしらは ころがへするならひともかなむかしははなにすみ染のそて うき世にも山にもつかぬ墨の袖 草木にもおとりぬるまておろかにて 憂身にも猶なかきこそ命なれ 何事も質なきとそうき世なれ とをきゆかりはた」よその人 花染をしのふもつらし墨 世を出はよし野のおくの奥をと 引とむるともいてよ世 さそふなよ今は岩木の苔 立よらて過る木陰も哀なり 中のころものうらめ まなはぬみちをおもふいに 夢にあへるも契ならすや たえく たゝ大かたのちきりたのむな 柴の戸に心よはくは住れめ といろある身そ人にしたか おもはせて我をみんとや につくくはかりの道の末 しの 0 一の袖 1]1 衣 みや L op 3.

臭竹のよになと心とめぬらん 出て行世をなとさのみとめぬらん 折くにめくみし君の世捨人 思ひ出はさしてむかしもなき物を 君ときみあらそふむかし安からて 世を捨し人をはかなくまたしらて 忘れては花に馴ぬる世捨人 花さける都は春の世をいて」 哀にも落葉をきたる世捨 との葉にのかれ安きは憂世にて 、おとろかれける袖のらつり うらむるふしをそれとしらすや 住はまれなるをちの山 きぬたもなくて閑なる山 なれもあたなる身ともおとろけ 何のうらみをなをのこすらん 身をつれなしと打そおとろく 旅とてたのむかへるさのやと にしきもしらす袖そ朽ね たゝひとりこそ世もしつかなれ なし世をたに忍ふ悲しさ カン 人 H 力》

寷 第二 引琴もその人からのあはれにて とはさも若かりし世のすさひにて ね覺つ」ふりにし人に手を折て とゝろによるやまつ風の感 といろそよそに遠さかりゆく

すゝりにかける文字やいむらん 窓にらつろふ梢をそみる あとをた」石のうへにもと」むなよ

あらそはぬ道はなかくかひもなし つれくとむかふす」りの水澄 こゝろひとしき友にあひつゝ

みちはのほるを心ともせす

数ならぬ身をなくさむるとのは ともし火の消ぬはかりに身もよはり

老のまなひやかひなかるらん 誠にはころのうちもしりか たし

今夜いかなるゆめかむすはん おきもねもせす物思ふころ

はかなのゆめやあかつきの鐘 何を夢何をうつ」とさためまし 開内になにはのともかはりけり

> よりそふとおもひしかへにまとろみて 鐘やこゝろを人につくらん ふくるもしらぬ夜るのともし火

まとろむはたゝ玉しるのなきに似て 泊瀬のかねそ分で聞ゆる

床さむみいくね覺にも明やらて ね覺してもろこし思ふ手枕に きのふもとをき老のよの中

松かせになかきねふりも覺つへし よをうちはらふ苔のさむしろ

生れなからにたれかみえぬ

あたし野の露にかへりし人もなし 彼國にきけと別はあはれにて むらす」き何まね くらん

あはれとそおもふなき人のあと 書をきし歌のさまく読るて きくくれの哀さ

しらぬ鎖

無人の家ねを寺にあらためて いにしへの玉のかすくしまつる日に 心にのこる人そくやしき

山本に市のかり屋の物さひて

ĬĬ 八 +

法の外なるわさなたつねそ 深くたれ佛のみちをねかふらん し水の寺にたれかすむらん さひしさの門よりみゆる寺ふりて 草のなかなる野へのふる寺 若水を法にも今朝や結ふらん 神まつりせしあとの松かせ をしへこぞ中へ法のさはりなれ しきみつむあかつき露に花落て ふるき社そ草のはらなる ところによりて春はかはれり 苔のたもとそしほれそひぬる 神は今たか かなる法のみちをまなはん 二道にうつりもやせんおほつかな こぬ秋の風のをとはの名も凉し 松はのへふすはしの一すち 鐘とをし撃も露にやしめるらん たよりかほなる文もなにせん 神の末なる人とこそきけ 壁の安きをたにもおこたりて 心にかやとるらん

> 山 法のためむなしき海に舟さして 君かよはひにかきりあらめや 永日もつれくならぬおこなひに もろとしもはちぬはかりの君か代に きみのめくみにさかへぬる人 とをきくによりつかへぬる人 むなしき空によもなさためそ なへて世はめくむ心に納まりて ふかみ法の聲して暮る日に 都にもならはぬ旅ね思ひやれ 心よりまよひさとりは有物を ひとりおもは」そのかひもなし 安くをくれるすみ染の袖 た」それとなく涙おちけり 松の葉の干年ともなと祈らん つたへまほしきこの和歌 いにしへの女とも今はいひかたし ろとしまても行人そある

園塵第三 春部

山かつのそのム鶯聲もおし

みえみ見えすみ春雨そふる

宮とにさそへ人も待らん

らくひすはあしたの山にさえつりて

Ξ

からころもきさらき寒きい駒山 **雪解て水まさる江のみをつくし** 梅か」はおくふか」らん山さとに かすみもうすくなひく難波江

あをむ野に朝鷹人の駒なへて むら竹のはるのあさかせ 野は若草に春風そ吹 霞にとをきとりの音もおし

きょすなくあしたの霞ほのかにて 春になるて小空そかすめ

そことなく道芝あをみ梅吹て きみかにほひもまかふ花の 2)2

末とをき竹のそのふに梅吹て 水のなかれもきよき谷かけ

常葉木に梅の一花咲出て

柴かきのおくにやせたる梅吹て 春まつ竹の雪の下おれ

鶯の聲まつ朝戸おき出て

暮ゆく野へにかはつ鳴なり

干枝かすめる木々の明ほ

0

まかきの梅に風さむきころ

明ゆけとたかねの霞夜をこめて

さくらも雲もにほふりかけ

うつし給は更にむかしの人なれや

はや三か月のおほろなるかけ

きのふ今日立つるものを春貫

昨日の雲もかすむやまの端

年やけふ字治てふ郷も越ぬらん

夜あけて月の春たつ夕かな

峯のかすみそはやく明行

春は先遠き東をはしめにて

ちはやふる神のわ垣も年越て

引そかさぬるもりの

しめなは

うつりきぬれはあふさかの

翮

水なかれ梅は苔むす岩のらつ 門は柳になひく春風 只さく花の一本のかけ

奥ふかき垣ほの木末梅吹て

七百九十三

四 百 八 + t

塵第三

第

74

七百九十四

枝のこる朽木のむめに花吹て さくらほのめく宿の梅かえ したりそめたるあをやきのい 二月の半も近くらつりきて ろいかはかりふかき梅 さく事もちらんためかは春の花 华になりぬ 31 ぬをさへ 春 風 かい 0 傳 , 〈程 15 も懸化て か香

而影にみえしはかりの花のもと でほふらし梅さく山の夕月夜 質のいろそふかくみえたる

空もかはらて春はたちけり

空に月いそかぬ春の夜は明て梅のにほひも長閑なる色

のとるさくらにかすむ鳥の音

あかつきかすむ波の上の月 ほのくらくなる浦~~に火はみえて

水もみちある春の山もと

なは早くあけのそほ舟置きて なは早くあけのそほ舟置きて りふりもみえぬかくれかの山 けぶりもみえぬかくれかの山

いつれかまさる舟ち山越 にし日になるも長閑なるかけ 作ふかきその A かたはら花さきて かすめる雲の雪になる山

山ひめや花のころもをいそくらん

花さきて明ほのかすむしかの浦

化とみてよしや雲にもなくさめやったのさくらになかは雲おりて本本なき野の飛鳥の摩

まかひつる雲もさくらも風吹てものうたかひの末のはかなさものうたかひの末のはかなさ

花さかりよし野の山に旅立て

さくらにきけは山かせそふく

忘れめやさくらからへのあさ質

て」は四方をなかめこそすれ

窓にのみむかねの山の花さかり

宮こもいまは人にまれなる

袖の香も薄花櫻ふく風に

かへる夕そとむるかひなき

紅葉にかいる器の薄霧

うらやまし花にあひおひの春の草 後くみる人やかつりし花の本 軒ちかき花のをちなる鳥の壁 花ならぬ草木のらへは目もたるて 契あれはやなる」木のもと また残る目のかすかなるかけ これをや戀とうち侘にけ

花のかけに哀わか世を盡はや

かへりすまんもつらき古郷

わか宿も遠山寺の花にきて

よしやこのまゝすてん世中

おなし枝も苔むす方は花さかて かめにさす茂木桁の花の露 老をいとへる春のあはれさ こなたかなたに水はこふらし

馬車行かふはなの木の本に

数ならぬ身を忘てそとふ

义 花さきぬふるさとの春

ふり捨て出へき世そと思ふ身に

いか」みはしのさくらさくかけ

限あるならひもつらし春の空

木末をわたる墨のかけはし

谷の水に片山さくらうつろひて 露なひく枝は花にもおとらめ 柳かもとをなとかすき行

いにしへは勢し花に身の老て らかれつ」しらす覺す花にきて よし露かられ花の下ふし 思ひやるにもなみたおちけり 狡からはさもこそあらめ雨の こえゆくあとの山ははるけし

塵 第

座第三

第

おもひたて遠山櫻かりころもあらましになす心ららめしおらましになす心ららめしさそはんといひしは今の花のもとさそはんといひしは今の花のもと

はもへはおしきとの身ならすやとふくる夜を花に行きのとたえにて とふとものちはあはんものかはといく はんしゅいかは

勢ねはやよし野たつたの山櫻

花にゆく山ちは心身にそはて

一かたならぬものおもへとや

ふし木も橋もわかぬ谷川

春さへ秋のおもかけそたつ われもふ色か老木の春の花 いったえぬ雫にぬる、苔のは なったのでの花

花さそふ去年の鼠や又とはんたくひなからの山さくらはな

かへるみやこの程そはるけき

風よりもたをるにもろき山櫻雨よなとさかせて花をしほるらん雨よなとさかせて花をしほるらんかさす間にちらはをしほの山櫻

風そふくおらぬ花とて殘らめやくやしやたゝに過てこし跡

一かたならすおもふくるしきかへるさはけふみし花の上さにて

いかなる種かうらみとはなるさそふ風よはれはまよふ花もなしさく花に雨をいとへは風吹て

この比は花にうつろふ松の風 宿をたかへてとひ行もうし 年ふれは小松も花に風吹て

花あれは入會の鐘の摩もうし ちらむるはしめ更におほえす 後にこそうさは嵐の花をみて 海山のへたてもみえぬ春の暮 あらしの花はみねのしら波

磨にましはる庭の立石 明日は又こなたかなたの旅の空 花をふくひらの山風かすむ日に

ちかくきとゆるうくひすの摩つたひくるなかれの末に花朽て

さきしをかたれ花もしらまし我か繭にみ山さくらをうつしうへて

あしきこゝろのはての哀さつれなさは比をや分ぬをそ櫻

島花をちらせはなれる宿なくて

雨にちる花の薄雪まよふ野に

限に花そをたに残せ吉野川なかるゝ水のとゝまらしとや散花は夢にまさらぬわかれにて

なしはりを思ひ出てや尋ぬらん御芳野を花より後も又いてゝ

何事もたくひある世をたのみにてひはらかおくのはなのやまかせ

ちる花を窓に吹いるゝ山颪おもへはこれもなさけならすやみれは年と、花のはるかせ

もとこかゝるまなのしら雪柳ふく風ひやゝかに今朝過て

たもとにかいるはなのしら雪

よるひるのさかひもしらぬ物思ひむもれは花ちる思ひなき世にて(る際)

花そちる歸りし友は浦山したかため世にはなからへもせしたかため世にはなからへもせしたかため世にはなからへもせしくれしろく花のちるやま

七百九十七

塵第

ゆめもまくらにかへるかりかね 雲雀なく外山の入日野をかけて あを葉の山のはるのしら雲 世に花をちらしてさける遅櫻 月はありあけのはるのかり金 夕雲雀なかそらまては影みえて 道芝にふるきみやこの花朽て 青葉より又花をくる春の風 よと雲に花は昨日の夢覺て おしみてはなのあとの松風 在明の月は霞にほのみえて 又賃行野こそとをけれ さくらちりゆくかけの岩草 わかる」に いとひはてなはさていか」せん つれなさの中に凝の色きえて わかれしあとそ残るらつり香 こゝろふかきやつれなかるらん わかれしあとそ空も身にしむ うきなからかくてや獨残らまし をつれぬ花はらし

はつはなよりもうかれはてたる

玉水は軒もりやまぬはるさめに

玉水も長閑きあめの音更て 哀にも蘭生の小蝶露にねて おる花たのむてふのあはれさ 小舟いつれはかへるかりかね かへるにも隠やはねうちかはすらん せめて春くらして聞れ天津かり さひしきはそほふる雨の朝かすみ うちしめり春雨ふりて風もなし あるしなき宿をもしらぬつはくらめ れすはしらし納のはるさめ 道とをき爪木にやすむ一れ もとのといろに存はきにけ 朝ほらけ役を分て吹風に 霞より野は先遠く暮初て くれて又たつ頭生もそある ころそすめる草の戸の 青葉かくれに花そ落ぬる ちらは我もと花にくらしつ 買のするについくしら雲 つれくしとた」をくる永日 彩 -S.

谷

t 塵 第

=

山くたす杣木の綱手永日に あそふ野にわか方遠く暮渡り ならふ小松のかすむ川もと いもとさくらさける後茅生 袖そつらなる櫻さくかけ

露をきて秋のおもかけかすむ野に

誰かすむあとそ庭の山

雨ふれはなはしろ水もあと越て 岩かけになかれの蛙聲さひて あらを田の小草に春の花咲て おもふかひなくなとかへすらん ちまたにいつる夕暮の秋

古郷にさきて露けき桃の花 はかなきは一夜を契る心にて

物いふはかりむかふおもかけ

菫さく野にかすむあさ露 しほる」もおしき藍の草まくら こゝろある人や花に寝さらん

花もやはさけるみ山のよふと鳥 とひしはいつの蓬生の宿 音信きくもまとすくなし

> うつろへは今はと花の宿出 花もみな青葉と深ふる雨 別つる跡の道芝打しめり はなれもやらぬさくら木のかけ

在明にかけこそならめ朧にて 花さへともにふるさとのあめ 松ふく風もうちかすむやと

花は青紫に人もなきやま をそきも恨散はなもうし ねくらをはまたさりかぬる鳥の壁

さくふちの花は枝さへらつむらん いかにせんりはありあけの開 枝もたをらぬはなそ吹そか 朽木の松に春はすくなき 企出山

とへやふちさくはるの山さと 名をかす松は色そすくなき 櫻ちる跡とてなとからかるらん 藤にほひ宮ね木ふかき春日

ものふかき松の隙~、藤咲て 彌生のするの界のくれかた 春なから藤江のうらは花もなし

七百九十九

Ξ

花鳥の名残たになく泰暮て かりまくら夜ふかき山のほと」きす ほと」きすやは一壁にまとろまて むら雲のもよほしかほの郭公 まつ夜更行やまほといきす 花は」やあを葉の山のほと」きす 夏きぬとはやらくひすの鳴絕て 春はきのふけふよりやかて夏衣 かたちあらはなと」めさらん今日の春 山もはやさくらちるらし春の暮 二郎はいつやまほと」きす うきゆめはつけの枕も恨にて きのふの夢よけふの現よ 雲もかすみもみえわかぬ うすきかすみのか」る山のは なかめあかせる夏のよの月 ゆきかふ雲に薄き日のかけ やく疑つる夢なららみそ もひたえんの夕ともなし へるさ何にをそき旅人 25

誰か身のはてそ山ほと」きす 雲か」る山 夏のきて草たかくなる窓の前 五月さへする野のもりの郭公 五月山あり明かたのほといきす いにしへにならのは山のほとゝきす あくるよ川のやまほと」きす 茂る葉にまた木の本は夜をとめて やよほと」きす一とせもなけ おとろくに聲きゝ分ぬ郭公 ゆくやほたるのかけのむら意 Щ 名をかへてとふをもしらす契るよに 都のつてをきくそられしき 玉さかに関もられしき法の場 夏とても空のけしきの外ならて ほたるのやと」茂き夏草 あまりしのひてはていか」せん 今夜あふをやはてになさまし むら雨に日影いさよふ客たかみ といろをなとか定さるらん たにみえぬふるさとの空 は桁にせみなきて

きけは水鶏の月になくやと

鳥いまやとおもふね覺して

あさけ凉しきせみのもろ聲

露はまたみすのあふひにゝほふらん あら磯や鵜のゐるいはほ鹽こえて 枕をもとりあへすあくる夏のよに 五月雨のあとの川音末よはみ さみたれは山もとひたす水もひて あやめしくけふの今夜のみやこ人 野澤にもえてほたるとふくれ 小車にともすほたるの影更て をしか待ともしのかけのみしかよに さやかなる月にみしかき夜はの空 枯はてぬれと名残こそあれ 汲へき水も夏川のする 鴨のなく壁に哀やまさるらん 後のあしたにうらみこそあ 夕くれ近く鐘そきこゆる 残れる雲もうすくこそなれ 軒端のくさの忘ぬそうき おもはぬ草のまくらをそかる をんなもいたるこの法の道 あはてはやまし消はゝつとも かけたかくなる森の下草

第三

卷第四

五月雨の名残凉しく嶺越て

卷

四

八 +

夏の日にかれ野の草は雨待て 雲たに戀しあつき日のかけ 草もかれ水もなきまて照す日に 夏の日はほりかねならぬ水もひて 名もむつましや櫻あさのは みるも先蓮の浮葉は色凉 むらさめに夏のゝ草葉打かほり 夕かほのあをき葉分に花咲て 残るあやめのにほふひとむら 中人にあやめもふくな里古ぬ 夏も雪ふむ岩のかけ道 み渡せはみとり色こき半天に また寒からし雪のふしのね 露のなさけはあるかひもなし 又とふさともおなしむさし野 待ぬる花のむかふおもかけ 花いつならん水の水上 軒端にか」るその」異竹 恭慕て夏はつる日のみ秋河 まこもかるふか澤野への暮る日に

夕たちの名残の月による出

おもかけの秋風凉しから衣 夕凉み花みし山に風待て 門するみするあまの家人 駒とめて行人するむ瀧のもと 人かへる岩垣しみつ音更て タすゝみあつさの殘る柳かけ 又くるも木本たのむタすしみ 水も人まつ庭のするしさ 富士には五月水無月のゆき ふしのねやすそ野をめくる夕立に うつりかはるはころの成けり 雪をいた」くかみ筋の色 庭にしつけきみしかよの月 た」かた糸のよるの戀しさ 行人みえぬはしの一すち たてのとしつ」をける顔の戸 しのひくにかよふ人つま 水くらき小舟の道の夕川に むすはる」草もやあるし夏の宿 長雨の比も忘すふりそひて 又かきくもり雪そふりくる

夜ふけてや原しかせのをとつれん 人はかけせぬともし火の本 はるかなる川原にみゆる渡し舟 水ほそくなる水無月の空

あしたのかすみタ暮の露 秋部 干々の人あさの葉なかす御秋河

草にむもる」水の一すち

ましたのかする / 著の雪 あら玉のことしも夢に秋立て あら玉のことしも夢に秋立て あら玉のことしも夢に秋立て

天のをにかけし思ひははかなくて木の間になりぬ一葉ちるあと

きのふのかせの松にふく聲 ものふのかせの松にふく聲 ほたるもともに柳ちるくれ

> 古郷はまかきの萩を空にみて 下葉になひく竹の一村 秋の風荻に涼しく吹初て

秋かせに山路のと萩花さきてすそのゝあさちらつらなく也

響とく号へこなさるよい山かせもさはらぬはきのうへの露 かせもさはらぬはきのうへの露

庭にすちかふ在明のかけ色ふかきまはきかはなのすり衣

里はあれぬもとあらのこ萩ふる蓬里はあれぬもとあらのこ萩ふる蓬

山かけて薄霧まよふのへの暮れの千種にむしの壁~~

薄霧にむし鳴ち草花吹てなくさみおほき秋も暮けりなくさみおほき秋も暮けりの

むしのねも花の匂ひもあかぬ野にかへる夕は月になりけり

七園塵第

Ξ

卷節匹百八十

花 第

色への秋の草木の露をゝきて 夕露をみれは草木の鳴に似て なかむれは露の宿とふ草もなし あかつきはおちても結ふ草の露 後茅原むしの音よりも我鳴て たかためいそくはたをりの摩 虫なきて月は影すむ淺茅原 なみたの袖に月はやとらし なかめそたえぬ夜はの月かけ 衣をも重める程に秋更て や中くそてもかはか なじき空も秋は悲しも は更ついあき風そ吹 るやとり 心の色に習きて は夜とそなかけ 2 ħ

野

へのちくさのはな落るとろ 残るかとなをふる郷に歸りきて

秋やなを旅行人のらかるらん

をみなへし小萩か露に吹そひて

はなみたる」のへの夕暮

月草の戸のあさかほのは

15

するとけぬ

花しほ 誰か納にむかしの跡の花す」き まねくとて誰と」まらん初 花す」き袂ゆたかに露をきて かるかやの露をみたる」袖にみて 篠かにのはかなき糸に露置 はるくと露をなかめの草の原 後茅生をはらふ夕の秋風に 庭の千草のつゆの 根をいたむ草葉は花の色もなし た」しら玉そ草のらへの露 残るもられ 秋をさへ忘れはてたる月をみて こゝろにをくや古郷の露 宿へになくさみおほき事を 侘つゝあきをゝくりとそすれ 分る人なきよもきふの宿 つらむかしの人の 筋ほそくつ」く道 のあはれも人による抽 の戸ゆけは秋風そふく れたるみちのむら草 し月のおもかけ H か しは 杨 け お花 かけ

しはしまたなんらき雲の月 みやまのいほに木の間もる月 木のまられしき山郷の月 夕まくれ月も細えの水すみて まつ夜の月にかけそさきたつ 鐘よりいつるゆふくれの月 月しろもみえぬ夕の嶺の雲 うすはなさくらもみちする比 とく出て雲間に薄き秋の月 風なひく一むらず」き色付て 秋の半はのうつる程なさ 春寒きおのへの鼠吹はれて このまゝにそひはてぬへき道ならて あふ夜たにまほにむかはぬ影はうし ひたすらにおもひたゆるも にほふかせふけ夏の玄手 面かけを忘すなから秋更て 夕日になれは影そさやけき 小 の端は霧のほのかに色付て 回 もるかたについく道の 有物を

らみやまし大内山 秋なかはおとろく程 月さへや露ふく風にみたるらん 月ひとりすめる野寺の松の風 めてすとも老やはよその秋の月 雲に月すむらちのやまの 更るや待し月のさやけさ 月うつる岩ねのし水音更て 月らつる眞砂をよるは波とみて 露に月すむ軒のくれ竹 君かあたりにゆかぬよもなし 夕のなみのこゆるむら意 かにせん我か袖ならは夜は 草葉しほれて露そすくなき 時のいたるに身をもまかせよ あふ時は又あかつきを恨にて さよ更で明る妻とは心せよ そとなく夕の雨に山越て あひみる夜牛はとのはもなし 人はかつりて夜こそ更けれ はれゆく雨そ庭に残れる の秋の月 の月影に 0 月

卷第四百八十七 園塵第

Ξ

水まさり行河つらの里

华 44

行月 あき風ふけて月しろき山 晴くもりつらなる器に月更て 空にみはいか」くもらん夜はの月 千里にも月はひとつの空のかけ 玉鳥をみかきて出る秋の月 月はにしなる箱崎のらみ 廣澤や月の池水清きよに とゝろなき雲やは月をしたは iù むらたつ松そなかくみしかき 質よりこそ雨もおつらめ といろくの秋とこそなれ 川上よりやこほり初ら 神さへやあくるを惜と思ふらん つれ の松浦の奥になるもうし つくしの夜はの秋かせ かにねは又もみやとのよるの夢 さ」はしはし恨てもみん カン しの うらの きあらましの道 秋 \$3 B かけ はまし

夕なみに月まつららのとまり舟

そふるほとの露そをきけ

山の端にみし月もやまのは またほに をくらの いなつまに野澤の水のかけ更て **稻妻の月みぬくれをなくさめて** あつまりてこれ あかつきいつる月のさひしさ あかつきは露の底まて月澄て **接覺のまくら月かたふきぬ** 軒は荒て月のくまなき篠の庵 C 語る夜の時やおほえすうつるらん 山 ふりくる雨に人さはくなり 空のいろやいとはや秋に成ねらん 絶間よりほの 田面に むかしかたりそぬ 鴈かへる空をしみれはさひしくて かりのかけをとくるはかなさ るかなきかに残るむしの音 の端は薄き霞にあらはれ やまの に山田のをしねかりほして いてぬ かよふあきの初か 小 4. めく雲の夕月夜 かれむかふ月の本 田 なつまの れぬ のい 心袖なき なつま かっ 也

秋の雨に戸ほそともたる草の庵

めにとそみえれかよふ秋かせ

月に磨して人は出けり

ふねとむる難波のあしのほに出て

理のゆふへのうさそ老の秋 さるなくやまのあきの夕暮 霧よりも猶こまかにてふる雨 とゝろよはくもかこつはかなさ **涙かと草にも木にも露置て** に入月のみなとかしたふらん 10

門田もる聲をまくらの草の庵

ねさめくのあはれかはらす

をしねかる跡は水すみ人もなし

夕日のくれに

過るむら鳥

ねさめする尾上の郷の長夜に

なく聲ちかく鴈渡るなり

いつくもおなし長夜のそら

みやこの月にはつかりの聲 夕日に秋はものそかなしき 住 のめきてなと夕月夜またるらん なれし図をは遠く隔きて

はつ花す」きかりもきにけり 大空に澄をや月も思ふらん

かりの世つけて渡る一こゑ 順のくる雲に稻妻ほのめきて 夜ふけてきけはかりの一聲 在明の月は残れる半天に もはぬかたに月をみる暮

小舟さす八十字治川の秋の水

舟はたに袖かけてみる秋の水

のほとりに月をこそまて

風うちそよくおもかけの荻

限あれは秋のまくらに鐘なりて

この世の夢をいつまてかみむ

と」ろなくねぬへき物か秋の空

月の戸ほそをたれた」くらん

月はあり切にすみ渡るそら

秋風にねさめのとなりかたらひて

夜をさむみらちなかむれは腐鳴て 秋かせに摩打そふる腐鳴て 月は浪まに更渡るかけ けゆく月の影きよき空

八百七

卷 第

百 八

鹿の音はかへるみやこのつとならて 秋きぬといへはいつしか妄戀て 山路行をしかや雲にそよくらん おのへのしかのあかつきの意 妻とふをしか世をは うらみし さをしかに門田の稻葉打そよき さをしかの山田のひたにおとろきて 婆こふるさ山の をしかよる田 つまとふをしか月になくさめ 夕間くれられへかほにも鹿鳴て 野へにねて雨に明さはいかならむ ともなひてゆく秋のむら鳥 露をよすかの月の夕かけ 露やさむけきをのゝ山さと 月に分ゆくむさし野の原 野邊のまはきの花の夕露 もにすまぬ虫も我からねを鳴て まへわたりきく宿のたそかれ 木からし残るみれの篠原 あり明の入かた分ぬ雲かくれ

Щ

を軒端のあき風の聲

椎の葉いつれ松かせの摩 きりにぬれたる器のしる紫 紅葉」にみねの朝霧はれやらて 里古きかきねの櫨の薄紅葉 あらしやは今よりふかむ初紅葉 後芽生のやとはきぬたにあらはれて 風さそふもみちの木の間月みえて たつた川山かせふけは色かへて らすくこく山の端みれは色付て いろいかならんあすのもみちは をしかなく夜寒の枕めは覺て 使のとかそちらす玉つさ すみのほる月の下ふしめもあはて 月には雲のか ろしとやいはんられしとやいは 寒けき水に秋や更ぬ 月はいつくもおなし夕暮 秋の日さむくうつる草むら 秋風の夜はに越ゆく立田山 むしの音たかく月も更けり おつるとの山本のを篠原 ムる夕くれ W

名もしらぬ垣ねの木のみ色付て

かつき月におきなる」山

さえぬる霜におる」朝鳥

霜かれし干草か中の花薄

古郷は菊のませゆふ人もなし

ひとりさひしき秋の暮方

まろひあひたる野への白露

いく世かむすふきくの

しら露

時雨せし薄霧かぐれ日の田て 秋ふかき嶺はさやかに松みえて 松にた」よふみねのあさ霧 しら前の花をこ蝶のやとりにて 大淀の浦のあき風松吹て うつろへるより又もとひこす 朝霧ふかき野 あたなるはあたにも心さたまらす 舟さすかたの月そさやけき 麓に残るきりの一むら 入かたちかき月のあかつき りのなく空に鼠やをくるらん かせいろなき松に峯越て へのはるけさ

秋やたるいつはりは 秋ふかみ古江の蓮はよくもて いかにせんもみちらつろふ秋の夢 程もなくよはひも秋も更はて」 おもかけに鳴や夜寒のきりくす かれ野のすゑの秋の遠山 水ほそき野もかれ かりはつるいなりの 夏むしの酵せし桁秋更て 人と月とのなこりある空 くもるとみれはさしのほる月 月こそ残れ露の草むら 星のひかりもあけかたの 彌生もすると花そちりゆ むくらの宿そ友も枯ゆ み渡せは聴りのほそきよに 今はたさそな廣澤の他 雨しつかなる水の行する ふるき社のあとのさひしさ せに 瀬の摩たかく秋更て くの秋風に 山に秋東て かり時雨るらん 沙

應 第

廿日あまり八壁の鳥に月出て

くれの秋おもがけはかり月みえてくれの秋おもがけはかこ気の空

山ちやさみしとほるあさつゆ 翻無月みれのあらしのいかならん 翻にみれは寒からぬやま

心ありてしくれも月や待ぬらん とゆれははる\*\*素の自雲 このとろもをかされたる山

しくれふり霰みたるム神無月

何をか春のしるしともせん

草のはらをはせめて衰め 優しは昨日の梢冬かれて

木からしの名におふ梢色もなし

跡つけし草は冬野に先成て 原しさたのむ松の木本

おちはも水もめくる岩かね時雨にも苦のみとりは青やかにあかつきの木葉風ふく道のへにあれている。

窓うつ風そ月にとたふるかけ水は木葉うつみて道もなし

軒端に近きみねの松風

水薬にけ夢の道さへらつもれて 木薬にけ夢の道さへらつもれて

**別かこり行うただうでままっ** 松よりいてムからす鳴なり 霜ふりてまさきうつろふおく山に

別かたの霜の木末の天津ほし

朝霜に大和なてしる枯やらてを野の尾花松の一むら

しもの花さく木々の別ほのとのはかくれの山の非の水とのはかくれの山の非の水

14

みれは桁むらく葉は落て

卷

時雨れと月はたのみの有明に

とは

し今はと枕やはせん

報を一すちわたすかけはし 火をたく山にさゆる木からし 消にける跡より霜や結ふらん 消にける跡より霜や結ふらん

木葉のうへに残るまつ風 からすねにゆく野そはるかなる 和きはの松一もとに霜ふりて ないなる 人もわたらぬはしのゆふ霜

であった。 電かれのするみちや哀もふかへら、 をかれのするそみえかくれなる をがれのするでいる。 をかれのするである。 をかれのするである。 をかれのするである。 をかれのある。 をかれる。 をもれる。 をもし。 をもる。 をもる。 をもる。 をもる。 をもる。

もりかねし木葉の後のよはの月気との月ににはとりの摩っきを拂てすめるおく山

冬田きてみるしつのあはれさなかる」水の軽ふく外山月落て水からしの雲ふく外山月落て

**結ふにや板井の水のつきぬらん** 入もとぬ冬田の水の薄煙

暮のとる雪の川つら舟さしてとほりのらへも月そやとれる

こまつほっとと、ここを上とするをとちかき水のさむけさ

濱松の一もと生る陰さひてにほの海や氷をくたく海士を舟

音信し水さへ氷かさなりて 草のかきほにつもるしら雪 のかきほにつもるしら雪

又雨となるはつ雪の空 さゝれ石谷の氷に開ませて 木葉のしたに落る山水

山かけは人のうときを便にて山さとの軒のつら」に日のさして

脆のあらしにおつる木々の雪 うちなかむれはとを山の雪 さはらね松につもるしら雪 かへりみらる」遠の山もと たえくのこる名のよと雲 ねかての霜よの朝戸をし明て

しはしこそ跡をもいとへ雪の庭 山柴に雪をおほかせ納ふきて たえてとはれぬ心のさひしさ 獨舟よふ川の夕なみ 山本の門のむら竹雪はれて

むら竹に薄雲なひき夜は明て

野中につくく道のたえく

雪はるム門山の澤に順なきて とはし今はとたつる旗の戸 日くれ雲こす山のはるけさ

水に消なみにとまらぬ今朝の雪 今朝の間はまたらす雪の降暮 前のとまやをたのむはかなさ

雪の洲さきにたてるつり人

鷺のとふ江は白妙に水晴て

新とリ水くむ山の今朝の雪 いつれもわかぬ雪の真砂地 つなくへき舟や洛にまよからん たゆるもよしや二道のする

人かへる雪の遠郷日は暮て 施にたく火をしるへにそゆく

ほそきけかりの」ほる山本

道たえてふるらし雪も深き夜に つれなきころろろうしられけり

いつの間にふりつもるらん夜はの雪 雪おれし枝さへ松はつれなくて 松にはかせのたゆるものかは

雪ふれはいほり一にうつれて 折ならへたる川住もなし

いつもきょつる入あひの鐘

雪ふれは山しろたへの夕からす かはりけり尼上や雪のつもるらん 国をもとめてらかれ出けり

、我か名をかへて門た」くをと

柴の応かせもあらしの冬こもり

あらしの月の冬かれの山

卷

鴛とりのなみに床かる生田

ひとりすむ興の小島の友千鳥

きてなくさむる雪の暮かた

からすのとまる古つかの上

冬こもる軒はの梅に花吹て

質に似たる山の端の雲

ひとつ二の庵そさひしき

春待や心くるしきむめの花

雪の下たる谷のむもれ木

床ひろき池の水鳥むらねして

際やさそはぬ友と成ぬらん

日かけもこほる庭の松はら

をしのねふれる谷川の

水

をしのゐる梢にさはく夕息

冬川のかすみは水のけふりにて 水のけふりののほる冬川 けしきはかりに春のたつ比 影さむき朧月夜に鴈鳴て 舟のとほりをきしる音はして

おやこの

みちもしらすこそなれ

かりはにとりを残すかへるさ らくひすやをのか聲待冬こもり 埋火のあたりしつかに人はねて 埋火の灰のすさひも更る夜に かへにものとすらつみ火のかけ 狩くらす野への歸るさ月出て 霜のかきねにつほむ様かえ をちこちに狩場の鳥の立別 春の日のうつろふ梢花吹て 寒き風にそめをさましたる 手ならふ節の文字は消けり 月も入風も音せぬ冬の夜に 小篠かすゑにかいるしら気 またさきやらぬ雲の極かえ 命こそたい行来のこのみなれ

寒き江に釣の翁の舟よせて

水寒き鹽干のかたに松みえて

田鶴なく夕ものそかなしき

つもれははらふ雪の夕くれ

をしのなく有明の月の白夜に

なかるし水のするの川をと

やとりにきても波を摩する

四 百 八 -1-七 圍 塵

写深きとしの内にも年越て

すちにつらき戀ちをふみ初て よらんかたなき思ひとをしれ

しのふれはた」かぬ門の更る夜に といる誰とつけもやらはや

たつねは人にあひもこそせめ

かけわたすみすの際より衣みえて 忍ふとてをしへぬ宿を恨なよ 玉のみきりのくれなねの梅

野分せしこすのまとをにみるもうし まとかましき今の音つれ 秋やおもひのはしめ成らん

しら玉をはらへは袖に瀧落て よそにきくよし野の袖に瀧落て ありし思ひは事のかすかは

秋かせの夜はにまてともとひはこて おもはぬ人そ月にかけする か」きくかすめる暮の鐘の聲

契をかねとまたすしもあらす ねたさられたさいからかこたん

> いたつらにぬる夜はあれととひもこて **21たのめそれこそあらめよそにねて** 今はためしもあらぬつれなさ おもふてふこそうはの空なれ

わかるへき嘘の鐘に人まちて 今はた我も夢やたのまん

おもふともくへき夜はかは更はて▲

のる駒の夜聲をきけはそれならて とふへきまては身をもたのます 待しもくやしとをさかる人

待人のこゝろなかきを恨にて かきりは今そとは」とへか

まち佗てきけやと門をさすよはに 慕てはむかふ山の端の<<

待人もこよひの月もいかならん 別ちのつらきにさらはこりもせて

まれにとふよはさへとけぬ手枕に 鐘に人まつゆふくれのそら をちかた人の袖のおもかけ ぬれつ」雨にいつくにかねん

とふ夜はに槙の戸明ぬ人もらし

塵 第 Ξ きぬ打そよき歸るをそ聞

待えつ」枕をとれは鐘なりて 心とけぬ人をとゝめて語る夜に 音信も門たかへなる夜はょうし のとけきとゝろいつかあらまし おもふかたにやゆかてあかさむ 文まきかへすともし火の本

誠ともまたおもはすや新枕 ともし火もかすむ枕に人のきて たちかへりても又やとはまし これも夢かや春の夜の床 た」ひとりねやくせと成らん

たひあへは又みまくほ

物おもふ身には限のなきものを

今はとて出しきぬくいかき夜に

深き夜をはや衣へになすもうし とむれは人はと」まりもせす (にふるは誠の雨ならて

庭つ鳥八聲ららむる衣くに 立やすらへはらくひすそなく 一二のかねそこゑする

> 別路をまてしはしともいひかねて 忍ふれは送りたに出 あさ戸にきけは時雨ともなし ぬ身を侘て

きぬくの跡とていか」打もねん そのま」あくるよこ雲の空 またよひの間の鐘もうらめし

わかれちよいつ聴に成ぬらん

なみたふみゆくきぬくの道 うきぬしつみぬ心つくせり 山かすむ在明の月ははつか

憑みあるとはもましる別路に とろすほと別の鳥のにくまれ 戀こその人つみとかとなれ

むせ助りなみたせきあへぬ衣くに 小車のわもかふはしき衣~~に 明過は人めかなしき衣くに 右や左の人のおもかけ さすかにみちはいそかれもせす つをさたむる契ともなし ひみても父涙なるきぬ E

八百十五

をくりも出し夜こそあけぬれ

ハ百十六

年へたる中のわかれち思ひやれ わかれもあへす戀しきはなそ 夜はくらしあけは人めのいかならん かはかり月日かむすふ新まくら 又あはぬのみ数とをしれ あさきをたにも契とそする 心くるしきかへるさの道 ふ時の心にしはしなくさまて

あたとのたゝ一ふしを恨にて とりすまにあた波かけん袖もうし

わかれしも今は戀しき手枕に

ŧ,

のあはれなり暁の月

そのま」かれん契かなしも

たえなんといふは恨をまとにて 人にくからぬららみいつまて も今はたとはしとやする

いはめ色をも衰とをしれ

我か恨また一ともいわぬよに あらはさはららみにさよも更ねへし きぬくになる道いからせん なるれはうきも身にはいとはす

> わかおとすなみたも今朝はかたみにて あふ事をなにていのらん神無月 たひもとけし人かはうらむなよ 君かわかれしさむしろの文 秋より外の戀のかなしさ

せめてわかなみたを袖にまかせはや おほかたになくをは人のきょ捨て 忍ふおもひそといろくるしき えらへるむしの際そみたる」

拂はしよ人のゆかりの袖の露 身にしむ以に侘つ」そふる 月もしはしの名残とそなる

かす人もあれな涙の雨やとり 更るまて絹液に誰を待ぬらん の火のひかりを中の契りにて らちつけよりやなみたおつらん

かはるをもわか心にはまたしらて らしやむねのみ木からしの床 つれなくは我もといはん中ならて 身にらきふしを猶そしたへる つのまにかは老のきぬらん

座第

あふせなき世にもうき身の名取河

かにせんともしらぬころろそ

たちそふきりのいくへ成らん

あた人と知におもひをなくさめて

たのまはこそはこねもうからめ

命のうちを人のとへかし

よそにはやむかへとられはいか」せん

ぬしさたまらぬ戀もこそすれ

返しみぬ文に心もさたまらす

今朝をもとをくおもふ戀しさ

砚の水もつくるたまつさ

文字きゆるまてふるき玉

つき

衣への跡は災をたよりにて

とはれんとともしらぬ物思ひ

琴てもなしとこたへはいか」せん

これ

や別のはしめなるらん

大のつらさそ騙まさり行いとはればなれぬ先より絶もせていとはればなれぬ先より絶もせて よそのみるめもはつかしのみや ごられはやかて命も消よかし つれぬ智を身をなけく比 ったもなきを別の行編にて 心ともなきを別の行編にて おやのいさめもつらき我か中 情もうきもおなし別ち 情もうきもおなし別ち

打をかぬ文をまなひにおもははや

あかっきまてのともし火のかけ

面影の残る限やしたはまし

渡りみぬあふくま川のつらきせに

枕をしやる山ほと、きす りきーふしにとをさかる中 しら系のなかき契も何ならて たつにそ旅の衣をくれる うつせみのはかなき契程をへて 人のなさけを露にをく袖 今は身のちきりも秋のあふきにて はかなやまては秋本更けり を山田のいなせもいはすうき中に まへわたりする人はうらめし

花をさへわか宿からやいとふらん

八百十七

人と」ろかはるに我もならへ ととのはにたはれしまてを名の立 そめ色もおもひの山のふもとにて いか」みるひえをふもとの戀の山 おもひあれはふしの煙の身にそひて うき身をや道かひにたにいとふらん おもひ捨しは誰かころろそ いつれ待くれかへる明ほの おも とくろの程をなにくたとへん かためつらき人の懸しさ なをなからへは待事やある うきぬれ衣をいつかほすへき うきをあまたにかさねをく人 しらぬ東に我そまよへる ふる郷人もとひ捨し空 かにせんターへのわかなみた とは、涙くみへん我思ひ ほるく補にいとふ春秋 にかくにしられぬこそは心なれ は夜も明やらす月もなし

のなみたそほさん間もなき

大かたの契りをふかく頼む世に かきなてし灰たはつくみたれかみ 心にもまかせぬ中のと絶して こひのさはりは おもかけやおもはぬ人にかはるらん うしやなかく かけは 人のらき身の \$6 行ふりに音信なるへ門の前 うき中はそのはにさへかいらめ えにしあらておなし此世に生れめや そのとのはもあはれなる傳 枕のうへに残るおもかけ 忘すきついそふそられ ちかけれは都の傳もきく物を にくしとたにもえこそおもは さのみに人のなとかつれなき たつねてしはしまよふはかなさ 我なからわれにまかせぬ身はつらし もはしの思ひを月やすっむらん はらふ納にも録そ打ち ひかへぬ駒 カコ も道のやすらひ 2 なしさを歎世に かへぬるみち なれはや

我に人うくつらくして絕し世にたえしのち住所さへしらぬ世に今さらなにのうらみおもはんがしなんそのきはをたにせめてとへおもひ忘れぬ程のあはれさ

山さとに嶺の霞もいつかみんれてをくるゝ身をいかゝせんなに嶺の霞もいつかみん

雜上

本ふさかや春をとゝむる闘もかな年こゆる夜はもくるしき老の坂中まもとおもふあけほのゝ空

又なかめけり春の明ほの

老にはとしのこえくるもうし

八十七 園塵第三

卷第四百

Ξ

卷

第

74

ĬÍ

月花 唐人の舟あそひする日はくれて 花をいとふ心も山 花に行よそめはつかし墨の袖 きけ 古寺にひとりらき世の花咲て 老はたゝ花もむかしの色ならて かた枝くちてもなひく背柳 野となるさとにわかなつむ比 苔にむもるく道かすか 外山の雲はさえか あた人とてもさのみららむ 染やらて桁の雨や過つらん 生 12 0) たに老 やかはつもうたかたのとゑ をはとめぬ茶とそおろかなれ るにまか にめてすは千代も何かせん そかめさまにいそきとそすれ はふにも名残かなしく納ぬれて 郷とや の月の はかすみそ猶 11 かすみ 飯の V せは安からむ身そ りかたの 消 のさはりにて カン もせ ふかくなる へりけ 12 ねら カコ なり 7 け ts N

萩の上の露の命のなから わかれはかなき野 なみたに更る野のみや とれやとのほし ほたるあつめ くらまの山のさみたれのころ 五月雨はさらに五 しらかされ雲を衣に今朝かへて とむるかたなしや防ゆく ねにたてぬ鹿は霞に立らかれ 秋も牛のゆめのよの 又きこゆなり初臨の際 こなたをはいとひて君のそふ中に ふる郷はおもは 登さへと」をせによるき舟河 日かすをふれは近きもろとし 分ぬかたの 夏をわする」袖の夕か 12 れは梢をすくる秋かせ れ 夜をもとをさぬ月の曇る カン ム館ふかきころ しまとのさいか 3 あひの外の天河 0 春 ぬ虫のやとりにて の湖をみて 孙 0 1/1 cp 0 の秋 4 駒 秋 111 7 むか

Ш

の端は眉よりほそく遠きのに

程くに身をいとなみの年の暮

あけぬとさはく道の行かひ

入日にかゝる雲の一むら

ひとりの峯のよその

しら雲

面影も今はかれ野の草の原

人のあとみぬ霜のさひしさ

かはらては何はの何か残るらん

露めつらしくむすふ冬草

世にめくる我かたく火かは村時雨

吳竹のすゑ野の村は霜消て

長月にいくへふるらん富士の雪

秋ふかけなるらつの山越

山をこえきてまよふらき雲

大井河もみちの御舟あとふりて 木のもとの落はに露の音はして ねやふりて風は身にしむ有明に 月殘る松の葉こしの海士を舟 なかる」水や秋をうかふる 野分のあとのすみ渡る山 たえにし中も思ふとをしれ

夏ふかきすその

ム月はほの

かにて

くもりなく海はみとりに夜の明て あらしの雲も納のおもかけ ふる畑さひしとを山 おのへをいつるあかつきの雲 山の端みえてほししろきかけ あかつきの山の下水色すみて なきたるあさにあをきらなは 嶺たかきみとりの木間瀧おちて 夕日色こきみねの よこ雲のはてはあまたにたなひきて 模の戸しろく月そらつろふ 夜をさむみ空にや霜のみちぬらん かすかにみるもちかき釣舟 けさ別をち近人となるもうし まよひ行夕の村に火はみえて 立わかれつる宿のあけほの 山さとの雪に一夜のかりねして ほしらつる夜の鐘の軽! 出る日の質ににほふ山遠み まよ小雲より山そみえぬる しら雲 の無

趣 第三

殿もましるみれの松杉 河をとに楽のあらしもさ夜更て 織しろく雲より上にあらはれて

雲のひまなる造山のまつ かけや入會の鏡に消ぬらん

とを山みれはかさなりにけ ふりそめし末野の雪の絶 谷ふかく山かさなれる道すから 1

木するふみゆくみれのかけはし 夕精さむみからすなく郎

人もなき墨の梯雲おりて 猶も人まつ舟そやすらふ

物すとく河風吹てくる」よに むらたつ霧のあとは晴けり

虹らすきむかひの山の夕日影 さもくるしけに小川かへす人

山さとの道は水本さられ もろともに老のね髭の物語

あらしの松のあかつきの路

うつしは雲になひく松風 何事もみ聞につけて驚きぬ

> 松おひぬいく世の人におくるらん 真砂におつる秋風のとゑ そととしもなき古郷の跡

村とをきみとりの竹に江は暮 いつのまに身にしむ風と成ぬらん

昨日からへし松の木たかさ 磯らつなみのあらき明くれ

年ふれと岩におほるは小松にて 岩ねふむ道の絶くしほのかにて

竹の古葉にましるむら草 なみたはかくも年をへにけり

をのつから岩をかきほの苔むしろ 紫の色こき竹のくちやらて すめとなりたる柴の施かは

をとすさましき谷川の水

岩の上に常葉木間くかさなりて 殿そはたち波しろくみゆ

はなれその岩ほの上に釣たれて 風さはくうらの松原日はくれて 釣のおきなのいつる朝夕 ひとりむかへる水の凉しさ

塵 第三

卷

懸すてふ心はいつも安からて 苔に水おち夕風そふく さすなみやしはし岩ほに残るらん 数そへは岩にも舟の跡みえて

ををくさす潮にひろき江となりて名もしらぬもくつしほかひましはりてわつかにみゆる山の下道

しほひしほみつ磯の岩かね

かさなれは波の上にも浪をみて打よする波のあさみのさょれ石

舟さし下すをとはすさまし

更ぬるか巖にたかき浪のをと

岩のしつくをうくるかけ水 稀にくる山ちの末はしつかに

岩にせきかけひにうつる谷の水

**氷ねしこその深雲の先消て** 

夏の夜とおもはぬ斗月すみておく山住はたゝ(いかり水の心はそくも音はしておく山住はたゝ(いな)の歌

大ひえにのこるをきけや法の道家~、に賀茂の川水せき入てまつかせふくるたかさこの山

霧にへたつるなみのとも舟横川の水のあかつきのとゑ

朝夕の雲の波まのあはち鳥
明石よりてに取程の淡ちかた

いく年を都懸しく送るらんいかなる種そからさきの松

旅にいくらの國を過らんなかめやる心のはてや一まつなかめやる心のはてや一まつのない。

八百二十三

卷 邻

おもふともなこその間はゆかれめや なひかれと質の關を行道に けふりも雲にまかふ富士のね ふしのねは千里になるも麓に かくる山も世にはありけり富士のたけ おなしくは宮とにみはやふしの雪 望とけても望こそあれ 末たえくにかすむ澤水 か cop 名のたつをいかに忍はん我か つくくしとのみむかふ大そら しはしはみゆる山のしら雪 かてころそ春になりぬ かまの消そたくねも波の上 へるにしかし東路 の旅 3 10

古郷に人も老木の松の風 野となれる里に井つ」の朽やらて 住なせは山さとひたるみやとにて 蘆のやのさとの前行生田川 を舟よふ三の補風さよ更て 何なみの中をへたつるいもせ山 草しけき野島かさきは道経て 蓬生も仙木となれる古郷に 八重むくらとつる軒はの夕けふり 哀にもいとなむ海士の家つくり 忘るゝ草の露そ身にしむ ふり分かみの長きよもきふ 木ふかき薗の風の」とけさ 難波の寺にかよふとのは 打そふならは戀やなからん 安くはいかて家を出 あしかりを舟行かへるなり 水に涼しくかよふ前 く夕くれか恨きぬらん ほやきころも露も排はす まし かせ

分のあとはあさきかくれか

武蔵野や行衞に雲のかさなりて

清みかた波に横雲たなひきて

なしき山

に向夕くれ

宇津の山夕闇ゆけ

明やすきよに出

るたひ人 は月川 られしきとも

あふにとそあれ

朽わたるその八橋は敷たらて

卷第四百八十

杉の陰松の木間に軒みえて

をちかたけふるらす雪のくれ

ふかき岩やに誰か住らん

とへと人けもみえぬ古みや

引とつる月細の内の物かたり

立よりてこす卷上る槇の戸に

宿直する幸もよ深き古宮に

ふるきみやこに残る草の戸

天彦さびし雨くらき空

つやさひしきそのゝ納みち

櫻麻にましる蓬の末すくに

さらは身のとくなき數に成もせて

七園塵第

Ξ

道のへのへたての垣ほかたふきて 浅茅風ふく野へのほそ道 軒ふりて物あはれなる草の戸に さゝかにの淺茅か末にいとはへて 露寒き草の鼠のはひ出て 古郷をおもふはかりに日は暮て 草葉たかきにかくれたるいほ みれはいとよりつたふさゝかに つゆを分行道のひとすち 山 打出すひかりのくらきよるみえて 水のけふりそむらにあらそふ 煙たにたつひまれなる草の施 もとのけふりに村はつらなりて 幾度か消では霞む色成らん 巖にこもるおこなひの摩 **賃行淀の川舟みえかくれ** 野澤の水の寒き朝あけ かてらき世になからふる人

在明の月のわつかなる空 寒る夜のあらしにめくる鐘のこゑ いつくをわかぬ雪のあけほの

=

第

四

そむけをく灯あをみ消やらて 鐘 もる雨に床やすからぬさよ枕 別夜ふかき床のさひしさ むすひか ムく野寺の杉に雲おりて へぬる草のか り庵

夢なき床にひとり待る」 みすしらぬさかひにいたるよるの夢 おほつかなきは心なりけり

燈はきえて砧の深きよに

夢も又現をみれはなくさまて

らさやおなしころろなるらん

たのみある事をみし夜の夢かたり 明ぬれは又いとなみの道もうし としをふれともあはぬかなしさ

心まよひは にすめることろともかな かへるあか つき

登ぬれと面かけのこるよるの夢 みえす聲そきとゆ 3

山彦もひとりはいか」こたへまし とのはあれはまなひこそすれ かさて空ふくかせと成ぬらん

> 笛竹やその夜の聲をうつすらん ひとりのむらにかすむ笛の音 遠き野のかへさの道に日は暮て 風ものとかに吹かふるそら

みたれ碁のいしにさはれる音はして といろのうちよみえぬ物 か

更てしつけきともし火のもと

あさはかに書なみたしそ筆の跡 何を誠とたのみしもせん

色くに神代をしるす筆のあと なに残らましとのはの道

なすわさにこゝろの内もあらはれて ふるき世をしるもおもつは筆の跡 歎ありけに琴の音そする

春秋をなす事もなく送りきて 雪におとろく朝明の山

かせかは 今は世に直なる道を忘るなよ 心のまゝにあらぬくるしさ りゆくやまととのは

をい 残るとはに夜は明にけり つ」けはややまと歌

草木はをのか時~~のいろ 人はいつくのさとに住らん 馬草かる跡のみみえて廣きのに 野はうら枯に寒き夕山 がはうら枯に寒きり山

行水に入日すくなくうつろひて一時たつ澤のをしの羽音時たつ澤のをしの羽音

夢りう人もひとりの付きかて、暮はてぬれは舟もかけせすにない持つゝ渡るしははし

おもふと心~~にあるならし歸り行人もひとりの村さひて

松かせや古き市路にさはくらんたちましはりてさはく市人

はは雲井の旅のはかなき
さはき雨ふる山の夕からすめん
いかにねてかはごゝろやすめん
いかにねてかはごゝろやすめん

覧あさる古澤の邊の夕日かけあらぬ色にはなとかはるらんあらぬ色にはなとかはるらんあらぬ色にはなとかはるらんあらぬ色にはなとかはるらん。

雲にまかへる鴈のおもかけ

向らいとろく号かなり首松のはひ枝にさきの一つれ

山本の朝川小舟さし捨て 関ちかく摩すさましき鳥鳴て 関ちかく摩すさましき鳥鳴て 響より上のかりの一行

八十七 園塵第三

卷第四百

いつれはあくる夏のよめ月

第 四

闇の夜の蘆のは 釣舟のあかつきふかく波にきて おちはに」たる海土のつり舟 嬉しき尊そめをさましたる をかのへのまへに木間の海をみて カュ くれ 舟さして

ほしのかけなる海士のいさリ火 夕くれふかきおきのいさり火 霞つム舟こそみえね浪の上

海原やそらも一の夕波に

いさり火の春の夜舟にほのみえて 霞もいくへ遠つ鳥 H

つなける舟のみゆる海つら

あしのやの軒に釣竿たて捨て もらさしところの年を没きて

もくつをや海士は薪とたのむらん 今は波とすあまのすて舟 海にむかひの山そ稀なる

うなはらやこさぬも波を山 雲に明行遠のつり舟 にみて

みちくるも朝夕鹽は跡もなし 身につもるこそ老の波なれ

> うきしつむ舟にも海士はおとろかて あはれにもあまは住かを旅ねにて 打つけにふむ道そくるしき さよのねさめの風あらきころ 釣する舟そ波にやすらふ

道のへの小川のさ」れ石ふみて あら磯の木のね岩間に舟よせて 朝に出る駒のあしをと

水かさまさりてみゆる河つら

流木のかさなる末はよとむ瀬 月につれゆくよるの山道

棋たてる谷の小川の音すみ すさましき色をまさこの水すみて 7

末はのとけき瀧のしら浪 淵は千辜の川そひの あとなき雨をのこす川をと 雲ははや越ぬる山の夕ま暮 松あをく色そふ山の陰にきて 3 ち

きえぬ雪みるたきの岩なみ 夏の日を忘る」山の陰くれて 第

心ほそくもたひねをやせん

春の別におもふ行すゑ やちをたゝすの神もたのもした たつはあふ坂山に手向して たの名にも似ぬ心なりけり 相坂をこゆれは人にへたゝりて

その名にも似ぬ心なりけり 相抜をこゆれは人にへたムリて はる~~とひはりなく野を朝立て かへるさおもふ旅のはるけさ かれる古郷いてはいつかみん 野となれる古郷いてはいつかみん

たっと名残のあまり送きて はぶをわかれなの日とそ悲しむ 古郷をよはひの末に我か出て たっよひきぬる旅のあはれさ 遠ともおもはて出しふる郷に とをくかへるもこゝろなりけり

> 送りこし人も道より歸る日に にとくもに野へのかりふし 立いてし昨日の道はふたりにて たち出し都のかたの空をみて 駒とむる野にかすむ山のは すくなくなりぬよはの虫の音 すくなくなりぬよはの虫の音 や日は山昨日は野への草枕 わかましはりは都なりけり 橋ある世をなと旅と思ふらん 猶なかきよの明やらぬそら 流まくら袖の雨さへふりそひて しらてねしのにさとも有けり 小夜更て犬の遅きく草枕

身はかくてまよひはつへき旅の空 をえく、みゆる山本の道 をえく、みゆる山本の道 ですまくらまた夜をこめて出し野に 一方に定めさるこそ心なれ しらぬやとりのあかつきの鐘 雲はいつくにかへり行らん

第

山ちをしへてやとかさぬ人 宿とひてよるの雨きく草の応 舟はやみ又あとになる沖津島 ひとりくのやとのはかなさ 梓りはるく一分る山みちに 山ちのあめにまよふりくれ 節りみる桁は雲に消やらて つるゝはあしをいたむくるし 興律舟なみの入日をほにかけ 霞をしのく風そのとけき かれたる励も暮れは川越て 宮こはなる」名残かなしさ あとをのみ」つ」いそか的族のみち はるかにみえて雲か」る山 とのはに末の契もさたまらて さも深き情に似たるとのはに 風のをとこそよはくつよけ まとの道はいさめをもしれ 誰とひてあ 哀かけすはさてい はれもかけ カン 10 んわか 世 h て

あるとも草の庵やたのまん

和田 枕かる木陰のやとりよをこめて ともす火のたよりに過るよるの道 うきかりふしの明やらぬそら 浮雲と身もこそ消め旅の空 ふる郷の夢をはのせぬとまりか をくれつる夜舟にみよと火をたきて かろきみは出るも安き旅の宿 かに きえはわか身の跡のかなしさ 末もつ」かぬみちそみえたる おほえす今朝そあさわせらる」 まよふこ」ろの 哀さきたつわかったの道 衞 の山かくれ行舟のうち てみるてみ物思ふなり や山てふ」きにかへるらん つくの山 の原波の一葉にさほさして ねて野 おろしあ 度かたのむやとりを出つらん やいつく秋風 こに か我を待らん かつきの錯 やみいか」せん の空気 夜をあ かさまし

行舟にいつくの山の過ぬらんへたつる雲のあとも残らす 旅にても似たる人ある行ふりに 夢も今をしまか磯のかり枕 古郷に又わかれぬる夢覺て 波の千里を過るはや舟 雨やとりするみちのへの応 夢路へたつるさよの山かせ みちしるへする山の鳥の音 おりのりくるし大舟のうち しら波を舟にいた」く渡しもり つくともしらぬ浦はのとまり舟 古郷の便もまれの遠つ 宮この内のちか 在とみる雲もむなしき大空に いたつらに物みてくらす人おほみ 人をこそ旅には憑むならひなれ 名残かなしくなみたおちけり よるのねさめの水のたえく 誰かとかへりみ送りそする く皮かへり又をくるらん のしほかま 熨

Ξ

卷

四

かりねする松原すこき夕闇に との世かはみやと出ての旅の空 むれるつゝ舟待岸のやすらひ やとるへきものか野中の一庵 越はつる山よりやかて舟の道 おもはすも花さく山に旅ねして をしへつる山ちをあたに開捨て よる田てとをくきにける舟の道 うらやましらき山越に興津か いそきこしかひなく待や渡し舟 ねられぬうさも今朝や忘 旅のつらさをいつ忘まし 朝たつ空は八重の自雲 人もとはもかはり行郷 行もとなるも旅そくるしき まよふとたにもしらて過けり 駒に水かふ人そみえたる 身は心よりまよふとをしれ しほひにしろき石はまきれす そなたよりふく風もなつか 図ふりのかはるとのは

半天のこる山あひのさと 旅に出しやなき世なるらん 消やせんなからへやせん旅の空 陰たかき山をむかねの柴の応 住そむる山そかなしき松の風 きのふのみやこけふのやまさと いりしより嶺の霞を衣にて あま雲のなひく山には住もせて うはかきもきゆる便の文をみて ふるさとの山は雲たに時雨とよ とにもかくにも宮と戀しや 世を捨る友と後にこそしれ 程もへすかはりはてたる人心 幾程もあらしとはかり月をみて 塵の世なからとしそつもれる いつはりおほき文はららめし 度くの便に人の文もとす まちみる程に月そ更行 人はかへらぬ春のふるさと てし都 年か旅のかへるさまたすらん のとをきをそしる

侘人と色みせぬこそ哀なれ 千代ふともうきに送らはかひもなし 大かたの世はみな似たることろにて 吳竹の世をあたとに拾やらて 名残ある事をあまたの世の中に といろほそくも身をそ拾ぬる 世にかくと拾るきはまてしらすなよ おもひたつ世に幾年を送るらん みとりこのなくをちふさになくさめて 身のうき時も懸るたらち 捨はやの世にたらちね むかしなからのこゝろ成け しはしの身をも安くなさは かしこき道は學ふにそある 片糸のみたれたる世にたへ侘て 心よはくは身をもすてめ 人はころのかはりこそすれ 山に入ては安しとそきく 忘はてぬることろはかなや あらは世に又この比やおもはまし つこの岸をわれもはなれん の在もうし

四百八十七 園

卷第

山に我たゆへくもなき老のきて

おもひしつむをさていかにせん

うらやむ山にふたりすめか

すてんとの身も等閑のほ

住山に世のよしあしも何かせん

語をきくもきかすかほなり

なくさめて忘ぬまては何かせむ

第

世といひ幻といふとのはにむといとはすはなにもいつはり我か心いくかくれかをもとむらん我か心いくかくれかをもとむらん

何をうき世のなくさみにせん人をふたりに老やなすらん

理しらぬこゝろはかなやちき時はうきとも歎かすっていまれる世に数ならぬ身を恨くの身のかりなる道をいとふなよ

たのしひにかならすうきはましはりぬ忘てやうき世を人のかこつらん

せまれすは世の理やしらさらん はかなや何をおもひ侘ふらん うしとも人をかこちはてめや うしとも人をかこちはてめや

身には数そふ涙とそなる

入會の明日の聲をもしらぬ世に ひとりのためのうき世ならめや 物いはてとそ身をもかくさめ をもっくかめらるへき御代はうしいさめきへとかめらるへき御代はうし

さなりもまれにむすふ柴の戸消ぬとも誰かしらまし桑門

人ののそみそうへかうへなるともすれは限ある身の忘られておもひたつきはゝあまたの世捨人

中く、につれなきこそは憑なれ千人もめくむ人もありけり

100

又くりかへしかたるふること 老かみやとしへぬ間にも忘るらん わか身の末をおもふかなしさ 立あさへ安けにもなき老をみて いつの間に遺き跡とは成ぬらん こへろは老ぬおいのあはれさ 人こそ人のかゝみとはなれ

いにしへは雪にむかはぬます鏡 さくゐある世を身の担中 ちつりかはれる今の世中 らつりかはれる今の世中

子いく程か人にそはまし うき世の外や命のはへん

物おもへはまた老やらぬ身も老てりなをむしの命あらそふ世中にいつきゝ捨んいりあひの鐘かれてその限しらはやわかいのちかれてその限しらはやわかいのちあたにわかるゝたひの宿くあたにわかるゝたひの宿く

定なき事を習っ世中においるたか身にあたの世中おのこゝろそ分であやうき老のこゝろそ分であやうき

庭しきはうからん事のはしめにて と家かちなるすまゐかなしも と家かちなるすまゐかなしも いける世を幾所にか送るらん 版のかへさを待やたらちれ 今こんといひて其まゝ捨しよに いま聞とを老そ忘るゝ

園塵第三

卷第四百八十七

卷第

百八

身のさかりにそ世をも捨へき 世をわたる道もさまくある物を めくみしをむくはんとすれは事たえて かしときも命はかなくなれる世に 道あるにそふも我とそをろかなれ 心さへよはひの末はそれならて いひのかるれと又つかへけり をしへなはあしき心もあらためよ いときなき程よりみゆる人ところ Щ 数ならぬ身そむかし忘る」 きのふをこそとうつりかはれり 薬かり願くむわさのあはれさ 何 まなひもとらぬ事のくやしさ なと身のくせとおもひきぬらん 何事も我とはしらん物ならて 住も年へて後はいかならん **ゐにわか衣を墨になしもせて** れは雪にあやめをかけそへて ふにあへるもはつかしの身や の道にか名をも残さん からし身と憑むかひなし

中 かねてよりわか後世の道とひて 後世の旅人いつくほと」きす たかきしなにも身をはのそます 三世まてしつむ袖はぬれけり 傳くる道は誠をはしめにて 道ならぬ道の次とそかなしけれ 後の世を行てわかみるよるの夢 つれなしと人を後の世やみる あしきをつくる女のられしさ さそ後のよのたひの秋風 あらはれぬ玉は衣の恨にて 琴のしらへそ色くになる 身をいたつらになしやはてまし 思ひやる道すさましきのへの雪 またるともおもはぬ身こそ哀なれ くの民にや道は残るらん まとをおもふこゝろあるへし はかなくもめなる」人を友として あらぬ身となる老のあはれさ 際はきけともあふ事もなし 程なくかへる旅そられしき

神まつる君か使をまつ図に

をさして行族のくるしさ

おほくの恨其跡もなし

+ t 還 塵 第

Ξ

雲をのみふりにし人の形見にて つねにゆく道こそ誰もひとりなれ たらちねのあとは歎を形みにて 夢やた」ふりにし人のためならん とくろやのこるくれかたの色 旅にしあれは友もかひなし つくくしかふ夕くれの空 あ はかぬ袖よさもあらはあれ らぬかたちを在とこそみれ

君かまつるや神もられしき 大御田に雨せきくたせ天津雲 立さはくねくらの鳥る物ふりて 消にしはいつれの雲となりぬらん おくくらく古き神かき人もなし 使よりなひく心はしる物を よむとのはにつれなからめや 枯木の中にましる常はき 神の社のまつかせの暮

関伽水に菊や紅葉を折そへて 若きこゝろをおこすあはれさ 聞からに身も拾つへき法の庭 明かたの灯らすき神の前 いつみ熊野をみちのくの宋 人かへる御法の庭に日は暮て 道ほそく尾上の雲に寺みえて かたちなき心は空にひとしくて はしめなくはてもなきよに生きて かへりきて都をまもる天津神 拾んとはおもひもよらぬ世成けり あかの水にも袖はぬれけり 佛となふる草の戸の秋 きょみるとそみな夢になる 末まて今のころろならはや 足た」ぬよはひや神も歎らん 古き社のかすむかた原 それかとはかり残るかけはし つるにや廣き法をうけまし しられぬあたは我みなりけり

卷 第

百

なかめはやとよろの月に秋の空 曉の山水むすふ苔ころも 國めくるおこなひ人の旅の宿 はつせの山そわかたの よもすからきく寺 いつもた」月すむ物を鷲の山 いつはれやらん雲としもなし なみ 法のこゑきく山かけの庵 ときも又おそきもおなし法の道 ふたらくの南にゆかぬ海土を舟 くしあらはす法のとは たこほる 人植とこそなれ 人の鐘 むか

山 引かへし法のとはの書文に 室の戸はこけむし塵にうつもれて 新ても君~ たれとおもふ世に とけころも露のひるまをなくさめて 君もた」道ある老や情らん はつもとゆひにいはふしろかみ かしこききみにすなほなる臣 おなし世に生あふこそ契なれ 時代かはれと猶そつかふる 有増よいつか真の道ならん 身の何事かさのみ歎かん しなのやますも御代を祈きて 命なかさを松やおもはん 契のはてはあはれなりけり といろきよきは器染のそて

残れ雪いまよりまたん花もなし 水にちる雪やおも さえけりな淡雪つもる春の庭 四宮左衞門尉家にて和漢聯句に かけ春の庭

はつ春毎に草庵にて連歌さたし侍る發句

佛とそ三のさかひの主なれ 朝夕へにさゆる山みつ まよへる人にやとりか しけり

らつすこそかくれし後の佛なれ

朝きよめそれもむかしの古寺に

もるおち葉をはらふ秋風

みるをあふにて程もへにけり

法のこゑするみれの古寺

**鳴の松のはこしに霧立て** 

わかなよりたまるや雪の花かたみ 東に侍しころ 正月七日六角わたりにて

若草に雪もおしまぬかきねかな 上他院和漢聯句に

にほへ梅はなは色みぬあさ霞

細川淡州家にで

梅か」に成てのとけき嵐かな 吾妻に侍し時那須播州家にて

山みえぬ松は霞のらへき哉

石清水社千句連歌に將軍家にかはりたてまつりて

川かせに霞もめくる麓かな 安富修理亮千句第一霞を

山に海らみに山ある霞かな 細川右京兆亭千句に

雨ならし霞にぬる」草木哉

相國寺藏集軒にて

春さむみ今年やなへてをそ櫻

咲かぬ間やはなの青葉に春の風 在人發句すへき由申せしに

北野會所にて

拳の<br />
等消かへるはなの<br />
桁かな

花の發句に

又みるもおとろく花の朝戸かな 細川右京兆亭千句に將軍家にかはりたてまつりて

色にたて花符ほとの峯の雲 同千句にかはりたてまつりて

花に明月には残るよはもかな

賀茂社千句に花を

花に明松に夜ふかきはやし哉 綾小路わたりにて

色そ花にほひに待ん風もなし

藤田にて

さほ姫のをるやにしきの糸櫻 波々伯部兵庫助所望に

糸さくらちらぬ花しく木陰かな 文龜二年二月十六日清水寺成就院にて

瀧ならし花に音羽の山櫻

松の葉のつきぬ世らつせ花盛 予發句し侍ると夢にみしとてとりおこなはれしに 同年三月十八日松梅院松のはのといふ五文字にて

+ 七 園 塵 第 Ξ

卷 第 四 百 Л

八百三十九

卷

茂木總州家千句に山花を

花そあらぬ墨のしら雲谷の雪 同 千句に人にかはりて水邊花

下水にうとかねなみや花の陰 和川土州の家にて

\*伊香保山温泉にて

花に先あらしをゆるすさかり哉

花さかり雪もまことの深山かな 長尾修理亮家にて千句夕花

花に人と」ろみゆへき夕かな 赤澤兵庫助家にて

日そなかき月に分はや春 の空

かすむよは山さへ月のすかたか 月待とて人く連歌し侍しに Ts

蜷川中務丞春の月を題にて發句してをとすへきよ

山の端か月のきは在夕かすみ 月次發句に し申侍しに

花さかぬさとやいつはり歸鴈 周防國より春京へのほるとて

はなに行こゝろやあとにかへる鴈

二月廿 五 日千句 ĸ

常世にやは 飛鳥井三品に和歌會侍し後人くするめしに つ鴈わたる朝霞

雨にちる花にとかなき嵐かな 攝州より人のとひ侍しにつかはす

面かけにちらぬは去年の櫻かな 細川房州家月次連歌に

花とひて小蝶を残す青葉かな

はなに風くやしかるへき青葉かな 細川讃州にて侍し會に

おなしきころ

霞さへ聴かけてりもなし

月次連歌に

雲雀あかる末野にかすむと山

千句連歌に人にかはりて遅櫻を

八重さくに日かすやらつす遅櫻 月次のためとて人のこはれしに

藤かつらとほれてちらぬ木末哉

梅花藤にゝほひて春もなし 赤澤兵庫助家月次連歌に 上杉禮部館にて慕春に

第 Ξ

暮行も<br />
猶これ寿そ<br />
藤つ」し 夏の發句に

唉つ」け卯花さくら雪もなし 花そ春月日もいはし夏の山

雨にみてうの花しるし雪の枝 一萬句發句に

卯花にもらぬ月みる木陰か 四月二横川一音院にて ts

山ふかし夏さへ花のをそ標 豊原寺西方院にて

水きよく若葉凉しき深谷哉 小野崎下野守家にて

聲とをし人傳いつれほといきす 月次連歌に

ほとしきす人は軽なき初音哉

さなへとるあとさへ水のみとり哉 白土攝津守家にて

えにしあらて宿やはかりねあやめ草 志賀備中守家に旅宿し侍しころ 萬句連歌に標を

ならのはにあふち吹出る外面哉

猶そしたふ初 音の後の時鳥 海邊にて

夏かりに又みるあしの若葉かな

在所にて

摩のこせ月も在明の郭公 岩城總州家にて

五月雨に夏のよなかき刺か 鹽左馬助張行二 15

雨白し空や明かた五月や 孙

五月雨は雲をあつむる時間 遊佐家にて千句連歌に かな

あき萩の木すゑにさける樗かな 豐原寺大泉張行に

相國寺德溪軒にて

月らすし蟬のは山の朝日 蟬鳴て行衞木くらき山路かな 和州にくたり侍しころ かけ

上杉戸部亭にて

千句するよし申て發句をとひにおとせて侍しにつ 丹波より藤壽丸はしめて京へのほりてしはし在て かはしける

撫子ははなにも 佐藤伊勢守興行に 孙 ちの 千 入 70

撫子の露に朝日は色もなし 武州にて在人こひ侍しに

花にゐる露やわか床夏の庭

夏の日や木の下水の花さかり 西部といふ人の家に

あつさ弓入月のとす扇かな 明應八年六月十八日蘆野大和守興行の連歌に

右那須與一末葉なれは也。

風しろく月からは 萬句連歌 しき扇かな

蓮沼千句に

陰原しかくてや千代もそなれ松

松風に原しさいむき泉かな 鞍河兵庫助與行に

藻かり舟はなに入江の蓮かな 千句におなしとろ蓮を

池水のにこりをあらふ蓮かな 成田左衛門大夫家にて 東洗院といふ寺に

> 岩非汲しつくや夏の おなしきいへにて 无

容にやかて花やは三日 の秋の月

三日のよを月のかつらの二葉哉 毛利左衛門尉家にて千句侍しに 神保左衞門尉家にて

花の春聞とも風や荻の聲

おなし心を

朝露の荻にや待し夕嵐

七夕に上肥右衞門尉家にて

今夜のみ空に二の星もなし

年久在て東へ下侍し比長尾修理亮家にてはしめて

名やしたふ松たつ庭の虫の摩長尾三川守興行に 幾秋をふる枝忘ぬ小萩 會侍しに カン 13

なひきあひぬ野は薄霧に 南都にて古市播磨律師張行に 初 お花

みたるなよ露の玉ぬく糸するき 何霧に山のはほそきあした哉

長尾能登守家にて

卷 第 四 空にのみすまぬも月の都かな

月に雲かこたは秋のこよひかな 名をかさねひかりをそふる月夜世 月も人によ」しとつくる今夜かな

Ξ

七 塵

+

殘月 0 心を

夕闇の程とやそらに今朝の月 九月十三夜

更てさへひかりそ錠中月の秋

秋の發句中

きのふかもかへる鴈なく雲ね哉

獨吟に

空はれてかりかねなひく外山哉

八月はかりに

もみちせす青葉にもあらぬ梢かな 伊勢守貞宗朝臣家にて

手折しもくやしや露の村紅葉

月は世をはるかにてらす高根かな

播州書寫山にて八月十五夜

あたら夜の嵐や月に雲もなし 風はなしひかりやはらふ月の雲 空や影循水きよし秋の月

八月十五日

梢をもまたて色こき山田かな

野分せし空さりけなき朝日哉 身にそしむ都にき」し春の風

字佐美加賀守家にて

松や種ときはかきはの菊の花

旅行にて非田政信もとにて

朝霧に興津空行小舟かな 霧はれて林になれる一木かな

上杉戸部亭にて

浦上美作守家に

比叡山にて

山彦に鹿の音しけき林哉 上杉尾州家にて

風もしれ松に秋あるつたか 藤田にて へつら

木々の色は西こそ秋のきたしくれ 月にけさしくれやまよふ薄 紅葉

吾妻より田島修理亮のほりて千句張行せしに月を 秋の葉にあさ霜こほるみ山かな 原といふ山中にて

八百四十三

卷

闘東に侍し比管領の亭にて九月廿五日

木部準人佐家にて十月一日 花さかん敷や真砂の庭の菊

鳥の音も木のはになひく風かな冬にけさ雲も立そふ時雨かな

印打興行に

木からしやたのむに残す下紅霜そ花枯野におしき色もなし

葉を盡すあらしの宿や巓の松一笑軒にて

千句第一落葉

下水に桁はなれぬ落はかな

松杉を冬のはやしのにほひ哉新田禮部亭にて

露や氷るすゝきにいつか玉あられ

茂

木總州家にて

村竹に摩くへもろし玉繧風ませのあとや繧のむら柏

千本常陸介家にて

篠分であさ風寒きすそ野散

多賀谷下總守常州にて張行にはや瀬にもむすふは月の氷かな寒し夜の敷を汀の氷かな

機井野州家にて

短日の心を

刀

みれは水在空のこほり哉

出る日も夕にちかし冬の空

山の端にみても雪待都かな薬師寺家にて

遠山の雪吹は庭の霰かな

雪に風かはるもなひく草木哉」山崎新左衞門尉許にて

木本は松の姿に雪もなし 一句のためとて人のとひしに 空に誰花の種まく木々の雪

朝倉家にて

おさまれる山風 上三川安藝守家にて雪の朝 しるし雪の松

風に今朝ふるやきのふの雪の松 茂木にて千句に

山水のみとりを冬の雪間かな 風そなきなれもやおしむ雪の松

雪はれて竹に敷そふ軒端哉

旅とろも雪にあらたむる闘路かな 雪のふり侍し日白川の關を越侍るとて

此發句にて霜臺張行。

先明で山もとくらし嶺の雪 對松軒にて

庭はなし槇たつ雪のみ山哉 正梅禪門與行に

ふしのねやおもへは雪のときは山 冬の發句に

行水にかりかねこほる河邊哉

水鳥にさ」波たちて風もなし 水に雪はらふもをしの翅かな

> しらす又冬やわか時むめの花 めくみけり春やとなりの家機 人は花梅は春まつ木すゑかな 水鳥の月をうこかすらきね 年内立春の心を 自 川 所々にての會のうちに

たつ春に三冬もつきぬ今年哉 徳川少將家にて

梅か ムのほかは春まつ草木 か ts

むめは冬木ことにさかは花もなし 梅や又花をいとなむとしの暮 冬さくや質をいとふむめの花 寒梅の心を

文龜壬戌臘月末注之。耻外見者也。

飨 載

[右園塵舊本闕今以帝國圖書館本補之]

書類從卷第四百八十八

春夢草 連歌部十八

詠百首和歌 劫點

春二十首

釋

肖柏

干早振かみ代はるかに立かへりあめの浮橋春や來ぬらん 立春

東路の行へもあれと関しく資なのはしの春をしそ思ふ

朝ほらけちりかひ消てらくひすの壁の匂ひにかくるあわ野

さえし夜の梢の霜の朝くもりかたへは霞む二月の空

梅類風

梅の花四方の匂ひに春の風さそふもまよふ明仄の空

河邊柳

くりかくる岸の柳のかたいとをあわをに結ふ春の河風

**遵みとり質やそめしふけわたるかとりの浦の浪の月影** 春曙

明ほのや霞の浦の風をよはみ花に移ふ春のあたなみ 思ふらし天津乙女もさほ姫のしめゆふ空の春 閑居春雨 の明ほ

0

とふ人もよもきの宿は春雨の草葉につけて思ふ頃かな

母こん秋の契 りは嶺に生るまつほと遠し春の鴈金

曙花

八百四十六

**久堅の雲非はるかに過ぬなり月は** いつれとも聲きかまほし夢にたに見ぬ唐土の山郭公 あり明 の山 郭

山田早苗

うへもなき道ともいは、岩ねふむ吉野の嶽の花の明ほの

名所花

櫻花くち木にやとる玉しゐもそれかと匂ふやとの夕暮

タ花

たのめつる人とそあるらし橋の忍ひにかをるたそかれの宿 日くるれはいそくやさなへを山田にうる女のを笠所せきまて

よし

月前花

寄雲花

の山花にそまよふ白雲のかゝらむ峯も長き日くらし

施五月雨

いかならし袖も一に五月雨のす」のかりほの野への夕くれ

らかひ船あかてさし行かより火の河瀬ほのめく短夜の空

里わかぬ月もやいとふかやり火の煙ににほふ暖かさころも

紅の花のやちしほ玉たれのこすもうつろふ庭のなてしこ

竹亭夏月

うた」ねも此比らとし風の音に竹打そよく短夜の月

飛ほたるいりにし袖をいつくとかあくかれ歸る玉川のさと 夕立風

大方のわかれとや思ふ老か世に又逢ましき後のやよひを 閏三月盡

春の色もひたや籍りも松の戸におもふをうしと呼子鳥かな

呼子鳥

行やらて岩まによるも言の葉のよとむをしるや花の盃

三月三日

おもはすはさそはん物からつろはて櫻にやとせ器の春風

あひ思ふ契や花に春の月ひとつ匂ひに霞むよの空

夏十五首

らつり行折しもあれや花の香にうとき契の蝉の 羽衣

新樹館

草

第

八百四十七

吹ほさぬしつくもす」し夏衣目も夕たちのすきの下風

夏ふかきかた山かけてくる」の」草葉露けし蜩のとゑ 六月酸

心さへ清き河原にみそきしてうき世のちりをのとさするかな

河邊早秋

而影も身にしむ比やいもかひもゆふは河原の秋のはつ日

はるかなる年の渡りに妹をおきて立分るらん天の川なみ

荻原やとたえをおきてさよ嵐川を末葉の有明のこる

野分たつ夕は露の玉のをも花にをしまぬ萩のうへかな 月下虫

山 の音にむすほ」るらし行月も夜わたりやらぬ小野の篠原 田上鴈

秋の のいほもる袖のよひつくもいまよりいかにはつ脳の摩

か。 たみさへ花と露とのあたし野に朝ふす鹿や妻を戀らん 深山月

山深みのほりもやらて椎の葉の鼠にふくる秋のよのつき

秋の月夜渡る空に山のはの恨みもなちの興津白なみ 明石かた心と月もすみきけん管屋荒にし秋のうら風

山家月

とひ馴し月は有明になら柴のいほりかなしき秋 月似氷

の山里

清見かた沖の岩こす浪の音を限に月のしく氷かな

思ふらし櫻かさしゝ宮人もかつらををらぬ月のうらみは

身をしほる嵐よ露よ世のうきに思ひけちても秋の夕暮 相坂や開路ふけゆく山風にいはふもしるしもち月のこま

鴫のたつ苅川 稻妻 0 ねやを露にのみ荒しはてても通ふ稻妻

月の色をうつすころもや自島のとは山本に打あかすらん 立田姫峯のいつ 做紅菜 流紅葉 くのもみち葉をわきてかさしの色に染らん

村雲の時雨るゝよりそ山里にとゝろもかよふ長月のそら

冬十五首

夢路より風やしくれの太山ふくす」の後やの有明の空

山 ふかみ在明方の霜のらへに風も音せす散木の葉かな

身の行へありとや思ふ神無月木葉のこさぬ峯のあらしに

夢路まて思ひや絕しさ莚の月も霜夜のうちの橋姫

おとつる」たよりのみして風なから霰ふるなりいさ」むら竹

三島江や枯葉のかけも亂あしに宿りかねたる夕月夜哉

くちにけるま」のあつ」は冬の來て結ふはかりの朝とほり哉 高山冬月

葛城や雲の往來もお 磯干鳥 のつから月のよそなる冬の夜の空

卷

啼て行院磯千鳥ぬれくしてつはさの浪にむすほ」ると

こもり江のまこるかくれにぬる鴨の数々しるき頭のこゑ

松山の松のうら浪歸らすは汀もわかし今朝のしらゆ

風のたて雪のぬきもてしろ妙におるや久堅の天へ羽

衣

をりかへしらたふ霜夜の樽はに夕付鳥のこゑそ打そふ

狩衣はらふとすれは箬鷹のおなししらふにか

つもり行身になけかすは柴の戸に年も暮ぬと誰か思はん

戀二十首

おほかたはいさ自玉のをゝよわみみたれてもろき袖の上 かな

たのみとし神やはけたぬ胸の内の思ひにみてる天の八重雲 **拳ふかみ霞籠たる花よりもおほつかなくてけふも暮しつ** 不逢想

八百四十九

卷

俗はて、入ぬるねやのかひもなし更わたる夜の風のけしきに かならん椎の葉柴の下もえにあまるけふりは思ひけつとも 寄椎柴戀

唐衣人も心をゆるし色のらつる句ひそ身さへくるしき

移香は猶そくるしきまかふやとかねてしめつる夜の衣に

それなから色も句 ひも初花にかたしき衣まよふ夢かな

八日皆戀

いかにせん朝なくへのます鏡かけにもしるきしたのおもひを

くるしくもいさよふ月のしの」めに玉ゆらか」る衣々のそら 寄月別戀

忘れしの心の末を秋の風吹なみたりそまのしかやはら 羇中戀

つたへてよかけん哀もいさや川ひとりぬる夜の床のやま風

朝なきにむかか日もかなともかくもいはみの海の奥つ沙風

ふけぬとてたのみやはせし皆の間の夢をも渡せらた」ねの橋

心さへと」ひかねてかへるなりたか夕くれのすきたてる門 憂世

唐衣つらきゆかりを月草の花にやすらんをの」あさつゆ 寄月草戀

まてしはし身をこそしらめ鳥の音も花も露けきしの」めの宿 寄鳥愁

寄縣戀

ふみそむる戀の山路よ虎の子の思ふ千里ははるかならめや

寄紐戀

とにかくにつれなく明て様の花のみとけし露のしたひる

今ははや人にも身にも夕くれの昔なつけそ入相のかね

雜十首

**赔** 夠

霜はらふ夕付鳥もあはれなりをかやのこやの月の枕に 夜燈

そむけ置てたよりともなき灯の光また」く曉のあめ 閉中開鐘

わか災心よわしや鐘のとゑこたへぬ月のあかつきの空

いかに鼠のかせの山深み夕は袖のねれ

ぬ目もなし

山家嵐

## 時後遠水

雨はる」目も夕風にあきつはの凉しくかける水のうへかな

荒磯の山の木玉のかちこたへ夜の舟路を踏まよふとや

都出てはるくきぬるかひかねや雲井の月のさやの中やま

寄夢述懷

心をはと」めと」めす思ひとし世のとわりよ春の夜の夢

寄月配

あさちふや朝の露も消かへる夕はなきを世々のふること

あひにあひね五十鈴川浪あきらけき時こそあれと秋の夜の月 卅五首

女房奉書

との一くはん御らんせられ候て。おもしろくおほしめし

けられ候ていたされ候。返々御らんせられ候はかりにて もたしかたくおほしめし候て。なにとやらん御すみをつ らけんも候はぬ御事なから。いかやらにもと申され候も 候。御てんの事はおほしめしもより候はぬやうにて。御れ かへしつかはされ候はんするを。かつはとりくにおほ

> 詠百首和歌 住吉社法榮 く候よし申とて候。かしく。 侍從大納言とのへ

いかにもよきやうに御心得候て。

おほせつたへられ候へ

釋

肖柏

春二十首 立春米

らち解てみとりの水の薄氷しはしは殘せ春のはつかせ 初春霞

山はまた朝風寒し春霞衣らちはへ誰にかすらむ

雪中若菜

若菜つむ遠里をのゝ形見とやうちも拂はぬ袖のしら雪 誰里に心の有てをしむへき初音鳴らん野へのうくひす

おのつから小在更にけり梅の花軒はに句ふ春のうた」ね

我門に音する風のをりくも柳をなひくとふ人はなし 行鴈の春を忘れぬ恨をも秋の空にや晴んとすらん 二月餘寒 歸屬知恭

第 四 百 八十八 春 夢 草

É

めし候に。うちおかれかたくて御筆にまかせられて候

夢 草

この比のまた朝霜にさやくなり半は春の荻の焼はら

なかむれはられへ額なる古郷に住こし物を春の夜のつき

ふるとなき音も枕に聞ゆなり夜や深ぬらん春雨のそら

らつる日の夕影遠く行歸りつはめ鳴野の道のはる草

あくかれぬ人こそなけれ山櫻さきもさかすも此とろの空

心たに花にみたさし露はかり稍らとかす春風もなし

ちりちらす問人あれや櫻花ひとりみはやす淺茅生の行

人もなき宿の櫻もいかならん心のとはゝ手をるひとえた

あくかる」心もみえしあやにくの風やいと」花に吹らん

いにしへの春の空まて思へとやわきて入ぬる今日の三日月 欵冬

春暮ぬ今より後の花の露何にかか」るきしの山かき

松間

**唉か」る松より外の山風も色のゆかりににほふふちなみ** 

三川蓝夕

あすよりは天津空にや戀わひん雲のはた手に恭はくれにき

やとりきて更行月と見ゆるまて山のはくらきにはのうのはな 待郭公 卯花似月

恨ての後さへいか ム打もねんまつ行過ぬ山ほと」きす

寢覺郭公

時鳥か」るね覺を一こゑにおもひは捨し有明のそら

五月郭公

つれもなき実懸しるし五月山明ぬ暮ぬとなくほとゝきす 施五月雨

雲とちて五月雨にさへなら柴のいほり淋しき山 のかけかな

夏草の野への茂みに埋ても露もてはやす萩のひと本

飛盤かけさへとほきかりねかなあしやの里の深き夜の雨 夜川篝火

夏の夜の明かた近き川風にのほるもくるしかゝリ火のかけ

八 + 八 春

卷

第

遠夕立

夕立やくもりもあへす過ぬらんいる日を返す山の端の空 樹陰納点

秋の風は山の陰を蒜てもかくやはそてに庭のまし水

秋二十首

初秋風

飛鳥風けふそ身にしむ手弱女の衲もた」ならぬ秋や來ぬらん 早秋露

いつのまに移り來ぬらんあたし野や暮にし夢の秋の白露 七夕後朝

限りなき袖のなみたもあやしきは憂世のらへの秋の夕暮 限ある年の渡りに関し夜や歸る浪にもおもひ立らむ

**获原やふる江** の水にぬる鴨の夢な残しそさわく秋風

やとりこし野原の小萩露置て移ひゆかん花のころろよ

花す」き納やくるしき唐衣目もゆふくれのをの」秋風 山初鴈

え來とぬる夜の山風さえけらし隔のつはさに秋のは つ霜

田家庭

小山 田のかりほにはへる玉かつらくるれは淋しさをしかの際

秋の野を隔ともなき垣内に外面の虫の母そあらそふ 野亭開山

更にけり衛の杉むら別きて最も送る秋の夜のつき

すむ月もよそにそめくる谷の戸を夕ゐるましの雲にまかせて

もしほやく煙もすめる秋の夜のあしやの臭に月倒きぬ

かならし五十あまりのまきくもうかひ出けるさゝ浪の月

4

秋の月やとりし世々の哀をも誰に問ましすまの關守

木の本の間への里は暮はて、松の嵐のうつころもかな 亲r.

紅 敬 映 11

はつ時雨

いかに染けんおのつから秋や更ぬる器のもみち葉

きはある 非秋 露 ム垣根のらす紅葉木の下てらす秋の日の影

八 百五十三

野 B 惜九月盡 今くれ行秋の名残にや思ひ聞る」かるかやのつゆ

らつろはね花は残りてゆく秋をけふせきかぬる菊の下水

冬十首

初冬時雨

神無月こする時雨る」山里よ花にくらせる春は有とも

風前落葉

はかなしや率のもみちは心にも息の風にまよひ行らん

おき出て雪と見るまて庭の面に薄おしなみ結ふ朝霜

聞馴る夕付とりのあかつきもふかきあはれは冬の夜の月

ひまをあらみ軒の忍ふの枯葉にもはかなくかいる玉あられ哉 赔千鳥

さよ千鳥有明の月を遠妻のかたみの浦にわひつゝやなく

池永

芦の葉も松の枯葉も氷とち鳥もかよはぬ山 かけのいけ

常盤木雪

たよりにも人こそみえね陰は猶山路を残す雪の常磐木

心なき雪そふりつむ道のへの打よろほへる賤

か こふせや ĸ

世をわたる人は問こす草の庵ののとかに送るとしのくれかな

戀二十首

との葉のあとは思はてはるかなる戀路ふみみるいつも八重 寄雲戀

たよりにもくたけそまさる移り行秋の野風のゆふくれのつゆ 寄風戀

垣

寄雨戀

あちきなき心の色をつたふやと松の嵐に夕くれの雨

寄月戀

よひくへにさしむかひても忘しの月の行衛をたとる空かな

**寄煙戀** 

あやにくに思ふわたりは空にたく夜半の煙もきえかへる也 寄山戀

うき名のみ世にそくるしき麓にや忍ふの山路猶まよふらん

かきつめてみせはや人に思ふといたつらになる森のくちはを

もり侘ねつらき心のみかさのみいと、涙の川くちのせき 寄海戀

駒の音もつらき別よ宿ちかくさけさらましを前のたなはしか照 寄埋木戀

それとたに人や思は均埋木の春を心のむかしかたりを

里の海士のはこふ鹽木も焼すさふ折もこそあれうき思かな 寄宿木戀 寄鹽木戀

植人の宮木の数にとりもみぬ後きこゝろに我やおもひし 寄柏木戀 よしや又おなし世にたに宿り木の枝さしかはす中ならすとも

契りこそくち木の筆の跡をたにしるし斗に見る世ともかな 寄初草戀

ふかくともわきて思はし初草のひとへ心になひく春風 寄忍草戀

あちきなく思ひも消し忍草移ろふ露もならひなしやは 寄思草綠

夕されは千々に関れし思草しをれ果ねる霜のさむしろ

哀にも風のたよりにかより來ぬ梢の花の露のした草 寄下草戀

限あれは我も今はと打わひて忘草つむころそかなしき

雜二十首

深き夜の風は音して燈の窓しつかなるいさ」むら竹 明ぬやと打おとろけは手枕に閨もる月の影もかはらて 窓燈 曉眠易覺

それとのみ松を残して夕鹽のみつの濱風音かすむなり 名所松

名所浦

雲もなき千里の浪に夜半の月雪をしきつの秋 の浦

風

哀なる老の友つるあはと見る淡路の嶋をかけて行聲

山寺に歸る夕へのひともなし雨打けふる前 のい たは

らちなひく春の芝生の若葉より野へは風こそすさひなりけれ

さまくに渡る世なから朝川や月残る夜の雪のふなひと

里の子のたといひ捨しとの葉を旅のすさひに語りてそ行

八百五十

旅はたゝ越てくるしき山の名のしつはた帶のとけてやはねし

和田の原はるかに見えてかち枕心ほそさは月いつるとろ

山家鳥

柴の戸の岩のかけ道名もしらぬ木草の花そ苔にちりしく

軽なる」原山住も いかるかや富の小川の御代をしそおもふ

森る」まて秋田刈はこふ山陰の里しつまりて立けふりかな

獨巡懷

なからへて忘れかたきもうかりしも哀そこらの老のねさめよ 身におはぬ人も忍はし心こそあかしくらすも友となりけれ

忍はれん一ふしもかならつる世は跡なき夢と思ひしるにも 往事如夢

世に誰かたのむしるしのあたならん我とそしりぬ住吉の神

隔なき心をなに ム隔つらん雪のみ山のあかつきのそら

君か代に雪もみとりもかさぬらし鶴の毛衣龜のけ

ころも

僻墨三十五首

世

詠百首和歌 明應九年十二月廿五日詠初之。廿七日終之。 石清水社法祭

春

霞

春といへは山もみとりの岩清水動なき世の影はしるしも

朝ほらけ埋もれはてん浪の上を小鳥ほのかに立霞かな 薄かすみ心ふかしやさほ姫のにほはしそむる春の明ほの

わか納にまたき移ろへ山里をあくかれそむるらくひすのとゑ 若菜

いほ近き田つらの小芹唐なつな春のすさひに行心かな

晴もあへす麓はふかき霞より雪にわけたる春の山 のは

花園やおくある春の山口にしかつの梅のかつにほふ比 うとくなる人もこそあれ行 くにとろも手か れす近ふ梅か香 + 八

卷 第 四

春 夢 生 うつし見よ風のすかたもわかるてふ六田のよとの春の青柳

霜枯の野山の末も春雨の緑をそ」く天津空かな

古郷に今か待らん玉つさのつはさくるしきはるのかりかね

光すむ月も半は春の夜の心なしにもかすむそらかな 祀

待人の恨にもあらす淺茅生や露けき花の春の夕くれ 袖とのかさしもしるし思ふ人なきにもあらぬ花のやまふみ 敷しまや花のいつくも吉野山かつらきかけて匂ふはる風 うちはらひねん方もなき苔むしろ嶺は嵐の花のしら雪 あやなしやほころひあへぬさくら花霞にこめて匂ふ明ほの

玉川や下行水もむすふまて朝露しけききしの山ふき

谷深み古枝は龍のはひのほる岩ほと見えてこゆる藤浪

あはれなる春のわかれよ馴べてひととをたにかたみとやせし

更衣

けふはとて狭にらつす卵の花の浮身わするい垣根ともなし

はるかなる月の行への時鳥鳴てやしたふ有切のそら 時鳥は山 しけ山忍ひねのふかくは誰を思ひいるらん 五月待花たちはなの匂ひさへなにかをくらす山ほと」きす

はかなしや道行人のころもてに早苗うちかけうたふをと女子

自妙の花の夕はえこれやこのあまのはころも匂ふたちはな

五月雨

雲ふかき五月の空の雨くもりそれもこ」ろのすめる宿かな おしなへてみをにしつめる五月雨にとたえも見えす天の橋立

あかす見る軒端の影や吳竹のわか葉の露に短夜の月

それとしもわかぬ夏野の村薄はやほのめかす秋のは つ風

うかひ舟山は木 しけき麓川あたりまて」る演

ん々のか

ムリ火

吹まよふ風さへたえて飛ほたるしつかにのほる夕間 八百五十七 のそら

在

葛城や谷の川晋立のほりくも井にひょく夕立のあと

片敷のころも手凉し玉すたれ風吹とほす特のむらさめ

御そき川浮身をらつす麻の葉はかき流してもをしけくもなし

色見えぬ千枝に移るや昨日けふしのたの森の秋のはつ風

から衣恨わふらん一夜ねしいもこひしらにあまの川かせ

誰にかも思ひよそへん秋の夜のふかきね覺に下荻の摩

夜を寒み移らふ嶺の朝霧に拂ひもあ へす鴈は來にけり

程もなき真 垣 の内 も萩の戸の秋に や通ふ花のうへのつゆ

秋 ふかき山 の温 8 なれぬ とや しの ふのおくのさをしかの摩

心すむ住居 8 V か に世の中のらきにまきれぬ秋の夕くれ

鳴てい

にし鳥も此ころと」へは容のわかれそ秋になくさむ

秋田

かり残すいなはの風にかた間の田つらのくぬき音を寒けき

澄のほる月は雲間 住の江や松の下枝のゆふりよ八重の鹽路の影そいさよふ に高圓の宮の古みちあふ人もなし

袖に猶契りはあれや折しらぬ月の柱の影やすむらん 誰か見んいく夜の秋の有明に猶限りなき月のひかりを ふし待の月の枕にはた織のうちも休まぬ音のさひしさ

そともなる桐の下葉も雹いつれかさきの秋のおとつれ

分のほる行へもさひし槇たてる外山の里の秋のあさ霧

**唉みたる色の干くさをうつしもて何ひに浮ふ菊の上** 秋風に音信そめしからころもころもへすしていねかての空 の蘇

身におはぬ錦 九月盡 おり かく秋深 き吸はた山 の楽

はつもみち年にかはらぬ山

邊をやわきて時

雨

雲も問けん

のもみち葉 0

時

もるほとの休らひもなく杉いたもてふける板やの初時雨哉

山陰の風のゆくてのは」を原惜しけにも散らす紅葉哉

夜や寒きをかや

の軒の薄煙り見えてつれなく残る朝しも

カコ れやらぬ影とし見るや春近み下に期らんのちの冬草

袖かけて氷もゆくかいさや川近き旅ねの床の山

かせ

霜の上の月に寐覺ぬ里人もあらましとにをしき冬の夜

要やなき夕浪干鳥むれて行中にひとりの摩のさひしさ

をし鴨の深き霜夜に片よるや玉藻の床の所せき路

玉霰しひのは山をしのき」て音もよわらぬならの下柴

山高み嵐の風やかさしとし九重 11 のよも のは つゆ 놝

卷 第

四 百 八 + 八

春

夢 草

> 哀なり雪のみたれに引とつる交のムみ すさめこし木草も雪を待見すは山里住のかひやなからん 0 ムさムのかり施

立鳥のいさよふ見れははし鷹の上毛の雪を拂ふ間もなし

應狩

炭かまの煙のもとを立歸るかた山かつのねや」さむけき

行歸る市女あき人我らへに暮ぬる年と見えもする哉

战暮

寄風戀

たのめた」空に吹とすつくはねの風はうきたるたより斗も

手にかくる物にもかなや天の原すめるみとりに浮ふ白雲

思ひわひ空にくゆらす煙をもそのと」なき雲のうた」ね

袖に見よいたつらにやは山 ~杜 しなの木幡の森の霜の下葉を

る開

迷ひ行戀路や V カコ に白河 の闘より 遠き和

坂のせき

絶せしの世々の行へにちかひけん哀かけてよ字治の橋守

く橋

八百五十九

よるとみしおきつ玉藻もはなれそに動かす波の便たになし る薬る 卷 第 今更にむすほ」るらんつれなきもとけてはえやは花の下ひも

跡たえて思ひいるともさいの薬の深山もそよと人やあやめん

5 かにせん時雨もしらぬ色よりも深き心を杉のもとたち

あちきなし思ひ铭ては鳰鳥の浪の浮災をよるへとやせん

思はすや垣ほの柳移ろはん下薬にか」るさ」かにのいと やすくたに明す夜もかななき名のみ代猪のかるも埋れはつ共

ます鏡我影なから忍ふらんとふらんとたに思はさらめや

うちもぬる隙もこそあらめこも枕たかせの淀の一夜なりとも

あれにけり臨 もつかしと思ふ身をいかに待みん間の小むしる

I ねしや千へとそたとる蟬の羽の夜の衣の夢のうつりか

うちゆるふけしきをいつかみたらしの梓の弓の心つよさは

数ならぬみほの興津のいつて船早くも人のらつりに

しし哉

存行も浮鳴もひとりねのむかしこと」ふかねのこゑかな

しの」めの質なからに龍田山夕付とりの群にほふなり

そむけおくいほの灯壁に生る草葉よりけに青き陰哉

夕浪に光くたけてもりそむる月を薬分の松からら鳴

王敷の砌の竹にはむ鳥のしつかなる世は今そ待らん 山里のおなし夕も世のらきに出にし人は猶やくるし意 山

にほ鳥のかつしかわせを対しより励もとたえぬまるの繼はし 羇旅

田家

山のはの契りもよしや詠れは玉の緒ゆらく春の明ほの

今よりは猶や浮世に任せみん夢の行への七十のそら

仰き見ん國のしるしは實とも成りて神代のふしの柴山

詠百首和歌 春二十首

**霞行むまやの道のすゝか山越らん春に闘の戸もなし** 關路早春

湖上朝霞

霞の みなきたるあさをふかめけり満ひもしらぬしほつすの浦 霞隔遠樹

里遠みほのかに見ゆる片岡の霜の林やかすみかぬらん 羇中聞驚

あかなくに行や別れん旅ころも日も夕くれの野邊の鶯 降家竹陰

吳竹の宋葉の風も吹こさぬ垣ほにねたき驚のとる

川邊若菜

里人の行ての田つらけふはとてみとりのこ芹目にやとむらん

第

20 百 八 +

春 夢 草

野外殘霉

昨日今日野守か庵の通路に泰見え初る雪のさ」はら 山路梅花

山里をいとゝひ行は梅かえのとたえをつきて匂ふ春かせ

梅薰夜風

風ゆるき春の手枕梅か香にさそはれきてや夢にとふらん

くち残る柳の糸にやとり來て春見えわたるきしの川風 水邊古柳

雨中待花

疹雨にうとき人をも<br />
櫻花さかぬ<br />
限はうらみしもせし 野花留人

天河秋の契りをよすかにてかたの」櫻やとやからまし 遠望山花

行てをる心のかへさいかならん千里にかすむ由さくら哉れる。

故郷夕花

木の本の花に光りそ別行月は有明の 古郷は花に晋する便もや待ことならむはるの夕具 曉庭落花 しの 83 の庭

7

河上科月

春 の夜の霞につ 深夜歸應 ムむ玉島や光更ゆく川 なみのつき

八百六十

炒 AL.

春の順ころも彌生にふけぬ とや明るもまたき思ひ立らん

藤花隨風

らつろふや池の藤浪吹かへせ春の宋葉の庭の松かせ 橋邊数冬

唉か→る花山吹の衣手に朝露はらふ字治のはし娘 船中莽春

行春にさそはれぬるか夕彼ゆらの後のなみの船人

夏十首

卯花隱路

吹そふや卯花かきねとはれしの行へを見する雪の下道 初聞郭公

此とろのならぶ花なき藤浪に初音あらそふ郭公かな

雨そ」く青葉の陰のつれくしに心ありける山ほと」きす

池朝西浦

山陰や蚊遣くゆらす夕煙いとはぬ人もらとき宿かな ふりにける野中の池のあやめ草遠里人に今朝や引る人 開居蚊遊火

橋の かきかをりに故郷はあとはかなしや夢のかよひ路 照橋雅思

杜五月雨

よそにして思ふもくるし五月雨にほす口もしらぬ衣手の杜

野夕夏草

夕くれは風を吹とくはかなくも結ひすてつる野への夏草

川浪にみてる螢もさ夜更てあるかなきかの谷のかけ草

行路夕立

ぬれつ」もゆかまし物をやすらへて照日くまなき夕立の宿

秋二十首

初秋朝風

秋はけさ泊瀬をと女の玉かつら露ふき結ふ風や凉しき

月も日も同し今将を一たひの契あやなきひとりねの空

間月七夕

唉とすやしめおく小の 」垣内に小萩鼠る 」夕くれの陰 野亭夕款

霜やおく聴月をひたす江の汀にすめる下荻のこゑ 山家初順

江邊曉歌

山里のするのかりほの朝露になみたやおもる初隔の壁 浪間より松にか 海上待月 ムるや夕暮の籬のしまを山のはの月

松間夜月

ともわく方そなき心さへむ深山見月

草露映月

自露のかやかみたれに身をわけて千々にやとれる秋の夜の月

**夜半の月西になるまで木幡山さゝのくまなき影そ殘れる** 

田家濤衣田家濤衣

夜を寒み山田のをしねもる醪に遠からぬ里も衣打也

舟人の迷はね道もしかすかに渡りかねたる朝霧の空古渡秋霧

秋更ぬはらひもやらぬ木枯に色とそ見えねをのゝしの原

秋風滿野

むら草はまた咲いてぬまかきより花やかになくすゝ虫の摩籐下閉虫

山中紅葉 時雨せし今一しほやもみち葉の沈む影とすうちの川浪

紅葉寫水

タつく日みねこす後も山深み柴のとほそを照すもみち葉

卷第四百八十八

露底植花

朝顔の花ともわかすおもる也古き鱶のあきのしらつゆ

河邊菊花

ター 合 という なれにし月も暮かたの秋になるをの松の前風身にそしるなれにし月も暮かたの秋になるをの松の前風

神無月いもやすからすあかすともかことはかけん初時雨かは初冬時雨

をしと見し嵐の庭のもみち葉をわするはかりにおける朝霜舞生落葉

屋上開飯

さえし夜の曉方の間の上に夢もくたけとちる霰かな

古寺初雪

**庭** 事脈入 を事脈入

問人のなきも思はしいにしへの跡も残さぬ宿のしら雲

水郷塞鷹水田で見む心もあらし海士衣濱松か枝のゆきのあさ風

みたるとも夢路は残せ三島江やあしのかりねの深き夜の霜

八百六十三

华

春夢

草

湖上千島

さゝ浪や八十の湊のいつくとか妻とふ千鳥暗て行らん

寒夜水鳥

をしとりの獨りぬる夜の思とやつら」の枕むすほ」るらん 歲暮澗水

戀二十首

といまらぬ年にも有かな花にそみ木の葉に朽し谷の下水

初游綠戀

橋姫のたのめぬ物をはつかなるしるへあやふき宇治の中道

思はすもはかなき特のとくさにかるを聞そ身さへくるしき 忍親昵る

おなし野に咲ましりても崩したに露けき故はしられし 所不逢と

たのみこししるしの杉はそれならて同し思ひの三輪の茂山 旅宿逢と

哀れまた草の枕の面影をいつくの里の月にやとさん

**兼服覧** 

今朝のまの一筆もかなたのめしはなをさりことの行へ成とも 心ありて人もねよとの鐘の摩打もわすれよ時のそら 歸無書

すいしくもかさねし小夜のから衣いく秋風のひとりねのそら

もろともに世のうきふしも忍ひつ、長らへとしは哀ならすや

年ふれと思ひおもはすほのか成人に心のうらそくるしき 疑眞偽る

返事的へ

他にしらぬ筆の句よかきやりしあやしき跡をいかに見えけん

思へ人身はあまの子に浮浪のかかるあはれもならひなしやは 被厭贱る

途中契る

忘れすは契やはなき玉ほこの行てにかけし一ことのする

忘住處く

あ

ちきなし空しく歸る槇の戸のつれなきをたに面影にして

あ れにけり草木も人の心とや有し垣根のおもかはりする 依戀所身

一吉や池のみくりのなからへをなにしか人のうきにかけけん

住

里達 み通ふ心の旅ねにも夢やはやすき道の山 隔遠路

風

惜人名る

おもふとちかりねの夢に移ふや梅をかさしの野邊の萩原

都より紀の關こえて三熊のゝはてなき浦に出るたひ人 山家夕鼠

さま!一の世をのかれきて夕暮の嶺の嵐に身をまかせける

玉さかに影する人も新おふすかたはかりの谷のほそ道

舟いたす浪に面かけ八十島の夕暮かなし鹽かまの消 月翳中友

あまさかるひなのあら山荒野にもこふる雲井の月そ伴なふ

旅宿夜雨

圏なる音を身にしむ八重ふきの萱か軒はの雨

のかりふし

海邊曉雲

明やらぬ浪にたゝよふ鐘の音にほのめきそむる沖の横くも 寄夢無常

身をも世をも思ひしるへきいさめ哉春の三月のうた」ねの夢

**答草述懷** 

空蟬の世をはおもはしか」るまをとなし草の朝夕のつゆ

寄木述懷

年ふとてかひもなき身よ足引の山邊にたてるくぬ木成せは

於 第 四

## 逐日懷舊

道は皆あき瀏になりぬ飛鳥川昨日の淵にかへる世もかな

禁不まてらくる惠や久かたの天照す日をあふくかみかき

恭二十首

櫻花琴ねもいらし 櫻花よしまたるとも面影をよもの梢のはるの 更るまてかすむ恨を思ひ 梅か香もわくるををしと宿るらん九重のたをやめ 玉ゆらも松の上葉に宿りかせ霞にそ」く 詠むらん山里 しけりしくれ 染あへぬ似の衣にほふなり柳さくらのはるの初 こと」へは住世をうちの里人も伏見の田井に若菜摘 おし 露も今朝吹そむる花の なひくけしき許を春風の霞に ム散としもなき吳竹に驚さそふはるの なへて人の は霞にけらし櫻花暮やらぬ色そむすほ カ: ~ 晩っ D かけて浦なみの開路かすめる須磨 n 心の 0 色も明ほの」春をは 明ほ 晉 は 氷をもけさや吹とく して 0 7 ねの夢路さやけき春 花 上に宿りか Щ 路 もうこか カン チ 力。 ははるの 83 ムる寄柳 ねてや 3 82 敬 四 は 孙 いのあわ 一方の 3 あ 墨の常磐 12 わゆ カン ムれ行 0 0 あ 0) 0 级 it 夜 の明 まつ つ氷るらん to は 10 6 K 0 喜 II 3 0) 月 杣 也 カコ き 風 世

> 朽にける故木の橋を山川に又さきわたす春のふちか 霞をや天の羽とろも春の野に飛立雉の明か 詠てそうさもまきる」花にさへ老はつゆけ さまくのなさけを春の留め置て心深くもわ ならて散やさゝ浪自妙に花の かけ しく 庭の た き夕なれとも かれゆくらん 0 こる it み 0

## 夏十五首

急雨 郭公こ 生駒 桶 濱 は 時鳥路をは 3. 更る夜の蚊やりの行 タ暮 ほとしきすたくひもえやは久かたの天津空に すみのほる在半の光りに時鳥あらそふ壁や月ち 撃しのふ山ほとゝきすさそひ出て影かくしゆくゆふ月夜哉 から衣かふる袂もにほへ す」しさや岡邊の早苗徳にも出ぬ秋を獨りの松風 かなしやあやめににほふ短夜の夢路明行軒の E にほひや宿 は の露うちは 111 や債 行人も 外 ゑのにほひを待けらし春におくる」山 木々の若葉の下染や紅らすくにほふしらくも 111 0 10 かなみおとろくも it なし t 3 4 B \$. U りの下も 久かたの月の 石 あふちさく木陰の小 へそれとなく木 風 の音 かた月 とや えも夏あらは も梢に高 しけ いつれを夢のみしか夜の 0 か いく夜を五 つらの 弘 末に煙 き夏の 0 櫻 れ 11 П る岡 に早苗 よの П まもち て飛遊 なのさよ \$ さくらは しら 有明の くる 0 つき 0 るら か ~ 0) 20 の里 か 壓 恕 4} à 15 む

水

夢

草

から衣 風寒み 12 清見かたさし とふ人 別石かた山 そとひなく光の淵や さらしなや夜深き月 夕月夜やとると見れ 花薄をとめや袖をふる里の 身をか 月 やとして うちわひて小鹿なく いかならん思ひ 敷しまの大和もろとし契ありて桐 とや m そ 里 8 曲 秋二十首 あ 館の竹にいくたひ も思ひ 獨たつらん n 秋のわ つ野守 村のこる 離心より 猶をりかへ カュ カン 'n It 16 于し き川 B 絕 は 0 3 15 カコ 16 まの 0 やりても る影 路 小 秋 か れよのへの露木々の木葉もたえぬ契り 15 見えそめ D: ふくる夜 せ教 秋ふ りほ 山 15 0) の末まても句 0 つくは 10 なり秋の田のそよともいはぬ婆や は掛ちる片 から衣目も夕しく 月ともとなるをの 初鴈の摩吹送る樹の 田のをしね 秋の浪浮ひて清きいさよひ p カン 富 萩 秋 か月をふき越すさ夜 の業を風 士の 0) てねよとの き椎の薬山のよな ねの暴より出る月の行する みかきか か枝 0) カン 風 ŋ 人名の雪にけ 崩 天 0 0) カコ 财 ひを袖の かくれ 0) 0 の下葉の秋を告らん けの松 原の秋 源にそめてうつ かさし 河原 0 鳣 衣手花 の祭 12 0 はなれそ のふかきよ たれ むし のゆ きくのしらつゆ まつ 0 b しきの の秋 カン 1) 深 0 たてそ のとる ś. 小 ぬ秋のよ カン H は カン 0 0 少 かせ t 夜の摩 のまつ とろも むら 3 ねか 4 0 0 つき L こる 0 月

今朝 静なる 深き夜 見し花は山 飲やらい 天津空みてる霜よのらすくもり切か 等來てみし秋よりは 霜 かり衣雪はうち散る夕暮のとたち 更にけりいたつらふしををし鳥のら はるかなる夕浪ちとり淡江 たちならふ花しありとも自妙の氷のうへ 吹となき朝風さむししと」なく霜のかきね あはち島待遠ならし住の江の松に 響にとしは末 見れはむすほと 7 の雪の ふや 懸十 心やしるへ 時 五首 風そ吹らつみ火のねやに明行 南 らく はたへ の下薬椎柴に又こと 築の 世 杉 0 ふけ Z にらす色の れつる冬の夜の まで生ふるみ カン 7 け E 3 のくまひま行駒の影もと」 の月の 初時 6, 15 衣々をしき資 一雨冬は來ぬらん杉たてる門 のね覺をとふ 70. ふけや 111 の原をお 22 き中 船に たた寒 夢路 へてらつあら かく うか らぬ 春 加 でき月の 0 は霜 れ 0 b K L 0 夜のゆ ふこゑ 冬の 積るも 0 ひすてめ U 力 いさょむら 0 荻の よとく か 0 とりなく n け は ょ れ カコ 33 まつ みち カン か 0 tz p 月 折 ts 12 TI たけ

杣 特 雲 特 の上は ねとし里 の間はよしや心の初花にむすほ」るとも翳の 0 色風 た 0 0 やをの山香なしの湖をは けしきに む心の なか はらふ 80 まに夕く ても心 0 2 礼 杣 深 の飾るさの し道 ムらきゆ しは たひ 0 0 F.D カン TI

懸草のちから草を引牛のくるしむいきを我むねにし か しらせはや小教片しき官城の「踏をは鬱の夢の明ほ ą, 駒の昔も今更ゆめとおとろくや哀よかなしましのつき橋 なくさめよ衝影をたに心とや花にもとめししのゝめの空 見よや人夕付鳥のこゑし、に楠はたつたの山そしくる」 今更に千々の一もこひしさのましる涙はなに」おつらむ 今行たに心をや見ん馬はあれとかちの」はらの雪のふ 行いる心や見えん八百なおもひしる身はさしともるとも i 田 力 川河かせ寒みおもふひとなきにしもあらす夕暮の み川浪にいな舟いかならん思ひのつなて干すちかくとも けたるとさ」につけて獨寐の 雅十五 いくよの霜の跡を見せは 7 0) 多ア 22

字治山 秋 わ 露寒み岡 軒端には稻はかりか 夕暮の色にそしつ 飛鳥川吹しく浪にもみち葉の色の淵澈を見する山 松に吹風としもなし雲うつむ嶺の岩屋の夕くれ あしたつの行へやりの 深み梢おちくる杉山のまつのらら風沖つしら け入は吉野 やは 3 0 欲あさち カン の樹の鱧の際また雲ふかし岩のかけ ĩc のほ む立鳴の壁はる がけ山 る川鷄 3. かつらかた稍にやとる聴のこる 陰 0 ふか の外面のえの の簡におつるみね むる秋 か なる野 知 み色付にけ 10 へ の 色か な のこる のしひ柴

> 陪住吉 社壇泳白首和歌 を注すかいましたみちくる魔の深きみち哉 高代の計かためとや櫻花夕かけそふるいすゝかはなみ 高代の計かためとや櫻花夕かけそふるいすゝかはなみ なりにける松のしらへの琴の音を法に打そふる樹の夕くれ よりにける松のしらへの琴の音を法に打そふる樹の夕くれ とえわひねをひえのかけを思ひ越し雲はうす雲のこしの大山 とえれびれためとや櫻花夕かけそふるいすゝかはなみ はない。

 春二十首

牡丹花

音初川

四高みこえ來る春の香刻川雪の氷もしたにとくらし

玉嶋川

高砂

消浪の晋もかよはす春の風それかとやとる高砂のまつ

若菜つむ今朝も打ちれ春日野や霞はらときそてのあ

総にさそはれ行は

輪山の質のおくにすきたてるかと

行へなき心やまよふ明わたる花のくも井のかつらきの山

志賀浦

春の空なきたる朝に伊勢の海士の世に浮目かる心もや行

花その」春のむかしをつれりくと松もやおもふしかのから崎

みしま江や芦間も春の下萌に結ほ」れ行鳥のかよひ路

鹽電浦

しほかまや春は霞に浮鳩の名も顯れて遠さかりぬる

字辉山

そほつめりらつの山邊に思ふ事しけき野中の春雨の空 芦屋里

芦の屋の海土のもしほ火春の夜の月にけたれぬ影を残れる

吹上濱

春のきるとれや食のから衣吹上のはまにた」む消波

湯等三崎

夕暮の霞はかりを行へにてゆらのみさきを過る船人

春深きしけみのさくら何ゆゑの忍ふの山に匂ひわふらん

京また春もうつり 的水無瀬川ふりにし宮の花のやまぬ

おほよとや松よりほかに行はるのつれなき空を浦の夕意

田館浦

朝なきに霞の袖をうちかへし今やおり立田子のうら波

末松山

うち侘てたれ除むらん彼とゆる春のちきりの来のまつ唐

夏十首

夏木立陰しつかなる大井河浪のあらしの山のあさ風

信太杜

忍ひれも何かをしまん郭公しのたの杜の深きやとりに

夏衣いつしか凉しみなと風吹やとすらんねなのさ、原

御袋酒河

神風や清き光りにあやにくのみもすそ川のみしか夜の月 いつくにもけふと引らんあやめ草いかほの沼にかはる一しほ 伊香保沼

天香久山

かけて見る神代の鏡夏の夜の月もやすらへ天のかく山

大江山

色

大江山にしにうつろふ夏の日の桁はるかに頭のもる降

夏苅のあし間にやとる都島なには堀江の跡や問まし

美豆御牧

はるかなるみつの御牧の五月雨に同し渡りをたとる船人

うちむれてみそきすいしき松浦川山は忍ひに通ふ秋かせ

秋二十首

はつ濱山一葉の秋の朝鼠色の千しほも何かおもはむ

田山

花に見し墨や龍田の山優時雨もまたぬ秋のもみち葉 即磨浦

さらてたに月はいねかての秋の夜を須磨の闘やに寄する前浪 宮城野

見せはやな古郷人にみやき野の花にらつろふ秋のころも手 水粒岡

秋深き夕の色にそめ出す誰か水くきの岡のへのまつ

をくら山庭のね 小倉山 かなし遠からぬ都いて」の秋の夕くれ

字治川

水上の山いかはかり秋の色それにも見ゆる字治の柴船

つれもなき常磐の杜の露時雨心をつくす秋のくれ哉 三室山

秋のおる三室の山の唐錦神の御前に手向すらしも

あさの納ぬるともわかむ高圓やふりにし野ちの露 仰駒

の篠原

秋の夜と頼みてそまつ伊駒山時雨の雲にいさよひの月

池水も色にそうつる秋の風生田の森に立にけらしな 生田池

淨見關

行月のうらみもしるし清見潟とる後の明方の摩

武陵野

長月の伊吹の山 むさし野や萱か覧れに妻乞の思ひを見せて小鹿鳴也 伊吹山 の山風にとしのみそらの雪を打ちる

佐及科里

をは捨や川吹拂 ふ山風に小蛇か上のさらしなのさと

開

限なき西の空よりとし秋のまた深からぬ自何のせき

秋の日のうすき名残にみたるめり野嶋か崎の彼の夕路 明石前

さても
輪ふり
ぬ光りよ
明石かたいく世の
空の秋の夜の月 阿武隈川

瀬を早みあふくま川の埋木に残る木の葉の秋そいさよふ 冬十首

**峯の雲しくれもあへす夕月夜清瀧川の淑々のいはなみ** 小鹽山

千代のかけ誰も符見よをしほ山小松か上につもる初雲

消風も霜夜のそらに住の江や松の葉拂ふ曉のこゑ

いかさまに鳥ふみたてん群暮す交野のみのゝ雪の下柴 田錢嶋

みそれすと田袋の艪を來て見ればぬれる一立る鍋の一學

夕暮の雲のけしきも有乳山こえむ空なき樹のしら雪 有乳山

みるか内の夕日にはる」雪の松鉄の浪に浮嶋かはら

安達原

霜あさやま己つきらつきもせいあたちかはらの冬枯のいろ

かくしつといなはの山に今年はや来葉の松のかたみは 鏡山

かりに

立かへり幾としくれぬ老のなみからみの山の陰もはつかし

戀二十首

伏見里

奥竹の葉分の風にひとりのみ伏見のさとのよひく のつき

はるく、と質の補の夕月夜おほつかなくて世をつくせとや 石瀬杜

はらふなよ露はかりたにとわりをいはせの杜の木々の秋風

袖の上にくらへくるしきつくは山皋のもみちのいく千人とも

抽油

背へや誰か思よりかけょらしためしもつらき袖のうら波

類めしにいを安くしもねめなはのうしや統田の池みとろしみ 益田池

うつせ貝かひこそなけれ沖津浪高師の濱にくたく心は

Ħ 八 + 春 駐

卷 銷 四

您

阿沒手杜

朽はて

内思

ひの

下葉

いく

世かは

あは

ての

杜に

むすほ

れまし

受身なとあやなきこひをしかすかの渡りもやらす楠ねらす覧

みつ鹽に復名の橋のさよ千鳥まよふ戀路のしるへやはせぬ 職間消

たのみ來で歸る職間の補設も最面松にいか」くるしき

守山

よしやた」忍ひこし名も守山の時雨の下薬色に出てん

世のならひあやふき中に東路や名さへうらめしさの」舟橋

深 からむたよりならすや埋水浸香の沼に生ふる草葉も

したもえによそへてを見よ松島や月澄秋のあまのもしほ火

恨みしよ心にもあらて折々はをたえの橋を中のかよひ路 絡斷橋

便なき道いかなれやふたらくも思へは行て見くまの」前

鳴海浦

らとくのみなるみの前の忘貝あやしき人の手なふれそゆめ

心より補にくたけて玉くしけ二見の松の風そくるしき

名取川

なけくなよ思へは人も名取河湾からさりし世々の水上

雜二十首

よし野川青根か峯の急雨にまさるともなき顔々の岩なみ 芳野川

さくら花移ふかけはするか河春をやそ瀬にせきも止めす

不盡山

鈴鹿川

すみのほるふしの煙よ春秋の緑の空のいつとかは見む

週山

いにし春別れし秋の歸る山哀むかしのか 海上橋立 ムらましかは

松の風浪にとたえてさ夜深き雪の渡せる天のはし立

あすか河跡らぬ水のとわりにふりにし里を思ひなしてよ

冬されはその里人も影見えぬとはたの霜に腐の一と私

辰市

夢 草

樣

かち枕夢路もたえぬ秋の月ふけひの前の沖津 布引龍

山ふかみおつとは見れと高き名や千里におほふ布引の流

玉川里

又たくひなからの橋のはし柱朽木のはしもあたにやは思ふ

夕闇にまかふ気やいにしへのよる光りけん玉川のさと

大方の世はうきめの み生の前にたる事なしの行へをそ思ふ

旅に して有明の空の長月や見し面形はさやの中やま 佐夜中 ш

立いつるさかの ム秋の夕こそと」のかさねの匂ひ成けれ

角田

嵯峨野

かちにあたる浪の音にもすみた川古き渡にすむ心かな

引かくるおなし市女の手作りもしかまのかちに心有けり

松の色芹の枯生もことの葉に移ろはしてよ若の浦具

三非濱

行のまの南の風に朝しほのみつの濱松陰を原しき 詠三十首

石清水社法樂

牡丹花

立赤

明ほのや松に春たつ風の音も心そすめる韻 の神垣

容の色を千種にこめて天の原限りもしらす立霞か

いつちともやとりさため口梅か香の心をしるや春の夕風

春の夜の空しつかなる松風に霞もすめる庭の月影

見花

春の風吹なみたりそ明ほの→花のかさしの霧のしら玉

うきにたへすらつりも行か櫻花よしやと思ひか

へす夜も哉

Щ かつの垣 郭公 ほつたひに付ふなり際にあまる松のふち改

ほ 0 かに b カン 10 過 H ん時鳥みつの ム里のしのムめの空

月雨

待出 る月としも なし五月雨の雲のとたえの村雨 の空

里遠み夕立すらし玉すたれ吹まとはせるのきの松風

思ひあへめ光をそ見しひくらしの鳴や梢の秋の三日月

ふちはかま色も匂もから衣袖にをしまぬ野への朝露

と」むへきかたこそなけれ腐金の閉ゆる夜牛の袖の白口

秋の露やゝ寒からしさを庭の聲も移ろふをのゝ萩原 Ш

はるかなる音羽の山 浦月 の山あらしも都の月にふくるそら哉

難波かた題干にうすく成にけり浪にかたふく沖の月影

大方の袖やは 花すりの朝露 か をしみ秋の野の形見の衣うちすさふ也 ムるさよ時雨す」の 篠屋 の明かたのそら

落葉

哀とや村々のこる神なひの杜の木の薬をとふ鼠かな

没みとり雲もまよはす明にけり雪の光りの山のは の空

秋の風身にはしむとも聞るなよ忍の間のつゆのかる萱

不逢戀

はかなしや思ひ思はすといへはむなしき空の秋の夕くれ

春の風あたには過し花のかの契りやおきしかたしきの袖

もとゆひに排はぬ 别 のみか代俗て今朝は移ふし ig **‡**3 も影

しの行 よいかに月やとる袖のわ

カン

れ 0 有

朝の

空

忘れ

うきなから 猶や伊勢をの海士衣昔をかけ し須磨 心の消波

嶺高み思ひ 0)

雲もか」るめりつもるうらみのちりひちの山

恨

鐘の聲いつとひ拾ん覺やらぬ憂身の夢の瞻のそら

道しあらはおろかなりとも君か代を祈心は空にみつらん 詠十首和歌

春

住吉社法樂

牡丹花

らちなひき春にらつろふ世は花の光りも陰もをしき空哉 天地のひらけし代にも春の色や分で心のたねと成けん 夏

大御田をうゑめのとゑもすみの江や秋遠からぬ紫の松風

おらてとし小萩か上のいかならん遠里をのゝ秋のむら雨 彦星の妻むかへ船待ほとや月もいさよふ天の川なみ

暗千鳥たよりともなしかち枕おきの小島の有明のそら

今行たに思ひもいれしおくみえぬ心の花のしの」めの空 獨のみ詠むれは猶おもひ草朝夕露にしけきとろか

なけかしよとにもかくにも老らくは心も虚ぬ敷しまの道 日くらしも鳴ねとたえて横の葉にいる日を残す拳の天雲

夏日詠十首和歌

住吉社法樂

牡丹花

新樹露

秋の露思ふ若葉にくれなねのとたえあやなく茂り行比

海邊郭公

らつりとし山郭公すみの江の松にやとりを月もをしまし

五月雨

かきともる宿にかとたし天の下かくとそあらめ五月雨の空

風やたつ夜深き露の聞れ芦に宿りもあへす行盤かな

林下納原

行ま」にひさ木の茂みむら柏風も忘る」陰の凉しさ

かけて吹雲よあらしよ忘れては心見ゆへき夕くれの空

かされつるをしの袋をいく夜とかむなし氷の床にしくらん 逢不遇戀

翳中戀

消鶴鳴月

夢にとも何か旅ねのすか遊ならふをはらふ十ふの浦風

身にそしるふけるの月に老のつる便も狼の曉のとゑ

社 短風配

八百七十五

草

春 夢

卷 錦 四 百 八 + 八

かけまくもいへはかしこしみつ垣の代々に傳へし敷しまの道

十首和歌

天滿宮法樂

牡丹花

久かたの空は霞も立馴ねあけほのしるし春の遠やま

後みとり移らか比の梢より遠き山辺の雪のひとむら

梅の花四方の匂 ひを心あれやせはき袂に分る春風

よそふへき匂ひよ誰と白露の玉をかさしの背柳 の糸

つくにも思ふ行へをふりすて」するの御時に節る隔金

更るまで質 の月を鐘の摩うらみかれてや消かへるらん

いく春の老の末まてあくからす花やい かなる匂ひなるらん

影うつる花山吹のから衣ひとへやひたす春の川なみ

面影の質める花に詠して忘れ形身の春そくるしき

神祇

聞れあふ苔のみつらもしらゆふに姿ふりたる神垣の松

住吉祉壇 詠十首和歌

牡 丹花

明ほのや深き質は き霞はつ」めとも千里の客にゆく心かな

山深み契りか置し百千鳥歸りまちける初さくらはな 深山 人傳郭公 北遲

明縣 心すむおのか夕や天の原深きみとりに秋のかりか 心なき身に人傳の初摩をたにさそなをしけき 遠天旅順

ね

明月如晝

むは玉の夜るとしもなし秋の月朝の雲の夢や待見ん

水鳥馴舟

あし鴨も朝夕浪にみなれ棹さしも離れぬたな」し小船

哀し れ思ひ暮して蝶鳥のうちかたらへる花の手まくら 相互思戀

さたかには思ひ思はすみえしとやくまく、深き水並の跡 披書恨戀

晴後遠水

夕暮の遠山本のたまり水琴もゆかは大澤のつき

松契遐年

干とせをもかけさらめやは思ふ事印をみつる住吉の松 住吉社壇詠十首倭歌

牡丹花

昨日けふ聲うち霞む沖つ波春をこたふる住吉の松

深山路や真柴の垣ね村々に日はさしなから残るしら雪

春の風千里をかけて梅の花咲るさかさるわくとしもなし

川つらの山本物さやかにも朝日らつろふ露のしらたま

島る鴈春の海邊にうちつれて汀に残る壁そさひしき

さしいるも更行ましに霞夜の月のか」くる窓のともし火

白妙 の花におほへる明ほの」春のかすみや天の羽衣

うつりとし春の千種も忘る也八重山吹の花のゆふはえ

春戀

あひ見しを思へは人もうかれけん朧月夜を中たちにして

かきりなく又も干とせをふる壁の春に立歸る和歌のうらつる

けふの春いかに知らん久かたの空も置めるとしの暮かな 年內立泰

年の内に心みしかき老樂をなくさめとてや春の來ぬらん 立春

なし心

ことの葉の道に歸りて久堅の天つ神代の春立らしも

正月一日攝州豐島住吉社にまらて

容は來い誰代に思ふ萬代も是やためしの住よしのまつ

年々此社にまらて侍りき

73 住吉の松をたよりにけふの春老の末葉に迎へ來 かくしつ」あかす八千代も七十の春を契りし住よしの松 瑞館や萬代かねて松の葉の同し緑に春立らしも しなへて世に待えたる姿の色ひとしからめや住吉の松

住 たくなはの世々の春風けふとのみ霞にけりな住 の江や松ふく風の春よりそやまとしまねも今朝は霞める 住吉社法祭に海邊立春を

吉のは

卷

立存存。年々試能泳之 天の原日影ににほふ春の色をしきつの浪も今朝そ長閑き

世にみてる人の心を梅の花いふはかりにもにほふ春かな 天つ風わきて東の空もあれと梅か香よりや春は立らん 契ありて吹にけらしなくる春の千年のかさし句 梅花けふもあまきる雪中に春來にけりと匂ひ出らん 久かたの天つ乙女の衣手も梅か」よりや春はたつらむ 明渡る空にそにほふ春來ねといふよりまさる梅 Ų, あ 天地のひらけ つのまの春にそみけん空の色千しほに旬ふ四 まつ風ほのく切る梅か香に世は打なひき春や立らん 永正十三年正月一日試錐に立恭天 し代より梅の花今日の春にや匂ひそめけん 年々試錐詠之 方の梅か ふ梅かえ 初花 枝

年々詠梅花とせすして改題。

正月二日の月を

又の年の二日に

昨日とそ年は越しか三日月の空より高くすめる影哉

**春楽でもさえける雪の山の端にそれかと霞む特の三日月天の下拳待えたる誰も世に心あるへき今日の三日月** 

哀なり老の末まていくかへり見そめし空の春の三日月ねのつから春はこもれり山のはに霞むともなき三日月の春の色に霞初けり一年の月の匂ひやけふの三日月

早春

おくふかき春にそ質む百千鳥ほころひ初る曙のそら雪もまた絶々まよふ草の上に霰みたれて霞むはる貝

早春雲

今朝みれは彗吹まよふ天つ風音もかはらて賃む春哉早春賃

早春雪

沿ぬか上に霞むやいかに吉野山かすかの野へに迷ふ沫

雪

過みとりかすみの衣はらふなよねれぬはかりの春の沫雪

足引の山とし山も雲風のをさまれる世をはるの色かな

時わか

82

みとりに成ぬ自彗の残るを

春

の債の常磐

木

昭や霞なからのふはの山積の薬つたふ春の沫雪

名所早春

誰も見よ干とせの客を高砂や松に宿して立霞かな 松たてる紫の霞も千とせ山猫 久堅の天つ神代の春を今朝御裳濯川に引霞かな いく返り春にあひ見ん

淺線今朝を移ふ春日野や空は霞のゆきのしたくさ 名に高き富士のしは山春來ても雪の麓にたつ霞哉

住吉社法祭に初春

住 浦浪の千里をかけて住吉や春風立ぬきし の江やとたえては又春霞八重の鹽路に岸のまつかせ おなし心を 0 ひめ まっ

空は今朝から藍染を敷島のやまとの春にたつ霞かな

四方の空春を神代の妻こめに八重垣作る朝霞かな 久堅の空にこもれる深みとり春待いて」今朝霞むらん 泊瀬法樂におなし心を

春としも今朝はあらしの音なから檜原に霞むをはつ瀬の山 源賴豐(能勢因幡守)城にて嶺樹帶霞

梓弓万代かけて春かすみたなひきにけり紫の常磐木

恆隔遠樹

はくく もおもはさらめや朝霞生 田 の森のをちの船人

> ほ のかなる梢のをちの木末まて薄き霞に残る野へ哉

朝霜に見えし軒はや夕くれの霞のおくのさとの一むら

ゆくくる見まくほしきを夕霞遠山まゆににほふ袖かな 山霞

風にみかく白玉椿今朝みれは霞につくむ高さとのやま

< たれの黒髪山の明ほ のをゆかしけあれと霞む春代

ね

生 一駒山 ふかき霞も面影の高根らつまぬ春の明ほ

住よしの岸の姫松かすむ日のゆふへもしらす返る浪哉 萬代の数にもあまる白玉をしきつに電う春の浦波 住吉の松よりあまる朝霞浪を千里にそむるはるか 住吉社法樂に tz

20 なし心を

朝 世にしらぬ春の心やみつ汐の入江に霞む玉つ鳥山 明る夜の浪に霞をあらはすや衣の浦の玉つしまやま きりのむかしをかけて明石かた霞の内の春をして思ふ

霞もや心あるへき四方の海に名高の浦のはるの明ほの 濱霞

卷 第

0) 本は いつくわかねと朝霞みつの濱松のこるはるかせ

彻

行 なき霞の内に明る夜のあさつま舟を誰したふらん 上霞

三島江や河風ならしかりこもの飢れて浮ふ朝彼かな 難波江や与朝はかすみに玉か しは埋 れのこる淡路しま山

關路貨

來る春を關の川口さえなから空はしのひに立質かな るもしを上におきて讀传し原上質

るりをしく質なからに若草のあしたの原は露のしらたま

早春繁

昨日けふ春をまちとる梅かえにほころひかぬる際のこゑ

朝なく質めるの へや自然の深山にむせふ驚のとる

盤川谷

驚も雲ゐる谷に埋木のはなを都におもひ立らむ

ゆき残る梢をよきてあくる野の霞を傳ふ驚の軽 雪なから切れは 14 麓のこをする野 ふかみ句ひ出たる驚のこゑのは 邊の曙にちりすてて行へ春のあわ野 かすむ異竹のふしみの里の鶯のこる つ花雪なしをりそ

朝營

朝またきいつくの野への花の香にさそはれ出し意の聲

夕月夜にのかなるまて梅か香のあかわ匂ひに鶯のなく

うつり行谷の梢に開ゆなり川音遠き鶯のこゑ

鶯の壁のしら玉氷るよりおのれらち出る瀧の本かな 瀧邊鶯

野を遠み夕日かくれぬ鶯の一學のこるいさくむら竹

あをらき

ふりかいる雪の色さへあをうまをさやかに照す夕月よ哉 七日子日なりしに

わか菜つむけふしも引て姫小松とを数多の野 への春哉

称をしる人にひかれて雪の中の老の心もわか菜つむなり けふといへは門の **沫雪の降からをの」はつ若菜われても摘ん今日の諸** 前野に里人の市をなしつ、摘着菜かな

延雪

おそくとく枯し草葉の心ともいか、前田ん雪のむらきえ 名残とて人もすさめぬ奥山のおとろの朽葉雪そこほれる 野外殘雪

伊駒山嵐の末やかすみしく遠里をのにまよふ沫ゆき泰雪

山さくら花まちとほに或ねとも嵐にまよふはるの沫雪(徐寒嵐)

吹向ふをひえむろしにくる春の霞いさよふ志賀の浦浪

春立つと驚きしまに今年はや二たひ見つる三日月の影

又の年二月三日月

さえにけり空は二月はつ春の影におほめくけふの三日月

梅の花さきにけらしも太山邊の雪間打出る春の初風

春の花色も千草の行へまてほのかに句ふ梅のはつ風

あさいすとよそにや見えし玉籐鴫かけて匂ふ梅か枝鴫更梅

夜梅

梅瀬夜風

春の夜のはかなき夢も梅か香に夫かとたとる小信の道具

野近紅梅にほひ深く月もかすみたりしに
いくたひか見さりし影にうつるらん更めくる月の窓の梅かえ
り前梅

梅か香も質める月も春の夜を身はならはしのいねかてにして

山家梅

心あれな春の山里稀に來し人もうち見ぬ梅のにほひに

里梅

吹風にらかれ出ても古郷と立やかへりしふかき梅か香

获の菜の酔にまさりて身にそしむ軒はの梅に句ふさよ風

春の池の玉もの花と移るまて衣手かれす匂ふ梅か枝藤原正盛(池田遠江守)亭にて池邊梅

梅香遠葉

梅花句ひはそらに飛鳥のあすかの里や遠つ春具

**梅薰**且

千岩酸神代の種や梅の花あけほの匂ふ初春の風をえるへし風も匂ひに成そ行梅咲山の春のあわゆき

春の風まかせてを見よ様かるの心ととはん里もこそあれ様の花句ふゆふへは身を分て空に心の春風そふく

明ほのを待見さらめやうた」ねに句は捨し梅のはる風

夢

车

卷

第

海邊梅(尾崎宗琳茅屋にて)

前風も心ありきや梅か」の質みとめたる片の八重ふき

から衣行手にとめし梅かゝを心あさしと排ふやま風さそひ來る風の力やよわからし殘多くもにほふ梅か香

草庵にて権發得客といふ事を

小島卵 体花干しほのうへの匂をもとゝふ人に待見つるかな

あさみとりそむる柳のから衣今朝そたつたの春の川風

川邊柳

春をへし川その柳おきふしに朽はてぬ世を胤れ侘らん天川や春の河上七夕の手染よりかくる青柳のいと

青柳のいとにこきちらす朝鮮の玉しま川に霞む茶風

百川やたてる朽木のかた枝にも風のすかたは青柳のいと

山もとの川風よわみ春の色に夕日をそむる青柳の糸

柳階風

ららむへき花の行への春の風宿りはあれと背柳の糸

柳野

さほ姫の千縁にかくる白玉の露とも見えぬ青柳のいと

MI RO

櫻花うつるふ比やおのつから思ひ立らん春のかりか

h

島内離々

おくれつ、迷ふは花に心もや引かへさる、春のかりかね

島版

琴の音になかのほそをゝ引かりの一すち霞む切ほのゝ空雲非にそこたへて霞む面影は苗代水の春のかりかね

いかさまにわか身むかはんとの葉も心も悲ぬ春の曙それとなく天飛鳥も此比の花にうかるゝ明ほのゝ聲九重や思ふあまりに思ふかなえそか千しまの春の明ほの春曙

**刚中春曙** 

むかかにそ身さへくるしき花鳥も色ね似さぬ春の曙

山高み原にさゆる春の夜は黴も空にいさよひの月雪あられさえぬる空と見し程に風に霞む夕月夜哉

哀をもいかに問まし春の夜は心ふかくも見ゆる月かな 誰をいとひ誰に見えんの影もなくひたや籠りに霞 をしましよさむる枕も春の夜の月の都のうた」れの夢 むりお

和田 の原質はれつ」渚らつ音のみのこる月のゆ ふ波

春は又霞のころもうちかさね月に夜か れぬすまの浦

初 煙たに霞なそへそ鹽かまやさらても月は春の夜 もふへき姿ともなし客の夜の朧月夜の和哥の浦 の空 かせ

白妙の眞砂の數 あやなしや霞なからに明石 も濱ゆふの百重にかすむ春のよの月 かたはまの筈やの春 の夜の月

ゆらの戸や月の小舟も棍をたえよるかたしらす霞むよのそら 三月の三日月

花かつら長き日くらし待出る空にそ霞むけふの三日 初秋の空に待見し影もあれと花の木の間の今日の三日月

H

唉出 ん花の世をまつ此比 の心や誰 \$ はるのみや ひと

卷 第

兀 百 八

+

赤

想 草

吹ねともかくこそはあらめ朝霞をくらか積の花の面懸

雨中待花

窓の内に思ふもかくや春の雨のやしなひ立ん花の面かり

都人春の錦のころも手に山路の花も見えやわふらむ 櫻かリタ付鳥 とひ行は野にも山にも櫻花心まよひの面影 もはる質たつ田 0) 14 I こゑに ほ もうし

櫻花とひ行末は山ふかみしる人ならぬ鳥の音でする いたつらに分るもよしやかへるさの山はいくへの花のしら雲

山 路琴花

花の本たつねもゆかし見すもあらぬ嶺の霞の夕暮の色 **櫻吹春にしあれは百皷の大宮人もやまちこゆなり** 

琴山 1E

おくしらぬ花のこゝろやいつくにも問は忍ふのはるの山ふみ 遠勢山花

討ちをわけそほちつ」夕月夜霞む山路の花の 連日待花

初花

迷へた」質にくる」

遠山路なきたる朝の花

面影

面影

**根花はつ時鳥初もみち色ねにもあらす霞む明ほ** 0

八百八十三

まち 心よい to に櫻 花我にも あ らす to か 5. 明 H 0

丽後初花

さくら色にまた染はてぬ春のあめの四方に 花 いさよふ昭の空

誰 に猶残す思ひそとけてたに今朝は露けき花の下紐 中花

カン カン は櫻り すめた」もろこしまても敷島のやまとの か面影にさほ姫の霞る花とたれ か見さら みかは花の面影

夕暮は花の宿りを容質風もよきよとかこふやまか 雨中 祀

らすくもり雨とも見えす櫻花ぬる」質なる春のゆ 天をと女そめし心やよしの山花にゆふへの雨となるらん 祀

花 世 V カン にみてる色も句ひも天の戸のあくる待ける花さかり哉 は世におなしにほひの春としも思ふ人なき山櫻かな にせんと 0 世 のも のと櫻花思ひかへすもあらぬ句ひを

花 明なはと誰思ふらん花 の色にうつろひ消て明る夜の高れに賃む鐘の降かな の上に心をやとす春 の夜のそら

¥2 や誰霞のころも花の色に匂ふからへ 0 明ほ 0 ٧ 249

> 立別れ思ひな消そ相坂や Щ 樱厂 0 春 のよこくも

思ひつ」ねての朝けの横雲に夢ともわか 手枕の花のひ かり にうは玉の夢路うつろふ春 記证 かし 0 面 の」め 力 け

山さくら風 攝州神咒寺にて十首に同し心を むこの海かけて花にそ賃むしの Ĺ 83 0 空

櫻吹よもの山邊の朝くもり花にまかせて霞むともなし 春の夜や岩戸の むか し吹花の光りに切る天 0 くやま

はかなくも待とる花に夕月よ宿りもはてぬ影と見なから

花の上に誰夕くれ 0 かねの學質にけらしを泊瀬 の山

H

V かにせん花に風もとわりの宿りわかれぬ夕く 7年 施に人々來りて歌よみ侍しに 花 心在山 ħ 0 Щ

あ やなしと花の宿とふ人やみん四 方の山邊に分る心を

花

移 後級役に残ら ろふや朝なくへのさくら色にひとしほそむる四方の 高み雲井のさくらよそにてもあかすは何を春 ぬ白雲の花にいく 0 あ まの カン の曙 cop ŧ 14

の端

残る日の霞もあへね花の上に夕風たちぬ春のやま里

れ覺ても夢かとそ思ふ鐘の聲野寺の花に句ふ明 けほの

風をいたみ足柄山の櫻はなちりかひくもる浮鳥の松

うち 加 川上花 へす暖か袂も雪とのみ風の花のふるの 小 やま田

田家花

夕川や吹おろす風のあらし山花にやすらふ春の筏士 はし煙の袖の別や思らん花もいさよふうちの川風

しをれても待人あれや夕嵐ふけともちらぬ花の一村

遠村夕花

閑居花

かすめともなにかさひしきこてふのみ味ねし花の夕暮 部の宿

玉簾おろす夕もしらぬまに程なく花の明るかけかな

岩は しも絶なはたえれ とは かりの花に明行かつらきの山

さゝ浪やひらの高ねの明ほのも花にかすめるしかの山 越

卷 第

四 II

八

4. 八

容 沙 莊 哥合し侍

し時志賀の山越を

H

八重 花さかり霞ときませ人かたの光りも行ふ四方の山 にたつ雲にくもらぬ朝日影花より旬ふ葛城 0 のは

花盛

久かたの天つ空行月も日も花にそかをるみよ いるやま

おなし心を

うつろはむ物とも見えす櫻花雲井盗に句ふ春 はたにましらぬ花はます鏡うかふ塵なき山 一根かな かな

忘れてや後はららみん櫻花ふくともちらぬこその山 かせ

處々花盛

かのねの長き目くらし百千とり四方の標にあかすも有哉

す

雲鳥の迷もたえて櫻花句ひに質むみよしの 曙やのこれる月も鳥のねも花の匂ふをいてぬ色かな 櫻花峯もふもともけさみれは八重の白雲沖つ自なみ 山山

物をに世そ云しらぬ模花いかなる色に人意とふらん 終日對花

菅 根の春日ともなし移り行花の雲るの詠せしまに 老思花

방 4

花主 いかにいほり立出て花の本枝にそか」る老の姿は

思ひゃる心にもあらし雲埋む山櫻戸の花のあるしよ 依花懸友

心あらは能をまたまし根花漫帯かやとにひとり見るとも

花留人

九重や行來まれなり足引の山邊の櫻また盛りか 山里のたひねやせまし夕價花に哀をそふる色か

忘れしな花に宿りをかり衣ぬれてもかをる夕くれの雨 野中花

旅行花

花にたに忘れやはせぬ古郷のほとは雲井の自川の闘

らち つなく花の山路に櫻色の月毛の駒は心ありきや 花下送日

とけそめし欝の下紐移るまて心つからの花のかけ おなし心 かな

枕とていく夜になりぬ野への草結ふ斗の花の木の本

けふくれし名残の 花に入しか 播州祭根寺にて花下忘録 ひや ts みかは花の本に年の幾とせ馴し老そも カン らん散 ぬとも立 励らすはは るの山里

花時心不靜

かきくらし散らはちらなん櫻花さらても心らか れやはせぬ

三月の比三輪の社にまうて侍りて

さらてたに問まし物を櫻花木ふかく匂ふ三輪の しけ山

風前花

あたにしもさそはれ初て復行風の末は花そわかる」

水鄉落花

折しもあれとまらぬ花にみな瀬川ありてゆく水つらきころ哉

花盛ちるてふとを見え初し一本つらき山さくらかな

すみれたにさかすは何を山風にかきくらす花の雪の下草

とふ人のうとき恨みを色見えてふりにし里に花そ移ろふ

夕暮のあらしのすたれ糸たえて結ひもとめぬ花標 古郷のこすのまよひに散花をしたひ捨ても飛つはめかな いかな

**愛つったえく、散と見しほとに庭は夕の花の** 

落花埋道

み川路 やあらぬ水かけも自かしの雪をあらしの花を降しく 草

の川嶺はあらしの櫻花ちりしくうへや夢のらきはし 浪枕質のうちに雨の

玉ほこの道行人も夕嵐ちりかひむせふ花のしら雪 落花

よし

うらみしよ散を哀と見る人も有とや花に春の山かせ とふなよ花に山風さらてやは世にをしまる」程を見えまし

情花

天地も思ふをしるや櫻花ほのかすむ雨に山 さそはる」ゆるとそあるらし行春に四方の山辺の花の白雲 風もなし

**暮春惜花** 

山さくら残るをみれは花よりも心みしかくはるの行らん 行恭もさそひ捨てよ櫻花たか名残とか人も忍はん

布留社にて

山さくら春は暮てもふかみとりたてるを花のふるの神杉

歸りしをくいの八千たひなく鳥や花なき山 に思ひ格らん

いりし行へならすは春ふかき花をみましやは山茂山 春

雨なれや質の中にとふ鳥のつはさをおもみ感しをるなり 古鄉春

みるま」に軒のしのふをふる郷の春にいろそふなかあめの空 旅泊春雨

> おとも忍ふのうらのあまのもし ほ火

松のはゝ今朝うつもれて興津波霞をあらふ住吉の濱

頼むへき行へなからもなかめ俗ぬ霞む夕の春の山のは

花のうへに春の嵐の更行をうた」れなから聞あか

戶外界因

暮はて」あかす入にし眞木の戸のそらの名残やさよの春かせ

春田

世中につらき物からうちかへし哀とそ思ふ春のあら小田

早蕨

雉子なく紫のさわらひそことなく袖ふれて行春の日くらし

**春维思子** 

なくきょすけふりのうちは夜のつるの路より悲し获のやけ原 呼子鳥

製化

わきて忍ふたれそのもりの呼子鳥昔忘れぬ夕くれの摩

夕ひはり床も忘れて櫻花ちりかひ霞む空になく

とゑは又あかりもやらぬ夕雲雀花のなかめそ雲井は 701 ほとり

何となく物忘しつかほ鳥のしけみに通ふはるの山 里

おほかたの春にやいさむ若草に心もとめす駒かける也

なつなおふる蘭生のと蝶かすかなる花にはかなき宿をそかる

嫌子なく春野朝ふむ宮人のうち出る袖も花のしら**雲** 

花の香も空にみたれてゆふ糸の長き春日ををしくやはあらぬ 石清水臨時祭

春もた」やよひの今日と都よりかさしの藤の花の夕はえ

かりほさす苗代を田にうなる子の鳥おとろかす摩のさひしさ

水清みおふる草はもた」ならす花のあたりの春の小山田 澤小田に隻よふ 村春草 かはつ雨ふれはいと」をしまぬ夕暮の塵

野徑監來

とくろなき道行人もてふ鳥のさそふ春野に蓮つむ也

すみれ摘便をもみつ露霜のふりにし里と思ひ消めや

里歇冬

暮そむるすその<br />
ムつはな白妙になほなかき日を<br />
残す比哉

春の草淺澤をのに吹そめて花もかくれぬかきつはた哉

も」さけはしつやのそのふ行歸るあさの衣も花の夕はえ

行春の名残はあれと見る人も遠山なしの花やさひしき

百千島まれに成行春の暮に軒のつはめの昼なかりせは

流邊藤

らす色のたかから衣ふちなみをおりかけょらし瀧の白糸

紅のとそめのつ♪し衣手も心も花の色そうつろふ らつろふや山は名残のかすむ江の春も情まぬ岸の藤波 躑躅

名にたつはそれさへくるしいはぬ色に人としけき山吹の花 **唉か」る岸の山吹行春のしけみの露に袖ねらせとや** しられしな下に露けき山吹の花に いか なる思ひありとも

芦

たをれとやいふはかりなる櫻かり行ての里の山吹の花

春くれぬふるき初のやへさくらさくとみしまの井手の山ふき

吉野川岸による波山吹の花を名残の春なさそひそ

茶谷

春そ行契し誰に花鳥のなこりをみつゝ思ひたつらん

花口みな木ふかく成て小蝶とふそのゝ小草に残る春哉 行春も山路やすらへ名もしらぬ木草の花のちりのまかひに

ちらしても戀しからしや花に風みなれそなれし春のくれかた

幕春風

詠れはられへかほなり馴々て花に別し春の夜の月

思ひたつ春もやいと」あくかれん鳥もいるさの山のはのくも

雄子鳴をの」淡芽生この比の朝露しけし春や行らん

住よしの松もや思ふ月も又ほそえに霞む春の名残を 草鹿につれくとして荞春鳥を

17

さひしさよ垣ねのしと」春くれて朝夕なれし路も聞えぬ

舟中暮春

船わたす波ちのするも面 留存不駐 かけはくれにし春のしかの花その

したふ人につれなき春よた」ならぬ曙をさへ思ひすつらん

三月に時息をきょて

ほとときすうちおとろかす聴はやよひの茶の夢も残らす

三月盡

かきりある春のこよひよ大かたにふけめと同し鏡の音かは 更に又別はてにし花鳥の面かけをしくくる」はるか

閏三月盡

誰もさそことしはいたく馴々て名残かなしき春にも有設 夏歌

首夏

春暮し四方の情に飛鳥の古里した小夏やきぬらむ 世子

首夏風

夏きてはしけみの櫻さそひ川て花に恨み 更衣 ぬ引用設

けさはまたかふるわか葉の衣手に吹おくれぬる撫子の花

ふとしもえやは自絹たちかふる心ならひの読の岩波

うらもなくみなゝりにけり今日よりの衣を人の心ともかな 餘花

よし野山茂みのお くは櫻花夏水にけりと今かさくらん

夏木たち茂り行迄花の跡忍し、にらつる山 かせ

かけの花たにのとれ夏山のすそのゝ草葉吹かはるまて

うつしみよ川は嵐もやはらかにならの若葉をことのはのみち 夕月夜いさ自玉もかつらきやこのころしける板は非の水

山家卯花

山里や今もとはまし遅櫻移ひあへぬみねの卯花

路卯花

心あれや草は of the はるのなとりなき片岡のへにさけるうの花

白浪をたゝへてさける卯花の山路はるけき瀧の水上 目にたてぬ垣ねのむはら卯の花をうらやみかほに吹るのへ哉

待にぬおもひ入しやもろこしのよしの」おくの山郭公 時島つれなきとゑを思ひにてはちずのなかにこもるやと歌 郭公まつちの山に女郎花咲てうらみん便ともなれ

标 の花わすれかたみは初摩の明ほのにほふ時鳥哉 初 郭公

> 夏きては昨日けふ かも足引の山 播州あくた川のほとりの山中にて同 のかひある時鳥かな i)

時島伊駒のたけの雲わより今もなかむる秋しの」こと 秋德に居しとき名所郭公といふ事を

おなし心を

うつりきて手にもたまらす水草苅あさはの野らに鳴時息 さかきはの夕つけゆけは忍ひかね鳴や三室の山 野時鳥

時島深き楽とす一とゑは忍ふのうらにさよや更ぬる 海邊時鳥

はかなくてなけ時鳥橋のをとの 時鳥思ふや月は清見かたなみのせきとの明ほのゝ摩 住吉社法樂におなし心を しほちの有明の建

時鳥月待とてや泉川は」そのもり Ó 右明の草

あはち嶋待とる月に郭公と彼る壁の住よしのは 時島心ありきや思ひねの夢にまきれ V つちとか鳴て行らん時息うのはな山のしの B 躔 の聲

のそら

ほと」きすことわりなれや鳥の音も四方にやめたる夕暮の聲 海暮時鳥

あやめしく夢路はかなきうたいねに結ほれ行山時鳥 心あれやこと」ひきつる時鳥けふの あや 8 も分ね 施に

雲もなき月に一聲時鳥朝きよめする天津空哉 飛鳥井黄門入道の亭にての営座に月前郭公

おなし心を

月きよみ誰 かね覺の時鳥夜わたり歸る有明の聲

たえくになれるもよしや郭公野にも山にも面かけの摩

郭公いかにしたはんらた」ねの夢さへのこるさよの初摩

一とゑはしるしをそみし夢にもと賴む初

せの

Щ 時鳥

あやめ草世はうちはひき雲のらへの軒も一つにけか句からし しく名残に」たる空もなし軒はも句ふしの」めの露

疎屋菖蒲

みちのへの小田の 若苗をみ侍て わかなへ衣手にらつる斗の夏の朝露

しつやまて今朝はあやめの玉簾はひ入にゝほふ袖の白露

かけらすき日も夕風にさなへとる境 か袂や忍ふもちすり

卷 第

八 +

春

夢

## 回 早苗

雨そゝくすそはのさなへつくはねのかけとみるまて茂る比哉

採早苗

茂りてはくるしき田草一本もらふるさなへに取なまし 立そさるゆひも中く一所せき田面のさなへらへやかぬら 岡のへやかれいひすさふさをと女のやすむ間もなく取早苗哉

嶺五月雨

露落る峯の葛葉の夕風に歸る雲なき五月雨 杜五月雨 の独

駒とむる影さへくらし木幡山猶さみたれのもりのしたくさ

都五月雨

此比の道行人ははれまにも雨つくみするさみたれのそら た」へつる海に神代の玉ほこやみちひを見する五月雨のあと

朝日かけみとりに凉し草も木もくるしかりきや五月雨 五月雨

は 九 同にもしのたの杜の五月雨は草吹風や雲と成らん 0) ı[ı

まゆこもりいつ立いてん夏引の手引の糸の五月雨 橘薫風

雲間みし一夜ふた夜は月もたるひろひし玉の五月

のかと 丽 のころ 梅雨久

なかめてもしのふかひなきとの葉の昔の風ににほふたちはな

さそひいる花橋のさよ風によひまとひせし間のさむしろ

やとりきてりやいさめし橋のにほひなからのうた」ねのそて

夏草のしけきのへは小苔かつらしめゆふからに残るふるみち

磯つたひみらくのおほき夏草やみつ鹽よりもふかくなるらん 夕夏草

もかひもゆふかけ深き夏草の野島か崎に通ふ浦風

夏の夜はむすふともなしさゆりはのかとかましく靡く朝露 たに突色もむつましさゆり花大和ことの葉思ふ名残に 堀川院百首作者肥後號百合花思之也。

行水も庭にを見はや川島のいはねの小松なてしこの花 蚊造火

残る目のなこりほとなき山本やかやりに暮る」桁なるらん かひがせ」の 鵜河 河晋小夜更てはるかにのほる篝火のかけ

宇治川やかけは鵜舟のかより火に椎の葉白き夕やみの寝

聴 鵜川

一鵜かひ舟いとひもあへす月影に心や見えしよこ雲のそら

一天の川千さとの中の恨みをもしらてと渡る夏の夜の月 まつとなき都のたつみ月は旧ぬ行へもさそな短夜の空

ららむへきたよりもそなき天原めくり残さぬ夏の夜の月 外山夏月

むらかしは葉分にふくる影もをし外山の庵のみ しか夜の月

あま人のつけのをくしのさしもあへす浪にらかる」短夜の月 風おろす器もや秋にならの葉の外山しくるゝ夏の夜の月

水の江の浦島か子か歸るさもあかす見るへき短夜のつき 住よし社にておなし心を

す」しさを月に吹とせ住の江や西とそ秋の興津鹽風 沙月忠夏

夏の夜を影ふむみちに忘貝月のよせける住よしのはま

自妙に更行かけや氷ねしまへの

いり江の夏のよのつき

卷 第 70

雨中螢

川夏月

龍田川秋のにしきをしら浪にかさねまほしき夏の夜の月

竹の葉はさらに秋なる風の音に短夜つらき月の手枕 **閨にもる影かと見れは軒端より竹の葉らつせ夏の夜の月** 

夏の夜は袖とふ月もうたいねにむすほいるらしすまの闘守 關夏月

すきあへぬ雲間に凉しすむ月の光りをこほす夜半の村雨 更行は袖も秋なり夏の夜の月のかつらにあまるしらつゆ

夏月凉

五月山ともしさしそへまつ庭のよりこぬ程や長き夜のそら

岩間よりみかき出すやとふ螢あまる光りに瀧のしらたま

移 となしの流の岩なみとふ螢世は忍はれぬ思ひとそ見る 海邊見監

まつらかた唐土ふねのつまこひにあまかけるたまのとふ螢哉

深夜螢

夕やみもやゝ更わたる川の瀬に照し捨てもゆくほたるかな とふ螢光リやをしき月の色に山の端にほふ深き夜の空

露霜の尾花かもとにくちにしや螢ともゆる草葉なるらん

とふ螢澤小田ひろみてらすなり山本めくる雨をよきくて

天の戸をた」き捨つる水鶏かなはしめて夜牛の明やすき比 小夜深くた」くをきけは山水の月の氷に水鶏なく摩

應水鶏

は つれなくも水鷄そた」く山かけの松のとほその るかにもた」く水鶏よとふゆめの誰歸るさの戸ほそ成らん あり明のそら

花といへはあはれならすや露か」る行てのこやの軒の夕顔

夕額巡垣

たそかれの垣ねのこてふ打むれてやとるを見れは夕顔の花

秋やこし鳴音露けき蝉の羽のらす花染の衣手のもり 雲かへる林のつゝき山かけのむら雨送るせみのこゑかな 杜彈

流邊蝉

邨 の摩秋ちか」らし浮ひきて一葉色なる瀧の岩なみ

芹

夕立早過

かた間の柱の撃をしたふまに雲はをひえの夕立のそら

河邊夕立

ゆふ立のおちくる空やみなの川嶺より遠き水のみなかみ

風吹は露のしら玉蓮葉にまろひあひてもそふ光りかな

程による池の蓮も世をしるやひろ葉にうつすむらさめのつゆ

行となき壁さへ原し山陰の岩のとたえのいさら井のみつ

世は夏にたえし風や松かさき氷室のうへに皆やとりけん

さよ更る扇の風にねやのうへの葉ひろかしはを思ひ配やれ

河邊納原

あしそよく河風たち 月下納凉 ぬタす」み、岸の柳もちりぬはかりに

かた敷の月の袂の朝しめりなこり凉しきしの」めのそら

夏衣袂すゝしも虫の音もしのひくしのよひのうたゝね かへるさはさかなもとめてタす」み浪にとゆるきの磯菜摘也

ふかみとり涼しくあけて春秋にあらそひぬへき夏の空かな

何か秋をしのふのすたれ凉さはねての朝けの露のした風 いつれとかけふのあやめのもすそさへ内外に薫るこすの朝風

夏夕野

萩か花かつ吹けらしかたらつら秋をもまたぬをの いゆふ気

やとし侘ぬうらはかとりの月影に衣手かろきみしか夜の夢

ひやゝかにかたしきかへて高難ぬるま程なきしのゝめの空

むは玉の夢のなかにも別て陥わか身おとろく夏の夜の空

はなちかふ夏野の牛もかたよるや水草清きもりの

した道

昔きく御代のためしに五月雨もとたえをおきてそゝく空哉

宮古人みそきすらしもから衣せみの羽川の風もす」しき

貴賤夏被

百敷の大宮人のみそき川あやしきしつも所せきまり

うつろはむ野にも山にもこもるらし今朝は空のみ秋の色かな 立秋風

とほ れあへぬまた朝露に天の原みとり原しき秋のはつ風 おなしこしろ

たち
弱し袖をわするなはる
霞とほ里をのいあきのはつ風 初秋の三日月を

此 風 の音 ゆふへ秋ともやとれ置しらぬ淺ちか露に三日月の影 つゆのあはれもそれ なから秋をまちとる三日月の かけ

秋は來ぬ七十あまり三日月 の心をきよくすます影哉

永正十二年七月に

容 草も木も見えん氣色を桐の葉の心かろくもつくる秋哉 りちらす秋は來にけり村雨の桐の葉わくる夕くれの宿の空わかれし鳥も山深みおもひ立らん秋のはつ風

早秋

待とるもき」やる秋も住の江や風をたよりの岸の姫松 あたし野やおけは飢る」かるかやの露よりよわき秋の初風

しるしなき杉の桁もた」ならぬ三輪のひはらの秋の

は 0

風

悠 邹 四 百 八

+ 八

吞 夢 苗

> つしかも衣手す こし秋 の風やまは特薬の **あなのさ** ムはら

111

初潮山老木のひはら時しあれは音もほのかに秋の初風 たつた川岸の柳の下葉より山 龍川ひめあらしもしらぬ秋の色や空にしめゆふ葛城の もほ のめ いく秋の は つ風

Щ

浦早秋

3

むろ山したはふ若はらちつけの恨な見えそみ

ねの秋風

此ころの海上の 新秋朝風 B しほ の夕煙秋にそなひく須磨 の浦 風

0)

60 かならし龍川 新秋露 秋 B 伊駒山そめぬ色ある今朝の鼠に

初秋露

行て見んかた野のをさょかり人もまた袖ふれ ぬ秋 の自 露

関のうへは聴つゆの楢の葉にこたへて輕き秋 他にそちる天の羽衣秋來ぬと結びしより 曉知早凉 や今朝 0) の自露

このゆふへかられとや思ふ柳機の手にも任せぬさしかにの糸

総女夕心

忍ふなよ党は秋かせ世に誰か思ひわたらぬ天の川 七夕風

ふね

彦星の待よひふけて秋の風すゝしくほる。天の川波
けふたにも心盡すな天の川雲のほたての秋のはつかせ

七夕別 野へととの花になやとせ今朝ちるや七夕つめの袖のしら露

七夕七首はかなしや天の川原の朝かしはぬる夜うらやむ衣々の空

時しもあれ風のけしきも露の色も遠しき比の星合の空 をよの川深き契りのいかて世に顯れそめり瀬々の埋木 をはすよ今日の平向もしつかなる草の庵の露のとの葉 なからへし玉の小琴の雲にそなく七十近きほし合の空 なからへし玉の小琴の雲にそなく七十近きほし合の空 なからへし玉の小琴の雲にそなく七十近きほし合の空 なからへし玉の小琴の雲にそなく七十近きほし合の空 なからへし玉の小琴の雲にそなく七十近きほし合の空 なからへし玉の小琴の雲にそなく七十近きほし合の空

ひくほしの袖のわかれを思ふよりあらぬ草葉の今朝のしら欝色なきもこゝろは見ゆや底清き水かけ草の露のとの葉の川舟出しつゝも思ひやるいもか家路やはるけかるらんとの川也々につょり!戀の淵しらすいかなる水の水上天の川也々につょり!戀の淵しらすいかなる水の水上

七年の秋の空より七十やみとせのけふのたむけをそせし

萩原やかさしけんよの面影も月にあり明の秋風/摩村雨を花にそ、きてから衣すそのにかへる荻のらは風むすふいほのす、吹風に荻の摩き、わくはかりすむこ、ろ哉れ覺でも摩まちわひねくたかけの荻ふく風の長き夜の空

折しもあれ晩つきの荻原や天の嵐のつゆのしらたま吹むすふ契やはなき鳥羽玉の夢てふ物ををきのうは風あかつきのをきの風

一つい人はいたくなかきそうつらかす影けかき根の野へのをき原状の風けしきはかりのゆかは山松よりふかき萩の酔かな

萩を寒み秋のね壁の濱干鳥うちもまきれぬをきの音かな

幽柄获風

消はまた古郷人の夢にたにうき身かへすな萩のらは風

さよふかく見はて幻夢の恨をも月にこたふる萩の上かせ

卷

萩原やゆふ目かくれの秋風に遠かた人はいつちすきけん 萩知秋

露の色風のけしきにさそはれて一本にほふ庭のむら萩

ほのかにも結び初けり日くらしの摩を契りの萩の上の露

をしましよ朝行そてに萩の露こほれてはまた秋のむら雨

月ならて誰なまつらん夕暮のなの、かりほの萩のうへの露 古鄉萩

秋の野に萩かるをのこいかならし折たになしき花の上の露 里はあれわ月は見ぬ夜の便りにも恨なかけそ萩の上の露

こきまする花と露とに宿りかね野風いさよふ秋のはき原 萩帶露

萩露

霞つる櫻かうへの朝つゆに又とかへてあきのはきはら 枯そ行露のしら玉萩の上にゆつりかおきしいけの蓮を しら露の手枕なから聞るめりねての朝けの庭のむら萩

風になひく花のすかたよ女郎花なにそは人の心っくしに

ほともなきまかきの中に吹花のあまりて匂ふ藤はかまか

あたし野や哀をみせてつよから的姿になひくかるかやのつゆ

さひしさを催ほし草のはた薄夕もまたわやとの秋かせ

あやにくの影はとまらぬ夕月夜入の ム海おもるしらつゆ

染いたすはつ花すくきむらさきのゆかりも秋や武藏野の原

から衣ゆくてにもなし花す」きかりのなみたのむすふしら露

夕虫

花すいき吹むすふ風のかとひにも玉ゆらかる露のかり庵

秋の日は夕かけ草の程もなく露にしをるゝまつむしの摩

促織を

鳴虫のふるき庵におるはたの誰爲となき音のくるしさ

卷

山 辞別・イ

**をれとなく物そかなしき虫の音の打亂れたるあけ方の空草の戸もさせてふ聲にこぬ人を猶まつ虫の恨みわふらむ** 

霜草虫吟

小さく原霜の下葉のきりくす網々そよく摩かとそきく

とたえつる木葉しくれも棹鹿の聲を待てやね覺とからん

吉野山す、吹みたる夕あらし時雨もゆくか小男しかの聲

月前開鹿

秋の野にねたるこ萩も有明の月見よとてや棹しかの聲

遠妻に通ふやいつく龍田山ひとり越行さをしかのこゑ

田家庭

小山田のかり穂の煙瘻とひの思ひにたてよしかそ鳴なる里遠みいな葉にましりたつ鹿の壁吹まかふ小田の秋風

鴈初來

秋の鷹聲も今宵の新まくらふし見の里の契りにそきく秋の鷹聲も今宵の新まくらふし見の里の契りにそきく

花にさへ別れし鴈の草も木も色とき時といかて來ぬらむ

から衣秋風寒み今朝みれは淺茅いろつき腐なきわたる恨みすやまたてらつりし秋萩のあたの大野の初鴈の聲

夕初鴈

旅にして秋の夕もまきるやと思ひや立し初かりの摩

旅鴈連雲

暗鴈も月を心のゆふやみに摩打かはすむらくものそら

霧中初鴈

朝霧にぬれてや越しかた岡の早田もる庵の衣かりかね

月前開鴈

玉の酵月につらねて伊勢の海や清き猪に腐波るなり

左右聞鴈

秋のかり駒うち行は一つれのとひ別れぬる布留の中道

秋歌下

上弦月との薄つれなく見えし夕かな月もほのめくあたし野の原質で

ふかみとり雲なき空に待れてもあひに逢ぬる秋の夜の月晴天待月情の間の光りそよわきひく人もあらましかはのゆみはりの月

月は縮売かけてすみの江やはるかにてらす興つしら浪

晴夜月

秋 の空月は今宵とまつしまやさそな松浦の興つ舟人 八月十五夜

およはしよいつれの道の高き名も月の今夜の大和もろとし 老はてし身にこそあらねことし又学にかへる秋の夜の月 閏月十五夜に住吉社にして

いつ か見ん興津しら浪高き名をふた」ひ照す住の江の月

和坂 や開路すき行山風にいはふもしるきもちつきのとま 飛鳥井二樂院にての會に在明月

秋の月あはちの島にかいるまて袖にしきつの有明の空 月前 風

秋ふけぬ木葉の時 あかす豬はらへはまさる光り哉雲なき月にさ夜の秋かせ 月前雲 雨吹あらし夜渡る空も満きつきかな

すむ月にいくたひかみし天の原消てらかへるよはのしら雲 秋の月清見の波にららかせもさそな心を興津しら雲

は るかにも更のほ る月を山のはに恨もとめぬ松風の壁

> 秋ふかき楽とす月の光りをや雲もかさしのかつらきの山 よしや又宮古の夢もさら科やおは拾山 の月の 力。 りふ

深山月

ま柴たく軒はも見えすみ山木の煙にうすき有明 限りある光りと見しを明方の深山おろしの秋 深山曉月 の夜の月 0 き

さひしさは深山かくれにもり來ても明方しるきつきの色かな

たえく、に槇の下露かくろへて峯たちのほるいさよひの月 台上月

野月

旅ねするいつくにか見ん宮木野や宿りは花に秋のよのつき 闘月

ふけぬらし山風なから白妙の衣のせきのあきの夜のつき かへるともよるともわかす月清き須磨 の闘戸 の秋のうら波

をふの海ちさとの波にいさよふや秋つしま根のよその月影 海邊月

難波かた月影したふ鐘の音も及はぬ波に有明のそら まちとるや田子のうら波ふしの根の雪より出る秋 演ひさし久しく住や神代より大和しま松の秋の夜 海邊秋月 0 夜 月

の月

卷

部月
和の海やいているかたもはるかなる月に雲なき浪のうへかな 日

消人のとよろを見るや明石潟すめるか上のつきのあき風昔思ふ心も秋もあかしかたはてなき浪にわたるつきかけ

松よりも月に濱風さひしさは海士の苫やのいさゝむらたけ

江上月

・ はかいらの山風ふかき夜の志賀の大わた月渡る見ゆ

秋ふかき入江のまこも霜なから光りみたるゝ月のさよ風住の江や神のいかきの灯もはるかにふけぬ浪のうへのつき

決した。 でも月の川風ふけておのつから音せぬ里をすくる舟ひと でも見の川風ふけておのつから音せぬ里をすくる舟ひと

思ふにそ程遠からぬ山のはは千さとのなみの月のゆく末

橋上月 松浦ふねまち出る 影でさよ深くみやこにをしき山のはの月 船中月

旅ころも鹽かせさむし白妙の濱名のはしに月やふけねる

廣澤池眺望

名所月

見れは世のとゝろく、や靜なる月はたかつの秋のうらなみ草も木もぬれて夜深し月の中の水わけ山の秋のしら露

さらぬたに秋はいねかての松の戸に夜深く出るみねの月影

宇治山やいにしへよりの里の名に打まきれぬる月のころ哉

月下閑居

市間月 秋の月らき世に染ぬ心をや我にらつして友と見るらん

沓徑月

当徑月

するしくもそ 4 く図生の花の上に月彩やとす秋の七からし漫学生のやとりあらすな山ふかみ月に過こし秋の木からしき様次1

何ならぬ秋のおもひよ心もて月のみこやにすめはすむ世を

九月十三夜月

まちみつる月の契りよ十日あまり秋の今行のみつの資松

十三夜月くもりたりし秋

高きなよさやけきよりも秋の月くもるを今特世に思ふらし

久かたの月よみをとこいかなれや見ねを思はぬ人のなき哉

花の色露のあはれの夫よりも秋はゆふへのふかくさの里 江邊秋夕

すみの江や夕は秋の浦風にまつも心をくたくころかな

萩の露荻のうは風いねかてにいく夜になりぬすめる月影

每夜月明

終夜見月

何れかも夜ともわかん時しもあれ戸さしせぬ世の四方の月影

更ぬらしくもりみはれみ昔思ふ詠せしまの夜半の月影

明月如書

天つ空面かはりせぬ秋の月老のねさめを哀とやみむ

月似古

いつとしも思ひわかねと獨見る老の行への秋の夜の片

田家秋風

よしや又庵もる袖に鳴のたついなはの風にかいる白露 吹みたる稻葉の風に山かつの行手のそても秋のしらつゆ

田家秋興

深き夜のね覺さひしき鐘の音も絕ての後の山の端の月

曉見月

出つるも行へも山もはるかにて月もことろも今そたとしき

月清み夜や明ねらん横の戸もさって三嶋のしきの羽かき

停午月

さそへ猶むろのはやわせ打はへしつなてに宿る秋の色島 吹みたる稻葉の露に秋風もぬれてや宿る遠方の松

山里の雨のなとりの朝日影露にとほるゝ旗のむら立 あさなく花なき野 への草葉にも情おきける秋のしら露

山深み木の葉のつゆもすむ月に心徹さぬあかつきのそら

松浦かたはるかになりぬ渚らつ浪に光りはのこる夜の月

j)

ねの聲さそひし夢の手枕に月の恨みやふかき夜の空

百八十八 春 夢 草

草

みたるなよ風さへたえて苅萱の月の下葉にかる朝つゆ

露深みふりにし里は古の秋のみかへるくすのうらかせ

思ひにし秋の草木の露もあれと移ひ初るをのゝ淺茅生 野草花

夕月夜やとるともなき秋の野に光りを結ふ花の上の鑑 からにしき秋の心を朝露の 花におり出す宮木野 のはら

うつしらふる宿やさひしき秋の野は人もすさめん花の色く 草花露

開庭草花

秋 あきの風思ふや の菊心ふかしやいろ草のはなはひもとくしのゝめの露 いつれ朝露の花にあらそふ宮城野の原

つらくとも見えはらしとや花に露心くらへの庭のあさ額っれなくす しの」めの露 の句ひよ秋萩のぬる夜いさめし植のはな

朝野分

吹しをる夜のまの野分花の上に露をやすむる朝霧の空

きりノ トす即うらむなり しけかりし夕かけ草の露の行

花す」き誰手枕にかよふらん月はいる野のいなつまの影 消かへる草葉のうへや稻妻の光りに結ふ野 へのしらつゆ

秋ふかきあ 山かけや猶そ夜深きとふ鳥の羽風きこゆる朝きりのそら しやの里の夕霧に音するものは興 しら浪

カュ た岡の秋の 野風のさむけきにうつら鳴なり柴のした草

らかれけん月の V つくにさよ更て歸る澤邊のしきの羽

かき

朝露もほのかに残す月草のはなすりとろも影やわかれ

なれ さやかなる氷の色や宿しける月を衣にうちいたすらむ (し花すり衣秋の野の忘れかたみの霜にらつ摩

神に出しいさりの影を便りとや海士のかりほに衣打らむ

海のほとりに衣をうつ

か ら衣あたりまて照る紅を月にうつしのにほふ撃か 月下辯衣

15

春夢草

遠み月の行へになく鷹のとゑもそれかとうつ衣かな山姫のあき

南北揚衣

老後に九月九日都にもやゝ打そへてからころも鳥羽田の里に靡そこたふる

秋をへて猶そあはれむけふとの老の末葉の秋のしら露

けふまでもわたかつけるる白菊を頭のゆきの友と見るかなれる一て発えまにすまじょとの表の対象のあのしと聞

世に匂ふ花ともしるし朝霧のまかきにあまる秋のしらきく

心ありて霜もおかなん大澤やふりにし跡にたてるしら菊

紅葉(京極黄門山庄の事を思ひて)

小倉山そめし心の秋の色や世々のしくれもしたひ來ぬらん おなし題にて

龍田姫そめ殘す山のうすもみちくれ行秋のそらたのめなる

水清み底の秋さへ影深きいはかきもみちひと枝もおし

流紅葉 夕あらしなきさの岡のもみち葉を又ふきわたす天のかは橋

> **播磨に下りし時しかまにて秋の暮に** 山姫のあきのくれなね染わたせ瀧のしら糸波のしら玉

大発存こと也と工業 しかま川かは風いたみ消浪にちしほなからの浮ふもみち葉

大澤やふるき跡もる水鳥のうは毛も色にそむるもみち葉大覺寺にて池上紅葉

みち葉のにしきおりはへ龍田河流れ來にける山 堀州久安寺に入て紅葉を

の陰哉

暮秋興

S.

花す \ き結ふともなき手柱を夢の形見にくる \ 秋か

72

苦のうへに散しく庭の薄もみち名残り多くも暮る 4 秋哉

海邊幕秋

あしやかた今はの秋もまてしはし音すむ浪の有明の空

行秋を引もとゝめぬからことのしらへかひなき消浪のこゑ

暮秋月

ゆく秋も今はの月の有明に闘もりわふるすまの浦浪

秋にけふいつれの雲か契り來て歸るを送る夕くれの空

霜まよふ神のいかきにはふ葛の下葉もしるく歸る秋かなオー男

との比は涙も つきぬ恨むなよ馴こし秋のけ Š の別 れ K

冬歌

初冬

三室山しめしやとりを夕風の四方にしくるゝ神無月哉 みやこ人かふる衣に今朝そおもふ四方の山邊の嶺の木枯 神無月けふの時 雨の一しほを秋も染のこす四方のもみち葉

月三日月を

よひ 抽 なし比の三日月を の秋もみさりきはつしくれ曇りもあへぬ三日月の影

心をも盡してや見ん初時雨木の葉もまか ふ比の三日月

浪のらへに曇りも 雨過 はてナタ月夜しくれにまかふ淡路島山

定めなき名にこそ立れ夕時雨契りし宿も有て過らむ 朝時

初 かさしをるはつ瀬をと女の朝ね髪袖もしくれのしの」めの空 時雨行めくりこん夕をや松のとほその明ほの」そら 夕時 雨

程そなきね壁の 空 の初しくれ木の葉をそむる夕暮の山

はつ瀬川月ともわかす村時雨杉の木末にいさよひのそら 夜時雨

更るまて月すむ空の俄にもしくれて渡る楢の葉かしは

外山時

甫

しからきや外山の 里 の夕つくひ半しくれの峯のしひ柴

布引の識のひょきとおもひしを生田の杜に時雨來にけり 杜しくれ

かけは猶しのたの杜の夕しくれさそひすている 和泉堺にて宗訊す」めし一續に瀧邊時 行嵐 力 TS

山姫の ね覺てのあ 海邊時雨 たきの白 しや 0 きぬ染かねて今朝初時雨さそひ來ぬ 里 の初時 雨心あるへきみやこなりとも 5

松風もこと」ひ捨つ まつ島や千鳥をめくる村雲のひまも 初時雨をしまのとまや夜は深くして しくるゝ浪の音哉

川時 丽

村しくれ循過やらて河波のゆ 名所時 ふ日のうへにふるの神杉

契ありし袖やしく

礼 んめ

くり來て雲も旅なるさよの

中

щ

**銀深みいり日なか** 山 家時 時 らの欄の葉にまなく時雨 のふゆの山

里

楢の葉の名におふ宮の世々の夢ぬる夜もあたにとふ時雨かな ね覺時雨

跡もなき思ひを何のね覺そと知せ顔なるはつしくれかな めるまはとたえをおきて玉くしけ明かたき夜をとふ時雨哉

色かへぬ照髪やまの明やらて旅ねられふるさ夜のしくれに 曉落草

神無月しくれこきませ間るめり日も夕くれの四方のもみち葉

なれくし宿とや影も守山の木の葉たつぬるあり明のつき

慎の家の木の葉時雨の夢らつ」思ひ聞る」さ夜の手枕

吹のほる川風いたみはつ瀬山紅葉にらとき末のさと人 木からしに墨のもみち葉吹ませて雲の千人のかつらきの山

あらし吹たきの水上白妙の老のかさしをちるもみちかな

三室山嵐にうかふもみち葉の紅したふたにのいはなみ

まよひ來し梢ゆかしき紅葉はを荒磯かけてくたく浪かな

山風もこゝろあはせて誰爲ともみちを渡す字治のはし守 橋紅

卷 第 170 百 + 春 夢 草

心あれやふりしく木葉霜なからかきも拂はぬ字治橋守

思ひやれ木のはの下の草の庵に時雨するよのかたしきの袖

松の戸の山井の清水水葉ふり影みし人をいかに忍ふや

落葉窓深

松の風老のねさめの窓のまへにたし時のまの木葉をそしく

山めくるあらしの末や誰としも契らぬ 山里の木葉ふきつくす夕暮や鼠も器に獨りさひ もみち葉や雨とふるらん生駒山雲もかくさぬ楽のあらしに 里の庭のもみち

すまの浦やまなくもさそふ山風を闘もる浪のよするもみち葉

は吹よわり行かひもなしさそはれ立し木々のもみち葉

Щ

風

枯やらてたてるもしるし暮し秋を忍ふの軒に庭のしら菊

霜かれにむすほ」る」や秋風も淡はの野らの下荻のこる 朝霜をへたつるをのしさ」くまに猶冬枯の花やかくれ 花ならぬ枯葉の霜の行 へまて誰かはうとき宮城野 の原

九 百五 霜枯の朝のはらのむら薄むすほ」れけり秋やとふらむ

益

事章 自妙のしものたてぬき
の付いてぬき
のではいればいいのかるかや
でのになる
でのできる
でのになる

をとりこし處も霜も枯のこる下葉はかりの野へのかやはら 枯野朝風

和泉堺全光寺覺阿所にての廿首に枯野風 を芽生や木からし立ぬ朝な~~花にかすめる野へと見しまに

**暮をしる女ならすやは下荻にならの枯葉の野への朝風** 

朝霜

敷妙の手枕さえし冬の夜の霜にいさとき朝からすかな

山深みもらぬ朝日やたけぬらん橇の板屋の霜のむら消也家須山家翁

**庭に見よ宿留野の小篠春日のやおとろの霜も迷ふ明仄** 

名もしらぬ山のあさ鳥霜氷る楢柴しのき壁むせふなり

を 単の葉のさわく鼠を峰の松心も見えてすめる壁かな

おのつから川晋すみて飛鳥風いたつらに吹冬の夜の月霜の上の光りをそへて天つ風月に落たる野ちの笹はら天の原深きみとりの下染に光り移ふ冬の夜のつき

山寒月

谷深み吾せぬ水は久かたの月にこたへて氷る夜半哉

消島かたてし煙のおもかけも冬は跡なき水の江のつき

②河や宿かる月も徹れ芹の霜の枯葉にもろき影哉更にけん光リやいと、真管生ふるそかの河原の霜の行り、 (\*)

上の月

兵庫に居し時名所冬月

浪のうへに冴のほるかなを車の和田の御崎の冬の夜の月

天の原雲ふきつくす明かたの鼠にかる多の夜の月

をの夜の月はあかつき雲もなく排ふあらしの音ものこらす なの夜の月はあかつき雲もなく排ふあらしの音ものこらす + 八 春 夢

拉

さえわたるお はつ瀬山心くらへの鐘の軽りの光りにさゆるそらかな のか光りを天つ空氷にやとるあり明のつき

**冰初**結

山川や一葉のちりも落あへぬあらしに清き朝こほりかな 芦間氷

**冬川や朝こほりせり立鷺の芦間の宿もよそに見るらん** 

池水华氷

さえくてみてる氷をあすや見んさ夜も半のしるき池水 川上氷

橋姫の袖の氷もふきむすふよなくくいかに字治の川風 うつりこし花ももみちも泊瀬川とめぬ氷に浮ふ面かけ

氷りてそ吹もしらるゝ瀧の上のあらしにさわく嶺のさゝ原

ひつちおふる冬田の原の石たいきふむ跡もろき薄氷かな

夕月夜それとも見えす冬枯の芹の末葉にそよくはま風

打はらふ鴈のつはさもしをれ方の古江に寒き雪の音哉

鳴とめぬ江しまの千鳥恨むなり西になり行法の上の月

浦風や光りをそへし濱千鳥つはさの浪にあり明のつき 濱千とりくるゝ沙干のかた糸を引すてゝ行ひとつらの聲

別れてもおもふ契りやさよ千鳥かけの淡のあかつきの段

風はやみあら磯岩に後れゐる友もさそはて行千とりかな

さよ千島あられ横きる松風に行ては歸るあらいそのこえ 川千鳥

別れ行妻やこひしきさ夜千鳥あふくま川の明かたの聲

かるもふく磯屋の旅ね玉ゆらの夢をとたえに鳴千鳥哉 飛鳥井黄門雅俊卿旅宿にての當座にね覺の千鳥

水の面にましるむらねも見れは又同し毛色の鳥そかたらふ 湖水鳥 水鳥

朝日さす浪に一むらあしかものうち出の演をすくるたひ人

さそはれん春の霞を松浦かた寒き渚にあさるかりかね

あはれなり伊勢のはま荻下折も雪に族ねのかりの一こる

はし焉をする出す朝け夕暮の野邊のかへるさいつれ増れる山島の尾上引こすはし鷹のこすゝかすかに松風を吹く

はかなしや暮れと歸る御狩野に驚くとりのおのれ立琴狩くらし立や歸らん折かさす雲を鳥柴のしるしはかりに

たき」こる暖か袂もしほるまであられにふ」く嶺の常磐木雪らつむ峰は嵐のとたえより推業しのき降あられかな

枠のやた野の野風衣手もやれぬはかりにうつあられかな

打なひき夕日かくれに成にけりみそれやおもる山のした柴さえけらし山の下柴ぬれもあへす霙色そふ峰の常磐木

をと女子もおき出て見よ天の原おし明方のよものしら告

**夕深雪** ゆふくれは杉村しのきふる雪を柴の垣根に獨かも見ん 夕ゐるもやとりかねてや葛媛の雪の高根をよそのしら雲

砂りつる雪の光りも埋れて夕暮ふかし木々のしたをれる。

おもひつゝ鼠にとちし柴の戸を押明かたの楽のしらゆき忘れしの人の心の限りをも太山のさとのけさのしら雪能となく松のとほその薄響に鑚のかけちも見えす成まて

冬枯のすそのゝ泉宿りかせ状の上薬にまよふ沫ゆき朽やらぬ一むらかしは自妙にふるからをのゝけさのはつ雪

造樹雪さらてたにやすらひ行を鈴鹿山降まかへたる雪のした道との袖もひまなし相振や杉の紫おもるゆきのしたみち

雪はらふ野中の杉の一むらや嵐にやとるゆふくれのいろ

すかむしろ誰か名残とか自妙の雪を吹まく十布のうら風

送りこしいふきおろしや弱りけん今朝薄雲のしかの濱松

花さくら秋のしら菊うつり來て九重の今朝の初雪洛陽雪高陽雪一次のや山かさなれる川上の雪より出る字治のしは船

関中雪

玉すたれ風もうこかてふる雪のか」るも氷る宿の寒けき

夢 妆 軒端よりあまりて落る雪の音に夕暮深くなれる宿かな

吉野山おもひ入てもとはかりに雲はふりしくやとのゆふくれ **阴居雪** 

松の葉に待こしよりも垣ほなる小柴にか」るけさのらすゆき

しつかなる音は見るにもまさりけりいよすにかいる響の夕風

みつわくむ姿とそなる雪の内に年もやつもる園のくれ竹 天台座主提井宮より給ひし五首中残雪

足引の山路の小篠岩小菅またあわゆきの下みたれつ」

ふりにける萱か軒端は里わかぬ雪も重けに見ゆる哀れさ

朝ほらけ野へをおし なみ行駒も尾花あし毛にかる商雪

ゆく儘に笠のみ重しくつはた」かくはしからぬ花にうもれて 十二月三日月を

行路雪深

初春のかけを昨日とおもふまに今年もくれぬ三日月の空

四方の空暮やすき比の冬の日もゆらの御崎の花の白波

#### 冬夜

星 清 き峯の霜夜やすむ月の空にまさきのか つらきの山

**米**椎

木からしもしつまりくれてかし鳥の羽風木ふかき峯の椎柴 やとりかねもるかとそ見る維柴にさやく精夜の器の月影

神樂

更るまて氷魚まちわふる岩波に月のみ夜のせるの

網代木

月照網

柳葉の摩すみのほる曉は今も神代をふるの カン み杉

なほからぬくぬ 炭かま 木白かし炭かまにこるとも見えすたてる山哉

名残なきあさ木の炭を埋火のね覺をいそく間そ夜深き

[ / / / / / /

埋火をたよりとすさ小空たきも下まつ間と見えぬ あれや知らぬみ山 のふしくぬ木友となりぬる間のうつみ文 へきか

雪の中に待見しよりそ称の花さか 零中

り垣根も過かてにする

ゆき深き四方の草木の心をや春に吹出るやとのうめか枝

九重の春の衣の花さくらいちめもかさすとしの暮

かな

都歲春

卷

せきとめ的花は昨日の吉野川あはれ早くも年のくれぬる

ほの見しにその事となく詠わひぬ是をや戀の春の夕くれ

折しもあ ならはすよ忍ふの山路いかにとも心置夜の誰にとはまし 何となく思ひわひての手すさひも心の末の山ふきのはな 6 4 かにせむよひくとに忍ひとし月の袂もあり明のそら かにせん更行まゝに月影のぬれて色そふ片敷のそて れ秋の風さへ身にそしむ忍ひかねぬとよしや見ゆ共

依忍增戀

L のふ草露のあはれ 寄書忍戀 もかけわふる人と見るにも猶そ聞る」

よそめらき玉章をたに返すなよ思ひおもはすとなしにして

忍淚戀

から衣 忍ひわひ哀をかけよ派にもたか名はた」しそてのしからみ いつれの野 への花染に下のおもひのいろをまかへん

犯難逐想

5

忍久戀

か にせん下のみたれをしのするきかたよる糸の小野の秋

> 养 の風あきの白露いくかへりしたの思ひの色をそふらむ

さむしろやいく夜になりぬ獨ねのあらましとも有明のそら なからへてひろふよもかなかわく間も額は猪によするしら玉 とえぬまの心つくしよ花にたにか」りしも 0 かみよし野の山

馴不逢戀

ららみしよ世には櫻のかけをさへよそにぬる夜の鷲のとゑ

聞戀

風をいたみ猶やくたけんほのかにも御裳濯河のせるの岩波 くたけてもか さし むかふ中にもえやは起ふしをこまかに間ておもふ面 見竹戀 ムる補かは昨日まてみぬ B の浦の 秋 のゆふ波 カン

け

久新經

袖もかくしくるへしやは夕月夜ほのかなりつる雲の名とりに

思ひつい頼みとしよはみつかきのしるしあらはせ住よしの松

也 かはしよしらぬ 借人名戀 心の行末をうらての山のみねの秋か

·je

11 かなくも騒みし名のみ櫻あさのはては露けきをふの下草 数無名戀

花のうへにかけても見えし立し名は仇の大野のつゆ 0) 衣手

被返書級

あやなしや結ひそへつる花にのみ心をとめてかへす玉つさ

待とせし心やよわるさむしろによひのまふけてやとる面影 忘れしのよひの類みもむなしきは里を分てや月もすみけん あはれをや今心みんほのかにもいひしなからのあきの夕くれ

契りしはいさしら玉の數々にのきのしのふをなかめくらしつ 月にさへ物はおもはし夕暮を限りとたのむならひともかな

ことかへて心つからの思ひかなくものふるまひ日くらしの摩

忘れしの空に待出てふけゆかん行へもしらぬ夜半の月哉 けしきたに露も見えしとすか莚七ふのこさぬよひのうた」ね

ひとりのみおもひ間れ非斧の柄も朽ねるはかり更し夜は哉 さそひ來る月に幾度更ぬらん面影はらふ获のらは風

猶くるし待よ今はの鐘の音を心あさしとのこす月かけ

戀隣女

起ふしにおもふををその戯おと物うたかひにつれなかるらむ

しをるへき花のらへをはいかにとか駒引かへすあふさかの闘

から衣しをれあかしつ花のかけさてもつれなき館の下ひも

ひとり寐の袖よりくるしなれしらぬ心の花の露の初そめ なくさめしあらましとの面影はあらぬ句ひにやとるさむしろ

ならはすよ初花そめのから衣いかにねしよの干人なるらん とよひたに思ひも入れし櫻色の衣手かれん行末のそら とまり船心を興津しほあひのよるへはかなき浦のはつしま とけぬとて行へもかけし花櫻心ともなきつゆの さよ衣世々のかたみに忍へとやはかなく匂ふはつさくらはな 八幡山勝祐法師坊にてまれ人の童なとありし したひも

おくふかく引かくしてもおくり來し月やはしらぬさよの小車 ひとりねのやとのならひをよそにふけ途夜しるとも松風の摩

忘るなよ今夜かけをくさ」れ石の岩ほとならんよ」のとの葉 我袖に宿るもくるしさよ衣にほひにあまるねやの よひくにいらて明つるねやの中は我も智はぬ夢の手まくら 月 かけ

年月をおなし心に深めすはあふくま川や顔々のしらなみ

九百十

卷 第 几 百 八 + 春 夢 芹

逢切戀

年をへて相染川の一世にも身の浮なみは縮くたけつ」

夢中逢辯

忘れはて」ぬるよはもかな思ひねにあらぬ契も夢に見ゆやと さやかなる光りもつらし見し人を夢と知するあり明の月 思はしよ花に小蝶のも」とせも逢見んほとは轉家 小の夢

数別經

恨 10 みすや つかはと松浦 急別戀 出かて の波にともつなをとくも苦しき遠つ舟人 にする楫 の月 を催しか 任 の川の むら雲

聞あえぬ鳥のはつねを父も來ん一よになして別れすもかな 情別戀

ふけ嵐ゆくての櫻散と見てむすほ」れなはきぬくの空 別らき人に恨み さしのほる空にもまかへ別らき枕のにしの山の端の月 をふかめ してゆふ つけ 鳥や弊しきるら

深更歸想

深夜別經

かひそなき心の間の戸さしをも鳥のそらねにきぬくの空

思ふには干しもあか 今こんも遠き夕 よわ しきぬ かれてのよと雲をさへまちそわひつる をよしや夜深き有明のそら

519

想

かっ ムらめやをのよしの原まよふとも聴つゆ のきぬく 0

別戀

さよ深く出 心ありて薄き日かけよかけ捨し勧の形見の朝かほの花 ことに出て心よわさを見えつるやらら山 身にそしむもよほしかほの深き夜に木葉の音もきぬ 獨寐に馴來し月やふかき夜を人にとわるきぬ 今そなく夜ふかかりつる別とも立やは歸る鳥のはつこゑ 出てこし宿の詠 しは夢の道芝に露見えそむるし めはいかにとも誰に問ましみねの機雲 吹の 0 きぬ 0 めのそら i 炒

寄寫別戀

名残らき有明の月は清見かた浪の闘もる別路

後朝戀

忘れしのとの葉の 逢見しになさしとすれ 分るとも人やおもひし明ほのし花にむかふもお 切戀 みや今朝よりは懸の山路のしをりともせん は鏡 0) 學術 10 カン 12 ち 0 叨 15 も影のそら 空

いへはえに人もお 後明

もひし面影の花にこほる」しの」めの路

白 の他はあやに 逸 後州戀 < 13 おき別らき身を残す朝貌

浪よするあら磯岩ほ越て縮くたけよとてや强面 渡りての思ひの末はあふくまや行方もなき潮 K の川きり かるらん

夢草

見すもあらぬ夢の名残を止めけん夕の雲に明ほのへそら白露のしけき戀草わくらはに袖かけし人やつみはやしけんから衣誰かは染しはつかにもあゐより出る色の千しほを

**渔不遇** 

秋風の空もうらめしをと女子か行逢のわせをかりの契りにすか莚心とゝめぬよひ~~に面影をさへ玉の緒にして思ひ川しはし心の行水をなにかふかめてせき返すらん

稀逢戀

たとるまてらつる月日を人もしれ結ひもおかぬ宿の道芝

打わひて身はならはしのよひ~~をとにも田し又やとたえて今待まてつゝみし納の移りかに衣手かれし程な忘れそ人も見よたゆむ心の誤川中々こよひ闘おとしつる人も見よたゆむ心の誤川中々こよの闘おとしつるをも夢の枕にらつし侘ぬ年に稀なる花のころも手枕ゆふ夜半も露けし茂山を分こし末のはなの下ふし

稀戀といふ事を源氏物語の詞にて讀へきよし侍しにいみかねて忘形見の月やみん玉さか山のありあけの空忘れ貝ひらふ渚とみしほとに袖打ぬらしよするなみかなむれに立宮士の煙よ天人の契はかりにおもひけてとやむけつる影も忘れてよな / ~ のとたえ語らふねやの燈火

避近逢懸

初川千とせ待えてすむ水にしつ心なくやとるつきかけ

あはれなと山櫻戸のゆふ嵐浮き身の歸に心みすらむ

即想

くるしきはよわる風になら柴やをらぬ袂の袖したふらし

切想

難念想

**順鉄** あちきなし夢となしてよ秋の雨に桐の葉落る宿の夕暮

相見しは我さえたとるむは玉の夢をさたかに誰もらしけん

ひとへにはかけしや心花さくらをらはこほれんつゆの別ほの

夜懸せめくるは浮身の何といたつらに心合するあきの夕暮いそきてもかひなき空を花にさへ心見えつるはるの夕くれ

月夜戀 月夜戀

それと見は打もむか さそふなよ思ひ Ü れ しの はしよはの月通ふ心を人にしらすな 我心見ゆら んものをよなく 0 A

詠るも何そは露の萩の上にやとる契りをよその月かけ

まさらに影もうらみ し槇の戸にさそひとし夜の有あけの月

別路を忍ふの浦 深山 秋戀 浪まくらおもひ捨てもあまのたくなは

ありてらきみ山 10 生ふる菅の根の秋の幾夜を獨寐の空

di

見し人も外山の 山家夕戀 家戀 里は \$3 のつからたえぬ便りにわすれわひぬる

あちきなく詠めてけりな夕時雨思ふかたにや杉のしたいほ

かたしきの袖の哀もおもふらん露にすみこし故さとのつき

逢見ての後の思ひの行へなき戀路にすゑよしらかはのせき

里遠しおほつかなしや小車をあしとき駒にうつリゆくとも

おもかけは都なからのよと雲にあらぬおもひのさやの中 щ

> 忘れすはいかほの沼のいかにねて思ひ都の夢のかよひいかに見ん心の色そつくはねの雲吹風はたより有とも 明かたのかひの白根もかなしきは夢にわかれしさやの うつろひし心のはなの面かけに秋風はけしみやき野 旅宿逢戀 原 山

よなくへのしをれし袖にかけきやは花の紐とく宮城野 0 露

清見かた哀かくとや面影を闘もる聲もおくるなみ 故里に傳へてしかな草まくらしらぬ 旅泊戀 路 もゆ B は とひきと

月影もぬれてそ宿る手枕のかとりの浦のしのゝめの空村もかけも今宵はやとれ渡つ海のかさしの波をかたしきの床 夢路やはひたすら絕ん浪まくら龍の都に人をこふ共

寄月戀

報むよの露もあらしもかけはてめ心も見えし淡茅 わりなしや人に戀路のしるへして果は恨みをおくる月哉 よもすから思ひの空をすむ月の排へはかてに浮 寄月逢戀 生の月

今宵 はと空にとわ 寄月稀縣 礼 いねかてに詠し月をお

もはさらめ

やすらふもとわりあれやわくらはの涙のひまのさむしろの月

寄月遠戀

行へなき夜半の詠や松浦宮ひれふる山のあり明のそら 寄月恨戀

つれなさを月にまかへし恨さへ人にそかへるあり明のそら 寄星戀

おもほえす袖のしら露おもるめり獨詠むるよひの秋風 かこつとは雲吹風やしらさらん我夕くれの袖のむら雨 詠つ」たのめし空も夕つ」の質にしつむはるの 山の端

**戀**風

小むしろや月の霜夜の山風にはらふ跡なき思ひをそしる 寄風見經

賴む夜は四方の山風小むしろの我身ひとつの更るとゑかな みし人に心空なる春風の花の香さそふゆふへのみかは 寄風待戀

夕暮のおもひを宿す秋の雲雨となりてや袖におつらん

いかにせん思ひけちてよ天原あらしに浮ふゆふくれの雲

寄雲忍續

寄雨戀

あやなくも頼むよくるし雨の音に心すむへき燈のもと

寄露戀

露ならぬ何そは心秋はきの移ふらへに猶みたるらむ 戀わひぬ消かへりても白露のわか身かいらぬたくひともか

な

秋の色を何か恨みし袖もはや朽葉のうへにかいるしら露

かひそなきよなく一胸にまかねふく思ひを見えはきひの中山

寄山逢經

消かいる露とはしるや强面さのとたえ待えし深山風に

筑波山戀

鷲の羽も世にそ散行つくは山深き戀路と賴みけるかな

戀路にや朽はてぬへき佛ともみかけはみかく三保の杣木を

何ならぬ我名のりそのよるへをは清き洛にいかてとりみむ

身におはぬわか木の花にこりすまの恨はかなき老のなみかな たつらに夜の更行はすか遊身さへ浮ねのすまのららなみ

寄浦忍戀

うつせ貝よし碎けてよ身をかくすみの生の浦の波のまにし

寄汇戀

九百十五

待そ見んあら立波も限ありて今朝はなこ江の遠つ舟人

卷 第 四 百 八 + 八

卷第

#### 寄磯戀

あちきなし此比なみはこゆるきの荒磯かけの片しきの袖興津なみよるの在よ玉藻敦磯屋も袖のひまはなしやは

寄川恨戀

# 一筆も書絶にけりそれをたに誰かはすゑし文字の關守ならはすよ浮身をかへて秋の風いさこゝろみんすまの關守長き夜の岩戸の闘路あけぬとて今日も思ひの行方そなき

ねねる夜のはかなきのみか朽せしの世々の契も夢の浮はし

### ・ 塗方や名のみありその渡りえぬ日もゆふくれのくすのうら風 またしらぬ心のおくの秋しのや外山しくるゝ色は見えにき

袖の露うち排ふにもよそめのみしのふのすたれ隙そ苦しき

あさちふや頼むこゝろの葉末まて殘さぬ色に秋風そふく忘れしの行へもしらぬ秋風のゆふかけ草にかゝるしら露春の風いかに待見ん敷ならぬ三室の拳のしものかけ草たよりなき旅よりかなし思ひ草まくらに結ふ露のひとりね

#### 寄下草戀

尋ね見よきえぬ思ひも白露のたくひやはなき月の下草はかなしや更にし物を秋の風猶しら露のすゝのした草

#### 寄思草戀

**分言草語** 滑かへる心の露におもひ草よしや枯なは何にやとさん

# 住の江に琴もゆかし忘草われゆゑ人やつみ鑑すらむわすれ草人はいかてか我おもひかつも見えつる種を植けん

寄草別戀

おきて行限もあれとしのゝめの光りをいそく萩の上の露たくひある袖とや見えんきぬくへの曉月のつゆのしたくさ

### しられしの心の色やよひく、も思ひ絶にし淺ちふのつき誰ための床はらふらんさよ鼠心ならひのあさちふの霜寄浅茅戀

頼むなよつらき心はひまもやは嵐吹夜のいほのしのふき

#### 寄苔戀

・おけぬとて獨やはねん見るまゝに庭の霜夜の苔の上の露いく世ともとふ人そなき足引の山の岩ほのこけのみたれを

うきねにも身はならはしを水鳥の玉藁の枕思ひみたれし

卷 第 四 百 八 十 八

春 夢 草 寄木戀

秋 岩高みしをる鼠の太山木も絶ぬるものを身をなくたきそ 頼むなよ川邊の樹ふか」らぬ色と見るともあきのくれかた なけきをはこりも盡さす待よひの斧の柄くたす程そくるしき ふけぬ人はとゝろのたかさこやおよはぬまつにおきつ白波

木によせてあふこひ

から衣花にそ匂ふ夕くれはかけしいのちのつゆの下ひも

人も見よさそへは風にさくら花心よ花はあはれならすや はかなくもたのむゆふへを心ある花やあらしの雪と降らん

恨ても待ても見えし櫻花にほひにかすむ夕くれのやと 風をたにまたさらましを花櫻心を見えし宿の夕くれ

寄花別戀

忘れしのしるしなく共いか」せん花はかつちるしの」めの空 なくさめと思ひやおきし花の色も苦しき物をしの」めの空

夕嵐ふきな殘しそ花よりもあたに契りしこゝろをは見し 寄花久戀

賴め猶花に老木の哀をもかけやはすらん宿の夕暮

哀とはよそへても見よ今はとて移ふ花にかいるしらつゆ しかりとておもふもよしや吉野山花に入ぬと人に傳へよ ならひけん人のこゝろよすゝか川ふりすてゝ散る山 あたに人よしらつらすは櫻花思ひくまなき世にならふとも 櫻は

寄松戀

くやしくもこゆるをそ見しわか心おくらす浪の末のまつ山

ちかひてし心のおくのあや杉を山田の原に猶頼むかな 鳥たにもなきて恨みよ杉たてる谷をこゝろの夕くれ 0 F

まきの薬も獪いかならん袖のうへを不破の闘屋にふる時雨哉 寄虫戀

思ひねの夢にもそ行あきつはの袖ふるいもか影に見えつる

寄蟋蟀戀

小萩原下葉の秋をきりくくす鳴てららみよゆふくれのやと

寄鳥戀

カン お ねに行を見るさへくるし鳥のねも聞ぬみ山 雲井まて心高きもりひはりおちさらめやは露の淺茅生 つちともあふ瀬はしらて水鳥のくかにまとへる経路をそ行 ほよ鳥深山に深き宿りをも世のあやにくの類とや見 もひねの片敷ころも染つくせかりの涙もあかぬ千しほに のゆふくれ も数

途はぬ夜は十つゝとをの鳥の子を今そ重ねし中の小とろも

おもはすに翅ならへんとの葉をさよの枕の鳥のはつこゑ深き夜のとりのはつねにとよせて思ひかひなき人は恨みし

寄山鳥戀

F-}\*: あちきなく思ひなわひそすか莚我も山島のさ夜の嵐に

わひつゝも獨やねなん頼むにはかた山鳩のゆふくれのこゑ

(額がす水鶏もあやなおもふ人なきにしもあらぬ松の扉に

かしよ獨ぬるよもをし鳥の深き契りはなほやくるしき

数かしよ獨ぬるよもをし鳥の深き契りはなほやくるしき

いかにせんうき人とは隠れあしの浪にたえ行鳰のかよひ路頼むなようき三鳥江のしをれ芦にかゝる浮すの鳰の通ひ路

しる人の心つけはと小車の牛のよそめも今朝そくるしきまち見はやとらのうそふく野へにたに契有ける風の便りをあはぬ夜の月毛の駒よさすか又引かへしてやあり明のそらあはね夜の月毛の駒よさすか又引かへしてやあり明のそら

寄務戀

かきつめて物思はする我身かな臥ゐのかるもとふしかくふし

いをするま

見せはやな岩のかけ道たとりてもをるてにもろき嶺の椎柴

寄傀儡懸 よしや又千蕁の浪も海人の子のなこりにかけし片敷の袖

寄舟樹、恨しよ野上の里の秋の風世々のちきりもゆめのひと夜を

それとたによせてや見えん薬刈舟興せふかめししたの亂を寄舟戀

したひのる心も見えて小車のところせくとや人のいとはむ寄車戀

契りあれはつれなき君か小車になれける物をうしや世の中

寄鐘戀

うきねとふ鐘も告とせ床の海待夜むなしきあかつきの聲いつか身に鐘もうらみん葛城や高間の雲のあかつきの聲

寄鐘絕戀

おもはしな人のころのます鏡浮身のちりをかけて見んとは手もふれし物おもふかけは増か」み心の内を見るそ苦しき

草

寄帶戀

おもかけもやとさはやとせ増かるみあひに逢ぬる秋の夜の月 つれもなき棋のとほそに榊葉の鏡をかけょ秋の夜のつき

おとろくや獨ねる夜の床の海にあまの釣するともし火の影 筆を見るよしもかな初潮山みあかしふみのふかきしるしに 寄燈戀

いさりすとよそにも見えよ渡つ海を涙の床にのこるともし火 寄衣戀

は らは玉の夢より外に頼む夜のかたしき衣いか」くるしき 行かよふ夢もやとさし我ゆるのうた」ねならぬ夜の衣に 獨ねのよるの衣を懸つ」もくらす春日にほしそわつらふ し姫のかたしき衣我袖にえやは吹とすあきの川かせ

紅のとそめの衣別れとしなみたの袖にいつうつしけむ 寄衣別戀

おもへともならはし俗ぬさよ衣ぬる夜もおちす見るよしも哉 かれぬともよしさ夜衣をと女子かなつるいはほも契なる世を 寄衣稀戀

花にさへ恨はかけし櫻いろの衣手かれししのゝめの空

寄衣恨戀

詠 わひぬ花の姿に引帶の行へにかすむみねのよこくも

数ならぬしつはた帯のかなしさはかた結にも身をそかけにし

5 かならん千引の石のつなてにも心つよさはさ夜のしたひも

寄莲戀

獨ねの床のさむしろ身一つを逢見し夜半はいかにおきけん 寄枕戀

夢かとよ枕らこかす面影にうちおとろけはあり明のそら 敷妙の枕につもるちりひちの山はふしのねらきおもひかな

寄永慈

植の上にいかる干しほにおとすらん山はいつくも瀧のしら糸

言の葉に残す心ををりそへし野分の跡のはなとたに見よ

笛竹にこゝろもとめし天人の空にめてけんねにはたつとも

寄斧柄戀

沖つ舟あはれ契のうき浪に千引のいかりおろす夜もかな 寄碇慰 をの」えのいく度朽て秋の夜の明るまち見んひとりねの床

くるしくもおもひ明しつ長月の行のまくらのゆめのお 寄色戀 寄夢戀

8 かけ

九百十九

櫻色にうつる霞のそらおほれ人のと」ろのゆふへとや見ん

おきわかれ待よひよりもつくくくとおもふ戀路にふる涙かな 戀形見

あ いく度かた」書捨し筆の跡に千々の心をそへて見つらむ やなしや君か手ふれし琴のねを打驚かす軒のまつ風

いまはた」人も忘れぬらきふしをみえ置さりしわれる苦しき

被忘戀

なひくまも一花す」き吹かへす秋の野風にもろきしらつゆ

侘 ぬれはそれさへつらし誰しかもよ」の思のはしめなりけん

さのみやは袖に 心あらは思たゆへきふしく、を見すきかぬ身といかて成けん 人そらきおもひくまなき花も今らつろひわふる春のくれ方 しくれのさゝ波やかた山あらし秋ふけぬとも

哀またした葉の秋に物そおもふおらはとみえし萩のらへの露 らきにのみあへすこほれて花の色をらら山吹の袖のしらつゆ 見せはやな契り捨しを花の色のいふよりまさる夕くれの雨

寄海恨戀

よなくはかけすもあらなん石見かたつれなき月に秋 はかなしや思へは人をとはかりにまたしら浪のうらのは 浦浪 つ島

ふく風のまた入たえぬ秋の色をねやの扇風のなた世にく夏恨総 のらへに見るかな

らら葉吹嵐も色に見えしとのらきみ山木にもろきしら露

恨身懸

何しかも吹しほりけん秋の風ひとりとけ行露の下荻

恨絕戀

思ひわひ見そめの島にかへるなりたえにし後の秋のうらなみ 風の葛葉ふきかへす行へにも結ひし露の名残やはなき 雜歌上

北野社法樂千首中に立春

手向山あくる一夜に行年のぬさも取あへす春は來にけり 田つらに出て若菜をもとめしに

から衣ものすそぬれて根芹おふる雪けの澤に今日やくらさん 春の雪を

霞 一つ」と」にちりこね山遠き梢にの 箕面山に入て瀧の本にて みやはるのあわ雪

春なれや楽の岩ほの雪氷とけて落くるたきの 前内府三條のもとへ二月の比申侍

夢 草

九重 の空いかならし 贈谷 山 里もはな驚のはるのあけほ 0

昨 九重のみかきの春の近けれはむくらの宿も花をこそまて 百今日 空いかならし峯の雪消しからへに又そうちょる

は すむ人の つはあれと思ひや出る思ひやる心に向ふはるのあけほの かなしやわか身に残る昔とて花らくひすのあたの情 心をいろに山里も岩木にはあらぬはなやさくらむ 11

餘。慰彼一句呈此五篇云。微渦惟幸。逃虚翁。丁卯仲春 右弄花老人被投一首之 和 歌。金聲玉摄。嗟嘆詠歌之

又の年申侍し

初六。

花にのみ詠むとや思ふ思ひいる尾上の鐘のゆふへあけほの 春來ではいつかと花に詠めしやひとつこるの夕へあけほ 0

まち見ても老の行へそ忘れける君か千とせの春のひかりに 永正十三年正月ふみ奉る次に 分五句減卑懷云 申 侍 3

待見てそ年を隔てし雲霧のこ▲ろもひらくかりのたまつさ はかなくそ身はあた物を忘れける逢見ん事をはなに待つ」 しらさりし老の行 くか りおなし事のみ配ふらん君か千とせの春のさかつき へも我ゆゑに今年はいたく霞 む月 かな

> 染出す八しほの衣里のあまのなれしにもあらぬ朝かすみ哉 消かたき頭 山家早春 藤原正能(池田伊賀守)す」めし三十首に の雪をかこちても先やむかはん春のひかり 海 邊雙 K

月すめは都のほ 山里は雪もふらなん春といへと花ろくひすの音信 壬生 梅の枝をすか 二品の正月半月さしてと侍歌をお かも神山の御戸ひらく夜を思ひやるかな し侍 るとて もひ出 もなし

はかなしや今一春の花にもと軒端の梅に思ふ 京にのほりてはなの比攝州に下ると 4 のちは

櫻花ほのめきわたる九重を旅たつ身とも成にけるか 神南備に八幡の社 とかやに八重櫻ありな はひら な

ほのかなる行手の櫻 けぬと見えたりおもひなから過ぬとて いきらしとい ひしもしるき花 のもとかな

春

の歌

rþi

K

吉野 山はなの盛りや敷しまのやまと島根の匂ひなるらん にて

身にあたる春にも有かな咲めくる花のやとりに鶯のこる 三月一日 3 0 日なりしに

思ふ事所りやみまし須磨の浦 三島江春三月盐に に御殺せし日の今日にもある哉

三島江や忘れかたみに舟なから今行はかりの春の夜の夢

春雨

染出す若葉の梢山かせにおとはしくれのはる雨のそら

暮春のこゝろを

樹陰夏風あはれしる心見んとや花もはや散はてにしを殘る容かな

□ 見はまたあさな~にそよくかな槍の若葉にふくむやまかせ 夕見はまたあさな~にそよくかな槍の若葉にふくむやまかせ | 夕見はまたあさな~にそよくかな槍の若葉にふくむやまかせ | りまする。

花も世もうら紫の身をしるや春のなみにはもれて吹らん五月の比宗椿法師もとより藤花を贈りて

人に造しける
人に造しける

人と物語して郭公をきょて

五月比庭前の橘に鷺の宿りて鳴けれは

三位入道富春旅館に五月槿の吹たりしを見てよみ郭公うとからぬ摩を思へとやはな橋にらくひすのなく

てつかはしける

かさまにつくろひけらし夏もまた半を秋のはなのあさ額

見立

夏草にひともともかな秋きてはことをあまたのはなの色々

急雨の雲も過あへぬ小山田に朝霞をしくとる早苗哉

夏田

自妙の雨つ♪みして田草とるをと女と見れは鷺の毛衣

战

夕月夜ふけ行まるに玉すたれひま求めつるにほる立花

你夜當

風やたつ夜深き露のみたれ芹に宿りもあへす行ほたる哉

せみの初の袂に秋やくりかけし清瀧川のせるのしらいと

昨日今日とやまの秋の山颪にあへすくたくるをきの麔かな荻風

待えたる末葉の風や夕くれの壁も下荻のあり明のつき間荻風

状なも移ふころの行すりに袂くるしきをのゝあさつゆ

むしのね閉は 勃題 自然齊宗祇第三回に前内府するめ給ひし五十首に秋の風心やつくすふちはかまお花か袖もはきか花すり

夢 Ţ 富春槿を送りて

心おく人に見せんと詠れは明るまおそきつゆのあさかほ

白露も袖にそあまる明るまを我ゆゑまちし朝かほのはな 住吉社にて月を

なからへて今年も見けり住の江やいけるかひある秋の夜の月 八月十五夜おなし社にて

命ありて又もあひ見んと思ふとも秋の今符の住の江の月 藤原正盛宅にして十五夜に

うへもなき名を得たる夜に秋の月心ゆるさす出る影かな 月契多秋

身にしれはさそなと向ふ月の中の老木のかつら影もかはらす 京極黄門忌日廿日なる事をおもひて

今も猶あふき見よとや秋の月はつかのそらの高き名殘を 須磨浦

心もや月はあり明の秋ふかきよものあらしに須磨の闘守 廣澤の池にして月を見侍りて

天の原雲なき四方の月かけも残らすやとるひろ澤のいけ 住吉の社にまらて」

秋の風哀とそおもふ住よしの濱松かねを手枕にして

秋田

月なから時雨と聞は小田の庵に稻葉ふきこす風の下つゆ 生田のもりを過侍るとて

ひと葉をも袖に吹こせつの國の生田のもいの秋のこからし 月を見て深更にいたるえらひ來て庭にすませ侍り

しむしの壁かれくに聞えけれ

弱リゆく壁そかなしき野へにのみ聞まし物をまつむしのとゑ もみち葉も移ろひかれて残るなり籬にくれし秋のしらきく 攝州高槻淨觀庵に花の木草をうゑ水をたくへたる 河州館延寺僧禪心庵室にて閑庭の輿を神無月に

庭神無月の比猶見捨かたくて

冬枯の影とも見えす春秋 草庵にして冬興を の花のやとりにすめる池水

いつはあれとさしても人はとはぬ哉雪降ころのふゆの山さと 霜さゆるかきねのしと」そよくと朽葉の衣かつきてそなく 冬懷舊

冬の夜の長き寐覺よ程もなき愛身に何のおもひ成らん 鳴山

時雨せし夜のにしきを龍田姫ゆふ付とりの聲やまつらむ 山嵐音靜

横雲も心あらなん山ふかみあらしのゆるすゆめ 0 あけほ

夢 Ţ,

都出ていつこはあれ 思ひ來し不破 契きやよひの村雲消つきて一筋らかふあり明のそら はるかなるもろこし船もかるて小室の入らみけふ見つる哉 九重のみやこ出てもこくろゆくそらはゆふへの 相坂や道のはてまて思ひたつ夕付島の摩やかなしき 待とりし花そほのめく すむ応や山ふか あ 志賀のうらやふもとに明て秋の夜の雲を小比叡の峯の杉村 20 くかれていもやすからぬ春の夜の行へや霞むしの」めの空 8 へとや世々に出ても法の道た」一すちの天のはしたて 關路雨 夢中 天橋立にて古寺のこゝろを 名所關 州室の津にまか に曙雲といふ題にて歌を案し侍るとおほえて めの開屋 いらし夕暮の木の間しのきて立けふりかな と自河やこゝろの闘のあき風のやま の旅れかなぬるともよしや夕暮の雨 あ りし ふ坂や杉村くらき鳥の 時 かもの川かせ は つ際 深き夜の嶺の杉村おく霜の色より寒きかね 誰かきく世の 山のはの杉の葉したり降雨や夕暮いそくまとのともし火 すむ鴛の心ともなふ人やなきいはほ 力 さそひ出る峯の よるの雨の明ほのにほふ住の江やいつれ繪嶋の春 さひしさはか おとろかぬわか身いく夜の手枕に尾上 夕嵐きくもなやましみね るしあらは七くりの湯を七かへり戀の病のみそきにやせん つらきや嵐をいたみ夕暮の雲におくるゝすみ染のそて 嶺上松 草庵雨 **暮山松嵐** 理りも残なき草の応のあかつきの よひし鳥もねねなはの下行水の野 あらしや宿すらん松にやすらふかね の松いくとして カン 0 くれの谷のした水 鐘 の忘れ あめ ~ の舟人 かたみそ 0 月か の摩哉

け

夢 草 陸奥のまかきか嶋は松にのみ朝夕なみもころとすらむ 言の葉にかけしやいく世風と月二木のうへのたけくまの松

老らくに相見んとてや今日まてもなからへ來けん高砂のまつ 高砂の松を初て見侍りし時

宮古より思ひし末や七十にわか身なる尾のまつのうらかせ にして

生のほる山は高さこいく代ともしら玉つはき蔭も木深し 嶺樹 格

かきくらし雪は名残もとゝまらて夕日さひしき嶺の常磐木 むろの木

山もとやさとはいつくもはなれそにむろの一木のたつ煙かな しきみ

一位つむあかつき露に世は花の匂ひにあまるすみそめのそて

うち出てくやしからすや くちなし 口なしを世に思ふへき花とこそ見れ

老の後心の中 を尋 82 れはみなしくりともなりにけるかな

はかなしや かた敷とろも篠ふきをみ 山颪のへたてはかりに

山

くり

年ふれは有にまかせていとひこし世の便りに さひしさよ思ひもかへせ花にくらし木の葉におくる柴の樞を なくさめし人さへつらし山里に聞なやむへき春 B 0 か か ムる山さと 世 か は

秋の日もゆふへ 山 居 の色にならしはのかきねの山路行人もなし

秋山家

草も木もかきね

の外山か」らめや心のま」にうゑて見るとも

ねの音もまた深き夜の庵の内に松の火さひし嶺の朝霧

カュ

さひしさはこ紫のけふり山里のゆふへのものと思ひなしても ならしはの戸ほそをあらみ雲風も暮れは宿る山 0 かけ哉

山家嵐

誰 山 影たのむするの鑑のはかなきに嶺のあらしも心 心すむ夜のあら か見ん墨のくす葉の夕嵐とくろのよそにさわく物とは ふかみ絶てもきくやいか しに思はすよたえし山路のふかきうらみ にとも峰のあらしをとふ人のなき おきけか

名もしらぬ木の葉を庭の夕あらし山もいくへに誰をうらみん よひく 山 一の片敷袖の 家松風 しはしたに夢を宿さぬみねのまつ風

電

前 20

鐘の音の夜深き暴を別てや軒端の杉にやとるしら雲 心ある人や苦しき雲はよのうきをもしらてやとる山かな やすらは」思ひなすてそ春深き松のとほそのしの」めのくも

能因法師まゆ自に妙とよみし石井のもとにて山家 の水といふ事

家杉

杉たてる門もふりにき足引の山よりふかきふすむらし

友と見よ軒端の杉の夕あらし心深くもこもる壁かな

自妙のかはら母影をあとしたふ山井の水にらつしつるかな

山家鳥

松の戸に人たのめなる鳥なれや谷の朽木をたゝき捨つる ふくろふも耳なれぬるを名もしらぬ深川の鳥の夕やみの路 くれなからたよりもなきを霞む日の夕山鳥とゑそ滸 しき

山家人称

非 わか心見えこしものを問捨る人のなとりのみねのまつ風 施こそ山ふかくとも花にとひ木の葉に人をしのはさらめ ぬめり見せはや人に忘れしの嶺のかけ路の八重の白 霊 do

閑居雨 田家興

色かはる桁も あれと山さとのいなはしくる」あき風の音

> 老はて、獨しきけは住こしや憂世の中のゆふくれ 0) あめ

閉居女

よしやたゝ竹深き窓のひとりこと筆のすさひの長き日暮し さひしさをかた見に心見えしとの心見えけるやとのゆふ暮

山館竹

ひまをあらみなかめいたすも行人はかたをか山のまとの吳竹

契竹を葉分に染て秋の日の窓より西にのとるさひしさ

愈前栽竹

竹取のと」や園生と住からにゆかしけ深き窓のうちかな

雨中綠竹

影らすき夕日は野への片間や竹の葉しのく秋のむら雨

かつらきや遠山伏の秦こえし跡もいく代の苔のかけ道

身をも世をもおもふともなし鐘の聲落すなみたや曉の空 造山路岩ねに生ふるついら折くるしきまいに暮しつる哉 聴聞 鐘

Ш かけも尾上の鐘のゆふあらし吹とす里はらときこゑかな 鐘磨何方

夢 7,T 明やらぬ夢路の末の鐘の聲はなのしるへに匂ふはるの夜

消かはる曉ふかし山の端の星のひかりをまとのともし火

夢さそふ夜牛の嵐は杉の窓にたえくなひくともし火のかけ ともし火やしる人ならん雨の音窓に夜深き秋のといろを

#3 のつから身をもしるへき光かな聴かたの窓のともし火 開中燈

深き夜のまとの灯なつ虫のむすほ」る」もをしきかけかな 開居灯

尋ても風のみそとふ八重葎光りをかこふやとのともし火

くるゝ野にかへると見しや月の本松の戸た」く遠のふる寺 歸るさを待も野寺の夕あらしはけしき陰のすみ染のそて 樵夫夕歸

夕あらしつま木におつる樫の寶の音もあられに寒き山かな

渡し守うちぬる夜はを里人の月めてしつ」さす小ふね哉

江を淺みつなくともなし鼠芦の花をやとりのあまの釣舟

漁火出浦

数々にうかひそ出る浦風のあら磯こえてともすいさり火

すむ方やちかの浦なみ暮はて」のとかにらかふ海土の釣舟 漁船連浪

露か」る芦わけ小舟ふかき夜の月をや拂ふあまの衣手

名もしるき浪のうき島鹽かまの前よりおちになるゆふへかな 夕階思

おもほえす袖にそみてる松風の心におとすゆふくれのつゆ

前内府より給し題心靜延壽

吹みたす風も音せぬ夕暮はかすみのほらにすむこくろかな

長き夜そさなから残るをはた」のいた」に渡す夢の浮は

はかなさも誰か心より見え來ては夢ともしらぬ身をいさめ刻

名残にも袖はしほらし夢の中の告かたりに楽のまつ風

カコ しこくもかりはのえものうは玉の夢の面影世にそ名たかき

岩

まかまほ かならし千々に分けん心をも獨のら し花の顔はせ通ふとも筆限りある笛たけの聲 へにやとす おも カコ け

貴妃の吹笛圖よみ侍し時に王 昭 君

紅 よしや又たへなる姿うつし繒の偽りなくは名をものこさし のにほひも消でますか」み見しにもあらぬ影やかなしき 人の家にて鶴を

をの カ へん千年をおきて数へ見よ限りなき世を宿の友鶴

**1**6 もひあかる心と見れは雲井より馴來し庭を宿の友つる 飛鳥井拾遺賴孝の亭に

すみの江や浦なれ 松上鶴 行は ふりはへておほふはかりの鶴の毛衣

夜の鶴八十島かけてすむ月の秋をかなしむ遠方のまつ

吹むかふ鹽風さ むみ沖つすに入日をしたふ芦たつの聲

歸るらし契おきつの濱松に月もまつよのあしたつのとゑ

夕日影はるゝ河すに立鷺のはらふもかなし雪の毛衣

さし捨て雨はふる江の舟の上にみの毛しをれて立るかささき

丽 くらき入江の柳ゐる鷺の白きを後のみつくきの みさこ あ

浦浪に入江のみさこ飛かへりしつ枝動かす荒磯の

松

鳩

吳竹の園生に來なく家鳩も事とひすつるゆふくれの雨

らす紅葉あさ霧渡る梢よりもす鳴落るその 暮林 ムむら草

かすかなるはやしか 春の暮の歌に くれにぬる鳥の羽音ひまなき夕くれの雨

ほとなしや垣根のしと」なれくてこそも別れし春のくれ方 鶴鴿來晚庭

めつらしき色に落きて秋風の草葉催ほす庭た」きかな

年をへてみさりし鳥も松の戸に心をおかぬ山 名もしらぬ鳥の庭に來りたるを見て のあはれさ

宮古人春のさわへ 8 0 ふしみ草かりかふ駒のほとは見えけり

奥山の岩ほにかゝるかもしゝの身をこそしらめあはれ世の中

ねさめつ」聞はすさまし峰わたる曉つきにむさ」ひのこゑ

哀なるこてふのうへに春秋の花としはなをたつねてそ問ふ

吳竹の末葉を月にさらしけり千尋にはへしさゝかにのいと

七車つみおくふみやいにしへの忘れぬ道をとひくさに見ん

思ふにも心そすめる天つ袖かけしはかりの笛竹のこる 馬をかりて物へまかりしに馬を返すとて道泉へ池

足はやみむちをわする」春駒に老を助けて詠め來しかな 自然裔こゝに下りし時送行にまかせたりしかはよ 田佐渡入道)もとへ申つかはしける

いかにせんかりの山路の名残たに長き別れの心地する世を

くみ馴しもとの心をわするなよ野中の清水なかれゆくとも 心のみ行は山路のかひそなき島のほかにもおくれしの身は 冷泉左衛門督入道宗清播州に 7

ひたすらに袖をそひたす結こし末を野中の水くきのあと 橋本黄門公夏卿播州にて集會し歸路にお もひ立し

神無月のころ申おくられ

たかふなよ木の葉の山路分るとも歸るころの花の契りを

包ひもて釉をひかへよしはしともいは」かしこし宿のしら菊 心こそ花にましらめ老の命春の山路にさきたちぬとも 播州にて源貞次(樫村内藏助)送り侍るとて

心さへ深きにほひにをの」えもくたすはかりの宿のしら菊 播州よりのほり侍し時職員(小松原三郎)道まて送

りしに障る事ありて歸るとて

高砂のまつにおよはて立場る身をうら浪の哀れともしれ

實存法師草庵に年を送りし日向國に歸りくたりし高砂の松のかけにも浦波の立や歸るとふみまよふかな おくり行に

老をおきて行もさとそは思ふらめ心を見えし袖のけしきに

思ひおく袖のけしきの面影に行かた迷ふたひのそらか 日能法 師赴奥州送行

72

あはれしれあすともまたぬ老の波思ふあまりにかけし行末

四 百 八 + 71 1/8 范

第

九百二十

あたしも契りなかけそ立 た思ひ立しに伊勢の大淀の渡 二十歳はかりの時富士一見の望ありて秋の末つか か ~ !J ・千代 りに宿りてをひてを もと思ふ和歌の 浦波

秋風のあしのかりねと思ひしをいくよの波に大よとのはま 待しに二日三日族ねせしかは らこの渡をして三河図かた濱と云海面を傳ひ遠

を出 旬 中天に雲白妙なり にうつりぬ共ころくもりかちにてひきまと云所 し明ほ のにはしめて富士を見侍しなか月の下

すみ渡る秋 の中山 のみとり のほとりに 0) 天の 原 7 ふりさけ見れは雪の富士の根

秋を一て都のそらに思ひ來し月をかたしくさよの中山 清見か關に 7

叨 にけり月 つの山を越え侍りて とのみやは清見かた岩うち越る沖つしら波

蔦か つらみたれてそほつ衣手にいと」しくれのらつの山 に旅 飛鳥井拾遺はりまへ下向の時攝州池田にての當座 越

資傳ひ馬は有りとも 殿(近衞殿)より給し二首中春旅 しか でまか たかちより行ん事をしそ思ふ

我心傳へよはなの雲井路や忍ふの山

のみねのまつ風

しはしたに月もやとさす草枕とすの大野の露の秋風

旅人橋渡

のる駒はみならち 旅ころも月かきくもる空もらし濱名の橋の沖つ沙風 路旅行 いれて早川や橋あやふけに渡る旅人

明る夜の月のしるへも越かたきいは國山のみ ね 0

天台座主(梶井宮)給し五首中旅行 友

おもふとち紅葉のにしきたちきても都は遠し白河

の闘

露霜にいく里人の旅ねせし秋のこゝろをみやき野の 月

寄月旅宿

心をや月にも見えん旅ねより山里ひとの聲そいさとき 旅宿嵐

旅枕なる」深山の鳥たにもふし俗る夜の木々の 心あれや今夜はみねの松こえて行りを夢に 越えのとす墨のあらしの今宵たに夢やは賴むす」のかりふし 羇 かす嵐か あらしに な

秋の夜の月は一 月越關 夜の旅ねたに思ふ契りを須磨

の闘守

はるかにも行別る」や月をけさ古里人のしらか はのせ 형

ととゝふや夢もくるしき折敷も嵐の宿のみねの椎柴 かり枕通ふとゝろや椎の葉のあらしもしらぬ古郷の夢

羇中送日

羇中夕嵐

かりねにや哀かけ」ん夕あらし送り拾たるみねのたひ」と

里人と三島すか笠うちつれて行もや旅の友と成らん

旅衣はるさへ暮ぬ形見とも行へはなにかふるさとの空

羇中衣

思ふ夢は宿りたえにき野への露巻のあらしの夜の衣々 羇旅

L のふ山心のおくは白露のおなし袂にしをるたひ」と 海路

濱千鳥古郷遠くなるみかた今朝の舟出を音にや鳴らむ 渡つ海のかさしの花の浦風にむすほ」れ行沖つふな人 海路雲

明ほ のや浮ふ千島をとまり舟漕出て見れは彼のむら雲

鳥か ねも聞ぬ哀はおく山の旅ねにまさる波まくらかな 泊

> さらにまた別れ んもをしなみ枕あけかたきよの おきつよと雲

33 磯かくれ頼むたにうき夜の雨に行へもしらぬ沖のいさり火 もひやれもしほの枕あま人もられふはかりの聴の 名所旅泊 あめ

しれひょきの

なたもなたらかにうちぬる程の旅

のつつ

p's れを

哀

夢もまた何かをしまの浪枕むすほ たよりなき夢の名残は浪枕あかつき近き興の月かけ ムれ 行赔 0 こる

大海やくらき雨夜の天つ星ひとつふたつにかくるふな人 和 梶まくら涙すゝろにあまの子のすさむる笛の夜壁をそ聞 田の原夢路はたえぬふしのねの雪をいく夜の波の片敷

雜歌下

高き月を雲のうへに見てとおもひよりしを前内府に たりける時心中に老樂の 禁裡和漢御會に参りたりし暮かたの月殿上にさし入 永正五年九月十三日 に申しおきてまかり出しを奏聞ありしに次の いのちうらみぬ今行かな名

さまくに聞えあけける言の薬や名高き月の光とは見し 朝くたされける 御製

卷 第 四 百

第

### 老後面目感淚之餘記之。

愚缺百首

かに侍し時侍從大納言のもとへ 割怒のよし女房奉書とま

雲井まて思ひかけきや生る世の是そかひある和歌の浦波

雲井まていかて傳へん和歌の浦に年ふる田鑑の啼ねならすは

御製を下されし事をおもひて

影高き月の雲井に名をあけし去年の今宵を仰き見るかな

夜心中につゝけ侍し よはす申侍り過分とも中々申にたへぬことなりき其へ發句を申すへき様にありしかはとかく申上るにお禁裡御夢想の事承りて上洛せしめ御倉に参りあまさ

及ひなきほとは雲井の夢うつゝあやしき身ともおもほゆる哉及ひなきほとは雲井の夢うつゝあやしき身ともおもほゆる哉

へきにて。發句は肖柏法師申へきよしありしかは。まつさいつとろ内の帝の御夢に。 先皇の御代に御連歌ある

めくらし侍とて。、
のなには當座に申へし。此歌のこゝろにてなん風情をおもひれるに仰鑓有へき由。當代の仰ことなりしに。發句におき

えにたる事に社。年とろ夢庵とよひ來りけるも。か」るへ えあけぬと さしきといろさしなるを。 月十日のほとにふりはへのほり來られしも。 もこえける感悦。手の輝足の踏ところをしらすとて。 たよりに文つかはすついてにしるし送りしかは。 き事の讖の文にやとまてあやしく覺え侍しかは。折ふし もそ古語に有けん。今この老法師のか 名をのとし。巫山の神女の雲雨妖艷の情となれるためし の夢に入たくひ。もろこしには傳野の遺賢の舟楫補佐 あらされは。凡慮の所詠にはあらさるへし。大凡青雲紫宸 の外かいるはまれにやあらん。 かな。天曆以往の歌にとりても。まさしく柿本山邊の れしかは。さてもめつらかにもありかたかりける御 といふ歌を申上たりと御覧せられぬるよしかたり仰 りなれは、 とゝろよく晴て。 足曳の山遠き月を空におきて月かけ高き末のかけ 御連歌あそはさるへし。彼老人めしくしてさ 叡慮をおとろかしけんは。いにしへ今道た 吾國の月の名も實にかひありぬ おなしき十三日。 もとより凡人の見る處に ムること葉をきこ まことに 空のけしき 思ふに へきを 風體 こと せら はし 九

をおもひ出て。 かの法師の發句に。 發句は下官申へきよし仰られしかは。 さらはわたくしにあひゆつるへきよし詩 此事

空に おきて見ん世や幾世秋 0 月

腋はすなはち御製にて。

はにくもらぬ玉しきの 10

既醉を歌ひてまかつるほとに。しはらく南殿の月を見て。 けよりもしけくして。苔の狭につくみあまるらん嬉しさ B 大みきまゐる。 梢もひとつに見わたされて。月いれたる槇の戸口もえん 是かれあまたさふらひて御一座。 辰賞心樂事まことにあひあはすといふへきにこそ。 そのまゝあひともなひつゝ清光をふみて蓬屋に歸りぬれ 下若のまらけ。彼老人いさゝか申事侍しをもてはやさる の東おもて色つきわたれる山々のけしき。 おもむきにや。御さかつき度々になりて。 永正第七暮秋記之。 宮漏や」たけて鐘のこゑ半更を告わたる。けふの良 身をつみてありかたくもかたしけなくも。 しくたまはせし。老の面目道のめくみ。 夜にいりて事はて」。 昨日うちくわたくしへつけて。 くれかいるほとに御前 御くたものなとにて 古槐散木御門 仰まへの 筑波山 おのく 天酌にて 上林 庭の 0

> 淺香山あさきになさは道を守る神そ心の奥を隔てん 石山僧正(導海)懇望の事有し時

しるへせし君かこと葉に和歌の浦や上なき玉をつくむ袖哉 深めても何か思ひし淺か山 返し )愚詠 の事を褒美有しかはつか あさ」そ見えん いさら は しける の水

和歌 住吉の松の落葉にかき添よつくしの海のもくつなりとも の浦や君かと葉の磨く玉も暗きに迷ふ人そか 護道(内藤内藏助)つくしより連歌を見せはへりし 時つ」み紙に

住吉の松も下枝にかけや見んつくしの海の波のたま藻を 返し 平賴亮(松田九郎)風雅にともなひはつりて知音と なりあるとし花のころこなたかなた遊山しつ」久

よしや又稀なる花のひと盛らかる」身をも人なとか 返し

しくまからさりしかは申遣しける

万代の行へも遠き年波のくる」もしらし和歌のうら人 一度はとへかし宿のさくら花らかる」ほとの 藤原長正(池田彌太郎)年の幕に送り來りはへり ろはなくとも

反し

八月十五夜雨ふりし十六日藤原正郷(池田彦三郎) 老の波も浴いくかへり年の暮行末遠きひとにひかれて

過しよの會にもれぬる事を申て送侍し

名に高き月もわきてや曇るらん身をしる雨の袖の片敷

明石の月見んとて人々さそひてまかりし十五夜に誰里も月にうらみの雨なから身をしる袖はとはましものを

明石かた浦も名高き波の上に秋は今背といつる月かな

言の葉の光りを計に待そ見ん明石の月の浪の歸るさ

返し

に一枝こひて來りしを正盛かたへ遣はすとて 彼浦に柿本のよりゐ給ひし松とて有其枝をうら人明石かた思おくりし心さへそふる光りに見つる月かな

明石かた歌のひしりの袖かけし松を君にと手折こし哉

朝霧に詠めし世をも濱松のくちせぬ陰に相見つるかなり石かた袖かけし世を松もさそ君にをられて思ひ出けん

資松やしる人にせし朝霧のへたてこし世を君に残して

見せはやな歌のひしりの袖かけし濱松か枝も残りける世を前内府のかたへ彼松につけて

袖かけし跡もかしこき濱松のとの葉にこそ昔をも見れ

返し

同藤原正能につかはす

辺し 明石かた袖かけし世を朽やらぬ濱松か枝に見しかかしこき

去年の今夜友なひて明石にて見し事を思ひ出て薩あかしかた濱松かえにすむ月も見しを昔の人としるらし

今特こそ向へはさらに明石かた浪のまくらに宿る月かけ

原正数につかはす

返し

き所に宿りて春日社の藤の花を見こし侍りしかは永正十三年の春都にのほりて近衞前關白殿御所近日も見て思ひ出らん明石かた波のまくらにかへるこへろを

御返し かけきやは夕明ほのA 忘れける老の末葉のはる

の藤浪

侍

思はずようつしうゑても藤浪にかゝると葉の花を見んとは

御返し二首の里の花の見るらん一枝に思ひもたえぬ老のあはれをかは申侍り

りしかは花の枝につけて中御門黄門の息伊満丸(十四才)はしめて向類し侍

区し

へ閉しかは父のもとへ申つかはし侍りし 伊滿丸のいもうと六才にして古今集暗誦の由つた言の葉の花の匂ひに行末の千とせの影をちきりおく哉

返したくひあらしまた七とせの中にして空に讀けん千うた廿卷

宮古より降りし人にものかたりし侍りて宮古より降りし人にものかたりし侍りて

藤原長正かたへ霜おきたる徐につけて 今宥來リて物語せんといひしに見えさりしかは ふけぬ間の夜半に心もつきはてぬたのめすてしを松の嵐に なかたの雲井の月をかたしきの袖のこほりに思ひかけきや

さるの葉の霜夜の月のさむしろに思ひやすらん宿る面かけ

むらんと思ひやりて長正宇治のほとりにありし比今夜の月いかになか

月見ても思ひ出やと思ひねの袖にかたしく字治の川なみ

区しの「移りもて行世中にしはしなれぬる程をしそ思ふかくしつ」移りもて行世中にしはしなれぬる程をしそ思ふ

返し

それと見る便りもあれな行方に心をそふる秋のよのつき秋の比便につけて赤松淵三郎かたへ

返し

返し・和泉堺にて少年の僧に逢て後つかはしける・和泉堺にて少年の僧に逢て後つかはしける

まつ人のあたりに匂へ梅の花鶯さそふたよりのみかはまつ人のあたりに匂へ梅の花鶯さそふたよりのみかはおなし處にて梅につけてつかはしける

りしに

こそはれん袖とけなしに驚も何ふかきねの梅のはる風

忘れすは人も見るやと賴む哉月と花とのはるの夜の夢

いかにして思ひ忘れん春の夜の花と月とのゆめの明ほ 春の夜物語せし人に

よひくにくたけそまさる宿りせし花の薫りの露の衣手

名残ある誰か行へとてよひくの花の袂にくたくしらつゆ 堺よりのほり侍る時住よしまておくり來りて歸路 より中 送り侍りし

別れての名残もよしや立かへり又も行あひのまつの契りは

老樂のいのちもしはしかられとや又も行逢の松のことの葉 多田良興房所に侍る伊香賀六郎につかはしける

よそにたにかけむ哀もいか」略岩らつ浪のくたけすもかな 返し

よそにのみ見て社やまめいか」共問れし程の身にしあらねは 松浦よりのほりて都にありし尚平(有馬神三郎)國 に降るよしか たりし かは

それと見よ思ふ心は松浦かた清き猪によするしらなみ

それと見ん便りもいさや松浦かた遠き限りの興つ白浪

わすれしなほのかにみしもしらさりし契有きや世々の行末 見すもあらさりしやらなる人に

しらさりし妙なる君かことの葉にかるるも世々の契ありとは

0

うしと見て古き柱にさし入つさすかにやれは情き一筆 永正十二年六月六日夜夢中につらね侍し

伊賀國府善養坊印朝彼國にて相ともなひし數十年

隔りぬるか書を送りて

吳服とりあやに戀しさ増れともとひ立空は雲井はるけし

返し

世の中をいとひても猶しほる哉老ての後の罷染のそて うきなから見えん世もかな吳服とり怪きまても老はつる身を 龍興寺橙林世のさわかしかりし比おくり給ひし

V 2 はかり深き心の老の後猶しほるらんすみそめの ある僧の室を樵庵と號して人々に讀歌を申はへり

いほりする深山 此寺の前の橋のほとりにして詠し給ひきと中傳 山城木津にむかふの観音寺といふは遍昭僧正 なりとなんすゑの露 かくれの妻木にもをりし桂 しつくの歌 をこゝろ成らん の住

夢

草

たるなと人のかたりしかは寺に入て石塔なと拜し

しほるなり古き言葉の末の露か」るはかりの袂ならねと 髪ひけをのそかすなりて向顔せしのち前内府より

年月に憂身はもとの我なからしらぬ翁に逢もめつらし

嬉しきは齢も名をも今は世にしらぬ祭となりにける哉 依儒尺道歸 おなし比宗長法師のかたへ文つかはし侍りしに不 自然生形なと申

見えはやなおのつからなる姿にていとゝ隱れぬ雪のみたれを

しらし君雪の亂れの言の葉におのつからなる姿見ゆとも 宗長年々上洛すへきよし書のみありしかは

題めこし年の渡りも間のあとをのみ見てなくさめよとや

程遠き渡りに住 生れし時みたりし人の四十にあまるよし中おくら 加 にて鹊の あと見るたひに袖 约 らし 0

思ひやれ二葉を見つる初草の老ぬるまての老の行 胤 前朝臣 へを 日

思ふらん二葉の春のかことにも鉛むらさきのねをそ添ぬる

官人の能書にか 宗叱渡唐し侍し彼國にて夢庵の二字を仲和とい ムせてもて來り侍り思ひかけぬ事

にて感情不淺

かしこしなもろこしまても筆にさへ聞て染ける夢の庵よ て思ひ忘さりける事と覺えて 又宗補同心に此庵號の唐筆を見せ侍りし人の國

水莖にかけし契やたくひなき見ぬ唐土 を以て遊ひて最夕老を忘るよて書院を弄花軒と號 へりかたはらに非あり練の長き事数尋得 おほひる くうつし來りて年をかさら横斜三四丈におよ て暑を避にたよりあり四時の花草木にたえすこれ しはる其中に紅梅軒に近きありあしやの里よりは る殿あり臥龍のことく猛虎に 草庵のさま四隣に長松花樹めくれり前 似たり海邊 一の夢 0 の庭に大な V = の石 ほりと

夢なから心はとめし老祭のなつさひきぬる山 民部丞) 正月三日雪降たりしに梅につけて藤原正棟 の岩木に

それなからをらまほしきに梅かえにやかて移ふ春のしら雪

かたより送り侍

りし

それなから千年のかさし手折とや雪もか」りしゃとの根 か枝

河州遊卷に行りしに郭公開たり しかは 夢 草

今よりは恨ししせし今朝鳴や待人からの山ほとへきす 1

忘れしな時鳥さへ心あるやとにかりねのあけほの 神無月に桃の實も葉もくしたる枝を賴豐につかは 上路

かさしてよみとせへた」る仙 人の君か為にとのこすひと枝

さても世に雲井はるけき位山猶らへもなき道に入けん みちとせの後も契りて個人に殘の春を幾世まち見ん 前内府落慶のよし間 御かへし しかは中 侍

ちりを出るけふそ過こし位山なに」もあらぬ道と知ぬる 酒を愛し侍りて

杯もかたふけあへす世の浮日見えぬ山路にいつか來にけん 昔たれつくり初けんとはかりにすさめし人の心をそくむ さけの上の型の道もかしこきもひとつ心のゑひの中 かな

濁醪誰造汝 酌散千憂といへるとをおもひよみ侍

7

哀とも誰か見さらん醉の中にしはく かへす老のたもとを

> 摘花浸酒春愁盡といへるとを 老去一盃足。誰憐屢舞長。 此句をおもひて。

身のられへ何にのこらん浮へつ」花に句はす春の酒 燒竹煎茶夜臥遲 つき

かいけたる垣根の竹を折たきて秋の霜夜をいねかてにする 首の上におきて詠し 十輪院前内府うせ給し時南無地藏大菩薩の字を十

仕 里のあまの鹽やき衣五十まてなれにし袖のうへになりぬる 郭公とと係やら たらちねと頼みとし身は木の本のひかたき袖に劣り られひあるたくひとや見ん秋の日も夕かけ草の庭のしらつゆ さかほとけゆつり置ける末の世をうけ引音きくもたふとし 散花に心くたきし春の空月の秋のみかたみとや見む むは玉のはかなき夢は秋の風驚かせとも又も見る世 七十も哀まれなる世の中を思ひしらする今そ悲しき いへはえにおもへは悲し様々のしるへうしなふ身は残りわて へとし二の道よくらる山のりも高ねに 寳池庵(智周)らせ給し時彌陀の名號をかしらに置 ん便りたにたえぬる秋の空もららめ いたらさらめ やはする

むつましと思ひしのみかみちく なれくて頼もしかりし後の世を聞すは別れなほいか の覺のは ムと頼み來 にせ し身を

朝露の夕もまたぬことくさに思ひいて」もぬる」袖かな 身のうへも世の浮ふしのなくさめも又誰にかとせん方そなき

伏ておもひ起て願ひしさとりをも花の臺に今開くらむ たくひなき哀をかけしこゝろをや木草につけて形見とも見ん 染置し心の色をかたみとて見るも露けき山ふきのは 自然齋此花を愛せし事を思ひて 72

命をもかけと」むやとなれしさへくやしきまてにらき別れ哉 なき影と思ひもいれしいける世に大覺位にも 正能か母身まかりし時よみて遺しける 6 たらさりきや

宗祐法師忌日六字名號を上におきて讀し中に

看病せしことをおもひしなり。

限りある命はいはし深かりし人のなさけを思ひ出にして E

武隈や別れしかけにまつことのいつとしもなき道や悲しき むろの海やまよふとみるもた」しはし浮世の浪にまよふ舟人 なそへなく思ふ別を何しかも見る世に我身めくり逢けん 深く思ひ常に原ひし法の道しるし有きといまや嬉しき 磨き置し心ややかてわしの山みそなはしける玉と見ゆらん 在明の空をうしとも今や思ふかきくらしつる心まよひ 藤原長正母身まかりしに名號の六字を詠せし和歌

信柱厚らせにし時柱久につかはす

第

四百八十八

春 夢 草

言の葉の道にい くとせそなれ松さても後れし老のなみ哉

〔歌闕〕

かは含弟宗息かたへ申送侍ける

返し

衰そへてとふことわりも大かたの涙ならすに袖やしをる とおほえき十四歳にて歌合に羈中闘を都いか 歌に心さしふかく廿歳より内に歌数もいと多くよ 玄左長正入道いとけなく有しよりあひなれ侍 思ひかけぬ事にあたりて世をはやくせしかは愁淚 給ひし大方万の道に心をすまして哀深き物なりき かせ侍し前内府一 た」りぬらん音にのみ聞こし物を白河の闘とよみ みて程にも過たる作と見え上古の風にも通ふにや 見え侍りて是より後は夢にても見えこしと中と覺 番に思判加ふへきよし望みしかは彼あやにくにま 讀置し歌を書つらねて愚老か瓦礫にあはせて五 て奇特なるやらに人々感し侍りし十八九の比にや たゆるまもなく思はぬ夜半もなかりきある夜夢に **覧有ておくに一首を加へなとし** き和 K

九百三十九

源賴豐世の鼠の時なくなりきたくひなき名を留め

ことわりの涙なからもせき侘ね人にことなる人のわかれに

起ふしになれし人ゆゑみちのくや名さへうらめしつほの石文 さたかなる面影かなし夢にたに又はとはしといひしひと言 らひてうせにしかはかなしひにたえす 壺の石文の人思か草庵に数年ありしにはかにわつ えて夢中にも悲しひ思ひし覺てのち讀侍りし

月廿四日。 源賴次予之多年知音也。 吹たひに風のあきたつ柳かな 洛中戰場而沒命矣。其頃彼發句に。 風雅之志至切。 于兹去六

時 吹たひに露そくたくる馴してさらぬわかれの袖のあき風 との比の風の秋たつ草も木も心染つるひとをこふらし もあれはかなくもろき柳かな篩らぬ人に折まくもうし 平賴亮(豐前守)世の亂の時致命のよし傳聞て悲歎 哀慟之餘。帶彼句綴三首和歌。以欲慰愁膓耳。

人からそをしくかなしき君をおきて又仕へしの道と見れ 宗揚(太田近江入道)らせにしかは共息承英僧都 つかはしける 共

うら風

K

解るとほ

りの

あ

やをな ねのとゑ

雏 國

쳥

程も

へすし

春の夜

はかなき夢と なけつへく つみかみ

世

のとわ

B 7

忘られて

高さとの

をのへ

の花

かっ

0

かきりなし

おくるとていくほとならし老樂も心の友を歎かさらめや 返し

いくとせを君か心に馴來てか今もかはらぬ言の葉のする 性繁正盛入道逝去之時壽量品を書寫してお くに書

しつ なみたの 消しこそ おほえに

めて

は 2

後れける身

恥かしき

よは

ひのほとは

麻の袂

0 ŋ

ひまもなく

すとしとゝろを 驚きあへ

津の國 九重の 染いたし 鳥のあ いねかてに もて遊ひ かムリつく さしとめて みたれ背の とにかくに 身をかくし なりにしを いひかはし へたムりて 付侍し ٤ 0 叉世の 雪の 有ときょしも 老のかたらひ 月のもとに 花の露をも わなの渡りの 世の浪風に 心をのへし 宮古のうちに 近きつてに つらねし歌 しかまに染る たよりとたの あした みたれ t 木の下 みし中 立なれて 山 30 うちつるき 年つもり 言の葉も もろ共に た」よひ 身なりしを はる秋を 百くさの あなかちに さとに なしきに 春の 花は干しほ ふかきなさけ 都のかとを 名をのみ聞 むかしに越 おくりむかへて 物よりことに ときく 旅のやとりに 思ひのほ 十とてみつに をりにつけ 秋のよひく 日暮し 通 カコ K 0 K

Ţ.

宗椿法師むなしく成ぬるよし聞侍し何事にも心あ

わしのやま 深かりし そとひなく 花もみち をしからぬ ic 雲かくれけん 何 これを思へは 心ののりの 有か中に た」でて廣 なる年 のうへ K B らは玉 あさか 越しか 春の夜の 山 みなもとも しきしまの みつに 0 ٤ 月 夢のわかれ 植し やまと言葉を すます心 カコ かはかりか 草 る人や 木 は は

上もなき御法もよそに替ぬなよふかくいりにし言の葉の道では思ひおもく頼みし君か為葉よりもかろくすてしいのちよ際く思ひおもく頼みし君か為葉よりもかろくすてしいのちよ際に思ひおもでなれにし人をしも長き別れに見る世成けり動きなき心にかへるかたちをは思ひもとめし浮雲のそらか江の浦島か子も歸る世はありてふものをいかに待みんかとりつる此世の夢を花鳥の哀れすさひに送りこし身のやとりつる此世の夢を花鳥の哀れすさひに送りこし身のやとりつる此世の夢を花鳥の哀れすさひに送りこし身のかた見をやせんうつし植し庭の朝貌花よりもはかなき人のかた見をやせんうつし植し庭の朝貌花よりとひもうきゆふへ哉といった。

ਭੇ ふは 4 かりきにはかにわつらふことにてなく成はへる其 なき事と覺侍り其外祈歌の草紙をさしおく事も て源氏物語をかける事二十部に及へり世にたくひ たりて失にしよし聞しかは思ひつ」け侍 は し人にてあまた年よりあひしかは悲し かりなし抑この人和歌の道に深 まて彼もの かたりを書けるか朝かほ くといろを入 み 0 0 後に 派 75

おもひつゝけ侍り おもひつゝけ侍り おもひつゝけ侍り とや折しも消し歸居をたびたりしか程なく失にしかは 新澤(入江駿河入道)数十年相しりてをり 〈 風雅館にそめ心にかけし契りとや折しも消し歸の朝額

王翁昌瑋(池田若独守九十歳)らせ侍し後讀經をき形見とも思ひやはせし程もへす秋のあふきの色そ悲しき

思はすもおくれし人に琴の緒をたつはかりなる鉄をそせし

おそくとき鳥のねよりも壁の老のねこめそ時もかはらぬ 月前述懷

たちかへる此身なりせはめてきつる月の都や世々の古郷 寄月述懷

なくさむる光りにそすむ世のうさをいかて知らん秋の夜の月

杣人のめにたにたてすいたつらに年を古木の身をは思はし

世のうさも思ひ絶にきなほさりの昔や人もくるしかりけん

老ぬれは宿もわか身もおのつから浮世のほかにすむ心かな おろかなる我とひとしき友もやはあらしのかりに思ひわふ共

世のうさも人のつらさも思はねは老の末こそのとかなりけれ 住吉の社にておなしこ」ろを 世にひろく句ひ出にけり限なく深き御法の花のはる風

さらて又何をおもはん住吉の松にそなれて年のお 述懷言證 いいねる

世の中を露もかけすは思ふ事心深しと見えんさへらし 述懷依

世は春の和歌の浦風しつみこし末葉あらはせ波のした草

自然齋遠忌に經文歌よみし時懷若

うちかへし老すはけふにとはかりもひまこそなけれ袖の 事藝法師身まかりしに父の進めし經文の歌懷舊に 自

X

**見あへぬ夢路はるけん方もなし心のやみもおなし飼れに** 自然齊十三回忌に宗碩するめ侍し寄衣懷舊

年ふれとほしてかへさん道もなし浮身におほ 宗切(寺井伯耆入道)追善に經文の歌宗長法師進め

つれなくもおくれきにける老の友いつれはあれとうき別かな 思往事

現竹の世々のふる事かきつめておもひくらせははらふ秋風<br/>

法華經序品

待えたる御法の花にわしの山世 序品旃檀香風悅可衆心 々の匂ひをそふる別仄

壽量品

誰かしる鷲の高根の秋の月光すみこし世々のうらみを 壽量品常住此 說法

摩にこひ色にしたは」わしの山たえぬ御法を心ならめや 自然齋七年忌に法華甘八品の歌宗長法師するめし に囑累品を

久かたの光をしまぬ秋の月よもの草木の露ものこらし

妙音品百千天樂不鼓自鳴

**妙**莊嚴王品 が主職主品

勘發品
表の原秋のけしきを匂ひにてのほれはすめる山のはの月

遅さくらくれぬと思ひし世を春の句ひに返す拳のまつ風

芸面山にて釋数水
思へ人世のとくさの色も香も光りにこもるなかそらの月

透州室の念佛寺にて
透州室の念佛寺にて

むろの海の釣する舟のうへまてもあまねく照す光リをやみん

岩戸出し光りもあれと五十鈴川ふりさけ見れは秋の夜の月 岩戸出し光りもあれと五十鈴川ふりさけ見れは秋の夜の月

程よしにておなし心を 程を守る契もかくや岩清水たねし有ける神かきの松

社頭視かしこしな松も神代の秋の風心にやとしそてにうけつる

君か代の千とせを誰かかけさらん春日の山のまつのとの葉

卷第

四

八十八

容夢草

傳へきや神代君か代へたてなき風の姿をすみよしの松

守りこし君か千とせの影ならし松のを山のよゝの神かき色かへぬ色もそふらし住のえや時世をまつのことの葉の道男山あふきてを見よ天か下風を治めしいはのまつか枝に見る。

神祇

思ふへし天地となり月と日のはかりかたきを神といふなり思ふへし天地となり月と日のはかりかたきを神といふなり得次會に参るへきよし申侍しを雨いたくふりていかっと覺し朝すこしの時間に詣て侍りしかは又やかっと覺し朝すこしの時間に詣て侍りしかは又やかっと覺し朝すこしの時間に詣て侍りしかは又やかっと見よ誰との葉も世にひろく光りを分ん玉つしま山あふき見よ誰との葉も世にひろく光りを分ん玉つしま山

寄月紀民
寄月紀民

寄道祝寄のつから月をや宿す民の戸もさし忘れぬる君か世の秋

寄軼祝ちはやふる神代人の世一すちに道やすくなる心とを見ん

中院黄門の息少年にして顧を出されし五首の中にのとかなる野飼の牛のけしき哉桃さきつよく春のはやしに

百敷やたくひなき名をあかた召にとるへき筆の跡も見えにき

春祝

配

八 疹 夢

ちり ひちの大和との葉つもりては墨に八雲の幾重をか見ん

[右唇夢草以圖書寮本校合]

九百四十四

## 連歌部十九

天地となりていく春たちぬらん を連歌

こほりうちとけあらふ岩なみ 飛よするきしのねしろの柳陰 おひぬる身にも年はこえけり

あらたまる年のかへる古部水とほる岩のかけひも春はきて水とほる岩のかけひも春はきて

とし野山かすみて又やさえぬらん

では、このこりでさむき山ふかみ 雪よりいつる鳥の一と系 山もとのかすみの朝けおくさえて 中かてきゆへきかすみとや見ん 山のは、去年の名こりの殖さえて あさタのかすみの衣なれ くて とをさかり行こそのさむけさ 木すゑを山の庭のうくひす 玉すたれあくる夜をこめ慣きて 茶もあはれになら山のかけ かすみのもりもいほやいて、見ん ゑしまか磯は舟出わすれし ゑしまか磯は舟出わすれし &しまか磯は舟出わすれし

第四百八十九 壁草上

卷

九百四十五

卷第

わか草をさそふらくひす今朝鳴て 春風のをとはの峯に雪消て きえぬ口もなき雪のみよし野 はるくとなきたる與つ朝かすみ らくひすも雪消はとやまたるらん あさ口いさよふはるのとを山 あとらつむ雪に岩ふむ春さえて はるさへとつるまとのしらゆき あけほかや霞にたてる宋の松 遠さかるあとはなきさの朝かすみ 先とへかしな春の山さと 雪ま見えそめ日かけさす比 さやかにも見るへき花に雲かすみ 身をいさめけり夢の春風 みちしるへせよ谷のらくひす らつみ火も猶きえやらぬ老のとこ その山しなの石はしる水 こすゑみならす花櫻風吹て 浪こそ見えねいつちよすらむ あたし心はさもあらはあれ 志賀の都に呑は のこれ ŋ

春草にかきほの柳うちは<br />
へて あるよりもなを青柳の おつるとも見ぬあをやきの露 青柳にかけふむ人のあと見えて らつらぬもなく梅にほふそて 梅か」にぬしさたまらすあくかれて むめかかや人のとかむるそでならん のきはのむめににほふ笛のね ゆきやらぬ春の山さと梅さきて らくひすの宿あくからす梅さきて らくひすにぬる夜の床をおきそめて をく露はらふ山かつのみち くれなるのやしほやにほひ梅 春なから雪やかつちりこほるらん むらくしけるみちのへの草 吹つたふ家の風こそのとかなれ なれきつる花もあたなる色見えて 身にしむ風にことやつてまし 立よるはかり宿いつるみち かたらひくらすらくひすのとゑ 花にさそはれくるもはかなし の花

草 上 春雨にぬれくに隔のたひころも

日をふるま」にかへるふるさと

今はいつくの春ものとらし

おほろ月夜にまよふ鴈かね

鴈かへるららはの月にさよふけて

つにしもしかし春そとあくかれて

月やなを嵐のこゑにかすむらん

春もなからの山風そふく

ららかすむ志賀の古郷月すみて

霞のうちも松風そふく

春の夜もひましろきとすの明ほのに 露けふる春野を遠み駒なへて かつそよくあしの若葉の春風に もえいつる野はた」ひとつみとりにて あをみ行木草に春の色わかて たかさとまてもふかき梅か香 さくらになして風そにほへる うらなみふけて鴈かへるこゑ 草木ははるも秋もわくらん なを雨かすむ野へそはるけ かすみのあしたうちそいてぬる

行かへるかりそしつのをたまき 春さむきこしのしら山かへるかり あつさ弓山のはことに花さきて 青柳のかつらきしるく花咲て またきよりおもは」とはん花吹て さかすやはあるへき花の日数へて ちることにならふ花なとまたるらん おきねつ」おもふ花さくよるの雨 あふ人に春はさりあへす山こえて 友やみなひとつになりてかへるかり いるそら見えぬ春の夜の月 さくらそわかぬ墨のしら雲 うきをわする」春はきにけり なをしつけさやはるの朝露 とふもかへるも花にいく」れ なかめこし春やむかしの空ならん おもひたえよと雪やつもれる 松のひまにはくれ竹の色 まつらん山のいほもはつかし いそくかきりもなとかつれなき

鳥のなく春のはやしに花咲て

九百四十七

四百

見れはさひしくけふりたつ也 よこ雲とともにあくる山のは よこ雲とともにあくる山のは おしむともおもはて月や入ぬらん おしむともおもはて月や入ぬらん おしむともおもなって をはかはらすかすみたつ空 花のみやふるき都も又さかん とを山さくらおりくるやたれ 小重の都の花になをあかて いつれの山をたつねてかとふ 花にたれ都をゝきてうかるらん 古郷さひしすみやうかれん 古郷さひしすみやうかれん

山さくらさけは都をあくかれて

しるしらぬあふ花のこのもと

なか空にのみなされもそする

山櫻また見ぬかたに遠くきぬ

花にけさ霞とともにたちそめて

山のかきりたつねてそ行

こそのしほりの花やまつらん

**蓉わひぬよふと鳥たに花になけ** 花もしれいくしら雲に尋ぬらん 岩ねふむ山ちわするム花吹て 花の心も山やすむらん 花にとふよしのゝ瀧のおくふか 今日見つる花に山路をふみまよひ まよひ行山ちもしらす花にきて 岩ねふむ花にはあはす日は暮て 石はしる瀧こそ花にららみなれ 花さけは宿 一もとに日もくれぬへく花をみて 宮こにかへる人をまつくれ 山のかすみにやすらひそ行 こまもなつむや山の下みち をとに聞つ」見ぬもこそあれ たよりもまれに遠き山 かさなる山は岩ねふむみち 春やいたらぬかたもなからむ たひに昨日の雨ははれけり 松風にあかつきふかく目はさめて へらむさともはるかなるくれ を心 0 あくか ことえ れ

5.

又や見ん老か世の花あするまて 花ゆへ世をもいとふやまさと さく花のかけにかくれぬ袖もなし あた人となりてもくらせ花 世をいとふ心も花につきそめて 世のうきも花見は忘はてつへし 春くれと花見にゆかん身はふりて うつろはん色としるくれを見て 見る人のなへてになさは花もうし 誰となき木のもとすみの花をみて うちまきれ行あらましの山 ありしにまさるかとの出 かりそめに見しをはしめのわか心 きて見る山に草のかりいほ しのふともやはかへるいにし 身をひたすらにうちやまかせん むくらの宿にたへんものかは かへりをくれぬさくらちるやま たのむゆへにそ身をもくるしむ のちにのこすいりあひのかね ひよらはやの心みたるな の春

まれなる人も花にこそまて らすくこき花をいつれとたれおらん かへるさにおりそへられぬ花もお とふまてとおりやらぬ花はちりつへし おるもやは心なからぬ花のもと おる人つらき花としらすや 人をらくひす花になくとゑ をそくとき花はいく木のいくさか 身は花のさかりまつまもおほつかな さくらかうへのてふのたは すくすへくたれかおもひし花さかり 心くらへにまけんとそする ふかくはさのみなにをうらみん あたなりとおもひなからもとしゃへん クの色はわかれさりけ こゑはのこれる野へのうくひす よそならぬ夢をも花にかこちきて よしの」さくら分いりて見よ めに見えぬ神とてあたになすやたれ ほのかなるたれにかあたの物おもひ あはすともよし先たつね見ん ふれ ŋ

第四百八十九 壁

卷

壁草上

九百四十九

第

四百

かりそめもたれかめかる」花の色 山さくら軒はにたかき寺ふりて 見れは宮とは花の雲弁ち 鳥そなく花のいつくにかへるらん わするなよあたのえなから花のもと 花にさよふけ松風を吹 花はたゝ夢のらきはし明そめて 木のもとをかへれは花にかねなりて みねのいほ花のたよりは何ならん わきてなをかたみや花もあたならん かねを木のまの花の下道 あさなくかすめる野へに打いてよ 霞たちつ」目こそくれぬれ たのむもはかないとけなき人 しはしなる」も次とならすや とふともあはし世をすつる山 ららみのあれはことのはもなし さと人はかへる野はらのかりまくら かすみもはてねたえのこる道 やかて暮ゆく野へのはるけさ かにかは れるゆふへなるらん

ほともへす散世に花のさきそめて 花さかりとはぬうらみは散を見よ 花よなと風も吹あへすならふらん さけは花風も吹あへすうち散て つけさりし花に風ふく宿とひて 庭に岩こす花のしらなみ 昨日の花は庭のしらゆき さくら花ふきかふ風に駒とめて やすらへははらふはかりに花散て うらみしよ櫻はかりやらつろはん ふか」らぬ心を花やちりてみん あやなおほくのうらみをそさふ たゝあさはかの夢の世の中 世中はなにかふりゆくとならぬ ひたすら雪になれるくろかみ をそくとひてはいそくかへるさ 櫻はさけとのとかにもなし はかなきはた」花のならひそ 鳥は音になく雪のかり人 軒ちかき木間かくれに瀧おちて まさらいはんことのはもなし

九 壁 草上

いかにせはちらしと花にあくかれて しはしこそ人もかけせし花散て さくら花雪もしはしの名残にて ちる花はらつむも苔にはや朽て うちたのみつる身こそあたなれ 門ふりはつるよもきふのおく はかなきとをおもふもそうき 庭にくちぬる木々のあはれさ もとのみとりを庭の松かけ

花そうきいつかはちらぬ春も見ん 身をなくさむも心なりけり おもひなるれは松風もなし

ちらぬ間に又もとくれは花もなし

古郷は花やのこりてうらみまし よしやすめ花なき里はちるも見し よそにほとへてたれもかへるさ

音するも花ちりはてつたれならん さひしきゆふへたつねんもいさ

花にたに嵐はきかし宮と人 見すてし夢の跡そはかなき なにかおもひとなりてかなしき

> けふそきてみ山さくらの花の陰 ひとりきてうつろふまての山さくら おもかけは青葉の花の都人 見そめしよりも人そ戀しき くやしやたゝにすきしいにしへ

雨にしも嵐ふきそふ花のもと うらみわひつ」人そまたる」 つらかりしをもさのみららみし

あらしの花にたれかへるらん 一もとも鼠やのこす花ならん うきにたへおもふそ思ふなさけなる

かせもさそへとさくらちるかけ 嵐の花にかすみはてめや 柴の庵花もうき世やいとふらん かくすそとおもふこそ世にはかなけれ

なかきわかれと後にこそしれ

のこらしと春もや花に暮ぬらん さくら花よしのゝおくや常ならん 春の日のひかりもかなし花の跡 おしむもよしや櫻散かけ みやこも夢とおもひいる山

第

うらみしよさてとそ哀ふかからめ ちらすはなにか花のはかなさ 顔のしたは露ものとけし 愛のしたは露ものとけし ゆきょもかけにしけき青柳

舟にけふ春の川つら行やらていくむら柳うちなひくかけ

春雨のなとりさひしき露見えて のきはにすかるさゝかにのいと

あめのとかなる軒の玉水 ひとりたゝなかめてきひし春の暮

ふるをともしのふの軒の春の雨 いるをともしのふの軒の春の雨

おたはらさひしはるの杉むら ではいれの苦に木たかき花盛

むかしの庭の櫻散かけさきにけりしつかつまなしそのゝ枕

名もしらぬ春のむら草花咲てとはゝや人に松の下道

いもにこひわひ行やかへらんそれとなくしけき春草花咲てあれ田のはらのあはれなるいろ

すみあらすかきねは野への春のくれすみあらすかきねは野への春のくれ

かたのムみのムかすむ目くらし 衣手に花の雪ちるかけ分て

哀にも春のにし目のさしすてよりのかねにかすむ柴の戸

春もうき古郷人や老ならん。花の山路にあくかるゝころ

ほりのたく火花にくもるな

鳥もきてやは花にさはらんがすみのあしたこまいはふこゑがすみのあしたこまいはふこゑ

春をへて鷹のすみかの岩たかみ

きしめくる春の住の江舟見えて をしめくる春の住の江舟見えて なにや藤のさきのこるらん をしめくる春の住の江舟見えて といてふそれもむつまし かはつなく池の水かけそこ見えて かはつなく池の水かけそこ見えて

岩まより河きしこゆる春の水香をくらせはきしの藤なみ

木すゑの藤のたそかれの色

ほと」きすそれならぬかと鳴すて」

山吹を添もくれぬと折そへていはぬなこりも文に見えけりさきてえたにもあまる山吹

名こりを花にいふもはかなし

**ありはてし花とおもへは又落てかへるみち春もまよへとちる花にいつくにゆかんみねは松風** 

いとくりたむる瀧のしら波 すムしくもたれをりいてん夏衣 衣にうすしあらしふく空 けふもなをのこる花散夏はきて 木ふかきおくに人かけそする 夏山のみとりに花やのこるらん うつろひし梢を跡の雨かけに

ひとりとや世を卯の花の咲ねらんかさす日に神もいく代かあふひ草かさす日に神もいく代かあふひ草あとよりふれる風のむら雨あとよりふれる風のむら雨

つれなきもたれにららみんほと」きす しのふ夕の雲風 の空

ほと」きすさそひすてつる雨もおし ほと」きすこの雨にたに音もせて むら雲のかへるさのそら

ほと」きすなきてくるやのそらたのめ 山のあなたに雨そはれ行 あはれをよそのこと」おもふな

夢ともさすかわかぬ面かけ

たかために坐もくもらんほと」きす

ほと」きすさたかならぬと聞 ゆく袖もありまつそてもあり し夜に

ほと」きすをのかときはの山こえて き」きかす雲ゐる山のほと」きす おもひやいつる今のをとつれ

それかとも又きかはこそほと」きす 夢となせとやをとつれもせぬ

おもふことうちもなかなんほと」きす なにの身にてかかくしのふらん

郭公おもふよひねの友もかな

のとけき雨をひとりきかめ

おもはぬをなれもうらみよほと」きす ほと」きすおもひたえさせとふもうし なかてや雨もやまほとくきす ことはりかほにうちかこつこゑ かたれはやかてまとろみそする らちまとろむもみしか夜の夢 なくさめてほとふるのみは何ならす

ほと」きすなきつる月を雲まにて 時鳥しのふの山にたへわひて 又うき雲の雨なさそひそ 見る人やたれのきのたちはな

ほと」きすねたるこゑするやまさとに いかなる夜半そなくほと」きす うきあつま路そ行空もなき ふくるまてねぬこゑきくも猶あやし

月もあり明の山ほとくきす なけは雲引やまほと」きす ほと」きすおいそのもりに聞すて」 **雲はたひなる山路ともなし** 後も又つれなきこそはたのみなれ 夏の夜はたゝ時のまのほとなれや

草 Ŀ

玉すたれ軒のしのふのさみたれに

ほとときすあやめ引目もはや過て かたしきの袂にかほるあやめ草 かへるにはしか けさはたか軒のたちはなかほるらん 一夜の宿もなこりとそあれ つかとまつは暮ことの空 しも いつとほと」きず

むかしおほゆる軒のたちはな しけれなをむかしを宿のしのふ草 ふきてあやめもわかぬいへく おもかけは昨日の花にほと」きす 花たちはなに人やかへらん

あしのする葉のさみたれの比 よしのゝ宮はふりて久しも 水ふかくなるやなからのはしはしら

五月雨のたきつ河らちかきくらし み」なる」み山のたきつ五月雨に たれ一とると待ほと」きす

五月雨はいつくのつてもほとをへて ひまもる露のかへはくちにき かきたえつねにわひやくらさん

> 夕かほなれりそのよくれ竹 ひとつつ」ならふ家ねの數見えて

月にのこれるよねの蚊遣火 かやり火のしめるほとまつクするみ ふけてこそ吹くる風もするしけれ たちこそかへれ門のやすらひ

うかひ火やよるの高瀬に更ぬらん 暮にけりたかへて門やた」くらん を舟さしこすほとそやすらふ

山水とをしくゐななくいほ 夏かりのあし火ほのかにもえそめて くる」と見れはあくるみしか夜

夏の夜はかりなにかはかなき 夢とたにいひあへぬまの衣へに

雲はみなへたてなくてや晴ぬらん

ほのうすき蟬のは山の夕日かけ あさ夕露をなてしこのかけ らすきころもの夏の夜の月 又むら雨の露のす」しさ はてはそてからくれなるになりつへし

九百五十五

夕たちにてる日やあつく成ぬらん

第 24 百 八

ほたるとふ宿は中川又やねん 清見かた岩なみしらむ夏の夜に 又らちしきりせみのなくこゑ 山かけに秋をおほゆる水せきて ひくらしにかけとめらる」ゆふす」み 袖するし岩の下行水のをと 夏の日のかたふくなかれ岩とえて このとろの夏をせきやる水すみて とふほたる行かたもなくさよふけて かすかなる火はほたるなりけり 凉しさは桐の若葉の木の本に 琴のひょきもさむき夕くれ くるやこすやの暮ことのそら 庭すさましくなりやはてまし 岩かねをあるかなきかのとなりにて 態にわかれて月のこるそら とりあへぬまで明やすきころ はなれとしまにあし火たくかけ むす苔ふかし山の井の水 ほれはたかき山こえのみち のかけ野は秋風そふく

行水の岩きる瀬々に御秋して 夏衣ほすともいつか河やしろ 夏ころも日も良らすく暮そめて 中への夕たちすきてあつき野に 夕たちになをなるかみのをとは山 手にならす扇ににほふうすけふり はちすはに露は玉こえ雨すきて かけにほふ荷のうき葉の夜はの月 よひくのうた」ねす」し窓のまへ 夕たちすらしけしきすゝしき 竹はちひろに夏ふかきかけ おりはへ水にみそきするころ なをあめつちをてらす日のかけ きけは都そとをさかり行 立とまるへき風そす」しき てる日にもなを池のするしさ 水にめくれる池のすゝしさ はやくも今そ袖のす」しさ をとも秋なる水のしら波 なかむれは水らみわたる舟の上

秋連歌

涙もや下葉色つくはきの露 さひしさはもとあらの萩の古郷に かりほのほかもにほふむら萩 荻のをといまはたさむくまとろまで 物ことに露をく色は哀に ひとりなかむる秋のあはれ 秋をはしめと身になおもひそ 秋の風ふもとのいな葉吹こして 3

なみたもやおちてなへての露ならん

このねぬる朝け露けみ秋はきて

色にはわかぬ庭のなつ草

心にうかひ秋はきにけり

けふそふく

生田

の杜の秋

0 かたは

M

れかはとはんをのる

小萩はらうつろふ下葉もろき野に ちらはこはきのした葉のみかは たちそいてぬる秋風のころ 袖にらちゝる夕霜のいろ

さをしかのこもるしけ山くるゝ野 かよへるみちの草のたえく

鹿のねはまかきもわかぬをの さを庭のかたをりかくる跡見えて あり 秋は八重たつ霧のさひしさ 明の月に山風のこゑ ムさと

岩ふみならすさをしかのこゑ を鹿なくおのへもきけは枕にて のかけすみかの秋は人もこて

百 八 + 九 壁

卷

第 四

草 Ŀ

九百五十七

むしの音いつれみたれあふこゑ むしのねにさそはれくれは草の庵 古郷はむしのねにさへ袖ぬれ むしのねもよはる嵐をかたしきて ともし火はまた」くかへのきりく 虫のねもわかぬ朝露夜をこめて 雲行木すゑ日くらしそな かきね鵙なくそのゝ露けさ なれも庭とやわひてなくらん はかなや名のみ松むしのこゑ 霧ふかきのゝ花のいろく 風そよく野ちのかやはら春初て おもひ入深山をろしよ物かなし 草かきにあさかほの間の秋をへて こはきかもとに風かよふくれ ひとりやねなん月ほそき空 ねふりさめたる露のたまくら 雨すくる野へのをちこち色付て うき秋をなくさめかぬる折からに たなるを心ひとつになくさみて した道の露のさひしさ

朝かほの花もさかりはある世にて 門かほにまかきかこはせ住やたれ 草の応のあさか 月をまくらの花の秋の野 あさかほはかれし夕かけ露見えて あさかほはさくといふへき花ならて ひとりある行の夕かけ露をきて よそにのみ見つ」過らき女郎花 らす霧の花の色(わかぬ野に 萩すゝきさかぬも見えぬひとさかり たれ 竹のかす。くまとそさひしき 露としるとも身をおしめた」 露よりあたの心なりけ けにまもれるやこのおとこ山 心をつくすあけほ 露けさもうちぬる人はおもはめや おとろきあへぬ露のことはり おもひつくさぬ古郷のあき かなる花そのこる秋草 に見よとかさけるなてしと ほ の露 の」あき 17

露よりや身のうきことはしけからん

山さとも木のまのほかに月ふけて 影みてるひろさは池の月の秋 見れははるかに月ひとりすむ 山のはにまたると月をうらむなよ 山のはゝいつへき月にくれそめて すみのほる空より月は木まにて 今夜のみ名は秋の月いかに見ん 月にくまなき夜はの大そら 空とをみ山のはのほる月すみて ららなみさひし高砂 又きてせはきやとりとそなる 名ものこる志賀の古郷暮きて ゆへありかほにいつるよの中 よなく風におちはするころ ふりぬるらへも又のそみあり めくる日はいかなるかたをてらすらん 人につれなき人もやはなき しはしまたする心しらはや 心つくしのあちきなの世 り日の雲そ行ゑしられぬ ap

卷第四百八十九 壁草上

うき秋の雲まを月のかき分て

上

卷

ふけゆ 我かけにともなひつ」も月を見て 月はしろたへ获はらはかせ 月よいかなることろなるらむ 月やね覺のといろなるらむ またれつる方さへ月にわすられ ふくるまてさひしからすは月も見し ふくるまて身のらき月をいみ なかむれは月のうちさへ物さひし こよひたれ月の手枕夢も見ん 見はてぬと」ろ後もうらむな 良さむきほとはしられてふくる夜に 行人もなき道のへのあき するふく風そ野へにはけしき 山 さひしきにこそ心すみけれ えそしらぬ又やこさらん新まくら める心そわか友となる ちなかむるもあちきなの世 まや宮こも秋ふくるそら きぬとしれ ふかく入のみはいとふ世ならめや かは月やくもるとかへる夜に はいたらぬ方もなし カ ね ديه

山のはつらし月の行する ゆく心月のいつくにわかるらん ふし 露ことにかけする月をひとり見て 軒はもる月こそ昔しのふ草 月をたにめてしいまはの老やたれ さととをきのゝ月ふくるころ こと」へとこたへぬ月をひとり見て あさちふの秋のしら露月すみて しのふの軒は月もやはもる 祀 Æ 古郷をいてゝや見まし露のくれ 露ふく風にある」ふるさと 秋 霧たちまよふ山はあけほの 松虫のねになくとえやはとはれまし 秋 れにそか の音に月も山のはわするらん み きのおもひそなくはかりなる の夜ふくるあさちふの宿 をみかけるいにしへのあと に分いりまよふ秋の はたゝかきりもしらす長夜に 0 月 0 あり はるとゝろしらるゝ 明のころ 卷 第 夜わたるや月も宇治河秋のくれ

たちのほる月のさやけさ

岩こす水のすさましきかけ

月や身のうきをもしらせそめつらん

松むしのこゑかれ月もほそき夜に

ねさめせしま」長夜のそら

秋もするのゝ露のさひしさ

八 -九 壁 草

上

月のいる山まてはいつたつぬらん ふけてたれ月の名残をこたふらん 盛霜に月のなこリやつらからん むは玉の夜からすしるく月すみて とりあつめてや月にかなしき 月は物いひかはす空かは あまひこかとそ月にこたふる むしのねいつれやとの秋風 たれ露はらふ跡としも見す 获ふく風よ軒なあらしそ とひ行鷺の色はきえけり それとなく物おもひぬる秋の空 ふたりともあらはせめてのかり枕 舟よはふむかひに人は見えやらて

さむくなる峰のしら雲鴈なきて はつ鴈や嵐にふけてきとえこん 哀にもつらにをくれぬかり鳴て かへる野の袖に澤たつ鴫なきて 月にかく鳴のはねをと数ふけて あふ坂やむかふる駒のをとはして さ夜とろもよさむの月に隠なきて なきてくる鴈もはかなし秋の空 をくりかねたる古郷の秋 わかやとのうへに鴈なきて行 このねぬる朝けよふかしかりのとゑ さそはれ月にふくる夜の空 あさち風ふく秋は來にけり すみのほる月もいそけ山のは 雲行ていくほともなく隨はきぬ 秋風はたかなかめより過ぬらん いくさと人の夢にすくらん 秋風さむき夕くれのそら たもと吹まく嶺の秋風 つらき世をしもなにしたふらん 露にむもる」を田 のかり施

九百六十一

落瀧つ岩にはふつた色付て 花すゝきむら雨なひく跡見えて 花す」きまねくに人の行やらて まくすはふ岩かき水に露落て 軒ちかき松にはふ葛いろ付て つたはふ岩にたかきしら波 あさ霧さむ まくらせはちらまくおしき花するき 露しろきまかきの花のむら薄 むらす」き風もゆふへはほのかにて 舟さして見れはすさましはなれ島 野は露けしやいつくにかねん 露をきそむる野へのさひしさ こするは秋の風さはくやと なにをかたより谷の戸の秋 なひくも霧のいくゑならすや 土か く山すみの秋のは は雲まにほのかなるくれ おもへとの納の秋 かる霜のわさ田 しかりわたるそら つ風 のいかならん

たおりもつ花の秋草打かほり

野分せし雲はむらくあはれにて 色もなきららはの秋といか」見ん 里はあれて桐のはもろきくれとに あめいあらすれやのひまく 野分にある」間の月かけ ひとめ見し秋の花みな野分して 朝ことの露のさかりに野分して 吹いつるをとは野分の草のはら かせに野分の面かけそたつ 色草をのゝ宮人のかたみにて 野の宮人の露わくる比 月見てや宿のつらさも忘まし たからへも秋のらさこそしられけれ おもかけさへもおとろへてにす 花むらくの秋草のはら 岩木なりともなひかさらめや むらくに雲行空のかりのこゑ むかしかたりの秋はいくたひ 木のもとさひ 月は見る~~すみのほる山 ムおりふしにかはる夕くれ し雨のふるころ

草上

おいぬるはかり秋はたれらきいにしへをしのふにいとゝ露けくて秋はたゝ古鄕人のゆふへにて

住ふるすさとはゆふへの秋の風

と」やかしこにうつらなくこゑ

尋ぬとて夕のほかの秋や見ん

いなんかたなくたのむ古郷

あきのまくらをたれさたむらん けかたき世にしも秋あをまたへて

いつかわか身のことをしらましたかね覺露をかこたぬ夜はならんたかね覺露をかこたぬ夜はならん露は身もうきぬはかりのうた」ねに

かきりなくね覺のみして長夜にくりかへしてやかたりあかさんくりかへしてやかたりあかさんあかつきさむみ露なしくれそあいたやのね覺秋ふけてあくるまのかきりもしらす月すみてあくるまのかきりなくれ覺のみして長夜に

野より霜にしろき月かけ うちむかはれす山風のくれ うちむかはれす山風のくれ がありにきぬたを巻すて A

大きつきぬたにいたくさ夜ふけて 本きつ月のふもとやふけねらん 
日を見る夜や人にかはれる 
うちたゆむきぬたのらへの松の風 
いてょいく夜の秋のかりふし 
いてものもはつほのわき田霜さむみ 
ね畳する夜のさをしかのこる

九百六十三

わさ田もるあし火の煙たてそへて 朝霧にはつ霜ましり秋更て 山さとは霜をく月に秋ふけて 朝ことのはつ霜さむく秋ふけて あはれにも天のかつらの秋ふけて かけひの水も秋は深けり 尼上の松もあきはふけるり いなつまのかけたにたゆる秋ふけて 色こきわさ田かる人もまて くれぬれは妻とふ庭のあくかれて くふかきみねにいさよふ秋の雲 ところくのを田をもるとゑ むすへはにほふ菊の下水 契しま」の月のよなく 吳竹の夜わたる月にめは覺て 月をそき夜のひとりねはらし をかへの松の月のうきくよ むらくにをく野へそ露けき 露のたよりもなき 懸やうき つくの月にらかれいつへ のみ吹やときけは鴈なきて

はやしになにそかた枝色とき 野への色あさ夕かけに枯そめて 霜をうつらの野への夕くれ 眞木の葉さひし色かはる山 それかあらぬかはつかりのこゑ ちりにけり霧に風ふくはしもみち あらかりし風のあしたの秋の庭 むしのとゑよるかたなけに草かれて さをしかのつまとふ野山草かれて 浪や夕日のそむるもみちは にしきを入れるあきの山のは ふらぬまもくもりはてぬる秋の雨 霜にあとなき鵙の草くき なくきりくすちかきあしかき たのむかけそと松もあはれめ 虫のねもかれくになる床さひて 暮ことの雲のはたてになかめして あさ霧のとするや何のうす紅 むら竹の露や葉分にこもるらん のこるも見るももろきもみちは 舟とむる入江の山に鹿鳴て

草上

紅葉するいらかはたれかすみぬらん 里つ」くをとはの梢色付て ひくらしのこゑもさひしき山さとに おくはしけみの秋の山もと 月まつかたの山そしくる

色見えぬ松にしくるム秋深て むら雲に時雨ぬまなく秋ふけて まくす吹まく野への夕風 めてしいまはのよなくへの月

木葉色付霧わたるそら

しくるへき山路の夕鹿なきて 露は木の葉の行末の色 月をまつ時雨とや見ん秋の空

夕日にか」るをちかたの雲

鹿の音にいつく時雨ぬ嶺ならん すみてを見はや秋の古寺 みなもみちする夕くれの山

をしかなくおのへの松の下紅葉

かさすえたのみのこるもみちは 山とをくかへるかりはのちりくに 庭もまきたつくれのさひしさ

> わすれめや菊の花さく秋 闘のはら屋の今朝の旅人 またれにけりな去年のはつ鴈 つちりて紅葉も風のつてならん の空

たまくらにをかぬ露なく秋くれて おもひやれあらしの風の秋のくれ あけすくるまて月をなかめん ねさめもいく夜かるるあかつき

くれの秋草木の露をたもとにて くちのこりつ」見ゆる川はし

龍田山みねの木葉に秋くれて 水上のあらしの紅葉秋くれて かせにまかする與つしら波

神はみなたひたつ山に冬のきて 冬連歌 宮井しつかに夜こそ更ぬれ

神無月ふるき都はなをさひ うつろひはてぬ草木のみかは さそないつくも風さゆるをと

神無月時雨はかりのをとは

九百六十五

第

ÉĪ

壁 草

古郷のさほのかはらのうちしくれ あさ日しくるゝ山のさむけさ はれままつをかへの里の夕時雨 かきくもり都も冬のみ空にて あふ人いかにうつの山こえ 雪けになれは千とりなくこゑ かつきゆるみれのあは雪打ちりて

あらしそ松にひとりしくる」 ぬれて時雨に行人やたれ 月のかけおのへの雲をこえ初て

たちもよれふもとにむすふ草の庵

しくるへき月ともしらす遠くきて さ夜ふけはてぬかす宿もたれ ふることかたる秋のたまくら

なみたの時雨行かたもかな ひとりのみなかきをあかすさ夜時雨 秋風はみねの松にやかへるらん

霜をかぬ岩のはさまも草かれて 行水さむくあらしふく山 風にふけゆく冬の夜の月

柴の戸は木葉そた」く山の陰

みきはあはれにくつるもみちは 紅葉ちる嵐に人もたちまよひ 山にまたあるかととへは人もなし 河風は波のゆくゑに聞すてゝ 山の木かけの雨きほふころ

木の葉も舟も河風のをと としくれぬとや雪ふれる山

木からしにのとりてさひし墨の松 をとあらましき水のしらなみ しくるやと見れは岩こす木葉にて

冬草あをしみ山ちのあと 石はしる水のあは雪はるゝ日に

みきりの池はのこる冬草 色なる露や秋のおもかけ めのまへに朽しは風の下紅葉

霜をかぬ岩のはさまも草かれて 花すゝきたか袖となく野はかれて ゆく水さむくあらし吹山

霜かれのかた糸す」き風吹て 月はあり明のなをほそきそら はしは霜ふり水そこほれる

九百六十六

草上

卷第

を篠はら爪木の道に冬かれて おかるゝ鴈のをちとちのこゑ 別にふけ霜にさ山の嵐哉 野はさゝかしけ水こほる比 なかれたえぬや水もさひしき 山川やらへはこほりてをとすらん とりけなく水にはれけり今朝の雪 し水そのこるみちのかたはら

いく切ほのそ霜さむき空にそくのとれるうつみ火のもといるのとほらぬ音は猶さえて

雲にくれ行駒のあしをと

水しろき門田や霜もこほるらんきけはそともの鴫のたつとゑ

下そよくあしの霜夜にめは覺て

ゆく水さゆる川つらのさと

かた山舟のよるのあら磯 かた山舟のよるのあら磯 さゝふく軒は木からしそふく まくらまて霜をく月や更ぬらん 木葉かたしきひとりぬる山 岩かねのとこは月ふけ霜さえて 里遠みのこるともし火夏やらて 電や野寺のかねさそふらん たえく、見ゆる雲のかけはし たえく、見ゆる雲のかけはし

さはきたつ鴨のむら鳥かすく、になくをしらは毛も水もこほる夜に水すさましき山かけの道水すさましき山かけの道

あそふもをしのあとのうき草

おちにあらき波のよる ( 山風たえぬ海つらのくれ 山風たえぬ海つらのくれ 水らすとほりみちもつゝかす 水らすとほりみちもつゝかす

第四

ぬれてなく夕なみ千鳥行かへり うらつたふ一むら千鳥こゑすなり 竹の葉さひしあられふるやと あさ日はかりの冬の山さと 冬にうき身をかきりとや俗ぬらん 立
わやはなれた
にやすき
村干鳥 おち葉そ名残けふのあは雪 朝またき雪まつ庭の雨さえて 雨ませの雪やかつふりつもるらん かつらきや時雨もあへす雪や見ん あられちり時雨せぬ日をいつかみん 雲ゐる嶋や雨のとるらん 柴たくすみかある」山 生田の河のとりのさむけさ やすらふいそはあらきなみ風 雲に嵐のをとそさえぬ とへかしな風もさえ行夕まくれ のとかなる空もほとなくさえかへり 跡もなき嵐の露の夕まくれ 山は雲にもましらさらめや 軒もる風のよはり行比 7>

とはれに事にならか山さとかすかなる田中の雪の夕けかり 山さとの雪のあかつきかねなりて 雪つもる松にお 雪おれの松にとほその道たえて 誰となく雪のあしたやまたるらん ふみなる」山ちに今朝は雪ふりて なよ竹の山おるはかりなるの雪 ふりあれし雪にしはしのひま見えて ふるさとのみは雪もつもらし つもれる雪のおもしろの夜や 先 のとる炭うる春のあさ市 夕しつけしまつ人やとん 誰も春いそくやとしのくれならん 木すゑをまつの柴のかりいほ と家かすく たとるはかりにおもかはりせり あけすくるかくらの庭火消かてに とれはみねにきよきともし火 り日の空はかせものこらす 3. しやうちもかこたん かきともる見ゆ のへのかねさえて

わかさりし雪のあさけのはるゝ野に はらふへき雪を要木のかへるさに 庭の雪とはれは今朝のあともおし けさふる雪にたれをまたまし 心のみゆきつもる宿はたれしらん やすむまの爪木につもる雪を見て つま木とるあとさへたゆる今朝の雪 らとくなる心に雪やつもるらん あと見えは心も友の宿の雪 ふりたえは又雪あらしさゆる夜に 松なりけりなけふるひとむら 夕になりぬいそくやまかけ たれかはとはん山のしたみち 道はあれともくる人はなし うらみはてめやつれもなき人 我おもふほとしも人はおもはめや 河かせにとけて水行あさ氷 なさけこそた」をも荷ともなれ わかをこたりそ道にはかなき 行かたなくは我をたにとへ

雪に人鶴の毛衣おりはへて ふなはたしろき雪のつり人 のこりてかせや月にさゆらん いつはあれと冬こそ月はくまなけれ 月さむき橋に一村猿なきて さえあかす嵐を床のあしろ守 舟よする雪の磯さきちかゝらし はるかにしろき雪の宇治は 雪はたゝうへにうきたるあはち山 らつみ火にむかへは夜は」しつまりて 岩かねつたふ水のとゑく し鷹のすゑのはら野に日はくれて 春秋めてし山の木からし 身をうち山 山とすからす雲になくこゑ みきはにたてる袖のさむけさ 千鳥なきたつなみのさむけさ 夕河や柴つみを舟さしくたし 入日かけかたふきか」るおきつなみ 千鳥しはなく浪の月かけ のかけとおもは

は

卷 第 四 百 八 + 九 壁 草

Ŀ

雪むらくの八はしのあと

みきりの松そ雪に木たかき

第

月やわかめさむるたひにさえぬらん 枕せし夜やらつみ火もふけぬらん ほたるはかりのたく火さひしも 月はにしなるまとのさむけさ 月見れは村雲かけてさゆる夜に ひまもなくこほる池水月さえて ともし火の残すくなくとしこえて 冬こもるかた枝あはれに梅さきて 小野山の炭につま木を折そへて うつみ火に朝戸とちそふ雪を見て まとろみしらつみ火もきえ鐘なりて 雪の 又あとさえて雪のふるとろ 又ひとしきりあられふるなり たちやすらへは猶さゆるそて 舟わたす水のむかひに里見えて 夜ふけてをしの霜はらふこゑ ほとけの名に あはれとけつる心ともなし れ竹のふりそふ雪にかたふきて せふきさゆるあしかきのうち あしたの人のをとつれ もなみたおちけり

わかれちにしのひしなみたさきたちて おもひたつこそみちはかたけれ 行としのみねの自雲つもりきて としくれ春はいつくよりとん 名こりこそあふさか山の隅ならめ あしひきの山ちをとをみ今日こえて あとはわか山のはさへやわかさらん 行人にといみしもやたへさらん わかるとも心をそへよたひのそら しるしらすあふ坂山をさかひにて 旅連歌 こなたかなたのあとの 道をおもは」なくさみやせん ゆかは山遠きもはては有ねへし 山やかすみのとなりなるらん わかすみか雪もはらはす道もなし いまはのきは」おもひみたれ おさふる袖もなみたおちけり れとはかりに れにかきらしおしむわかれち れお しみ し人の のこるふるさと 面 かけ おもかけ K

いかにしてむつましき名そ都鳥

うらやまし雲に行かふ春の息

都いて」こしちはいつくやすからん

とをきはまへにある」しらなみ

かたるもきかすわかすみしかた

たちわかれいかにくやしき旅ならん

都やおもひこしち行人

嵐ふくもみちをぬさに旅立て 手向せし道をや神もをくるらん 都さへらきに出たつたひの空 とをくはましてつてもやはきく もろともにうきにいかてと立わかれ たひにとるぬさのしるしも今日見えて いかてけふ冬たつ日しも旅の空 ゆくるしらる」おきつ舟みち 身をすてはてし人のかしこさ けふとしなれは秋はいぬめり たひたつはやかてかへるもうき物を 身にさむかれのなをかせの音 舟にさはらぬをちのしらなみ あひのる舟のはやきなみかせ

遠く行旅をや花にわするらん 雲はこすゑをうつむ山こえ かすむなよ山こそこえしかたみなれ ほとゝきす山こえわひぬまてしはし 古郷のとひしきに行鴈を見て かすみのいつこみやこなるらん あし火たく宿するろに月もらし あさ霧の野をわけ衣露もひす まくらかるやとのかるかやふくる夜に しく袖もらす花す」き露おちて しほのくあくる手枕の月 きえて又をくゆふかほの露 ほと」きす一こゑすくる雨おちて 花ちるあとのみねのしら雲 あへすもたひの袖の露けさ しのふもちすり花の香そする 木の下みちに日こそくれぬれ たひのなみたをたれにうれへん かすならはやも何のかひなし

夢にわれ見ゆらん物を草まくら

おもひをそふる秋のよなく

第 24 ď

夢も身をさそひてさめね旅枕 夢はあらしのさ夜の中 称にもかへす夢ちかさ夜衣 かり衣かへす夢ちにらつやたれ かりの世と旅ねにさへやしらさらん たひねのみやははかなかるへき たひねにも身はならふこそ哀なれ いふきおろしをかたしきの夢 とせめて都こひしき草まくら るしらすむすひもかはす草枕 夢よ衣をかへしてや見ん 草のまくらの秋はふけ 我もかりねの野へそかなしき よの中はみなかりそめとしる物を 草のまくらに夢そ見えくる はかなしや野上の里のかり枕 旅衣なれにし月は有明 みやこの月にわれやかへらん ひとりに袖や遠く見ゆらん あくるもくらしをちの山もと 草のいほりはまくらもそうき y

П かねたにをくれおきまよふ郷 ゆふへの雲にふみまよふ山 はかなの方やみれのしら雲 ともし火にあくる夜いそくたひの宿 山ふみまよひいつるたひ人 谷みねにふみまよひくれは跡ありて しるへせし人もみ山にふみまよひ み山ちも一すちならはまよはめや 岩木をしのくみ山ちのすゑ からすなく夜や族人もさはくらん らくつらきしるへにつるゝ旅の郷 駒かふ人のそては見えけ ほと遠く絕にし友のめくりきて 身をつくさすはみちもやはえん 郷の空にてなきそかなしき かなたこなたに行旅そうき 山かけはあけほのとをくふかき夜に も納もらすき夕のみれの雲 衣かさねよさむくなり行 かへるへきかたこそなけれ旅の郷 れ竹や里のしるへになひくらん

霧のほる槇の葉しのき山こえて

なこりさむけきむら雨の露

こえくるやみねの鼠にむせふらん

とへとも人のこたへせぬやま

天の原はるかに月の行を見て はるかなる月の行ゑに峯の雲 おきていなの」月の露けさ 雪ふむこまのあしひきのやま こひしさを都の文にまきこめて たひにしもうきを都にきかすなよ いもに懸いそのしほひをあかすみて あさま山さとはみつ」もとひわひて わかさきに駒の音する山こえて 一筆に旅のられへをかきやらて なみたはさらにつくまれるせす たひをなくさむ末のしら雲 すみにそむるも袖はぬれけり わひつ」をくる身をやなけかん あするやかいる山ちこえなん あすはつれてそこえん山みち こえしとの法もくるしき道にして あとふまん道のするもおほえす あさまたき袖にみなとの風こえて いそくとすれと道はいそかす

Ŀ

遠くきてみなあしひきの山ふかみ

上

卷

なみの音あら海中に舟出して 舟にみなあすのわたりをおもひ俗 所せくのせてはるかにわたし舟 月しろく河音ふくるたひまくら 古郷はいく重ともなき山こえて たひ衣日も夕嵐ゆふしくれ をくれてひとり雨にあふ山 あしひきの山こえくらしまくらして くる」まてつなてうちはへ風沙舟 こきいてし舟はつなても見えやらて なにときかましよるの雨風 馬人いつる夜はあけにけ かすみらちはへすくるたひ人 た」なか空にむかふ戀しさ 誰もたゝ身をおもふにやすてつらん 見れはすさましよもの山く まくらにきくもとをき川晋 日なかきころはとをくきにけり たか袖ならしすくるかけはし 夢に見るさへ遠きふるさと ŋ

おもふも遠しふる郷の空

ゆもたゆくとりあへぬ舟の浪風に もしほ草かきたえねぬ夜思やれ 見し夢もおもはぬ床のさ夜千鳥 ねぬ夜くるしむ雨の舟人 衣手にしきつの浪の又こえて 舟わたる田装の島の雨すきて ほとふれはた」もろこしの舟ちにて もろこしにならはいつとかまつらか かせあらきゆらのみさきを舟に見て あともなきひょきのなたのおきつ舟 つり舟も見えぬ波ちにこき出 契をきてもをとつればなし 磯うつなみに松風のこゑ はなれそにかたふく答屋なみかけて 夢たになみの枕をそする みそきに心なをそす」しき 心つくしになをそはるけき たむけをしてそ旅はゆかまし しつみかなしみおもひをそする いか」しつめん胸としもなし そのまくらは夢もむすはす

都にや旅のやつれをしのふらん 遠さかる古郷人につてもかな 袖はいつひなのわかれのうらつたひ ゆくとくとなみたはひとつ旅の空 なみかせにたにたひそなれ行 としへたるひなのたひ人待わひて なからへてかへらん旅をまち見はや いまこんと風のつてなるたひの空 たれとなく旅ねわかる」このあした 夕くれふかく人かへるなり うらみてせめてたえんとそする なきになしてや心やすめん 身はたのますよ行末のそら つくにてはつとりきかん旅の空 たよりの文にむねさはくなり あたにき」しをたのむ身そうき 古郷人よあへるられしさ ことはは なかくしくもつなてひく舟 たかかへるさそこまいはふこゑ かりにちかき山さと

四百八十九 壁草

£

卷第

九百七十五

都人うちむれけふの闘むか

卷 第 PU

## 以上四季及旅部以連歌合集新補

壁草第六

戀連歌上

ほの見しを心のかよふはしめにて 誰にならへる戀路ともなし

とすれは心らかる」もらし

ほのみしや誰そとおもひ捨やらて あかつきならすね覺をそする

みし人やならはぬ夜牛の我おもひ ちきるかほにはなに憑むらん

見すもあらぬ行衞はかりにあくかれて さてもたれかは戀はをしへし

はかなしやいとけなきとちの物思ひ

聞はかりにてみることそなき

心のみらこくもあやし窓のうち

やしや夕何おもふらむ

我や此つらき戀する人とゝろ わかなかむとや雲もうかる」 戀侘る身をはしつめん方もなし

> いつしらせいつ待初て恨まし 泪こそなかむるかたの夕時雨 くるしきのみを心ならひか おもふ心の夕くれのそら 君かあたりをやすきすきめや

更るまてねぬよを人にしるもらし 戀よいかに待暮またぬ暮もうし なかめありとも長ゐをなせそ

いかにせん心のしるを我おも 憂名はたつといひやのかれん

せきかへす袖もいつまて我なみた ぬれにけりいはぬをしるや納ならむ いひ出ぬおもひ朽やはてなん 心のうちにあらましのすゑ

くるしとや夕も戀をおもふらむ こめわひぬ戀のけふりよいか計 忍山しのひても猶とはまほし たちや出まし物おもふ暮 といろの奥をみすは絶めや くたひ人を待てうらむる

忍ふおもひは露もかはらし

面影も雲まの月のあり明に かねてしもおもひかけきやもろかつら それとなく空にたく香のほのかにて 心こそ物おもはする人ならめ いひよるも数ならぬかたは甲斐なくて おもはぬを打わらふこそつれなけれ 戀はみなくるしと聞もなくさみて うき物といひく、無よいかなれや くるしさを戀する人にかたらはや とぬ人をしも幾夜待らん ほのかなりつる夢のあはれさ 落葉ののちにちかきかよひ路 すたれのうちのきぬの面かけ 誰ゆへなる」袖とかはしる おもひわくにそ他はあはれなる しれる道にそたれもまよへる なくさめかほそ中くにうき おもひはたかきいやしきもなし

强面に身をなつくしそまてしは 露のしけさはわかおもひくさ 物思ふもとあらの小萩ちらはちれ たのましといひもはなたし待しはし もらさんとせは野やこほる」 かきりなき心の内のおもひ草 思ひ侘すこしまとろむあけほのに おもひこそしるへならめのやすらひに 露むすふ夕かけ草を獨見て いのちは君をまたんものかは ふてをかとちなくさめ打をかて つらからは人なをやかこたん かきりありつくあひみもそする さまくにみる人のことは 鳴むしのこゑは尾花か本なれや 夢ならて又きぬくもなし 心よせめて一すちにあれ あやにくをよしや心の憂としれ わけはいかなる野へをかもみ かりのなみたそ袖にたくへる 名をかくしつる君かすむ里 ŋ W

卷第四百八十九 壁草

第六

物おもへはねぬに明ねる空もなし

今はともねぬへき月は在明に

夏も忘る」夜も深にけり

第

哀とは折くいふに絶やらて 恨るもかこつもきけはつれなくて なひかしと聞しもしるくつれなくて 妹をゝきてふね渡りする里もなし 涙はふれもわたるらみ川 よりきつゝ驚かすにもつれなくて 靡人さてもやおもひ絶もせむ いなせをもきかはおもひも堪やせん つれなきはなつともおなし殿にて あたならぬころをみすはたのむなよ 情にかるる玉の緒のする 給にかく人に似たるもそある うちしはふくも人そねふれる れなくて誰にもはてはいか」せん 我か中河のなかそくやし ふかさをもわかすは思ひ何ならん 强面はよしかはせ一こと 人の心はつきんものか あさはかにこそおもひ染つれ 色にめて」も世はなにかせむ とふともやはうさはやすへき は

かけはなれらき名をさへや立ね かりそめの契りに名をもいひ俗て はかなくも憂あた人に馴 もろともにたへは愛名もいかいせん たちし名に花も紅葉も折俗て あひみすはありともたてし名はもれて 名をはかくいかなるえにてしてつらん ならへともはかなく憑む偽 目の前もしらぬ行衛も契らめや れのみや思ひする世の名も 君かためこそ身も惜みつれ 中にたえぬるふみの音信 身を忘ぬる程のはかなさ たゝ一たひそ身にははかなき 又夕暮をとはんとそいふ かりにもあたの身をはたのまし 海士のいへゐをかくす蘆はら 心はわれもえとそさためぬ あたし名になりにし後は問もとて 物おもふ玉はそふとしらすや のあたなるもよしや歎か たゝむ らん

人ことしけき世をやうらみむ 環面人をたのみてそふる いつあはん月日ともなしかそへきて たのめて送る戀のはかなさ たのめて送る戀のはかなさ かくれ覺ともわかぬ冬の夜 ひましらむ軒端をひとり存侘て さひしと雪をいとひはてめや きか心おもふかり行駒もしれ かへれと人をいはん物かは かへれと人をいはん物かは

待といはすととふくれもかな とはぬうらみもゆふへにそよる おもひ出てとはんことこれかたからめせめて契りし暮なたかへそ とはすはおもひたゆるよるかな あた人の所さためぬ宿とひて 待けりと君もねぬよの空更て おもひたえらかれし月を獨みて さやかなる折しも月を獨みて 書なれし跡とは見えす文もうし しはし待心やすめてまとろまん となたかなたに分まよふみち つはりとしるへ一盡す文をみて 跡つけてかる雪には誰かこん たつねしといろいまや忘れん まくらさためは夢やとひこん 戀すころの間もふかるる たのむはかりにおほきことのは おほつかなしやなとかはるらん か里か入相の鐘はきかさらん

第四百八十九

卷

筆はさはりありとやとり侘て

又をとつれのおもひとはなる

誠にはさはりもしらぬ文の來て

恨なよえさらぬさはりなき世かは

軒によりてそまたん夕くれつの暮さはりなくてはとひつらんといひかくいふことそくせなる

待をむなしくなさしとやする

さりともの人になさはや小夜時雨

おもひかけねはをとつれにけり

壁草第六

さのみかこつなことはりもなし

おもふやしるしるへ里そわかれぬ (所吸) 中たちやいひなひくると問もうし 君しこはうた」ねの館やうたかはん 今はとてまつよも袖の片敷に そことしもとは」と君はいはさりき 憂世とも人のつらきにしり初て つれなくはやましといへはとふもうし とぬ人またれ日くらしそなく さりともの空よとはすはかねもなれ 月よりも心つくしの秋の空 月とふたりのそてのたまくら うちまとろむや夢もみゆらむ つれなきころろよはりもやせん おも忘れせは猶やらからむ 人もおもはぬ道の露けさ あはれに身をそ思ひすてにし 心ともなきおもひとをしれ おもひたえよの人の心か もやはちきらぬ暮はつらからむ

忍夜はそこはかとなくまとい來て

玉すたれ眞木のはしらのやすらいに ひとりねのうきもならぬ類なよ 忍ふよのよひうちすくし人の來て 明しかね物おも小空のほとへきす かた糸の組にしま」のひとりねに せめて夢君にかはりてみえもとよ いたつらふしにあかす夜なく とは、人草の原よりこの夕へ よひくに馴なは夢もうら山し きえかへる露とは見えん草の原 二道に心さためすなり初て なくさめてとへ夜こそ長けれ とはれぬよはや猫なかいらん はらふかひなき皆々の床 と」ろの人に行てもやそふ いつくによりて身をはかくさん 心もしらす何うらむらむ 忘る」とても我はわすれし きえての後の身をも思はし よるとて夢は心さそふな とはすはいつの夜をかたのまん

第七

わすられはてぬちきりもやあるらくつらき後をやさらは憑みみんあかぬはかりそかたみとはなるものらくのらく絶は忍はんゆへもなしたより求て人のまつ暮

壁草第七

なひくもや契りならまし空の雲

がひなき名のみ 残るなし

憑む夜のくらふの山も何ならて

誰に行けしきを我にかくすらん稀にあふ夜は灯のほのかにて面影のみのちきりなりけり

月まちいつるほとのかたらひなからへはつゐにみゆへき契りにてなからへはつゐにみゆへき契りにてなからひ

およはぬきはゝいかてこゆへきいにしへの給にも戀せし形ありてわかつらさには似たるもそみねなからへはつゐにみゆへき契りにて

行末をみすはみへましちきりかは いのちを人にさためかねつゝ いのちを人にさためかねつゝ いのちを人にさためかねつゝ

茂はかなるをこゝろとやせんめきりより風待花はほとやへん

たのめしやうつろふ花にならふらんれるとのののというつろふ花になられるとのそられるとのそら

相夜をや涙も隙とおもふらん 相夜をや涙も隙とおもふらん

卷

逢事はた」夢の間の行末に あふたひく、にあかぬよのゆめ さやかにはみへしと逢も何なれや 明ほの」ねくたれかみょ我ならん 忘しの人に命やなからへん あひおもふときや人にわかれん 相たひに今一たひもことかりて あふたひに新手枕の夜半にして 朝ねかみ物思ふにやみたるらん 一夜たにあひ見はといひし我か思 そむくる光らすきともし火 懲しさのはてしはあらん心かは 暫をきくにたのもしの身や あかさりし心を忍ふ中にして ねてのあさけそ行衞しられぬ いつうちとくる心をか見し なをおちそふる沢なりけり おもふもはかなまゆの面かけ か かにいひてか又もとはれん はかりか は名にもた」まし

我くろ髪のかはるかなしさ

手枕にうちかほりつる夢覧て 夢になせよといひしことの葉 おもふにや夢になせともいひつらん たまくらのかほるはかりを名残にて とれは扇そひとのあきかせ 月やたか恨ありともしらさらん 月もうき別にたへぬ哀しれ 駒のみす」むかへるさのみち いたつらに今皆もいかにかへすらん いたつらに歸るも明る空はうし ほのかなりつる夢のあはれ 別つる後の朝の物おもひ うかれとの忘形見は何かせん 後にそ人のいつはりもしる へるさのよふか」らても待みは中 たひかさなるに戀そ猶らき あふ夜半のみか鳥の鳴こゑ 空さへらしやきぬくの比 きえなんとする消芝の露 面影はひかふる袖に消やらて たまくあふもなといそくらん

さもあらはあれなもありのすさひにや 思はぬおもふおもひをそする 心のみらき二人にやつきはてん ふたりにも心かたちをわけ見はや ととの葉はた」なをさりの心にて 君をゝきてあかすもたれを思ふらん 契りてもしらぬ後世いかならむ 行衛は誰か忘しもいかならむ(末野) あふ夜のあした夢からつゝか 逢夜半の朝はうきも形見にて 身をしわけれはらしや二道 忘られてこそおもひわひぬ をろかなる心とや世にしられまし なをいかなれや人の懸しき つれなきよりもつれなかりけり おもふをゝきておもはんもなし 情のほとはくらへんそうき みちかはらすはわれもつれはや かすかになりぬかへる鳥の音 筆の文の返しを待てみむ

人をなと曉かへし初つらん

あはぬ夜の恨をきけのかへるさに

こゑはかりきく鳥そしられぬ

逢夜半のとりあへす又や歸らん

いつまて心のとけかるへき

うきーふしをうたふあはれさ

道のへのあかつき露におき別

忍ふたよりや月のむら雲

卷

たえはつとおもふたひく音信で たえはつとおもへはからる契にて たまさかもよその便の影みせて たのめなを組はてんとはみへさりき ちきるもいふもあはれなる中 としやいつかは又もとはまし 身をしるへくはかるる夕暮 こと葉のとりて別もそせ

はしめこそかそへし夜はれ思ひやれ とたえをもうらむと人にみへはうし 程ふるをさこそともなととはさらん うときにもなをさりの程たへしよに おもひのはてはうらみぬ あひみてかたるほとはなをさり あふときはらへ袖のした露 音せぬ人は心たになし もなし

あちきなや恨はすゑもいかならむ かと」ろしらすは人をうらむなよ 心をしるにたのまれもせす したふとて又袖やぬらさむ いまをかきりと別行道

> 物おもふ袖は月もやいとふらむ なみたは瀧つ袖のあかつき なみたさへ思ふ計は落やらて おりふしは移るともやは我おもひ はらふはみねと露そこほる」 水上の山 心にすてぬ身はかひ 身にそか年を何いそくらん かとそ開郭公 B 75

年さへくれぬうらみやらは 恨をそ戀はやるかたおもひやれ とはすはいというさや猿らん なくさめに身は忘れこそすれ とぬ人をつらきも いはぬやすらいに たのましもとの葉まての恨にて

うらみつを心くらへにわかまけて

ららむなようつろかこそは契なれ わか恨ま弓槻弓つきもせし とふ人に心つよしやわかららみ 年經ておもふ末はしらせよ 限にとつる閨の戸もらし たれ世中にたのみはつへき

うときは何に残こゝろそ

組みかとうにこそあれと思はゝや それる道は露木の葉のみ をれる道は露木の葉のみ

を もとめはやちかきこすの戸 ひ もとめはやちかきこすの戸 すみあらしたる須磨の闘守すみあらしたる須磨の闘守

ほのみし夢そ露名殘なき後は又ともみすのかたらひ

あるうちにおもひを盡しはてもせて

後の世をたにちきるはかなさ

のこれる月に薄ちるかけ

あかすして物おもへとや絶ぬらん

いかにして契りし花を忘るらん露は誰か手枕かれし跡ならん

かはらしとたのむに恨ある物をひとへ心はわか身成けりかはらはおなし蓮もそうき

何か人つらからさりし忘れはやつらきにもなとにくからぬならんっちきにもなとにくからぬならんおもひいつへき面影もなしまからの人で繋ぎ

おもかけは似たるにせめて忘れはやたく火はあらし人の戀しさ

似たるをやせめてかたみに忍ふ草面影なから人はわすれす

おもひつゝ消ん世さへやつらからん人にうらみをよしやのこさし

われならて本の心をたれみせむいわれならて本の心をたれみもみち

むかしせし思ひをさ夜のね覺にてあらはれはいかにせし間もむかしにてあらはれはいかにせし間もむかしにて

いたつらのおもひするまにおとろへてさしいてかたく身をそ侘ねる大かたも憂世に人をこひ侘て

九百八十五

卷 第

九百八十六

われのみこひやは ちきらぬをたのむもならひ有世にて カン なかるへき

受人やはかなきもしらす世をも經ん のちさへもそつれなかるへき

君かため我か而影やつくもかみ ふかきうらみそたのむ中なる 身のうきさまそみへてくやしき

身をしらぬ人やは憂を忍はまし

といろはみへつあちきなの世

又こすはくやしきこともいか」せん のめもをかすかりに見へつる

又これは此世の夢も何ならて 心さはかす中 はくるしな

あふこかたみまさる戀しさに必要 ととの葉は水やはもれし跡もなし

とゝろをや戀は忘ぬ宿ならん いりあひひょき哀なる暮 いりあひの鐘にたちかへる暮

想しさや世にはとまらぬ我命 想は いかなるまよひなるらむ

> 朽ねたゝ身やつれもなき名取川 生たにあは、又ともおもふ世に 思ひ初しは夢のおもかけ いつをあふ潮をなからへてみん

忘すは長世まての懸はらし ゆふへくや袖はしほれん

忘られはてつ心らの世 限とてわする」もやはつらからぬ 打返し何とおもふもなくさまて وم

き遊にいつまてはらふちりならん うとくなる人をは夢もみせ俗ぬ 枕やつらきこゝろしるらん みせはやかくる山のありさま

## 壁草第八

雜連歌上

山 いつとなき山里住も年越て ふかみか」る谷にも春みへて らつる光のかけ 草木にしるき春 0 の初風 あはれさ

さくらはかりのみよし野の奥

草第八

物いろつく春風そぶく見渡しの空はいつより霞らん

ー本に吹風匂ふむめさきて をしなへてなく野への鶯 をしなへてなく野への鶯

にほひさへわつかに梅の花咲て草の戸に野邊の鶯今朝鳴てまつ人からの春もかひなし

もゆるそしるき野への下草

山櫻とへは風のみとたへしてつなかれぬ駒のけしきも春の日に

花にせし心霊しは散やらて

あはれにかすむ老のとしく

・ うたかふほとはふくる夜の門費の夜の月はふくれと澄やらて質のうちはましるしら雲

やすらは、霞を出る月や見む

さき散も音信きかぬ花の陰 れいりにしま」のみよし野の春花にたちそふ松も一しほ 又こそさかめ山さくら花 又こそさかめ山さくら花 マンス はいく日もあかし妹か島 かすむ 20 年に日鶴わたるみゆかすむ 20 年に日鶴わたるみゆ

忘すは赤やをもかけ天津腐 色~~をみし花のかへるさ

またき野山の花のあらましまたき野山の花のあらまし

かすむこす系を遠く成行 化に春今年はかりもあまた經ていのちなりけり又やあひみむ

我植し花にあまたの春をみて

さやかにはみせねと花に朝かすみ 花鳥の色香に柴の戸を閉 かきこしの花は一本ね いつかは花をうき物とみむ うつろふとしるく一緒も思ふ世に するへしやは今のおもか もひよはら しすつる身のらへ しや誰 7 け

花の **蓬生に花ちりはてつ誰かこん** さひしさのみそ夕をもとふ かけ音せし人もちりは

道芝茂しすみれたにさけ \$6 しむをはしるてもおらし花の枝

古畑のけふりも春の山 赤のなさけのゑひの らつろへるいろや梢の花ならん 立わかれつ」かすむ遠かた たは のは ふれ K

古郷かすむ志賀のやまこえ そこも水すむ池の藤なみ にこそむかし語りの次も あれ

かしのあとは野にそかすめる

春毎に狩せし宿の天

八の川

たへかくさぬほとのさ衣

郭公彌生の月にさ夜更て 谷の戸は鳥のかへるをしるへにて さきなは花や夢とちらまし 夢も夢かははるのうた」ね なを遅さくらふかくたつねん

春暮ぬはるしらね宿も慰て 見せはやの花を今日まて折俗て

時鳥またぬかたにやなきゆか 春を山路にくらすかへるさ みやこをしへよかへる山 雲

郭公またせもた」一こゑに うらみをかくる夕くれの雲 おもひ入山の端いつる郭公 うちもかたらへ行ちかふ道

蟬の羽はかさねまほしきから衣 郭公き」しや夢のうたか から衣梢 行 p> 心をのこすみしかよの月 たつふりさへ角はおそろし 虫の遠さかるとゑ に蝉のぬきすて」 ひに

村雲にまたるはかりの秋のかせとれは扇に関もからはしほとなやこもる一夏の内にとれは扇に関もからはし

萩原や初風しるぐほのめきて (新歌) 月になりぬる夕暮のそら とふ螢かせに残れる秋は來て

月影しろらくらき灯

秋かせや小舟を遠く送るらん

夜をかけて露もかはかね草の本小萩原露けき宿にちり初て

秋もすゑ野の道のへの霜むしの音たかし風の明ほの

いつくか君かかけならぬ里しほれたる薄か本にむし鳴て

山のはの霧のをちこち野はみへて今朝をく霜に初鴈のこゑ

吹まよふ野分に秋の日は暮て とぬ夜かさなる秋風の雲 たらつ比しも旅よいかならん

用更ね能かまとろむ宿ならん あらしの風にのこる夜の夢 露は袖に賤のをたまき幾ね覺

月に時雨る秋の夜のそら程度か恨は跡もなかるらん

人こそみえね月のやま里

をかき潮のあかつきのこゑ はの音月すみのえの神さひて たちるもいかに引しめの内 たちみもいかに引しめの内 たちるもいかに引しめの内

鳴海かた引のこす擅に夜はの月時雨にたへぬしかの一こゑが、リみる梢そ名殘下紅葉

九百八十九

第

[21]

時雨降山の下柴はこひ來て 誰か衲のつれなかるへきむら時 軒は忍ふのやとのまつか かけ 我すむ応の露ふかき暮 雲もあはれをさそふゆふ暮 月 K to いつは の關屋も守らす成け 5/ る」を聞かん雨ならん 0 秋 のほ しさき 1) 南

まは朽はつる桐のふゆかれ水をとる岩間かくれに道有て水をとる岩間かくれに道有て舟よはふ浪に暮る河音 かよはふ浪に暮る河音

門近き一本榎の實落はした

つやのあたり鳥そむらか

古はてム苔むす軒のゆふ時

野白き野をあさふませ駒なへて とへかし山のうきをこたへん とへかし山のうきをこたへん いり場のすゑに鳥の立こゑ かり場のすゑに鳥の立こゑ

春のくるをもしらぬ柴の戸長閑しな世をすて人の年の暮春秋に別るといかて恨らんを秋に別るといかて恨らん。

菅原やふしみにも誰すみぬらん ふるき都はあとさへもおし 夕暮は高き賤き哀にて ころもうつなる風そ身にしむ

露となみたの袖はかなしき

水をはなれぬ鳥の一むら水をはなれぬ鳥の一むら水をはなれぬ鳥の一むら古はつる軒の萩原むら薄たれわけきてか道芝のあとたれわけきてか道芝のあとなる人婦る夕は夜をかけてさきをひさはく小車のをとおもはさりきに年をふる山

ふりにしことよいつれるとする

古き世のことこそ聞もあはれなれ

きゝ分ぬ神歌らたふとゑはして

筆にそふるきことものこれる

なにの心かなをさりにある

**亂あひ身を誰鞠にやすむらん** 

今と其かしこき人の世々の跡

ことの音なくね打そませたる

暮はおしき春の木の本

琴の音やわかぬ心もすみぬらん

忘れもはてねつらきふること

かきならし猶袖ぬらす繪を絕て

侘人はいつを思ひの隙ならん

琴笛に泪しのはぬさ夜ふけて 月に夜ふくる笛のさひしさ みたれ恭はけにをの」えも朽つへし 立かへる世はをのゝえの跡に似て 吹そひおつる庵のやま風 松風きけは物そさひしき 音にきく人を風たにさそひこよ 心くらへよいつかはてなる

おもふ事うち出る酒のたはふれに

ららみし友のこゝろしらはや

なをひらきみる文の卷く

大唐の文字を學ひは絶もせし ふか」らてしるこそ道のまよひなれ おもくのみせよ道をかくすらん ふかくなる學に跡はかたからて 哀ともつねにやしらて和歌 おもは、誰もやまとことの葉 行末の跡を誰をかしのふくさ といろくのやまとことのは つれくをなくさみ草はかたみにて ふるきもいまも歌の数 まれにとひしそ中へにうき 行はき」しも遠さかる道 見すしらさりし心とそなる こゑをしるへに道やたとらむ とへとことのはをのこしこそすれ **君か代は誰かつたふる數ならぬ** 法はたゝかはらぬ道と聞物を およはぬかたそ心かけけり

第 四 百 八 + 九 壁 草 第 八

壁草第

鳥の音にほのくしらむ夜を籠て 槇の戸の あはれともきかは次こそ雨ならめ 雨よなくさむともし火のもと 灯にからけししるしかつ見へて 幾年雪を窓のともし火 年を經て取むかふ文の灯 灯に露まとろまぬ空もらし かきたて」古事かたる燈に ともし火をからけつくせは鐘なりて さそひたる夕付鳥も哀にて みちほのかなり誰にとはるる 更はてぬとやたゝにやはねん 窓よりにしにほそき月影 よしあしの心くをうち語り まとろむ夢そやかておとろく 往來にたへすあふさかの關 水鶏にまかふやま郭公 くるゝまてたとるもつらし道の末 むせふなみたや又くらくなる つきふかく犬ほふるとゑ 明かたくらき雨すきて

牛の子の澤行あたり水さひて 誰としもなきをくるれは犬ほへて 箸鷹の集かくる峰に友なひて あはれにたてる澤の老鶴 岩にむら鵜のさはき立みゆ 夜鳥さはくやまもとのまつ 拾らる」音を鳥やなくらむ 弓を見て鹿や矢先をのかるらん 夕鳥跡に一つれ行やらて なれぬとや浪に静けき渡し舟 すゑのちかきに打そおとろく 我か門すくる人の面 この山からすかすむ鳥の音 **霞む日も髪の雪は消やらて** ちかくなる舟の行末の沖つ島 おなし女にもおもふもや有 草枕またみぬ月の曙に たゝひとり明やらぬ夜を打侘て か家ねもちかき山かけ ふ馬の行かへるさと かけ

もとかすむ春雨のあと

とひやゆかましとひやきてまし とひやゆかましとひやきてまし となく応ならふる山のかけ な所にかくれぬ紫の戸の内

に木わらひのおり~~のつて 雪のすみかそいてんみちなき なむさにたへて冬こもる施 さむさにたへて冬こもる施 とふ人になしとこたふる山の

₹6

下暖をたのみて籠る奥の庵

高瀬舟寒木の往來いかなれや 河風にふかれて渡る橋の上 みれははや瀬の宇治の柴舟

里!への薪の山路おくふかみ奥山は木とる道さへ跡たえて奥山は木とる道さへ跡たえて

高砂の松の友とそまれならめ 高砂の松の友とそまれならめ 雲霧まよふゆふくれの山 雪霧まよふゆふくれの山 山本の松一むらに鐘なりて 位本の松一むらに鐘なりて 澄のほる月や嵐につれぬらん

とえくるは山郭公きくらめやりつかなる甍に杉はむら立てりつかなる甍に杉はむら立てしつかなる甍に杉はむら立て

幾八重山の高根ともなし 製八重山の高根ともなし 製八重山の高根ともなし 製八重山の高根ともなし

まよふ行末そさへぬ目もなき 雲はた\二むらやまに風見えて 雨はゆふたちすくる八はし

九百九十三

第四百

花ならぬ木の本住の柴の庵 くる人もうつの山こへみち古て かけろふの岩かきこむる道絡て 世を宇治の里もやすめはすまるらん 思ふ事しのふの山の奥もかな はるかなる嶺は三笠のさほの内 下脱や夢といふ事もしらさらん つま木の外は水へき世か なに」よりてかおもひ初けん もゆる草木の奥のかくれ家 さそふ浪にもいてぬ河舟 しほるム袖よたれかしらまし 山陰やあまり憂身の宿ならん おひしけりたる蔦のかつらき 山さしおほふ河つらの里 たれをやすしとうらやみもせん 田をもる管をあらしふく床 野や古郷ちかきみねの雲

柴の庵もいとなむ朝け夕煙

すみならふ心とは」やみねの庵

人はいつより身を拾つらむ

施かすか雲風のあと (RRMM) 奥にきくのい響に夕けふり 竹をはしらに柴ふける庵 篠ふける庵は嵐にらち侘て あふ坂やすみけむ庵は跡もなし 雲水を朝夕嶺の庵しめて かけはしは鳥のみゆきや歸るらん がにこすゑをふめる<br />
寺見えて 古寺は軒の忍ふになをくちて 竹あめる応の窓のとほし火 いつちとか荒しはつらん草の かりの世とおもひとるこそ哀なれ 苔にあとあるやまの下道 身を猶ちりに誰ことふらん 岩角たかくめくる流なみ れ党の路のらへにをく霜 とはムや みちはかすかに嶺のはるけさ けき木の葉音もきとへす かにしてあらき風にはむかはまし かへこしその大君はた」しくて 6 かて世をそむく人 庵

草第

なをあとのこる山の井の水 なをあとのこる山の井の水 ひかぬあやめや江にしけるらん さと遠みこまもすさめす水さひて あかつきをきも秋のふる寺 あかつきをきも秋のふる寺 名は滝の糸やかて絶けむ 名は滝の糸やかて絶けむ なかみ瀬々の岩をに苔むして 原しやさくら水おつるをと なきり行なかれに石をたてそへて

いかょするはなれ小嶋の夕けふりかようむ波にちいさきはなれ嶋敷 ( ) かへるあまのつりふねりとつふたつの庭の哀さ

難波の鐘を送るうらかせ こきかへる舟は夕になるおかた こきかへる舟は夕になるおかた

海のかるもしほのけふりたてそへてかすみの浦のかすむつり舟

香むせひ行岩の下水 夕鹽のあら磯けふる山のかけ あし火をうつす水の一すち 夕鹽の跡かしら洲の遠き夜に たてるもしるし岩代の松 たてるもしるし岩代の松

夕日そわたるあまのはしたてなかむれは真柴ふすふる浦さひて

タ日それたるままのはしたで の決路にちかき須磨の浦 のでいる。 のでは、 のでは、

松風の吹上の眞砂打なひき

千鳥なきたつ雪の暮かた

海士小舟はるかの奥に漕出て

風吹すさみ舟や出さむ

釣舟のよるの綱手に火は消で引こそあへね山の横くも村雨の雲は山とすいそのまつ

なすつみのむくひにさてもいかならん松の葉こしにらかふつり舟

山

道はちかく見ゆるも遊にて

九百九十五

九壁草第九

朽わたるいた田の橋のちり~ に 発引かくる海士のつりふね 装引かくる海士のつりふね

かはる演もいつかは絶し飛鳥川りふかき黄は雲ゐるよしの河奥ふかき黄は雲ゐるよしの河

とをきもみゆる松の村々よるの雨見る大河のみつ

授剤ともしらぬ川音さ夜更て

はするか

0

Щ

の木のはか

旅のらき聞

しは物の数ならて

山の端をなかむるかたの限にて月のやとりをとふ人もなし

明ははや夢のわたりの末ならん「道とたへたる橋かすかなり」

今の香しるき驟路かすむなよ いつくにてきゆとも跡はしら雲に おもかけみえて山そしられぬ 半天にかくさは雲や富士ならむ すみかやあるとたつねいる山 たちぬはぬ衣を掘の雲にみて 山をもすきて春や行らん

壁草第九

花ならてわけんもかなしよしの山雑連歌下

憂にたえたる我そ强面

岩ふみなるゝ庵の朝夕とし野も人のしらぬおくかはいとへたゝ吉野の奥のなき世かはいとへたゝ吉野の奥のなき世かはいとへたゝ吉野の奥のなき世かはいとへたゝ吉野の奥のなき世かはいとへたゝ吉野の奥のなき世かは

ふかみいつれ朽木とおもふ身にはかなくかゝる命つれなよ

\$3

九百九十六

もひとらすはまなひかたしな

壁草第九

世をいとふ所はいつくとたつねきて 今は世を出立いそき目にそへて 世はたれもつらきを獨いとはめや たれこそしると身をしるもなし 世は人毎にまとふてふみち かけはなれいとはむも世はいからせん おもひ立心やいつのこけころも おりにふれ宮こおほゆる山の奥 ひたすらに都とをくはすまれめや すむへき奥か雲に山か よはひの末は長閑にそなき かてかく出かたき世の道ならん 人に身は猾まかせてやみむ 人毎に世をうちといふ山の陰 おもふあまりにかこちもそする 誰もわか心はしるもなかりけり あまりさひしきかくれかはらし そのかねこともなくて來にけり 草木のらへに春秋そある 力。 ŋ の傳にもなくさみにけ 44 ij

捨し身も今は夕待わひて (を風歌) すみらかる」や草の戸のうち 花をも世をもすてはつる人 世をいとふ人は朝夕なれまほし 哀身はさそふ水もやすて小舟 侘ぬれは、よるへたになりともと思ふな朽る身の向後 行末のあらは待ても朽む世に 世をいとふ心もよはりはてつへし 世をいとふたくひはかりにいそくなよ 今ばとて名残おほくも捨る身に 身はすてはてついかに送らむ いかなれは身をさかりにて朽つらん うき世は誰もおもかけの人 此後のいのちのかきり待だて 陰たのむ深山は風もうからめや あらは世中なをやらからん 年の老てそ世をいとふ道 とへは心のしつかなるいほ 柴のあみ戸の山風のくれ やすらひ俗ぬわか哀しれ よるへたになし

九百九十七

卷

住はてむ世こそつらきもつらからめ 七十の世はのかるとも何ならむ 身はすてつ命まてやはいそかまし 世のうきにあへといつたれいとふらん をろかなる苔の莚とおもふなよ らき世の夢と松風もふけ **兎角に世は老そいとはむ** いとはする此世後世いたつらに へたてもはかなこの世のちの世 とふ人をいとふ山路のあるしにて 稀なる女よしはしやすらや さすか又人めもつらしたへかたし 苔のころもよあるにまかせよ 引むすふ栖とたのむ草の原 後の世をこそ誰もねかはめ 拾る身に結ひもをかし草の庵 大かたになし人やつれなき いつちともなきたのみをそする といろすますに何かしくへき りのやとりをいとふはかなさ つかさらましふかき柴の戸

浮とはあらたまるへきわれならて らきことよ身の何にてか絕さらん 身と心むかしのたれそとはまほし 身の恨みおなし事とはおもふなよ 誰もこそうき世をいかにうらむらん 世中よいかにたのみて恨むらん 哀たれ憂世と名付住つらん うらやむなわれもゆくする遠かりき うしとみし世は行末もたのまめや うしとみし世やなをさりの絶ならん よしや身はやすからすとも夢なれや くらへはなみたいつちまさらん ゆく衞思ふとおもひかひなし 立ねにつる」心しらはや はらふに憂はなとしたふらん 語るに老か世をそなくさむ わひぬるを身の習ともせよ うきもおもへはたゝ夢の間そ た」きのふをもいへはいにしへ とへくる年そ身にはくるしき おもひはいつをはてとしもなし

大かたのつらきことかは身の向後大かたのつらきことかは身よりほかなるわかなみたかは世中のうきにたへぬはおろかにて身よりほかなるわかなみたかはいかゝ忘れんすきし世中

おもひなくさむ世さへはかなし、かたらはこと薬誰もつくさしないりぬるゝ老の袖とはかりぬるゝ老の袖にないなるとものつれて、に

古郷は猶いかはかりあれぬらん世にすみてしほれぬ袖よ誰ならんもともかなりきにつれなき心ともかなりまにつれなき心ともかなりまれるがある。

見しもきょしもよし夢になせこころそとむなし昔にとまるらんこれろでとれなし昔にとまるらんにしては人によりてもかへらめやゆくすゑ今をおもひこそやれゆの上よむかしはいかゝわきつらんおとろへゆくを見へははつかし

春秋をよはひの末のうらみにて行わかれすは何かうらめん行わかれすは何かうらめん

大空をたのむはかりの世中に

何をまつとて身は殘るらん

身の向後神やしるらん我心

おもふ事うき空もはつかし

浮世のほかと月やなをみむ

本教をよはひの末のうらみにて おか世の人にさま!~~くるしみて おい世の人にさま!~~くるしみて なにのう~にも限こそあれ かゝみもとらし身そおろかなる かゝみもとらし身そおろかなる なき名を何といひものかれん

九百九十九

いかに清くはうきもなけくなよ

壁草第九

草 第 九

はてはなを心ならてもおもはめや おもふはかりにくたさんもうし なみたや人のうきをとふらん

物ことにおもひすつるもねさめにて ととつもる心のそこの哀しれ なと郭公またれのみする

か」るをも身にはおほえぬ思ひして

生れとは誰もくるしむさかひにて 後の世の外に何事おもふらん 山里すみにましはるそうき

後の世のねかひたになとかたからん かたにこそおもひなすらめ つかならすはかくれかもい ېږ

のちの世をなけかはいつを隙ならん のころもをいか」はつへき

後の世を歎くなみたにやとれ月 憑ぬる法のをし へに目は覺て

つおとろはん人の世中

明るとはたのまぬ鐘も聞馴 おもはぬまなき老の後の世 けふもく とたのむ行末

> あちきなやおとろかぬまをわか命 いつきくか入相の鐘のはてならん 驚すいりあひの鏡も耳なれて 夢さめぬれはたくわれもなし けふのかきりはかねそしらする た」けふのみとすくす年月

暮ぬまはさすかにたのむけふことに 面かけのかたちをいかにたのむらん 老にかなしき鐘をこそきけ

数ならは身のらきにしもなさし世に 憂にたへぬなみたもたくひある世にて 千々のおもひを誰にかこたむ 心のほとを老にたつねよ

絶はそれ何はれ事かふりさらん (G駅) 身の物わすれたれにかこたん とゝもかしこもうき身ならすや 我にある心ともなき老の末

になを心をとむる世なるらん

月も日も何をしてふる世とかみん 身そいたつらになからへてうき

がやしきに賢子こそあはれなれ いやしきに賢子こそあはれなれ いやしきに賢子こそあけかるかた でと何の種かなるらむ

おもひのやみはわくかたもなし子をは皆いさむる親のおろかにて

親ならぬ誰かいさめをたのまくし

おそるへきをも背くおろかさ

かなしむちょよ母のくるしひ子をめくむ父母いつれ浅からむ

浅芽か本によはる虫の音 であるとしては、ないでは、かき秋

あふたにあるにつらき玉の緒 名身を老はてぬさきにかくさめや 表身を老はてぬさきにかくさめや

老にわかあふ秋のゆふくれ巻たひそ荻ふく風に袖の露

まれにたに人めはあらす応ふりて

をやみなわかたくひなるらん 老やみなわかたくひなるらん 老やみなわかたくひなるらん

かたるにや心のはてもなかるらむあかさりし春よ秋よと身は老てあかさりし春よ秋よと身は老で

何を我か老のしるへと人もみむおを人すてかたくや見もはてんいたつらに身のなからへもうしなたのも世もらし

といらつもれる老のふる里

千一

第 四 百

うきのみやはくろかみのしも (x 脱製) すくなるを心のすちにたのみをけ 行末を白髪まてとたのみきや かしらの雪の山はふしの たくひなくよはひ迄になからへて 積りこし恨はいつの世につきむ はかなき筋にかくる玉の絡 さらはつれなき名にたにもたて ね

賢もかしこかる世やしらるらむ 夕付鳥におきいつるみち のとはねは道としもなし

老か身は幾露霜のつくも髪

なをこの比の秋はすさまし

中人に毛を吹世やはおさまらん 立かへる宿をは旅のつかへ人 いさめにあらはれそゆく

けしきととなる雲星のそら 所すはかるる世中いかならむ かなりし罪にてかくはおもるらむ あ はれみふかきこの君かとき

あらしも契れする遠き山

行末は千年の松の二葉にて 苔にも千代はしるきまつか枝 姫子山子日に千代を籠初 それかとはかりほのかなる山 くゑまて霜を嵐の送るらん

萬代を摘てふ若菜敷~ 君かためとや春日野の神

打はへて青柳の糸のなかき日 おさまれる代の春の長閑 風を花しらてやけふも残るらん たえぬ程こそことのはも あれ

御垣 とまかにそ」く雨の静け の竹のいろかへぬかけ

かけはみな此君にとやつくは山 君か代は民をめくみの敷わか くみはふかしつ つくとえても山そは かへぬ るけ る道

立か きりやはしられん君か千代 道は神代の末としもな ŋ 猶いにし、の和歌 の坂

卷

きえはてはなき身といかておもふらん

くらきにたとる後の世をしれ

松一村に風かよふをと

なきを猶有物にせはいつかみむ

+ 九 壁 草 第

カ

空蟬のはてたにかくはある世にて しらさりきなかきわかれの旅の空 数~に忘れやるへきあとならて するの世は猶とをかれや神と君 跡をたにとはまし親の古郷に あとをさへ心まとひにとひ侘て 照る日のくれし空のあはれさ 國をあはれみ代を守るきみ 年へてきくはつらき音信 あたにき」しをたのむ身そ憂 いつちなり行強ともなし かすみをみてもおもひいてつる いかなることをちきりをくらむ はかなく今は戀やしぬへき 聞しもしらすたのむ世はうし 深草やむかしの跡の春さひて 佛とも神ともなるは心にて

山陰に名はうつもろぬ苔生て ありふれは忘る」世こそはかなけれ とはる」もとふも跡こそ草の原 藤ころも名残おほくもぬきすて♪ 我か身やはあらしましかは数ならん 程もなく露消し日はめくりきて わかゆふへいつくの露にまたならん なにかはたのむ身は露にして 身はすゑの露の消まつ鳥へ野に とをき跡とふけふのはかなさ みしは世にあらしましかはね覺して 世中はた」朝かほの花の上 とにかくになる戀しさのは 身のはておもふ秋のはかなさ いつもなれともすさましき暮 誰かためにとくとか聞し法の道 何をか忍ふあと」なすへき こふるはおほき人のおもかけ 月をしたふもとをさかる空 たれかは露にやとりおくれも なみたをたにもなくさみにせん

をくれしの跡 あはれそれ佛の世さへ常ならて 松杉ならふおくは神かき かりにみえしや夢の行末 ひしはかりに日数をそふ もやあらは忘まし

春日野に春のめくみをかけ初て かへもて行神の宮人

植にやとりし月の面かけ

閑なる苔に櫻の宮ふりて

住吉や春秋年の祈して 石清水松ふく風に神さひて まふてもしけき神かきの道

神のねかきの月のさやけ 松さへも秋にはあへぬ風吹て 3

災にも御殿のしるしはやみえて 祈なをうるほ 少のつけ所る日数をそへて なをうるほふ民のアか下 みちやはすゑにならむとのは の凉しくうつる水かけ

しるしを見てそ神にられしき

しつかにくる」みねの山でら

事もなき今年や祈るかひならん 背さへ狩場はまれの御幸にて

千四

佛のことのねかひか ととはりは分もわかぬも法の庭 なみたす」むる松風そふく しとき

おもひ入心やあさきのりのみち つれの法もおろかにはなし

苔の袖ふく風そ身にしむ

法に身を与けくる誰か造からん 歌の上の車はたとへにて あひ見るとはまれの我

さらにた」空やむなしき法ならん 雲にこゑあるいりあひの鐘

心にやひかれてゆかむ六のみち 身をある物とお もふは かなさ

といろの間はさてもいつまて

人をみなわか子と歎くか 形をもうけすはと身を恨みきぬ の師

灯におこなひさひしみねの寺 佛にとをきこゝろなになり 夜ふけてたかき人のこゑく

第

+

今朝はまた霞も雪の外山かな

曉の露をしきみに折そへて 結ひとしあかの清水に 月をも水にむすひあけは 影は今朝まてあり明の 年暮 つき B

俞 橀 には松のはに 拾はて」さへやすからぬ身そ 15 佛にもかはらぬこそは姿なれ 0 かほるすみそめのそて カン は心やすしともせ たになからへて N

壁草第十

法の道

いらは猶こそかたからめ

年の内立春ありし正月 + \_ 目 獨吟の連歌 K

去年立し春も今朝しる霞哉 かつとけてむすふはかりの氷か

な

風や春名残たになき氷かな

雪なから遠さかるみねや朝かすみ 春の風いつくもをよふ草木 水や春むすはまほしき心か か 75

> かすむへき物とや去年は最の雪越後國に侍し比春の初に 朝仮雲にさむけき山 زمه रेट ¥. は軒はあさかすみ 3

富 野は分かぬ下もえしるき写問 みれの鰐今朝はかすみの慌 出のね 伊豆の山家より は天のはらなる質かな 所望 哉 쾂

せし

花每 雨 朝 < 本にさくやこの花四方の は今朝木々 かすみ数そふ沖の小島 里か匂ふ春風やとの に思はむ梅の に露けき微 にほ U むめ カン 7) TI 75 3

驚もにほ ふ風をややとの む 8

かてかく色さへ香さへ つく你にほひははらふ霞か 梅のむめ 75

かさりし色香やかたみむめの梅 宗祇禪師行月忌日にせめての事とて一折なと興行 作 る正

H 梅 に今いくかは木のめ春のはな 行ふ柳にみえて風 B

F Ti

---

さみとり 草若み木するはこのめ春の 幾村そ川つら青むさし かせたにも過かてにする かけゆらく春の 鷺さそふ柳か []ともの柳哉 柳かな かっ

雨に花みれはこもらぬ枝も 待人によらはけふさけ春 ・花の露 の花 かなし

ts

折花は思ふおもはぬ一木か 花の木とも敷おほくうゑた所にて侍し一座に「る魔獣」 te

こまかなる雨やみるく

都ともいふへきやなきさくらかな

空はれて庭も系遊柳 かな

風 糸あそふ花になかき日風もなし 吹かか ね世 はなを花 の色香かな

不 有山家の知人を便にして草庵のあらましなとせし の上 まかりて

さくらさく山鳥のをの春日かな 111 櫻おもふ色そふころかな

立をみぬ彼やはなの朝日 朝かすみとめは花なき里もな おしむへき月日も花のさかり哉 か tz

> 迎くときいつれ さかり しほれきぬおるやとを山 はなさかりこかおほゆる日数かな 長谷寺にはなの比まかりて いつまたれおしまれ花もなし かいい つれ花さか 櫻 カン ij

[4] ちらは花尾上の鏡の夕か やちる折て行かふ花もなし 15

壬三月の心を

あから世を花にしるへき今年か 化吉法樂千句に tz

春漬し代々につもりの浦 行春の宿のものとや遅さくら の松

祀 めの心を

V まさける宿や月日 也 遲櫻

非界に

うらむなよくれ 夏發句 ぬ里ありや花 の表

誰か宿そ卯花ゆへるかきつはた 11 郭公木たかき藤ややとのまつ るも見ぬ光や谷のをそ櫻 夏のはしめ 第 + むかふ日に露はあさをくあふひ哉 根 P いと」とる袖ふか よふ岩かきつは し八重 た松のふ 3

聞きかすいつかはぬる夜時鳥 またるともしらはつれなし郭公

月を今朝今一郎かほといきす

又やなかむきかすかほせは郭公 甲斐國より或人所望せしに

郭公根
こし山
こすは
つ音かな 信濃図淺まの山わたりより人の所望せした

とゑもらせをちこち人に郭公

まつこえし山路のつてか郭公 或人みまかりぬる跡にて侍し會に

伊勢山田 K L

郭公杉村わかぬ深 カン TI

今日のみや根は水こもりのあやめ草 五月四日に侍し一座に

質の かけしける柳を池の水草か るるほ かは夏野 の水草 か

夏野行納さへ草の袂か や里野山色そふ早田 カン

> 風 や秋早苗にそよく岡 IC して民 秋 しる干 のま M か TI

晴またに庭 五月雨 信濃國 やみな雲はれ は五 あさまの山 H ,雨柳 ぬ後間 かっ 近きわ 山 たりに

さけは誰 五月雨は水に澄やるこゑもなし 雨匂ふ木宋雲ゐる標かな か外面 もひとつ概かな

[此間二十行関

宗祇禪師或山寺にしてらの葉さへ花橋の色香かな とつかまつりて身まかりねる又の年おなし坊にて

橋は納ふれし香は郭 の軒 公 端 か

TI

侍し合に

天の戸の横雲いそく水類か 水鶏なく門田木ふ 今年生に心をゆつれ関 か き柳 0 竹 か 1: TI

廻あへぬ 水鶏なく夜半よゐまの朝戸 川やあり明なつのそら 哉

花そさく庭は苔むす石の竹 ととなつに吹や いかなる花 0) 種

+

蝉の羽や岩ほなつてふ夏とろも とゑたかき梢は蝉 0) は山 かな

今日 に消てふる雪凉し富士の機 六月十五日に侍し \_ 座に

月に 夏は手に山の井ならぬ水もなし **込みれは手にとる扇か** ta

神風 やゆふとりそふる扇かな TH 勢山田にして千句に

更まてたちすみぬるや河邊かな つらちかきやとりに

またてたにち 秋を荻風にすたせぬ 夏はきえ秋はらか 3 p 秋 へる泉 風柳 りか 15 力 かな tr

秋のはしめ大神宮にして獨吟の千句つからまつり 第一に

ふくならす川風凉 風を今朝しらする館の L 秋 一葉哉 の水

カン せや秋ららめつらしき私は哉 葉ちる初風幾日秋の 新きやとをつくりてはしめて侍し七夕の一座に には

> 七夕に たゝ一夜一とせにほし たえぬ樹や年の 玉をみ か わ け 3 たりの代々の秋 砌 0 カン 衣 ナニ カン TI

みぬ 桐の葉のうこくや名残今朝のあめ けとも秋も經にけり宿 かへまからさりし人の宿所にして侍し會に の松

ちるも見ぬ下葉数そふ柳か 秋は風いつともわかぬ松も 朝露に雨きく桐のしたはかな なし

みるはかりもろくはちらぬ ちらてわかはらふみきりの 宗祇禪師一回 の追善の ために興行せし會に 柳 カン tz

植や覺し而影去年の おなし追善のためにとて人

の所望せしに

秋の草ひとつ花なきさかり哉 丹の秋初風清し荻 身にしめて風や幾秋荻のとゑ みれは **获葛なと有所に** しかし錦も花 のとを 7 の秋

荻にのみ吹そふ風か荻の露 へる風や葛葉も荻のこる

千八

かけや秋早苗色つく岡のまつ鹿の音を引り霧のまかきかな鹿の音を引り霧のまかきかな

秋は露けにをくともの早田かな云寺にして

いつく朝霧たかし嶺のまつ

朝勢や波の上なる秋のうみ 総上景) がある秋のうみ

縁に夜は日たけて明る朝戸哉

しに或人興行せしに 見津眺望眼前也其庵主造去の翌年の秋まかりて有

> 任 しら雲も月すめる夜の光かな 月や秋木の間 月に光名をさきたつる今符 のめくを荻や末葉の夕月夜 のうへに三 八月十五日 八月十四日に侍し 0 で夜に 一笠の K かっ の空も 太山 連歇 72 か ts 75

名のみをは月におもはぬ今宵かな行末もこよひや幾世秋の月

初時雨染てほすまか山めくり野は今朝の朝さむしるし露の色風や野分玉ゆらか」る露もなしるとなったさへ都はあきの千しほかないさへ都はあきの千しほかない。

程とをし秋といふ秋の宿の菊時雨染すやはあらぬ秋のらみ夕時雨染すやはあらぬ秋のらみ

海邊にして

四百八十九 壁草第十

卷

第

浪や磯千里も霧のあ

したかな

水とをき江は朝霧の名残哉

千九

T 八 +

きくならてらつろふをみる花もなし

松みれは風も色つく葛葉かな 九月虚に

見れは秋葛葉をかへるしるへ哉

冬發句

北國に侍し比神無月の初に

都やはもみちの庭に峯の雪 駿河國に侍し比出雲國より遙~一琴下し人の為に

**興行せし連歌に** 

時雨らん八雲にしるしふしの雪

叨

石の磯にて月を見侍し時

とわたるや浪に雲ゐる夕しくれ あしやのなたちかき所にて

しくるへき袖やはる」夜夕月夜

豊原寺にして

いつくちり木のはともなき太山哉

しらしすて風や山本むらかしは からにしきをりはへた」む木のは 唐船歸朝せし人の興行の一座 カコ K 75

田鶴そすむをのか さえし夜の霜のふるはや朝柏 へぬへき霜の松

> 心經ん初雪しるく宿の松 **伊勢國阿野郡に** し連歌に

海はれて遠山さむき朝戸か 三河國八橋のあたりに tz

今朝みるやさえし夜よりは薄氷 あられせし庭は水行こほりかな

今朝こほる水上ならしみねの雪 日も寒き月はあり明のあさ氷

空に寒て月はまたる 夜やさむき鳥の音せぬ水もなし 今そしる水とほり山 ムひかりかな の谷のとゑ

みれは雪聞は時雨る山路かな した 或人上 野國よりはる。へと草庵にたつねきたり侍

村 甲斐か根は 時雨ぬ さ夜中 tu 山ちかき宿所にして 82 雪に時雨る山路かな は かりのやとりかな

水けふる山本らすしみねの雪 紀州粉河寺より所望せしに

チャ

あたらしき所をしめて家作し侍る人の初て興行せ

宮こまて心や送り雪のとも はらひ残す山路の袖や宿の雪 經す歸りのほり侍るとて與行せしに 宮こにてのしる人駿河國迄はる~~琴下て幾程も

雪いつこ見ぬ山のみの朝かな

けれは興行侍しに れまとに根とし山としある人の宿所に行いたりに 甲斐のしらねはさ夜の山なとよりとそ常は見侍つ

うたふ夜や星も曉松のしも 雪の宿雲ねに見えし麓かな 神樂の心を千句に

早梅の心を

またてさけさかはたか春梅の花 雪に春入江のとけし梅のは

おしむとは春にしらせし年の暮 さかは春またるとをしれ梅の花

まほしくて。人のいひおもはん雫をはおもはさる物なる 等のはゝかりもありぬへけれと。らし其露にたにかゝら 入つれは。もとのは二三百句には過さらんかし。老葉下草 自然務かつはなをし候へは。くはへなと心をやる毎にせ 雪中のつれくのあまりに。四季戀雜とわけ並て侍るを。 とき。共國に有人恩句を書あつめたりしとて見せしむ。 はれて住侍し。文龜のはしめ秋長月の暮とふらひ龍下し 此一册は宗祇古人越後國守護戸部に八十の殘生をやしな しを。さらはねもなき事になすらへて。壁草といはむとい へは。さもや有へからんとての年の明日けふまてのを書

+

卷 第 [4]

續 群書類從卷第四百九十

永仙句集

速歌部廿

(右舊本闕)

千十二

## 荒木田守武句集

第一

長閑なる風ふくろふに山見えてわれも~~のからすらくひす飛梅やよろ~~しくも神の春

目もとすさまし月のとつかけるらんながほの花のしけ」やつほるらんに乗りて

かたつふりかとゆふくれの空むら雨の跡につなける馬の角

梢よりきてこそほゆれ犬さくら何やらんふみつふしたるおとはして

守 武

をほ姫やあはれ打出さけふらん人はさら~、かすかのゝはるさに姫やあはれ打出さけふらん人はさら~、かすかのゝはるさにらをや若紫のすりとろもも待ちもしにれとくはしやらけう少しくれ親孝行の雲井にてみれのあらしのろんとふく摩みれのあらしのろんとふく摩みれのあらしのろんとふく摩むかにふたつのとゝろほそかる七夜といふもいまの事なり七夜といふもいまの事なり

范木田守武句集

卷

第

四百九十

賀茂のけいはに袖はぬれけり

集

四

まめ男空打詠こゑ~に 節分や寺にも物をいはふらん 白旗をふるひ立られなひけられ 籍火にいつみもちる」夜半ならて くろちくの筆にてかける文もうし 下葉ちるなりひら人やなかむらん 十三夜とや月をいふらん 雪にせかきは らの毛ほとたに心ありてよ しらくしくそ余所にしらる」 おしてふくなり森の木からし おくひやうろふはみねの大しやう はらの鬼もそとへとひやうち いましはしまて ふりて

於

のふれは錐さへ笠をきて

忍ふるや花のみやこにはけぬらん

はさくら戸に袖なぬらしそ

奉公のひまもあれかし秋の

山

鹿のねちかきつゝらくし

女房たちを鳥羽のとひ塚

句へとも誰もた」香やなかるらん 楊貴妃のほ」ほとくしと打た」き 日本にほと」きす鳴こゑはして すへるなといひたにあへすすへりきて ひけ僧と鯨 のそかる」こともありしを命にて うかれつム現水にやぬらすらむ 人はたゝゆめまほろしのつえ鱧 薬にていたつらものをなをさはや ちきりしを物にたとへはことし竹 とにもかくにもあふらなりけり 身さへまれになれる此しろ 懐がもか」す物おもふくれ あさましくこそとくはかるなれ たらの御門やくねな」るらん ことくしかる夏のゆふくれ 人なとさのみふしやなるらむ かれはしすな山 しの火にてそよくあふるへき ねをおこすほうらいの島 驚いかにさひ は いつくかはるら かけの応 しからまし

けぶの日もやう ( なれやいかゝせん ならさゝりける事のせうし

都の雨にするまさるのみ へれはとり屋のへふけとやおもふらん くれはとり屋のへふけとやおもふらん

月と浪爰をはれとやゆふあらしくそくをみれは瀧のしら糸

もの」ふの音羽のかたに立よりて

碧なととを山とりにかはるらん

きらりとみゆる春の夕くれ けふにあふ子日のまつもかすかにて

腐かねやめつきをさしてかへるらん

誰となく地藏をとなへ旅立てからく、なれや道のくのすゑ

松の葉こしにしやうしする比極の人とみしよりこひをし文字にて関のわつらひはことのはもなし関のおなとてや送るらん

たの話にこれにこうのへはついたの話にこれともこひしかりけりを附日百日はかりうつろひて

をたまきをあふりては又くり返しひえなん事もしつはしらすや柴の庵なときはたをものみぬらん

ひやうしをうちて見るはむらさききりはたり長命丸や合すらん

横何 第二

水鳥のけさせちことにうかひきて氷打とけよするたし浪

水島のけさせちことにらかひきていかなりし目も打おかすつかはれていかなりし目も打おかすかがいかなせん小刀とてもあさくおもぶないかなせん。

武

集

卷第四

朝もよひ木丸殿のまろ!~と 月影は誰か小者めを送るらん 望入の道のほとりの花す」き 雪たまりかきなてかみや挑ふらん ひつこめと川風さむみ日はくれて 霞つくかける 双昏やゆかむらん ときもせぬ鑓をや供のかつくらん あまりにも翁のゑほし前へきて いとけなき人のかほこそまもらるれ しろくと庭島おほき花にきて 引手物もやほ 気合よともおもひめる春 **徳利をもたせ秋風そふく** あふらはなきか山さくらかり らしろをみれはさひわたりけり ひたいにゆふはちはやふるかみ たち花なりのちきりもやせん ほのかをしてもかとなったてそ けつりはすとも爪な」きりそ つきん大にちとりなく壁 人しらさらは名をもなかさし のか ならまし

藤の花さけるは定家かつらにて 求聞持やまへかんなにてくりぬらん 程もなくけふはひつしの檜木いた 忍ふにはおもてをさらにむけされ 見物にみな後の世やねかふらん 富士の根はとうちんからを慥にて おさひやかみかたかれと手向まし しら取のねやすほとをや秋の暮 みとり子や餅もおやもあまるらん さもあらはあかなん春の十五日 係もみえぬはふるきみやこにて 招も なむ こくらそうにはまけやこもれり 大かりけりちいさかりけり くるは はひかゝりては哥をよむなり あふなき事もしらぬ道なり たゝみもかなのむかしなりけり みからしもへかこつ道の邊 行さくらうつろへるころ しろき事きくはよしあし あみ笠をきぬ人もなし せにける頃は正 月 do

雨くらくくとさ月つきおらたうの鳩の杖をつきてやかよふらん

雑書箱くすり箱ともなり果て

やまとにはあらぬ老僧の道

猿樂はいつを晦日とおもふらん

まくりを詠めこよみをも見す

百萬やすみた川原をわたるらん せいろうのうらそことなくするみきて くろくもあらぬ山らはのいろ 物くるひとそあまた見えぬれ

**霜月の廿四日の風をあらみ** 口ひるにもとより袖はあかくして 小豆かゆをやうちこほすらん

寒けれは物しりかほの旅ならて 道虚日にも雪はふりけり

飛鳥川淵は樹むしの夕わたり けふの道やはむなそりなまし

山吹の花そめころもかきあけて 株吹ころはも」も見えつ」 ふまんとおもふかはつなく聲

古寺は何のわけなく打見えて

つゝみはあれとしらぬ大小

姫ゆりのなと鬼ゆりに成ぬらん

いたひけなるはおそろしき比

庭こそあらめ罪なつくりそ

沢には刀のはまてこほれ落

戀草は見えすなにやらむらくと

もひきれともきられさりけり

すきのまなれと春のふるさと

みよしのム茶のむの順やかへるらん

橋わたるなりはしほなく打詠め

高野ひしりのきたるかさゝき

花咲山にのとはかはかし

有明の月はいかにもひらくして

しくれてくるそ露かたまるそ

三日月もたらいもわる」夕にて 西王母いか斗りかはかゆからん 湯をもあひさる秋はきにけり

花さかりきのふかけふのきりくす や」となき姿とてあかたふきて 時うつるなりいかほともなけ ひしやもんたらは露のよもきふ

千十七

山里やさひしかるらん中つかさしつまりたまへみねの松かせれにいま月とこと」か出あひて行躍とこと」か出あひて行躍とこと」か出あひてではいまりとことがなみのませはや一たひもぬるむ水なみのませはや一見かららをかへるくちなはくひ玉をまきるの松や殘るらんあられ打ちりしやらしする比断毛 第三

何毛 第三 相よりも鼻にありける匂ひかな 月はおほろにふくるゐのしゝ 赤の夜の夢やさなから牛ならん けさのあさけはきえかゝるなり でけさのあさけはきえかゝるなりて こゝろのまゝのすゝめならすや ニーや酒をはたちも發すらん

吉坦にか→る瓜さねほのみえてかけ回つ後はひとつやくを見よかすは五臓の餐生のためかすは五臓の餐生のため

本過て夏めにけさやなりねらん なかへしてくすりせんしよ を過て夏めにけさやなりねらん を過て夏めにけさやなりねらん をかと月にさし出す暮 なかへしてくすりせんしよ

を はって とこそをくりかねぬれ たっれにけりな卯のはなのかけ エ川やすりこすらる」なかれにて たかの」おくはなをからや 優いつかまてその曉のしるからん

はりことにくりことするは 手ならひはなとあまさかる物なれ なとよふに六百貨やまけ IT. U せんのかすさへあれはなりけ K きりとふしはらき大は かりなんとやく なのなかちにその若子たち 御こひしやとかさ拾 V) んに 6 14 2 のか B け P

佛をはつくりもあへす露見えて

やかてまいらん秋風そふく

をよろこふをなかめさらめや をよろこふをなかめさらめや をいねかての夜半のせらふうさえ (ていれかての夜半のせらふうさえ (ていれかの) にはとうはか竹やなりぬらん 花の會とてつくすからもの

帯をいまとかんととこそうれしけれ かきたえ後は中もよき比 一門にひとりもかゆきかたはなし かさのなをるは平家なりけり

あちきなやつれていつくもなかるらん哀にも枕のさきはちよつとして

都をはいさしら雲のくたり月 いんきんも舟のうちには無用にて たひ人はたゝうたひなりけり

大はなにとておあししやうくはん 歩よりも馬をかへとや告ぬらん

能をたゝすへきもあしのたらはこそ能をたゝすへきもあしのたらはこそちいさくてうすくて結句空ありて

しほかまの機鯛をやつくるらん おもてのきすもつかぬたひ人 おもてのきすもつかぬたひ人

たち花てらもからちなりけり いとゝみしかくおもひあこかれ 山たちのほうつき鐘はさひ果て

正月の柑子くりけの伊駒やま一覧のさとへせちすゆるころが外子をは野への胡蝶につっませてりめく、あたにあらししやうくわんりめく、あたにあらししやうくわんりのできません。

千十九

第

荻はらや風のはやるもしつまりて 月出て狸や浪をはしるらん 大なる耳とてさのみかこちなよ 報こそいかにもいたき物ならめ 貝ふくや南の海にきこゆらん 哀にも紫すみ繪かきくらし るのこにもあら的いぬこもおこりきて おもしろや目のしやら迄もつよくして いとけなき人は車のしちのさき くすりもいらぬ秋のゆふくれ うききと見るは道理なりけり 行もゆかれぬ道はころく めくりもあへすはやはちなり おそろしきには何かららみん とくせいやりのたつるふたらく 窓にせめてはなるないりあひ ともあらの小萩せらき大臣 あへの」はらはきはたのみなり ける身なれは果報あらめや とうたれにけるを破にて

こかねなとまつむしほともみえさらん

驚のむすめかなかぬほとゝきす 月の夜にたかれてぬれは匂ひきて そなたへも又となたへもいひくに 玉つさをなとなかくとつょくらん 花の春紅葉の秋のも」のさね おんやらに拾れぬるも人に似て 旅衣つまにせんかた十二三 山里のたのみはいかてにほふらん 人のた」さすへき物は竹かたな くしひきのさんをゝくにもたゝならて おくひゃらならは千代もへぬへし としのあたりにふしをあらする まいらせ候やまいらせ候や うつりかはりて猿とこそなれ 権卵の花はそたちきにけり 姉何 第四 おやすからある秋風 かみすちほともちかはさりけり あひしやら文のことつてもかな みやこお、、、にあはさるへき よまれもやらすうたてかりけり の比 卷

秘佛とてひするに誰かまいるらん かんたらをらつかときけはから衣 秋風やたム入道と吹ぬらむ 目鼻をついむことのせらしさ とよひの月はくまさかもなし 名をはなにともさためさる比

**竹もまふたもおほひぬる門 雪に鳴ちとりとやらかかすかにて**  きの國やいろはもしるく見えわたり

けさあさもよひもよほしならへ

座頭へとこせのもとより文のきてかきぬるも人よみぬるも人

信ろりと目よりなみた落けり なむからたのうとらのかはとやなむからたのうとらのかはとや

高砂のうはかふところしめりきて茶はひかれすよすみよしの里

花をめころもさらはにほふなのゝこんと谿めいしんやおもふらん

本あふるなといさめぬる摩 特がはあれか小路のいもとにて は見えけり

上まかにくとき邪答のする 小袖も帶もみなおろさまし はたかにやならんと斗おもふらん

庭島は水難くゐなは庭とりにくりことや五茶あたりの物ならんくりことや五茶あたりの物ならん

なにとかさためひよくの摩

千二十一

長からすさらは山のは丸からて

移ぶかとおもぶや花のいろこかた そこに她のすむ岸の山吹 性にはなにとてつのゝなかるらん 父のためにはこゝろおるゝか しやうふんはうけとりぬるもうらみにて 葛はふ岡の山田一たん 着はふ岡の山田一たん

秋風に誰たのしくもなるこ縄 特才天に月のさやけき ・ としなみしるく經をこそよめ としなみしるく經をこそよめ としなみしるく經をこそよめ

で世とてこひにすきこときかした♪ なみたのうくれ傳そあるへき 旅衣たち残したる布を見て

吉日や出てもくるゝかけならん
吉日や出てもくるゝかけならん
・無のめはかんろの水の冷しき

ともすればくひつくことをとりとにからすとてうらくおもはむ物ならてからすとてうらくおもはむ物ならてあま然なれとあまくあらひやおまだなれとあまべたできみわらびみ我朝もしけりへたつる柳かけ

松風は紀のありつねか夕にてあぶるに似たるもろいなりけりあいまなや何ゆへいたうこかるらんもすめをつるゝけふの舟道

吉野山くたるそしるきやよ彌生花のちるをやつらゆきもみん

戀せしと何もいはすや成ねらん。一役にしのふ宿のむらく

車なるかなまなこなるかな の放川原をすくる會ト僧

勤進や月日も遠く成ぬらん にしはるかなる一はんの比 しちやうにかくるさの 4 舟橋 しちやうにかくるさの 4 舟橋 谷

夕されは野への重賢傳へはや

孫に見えたる道のかへるさ

日の本にいこくのえひす鼻をひて

人になとからやく狐つきぬらん

のくるものかすはくもはかれす

風ひくといひ犬なりといひ

ふところのみやけの熟柿いか」せん

はるく、きつ」むねつふすなり

ひんひけの色は罷染さくらにて さねもりなれや深草の里

現箱をや花の手まくら

何とてか春にはかとのなかるらん 世をおさめぬることろうつく

紫の色にはんれいさそはれ

非をうてはしやうしさせんの言葉に こうなりなすひちきりてやみ

佐夜姫のふとるや月よみえぬ ひれありけるそをき所なき らん

年こゆる時はくれともいけとられ

むね打かすみ行かたそなき

しけひら貝をふかれぬるなり

花ふさをちふさなりとやおもふらん

こすゑ詠むるなりはいたいけ

玉くしけまたかたふたはあけやらて

ほたるともし火かきもかきたて

給あはせは十二のほねの扇かな

表紙もふるくなる家加 第五

ちからをいたすほしあひのかけ

すまふをは草の露より殆とりて まつ一はんに秋風そふく

見るにた」とはる姿はらるさきに

かれたる木をもたったけやたけ

風呂に入千壽のまへはかゆくして

夏衣いかにもらすく織たて」 昨日かもらへし岡邊の田代殿 かろくしくも山ほと」きす

からかいは人のとるへき物ならて けふははや花もきり」と押ひらき 春はつま戸のことくなりけり よしさもあらはあれなあからね つまてにきりつむるわらひ手

日は 手糾をもか 錦にはにしいかはかりまかふらん 朝ほらけおさ舟とをく漕出て 柱へもとりつきぬへき道のへに 極樂はにしへかたふくひもしらて けふは又とらやくしとやおもふらん 目きょこそ大かたならぬみやとか きるといふ事をいは的は都に 百首にやはらとりそふる中ならん へらたんをみれは山からなまつにて 旅と太刀との行ゑしられす らきこひ草のねまてほり川 それもからもの是もから物 あまのたつるは波とはた物 らちわられては 佛も人をくはれなはらし やとるなりけりすへるなりけ 郎殿そしほをたいる」 ひるになるを狩場におとろきぬ れかましきといふもいつまて へいつるはいかめしく見ゆ らすはかまはほころひて よみちのみとる 12

暖の 能 花に風猿はらつほの世中 誰からへもちゃのこといへはたのしみて 物かたりするはきかすときかすにて 朝なく一手をむなしらし慣にて 松立るみれのあらしの福の神 おもはすもはちかくらくの初潮 そたて」は能をつけんの焦子に いつまてか梅のさねにはまかはまし はたゝ口のうちにもありとしれ 大事はさてももらすへきかは 春のあはれやらしにつけまし この山てらはせらしにもなし やまとに一の名をもあけは 天下太平國土あ 夜なかなりとておめきあ 月にむら雲庭島にみつ すゝしき月を手ならひにせん 人のこゝろをかみくたかは 舌つゝみをやらちならすら 秋しくれよなあはれ とかにいつからけもとるへき ん恩 カン ic U H たて 1)

「大祭」 おもひ人忍ふの山のおくはにて またよひの月やてらされかぬるらん とムろ ( ) の雨はとをさし といぬる雲もしふくりにけり といぬる雲もしふくりにけり といぬる雲もしふくりにけり

うかれこゝろにたひもたまらしたを空になす斗にもすへかね 神代もさこそきるゝあかゝり かねに炭やくひいたけのへら みねに炭やくひいたけのへら 我かとひや十三そくにあまるらん

自のおくなるものA大きさ 鳥は古巢花はねふとにかへりきて

はしふきわたす秋風もかなかさゝきやけふ久かたのあまの川

正月の一日のゆめにとひを見て 誰をかもしる人にせんさかなにて 法花經やおほへすまして忘るらん 常夏の花に文珠の立ならひ 目貫よりまつ山の井をほりもせて 墨そめと余所にわひぬる色をしれ 数冬のさけはせんほうはしまりて 鼻そけや世をうくひすとおもふらん 雪はた」なにとふるともたまるらん 松杉はここか柳は移ひて やうしんのけふはいかにも吹風 山ふしにもやことしならまし 花にわすかな人のいつしん ぬふてふかさもさきはときけり 行てとは」や山里のなか けつり物にはたこ砂の松 くろの道よりほかはなきかや 妙に利根にりこんならすよ 日かけもあつきし、二正つれ かしましきかな春のふる寺 しろかねさいく水もむすはす

後芽生に風にひきたるめのくすり 盗人にあひぬる坊主恭をとめて 里とをみ夫婦ねて行夕かすみ さ」らははらむ山田をなて」みん 物さひしくもくまぬなりけり 子をはいつくに岡のへの松 なとかは貝をあはせさりけり 衣ももたすらつこともなし からすに似つ」たのもしき春

草枕おそろしき風のふく摩に 世をおさめ民のおとなや詠らん 信濃なる淺間のたけはらつほにて 大弓いるはもとの事 かのあらの」くさやはくらむ まとのけふはたつはおもしろ るくもあらすあつくも なり あらす

つくあはれたも

つや

いなやにて

人かけに春 よきほとに酒やわかして出すらん のうちにとうは の館ともおとろきて いり ń IJ

忍ひ

に花をさすころ

風呂に人いりてはあかをかきつはた 津の図のさそくなりひわたるらん ひゆるなとくりてかけははかけとめよ 日大きに口ひろくしてしやくまきて 見ぬ中は見たき物にもあるなれや すちにすくなりけるを雲非にて 鬼かと みやこほとりのたしなみの色 やせたる人のことは 布引よりもおつる空たき つれはあふた八は いはゝいひてきかせん しの た」かひ 7k

天日のはたより角をふりたてく **準生る宿は** 玉手箱さ」まくほし ふる双桁をはいつちさためん たゝきりとこそおもひやらるれ けさはらすはふたつならめ からとち大和とち 1 18 もふ世に op

1

久かたのあまつ乙女のはなのさき

をよはすなからあふらぬらは

ch

今さらになとほうけ

んのさやまつ しめされ

計はぬくともおほ

す

卷

辨優やはちのあるともしらさらん きれくになりぬることはあはれにて いけにへのあたりにするやしとならん らそをもふかすけなけなる比 むさしをさすと見ゆるなりけり くわんたいなりとけんくわ出にき 她は人をのみ人はちやをのみ

よはひをもさつけぬるとて油節すな 月なみや末の松山越ぬらん あたしこ」ろをもちにけるかな

そくろにはなるもはかなく太刀はきて

天神さこそつらきみちのく

白かるも見えてあか」る下はらに 川をわたれは鶴とたらかめ

衣をやいまむまる」にきせぬらん はなのあたりのなりはこひたり いつれ手染の糸のへそのを

誰となく一たひゑめはもゝちとり ひまのみ見えてはかすみの山

楊枝をやかみをやけつり捨ぬらん なにもたまらすとんせいの後

> 我宿はた」龍宮の秋のくれ 物きれの五郎入道ときたて」 月にかけんもやすきしら浪

國々をからへてかけやまはるらん らのは吹获吹風もしつまりて きひのかすくいみゆるたんしやく とよ玉姫や萩のした露 はらのくすりときくをたつねよ

ちやうしくときこえてとまることもなし なにくとた」のりと今行あひて くわんしんちゃらをよみ人しらす かねやうつらんはくちらつらん

おや十代の跡の夕暮 刀何 第七

夏ぬリは正體なしの刀にて

のひあかりみれともみえぬ足もとに 狼にかへまくほしき塵鳴て 錦かとあさめにほそき小萩かな くひのあたりのくる」山かけ さこそは月のやとる水かき もみちおりたくふるみやの比

卷

嶺のみか山も尾なかき里とをみ 地獄へは打くもりてや路ぬらん 時雨ふる壁とをくにおとろきて 山里はいとことうしや送るらん 花一木せいからさんに咲そめて 花のかけいくたひ水をのみならん 小町とふ四位のせらしやら狸に 去年よりも今年は腰はか」みにて をしへつ」七種なつな打た」き 灸をするかたはやかてや家作 草刈やのと笛吹て きつねに似たるもの」かよひ よはひの末そときみかくへき 棋の下葉に罪つくるとろ あはれなりけりしつかおはのは たうとの鳥のさえつれる座 つほところをもおもふこゝろか なかくし口もくる」番匠 他人よりなほ物そさひしき つまて杖をつかんとすらん ムよもおなし丸ねまろやき か へるらん

せんしてものまん大とくゑひすにて 侘ぬるやとにもかくにもにかるらん 世をいとふ人ははりまつおもひきて 灰焼の物はいかにもかすかにて 砚まて若紫のまとのまへ 長閑なるつ」らのふたの朝ほらけ 深草に連歌の初心あつまりて 河原とはいへといしなこなき物を 水にすむ月と詠とをとりくに わらふにも腹た」ぬこそ上手なれ くろかる色はあるやなしやと うちくもりにて春のとを山 たかとむすめの身をこほたす 頂すさましくなにおとりけ 猿もくすしをすると見えたり いさやふし見のたけくらへせん ぬはんきけんもせぬとけ衣 ふくりをみれは 称も身にしむゆひをおるなり きとくまてにはたのしからすや おもしろき事きくはよしあし おほはらの 1

夕ま暮かららからそは物ならす

せをわたる道やつらくもしらさらん

めをといさかひたりかへる摩

ゆめのうきはし又はまなはし

枕より跡よりこひと鮒かきて

武士やへいをぬるにもすゝむらん

よろひの袖にとても見えけり

せめくる事は何をきらはす

すきまなくあらさるをたゝあるにして

は乗のかすや暦にしらるらむ くわんせこんはるこんかふふにちかならすも薪の比は手向して りふかほまでもつくるなりけり 世中は長柄の橋とふくへにて さんせうことにむせわたらはやからふりのす物かたりのつれ(という)はやしたりはやたらはやしき事はけんふくにありまたしたのもかならにありまたしき事はけんふくにあり

大かたにす」きはらはん物ならて 花よりもこなたのこみそたまり水 あまり月しろくとして人こひし 我宿のきょやらかるかやおみなへし 今やらかよしとそおもひあはせきて 道のへの刀をみれはあふひにて 足引の山やかつけをさそふらん 聴のもしほとかやかみたれあひ あはちかたかよふ千鳥の耳とにて ほとゝきすなくはなんたやこほるらん こなたかなたをやかんとそする 葬ね行こそとふはかりなれ いく夜ねさめを須磨のせきしやう 容にあはひは身をやなけまし 打なかむれはみくさにほ あかにむもる」みな月のかけ 籬のきくの花なゝさきそ もとの事をはき」たくもなし ひろへることはいつわすらめや 夏きにけりとほうも見えけり 図とをくにさこそきへぬ へり

千二十九

句集

かへるをや辨才天ののみぬらん

土用にや耳のあなをもほらさらんやめぬるまゝにつょく八尊
いつとなく物しりかほはひもやらす
うるしに似たる僧のかたことなむやくしぬりくわら如來唱へきてなけれくすりもいらしとそおもふあちきなくちいさかりけるからはこに目に見へぬなりめをかけぬ也金をは鬼ももたすやなりめをかけぬ也あたちかはらのくろつかの太万電相何 第八 (ve)

めてたけとも涙落けり (元成果) 花月とは はるかるも行へきやはにおほゆらんもすそかきあけつくくと見る あしたつや耳のあたりを過さらん さらは人雨あしなからこいならて 打しめりさたまらぬこそ空ならめ 都にもはやるは笠のしらくにて いかにせんあんけつのたらの一はし ゆみもちなからとひんはつかし 歌をはさらによまぬゑの島 水らちなかれなくはかりなり いそくとならはおちぬへきくら ふとくあらすやほそくあらすや 雨はふりつゝつまるともなし いつれは山たちにあふ いへとはけつと成はて」

玉のをや十いろはたいろひろくらんなかいきするは手にそしらるゝ君か代は鼻毛ぬくへき物ならて

月花にうかれし宿へはい入て

神無月起請のさたもしくるらん

木の葉打ちる比のやきいし

物のうするはやさしくもなし

竹よりも猫つれなさはひさのふし

そよやあちこちかけまはりけり

響むしゆるす手綱やなかるらん

ふんはりはつかりのこる

田守武句集

卷

歌をこそよみて心の丸からめ

筆はなきかやもの」ふのみち

鏡にて見よやくへのはてもなしくちのうちにも入は山ぶしくちのうちにも入は山ぶしいか斗かはわかくなるらん

たひに出てのかわこからうとにしへきぬるは衣をもきすにしへきぬるは衣をもきすせいしかと夜さむの窓をおし開き

ありあけの月ののこる朝 秋風にけはなけれとも詠して

むさし野よりもなを大ひたい

まさこにたてる松のふくりやらのふし見よ人の母この出られて大わたほうしふるはれにけり大わたほうしふるはれにけり

安治川をわたるするすみ油烟にているこき袖やきせんなるらんおられてやくんしゆの中の櫻花春の日くらしおされぬるのみ春の日くらしおされぬるのみ

釣さほは何をつるともおもほへすがほの二てうのきさきこひ初てからなりぬるをとかにさらるな

いんやうの神もありけるともし火に

ほうさきのみかへにさきもうしいと」たにかほのあか」る人なれやかやのうちにはなをや飛らん

けふもとはれすこゝろまう~、渓こそはれやかになき物ならめ

本のめには出るもいるもよしあらす

さきほのく~とさへかへるころ

第

九 +

苫のやのひしくるほとにぬるもうし 花にたゝかくるはちらしくすりにて 春の夜にからやくなくはいか」せん 年の葬錢もつ人のととのは 子ともみなかたひらきるとおもははや おのこかとかきあけみれは姫小松 りらならや沖のかもめのさしつらん あつもりの尺八いかに吹ぬらん 里遠き青葉の竹の一かつき 埋火のはいたてのみはかひもなし 街はいふにもをよはさりけり 雲のうちにやきつて出らん あそひの道はらすくならすよ 月は とゝろはやみにこゝろはやにゝ 吹風まても打ひらめな しくれふるとも雪はふるとも しほのらわひか又はそこひか ひへーへとしてむれたちにけり はらめてをせよ年 くり返してやかみにつゝまん おほろに人のはれも 0 くれ かた 0 K

驚の壁やふたつにきこゆらん ほのくともみに紅葉のちるをみて こほりねと水ひきとつる懐紙か うつの山らつは狸のつゝみにて 念佛やひかしの空の竹ならん しやくまきてのむへき物はくろ薬 ひたすらにしゃうことしるはいかなれや こよひはや時は牛若更はてム いひしめて又いひしめてほのく とゝたにさとうまかひのつゝつさの 移はさいらをするかかなりけり 花の木すゑのほそきひよとり きりよりほそき冬の日のかけ こせにはけたる荒の下道 しの」めあくるきやらにんのけさ しやらくまひの目まてまふらん あかき色こそとくと見へぬ よはひのおほろ月にひか耳 しやうなりかたれともし火の本 たんしやくかくにひわなゝなひさそ 京何 第九 れ 72

守 武 旬 集 若菜摘生田の小野の小町にて

かちあればにけくりもあり
(くり風景) あふなくも打わたしたるはしか」り さひしくもさそ物おもふとの引出物 食籠のふたは何ゆへあけぬらん 留主にをきしは小見ならすや 月にこゝろをしかとさため

暮るまてつまりぬるこそかなしけれ 長夜はいくね覺せんねつきせん かたえさすおふのうらはのなしちにて 箱のふたとはなりもならすも もめへいらす月はとをやま くたひとなくはなはたゝりし 千早振翁をいさやのこはまし

紙一てらにあふき一ほん

戀路にも霞こめたる里のまへ 雪の暮女若衆の替ねきて 春もそとはもたつ森のかけ なりひらひまやなく侍らん 火によくあふれ前ようしろよ

> 入あひはめやきかねにやなりぬらん 夏狩にいられぬるこそいたからめ わらわへの なをありかたくきこえきへけり カン かゆさもなをるゆふくれの空 まてしはしとはらは のこまたらよか 出るや雪の朝ほらけ のこおとりよ かことの は

耳はさもあらはと人やしらるらん 七日けふあひもゑひらの様ほうし あくはた」ところのうちに打すて 六十斗をくるなりけ 源太いつまてしやしするら といたけれと名をやあけまし

花はいく門をたて」やみへぬらん 日の影もなかくしきは源氏にて さくらかもとのせいめいか判 Щ くと蘇民将來村やらて とりの尾の春のこか ムみ

人はたる否匠かいやたのむらん 狼のそこにも家つくるなり たいのあたりはしろく見へける

ねれ

句集

さのみにはよしたしなましとやさのみにはよしたしなましとやさのみにはよしたしなましとやいたいよほうよ又はおとかい世中にけぬきのなくはいかゝせんとれ第一のれらしなりけりくればやはしまりぬれと人はとてくせとてなにもおもしろからすくればまよひこれはあまくやきとゆらんたゝのまんちうさたうまんちうんたゝのまんちうさたうまんちういつかほうしのうかひ出まし

**伦事をするは田舎の朝ゆふに** 一やふのすみへもおもひやりにき やふのすみへもおもひやりにき としたとしれ

中の子の足やたなはた爪ならん 月にまけてもしつを見ましや 木のほりとなりて梢は移ひて さかさまなるはこひちなりけり いくたひか君かかたへはよはるらん たのむのかりをむしる春秋

ほとゝきす鳴はなんたやこほるらん春はたゝ僧とひくにをこきませて柳櫻の寺はあちきれ

夜半またくらうさこそひまなき

佛にも手向る物は花しやくろ

たはしといふ身こそおほけ

ħ

櫻花なと光臨をしらさらん

妹にとひ文かく器はみしかくて

寸はかりありといは」や

みやこのかたへ手をすりにけり

卷

山里と人はいへとも悲をうちて

みやこ出てもさかりさりけり

矢はいと」まれなる物とさはらめや

はねにや花のちりかわるらん

もしほより猶たれぬるや跡ならん

くたひとのとふゆきひら

松のおほさよはまのおほさよ

雪まなき比はたれにもきらはれて 進上とたよりの文や送るらん しやらくはんをこそして見るへけれ

今いくかありてか花ははち開 家ととにいる春のさむけさ あつき事をはいはしたとへし き

夏の日のかけにたしなむ程みえて こかねつくりの太刀のそらこや

凉むとて忍ふになにのおしからん 門のうちへはひとりましませ

福の神ひんほうかみを伴ひて なと大こくをかたらはぬそや

赤人はこうたをさへやしらるらん

さかもりになる山の邊の里

うそをいふかとおもひぬる春

篙のあかきかあると告られて

むら雨もまたひぬおかはよけてきて

露のふかさよあしのはやさよ

ね覺する秋の枕のかたつふり

鹿かとはかりつのゝあかつき

あしつ」のらすきを月ややふるらん

から笠やた」え鏡のけさの雪

墨何 第十

氷もいくへあつかみのいろ

判官はさいくをつれて忍はれて

小刀にてやつくり山ふし

太皷には月毛の駒やはきつらん 甲子にふりつることよ雨のくれ らつてこそけにさやかなりけれ 慈悲をか」るははかなかりけり

あたけなく觀音いらふ人見えて 十八日の松風の摩

凉しやと豐後の國にくたるらん わつらひならぬたひは憂也

はなむけをほたるはかりも送りきて

+ 荒 木 田 守 武 句 集

集

九

のあるはひかりこそすれ 四

あちきなく笠ふか きほうをやけふのゆみやに高らん 大臣はふなはたをたる枕にて 松に吹藤くしらとやおもふらん あひ引にひくは小櫻をとしにて おりにふれひつしはひさまつくとみて まはらやとおもふころろはなには 夕暮の空打詠めなき不動 尋ねるは心みんとやおとすらん す」きとのとはたれかいはまし 南をみれは己かおとこ山 の中はきたのかたにもありとしれ はけしくつよく ねゐるなりけりく 浪にいるかはやすむころかか 春とはみれとこはくこそあれ ひはなちらすやかなしかるらん 佛さへたにこひをめさるよ 旅もゑほしをきちのとを山 のちはよしやあしの名残に 風のふくにも 人と紀 の関や いかた

さのみなと色このみとはいはるらん Щ 誰かきるしのたの森のくすはかま われてなと都を遠みおちぬらん 猫ちねの扇をいるはやしまにて 名をあけんとは何にもきしらめや 戀草はてんなんしやらになり果て ほのくらく物やはらかに浪のうへ 名をつかは鯛三郎やます五郎 しふかきのもとの人丸秋更て ふをいふはをしくつろけてよき物を のはにかしこまり入月見えて よしわすれんのけさのお情 秋のけしきやいとゝいんきん 月よむ歌やのとにつまらん おもひをもせよけきやらをもせよ ねすみの世なるいくさなりけ 袖ぬらせとやてつきいむらん あかしといへとあからまぬなり 刀にはたゝ庖丁をさせ つみへゆきてまりをける比 みにもあたる松のした道

卷

荒木田守武句

集

花さかはつけんも馬はねりつへし ひやむきに猶らとんけやまさるらん 舌をたれねふりにけりなこひの道 位こそ空にしらるれなくなとよ **嵐吹けふのまひ人飛つれて** そことなく手にもとられすかけ拾 都鳥はしとあしとはあかたにて 念佛はふしをあらせて申せた」 火箱とも見えぬ斗にこかれきて しやうりやうやとらふす野へに通らん すみたかはらのくすりなりけり 桐のはかなくなれる冬され くれ竹の葉のうらほんの比 又あふなきは露のいのちそ たまくしあふはあつくしとして つかひはきたり牛にくらをけ 日なかきころはしいとやいはん をみのころもに鶴のけころも なをふしどくやよるのかつらき ひらりく たひにしあれはうつくしきのみ の雪よあふきよ K)

梅そめはこぬ春まねてたもと哉追加

橋まても刀ぬくとや見へぬらん

れらしならすやいつく飛まし

みたれやきはの字治の柴舟

すみのましりの野へのほうひけ花の比つまれむしられいかゝせん

ひより鳴聲に大ちと打出

月やあらぬ春やむかしの針

ならぬ

つくとしならはかすまかさはや

秋風にきんやの里やはれぬ

わか身ひとつはもとのねふとそ

かり衣かいたらくたりやふれあひ

かたの」はらははせをなりけり

自拍子くろひやらしにやなりぬらん

日にてられつ」まひをこそまへ

しつからたひはつょくともなし

袖かへすさむきこしけのたゝならて

雪はらちちりあふなかりけ

手にすって行はましろのたかあした

れいもせられぬさいこ中しやう

千三十七

句集

百

千三十八

山伏のこしにつけたる朝ほらけいかなるかたへとをる文はこいかなるかたへとをる文はこさいはつるにもりこんなれかししんほちはいふ事さかす寺ふりてもかんきんやらしろさむくておとまふしょかにしにあたるはことし大屋へほしにあたるはことし大屋へ

大伴のくるぬし色の鵜をすへて横川にたてる志賀の明神

月すゑはゆかみすちらす

水ぬるむ出家とゝろよまてしはしが何のくとめしぞの東をすって

しつた太子の過る春の野

ちらはをみれはほうもはれたりおもかけや輸此里にはやるらむひはり毛のとんてい駒に打派で

あまのかる漢にすむのみかむしくいは

殿原やもろこしまてもきこゆらん山風のはけしくきふくならひきで山風のはけしくきふくならひきで

もゝたちをとりて古郷にかへりきてにしきにまさるけふのこはかま

天文九年しくれふるころ

さかきりなく。大形千句は三日なれは。これはわつか二日にことにて。あはれ二をりよと念しけれは二をりぬ。ありかたとるへきに。一ならは本より。二ならは誹諧のあらましかたく過しけるも徨おそろしく。いかゝはせんのあまりに。御右の誹諧は。そのかみ獨吟千句立願ありけれと打紛。又は成右の誹諧は。

のみなれと。あまたの中なれはらすくこく打ませけり。扨はいはせる俗言。私ひれたるこゝろ詞。一向ほうほつうつゝなき事はせさらは此のたひはかり心にまかせんと。 所にいひならむ、けれ。定めはそれを用へきとの。 されたる返事くたりぬ。

おりふしにやありけん。周桂かたへ此道の式目いまた見す。都

かのへさるには二百韵にて五日につ」りぬ。

その

おもひのほかになかひき。夜はね覺かちに

もよほ

もたらさらんに。

集

されとも正風誰人の耳にも入ましきに。いさゝかもきこへん くみたしたき初一念斗に。春秋二句むすひたる所もあるへし。 へ風流にして。しかも一句たゝしく。扨おかしくあらんやら いとて見たりにし人にわらはせんと斗は如何。 はからさるさいはいならんや。其上粉骨妙句なきにしも 代々の好士のをしへ也。此千句はそれをもとちめす。と 花質をそな

出る物ならし。扨古來稀れなるとくきん千句成就。松の葉の正り。追加五十韵おほけれと。祇公三鳥にて千句二折をおもひて上。宗鑑よりたひく、發句なとくたし侍り。ちかくは宗牧一二上の宗鑑よりたひく、發句なとくたし侍り。ちかくは宗牧一二上の宗鑑よりたひく、殺句なとりめを見せむに入に一はしをわよほし。 庭島からつほなるとゆめを見せむに入に一はしをわ

荒木田守農石集科神路山

木のかつら日出たくや侍らん。

載のこのみにて心ものひ他念なきとて。長座にはかならすも

本歌連歌に露かはるへからす。大事ならんか。されは兼

んも執心いかゝ也。しかるに誹諧何にてもなき跡なしことゝ。あらす。またさしあひも時代によるへきにや。しいてなをさ

このまさるかたのことくさなれと。何か又よの中それならん

卷第四百九十二

續群書類從卷第四百九十二

連歌部廿二

贈從三位元就卿句集

元就炯詠艸〕 一元就炯詠艸〕

安宅冬康句集

## 連歌部廿三

梵灯庵主返答書上 物に付て。詞をもふけ心をも得待るやうにおほへしかは。 むかし敷寄の輩に立交し比は。友にいさなはる、事も侍き。 んはかりをと。 かれて後は。なに事もた」耳のよそにおもひ侍に。 交もいとはしからす。數寄の心も甚しきなるへし。 我も興に悪して人を誘引する事も侍き。 の題目。いつれか分明にその心をしらん。されとも覺悟のふ 一卷を披見仕にそ俄におとろかる」心地し侍る。さまく あなかちにいなひかたくうけ給程に。 其比はみるも いま比 世をの

の開

とりとせり。それはさもこそありつらめとも。慥に是をしら 抑連歌と云事は。女神男神のふたりして唱給ける神詠をお 素盞鳥の尊のいつもやへかきの御歌よりそ。 あまねく

卷

第

四 百 カ +

梵 燈

庬

答

書

Ŀ

しるしつけ待るなり。

二筆

ため。 客の翫にてこそ侍るを。 かすをしらす。 後鳥羽上皇定家卿家隆卿なとに仰合られて。数を百韵 心得たる也。 りと心得侍はをかしき事也。或は伽洞或は竹蘭。皆月卿雲 のへ。人をあ 濟順覺なといふ門弟あまたあり。花の下紅葉の蔭に宴席を 上を出さりき。 て給はすとこそ承れ。共後爲家爲氏なと此道の勘能にて堂 **侍れとも。多くはみえす。是みな諸人のしれる處なり。** の付申たるよりそひろまれりける。代々の勅撰にも入ら 世にも申傳传る。日本武尊の莬玖波の御句に。火とほし人 法様なとを始てしるしをかれ。其比歌の道しれる人 せめて救濟。近來周阿等道の堪能にて。 つむる事あり。 爱に善門法師と云者あり。数寄の いつれの歌仙も雲上の流に連歌と云事をす 地下へ下れりとい 知さる人連歌は地下の るる は。 30 大略 れ な

称

風 3 \$3 3 人多 · ~ カン 諷 ŋ き。 諫する Ą ほ は との 彼 阿 達 人 もなし。 者も 侍 ね は。 を博 燗 12 1: 0 K

詞 频。 詞 る 若 ま n 0 人あ कं 0) こそ 調 Ū ょ 10 0.) 旬 70 よ しあ より ま 11 成 なる をなみ ねく是 合 よる 侍 L 7; L i) す 人か心 F) - j きとは徐て中 を導 0 哥 ~ る か T L た ¥F J: 15 B 柳 لح 7 侍 す。 手 あらす。さためて御同 排 オレ L 前 たたて 政家 侍 3 11 0 10 ۲ 0 75 旬 Ų, 1)0 かたき رهه 後。 礼 カコ 10 御事 私 よく 事か 周 Ł 前 0 6. 調 非 [inf K 0 カン 彻 か П を拾 业 カン × け なる顕達 7 侍 を 旬 かくに あ IJ 唯とり 15 b ともの へきかと。 あ 心 7 す。 か は 察すへ 是 0 とお 4]-先達 聞 よる 2 人 JE JE 15 ほ < き物 ろ 0) 社 は 初 4 ゆ 作 何 き た 0

後に K を取 御 前 まきら 合て 15 7 \$ o 11 沙 0) 汰 聞 あ ili ŋ K < 侍。 L か は る £ 手 遠 专 0 道 या 訓 ٤ 方 75 云 ij 詞。 毎 哥 此 40 此 句 カン 周 候 K जि 76 易 か 詞 L 3 0

B

なき

孙

4,

雨

S.

Ð

7

15 15 古と今と 卷 あ L IJ カ・ 0 傳 挪 12 şili 水 たる NX 政 家 カン は 11 0 救濟 救濟 る 結 ~ きに 又自 を召れて。 15 過 筆 す。 あ らす。 をも 共 色 跡 7 當初 道 ス を追 15 0 與旨 御 存 3. 詞 6 ところか を残 んも を盡さる 所 大 やら なく 2 扇

5

3

成とそ申侍

L

[8]

阿

は

詞

き

7

15

7

か

ほ

2

¥,

11 Ŀ 侍 き。 其 與 10

侍公は 當座 なん かく 文和 \$ 5. して と云物 たる 福 L なる 0 つる なくえんなる 唯 60 陰に 佛 段 旬 0) か 築垣 様あり 83 かとみ 位 程 0 Ŀ 水し人も 3 は から 則 と云詞 時らつ れ Ļ B 比 古 りと詠居 人 V٦ 佛 さき 御能 つれ をひ 11 0 \$ L 0 言なひも ć 3-カコ 10 日 事 行: 0 み P 15 か 傾 75 L 1) L 旬 12 0 れ は f 0 らに Ī たる 體をも る 世 7 代下 な耳をお 御 たるに。 11 北 0 C 變と云 まに 12 П きより 軒 は しをき 詞 た 人 1F そ なきや 要に 7 る 所 かい IJ B 0 0) t 榆 捨さり 道 わ ほ 花 10 は 7 か とから Ł 皮 iÈ 侍 あ L C H 夜 L る な 0 ほ うに 薬も らす。 志 なり。 ろ 横 L < 0 田 0 11 を かい オレ ŋ る物 · 64 7 雲も朝 常 たる 忍草 17 15 カ・ れ かけ L すやさ 道を改 L ち 旬 れ 隔 あ 花 た る カコ を作 なと茂く。 待け ٤ たム なし。 とさし IJ らん物信 救濟おなし B 侍 5 15 15 H v. 0 殘 侍 るや る事 11 匂 1]3 かい L きく L X. ŋ 82 た 興 tz オレ あ しなり。 入たる 0 ひ \$6 カン る 滿 なし 開 < Ç, B 有 を此 it IJ 7 L く筆 初 す。 ん。 春 H 旬 とも は 16 72 侍 梢 100 5 ż ili 只 12 0 d. 御祭 盛 ¥, にて。 b 1 露 る 13 あ 7.)-を加問。 03 0 本意と た 程 ع は ほ 政 は 0) 12 す。 ほ 家 接脆 10 ¥, H き。 7 あ 殘 オレ 旬 心 ŋ ŋ 花 3. 叉 30 TE \$6 0 ち

< 思ひしめて。てにをはには働はてをよしと申侍しなり。 れとも 高句なし。 すと存けるにや。近來攝政家の仰にも。 はあ かしかたりとのみ成て。正しく其比の事耳に觸たる人多 ひく るへからす。 天下の好士用侍れ たきて。 或は作連歌。 句のうちに 後世或 は。 或はこまかなる連歌。 は敷寄或 理 是非を沙汰するに及す。 をいひたてぬをは。本意なら は稿 こと葉くたけて長 占 徒に寳 心によしと 0) 今は 14 ż を

しらすして止なん事。

無念と云てもなをあまり

あり。

ある貴人御連 てたけ らんや。 れ か 0 5 歌 に未來をも兼てしろし ちいさかりけ る事。 いかなる様者も知 めされける 事 こそ 事 あ

凡春の するなり。 句に 秋 うち任て へる夢 をつけ。朝に夕を付たるも。上手は 0) 初心の人しらんはこく かよひちと云句に。 ろも とな 0 か ぬ様 15

是は一句の感の爲に夕の字を申たるにや。上手はちかひた雨となる夕の雲のあまつ風 教 濟

る詞も猶たゝには非す。又。

Bol 浪 か句 あらく か 1 れ \* 風 3 身 此 さたまら 風 情 1 罪 17 11 少々見え侍り。 巾 75 17 0 カン

周

繋の雲をは

我

も松

ても けれ。 5 りき。 りと印されたりけ 松のこまよりなかむ けるに。 けなり。 住吉の松 まさり。 れたるなれ も定家は いつれにて か と申侍こそ其いは いつるきり の本来におさめられたりけると申侍也。 九 闘の清水に影みえての歌。山立いつるきりはら 父子同篇 三反 たり あるひは されとも の木 所 は。 かと仰 15 Ξi. H 11 v) を申され 反吟す るに らの駒 儀 間を れ るとかや。 12 たつ 木の間いか、侍らんと。 かてかしる人あらん。 4. か TS あ か。 れはと申人传 のうへよりな なし か 16 さりき。 まされりと中されけるとなん。 ねありけるに。 しとての むれ 11 近來の歌 8 一反二反吟すれ ち月 はとい 定家はつるに所存 鵜 斟 本末に かむれ 酌 きつ 0 ill 駒 ひ下したるは きりは あ 主比の歌讀 まさ りけ 俊成 ある人 かい 11 処卿は松 當時發句 るこそ獨 1111 後鳥羽院仰 れ は 6 やうの きりは ij 0) を申 ٤ 駒 0 事書 大略 移 か 0 あ まされ 3 かい 奥 3 5 B それ Щ 3. まよ あ を れ ひは 15 L 駒 か ij ろ ij t-. かっ

答

给

あらす。さは たる 侍 公 き 0 ŧι 3 ると中 ひきり 夵 霏 あ たる IJ. は。 是 t 誰 P か耳に す かい る 問問 ~ き事 7 子 細 ts it.

月雨は なたう 7, 2 22 Ĥ 0) 松風 0 2 谷 かく 0) 水 E 島 周

歌 阊 分明 攝政 4 同 比。 V 侍 0 カン IC る 7 まの れ こそ我 なり。 0 は ならす。 か切たる切さる混合あるへき。 とたに 此 ともの の御 あ 制 人こそ狐疑 学 n 0 70 詞 談 發 は た かい 人 四 五. 8 か 7 句 坂 あ 7 ひさしく IJ. 連歌 はらさるはなし。 候 は 5 П か に水を含みて。よく味をしれるかことし。 反も吟すれは。 不信も付 8 82 へきと琴巾 連歌 JJ 0 つね 15 過てさたかならす。 Ł 袖 にはあなかち斟酌すへき事なし。 とほ 聞る様に侍 80 けれる れて たりしに。 此 りと 面 必吟聲のうちに切たるは それも常座にてもさやら カ 彼三賢 H 75 背細々に参ち ij 有し れとも。 • P 反二反にて 0 耳 無則なるなり。 たか 位にては。 らんと Œ かつきし しく とら **‡**6 は猶 一四四 ねは ほ

泪なとはしめもはてもらかるらん。

なく

15

B

先

杣

82

れて

11

初

心と

のた

人

の思

句は

15

逹 る。 かる は えさまお 人より よいよ珍重 と案するも からす。 て堀をこゆるやらにと仰られたるも。 か も教侍 邻 やら らめ 度人にこさるへき験。 みな人存 15 先に山跡なく案すへき者殿。 とお れ。 of the 人の越たらん堀をつくきて越たら 字に なるへき事也。 0 しろくとも徒事なり。 なり。 けにも勢田 ほ 知 0 1) あたら FF. なり。 歌は · カュ 題 П E しく 34 貫之は B をとりて 上 のす れは淀 成也。 しつかに用捨 えなな 一首を出日 たゝ手をそなる \$00 攝政 凡連歌 あな れは。 の流 殿 カン Ĺ か 0 は L 6 0 侍ら ち秘 袴 該 15 ٥٠. 底はさこそ早 ことしとそ は。 なんと申 W 0 人列 そは N il 人 į, S)F は。い の行 あ 座 かい 連 3 を取 15 して it 先 歌

あ L 歌の體さまく K も文字の ŋ Ĭ あ る 絕 巾に及す。 旬 から かすさたまらす。 有。 さる た もろこし なる事。 1 歟 作 者 0) の詩に 毛詩 心 į, 15 任 つれをも入られ 00 E 大道 たり ∃i, 言あ より ٤ 2 1,0 Ĥ り七言あり。 侍 たるは。一様 3 IJ れ 事 は萬葉に あ 八 た F) 句

らけ を種 初 安賀の陰陽 心 U Ł つれも して 人何心 かく 傳 Ĥ 調 af. 天 るところなくしては 一天の星をまほ 地 なき連歌を聞食て。 のこと 0 間 15 V 歌は ろまれ i) o ※ 涿風 盆 和丹の醫師萬卷の書を りとそ 明年 ありて又傳 Ti かっ 3 歌 なとに成 ん敷。 仙 B 1|1 所 なは 侍る。 75 誻 ١ 道 0 4 家 3

返

答

書

上

攝政家より鹿苑院殿 られ ひ申へ 入興あるへく候。兼て御 きよし。 きなれとも。 間いそき登たりき。 もたしかならす。 300 何の様も候まし。 きやと仰 あまりに年ひさ 々愚意の趣申せし程に。 長たかく幽々としたる姿。 ありし程に。 御器を可被付事 たム御意のことく合をせられは。 御點を中さるゝ事 心あてありけるやらん。 く成て。 4. つれか ζ, 五六句は御 か」侍けるやらん。 おろかな か」と仰 あり。 ことに珍重なるへ 墨を付 俄 る御句交 ありし 是等に K 召 ほと 加 れ

御點の事。営座人數退散以前。 仰 道にあひ。 侍しに。 なしかるへしと仰 深更。或は曉天。 連中悉く歸路を忘て御點到來を待中 句 共 周阿は人にあふ。愚老は は し侍しかは。 比好 か は 残燈の本にて火急の御點誾子をとるに 土おなし連歌を三百韵清書して。 ありしなり。 るへき條勿論也。意地は同物と仰ありし。 さらに一様ならす。 凡內 又雌雄を決せんかため よし中 た」面白 々御雑談にも。 せし程 播政殿 に任てあふと 侍公 彼 へ零 或 E 1/1 方 11 33 11

> 1) 0 て。 先達 者の らすや侍らん。 ねの好士とも達者とも 者は萬人の連歌を曇なく見明めてあふへきやらん。 日明日の されは三の句より侍公の點は脇句に合侍 あるへし。 V か dy de 不覺にあらす。 たムロ おなし程なりといふとも。 7 心得 中侍 連歌 へき。 道の興隆も又是に過へ にまかする間。 誰人申出 上手の名を發しても。 救濟 た は上 7 しけるやらん。下句打句 いはれたるは 仕: 手の連歌をしらさるへ 點ころの 句はやすく。 下句の長 からすと 2> みゆる句明 ŋ なをいふか 下 にては。 しとお 點なとは作者 市けけ 句 は大事 なり ほゆ。 るとか ١ \*3 是は點 غ g. よのつ 0 3 但 do o 物 U 今 な

もへは。 下手のよき句と上手のあしき句とは。 口 秀逸也。 より出 上手の句はなにといひすてたるも。 曾て共儀なし。 たるとは 聞 へす。 下 手の しすましたるは 等同 なるへきか さらに 下手 初 心 とお 心の

K 諸人の口には B わ を高名と思侍に か達者のほとをも自證する形勢あり 句 2 H 同 物にて作者日ととに しりまはる句あり。 وم 折句をあまた所取あへす中ではとて。 かは ή る。 他 300 取 粘句 ちか 沙 主 汰 ~ ( 0 かきりと iL fi: 13 は ほ 是

一先年九州探題より(于時今川與州。)奪申さるへ句とも。雨

卷

等

我よりも人に水上なみた川三句侍しやらん。年久しく成てさたかにもおほえす。

の爲に仰下さるへきよし申されたりしに。歌にては憚もや是又それにもぬる、わか染あひかはらす。かやらの事後世木葉をもしくれと聞に袖ぬれて何水上をたつねけん。あまりに本歌の詞おほくや侍らん。

其比知識と聞えし人に。佛法の掟さこそ律儀にも侍らんと 雲流水を観してさまよひありきし程に。 をも成かたかりし 0 2 移 侍らん。 ては。 會のか さなれ 々に 々たる鰀星発たるに。 僧五百人干人集りて。 かために。或は一夏或は半夏短韶せしかとも。 ばえて。 いかさま顕佛鏡神 かともで はか」る清淨の地に住給んとてこそ。寄特をも人にみ 友なし千鳥の類 る山にかくれぬ。心ほそきやらにてたとり行に。 連歌にはくるしからしとそ仰ありし。 後にはた」足にまかせ心の行にしたかひて。浮 質の心をこそしらすとも。 近々と聞え侍にそ。されはこそとおほへ侍し。佛 こゝかしてにやすみつゝ上るほとに。 かは。 の居をしめ給かと覺て。 松柏の枝をかはせるあり。 に身をなし。 自他の褒貶のみにて。一座の修行 往は智識の會下をさくる事 らはの空に歩行に。 知識の法度をも伺 漫々たる着海に出 九折なる道 たム江湖 夕陽も 見上侍る も待 嶼 入 は カン 處

處も作り。 猶水の音もかまひすしく。落葉なかれをせきて。 とみゆ。 中にも。 あらす。 4 m 本堂の燈ほのかに かいけつい。関伽盤花籠なと 持たる 寒鼠衣をふく。樓門を見つけてたつね入に。奧に儒坊 きりありとそ覺る。やらく、薄雪杉の桁にむらく、見えて。 り。峰より雲を分て漲り落る流あり。李白か三千丈も猶 心のま」なる石ともの苔滑にて。 水の流に付て轉入に。奥はいよく、常磐木のこくらくて。 ゆるし給てんやと問 し奉らん心さし斗也と答て。今夜は此禮堂に通夜し侍らん。 の梢に飛かふはかりそかすかに聞へし。あらぬ谷に大河 しけるとなん 創いつの比にかなと尋侍る次に。むかし西行上人も暫お にしみて聞ゆるにそ。 によりか しめ。 の中に。 よくそくれく、上り侍ける。 か」る寄特ありけりとおほゆ。森々たる谷の深き 衆生をも利益 たゝ水のなかれをしるへにてたとり行に。川 かね懺法の摩にたくひて。 ムリて眠居たるに、 名もしらぬ鳥のおとろくしき壁にて。 かたり侍き。やうく、更行ま」に。 に。何の子細か侍へきと云。 佛法の尊さも一際ある心地せし。 し給なれ。 鈴の響谷々に聞えて物すとき 踏ならす人もなかりけり 由 何となく所からにや 來うちや た」足にまかせたる ŋ 只此伽藍を拜 さまの 此寺の 行なや Œ はる 面 あり。 事 Ŀ 0 法 柱 あ カン は

上

たる筆の跡あり。是を見るに。内陣の柱に西行法師と書

羽 まことにいそかはしけ はそこは の物かたり り侍りき。 C 處にも。眞の心さしなけれは。とゝまりかたき浮世のなら 食し侍し程に。 迎て遊に張れとも。 トるに。 月のするつかたに出侍しやらん。か様にたゝ心のまゝに乞 逗留せし事も かやうの鰻所には。 700 わたりて。 ねともの なるに。 高 愚なる身のはかなさも。 みちくる鹽こ」もと也けりとさはかしく。 み岩 遠さかり侍に。 つれも旅泊の夢をおとろかすかとそおほえし。 かとなきに。 青嵐木すへを扣て頻に曉の夢をやふり。 或時は海邊に出て行脚し侍に。 おもひよそへられて枕を峙たるに。海のおもて ねをしむる柴の庵に暫しもさらは世を近れは 遠からぬ たム火の かりをあけ。 侍し。其年は白地なる様にて冬をも過し。正 眞の修行を知らす。 流に嗽人もなし。 元より終に任たる事なれは。 なり。 洲崎の松風。 やらく一興津しら浪よと雲も一 かけはほのくとみえて。 月はた」きらくとみえて。 ともつなをとく人のをとなる。 さて思々に漕列行梶音も猶か 今更おもひしられて月日を送 うきねの 或時は深山に入て居を かやらのしつかなる あらき浪舷をと 鳥の立つムく うきぬ かの源氏 流水溪を しはらく 曉出 K 易 あ p

> あり。 居あり。 れ門も何なとして。星霜いくひさしかとおほゆ。 傷に詣て見るに。 何といふそと問侍に。 4. しほをたれ磯菜をつむ海士の子とも とおかし。 はるく 海に望て佛閣あり。 僧坊なと甍をならへたるか。 と步過て神殿を拜奉るに。 象瀉となん申侍とこたへ。 又社域あり。 の思く 扉に書たる歌 築地もくつ 白洲 さて共震 に鳥

待をたとりつ」。 とおほえて、 をはるくしとわけ過たるに湖水あり。 150 らの故實有は。とりたて」たひなむやといふて。 らにいつくともなく行脚し侍事十餘年。其後出羽 身には磁編る衣をきたり。 にさかしき谷をおりくたる人あり。雲鬢は雪よりもしろく。 なり。)みちの國に乞食し侍し比。ひろき野邊の草高かりし 法興隆は御身に 帶してしかるへき 事なりと 再三申侍し程 ひよらすや。努々さやらの才覺なきよし返答し侍し し侍しに。 四行法師と書たりしそやさしくもあはれ 松島やをしまの磯もなにならすたゝきさ渇の秋のよの 心ならす一兩年は彼山中にて逗留し侍し。へ今光明寺是 其所の人草堂を一字おもひ立事 鳥の跡よりも猶かすかなるか。 所からの面白さに一足つゝ前へ歩に。傍 此翁歩み近付て。 汀に付て人の往來か K あり。 も聞え たえく見 あなおも Se Con に山居 しさ カン 月

問に。さる事なし。心さしありて住給はんに。子細やは ませ。人里まては日も暮なんとすといふに。られしくて彼 年ひさしく杣をとりて住侍る物なり。わか跡に付ておは 送り侍しや。しらす仙郷にもやありけんとそおはえし。水 るへきといふに。やかてかの翁かこと葉に取つきてかすか となる。 の中に。 に至かとうたかふ。 をよひかたくや。水底には金銀の沙をしけるかとみえて。 **雪松の傾たるあり。幅木の央なるあり。浪丹青をうつして** なる応をむすひ。時々里に出て食をこひなんとして一夏を 露ときえ夕の煙とたちのほりぬ。 の山をうつして。 のよそほひをなす。 いよくしたよりなくて。 水に 夕には白日の嶺に映徹せるかけ。すへて眺望一にあ 連おとれ 翁かたくひなんめりとみえて。人ひとりふたりを むかしは此湖のあたりに人の住侍事ありけるやと いたりぬ。 むかへは天と」にあり。我はからす非想非 此すゑには道もあるへからす。 とも水濁る事なし。朝には瑞雲岫を出て群 かやらの競地にこそしつ けにも白地に板とも取かけたる柏木 みかける鏡よりもかけいさきよく。 の翁あきの霧にやをかされけん。 あさやかなる事。千枝經数か筆も 長月廿日比にいつくともなく あ は れさい われ かに残止をも 3. は此 は かりな 々想 あ

は夜を明し侍し。吟出ぬ。たゝ消團を枕とし衾を莚としてそ。ふるき堂なとに

り。
お正都けにも二にてこそあるによりて。徳あるへしと釋せあしきは後の人慣ところあるによりて。徳あるへしと釋せがをしらすしては正をも又さとりかたし。殷紂夏桀をは堯郷をしらすしては正をも又さとりかたし。殷紂夏桀をは堯郷をしらすしては正をも又さとりかたし。殷紂夏桀をは堯郷をしらすしては正をも又さとりかたし。殷村夏桀をは堯がたる。天を執に地の捨が正都けにも二にてこそあるへけれとも。天を執に地の捨が正都は任める。

惣して數寄の人は硯懷帋をみても心うきくしとある 1 とへは上戸の酒を三盃五盃のみたらんかことし。 されとも一の懐紙のうらなとまては。誠に心しつまる事な 間にちらして。かならす求る所なけれとも。 IJ て上手は酔のうちに真質の秀逸をは儲るなり。 る初心も。分々に句を儲るといふは醉る心なるへし。 に醉侍れは。 は。一身は酒にて本心は迯去ぬ。連歌も数反おもしろき もや侍らん。心はさらに し。此道に醉すしては我心より出來連歌あるへからす。 他念あれは本意の句なし。 たる時。 人の息を口よりつき出すかことく。 興に乗たる心もた」醉の中也。 酒なし。數反の後心酒 否心を取靜て一心よくおさま され 前句をたより 氣を天地 に成 口には はいかな まし 座の K)

## 梵灯庵主返答書下

, 分明に目をみあくる人もなかりし也。 それにいつの程にか 事なり。 回詠吟も有つらん。<br />
是に常住た」<br />
此道に醉せ給けるとおほ る諸大夫なとの少々あるは。只今何事そやなとつふやきて。 ありし也。祗館の人はおきあからぬも侍り。目をさました て内より連歌を詠吟ありて。殿上人に紙燭をさくせて御出 殿は人の御點を印とて。 又ひとり降り。百韻過ても左右なく餘味する事なし。攝政 上手も又かやうにこそ申侍しか。該の数寄は連歌なき時も 只ありのま」に心にて求所なく。 至らさるなり。人の金を持て生涯用に立さらんかことし。 ら物と見ゆ。推量するに。さにてはよも侍らし。吾調方の 手の位に至ことなし。さては利根も才覺も連歌にはいたつ く得事なし。四十年五十年晝夜此三昧に入といへとも。 豬上 智惠。布留那の辯にもをとらぬ人も。連歌の道をはたやす 抑上手にはいかなる人の成侍へきやらんとみるに。文殊の 常に連歌はか」り第一なり。か」りは吟也。吟は 句は吟の内にありと仰ありし。是又はかりかたき 夜深く門を扣なとするにも。 先達の跡を追へき物歟。 やかか

ちらしてみはや花のあけほの

力。

れ。谷の堂にて三の句に。ちれんといふ證歌より出たれは。殊さらおもしろくこそ侍られんといふ證歌より出たれは。殊さらおもしろくこそ侍たゝ花にむかひても此句子細なきか。後にや風のうさもし

歌も一かとにて侍やらん。さまての秀逸とはよもおほしめされし。當座はみな歌も連ざまての秀逸とはよもおほしめされし。當座はみな歌も連

軒ちかく植しさくらも散過ていにしへ西芳精舎にて和漢の侍けるに。

とありしに。

おもひよらぬ付會。鉛心腑心地して候。法のためにや人はとふらん

此道の事。いくら筆をつくし詞を極めたりといふとも。限あるへき事にあらす。たかきやまにのほらん志ある人。山のるへき事にあらす。たかきやまにのほらん志ある人。山のおとを百度千度めくり侍とも。のほる事は只わか心をしふもとを百度千度めくり侍とも。のほる事は只わか心をしっても江上一路と申侍れは。只傳る事なき肝要なるをや。 はの事。いくら筆をつくし詞を極めたりといふとも。限あれば。 枯野の尾花有明の月と答られ侍き。 是はいかっこれれは。 枯野の尾花有明の月と答られ侍き。 是はいかっこれればの事。いくら筆をつくし詞を極めたりといふとも。限あるえ传へきことそ。

百九十三 梵燈庵返答書下

卷第四

千四十九

書

下

11.

連\はいかほとも徐情ありて幽玄なるか 物あはれにおもかけらかへる心地すへし。是ひとつのすか 満らん様に案すへしとこそ仰ありしか。餘情の句はてりも なふへきやらん。いつれも句を引あてく一姿申へく侍れ 様にあらす。凡慮の思よらぬ所なるへし。是餘情の句にか は山遠して水をあらはし。山又水をへたつ。遠近の眺望 李花一枝なといひたるは。諸人思よる事もあるへし。 せすくもりもやらぬ春の月。いつくの空ともさたかならね てよき也と仰ありし也。清凉殿の有明の月に。梅のかほり とまかには略學。 へきと人中されけるやらん。五湖の句によそへられたり。 たなるへき歟。西子賀色を大國にても何にたとへてかふな くかすみこめたるに。雨さへそほふりたらんは。何となく して此外しらす 夜もやうく、切かたになりて。拳の松原そこはかとな 是等なり。 此句は合さんめりなと人の申さんもいふかしくて。 なととて残されたり。 歌の躰を定家引合てかられたるにも。物 或は海外。或は竹 堂 上 0 院とみ 五湖 一俗なる跡。

長たかき外。 Щ うき他にもか」る時ある花さきて 里はをやみもさひしむら時雨

たくみなる外の 風ふけはあすのとまりに舟の來て やみをまついさりのあまの月にねて

うるはしき外。 松原のらす雪まては風ふきて 老まては我ためにうき命にて

た 邪路に入外。 ム詞 の事。

か」りよき外

月やしるみし人いかに成ねらん むかしたにうき身のいつを忍ふらん

めつらしき姿。 風なくは循いかはかり松の雲

幽玄の外。

故郷や花の老木にしらるらん

かけに

招雲

ちかき

花さき

て

ふるきを學躰。

誹諧の躰。

誠のある外。 戀をのみ雙六のはのあひもせて

月そとふさらては老の友もなし

やさしき姿。 身にはなとひとりの親もなかるらん

今夜とはちきらぬ人の月に來て

まはしたる躰。

是そまはしたる發句と沙汰ありしを。 松みれは風にはちらぬ木葉哉

攝政殿千松林にて和漢の有けるに。 千世もみむ松のはやしの山さくら

今熊にて。

知思院にて。 里よりも時雨はやまのもみちかな

清水寺にて。 なけやけふ宮とを庭の郭公

瀧なみは花の常葉のためしかな

卷 第 四 百 九 + Ξ

梵

燈 庵 返 答 書 下

鹿ヶ谷にて。

瀧たかしかきりもさらに浪のはる

安築寺にて。 くれなるを忘れぬ梅のもみちかな

大原にて。

落葉にも月はおほろの清水哉

北野社にて。

下もみちちりにましはる宮わかな

梶井宮にて十三夜曉。

八月十五夜。 明にけリ又月の夜のあきもかな

箱崎の社にて。 雨ひとり月をおもはぬ今宵かな

むかしうけ給侍し。

干珠満珠の心を九州にて。 **粕崎のまつ夜はあけぬ時島** 

須磨明石にて。 浪やちるしほの滿干の玉あられ

駿河府にて正月一日に。 月雪のあかしのとなみ夜もなし

常陸の筑波にて。 年たにもこえぬたかねか富士の雲

救 濟。

周 阿

千五十

つくは ねや木のもとふかし花 の雪

脇句は背より指たる名句なし。 と云發句ありけるに。 雪の山草木の花の家ねかな

冬さく梅にましるくれ竹

也。池に木葉のらかふと云發句有しに。 と救濟の仕たりけるそ珍重なりしと。後にも御沙汰ありし。 (當時花の發句に花咲植物致さぬ事也。發句花拔からに成故 一僧正温照。在原業平以下歌仙好所各別なる歟。連歌も一躰

らへは時雨の浪のしら雪

あらさりけるやらん。 濟はあなかちさやらの所に心をかけす。されとも又録には と構政殿のあそはしたりしそ。営座もおもしろく。後日に 人美嘆申侍し。周阿は秀句より取よる所侍しなり。救 一月のこる狩庭の雪。山もとの嵐の上なとは。近來の秀逸な

草まくらうつらふすねの床 とはに

攝政家の御句 是救済か句なり。かさね句は周阿か連歌には多くはみえす。

ゆふへくの寺々のか わ

か何に。

らつ」は夢か夢はらつ」か

又攝政家の御句に。 もし夢ならは又や見さらん

> 夢そ花さてもらつ」やなかるらん 夢かやさては我も おほ

自然に出來なり。羚羊角をかく。其跡を知らん事難かるへ 何とも取定たる所なきにや。されは上手は凡慮の思さる處

あなかち風躰さたまるへからす。 をまなひえたるは好體あるへし。 八方をかけたらん人は。

し侍へき。 りと御沙汰ありし上は中に及はす。何の人か吹毛の難を申

一しほひにかすむ旅の道。野邊の兎の月をみて。雪のあられ 先の字前の句を諛歟。一句聞にくきにあらす。 愚意も只御意のととし、我はまつ山にて聞つほとゝきすは。 といひつ」けたる。いつれも十分にかなひてはおほへす。

順徳院範永か外はさまて聞ゆるなしと仰けるそありかた

俊頼家中の人を集て歌をよませられ。 心にて待る。 て。わか歌にせられけるそ。 ととに此道に譽ありける人の 其中に一 可然を引直

鴨長明此歌の肝要とて。しもにてこそと申たりけるやさし

庬

答

書

下

周阿鹿苑院殿の御懐帯に點を合申て。 社に参詣しける事。 あなおそろしく 神慮にも かなひ。道の 祈禱のために北野の 冥加も 有へき へきの 龍に

必其 當座の勝 にこされては徒事なり。句数をもつねよりは蒔散し侍れは。 もあるへき者歟。 中に點はあるへきものなり。 負を決せん為に。 いかに秀逸の風情らかふといふとも。人 點をとる連歌の事。 士手の故實

也。

田夫の花の陰をさり。 猶 かしかるへき事 商人のあさやかなる衣をぬきても。

す候。 愚句に憑めし暮やまたるらんと申侍ける。 く候歟。 年ひさしく成て。さやらに思惟候へらんもおほへ およそは子細な

民部少輔成量はむかしより上手の連歌を聞たる者にて。耳 んすらめ。歳四十未滿にて身まかり候し事無念候。 は無雙に候し物を。 その世に候は ムよき點者にてこそ候は

前典藥頭嗣長朝 に銘候。聖人の師は不聖人なる所よく存右し候けりと。い 臣周阿雙座して。 毎度連歌を談合し侍事肝 t

面の四句目に。

とあそはされて候は。 田 の月やかりてみゆ覽 裏にて候は」。

なをいかにおもしろ

陰者なとのまれに列座して。 らさる人の相交たるか無興なる事多也 歌。高聲に褒美讚嘆もしかるへからさる事也。 顰蹙する躰。 く候はんすら 誠に無念に候。 興ある連歌をし出 座の權門と おほ 所詮道をし しき人の連 したるをは

一俊成卿我本意の歌六首侍りとて書をかれたり。 一京極黄門我は歌作にてこそあれと申されける。 首除 亡父の歌を廿首秀歌とて撰れたるに。 歌作。連歌師。連歌聞あるへき也。 れたるこそおほつかなく作れ。 只耳こそ肝要に候へ。 五首は入られて。 連歌 後に定家卿 K も連

え候。 **愚問賢注に。よきうたはいかやうなる躰そと御** 心にかゝりて候と。頓阿後日に申候つらん。 の中に道こそなけれ思ひ入山の 先は秀逸の 射 こそゆ Ź> しくも候 おくにも鹿そなくなる けに 鄠 候 もとおほ はぬ。

良阿かきれぬ發句に點あひて候こそ一興に候 在所に との 祝 言あるましく候。 馬 口をとらへ てあはせ候はむには。 ~ きれぬほ 堤つき候

しく候中に。さやうの御沙汰眉目に候。小町こそ思よらすしく候中に。さやうの御沙汰眉目に候。小町こそ思よらす一貞治應安の比をひの好土。或は帶紐をいはず。踐は詞けす

るそ。ありかたきためしとも申しつへき。り。天性この道を得たりと。八雲の六卷にしるしをかれた一順億院の御夢に。小町か手より金をめさるゝと御覽してよ

からむ。 調あれ。孔子はいつれの代に出給とも。なとか聖人の譽な 柿本のまうちきみの歌は。古今の間に獨步と申たるこそ共

也。 いにしへは執筆する人多くは侍らす。相阿。素阿。成量等 順素をおこし。或は百韻終さるさきに退散す。一座の間は他念なかるへき處に。沙汰かましく 時は。其中の尊者とおほしき人に商量する間。 也。是さらに此道をしらさるへし。 みるに。 こほりなく。 侍る間。衆中口を閉侍き。もし猶不審なる事一兩句も交る の形勢をうか」ふ間。 是皆連歌をよくしれる也。 假名なとかたのことく書つ」くる者に執筆をさす 諸人與に乗してこそ侍に。 りあり。 あたらさる褒贬無窮の事多し。 一座はたム執筆の計ひにて さる程に筆を閣て諸 かましく成て。 近頃の會のやうを 道の障碍 一座もと」 連歌 或 は X

一近日の好士万葉如きのおそろしく耳遠なる詞。前句のより

けれ。皮を羊にきせたらんは。還で心あさくこそ。やうの詞出來やうにおほえ候。むかしの上手いつれも稽古やらの詞出來やうにおほえ候。むかしの上手いつれも稽古處なけれとも。しいたさるゝ事何事そや。剩養句なとにもか

壌上の 質幽玄の堺に入といふ事は。我とあきらむる事なからんほ 前歟。武庫义天性器用。諸人存知の事也。 ほりて後も。 か雁書にかはり侍ら さしのあまりかともおほへし。 ありしそ。不思議にも又いにしへを思食忘さりける。 に及す。奥州松島に茅庵瓦缶の陰をなして侍 し後は萬里の山川を隔し間。心のうちはかりにて申通する ろつ水とうをとの思ひをなしてこそ器過しか。身の浮沈せ と引なをさせ。川仕のた」すまひをも御指南 鹿苑院殿いまたいと けなく渡せ 給し時より 祗候し侍し人 きことをおも の堺まて飛さかりける事。 には布衣に召加られて。常に金吾相共に全塾せしなり。 0) 敷にもあらさりしを御覧せられしより。 處に至す。 ふにつ 李源圓降か約せしにおとらす。 凡依有親近恩意之趣連々諷諫申者也。 ん哉。 蘭翳よりもなをからは さるほ もの」自然に相叶侍る。 靑き鳥の とに \$3 3 翅もやすめす。 され C し。賢慮定て 共よし 0 し比。 直垂の衣文な ありし也。 ともい 外に都 **豊蘇夫** 御音信 みの深 、また への

下 集

今一天のおさまりて四海に風波おたやかなる事。唯君と臣 れは帝都を始て。壺の石文の外まても。動きなくおさまり なりしにも過て。蒙古も襲來せす。四夷も又發る事なし。 との徳なるへし。遠くは三皇五帝の目出たかりし政にもこ は。なとか自得發明の位にもいたらさらむ。猶々殊勝也。 へ。近くは延喜天曆の御代をひさしく知しめして。國土安穩 2> Ž あるへき。 た」能 ~一心をしつめて修行 あら

よひに注付侍なり。上下の句になすらへて。卷を上下に 待侍るに。此一卷つゐに返答をみさらん事ほいなかるへ ちかき事をおもふ。風の燈水の淡。跡なくきえなん事を 卯月十日頃より病に煩ふ事ありて。 しと。しひて承ほとに。夢ともなくうつ」ともなき心 ることをなけき。劈の月のかたふくをみては。その山 入官のかねを聞ては。 老の浪かへらぬ旅の出立をこそおもひ侍れ。されは けふも又つれなくてくれなむとす 月日の遷行をもしら 0

花は冬名は秋

しへの盛か

す。 只いつくをも 引直されて給へし。 爐に投らるへく候也。 分たり。 落散 定て参差する事も多く。 なは人の口遊も存内候。御投見之後。やかて火 **荒蕪の詞も交侍ら** 努々外見 あるへから

應永廿四年後五月十八日

梵

灯灯

判

## 梵燈庵主袖下集

源氏万葉古今以下凡此內

に有。

次第不同

なり。 を花の兄と中事。 花兄と中は拵の異名也。初春の發句にすへし。 万の草木の先に花開か故に。 花の兄と申 たとへは梅

たひ。

あたらしきをも捨さるへし。

諸道いま時を得たり。

殊更和歌は神道より出侍れは。草木

に付ても萬歳といはひ。道に心さしあらむ人。

ふるきをし

侍へき。さるほとにたへたるをつき。すたれたるを發す。 侍そ。たゝ君の目出き御光。又は伊勢大神宮の神徳とも申

菊の異名。山路草。乙女草。秋の花。 花の弟と申事は菊の異名也。 の水。是は九月九日の酒の事なり。 に。花の弟と申也。 九月の發句によし。 菊は是万の草花の後に開 菊を秋しへとも云也。 九重草。 まさり草。 る故

菊

一名所に三の風有。初瀨風。佐保風。飛鳥風。一名所に三の山陰有。宇治の山陰。小野の山陰 梅の露。柳の露。櫻の露。 。皆春也、染とすれは秋也、 小野の山陰

谷

櫻麻と申は六月の れなひなるを申 麻 į, を申 櫻麻 心 但 に花を結て 麻 1/1 也 すっ つ 礼 b Ű あ カン

草と申なり。一四季の草。是は撫子の異名也。四季に花開か故に。よとき

異名也。四五兩月の發句。一山橋。名取草。廿日草。となり草。是はいつれも深み草の

一青嵐。六月に吹嵐を申也。發句によし。

一鏡草の事四季あり。春は大根。夏は紅。秋は槿。冬は松也。一七夕妻とはをり姫の事なり。

さいたつまと中は春の草の時出たるを申也。一説は。 といたつまと中は春の草の時出たるを中也。一説は を野には月も落葉の鏡草移しとゝむるなこりなれかし 権のあたなる花の鏡草移しとゝむるなこりなれかし を野には月も落葉の鏡草松の木の間そしばし曇れる といつれも歌有なり。

須牌 時淀よりお舟にめさる」也。 舟とは申也。 人のね中 さいたつままたらら若み御吉 の鈴舟と中本説は。 ひ思ふ春 へもたせらるム鈴を入られたり。 路次の難なし。思ふまゝ也。山路 の野にあるさひたつま人には忍ふ名社 源氏須磨の里に御下有けり。 此御舟に驛路の鈴と申て。 野の質か くれに雉子 も同事。 さて須磨の鈴 情けれ なく 。 そ 源氏 113

りあへす。野の雉子誠の鈴かとおもひおとろき鳴けるほとに。源氏と此鈴舟をすまの上野ちかきうら邊へよせ給ひけるとき。上

此歌は三月廿日餘の時分。須磨の鈴舟維子寄合。 鈴舟をよせける波に驚て須磨の上野に雄子鳴なり

ては春の季。今は雜也。
では春の季。今は雜也。
変磨の花に風祭寄合。中比ま吹しつまりてありけるなり。須磨の花に風祭寄合。中比まける間に。花のためにしつかなれと風をまつり給ふなり。

天上人ねりぬの躰寄合也。 青葉のすたれと云句あらは扇給可付也。 \$ 青葉のすたれをかけらる」かために植をかる。 カ 上人ねりぬきの衣をき給ふ也。 へともわ たぬきとも中 同しらかさね。是も四月一日の衣 なり。 しらかさねとも又はころ 大內 12 かへの 柳 月 青 一日に 事

鳥有也。 ・ 三年まてかひそたに錦鳥寄合。又深山なとに此外錦鳥と申三年まてかひそたてたる錦鳥我思ふこと使よくせよ

一紅葉鳥。是は鹿の異名也。秋植物にあらす。

の明神。皆龍宮の龍女也。海の都に寄合也。一海の都と申は龍の都の事也。玉津島明神。あきのいつく島

宮けへし。 程の宮。是は伊勢の内宮の御事也。伊勢と申句あらは櫻の年月を送りしもの也。海の都と申句あらは浦島寄合。

一竹の都。是は伊勢務宮の御事。いつきの宮とは齋宮と書て一竹の都。是は伊勢務宮の御事。いつきの宮とは齋宮と書て、日よみの宮と申は伊勢の外宮の御事也。秋にあらす。

何とおなし。いつきの宮に可付。(『譽)とよなり男。紫平の異名の事。あつま男。めつら男。昔男。とよなり男。

くれはとりあやめは明日の軒端かな

す。

立ささきの橋。紅葉の橋。天の川に付。らへ物にあら云。かささきの橋。紅葉の橋。天の川に付。らへ物にあら云。かささきの橋。紅葉の橋。七夕のあふ夜の枕の事也。秋七夕の衣織る糸の事。岩枕。七夕のあふ夜の枕の事也。秋さり衣。同秋衣。皆七夕の別の衣の名なり。ねかひの糸。

一百子池と申は天川の異名也。七夕祭の時に。百のうつは物。一百子池と申は天川の異名也。天のてくさと申は。七月七日に大内にて第のたから物を舟車につみて。七夕にかし給ふを云ふ也。發句によし。

ならては草つくしとはいふへからす。 給ふ也。うちの花合。うちの草つくしと申は是なり。七夕一字治の花園と申は秋の花也。源氏年~~に此花をつみ手向

さるなみやしかの花園みる度にむかしの人の心をそ知志賀の花園。誠の櫻花也。うちの花園に付所かはれり。

申也。春の夜の月とあらは膿舟付てよし。されたる御舟なり。年月をふりくちて久しきをおほろ舟と一難波の朧舟と申は春にてはなし。昔難波の天皇と申君のめ

一膽の清水。春にてはなし。名所也。大原のさとに朧の清水

あり。難波の脂舟本歌万葉。

あきつの宮。同松。同市。同里。住吉の事。いたつらに難波ほり江の朧舟月水ならてすましとそ思ふ

一瀧の都。同あしかきの都。いつれも吉野の異名。吉野の名

うの本説大切なり。

りつくしもの姿の國なり。唐に寄合也。 せいまた人すまね。つくとり計すむしま也。 その本説によりへくしかの数。つくとり計すむしま也。 その本説によっくし九ケ國。つくとりの國とも。又つくとりの島とも中。

松浦の寄合なり。

鏡川あり。 里あり。 是を鏡宮と申也。 松浦の鏡の宮と中事。 とつれ行けるか。 を唐へ御使 のせさるほとに戀死に その所にまします宮なれは鏡の宮と申也。 是も付 に遺されけるに。都よりさよ姫も唐まてつれ ů, 所かわる也。 伊勢の鏡宮と付所かはれり。 かはりして舟にのせす。 昔松浦さよ姫彦大臣に契る。唐舟に しす。松浦 さよ姫の本説。 の鏡とは いわひ巾 ひれふり野へ 御門彦大臣 松浦の鏡 近江 ける。 10

> 3 10 舟かくれし後はそのまる石となり。さよ姫なく涙 0 よ姬を鏡の宮といわひ申とか 石のせひ五尺 D> たへ 此 石の 111 高 かたち女房のきぬをかつきてふしたる躰 あまり。 K あかり 彦大臣三年に歸朝有。 舟の みゆ る程 は納 その後松浦さ にてま 15 12 也 たかか

1) 0 ひかたの鏡の本説は。 給ひ。著は是併勢の神躰の鏡也と詫宣ありき。(喜夢)は鏡きの図青野川の湊に流て。その所のけり。此鏡きの図青野川の湊に流て。その所の こその 海よりあけ泰り宮居を作。 らせけるに。 什 勢に紀の國を付此間也。 しやうと申は。 さく!へときす付にけり。 昔伊勢の明神の御神躰を鏡に IL の湊に流て。その ひかた 紀の國にあかめ中 のか」みにてましますな きす鏡を海 所の でとか À カン **ゐまい** 弘 組 カン を せ

一難波めと申は。難波に住いやしき女房の事也。

とは山の神の事なり。一初謝姫とは誠の女にてはなし。初瀬の山姫のこと也。山姫

名を粋てすへし。 卯川雪。 も能卵の花とすれは。 H の花。 UN つれ いつものことめつらしからぬこと。 8 驯 拒 の事 也。 發句に も平 句に

初嵐とあらは一葉ちるとすへし。一初嵐は七月一日に吹風の名也。二日三日の比まてはよし。

一日晩。初秋也。一葉ちる。初嵐に付てよし。

きりつほ。 植物。 秋 也。 大內 の庭 0 事なり。

萩の戸。 秋也。 植物。 大内の萩の庭のこと也。

を云也。大裏に秋の句在は萩殿と付也。 紫の庭。 大內 の事也。 萩殿。 是は大裏の庭に萩をうへ給ふ

霞のほら。壽なり。 ほら付へし。 是は大内の御事也。 浴句とあらは霞 0

なしつほ。藤つほ。梅つほ。 はさくとせすは雑なり。 いつれも内裏庭のこと也。 梨

一松の花。 也 年に一度つく十度花さくもの也。 も春也。 千年に十たひ花咲也。 松の新は。 初春也。二月三月には松の花とはせす。松は是百 只みとりの松雜也。 松のみとりる。 いかにも配言也。松の初みとり。 松のわかみとり。いつれ 是を十かつりの松とは印

一花格開春也。 た」椿は雑也。

正月の七種と申は七日の若菜の事なり。

七夕に七の草の花をつみて七日に手向也。 の七種は槿。 也 萩。尾花。 撫子。女郎花。 此草の紅葉は皆 葛葉。以上是也。

吉野のくすと中事。 をくすと中也。 調と心得たる也。 父國栖の翁とも申也。 告吉野の王にめしつかはれし大臣 是はよのつねの連歌士は。國栖と中を つくしより御 調には 一の名

> 後の國なかすのうら。 5 はらかの魚と付へし。 の王の御歌に。 力 0 魚を取次しをく 腹の赤魚也。 なかすの濱と中所此魚を取也。 す人と云也。 **芳野** 吉野川にも。 のくすとあら つくし筑 吉野

一木葉のおきとは名所也。 物にあらす。 にほてるとは水海の事也。 代々をへしくすの翁のなかりせははらか 近江 おしてるとは鹽海 の水海のをの奥をいふ也。 の貢誰か供 の事なり。 ^ 植 2

なからの からさきとはしか Щ L カン での浦 のうらの洲崎の松也。一 に付へし。 名所也。 木の松と付也。

なからの橋。 さゝ浪やしかの から崎やにほてる興に雪消て月の氷に秋風そ吹 津の國 から崎麓なるなからの 渡過の橋也。 長等山の本歌。 山の春のけ きを

の小野也。 かけろふの小野。是大和に有名所也。小野の里ともすれは都 手習の小野名所也。是は宇治の里在。手習つけへし。 此歌は三季の歌と云也。

す」か川とあらはをの」淡付へ 小野の淡は伊勢に有。をさゝ川の末の 遠里の小野住吉也。 すみよしにあり。 住 前車 に出たるを中也。 15 寄台。

あのム淡。 同松原。 いつれも伊勢に有名所なり。

谷

第

四

ď

九

かりと中 쾖 は。 五月五日に 樂のため によろつの草を

を申也。 元 月 元 71 H の發句に よし

たけかりと申は秋也。 入てとるを申 也。 植 物 九雨月の松たけをりきのこを野山

木の葉の里名所也。 Ш 城國 れも鳥海氷に在名所なり。在て。冬にてはなし。

夜寒の里。 ほしさき。 松風 よひつきのうら。 0) III. Vi J. PA 同川道。 いつれも鳴海に付 尾張

二萬の里名所也。 NE. 備中國也。 二萬の里より御酬をさいけて

名所なり。 竹の里。是も備中國在之。 12 0) に在之。 竹の正 同竹 の内に 0) 橋。 在名所 又とまりともすへ 也。 竹の浦

難波江。 あ L の異名也

那也 取其。 是は いもの葉の露を取て織女の歌を甞也。 砚の水

青川として六月 11

ふかみとり。 1[1 比 まて五川。 今は雑也。

活-1: 0 初等。 川也。 青椒。

19

Hi.

W

13

の發句

によし。

は てう。 は てき故 也。 是は稍をかくる木を田 0 あせに V

U

11

是也。

< 也。

すまの に三年須磨の ひけるに 111 里に 櫻と菊と付る事は。行平中納言源氏 里に住給ひける時。 櫻と朔と植をきて詠給 よりさき

すまの松島と付も。 千さととも是をそいは 行平の ん秋ことに菊植て 御時より合。 みる須磨の前

須磨の前の

春の山里思ひ出て都の梅の袖のかそす

人

愁の の何に なり。 初潮の海士をふねと申は。 の發句 て精夜 間也。 い寺と申 のあまをふれとつ」けてすれは。 士人住て釣たれける也。此海士人は觀音の現して海 松島や海土の筈やもいかならんすまの消人題たる」に 鳣 竹 の寒ける あまをふね 方便に釣をたれ給 11 ili 潮 1 有。 に海とも付へし。泊瀬に鏡と付事。 It 10 寺の たふる鐘とす ゑひせられてをのつからなる也。 とすれは。鼠のあま小船なり。 カン ふ也。 ねつける更にならす。 昔初瀬大渡なりしとき。 はし 共後はつ測に塔 海士に非す觀 it - 4 月の とと也。 十月に 香也。 を立。 店にほ かく付 多の 16 士人に いられ 十月 事此 初 初潮 鏡 なり を

庭島の名のこと。 夜 を確て こたふる鏡 夕つけ鳥。 かあさ以 くたかけ鳥。とよ鳥。

10

しか

枷

下

集

一國守護の居たる府中。國の郡ともすへし。 
 太山かと思ひきたれはさもなくて千鳥か瀧に鹽そ落行 
 太山かと思ひきたれはさもなくて千鳥か瀧に鹽そ落行 
 太山かと思ひきたれはさもなくて千鳥か瀧に鹽を落行 
 太山かと思ひきたれはさもなくて千鳥か瀧に鹽を落行 
 太山かと思ひきたれはさもなくて千鳥か瀧の器屋の近所也。

也。 れ 0) 琴引の宮と申は くとの 宮の 又はぬ 姫とも 國 御 を守給 事 te 也 11 せい L つく 八幡の御 へる神にて候也。 山 日日 かうら しと申 名所也。 いもうとの御事 何あらは。 山と中所に 發何。 玉たれの姫と中 琴引の宮とも。 玉たれの 也。 是は 如仰 は此 つく 琴引 K L 食 た 5

時雨にもぬれせぬ山の木葉かな

水の は て物ならひ學文志給ひける寺也。 みと川 花初 寺と中 粮。 到 舒 同 台。 は 33 < 凝花。 6 をこりと まの 寺の つれも H ふるひ 異名也。 去はなにか 辿 0) 病 異名也。 到け 源氏 ĩ 也 の大將未見 寺に 六月 は 也 b

北 をか 2 山に 3 ひける也。 内に入てかひ給ひける。紫上と中句にする 签子付事。 するめ子にいぬきとも付也。 ひちよに 紫の上と中女人まします。 役をか V K ひ給ひけるなり。 きと中女人有り。 北山 v ふとこ 是す め子寄 つれ 15 北北 7 3 す 83 tì 3, 0 給 14 内

の符合也。

[] L 本をす R.F 舟 は。 0) 刚 舟の 分な [ii] 與舟的 國 と川 にて 上七七 ·L E. 0) 111 < 日本事也。 子をらみ 未 そたて 4 け 2) 初 3 12 カン 1)

り。 ない わか賞 館の開 をかまおほく。 誠のお カン 111 C 河 まい外 内 うへりにあらす。 1 人 旗 の子 に里の あり。 菜 150 なとの ま 名所 まと川 旬 所也。是は四次を日山の事 た。 i す 浦也 舟 1) 。照くむ海士人。し 國 國。 1) あ [ii] 嶋 の國 付 15

別の海 园 になひきに 萬葉 14: 1 17 郷に 1) TI 111 埋 れ 0) あまの て焼薬の たく 煙 源 们 力。 煙 たもなし 心よはさに

日の 心の水。 水。 11 潮 [11] 15 C まなく カン はるだ 13 111 人 il 水 go なか

か ほよ鳥と申 V つをとは 3 雅 た 33 37 身礼 す カン 上山 なしけ Es. 12 7/5 命 0) ナニ 1) 水 0) iti 5 でまな

ししす鳥。是は山からの事也。雑なり。

銀 欲やうつ。 つム 非 ぬと駒 甚 m 神 0) をは 化 0) 315 400 あり。 TI to IJ 3 975 111 路 0 7 15 72 心すこくも t 夕の異名 U もす

鳥

一鏡の宮と中は伊勢にも中す也。神明の御事也。伊勢の鏡

は二見 の前又神明山と付。

卷

T ル

+

焚

1) つほの石かみと中事。 すにて日本の中央なりとかられけり。 0 内につほと巾所あり。 田村の將軍陸の奥に下けるに。 そとに 石あり。石の面 に弓のは それより石文と申な 國府

こすの下水とはけしやらの わたしの水のこと也。

終の花。櫻の異名也。答り可旨。(経門)かぶたゝみとは神の御まへのゆふしてをたゝみたる也。(はだ)

よしといふ句に霰松原付。 あられ松原のこと。冬にあらす。 唐や緑のは なのとりくに唇紅の袖の白にふ 住吉の松原のこと也。 住

みさとくさ。 同も」の異名也。 桃の異名也。三月三日發句よし。 發句同前。 みとせ草。

明石にしるしの松あり。 春秋にしるしの松の風開 人丸の庭にあり。 はあかし の里の昔思ひ

車舟とは津國兵庫の嶋わたのみさきをめくる舟を車舟と中 すけの庭島。 野嶋か崎と申は。 つの國難波とほ 同ふてつむし。いつれも蚕名也。 りにあり。 あわちの國。つの國。近江。 近江には鹿を付也。 同 名あり。

なり。 舟わたのみさきをめくるそやはやくも移るあわち嶋陰

> し 縮嶋と中。 あかしの あわち國にあり。 句にも付。 給しまにも鹽くさ付也。 あわちと申句あらは繪嶋付へ

一浪間かしはとは海 一草衣。草の袂。捨人のきぬ事なり。 の中に岩に付たるかきと申 かい 也。

一岩とかしはとは岩のかとの白を申也。 付る也。 吉野川に岩とかしは

一玉かしはと申は海中にある石を云也。 たとへて本歌にもよめり。 玉かしはに難波よし。 おもひふかきことに

一此てかしは。女郎花の事也。 春のかしはの葉わかきは。見の たる也。本歌に萬の物の名を別に申たる也。 る。誠の女郎花なるへしと。人にしらせしかためにかくし申 手ににたるほとに。このてかしはと申なとと申ならはした

はらひ草。 夏也。 麻の葉を申なり。

撫子の岡。 大和あり。 やまと撫子とい ~ y .

梅かえらた つりとも申なり ふは正 月七日 の事也。 梅かえに付たる夫數のま

枝。 卯杖と申 若なのお調とあらはうつえと付なり。 色の糸にて十二所まきて。 る人の杖をら杖と中也。 柳のえた。 は正 H 松の枝。 七日の歌也。 三の枝を取て四尺五寸に切て。五 是はらのはつみさしたるつはきの 大内へつきてまいる杖にて有。 大内へ若菜つみて御調そなふ

ŋ 十二月の花鳥。 花鳥の歌 首つム候へ共たム四首。 定家卿御門の勅によつて花島申定にれしな

春三月柳櫻に藤のはな鶯き」す雲雀なくなり

夏三月卯花盧橋撫子に山ほとゝきす水鷄鵜の鳥

櫻を干種とよめる歌在之。古今三番目 秋三月女郎花萩すゝき鷺鴈かねにうつら鳴也 各三月殘菊琵琶に梅のはな鶴鳴わたる千鳥をし鳥 E

四

春の色の千種なからに見えつるは棚ひく山の花の陰かも 映花は
干種なから
にあたなれ
と誰かは
春を恨み
はてたる 已上。

光源氏十二文名。 宮にては忘文。 石にてはもみちかさねの文。まつらにてはらすやらの文。 野の宮にてはあやめかさねの文。難波にては蓬生の文。明 け文。かつらにてはむすひ文。小野にてはみちのく紙の文。 たの里にてはこさしの文。 初瀬にては新妻文。 須磨にてはしとの文。字治にてはうちと 横川にては紫の文。 伊勢の野

> 正 月。 下中上

= 月。 下中。上。 米子若 の日茶 衣衣。。 梅の衣。

三 柳の衣。 つゝしの衣。 花椿の衣。 小族の衣。

驚のねすり衣。

月。 月。 下中去 下中上 卯の花衣。 かは 櫻の衣。 胨 C の裏葉の衣。 はりの次。 あふひの衣。

月。 产中之 夏山の衣。 かきつはたの衣。 あやめの 衣。 撫子 夕ひきの衣。 の衣。 花しやらふの衣。 蟬 の羽 衣。

Ŧì.

六 月。 下中上 あをかえての衣。

夏蘆の衣。

月。 棍葉衣。 床夏のころも。

七

月。 下中。 下中上 荻の葉の衣。 千種の衣。 紅葉のの衣。萩の衣。 女郎花の衣。 き」やらの衣。

菊重の衣。 鹿のはしり衣。 稍葉の衣。 椿衣。 鶉の衣。 かやほの衣。 鴈 0 衣 かり田 ひをの衣。 の衣。

九

月。

八

第 百 九 + 梵 燈 庵 袖 下 集

十二月衣名事

千六十三

第

24

九

十二儿。 ---]] 下中上。然の羽衣。 Л 下・、なのな。 霰の衣。 もやの梅の衣。 水鳥衣。 木葉衣。 枯野の衣。 霜の葉の衣 氷の波の衣。 松の雪衣。

松はいわこ草。雲見草。二葉草。手向草。都草。めさし草。 **夕かけ草。常磐草。とかつり草。琴引草。** 

木草の異名の事

一梅は匂ひ草。かへはへ草。色か草。此花草。香取草。五種 草。

柳はねわか立。 櫻は春さけ草。 川た草。 糸引草。

槍はみこさは草。

牡丹はよしろ草。 桃は三千世草。

名取草。 ふか み草。

弱はよろひ草。 桔梗は一重革。 なさり草。 あつかひ草。

荻はねはくな。たはふれ草。風もち草。月見草。そまな 草。

杜若はかほよ草。

仙翁花はとふはい草。 我はのなみ草。 萩はそとなむ。 はあり草。

夕頃は玉かつら。

いぬ栗はころく わすれ草义一説忍ふ草とも云。 立立

行はつみまし草。

一
方
流
は
花
か
つ
み
。
あ
や
め
な
。 蓮は水の花。 はねす。

からすはひもす鳥。 鵬はかしと鳥。 鳥の異名の事

鶏はゆふつけ鳥。 千鳥はいそな鳥。 きしはかほとり。 くれは鳥。玉さかとり。をしかい鳥。 いそかし島。

<

爲は時しり鳥。百千鳥。春つけ鳥。 たかけ鳥。 かけの をとり。

もまをはむさんひ。

かさきと云。

施は紅葉とり。 狢はしなかとり。

とむはうはあきつむし、

盤は夏虫。

かたつふりはつふなめ。

梅の燒物。菊の燒ものはたき物の名なり。

いな舟いつくにも可有候哉。いやと云てうらみたる心にて 龍田姫おとこ也

芦若のららは和歌のららの事に候。 いねにあらす候。

行幸小馬可有饒哉。 は車にめし候。 尤也。行幸はこゝにめす也。供奉の人

かさ」きの橋秋也。 つとまりとは水神の事候。川社も同前候。

六花雪の異名也。六田の花共云也。

100 式津の里。 式つの神。式津の松。住吉也。式津の都とも申

波間かしはと云事。 付へし。 歌に。 海中にかきと云貝の事にて候。難波に

鐘の御嶽。瀧の都。吉野の異名なり。 難波めか浪まか しはを取ほとに目もくれかるる袖の月影

ッ ホノ石 ふみ。是は石に書たる起請文也。 ツホと云郡にあ

卷

第 四

百

九十 Ξ

**姓** 

庬 抽 下 集

1)

一生田 候。 の才三鳥。木にて作たる也。 生たるやらにはすましく

一ねこを命婦のおとゝ云は。 命婦は五位也。

おと」は殿と云

おきな丸とは犬の事也。

一生て七才まてを見と云也。

天子のはかをみさ」きと云也。

ひるむしとはひるもと云草也。 歌にみくりと説はすけのと也。

ゆの葉のことくとはわろき小袖也。 したときとは物なとはやことに申者也。 ゆすのはに

似たる衣

也。

一やうきとは柳のうつは物也。築を入る也。源氏物語にも見 一三重扇五重扇とも云也。梅の三重かさねも扇のことにて候。 薄やらにて上をとちたる話の數を幾重と申也。

本歌に。 4. の發句 四 ふくやあみたか嶺の秋のかせ 被申候 かんちかくに候。此所にて余載はい

阿彌陀か敬とはせ

V

かっ

杣

下

集

一方ち松とは篝火のこと候。一花の木と云は栫櫻はあしく候。花と計あらは尤候。

八月四日御祭。御延生日也。(連歌)むかしをしのふきさら一北野は宮寺共云也。朝日寺と云有り。二月廿五日は持日。

め昏ょうち昏也。

一うるさくとはうるはしきとと也。め野はうち野也。

|あすはの神。神宮わ。かまの神の事なり。歌に。

鉄。仙郷に何の菊か有ましく候哉。

は
、人界さへ五色の菊

一体の出しは難波の図のなにはにあらす。大和の難波也。一あかを夜分に用ましく候。あかは水のほんとに候。一あかを夜分に用ましく候。あかは水のほんとに候。

一うなひ子十二三まてを申候也。みとり子七はかりを申候。一初瀏に里有へからす候。

一門松と有候哉。八代集なとに見えす候。爲尹卿被讀候。一尾上名所にあらす。みなせ。たかまに候。

## 連歌部廿四

宗祇袖下 常德院殿

進上

综

祗

とも案し返しく、。よき付合なと引合て。うつくしく長高 抑一座の行様の事。いか様にあそはされへく候哉。いかほ く候。御たくみ日出度候 さたあるへく候哉。案し返し候へは。こされ候連歌すくな て。めつらしからすとも。ことはさはやかにかるくくと御 かにもくへかるくとはしめ。取つきたらん付合をすてすし くあそはさるへく候哉。千句の行様の心もちの事。是はい

八代集并伊勢物語萬葉源氏。其外種々之內を追候也。 面の行様の事。口情事共取出しもとめられては如何にて候。 かるくしとうつくしく御さたあるへく候哉

> 一あねはの松とは女にたとへたるを云也。人ならはとねかひ 一せなとは男のことなり。

同たるなり。 一髪あけとはひんをそく事。一あさはかとはあさくはかなきことなり。一あさはかとはあさくはかなきことなり。

一人をうけへはと云事。のろひたる事なり。わろくいふ事な 一賀とは。花の時分賀をは花の賀と云。賀とは老親なとに物 を出は喜の事也。雪の時分の賀をは雪の賀といふなり。

一ともり江とは。ふる江なとの事なり。 しはしと云事にもあり。物によるへし。

あはをとはあはせたる糸の事也

卷

第

祇 袖 下

卷 第

してのたをさとはほと」きすの事也。

ぬさとは榊の事。手向物也。 也。後に河になかす物なり。 大ぬさも同前也。 みそき入物

日くはせとはめにて心をかよはす事。

次たちとも。 又次とち共。何もくるしからす。

事也。 玉むすひせよとは。らかれたる玉なとみて。きしなひたる ひとにこひらる」には。下ひものとくる事也。

1)

玉かつらとはなのかつらの事也。

ぬるめとはぬれたる事也。 (元酸素) 山かつらとは峰の績を云なり。

一もぬけの蝉とは身出たるせみの事也。かくみえたるを申也。 一はゝ木々とは。森の柎にすくれて。そのなかによそよりた例かりにたにとはかりそめにたにといふ事也。

一ぶりはへて行なとはわさと行事也一いきすたまとはいきりやらの事也 いきりやらの事也の

云也。 源氏須磨あかしなとの躰を。 からの あやに

書給ふを

寫翰と

けしきはむとは色のみゆる事也。

玉かつらの卷に。こかねのかめに山吹をさして。枝にてら をつけたり。 (!かね 0 か めに梅をさして。驚をつけて秋

> 一たき物合の事権かえの卷にあり。 の御かたへ。しなさための事物の様を定たる事也。

字治の橋姫とはらはそくの御むすめ也。字治にとはす語付

一郎のゆかむと云い 源氏にあり。 東男壁らち ゆかみてとあ 也

一驚と時息を一句にむすひては。時島へひかれて夏になるへ

一いさや河。舟なとのなき河にて舟付へからす。し。假と霧とむすひてははるなり。

小川也。

らつられ。 みしかき衣の事

立田河に舟付候ましく候。小河にて候。 ちいさき袖の事也。

かさ」きとはちいさき鳥の事にて候。かさ」きのはしとは。 島二つはさをならへて。橋にわたし候事を申也。

みた山まつり。 七夕に付へし。

あつまかきならしてとはことの事也。 難波をつられてなと」は歌の事也 おみ衣。神祇にて候。冬なり。

むくさとは是も歌の事にて候

むつの玉のちりと云事も雪の名にて候。 むつの花と云。雪の事にて候

一花の花過でも。 舟岡 衣河。 ひむろの事。 九のしな河とは くち木と云句に杣と付て。 生田と云句に森と付て。又森の名所に不 秘書也。 八代集。 世にか」つらふとは世にか」はると云事也。 何もきぬと云句に付へし。 きぬ 語と云句に御付候へく候。是は何も物かたりの名にて候。 物語と云何に。はま松。岩屋。 春日のうちに武蔵野と云在所 たまたすきなる戀とは。戀ちかひたる事也。 83 K る玉と云 ili わかな一色。卯の花。 と云句に。 のこりたる鳥の事也。」他つき。 衣手 源氏。 御舟山。 の森。 山は夢の 浦にあるにより。 さん雪をわけ可嫁あらす。 萬葉。 花の草の応。 こくらくの事也。 春は若菜。すみれ。 舟と云字に五句 事 衣と云字に五句 にて 仰勢物語。 候 又杣の 秋はあさかほ。落栗色。こほり。 是は皆々衣の名にて鉄。 花の草枕有へ 水邊に可嫌。 有。 たけとり。 名所に不 可 可 其外様々事集たる歌の道 春日に付へ 娘 うつせ。 娘 įΙι ふき。 可付。 可付。 すもり。(鳥のす か様之事を物 夏は ひすへ なって 一夕されは。 他ラ連 。こ歌 践物 とまや。 幾山とはする也。 こよなけとは鳥なとこよひなけと云事也 たち花 駒 袋と云はもは あふなく。 かさりちまきとは五月五日の たな」し舟とはちひさき舟のこと也。 なそへと云はなせと云事也。 みそかに。 けちめみせぬ さすらふる身とは。 心の杉。 には染あり。 ろくをやるとは物をやる事也 V のたなわしとは馬引者の事也。 つらとは何 の娘様。 の香を あしゃ。 とゝろの松。定たる心の 心なき人はらき世に身をすてゝ タへされは ひそかにとは物をか 野には発なしとしるへし。 花 カコ よきと変なり とは色をみせぬこと也。 れはと云事也。 まの 人。 面にこのむへからす。 幾野へはわろし。 世にすてられたる者の事也。 11 H よきことは也 也 と云事也。 根。 水湯 ちまきの事也。 但物による す事 事 かね 也。 の事にて候問。 うき世小

Ш

卷

第

29

百

九

+

宗

机

袖

下

千六十

九

下

今はとてと云ことは今をかきりと云事 也

いやなおもはしとはいやおもふまひといふ事也。

年ふとは年のふりたること也 しはまてと云はしはしと云事也

風のまにくくとはかせの間の事也。 ま」とも云。

野々宮。 神祇なり。

山の姫とは山の神の事也。

さほひめころも。衣裳にあらす。

しはくもと云はしはしと云を也

たく火。夜分にあらす。

かけはし同前也。 山類也。

いはゝし。水邊にあらす。

瀧津瀬とすれは水邊也。瀧とはかりは山類也。

雲のつくみとはなる神の事 事也。

室のやしまは山類。水邊にあらす。

紫のねすりとは紫にてかり衣を染たるもんのある也。 めし候也。紫のねすりの衣。おもしろき詞なり。

つゝし。卯花。木也。藤は草也。

一槓と云ふ字に木きらふへからす。但槇柱。まきの戸には木 の字五句可嫌。

ほからくとはほのくと云事也。

給ふ扇とは四月一日の事なり。 なきさしよる。 よきことは也。 しはをき字也。

花の兄とは梅のと也。花のおと」は菊のとなり。

菊の水とは酒のことなり。

花のうれとは木すゑの事也。

名所に三の風あり。初瀬。佐野。あすか風。 名所に三の山陰有。須磨。字治。小野。

四季種とは撫子の事也。四季に花咲故也。

鏡四季有。春は大根。夏は紅。秋は槿。冬は松也。

名取草。廿日草。隣草。何もふかみ草の事なり。

山橋。

さいたつまとは いたとりの事也。

青葉のこすとは大裏に四月一日よりかけたまふなり。

IJ, 白衣とは四月一日衣かへの事也。連歌にはしらゑとするな ねりぬきの事 11

君の もみちとりとは鹿の にしきとりとは戀の中立の女なとの傳のこと也。 事 也。

うみの宮とはりらくらの事なり。

大和河とは初瀬の川のすゑの事也。

櫻の宮とは伊勢内宮の事 也。

竹の宮ことは伊勢務宮の御事也。 さくらはの宮とは小野の御事なり。 袖 下 はつあらしとは七月一日に吹かせの事

卯月の雪。

卯月の花。

うの花の事也。

初瀬めとは女にてはなし。山姫也。 なにはめとはいやしき女の事也。

Щ

神の事也。

紫の庭。 萩の戸。 大内の庭の事也。萩の戸付へ らへ 物也。 萩 のとは大裏の庭に植 たる淡の事

松の花。 初春也。 百年一度つく咲也。

旅にて故郷の躰を思ひ出したる躰をは面にも仕候哉。 松 葉初春也。 緑立。若緑は疹也。

松のみ

Ł

也

岩枕とは七夕の逢夜の枕の事也。

秋さり衣は七夕の

別

0

衣

の名

にほてる海とは水らみの事也。

をしてる海とはしほらみの事也。

吉野の栖とあらは腹赤と付へし。うをのこと也。 たみ草とは百姓と書也。 百姓の事也。

千琴の小野とは宇治の里に有名所也。

植物にあらす。

をのくみなと。伊勢にあり。 かけろふの小野。大和にあり。

夜さむのさと。 きそひかりとは五月五日蘂のために萬草をとることなり。 松風の里。 ね覺のさと。 名所也。二萬の里

よふこの渡。よふこの島。唐舟の留り也。松浦に可付候。

此分私云。)

松浦に鏡の里。鏡の宮。ひれふる野へ付へ

ひかたの鏡。伊勢の神明也。是紀國に有。伊勢に紀國付へし。

備中に有。御訓物付へ

竹浦。竹橋。竹のとまり名所也。 竹の里。名所也。備中 にあ 1) 加賀國に有。

臆の清水。春にてはなし。名所。大原のさとにあり。 霞のほら。 大内の御事也。 春なり。 あきつの小野。 敷津の宮とは住吉のことなり。 うちの花合。草つくし。 宇治の花そのとは秋の草の事也。 寫樣相違敗。 天の名種とは。 やすのわたり。 庭の琴とは大裏にかし給ふ琴の事也。 みちのはし。 あしかきの宮。 宗祇は住吉異名云。) 七夕のはしのこと也。 住吉の御事也。 七夕に大内にて万 實物 事に移てかし給ふ 浮津の河。 何れも吉野の異名也。(宗砌如此。 同秋草の事也。 天の川の事也。 (宗砌は吉野にありと云。如 木葉の與とは湖の沖のことなり。冬なり。 松の初みとり。 りとはかりは雑也。

瀧の宮。

なにはのをほろ舟とは難波天皇のめされし御舟事也。 (歌

志賀の花そのとはまことのさくら也。(歌有。)

須際 なれときねんし給事也。 の風まつりと中 は 花を風のちらす間。源氏かせを靜

なには草とは芦 の事

露取草とはいもの はの事 也

रैउ にのして草とは しほ んの事 也

須磨の山さとに梅菊を付候事。行平源氏より三年さきにす み給ふ。 梅菊をらへてなかめ給ふゆへ也。

すまに松島を付へく候。(歌有。)

初瀬のあま小舟の事色々申候。昔大海なりし時。初潮にこ B り江とも付候也。 告大海あるによりでなり。

霜にかねを付事。 夜になり 候也。 唐にほられいと云山寺有。 此鐘かならす

鵜戸の岩屋名所也。 つくじ神の古跡也。

千鳥冬の 生 類にあ らす。 名所 11 Ш 瀧

琴引のとは八幡御いもうと図の宮ことは國の守護所事 1

らとの事也。

なにかし寺とは鞍馬山異名也。 玉たれ姫とは高良 山 に御座也。 ぬれせぬ山とも申也 源氏の大將いまたいとけな

> わらはやみとはよりあひなり。 くて手習したまひける寺也。 わらはやみとはおこりふる

ひやみ の事 110

取野。 名所。 初 内 國に 有

若草山。植物にあらす。 河内に あり。

春日野にあり。

春日野に付へし。

驚の

驚の瀧。 にあり。 高 良山にあり。 高良山とは高き山なり。 ちくせん

一日もすとり。 里のあま。 歌有。私云。) 名所。 Щ からの事なり。 阿波にあり。 へ山からふしん。からすに云 只あま過でもすへし。

河つるみとは七夕の異名 11

一石文とは。田村將軍 鏡の宮。 書給心仰事 仲勢の神明御事也。 411 陸 原の図 二見前。 へ御下向時。弓の上はすにて 神路 に付 へく候。

こすの下水とはけしやらわたしの水の事 也。

霰の松原。

冬にあらす。

住 吉に有

松原の事也の

あ 御さけたねとは桃の花の異名也。 かし 0 L るし 0 松の事。 人丸の跡の松の事。

明石

に付合

野島か崎。 候也。 淡路津國近江三ヶ國有。津國は難波あたりに有。

車舟之事。津 すの名也。 の國兵庫嶋和田の御崎を廻る舟の事也。 同筆つむ虫。筆つむし共する。何もきリー

**給嶋とは淡路** の國に有。須磨明石藻鹽草付へし。

浪間柏。 かいちらの岩に付たるかきと云貝の事也。

玉柏と計は海中に 岩戸柏とは岩のかとの白きを云。 波 を 付へし。 ある石の事也。思ひふかき事付へし。 乳色

吉野に付へし。

此手柏は女郎花の事 也。

なてし子の岡。大和の國に有。大和撫子といつり。

卯杖とは 正月七日大內へ 御調物そなへて 参候人のつく杖 梅かえうたふ。正月七日に大内にて梅をかさして舞事也。 明の方へさしたる松椿枝を取て。四尺五寸に切て。五

櫻を千種と云事。古今三番めの歌也。 色の糸にて十二所卷てつきて参る也。

あこめの琴と中事。人丸東へ下給ふ時。武藏野おはなのさ たる故に。 とに三年住給ふ時作したまふ故にあとめと中也。東にて作 東琴共申也。

すまに鈴舟を付候事。源氏のめしたる舟の事なり。 百千鳥とは鶯の事にや。 但初春は萬鳥の事 すにやっ 句の躰に

よるへし。

夜かれとはひとのとは均事なり。

草のよられてとはする也。 鹿の車有。ひつしの車あり。 相坂の隔とすれは山類也、相坂と計は山類をのかれ候 さはりと云は。ひとの事を心にかけて。ひとのとはぬ事也。 かすむ夜とは。月ともあくるともなくてはせぬ事也 よれとはせぬ也。 「ら脱敗

連歌のとめはに道のへととめぬ事 山ふかきに案を付ぬ 河そひと」め ぬ事也。 なり。 かね 0 ねとせぬ事也

五月雨と」めぬ也。水香とせぬ也。 住古と計は水邊をのかれ候。 おもひたかふ事也 但神とすれ 水のをと」はする也。 は水邊也。

あやにくとは わくらわとはまれなる事也。

わきもこかとはわかおとこの事也。 玉くしの葉と云は楠の事也。《歌有。》

夜嵐とせぬ也。さ夜風。夜半の嵐なと」はよし。 連\五文字に いかしせんとはせす。 6 かに せんとはすへ

三ケ月。出る時分也。 さえかへると計はせぬ也。空共新月ともすれはよし。 るは夜分なり。

卷

一たらちねは親なと又人のむ所の事也。 一有明のいるは時分にて候。

一しのゝは草とは篠の様にて冬かれたる草の事也。一たはれめとはけいせいの事也。

一風の吹なへにとは吹まゝにと云那也。 花なとの吹なへに。ちるなへになとゝはちる時分の事也。 一なみなと打たえにとはらつ時分の事也。たえたる杣にも有。

こゝらの露とはつゆのしけくをきたる事也。

一たゝまくとはたちゐの事也。一をふたにとはそれをたにと云事也。一むへとはたらりと云事也。

一とよのあかりとは日本のあかりの事也。

住ゐたる事也。一とはに浪とすなとは常に浪のこすにて候。とことはとは常

也。

一さりけなくとはさやらにもなきと云事也。一めつると云亭は。花紅葉月なとを見おもしろきと云事也。

玉ほことはみちといはむとての枕詞也。けたれぬと云はおとらぬと云事也。さりけなくとはさやうにもなきと云事也。

り。

一かくる所なと云事は上と云事也。 一かく計と云事は此やらなると云事也。 一かく計と云事は此やらなると云事也。 一かるころおひとは女なとにひとの男の有事也。 一ふるころおひとは女なとにひとの男の有事也。 一をしとは大内せちゑなとの時火をたく役人事也。 一をしとは大内せちゑなとの時火をたく役人事也。 一たなかすは三月三日の事也。 一わきかぬるとは物をわけかねたる事也。 一わきかぬるとは物をわけかねたる事也。

一鴈のつはさにならすかせとは。かせの時分順の飛事也。一たゆむと云は風なとの吹たえたるなり。たゆる事也。一いやとをさかると云はいよく、とをさかる事也。一しのゝめとは夜明方あしたとくの事也。一かりかねなとの [\_\_\_] 云ははやき事也。たゆる事也。

しらぬひとはつくしといはんとての枕詞也。

袖

下

たるひとは水のそとひたる事也

らは玉とは夜るといはんとての枕詞也。

へらなれと云はさやらにあると云事也。

わかせことは我かおとこの事也。

あやまつ。あやまたる」なとは。 めかれぬと云はわかぬことなり。 しらぬ事也。 一重に待事也。

しかあれはと云はしかるにと云事也。

一花みかてらはき詞なり。 おりてめとは花やなとおらんと云事也。

雪のきえかてになと云はきえんとすると云事也。

花の香をぬすむと云事しきこと葉也。 なけの情とはそこの情の事也。

とゝらなくとは鳥なとのしけく鳴事

あかなくにと云事。 あかぬと云事也。

おりはへてなくとは鳥なとのしかとして鳴事 いとはやとはいとはやきと云事也。一字略の心へ也。 也。

わたつみの事。

らみの事也。

なへて雪ふるなと」云。 けぬか上にとは雪の消ぬか上と云事也。一字略也。 をしなへてふる事也。

つゝらおりの道とはしけくまかりたる道の事也。

闘士とは闘もりの事也。人類也。

鷹のを山。 名所也。

あさると云はかりする事也。野をあるく事 也

一あしろきにいさよふなみと云は。あしろ木に浪のをとつれ たる事也。たゝよふたる事也。又やすらふたる事也。

雪として秋の物を入たるは冬也。霜にひかれて秋のたらく を入たるは秋也。 霜は四季にあるにとそ。かりかねさむし。

秋なり。

あつかひ草とは人の上の事なり。

一玉きとは女房の手にぬき入たる玉を云也。

業平名少々。東男。まめ男。 ひらの名也。ひすへし。 ねゝ男。豐成男。 何れもなり

かさ」きの橋。 七夕の天河はしの名也。

星の舟。七夕の舟。何れも水邊にあらす。

遠里。遠野。名所也。とを里。遠野。何も一所也。 たけかりとは九月八月松葺を取事を申也

木の葉の里。山しろに有。冬にあらす。

ひはら。

ふりたる

事也。 老に檜原を付候事は只檜原の老の事也。

戀の句一句すへく候事口情候 夢人とは夢まほろしの事也。

11 もきかそまの事。 しけりたる山に似たるを申也。 Щ 一類に

7:

めもあやにとは あらす。

水のむしろとは水に莚様にもんの有を中也。

水すたれ同事也。 也。 かせの吹時。そろくともんの有を申

花の古郷とはちりはてたる枝を申候也。

袖の香戀にて候。

夕ところきとはゆふ暮にむねらちさはきたる事也。

Ш かつらとは曉の雲を申也。

歌と過てことのは折をかへすへき也。 戀の山水之事泪の事 也。 思山もたかき事也。

みさをの事。つねなると云心也。又わたくしるなしと云事 にもあり。源氏にはあたなる心にもみえ候。

あ せの事夏なり。

清水の事。せくともくむ共候はねは雑也。

おとろ草。 夜た」とは夜もすからと云事也

岩に石の事。 まるなりて可能なり。たく草の惣名なり。

石に眞砂同前なり。

华天に空と云字。 世に代の事。 五何可嫌。 五句可疑。

> わりなしとは無理と云こと也 人のためとは 人すかしと云事也。

虫のなくに。人のなくには折こしを可嫌。

薄におはなの事。

おもてを可嫌。

ねやと候折に。 雪をれの事。竹共木共候はてはいかゝにて候。 ね沙汰の事面を可嫌。

雲の上そひきなり。

夕立に夕への字。 五句 训 城

氷と候折に月の氷。おもてを可疑。

わさ物之事。打こしを可嫁。

**掌のふりは。月のふりは。** たム風依也。

をそき目の事。暮る、事也。 岩かき。居所にあらす。

水息に干とり。 灯候折に火の事。 面を可嫌。 折を可嫌。

河すみとは川のすみを云なり。 つまと候折にいもの事。 面を可嫌。

雲水とは只雲水とニッつしけたる事

身をしる雨の事。 候とおもふひとの 身をしる雨といひならはし候。 いひし。 **が勢物かたりに。** されはこなたをおもはぬ故なれ 雨ならは まいるましく 祇納下

一命過て玉のお。折を可嫌。

一族ねと過てかりね。おりを可嫁。

一手向物の事。一句にそのかん候はてはいかゝにて候。

すみれ摘。わさ物にあらす。あそひ物也。

一行。打こしを可嫌。

**励之事。關を守る共。椚候へは厳にて候。さ候はねは國の** 

一外山の事。山にねて山のはしを外山とみる事也。

一さはと云事。さやうにとかと云事。一座に二ッ有へく候。一いつしかとはいつかと云事にて候。

一ひちてとはひたしてと云事也。

みらむとはみるらんと云事也。

き間。おりけれはと云也。

道行ふりとは道ゆかん次の事。つれたちたる人也。一野守とは野を守者を云。春日にあり。(歌行。)

あへない事也。思にたかふ事也。あやにく同前にや。又のかなはぬと也。思にたかふ事也。あやにく同前にや。又一あやなしと云は本はかなしきと云事也。あちきなく思ふ事

たれしかもと云はたれかもと云事也。しはをき字也。

はきてとはのそきてと云事也

やよやまてと云はしはしまてと云事也。

ことならはと云事はかくのとくならはと云事也。

一くれなはなけとは暮たりともなかるへきかと云事也。一しかもかくすかとはさもか(すかと云事也。

駒なへてとは駒ならへての事也。

一いつはとはいつとの事なり。

一なかなくとはなれかなくと云事也。なんちか鳴と云事也。一なりなめと云事はならんすらめと云事也。

一うらひれとはうらふれと云事也。又物おもひたえたる事。一いなおほせ鳥とは庭たゝきの事也。せきれいの事也。一とゝろきとはうこくやうなる事也。

一枝もたはゝにと云は。えたのたをみたる事也。しなへふれと云も同事也。

た夕の事をも云なり。一あさなけとはあしたにけてかへる事也。又物によりてあし

冬こもりとは草木の雪にらつもれたる也。

一なりしとはなかりせはと云事也。

一いさゝめとはかりそめと云事也。

一いさなみとはそつしと云事也。

あやめもわかぬとは物の色をもわかぬ事也。聲をわかぬ事

F

也 第 四 百

也

一雲のはたてとは雲のはたににたるを云事也。

ほつ枝つほめるとは枝梅のつほめるを云也。 ほつ枝とは梅の末の枝を云也。はつえも同事也。

よるへなしとは立よるえんもなきを云也。

するつるにとはおもふ事かなふ事なり。

今しはと云はしはしと云事也。一字略心也。

はしに我身のなるなと」は橋たてになると云也。 いとなかるらんと云はいとまなかるらんと云事也。

花まいなしとは。花も人の云なしにこそ賞翫もすれと云事 也。

一めさしとはいそなつむ女わらんへの事也。又みるめなとつ み入る籠をも云也

けゝらなくとはこゝろなくと云事なり。

紅 物のこゑのしらへ上たるを申也 よこほりふせる山とはよこさまにある山の事也。 のふりいてしとはいよくくまさりたる様なる事也。

は入にたてる柳とは門の入口に立たるを云也。

夜とこれとは夜るふす床の事也。

八そ氏人とは八十氏人の事也。 有。) (輝按に武士を云也。古事

> 八十氏川とは宇治川を云也。 八十氏人と云也。 それについて字治のさと人を

一そよみなくわたらんとは。水ともおもはすわたらんと云事 也。

一野もせとけ。野もせ。庭もせ。水もせ。 図もせ。

是皆おも

てにみちくてあまれきよし也

たはやすくとはたやすくと云事也。

遠山すりとは遠山を衣のもんにする事也。

花すりなとみな同前

一蘆つ」とは蘆の中にらすやらの様なる物の有を云なり。 一すくもたくとは藻くつをあつめてたく事也。

一二ともりかいことは。同まゆに二ともりたるを云也。 物あらかい。又らへしたある物にはすの葉付へし。

鶴の林。釋伽佛御入滅の事也。八十一年。

しつはたとはみたれたる事也。思覧たる程と云 由也。

なり。 まさきのつなとは。まさきのかつらをつなになひたるを云 翁さひとは七十中納言事也。 老の後花やかに出立たる也。

思ひのつなとは思ひふかき事也。

こきむらさきとは一位二位三位まての袍を云也。 あとらかたりとはさそく かたりの事也。

あまる鳥なとは物をはむ事也。とめる事也。さくさめの年とはしらとめの事也。

一櫻かりとは櫻をたつぬる事也。

一ねこしてらへしとはほりてらへたる事也。

也。
し
っ
す
さ
む
と
云
に
も
。
は
の
す
さ
む
と
る
に
も
。
は
の
ま
さ
む
と
る
に
も
。
は
る
は
と
の
ま
さ
む
と
る
に
も
。
は
る
は
る
は
る
は
る
は
る
は
る
は
る
は
る
は
る
ら
な
る
ま
む
と
る
に
も
。
は
な
と
る
は
る
は
る
は
る
は
る
は
る
ら
な
い
か
に
も
の
ま
な
む
と
る
に
も
。
は
な
と
る
に
も
。
は
な
と
る
に
も
。
は
な
と
る
は
る
は
る
ら
く
吹
事
也
。
せ
さ
む
と
る
は
る
ら
く
吹
事
也
。
す
さ
む
と
る
は
る
ら
く
吹
事
む
。
す
さ
む
と
る
は
る
ら
く
吹
事
む
。
す
さ

きち論に候。木のあはをもうたかたと云也。 もち論に候。木のあはをもうたかたと云也。

是はいつれも大裏の庭也。一藤つほ。梅つほ。春にてはなく候。同なしつほ春にて候。一驚は夜るなかす候。蟬もなかぬ物にて候。

一むさしあふみとは。武蔵近江より天子へ昔参初し物を。そ一かのこまたらの雪とはむらく~の雪の事也。

現在。 かへてわれららむへしとはおもはぬに。 人こゝろよもかはらしとおもひしに。一にととまるてにをは過去。現在。未來有。

り参初しかは。しなのまゆみと中也

の國の名をよび給也。武藏鐙と中ならはし候。弓は信濃よ

月や花夜るみる色のふかみ草。 おれからき人のこゝろのしられぬに。

高かくる裏の夏こりのいりで

鳥かへる雲や霞に日のいりて。

にて候間。てと留候へく候。留るましく候。但末にとの字入候はゝ。との字はおさへ字留るましく候。但末にとの字入候はゝ。との字はおさへ字一そかよの三字之事。口傳。一句のうちに此字あらは。てと一今ははやとはしと月に鳥鳴て。

一山の遠やまつくれぬらん。先とニッ。暮ぬらんと五。是はし。たけ高くうつくしく。うるはしくなす秘曲也。

二五と申候て。連歌ふし立候てわろく候。

お一ふしに候あいた。うるはしく候。五のやうには聞え候へ共。初郭公山時鳥なとは。くちのう五のやうには聞え候へ共。初郭公山時鳥なとは。くちのうち四と申て連歌うつくしく。たけ高くふしもなく能候。二山の遠や夕へなるらん。夕と三ッ。なるらんと四ッ。是は

にてのうらはかなにて候。此故に發句のかなと候に。第三し候て一哉と御留候御發句をよみ無くたし候て。 ごえ候はすとえ候はゝ。 きれた ると御心 得有へく候。 きこえ候はすとえ候はゝ。 きれた ると御心 得有へく候。 きこえ候はする人様の切字の事。もすそやぬれしよとなせり。如此字入候一發句の切字の事。もすそやぬれしよとなせり。如此字入候

大廻り發句口傳。 ににてとはせぬ也。 御分別あるへし。

花は非」心も柳はかみをときつ風。

ゆるし色とは少くれないのうすき事也。

やよ時雨とはゑいしくれと云事也

戀すてふ。哀てふなとは。戀をする哀をすると云事也。

大みれの事。春入をは順のみね。秋入をは逆のみねと云事

やすみしるとは。おほやけは八方をしろしめさるれはその 君の御事也 とはり也。 ゐなから萬方の事をおほしめし御しり候事也。

つかのまとはそとのまの事也。

ち川。 十五日はもち月。十六日はいさよひの月。十七日はたちま きは有明也 十八日はゐまち月。十九日はねまち月。 廿日よりさ

御わさとは佛の御ことなり。

おさくしからすとは。おとなしからすと云事也。

かいまみるとは垣間よりみたる事也。

ひたふるとはひたとよる事也

なまこゝろとはやさしき事也

さしも草とはよもきの事也。

かつみ草とはあやめ の事也。

ふかみ草とはほたんの事也。

さき草とは檜の木の事也

かりかねと干鳥をむすひたるは冬也。

風をそてになれてとは。あふきの風の事也。 月といひ候はては。夜るはそとをみたる妹すへからす候。

一志賀の山とえ。夜は旅なり。

高砂。水邊にあらす。

三吉野。山類にあらす。

つねのともし火。夜分にあらす。

す」しきに風。一句きらはす候也。 らちこしも不苦。

花の宿。居所に二句きらふへ

かつらきに加茂を付候。其故はかつらきより加茂へ御うつ おしと留り候字。 り候間。かつらきの神もかもの御神體も同御事にて候。 しの字に不嫌候。

つれなきに無と云字不嫌候。つれなきとは難面と書間不録

松山と計せす候。松山の浪共する共仕 花にひわもす。月にひわもすなとは。終日まよひてくらし たる外にて候。 候也。 水過なり。

他國と書て人の國とよむなり。

于時實永七庚寅年六月六日書寫終

花

有墨三十二新

千八十一

卷第四百九十四

宗祗納下

第 四

續 群 書類從卷第四百九十五

## 連歌部廿五

救濟連歌。

花能萬賀喜

袖こそ梅はなをにほひける と気のに

妻木とる山里人の藤衣

くしたてたる。要木は前句ににほひけると侍る所に取付た これはいやしき山かつのことを云たるか。句は極てやさし

なくや千鳥の水さむきこゑ

なり。 たゝ一句からのさひて哀なる躰を以。前句によく似會たる これはさよ街の跡をしたひたる詞の外はことなる事なし。 舟くたすさよふけ方に月出て

うき別をはしはしといめよ

容。いかてかしはしと」めよとおもはさるへき。 誠に古郷の旅別。山さへ見えすならん。湊にて舟にのらい 古郷の山遠くなる湊舟 旅のあはれはやと毎にあり

我浜ね畳の秋にかさなりて 忘れしな山路の夕浦の秋 人の別も今は年

柳木引槍原の山の夕あらし 柴の戸の朝氣のけふり末絶て これそこたふる谷のあまひと らき世のゆめは通すもかな 時をもしらす過るかくれ家

陰家に今は終りを松のかせ

喜

以上此五句寄合は一もなし。 かくたけ高き躰なり。 只心似合詞色有て。毎句感ふ

我戀しさそ低もなき

思ねはその人をのみ夢に見て

是は只ゃさしき姿。うるはしき躰

宮古に行は心なりけり

あふ人に遠くきぬるととつてゝ

ı) ° 修行者に行會し心を含て。詞はおなし物語に。すみた川に はあらす。天性上手にては。自然に如此のこと出來ものな て都鳥に事問けるなとを具足せり。態其所の事をせむとに これ又やさしくて。而も伊勢物語。業平の朝臣字津山にて

つねにはおなし道とこそきけ

薬る駒のあしから近き箱根山

これは一向心はかりにて付たる句なり。 かる」や草のかきりなるらん

是は若紫のすり衣忍 我なみた人目しのふのみたれにて

を以付たるなり。 いさやおほえす夢をこそみれ 

河音の近き旅ねの床の山

とれ又とこの山なるいさや河の本歌也。 の入たる肝心なるへし。

此一句に河と云字

今日をこそまつる日吉とはやすなれ 忌さ」ぬまに門出をせよ

まつる心捨かたきによて。忌さ」ぬ間と云たるなり。 是は日吉と云所を吉日に取成て。門出をせよと付たるなり、

むかしなる夢の世中

又や見ん今こそ伊勢の宮作り

句趣過の金言なり。 間にて。未來の造營にあひ侍らん事これかたし。殊勝の妙 夢の世の心大事なるを又やみんと云。誠に明日を期せぬ人 一昔は廿一年にて伊勢の造宮ありと。誰もしる事なれとも。 月寒しとふらひきます友も哉

野寺のかねの遠き秋の夜

帶月と云詩をもて付たるなり。 詞はやすくしとして。心はさひてあはれなる。野寺訪僧歸

うき世の中はいてもやられす

寄合はいかなる初心も思よらさるへきにあらす。 とれは只詞をやすらかに云て。姿を優美にしたてたり。此 くれ竹のは山かくれの窓の月 かわこそ春の夕なりけり

卷第四

とれは年越しあかつきのかねを。共日の夕に又きゝて。春ねぬる夜の共曉に年越て

とくろのすちは二あるみちなりけりと知たる心なるへし。

左右肩には髪をゆりかけて

あふきの紙も匂ふたきもの これはこまかに心を付たる句なり。

陰に消さる雪か梅の花

親や我子のまもりなるらん とは扇の詩に盛夏』 所消雪と云心を付たるなり。

腰にさす片名の文字を取分で

角あるは又牛とこそみれてつく物なれは。如此なむ粉骨したる句也。かゝる躰はまてつく物なれは。如此なむ粉骨したる句也。かゝる躰はま是又こまか也。まほり刀の心。又おやの名乘の片字を取分

目をひらくたけり心はおそろしや

めをみいからしたる形なり。際に鬼拉樣躰と云は其躰に相はせる神變なり。角には目を對たるなるへし。ひらくとはゆ。うしとこそみれと云所に。人のたけりたる所を云あらこれはたけき武士なとの躰をしたてゝ。詞さへつよくきこ

同。

一良阿連歌。

萩にふくかせをなみたの初にてくるれはうかふ月のおもかけ

子をおもふ鳥そ立空もなき

是は前句の心にとれは。此草は鳥のふみしたきたるにて。ふみしたく草はやけ野のけふりにて子をおもふ鳥そ立空もなき

山からす巢をはいつくに作るらん庭なる花の枝をこそおれ

かりね少き月の短夜

にしたてたるかおもしろし。一句は常の事なるか。より所るなり。よとのと云ても同事の様なれ共。みつのを水の学前句の假ねを苅根に取成て。みしかき心に末見えてと云た五月雨にみつのゝあやめ末みえて

まむ歌の文字に枯木も花開く 三十あまりの誓たのもし あたらしく見えたるなり。 萬 賀 喜

るか。 觀世音の三十三身の誓約を和歌の三十一字の心に取成て侍 名ある人こそか」みなりけれ 猶不足なる故に。千手の賴力の心を云かたるなり。

賢をまなひらつすは心にて

主を不可嫌句也。 是は事可然外なり。 上座の人も下座の人も。初心も後心も。

霞てや月のかけさへなかるらん 花のしつくの山の井の水

これは上臈しくて。主を不可疑句なりで かへらぬしての山路とそ開

時鳥す守のかひ子うみすてる うらおもてある世のにこりか は

出て見る野守に鹿のおとろきて ほしのはしるやとふ火なるらん 蓮はのかけなる水は月もなし

すくおもしろし。 以上此三句。心も寄合も一句の姿も。さまくかけ合てや

かり人の矢前の鹿のはらこもり おやのいたみや子にあたるらん

是は興をもよおす風骨なり。 よろつの虫そ命つきぬる

朽木をもたけは夕のけふりにて

無常の心を含みたるなり。 是又趣思舒所なり。命つきぬると有に。夕のけふりと云て。

とり所なき身をそ捨つる

猿澤のいける計に月すみて

と云ことく。一の句をもて二のさるをつなきたる。只これ 身を拾ける古事をあらはせり。一の矢をもてこの庭を射る さるの水月を取得さる心を。かの池にうねめなりける女。

手たれのわさなり。

舟もなき流の砂みなきりて いくたひ法に身をすてつらん

七生身を拾けん事を思て。なをたらぬ様にやとて。法と云 彼玄弉三藏佛法弘通のために。流砂葱嶺のけしき。造々に 詞に舟をよせたるなり。至らぬくまもなきとゝろはへなる

一周阿連歌。

山のさかひもしらぬ明更

雪もふり月も残てさむきよに

初心の人にも可似合句也。和歌に見様躰と云か。 を取こみたりといへ共。更にあまる所なく。末座 これはさかひも見えぬ明更の躰を能付て。雪と月との景物 此句 の輩にも あひ

第

おなし。

よるかたもなき天の川なみ

便心。其感あさからす。 是は心哀に詞やさし。よる方もなきなと云るに。草の枕の 宿も哉ぬるよかたの」草まくら

是又同前。

拾し世はかへらぬ旅のはしめにて

あはれはことに山さとの秋

風ふけはあすのとまりに舟のきて さためぬものを旅の行末

これは巧過て。其理たちかたく其躰艶ならす。 なみしつかなるうらの夕くれ

里ややと舟の内には人もなし

これは巧みにして姿よろし。 籠の中のつるム親子のなく摩に めもあはてこそよをあかしけれ

此秀句一興の詞なり。依時心とく聞ゆへし。

梵灯連歌。 木葉ふくあらしの末のむらすゝき 又かはり行秋のさひしさ

舟出して山の渡も有けるに

カン

の所望にしたかひ侍る。

いかにそや。

うみはるしてとめくる近江 又もあはすはのちいかにせん 路

此三句あさきに似てふかし。むらす」きは見様に。近江路 法を聞人とは今も生きて

は景曲躰。法を聞人は麗躰也。

宗砌連歌。

こ」をさらてもいたるかのきし

龍田よりそれに三室の山櫻

にや侍らん。 こ」をさらて。かしこの山さくらをみたる心は。一興の躰

谷のいほりにたれをまつらん 山川に竹のゆひ橋引かけて

書加てなにくかはせん。しかはあれと今上下の二句思出し く心一を付たるなり。 てこれにのせ。いさ」か筆のすさみとし侍計也 かに世にきこえたるもあまた侍へけれと。此等の金玉共に これはまへの句。色く一道かたき詞共をうちすて」。 す。 享徳初の年神無月の比。大和國より或少人連歌の道心 得侍へきやらを書付てと承程に。草案なとにもお かたはらにみつけ侍る此料紙を取てかやうにしる あなかち此二句自讃にあらす。さす やす よは

宗 砌

馬上集心敬僧都逃

なくさめて歸ると人やおもふらん 大ね川入江のあしに風ふきて なに さひしく成ぬ松の下 さひしさそまさる山 はの事も夢とおとろけ

うたて身に捨し心やかはるらん

はあさく 顯し世に翫ね。點句とも愚案を廻し侍るに。 救濟周阿なとの 意及難き故か。 をかみ合て付給ふへし。 とは智侍る事とあり。 ならせたまはさらん。 かふまつる。 此三句當代連歌發心執行の句とて翫ひ侍り。 へとも。 此心を自得したまは」。 只言葉のかさりを付るとみへたり。 其比 一句。千句の惣長とて。當代の齊抄なとに書いて入とほりたる修行の句はみえ侍らす。 の連歌の心修行いたらさりける也。 只我といく度も吟し合て。前句付句 人の数に寄へからす。但てにをはな 昔中つ比の好士我もくと付合な なとか此道の好士に 心のふかき事 恩老も 少々句を 同 心つ 愚

> より 11 にい つか V つつへ きと云句に

10 かたの 何所詮に苔の 殿の苔のしつくのたまり水は。 さのみ別の口傳有へきとも存せす。千言も一音の悟と申と くて上洛す。 種々の口傳有とて。 物語なれ共の に眼を晒し。 はゆかて言葉をおかし。 にあらす。此程の好士のか」る言は面白珍しとて。 上にあらはし。 長にて侍りけん。當代は如何にも心の深き輿を尋て。 といひ付侍る事曲なし。 雨を待心しかるへけれ。遠山陰の岩尾のたまり水。 心ほしく 此句打開侍る心はさも有らん。恩意は明かたくこそ存れ。先 此道は心より取よるを第一とす。 を待岩尾 H 々祭し給 可 もし恩老か事日はつかしく存す。 たまり水雨を待と付待るそ。 近代集に書洩 五音相通に至ふかく説々なるへし。 生異の魚。花遅き梢なと、云句に結び入て社。 縱雨洒水たまり。里迄流れ出へき事もいかん。 古事を下に含めと云り。 岩 ئ. ~ のたまり水 年京都より関東へ下向の好士着事な 但其比の名句なれはこそ千句 つはきをなめたるつひつきの句句 したる事計注す。 何の故に雨を待といへる線 句の修 大方に學ふへき道 或は早苗採ひ 常世の連歌に 行かなひなは 前々 長々敷御 少も心 雨を待 に申如 理を の惣

むかし攝政家に二日千句與行有。 千万點を取惣長の作者に

卷 第 2 Ħ 九 +  $\pi$ 馬 上 集 注す。

句に。 多といへとも。 侍るへし。 捨て前句を申へし。諸人句を出す共。指合あらとてかへし は気なり共物長は 凡公家武家諸大名の連衆。 若物長あらは當代は所知得。末代には名を殘し給ふへし。 句惣長の事如何思召給ふそ。可申合心中にて夜陰に夢たり。 に夜更人しつまりて忍行。 はさやと天下にあつかひ侍る程に好士也。 をも諫慰らるへしとて。 なれは一番に飼らる。 ŀ. なとか惣長ならさらん。愚身に定而執筆をさしあて に入て拜領をなし。 然共指合なからん者後をみすまし。 此道に名をしられたる者は兩人也。今度千 叶まし。 同周阿救濟の弟子なから。 七日以前より廻文あり。 貴邊と愚身と心得計案したらん 又北野宮仕等連歌。如何に所領 ひそかに申けるは。扨も世に 末代に 此道をのこし。 周阿救濟か宿庵 恩句を 殊救濟宗 4 人 0 一句 0 1 れ 1

と談合して付作れ したまへと。 池をも田 にや作りなすらんと申へし。此句に録て付すま 兩人ともに名を得たるほとの好 は。なとか あ しかるへき。 4: 一夜か IF

あんの如く三百韻 水鳥のをしねかりほす秋の 貴天滿座とも輕らす。 退 心出す。 めの執筆を周阿にさせしに。周 則攝政家 さし合はらしきを申定けり。 の千句に参て。 救濟は宗匠 阿上座 な

H

て執筆をつかふまつり。 約束の句を出さんとて。扇を追取執筆でみ上よりはやく。 池をも田 にや作なすらんと申て。救濟か方を忍侍る時。 三ノ 面 旬 I 12 件 0) を出

殿

とあそはさる。 返したてまつる。救濟法師しはらく案したるよしにて。 とて感もあへさるに。夜分近くわたらせ給ふとて。貴句を 水鳥のをしねかりほす秋 ふからりし夜はほの人へと打 滿座も前難句成にやすくくとあそは の目 あけて しけ

其比 70 と申 指合無句を返したる惡しとて。 句之內。 二條殿取よせられ。 ち近江丹波に雨所御約束のとく拜領して。 とられけれは。八方點は水鳥の句惣長也。 かとも。 とて。一 有けれは。 へは。 世に偏執の人も多かりける。 けれは。二 の好士名を忍世にかくれわたらせ給ひけ 都の内を忍ひ出て九州 夜分はみえす。 所をは周阿にとらせけるとなん。 面目をうしなひ。 上下の 條殿よくそさしあひあり 面々もさ」やきあは 指合と周 如何樣 あなかち罪科のさたは 阿 一下。 此 彼懐帋を雨 申折を御覽するに。 去程に周阿か恩案にこそ 句雨人 三年 れ けり。 てか かねて談合し 然則 然に たくひなき事 人 IJ, 7 0) り侍 千句 此點實品 北野領のら か 方人點 省 なか たへ Ŧî. 果て と御 一の歌 み 彻 りし 則 せ + を 感

共。若公も執筆連歌世にすくれ給ふへきとみえたり。 IR に毎座合ゆへに。 立たせ給ひ。汝よく聞。先達とも皆まんきをおこし。 申。此事をいのられけるに。滿願の夜あらたに天滿天神枕に にちんりんするを。庵主不容に存られ。北野に一七日参籠 たて正直を守らは。現世安穏後生善所のつとめたるへきを。 れ。此道はよくさとりをなし。いかなる下賤若輩の句をもそ の恐といひ。 指合あれかし。 別儀にあらす。 を出せは。 いくほと無命の中に。 も勝負連歌なとに指合無句を返し侍る執筆数を知す。 やまりは聖人もあると にくけれとも召らる。 と申たりしゆへ。一能は一技をのかる」といふ本文あれは。 句也。指合有て返れかし。我句を出しとまらんと。 しく侍れ。中つ比當代の好士達或弓箭に肝を通され。隨道 しひたり。 水鳥のをしゆへにこる心哉物いはてかく三年をそふる 袋にもつかす。かしこにもあたり侍らす。 只此道ならす。 か」る昔の誤を聞侍らぬからたてしくこそあ 汝も先年右に千旬有つる時。他人の句とに 我何をとりなんと思ひし罪により。 神慮にもたかひ。鷺道にちんりんす。更 か」る物心を脇に挟けん事こそおそ v 殊にかれらは此道の聖也。一度のあ へる事。 人の難にもかはり。 なかくしき御物語なれ 人を助 人の句 片方の 胸中 比興 當代

> しくつのともしらな事ちれませてそしり。句を返す事育へして諸國修行し。此道を人にも数そたてけるとなん。 とて。うしろをむかせ給ふとみて。夢は覺にけり。則發心とて。うしろをむかせ給ふとみて。夢は覺にけり。則發心

を引笑し」めきけるとなん。此千句も十方點を取へしとて。 をみるに。連歌も思ひやられたりとて。 語傳しは、越前國に千句の有けるに。 とあらは。毎句不審をも明らめとひ尋へしとなり。此道は更 くは書付給ふへし。或當好士の下に入。理をもうけ。門弟な 他人の句を我しらぬ事あれはとてそしり。 ために歌一首狂歌を語侍 勝負の置物に砂金十雨上座につみ置。 あさましけなる修行者。千句望かほに推参す。 々少心に計かたき道也。我しらぬ事のみ多かるへし。 からす。下賤若輩の句なり共。 ز 他人の句ならはさしあひな いつかたともしらぬ 上に短册を理の題の 少人若衆なとは日 句を返す事有 此容僧 の姿

前句を待るたりける所に。

「前句を待るたりける所に。

「一句を行る所望とみえたり。次の間へいらせ給へと追出しけれとも。さすか好士なれは。しようしをほそくあけて。 選節の所望とみえたり。次の間へいらせ給へと追出しけれとも。 さすか好士なれば。しようしをほそくあけて。 にんめ 。 満座の句共を二首のはの千句の中の惣長に砂金十雨みな出へし

車をかへす人のさまくと言前句有。

に松一 也。 さも有けるや。 僧越後國松の山家河原山天神にてわたらせ給と語侍りし。 せけるにや。うたかひなき天神の御業と申ぬへし。當代 車を返させたまふとなん。 申ならし候と申けれは。あなおそろしの里の名やとて。 有ける子。母と軍をして母をころしけるより。 里と中となん。 とをせと勅定あり。 雨ふり。 覺ゆ。殊勝に候とありけ へされけるとなん。 しやきあひけり。 と付待りしを。 日に點を取けれは此句惣長也。點と注を書付。懷紙をか 我しらすは に勝里の名なれ ぬ事の 村の里あり。蘇王あの里へ車を進よととはせ。 立よらせ給ふへき陰なかりしに。 弘 何事もやら有とおもひ給ふへし。 也。 彼砂金。此句惣長ありける一兩日ありてら 内縁はいかにと有けれ 執筆むさくとうけ取。 座上に宿老の好士。此句さる古事ありと 里名は何と云なと御尋有けれは。 智惠ふかき人の上をなんし侍る事毎 此心は唐に周の蘇王狩し給ふ時。 行かた れは。 しかあれは面白き名句也。此容 共時執筆請取書付待り。 は。むかし只ひとり 滿座も一同し笑さ 狩野よりむかひ 母勝の里と 母膝 俄に 丽 後 8 4 3

春の野にきしや卵をかくすらんと付侍しを。此前句鳥類いかにもしけれかへる道しはと云句に。

一宗砌

の何に。

又共頃の句。作者はおほえす。
といへとも。鳥類獣の振舞。能作はあつかひ侍らん事。推といへとも。鳥類獣の振舞。能作はあつかひ侍らん事。推出事たゝあるとなん。馬にはのれる人なつ。と葉おゝきものはしなすくなしといへる事。誠なるかなや。

順。思老此句ふしむ申侍りし。思意も同心のよし中華。或 ららんとにとの分別心を得給ふへし。 付句よろしかるへし。 つえつく程に道そくるしきと付。作者は誰なるらん。 き、すかりはの草そみしかき。此付句前によそとあら 岩かねに苔むす松のかたふきてと云句 たのむ陰なくて難面生る世にと云句に。 よくくへかみ合たまは」。 同其比 0 句 おの E つか は 專

當代の句。 歌万首にもわたりは けれ。何の所詮ありて杖はつかすへき。 木の朽たる松なとは。とく朽て跡にもせはやとこそ思ふへ は似たれとも。露程も下は不付。 我庭の植木になり傾は。杖をも柱をもつかすへけれ。 作者は 不覺 2 へるへし。 よくく カ. やうの 如此 句ゆへなし。 の句 か」る干 深山 J.

**山暖も心有けるみねのいほと付侍り。此朽たる松の枝を社きれと言句に。** 

の名句とて。

る道 は の事注にいとまあらす。 く。只好士なとの句なれはとて感し給ふへからす。 合なとに詰 理ありし 花さかぬ木の枝を分て切たるこそ。山賤の心あ 句 へと聞 に申侍 侍れ。 ij 前句こそ山暖なから。 此ふかき心なる事とも分別な 花咲木 如此等 を

中つ比の名句に。

ふへき也。

小さ也。

かへけれ。か様の句は爺て前句を作付侍るとて。きらひ給かへけれ。か様の句は爺て前句を作付侍るとて。 道たは一句の道理をいひたて。心を やはら け侍り てこそ 道たは一句の道理をいひたて。心を やはら け侍り てこそ 道たいかにつくると罪はあらしなと云句に。

葉。是にて悟たまふへし。 おしまぬなからいつまての身そと云句に。 しょ 何れの句も前句に付句の下の句にて云かけ侍る手爾遠也。何れの句も前句に付句の下の句にて云かけ侍る手爾遠む。何れの句も前句に付句の下のりそと云句に。 いひかけ付侍るてにをはの事。

吉野のおくも秋は來にけりと云句に。にとまり侍る句多くみえたり。近代名句に。一當代にとまる句に。上にてこそといひ。又成敗したる句。

Дз. ° ならひありといへと。 は。 らしきてにをはとて。 とも愚老一兩人は御句の心及かたく存て。 はし侍るとなん。 に留りの句 隱家は人こそとはね鳴鹿に 攝政家の御句なる上は。聖人も一 さもわたらせ給ふらん。 は つか 然に凡慮及かたく侍り。 ふまつらす。 愚意及かたく侍り。 用侍る人も多かりけ 又は手爾遠葉に付て。 とあ 又凡人の手本に ij。 度の 此句 其比 此てにをはにて る。 あやまち は攝政家 天下に L 用侍るも尤 か のあれ は のあそ あ め 礼

せいはひの句留りににの事。

なとかで棘句を直し侍る事一向法なき事といへ (ピ無) とや申さん。又道の深をしらぬ故とやいはん。 にてと留り。てと留りたる句。 るけしきもなく。らんと直し侍りとゝまる事。 まる人多く侍り。にてとにとの留は。 返し侍れは。 我もくしと存たる人の句ともにあり。手本になるへからす。 る句也。 しらせ給へ。 生の中に二 ちらてさけ花も名残の春成にとあり。手術越波ちかひた 前句のあらそひ五音を調へてといまり侍る句 如此事書注侍る事めつらしからす。 少も案しふせにして。 句直 し留る侍ると自見集に書侍り。 前にての字侍。指合有とて らんとなをして句 手爾遠波のしかと定 しかれ共當代 ŋ 此道 惣して貴座 是にて計 を 救済は 一の達者

は。心もにあひ侍らんか。只人の習ありて用ると葉も。て らは それをたにと云句た」みえ侍 そ侍れ。 にをはをもしらすして。 それをたにうきに又聞松の風とも。 ん。 此句にて何をも心得給ふへし。 それを たにの上 毎々もちいらるゝ事うたてしくこ にていひ なかし たる手仁遠波を ij 萬相 秋の風ともつ」け侍 事 ts

投はといふ手仁遠波の事

程に。中らうの比よりあそはし給 す。如此等てにをは初 ムかにきこえ侍れ共。 うきは の第一とす。前に申とく。松しまやと留りぬ 扨は心にかなふ山里と云句 た」都に遠き事ひとつ。さてはと付侍るてにをは 1 おしまといはん為なれは聞にくから の時は、 た」人まね 0 やろに 礼 は 開侍る ふつ

さなきたにといふ手爾越波の事。

前 さなきたにさひしき山は水の音。 それをたにの手爾遠波

懐紙に多みえ侍る。 ともすれ ひ琴侍りしより一 はと云言は。 向掛 遠國 C かまへて用給 1/1 酌せり。 國にはやり用 近代西國 3. なっ 侍 より IJ 愚老此 0 ほる點 心

ん。けれやう詞の心は其品の有様と聞え侍れは。こうみは入した。けれやう詞の心は其品の有様と聞え侍れは。こうみは入 ありさまと云言葉。昔中比より好士も用來る條さもありな

まよひ。

世に人はそれともしらさるに。

名を名乘我句を語

一まてしはしの言は手術遠波。 よそほひのとはこのましからす。 そほひは莊の字の意か。 たる儀なしとあ は成とて。天下に知る程の連衆は用 れは。 宗砌奉行 此とはも思老はい 行 砌 11 花のよそほ 旬 せし代より。 また申侍 U 又は らるさきと ]] のよ

はまてしはしに うき身とて思ひなすてそまて 叶侍 はかならすけれと問り传るへき何なれ るへき也。 L はしと付待 ij 如此 0 句

いかなる世にかあはん行末

といふ句に。

共。 句によるへし。 こそと有句。とまり

佛こそ二つの川 川の渡 し守

道也。なんてもさのみならひあるへきのよしり。の句一句も指合なとなくて留り侍れは。歌連歌は ひ。我物にいひなし侍る時苦かるへからす。人ことに上 心の時は發句は哉と留。 如此等の手爾をはなとは好士の上の それこそ是こそと名を云付侍れは。 と留給ふへし。 けれと留。そとにこしてはると留。 否に立を花こそしら めつらしきとは手爾遠波なとは。 第三 ね春 はにてと留。 0 風 か様にも中へきなり。 やとうたかひてはらん としつ 歌連歌はたや 也とい こそとい ~ !) ° 我連 座 を經 ひては 歌に すき 下 3

わたり侍るへし。
いっちょうは、此当に、からるへからす。諸道にれ、あさし共申に障なし、歌道にかきるへからす。諸道にし侍れ共。他門より名を知。世上にゆるされてこそ面白侍句にする人多し。此道は如何にも我は名をかくし身をひけ

といひならふ事は。此家の迷の中のまよひ也。何の人かか行に眼をさらし侍るを。なんてう千代万代。千年ふる命なをも。三歳の子息髮置の事は思ひもよらす。如此等の事はとも。三歳の子息髮置の事は思ひもよらす。如此等の事はとも。三歳の子息髮置の事は思ひもよらす。如此等の事はとも。三歳の子息髮置の事は思ひもよらす。如此等の事はといひならふ事は。此家の迷の中のまよひ也。何の人かか

有事なかれ 申べし。此文は人の舌にある事なれは。 り。觀音寺より明日下向之時一夜推参申。 徳に露程もかはらす。第一に自解佛乘の位をあけらる」は 徳をあけ。又十徳を和して百徳を作りあけけるも。 先に一すしのいきのをはかりをとそ尋みたけれ。此道に十 たはし計まいらせ候。殊今日御馬毛に具て御物語中かね侍 めつらしからす。此言はは此間の先達申もらし待ると。 とはをかろくはき捨らる」人こそうたてけれ。猜々中信る 歌道の位也。如此等の深奥を輕思。舌上のつ♪きになし。 く就言して千年百とせ送けん。 へき事澤山なれ共。近代好士と色さまをかへ書付侍 生夢の中なれ あなかしこ御他見 重而注 は。 さめい 7 らりせ

### 馬上集下

前に申如く。連歌は十躰に分て。十六方へ心を遣へきよし

卷第四百九十五 馬上集

花みし山の明ほのム雲面影の遠く成こそかなしけれと云句に。

心付の句。

小山田の早苗とるより雨待て身の爲ならん新成けりと云句に。

一古事本説の句かより。

いにしへの長柄の宮の月をみてねぬ夜に朽る夢の浮橋と云句に。

月に友花も此世のものならて夢現とも分ぬ春秋と云句に。たけ高き句。

前句を辿さす付侍る句。

はしをいたよく衣とのせいと云句に。

立田よりそれと三室の山さくら

からす鳴霜夜の月にひとりねてからす鳴霜を空にうかるゝと云句に。一戀の句のあはれふかき句。

一あはれふかき句。

植をきし人はむかしの宿の梅

一哀ふかき述懐の句。

R子いいといさ いつ可。 捨果ぬ身ならは出ん君か代に ありしなからの黒髮もかなと云句に。

武士の軍の庭に子を連てと云句に。

一連歌に十好の物あり。なからんあとをたれにとはれん

ん貧は愚老かやすく侍るへし。此貧は無力にして。事たらぬなは。世にしられぬる好士には成かたしと也。とやいかなは。世にしられぬる好士には成かたしと也。とやいかし。惣して此道は酒肴取散して。酒宴香曲なとにてはとそとしてもか なはぬ道也。 又はさのみ 貧にても 興行成かたし。惣して此道は酒肴取散して。酒宴香曲なとにてはとそれ、世に分かなは過道也。 又はさのみ 貧にても 興行成かたし 一に弁。二に利根。三に了智。四に智惠。五に口。六に貧。一に弁。二に利根。三に了智。四に智惠。五に口。六に貧。

食は心はかり侍るへき也。

祈禱成弁と云へり。少々肝要斗注也。の告侍り。二十五德記とて應字に用。今に九州九ケ國にいの告侍り。二十五德記とて應字に用。今に九州九ケ國にい一連歌に二十五德あり。是は九州安樂寺之別営喜心に御夢想

一所すして神慮叶。

我身賤位なくして高位にもちあけらる」。

度座に會つらなれはうらみを着。 一悪心をおこし。たかひに敵心をさしはさみぬとも。 一

となり。

行いたらすして遠き名所を見る。

一ならひさとらされとも心中あきらか也。

一手句には七難を眼前に七里の外へ拂。七福十德即しや一手句には七難を眼前に七里の外へ拂。七福十德即しや

一無實の咎をいのれは立所に計侍と也。

一不捨してうき世をいとい

一ならはすして書點を心みる。

一假定業たりといふともてんすへきと也。粗注はいとまあらす。

千句は連歌のくわんちょうたやすく思はしむる事。やすや

おのれとつ」まるへし。

一千句なとに 會出時は。共比世に 用とめる好士 又は宗匠なし、金はこひ。おろか成句。かゝる指合なとになれる文字なと、是は打はふき。 好士宗匠の 外はなし 句を返す事なり。 しかあれともさしあひの句を留め給ふと云人にてはなし。 歌があれともさしあひの句を留め給ふと云人にてはなし。 歌があれともさしあひの句を留め給ふと云人にてはなし。 歌があれともさしあひの句を留め給ふと云人にてはなし。 歌があれともさしあひの句を留め給ふと云人にてはなし。 歌があれともさしあひの句を留め給ふと云人にてはなし。 歌があれたる事なり。 満年にも出物とみえ。早々法式にもれたる事也。あひかまへと、全は記述は、大田とめる好士 又は宗匠なした。

卷

侍る事いかん。 田るユ事尤可先。愚句を覺指合なくは他人の句にかユる事 田の五事だ可先。愚句を覺指合なくは他人の句にかユる事

一本歌をあしさまに心得。付合に用事多し。宗砌のよりあひ

秋萩の花峡にけり高砂の尾上の鹿も今や鳴らんと。彼作者歌を引侍り。此歌は我庭或は何の在所にても。萩の花さきぬるをみて。高砂の尾上の鹿も早鳴らんと云歌をあしく心得侍り。是にて千歌万首の取所をみかきたまへ。 一相坂の藁屋に琴を付る人每/~也。然共琵琶なり。それを本と用給ふ。是も本歌の心得にちかひ覺にかはりたる故なり。

に用意せらるAは琵琶といへり。 「開意せらるAは琵琶といへり。 なれ共。歌によみ連歌に用意せらるAは琵琶といへり。 なればの側の藁屋の村前はふるき梢のひわの音そも

句に。

「はいっとまをみ。我上をかへりみ待るへし。ある好士の初心の者取よるをも心にかけす。利口けなる好士多し。あるが立の好士なれ共。にくけをたしなみ。連歌あひわつく。

とはゝこたへん言のはのみち。か策の句もいかむそかし。

れとも。付よきよし承及ひ侍り。前句少々注之。

とはなし。當代の好士なとは能心もいたり侍るとおほゆな

(注申句なとは。一こともとりよるへき

きとそ。前に少

は言葉さし出たる事か。又は一句の内おとりたる句に付よ

此類ひ百句ありとなん。惣して連歌の

ーふし。

前句

によそ

もしるすにいとまあらす。は「いとまあらす。」といっているないでは、いまのではないでは、いまのではないである。如此事は、いまのでは、いまのでは、いまでは、いまでは、いまでは、いまでは、いまでは、いまでは、

田舎に言句百句ありといへり。少し注之。 あふ時もわかれ思へは誤にて いつはりとおもひなからも又まちて 先の世のむくひの儘に生れきて 饅かくれにかへるかりかね けふも又聞入あひのかね がは又こよかへる腐かね やよひの末そ夏近くなる かっほとゝきす又もなけかし かつほとゝきす又もなけかし 集

いかにつくるとつみはあらしな 山へ入てはなにとたつねん 山へ入てはなにとたつねん

かくれつみへつみへつかくれつ

やに

かはるや心なるらん

かましく思ひしに。近代よりてさとり侍る。 お出來事侍るなとゝ存々申せし事。前句によるへき事。おこ其比京都の 連衆に四條の良阿梁心な とより あふには。 句此錦の句たかひには付安く侍るへき也。宗砌のかたるは。

先年執筆之法式の事。初たる連衆の名乘を執筆とひ侍る事をかきをこし侍るとおほゆ。但老の失念にて侍るか。若いをかきをこし侍るとおほゆ。但老の失念にて侍るか。若い衆で能々とひおほへ給ふへし。以下の事はさたにあらす。 中とならは是を遣給へ。貴侍高位の人の御名の字なとは。 中とならは是を遣給へ。貴侍高位の人の御名の字なとは。 中とならは是を遣給へ。貴侍高位の人の御名の字なとは。

とおほゆ。共比連歌の空にて高きもみしかきも。宗砌とし立てひそかに宗砌とかゝせけるとなん。如此事は在かたしととひ侍れは。あまりの事にこたへかれてありし時。専順書すまして。發句の作者問ひて筆さゝへて。御名の字を如何書のはいく人したふ柳かなと申句。執筆眞阿うけ取詠し

一發句當代もさのみ珍しく。長高しみとほる心に。 そか 他人の心を犯すときこえ侍り。 やいはん。 られ者やある。 を深合みたる句は希成や否。大略面白なと」ある發句 にて聞 又は此道を心にかけ侍らぬとや言ん。 しり侍らす。近代の發句立春の題に。 天下に出て執筆をする程の者のあ 自身彼道の發句は愚耳 古事 やまちと おろ は 緣語

雪落て春にかたふく梢哉又中つ比。

月の秋花の春たつあした哉

花盛待に鳥啼み山かな又當代の發句に。

又當代の句に。

小倉山花のほかなる夕哉根かり花や心のとまり山根かり花や心のとまり山

て風間あり。愚老にもさやうの事あり。松くらし花の外なるゆふへ哉とつかふまつり。同發句と

専順申侍に同。其春ある好

侍る事珍しなとゝ初心人申給へり。おなしくその冬清水寺山や雪しらぬ島啼みやこかな。その比宿出てかなと留り

よる摩きこえけるを。よき發句よと斗初一念に存。へきより。都の梢も分す大に雪ふり侍しに。軒近く小鳥なきちかき所にて會のありし時。 爺ての案にちかひ。 俄にある

背の發句に。 巾とく。馬にのれる人おつると云本文まことなるかな。 は念して名句なとつかふまつらる」も。當好士有共。失心の しわさと思ひ給ひ。わらひてうつさせ給ふへからす。前に るしたる抄ありけれは。 前句よき寄所なり侍らは。昨日の句をもいたし侍れと。 とを。假初にも舌の上に 眼をさらし。深底の修行の口ひらきいたしたることは心な ん申事なれとも。好士の五十句百句。心をつくしちをはき し侍らは。いかはかりかはつかしく侍らん。めつらしから は。そのみのつたなきのみ也。若他人好士なとの言はを犯 何を二度口外する事は。知恵の 淺きよりあやまる事なれ さた有けるとなん。さらにあらかひ申事なし。されとも思 たるは。 軒近く鳥啼雪の朝かなと申侍して。後の日に連歌同朋か 天下の耳にはたる山や雪の發句と同心にて侍よし よく注をみ給ふへしと也。縱失念 のせんことこそおそろしけれ。

とれやこの花の匂ひの朝ほらけ水鳥か織のうへゆく子規 水鳥の藤波く×る郭公

略かなと留り侍り。

いかつの五文字にて申侍るを切字と心得候事あやまち也。
たれとみてそれかあらぬかなとゝ云事は。少にたる事をこれで字にてはいひ立かたし。然共切字もいかん。但上手の五文字にてはいひ立かたし。然共切字もいかん。但上手の上で字にてはいひ立かたし。然共切字もいかん。但上手のとしつにはしかし。三目切。四目均。大まはし。大方切れると云て。十八の切字侍るとなん。しかあれとも愚老は大いやうの五文字にて申侍るを切字と心得候事あやまち也。

す。 でもありなん。とはかり の法味は 申にいと まあらべり。さもありなん。とはかり の法味は 申にいと まあら連歌に法報應の三身ありと云り。天台四教の回教の位とい

・長アの月の小。一法身の何の心。

世にあらはあまた持へき子を拾て一報身の句の心。

應身の句の心。

人の身に一日ならては日もなくて

たり。 たり。 我と 悟修行 すへき事を 連歌にたとへ人の数にもからす。我と 悟修行 すへき事を 連歌にたとへ人の惹也。居給ひなから三千界をみたまひ。と葉をも出さすたり。

俊成卿の密言抄に書給ふ也。 連歌歌にも其心を案し。跡へ心を返てこそ盛もあり又情も みを心にかけ。 有。月も雨の夜曇かちなる空を待につけて。又入ぬる山 残るへきにて候。 のさひしきをみて。いかに此花盛面白母らんと盛をねかひ。 明仄の山をみてこそ面白けれ。うちみれく 只花盛に打向みん事。さのみかん味も難 花はちりての跡を葬。この本 0

心にて心得給ふへし。 月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつは本のみにして りなき月に向ひ侍らは。何事かのそみの心あらん。

B

此道はいかなる鬼神も和き。たけき武士もなひきしたかひ。 かあれはたのもしく思ひ給ふへし。 侍れ。先達好士此道の徳により佛果にいたりて。又此世まて て。好士に成給ふへしと云事。關東にてまさに聞え侍り。し 此道を如形たつさはり侍るに。魂とからはかし生れかはし 人の連衆によひ出されむも。浦山敷しゆくしうとこそ覺え にしをふ聞えたる好士は希也。但田舎遠國なとにて一人二 國まてももちはやし侍るにより。連歌はしけく侍れ共。 世と成にけるより。いかなる新禱にも増りたりとて。夷の 女男の中たちもこれにすきたる事なしとて。神代初り人の

一前に軒はの荻と空蟬の碁の膝負の事御物語申侍し次に。濱 の真砂碁にならすやいなやと御尋ありつるやらん。 一句の

> したて碁にて成へきよし申侍りし むかひへ出すや前

前に申かとく。歌を連歌に取れんしやうをつ」け侍る事少 によませたまひけりと云けれは。問答留りけるとなん。 と後白川の御時。帶をかけ物にして非を打。負給ひてかやう しに。宗砌本歌を引て申侍るよしかたりしに。 をかへしけれは。なんてう真砂か碁に成へきかとて論侍り 三上江州港の句を出侍るを。執筆碁の句過たるよし申。 如此基と過ぬるをたゝ眞砂と心得。百韵の四折めに、一色 句にかちまけと付侍るならて。 々注也。 白波のうちやかへすとせし程に濱の眞砂の数そまされる 打みたすはまの真砂はまけわさにと付待り。かやうに秀 かならす悲に用侍るへし。 何

うつろふ春のうつる程 花はた」うき世につる」色みえて なさ

ると云歌をつゝけ侍る。 色みへてうつらふものはよの中の人の心の花にそありけ 是にて何の歌も心得給ふへし、

一詩なとを取連歌に用事。

夜の夢明方急く月落て

つよからぬ女の歌と云へる。 月落烏鳴とつ」け侍るを眼とせり。是にて何も辨給ふへし。 あまりぬれくて。 しほしみ

卷 第

からすとは思へとも。 をいとなみたまへ。御事も二八の春秋をたるいたつらに送 と成事はためしなき事なれは。よるを日につき。身の能藝 過行はいつをさて人はらき世の思出にせん。人は甘になり きらす。楊枝をもつかはす。 あけす。大むねらちて。あかき手足に上らちつけ。爪をも に心を入。小納かたきぬうちやふり。かみをもすくにいひ つくしき人なれれ。 あへり。つよからぬ女の歌と計心得て申事と覺ゆ。世にら 女也。當代の若衆なとも女の歌二にたるよし。及なき人中 いさなひてつふてらち。 もあたにし給ふへからす。此理を信に思はん人は。無間 行給は れは。たゝいたつらに老の坂くたるに程なき物は。二度 間庭に落沈。 物知かほのりからしたるは前代未聞の有樣也。 小式部なとは自身修行に眼をさらし。 殊に遠歌は名聞りやうにあらす。大唐におきて かやらにすいさん中ても。身の徳一つもあるへ 吾朝にては和歌とてもちはやす事なれは。 過しむかしを忍返させ給はん事。 二度あかるためしなし。 あまりに心の誠をしてすましたち。 心得 此程の対か情にほたされて。 給 そう刀ぬきくるひ。しつまる時 3 かねるつけすして。暖子とも カン らす。 小野の 生ではひやくら 色香にめてたる みるか如 /]\ II, かくて かく出 泉式 切

> は きかさをかくせ。則時に取ころさせたまひ。後年に生物 **偏執したる科により。此僧武士につかせ給ひ。或は交りな** 松童女につかせ給て。 侍る。前に中事。又は九州安樂寺にて。神宮寺の神宮の娘 たつら者のわさなり。 めたる武士。 れとも。くしやにましはる事なかれと云つり、尤と覺り。 は。いかにく物とも叶まし。しかあれはちしやの歌にはな せりと云詩は。あしからん友にかりそめにも似させ給ひて あなかしこ。吉日を撰。 の身は中人一葉語も心えもとこそ尤なれ。名を付はをくろ とくらいに成て面をさらし。 無問落所 ありと 或衆計を墨にそめ。 其比九州に武士六人出家。 ひきなく念佛を申へしと云者のみそ 類共に付せ給ひけんし給ふと也。 ちかつかせたまへ。 門に立乞哀聞 なま心の者とも連歌は へき囚 にたるをなと 十人連歌 有

詞も。 申 を一帖作り侍中を書致侍印上は。愚老言にあらす。前に 近代の好士書もらし侍るを。 馬上下卷と名付給ふへきか。 らるへき山。重 前に申ことく。差たる金言は申 かとく歌抄に限りひすへきと也。 御意に随ひ給ひ候は 而徳阿御使に候而 7 別當下上判 一人の譽にあらす。此詞 此中事 侍 6 粗中侍り。 如何 ねとも。 は後 となれは。 をうけ山。 日に申侍 前 夏 々開 即に申 っ 食入 れ

集

管

さみなれは。春草の原に引すてたまへく。も書をき給ふ也。この言のははさせる事なき馬の上のす式の定言とのみ聞え侍る程に。別て秘すへきと。俊成卿式の定言とのみ聞え侍る程に。別て秘すへきと。俊成卿

## 寛政八年む月はしめ。

三百韻には。たゝさんけに付て。夾第に句數を減しぬれれることのの。これが、一なかれ。昔中つ比は百韻つゝ十日に滿願有といへり。此比田舎なとに三日五日に終して。をそれてぬれば。連染のいたりなき様にさたある。ゆへな順有といへり。此比田舎なとに三日五日に終して。をそれてぬれば。連染のいたりなき様にさたある。ゆへな難用の暇かりうつし侍ぬ。文字のたかひ多らん事外見お業用の暇かりうつし侍ぬ。文字のたかひ多らん事外見お業用の暇かりうつし侍ぬ。文字のたかひ多らん事外見お業用の暇かりうつし侍ね。

給ふへき也。然座へ同とくなる好士ならひねて。 句八句に定めさるへし。然者初の折には一順ともに四 人共。同とくの上手なんとあらん會坐ならは。 は。 又はなん句成共。なとかは取よる心なからんと思ふ心を。 ゆへ也。かく侍る時心を取しつめ。如何なる上手成とも。 より下手と計よりあひ侍りて。言はのみかきふし立たる く成へし。然時の心は衆而上座貴上にもましはらす。 くり本歌本説の不審を明め。五晉相通の本末をきんしぬ なれは。以上廿句也。先何時も百韻の連歌にも廿句智り と心と叶はすは叶ましき事也といつり。好士十人とも廿 るを開侍れは。大野に矢をはなち。虚空に尺をはかると 四折目にもからの一順共に四句。中二折には六 智恵の程みえて世にはつかしき道也。 こうと座 指合を 句宛

# 續群書類從卷第四百九十六

#### うす花さくら 連歌部世日

割之分別事 になくら

夕雲。 の秋。巳上不庶幾候。無き秋殊無下候。五月雨雲。夕立雲。 をとり候。夏木立。 は不宜候。 かけなとは宜候。春の月。 月同前。 葉。以上不宜。おほろ夜。朧月わろし。朧月夜なるへし。夕 **饒。松の藤。白藤。白つムし。** 風。花の雨よろしからす候。春夕。夏田。の文字いれ候はねは惡の雲。花の雪不宜候。花の白雲。花のしら雪なるへし。花の 紅の梅。 夕山あしく。 飛梅。冬梅なとよつよけたる。よろしからす候。花 間の月。床の月。 秋の月は云ならはして能候。神なし月。神無月に 特とたち。 夕山もとなとは宜侯。うき霧。 夏の月。冬の月。夜文字入候はね 窓の月不宜候。床の月影。窓の月 青枫。 白萩。八重菊。 蓮花。するみとるむき 冬朔。 浮鳥わる をそ紅

懲心。らす情わろし。息して情といふ詞このましからす候。 柴とり。隱人。人聲。女とち。道つれ。味ね。又ね。忍ち。 とては能候。出船かけ。しほくもり。みちしほわろし。消し 杉の雪不庶幾。松の雪は宜候。雪夜このましからす。 小夜嵐にはをとり候。夏舟。冬舟。冬すみ。竹の雪。篠の雪。 屋。以上惡し。山寺このましからす候。遠山寺はよし。夜嵐。 里。浦里。うら路。 秋雨。 忍ひ妻。忍文。返し文。たより文。遠妻。戀の身。こひ衣。 ほよし。 不宜候。 し。うきねの島は宜候。鹿のとを摩。鹿の妻こひ不庶幾候。 小田守。きし田。 小雨。片雨。かた空。水香。瀧音。 しほくみ。鹽燒惡候。しほやき衣なとはよし。薪人。 名所をなところなと云事あしく候。 水田。遠田。千町田。いつれもあしく候。 消松。きし陰。とをみち。柴のや。草の 野里。谷里。 門出わろし。

又迯遁の作例はありとも。

用にたゝぬとも見え

古今にあれはとて。 ら注申 なと庶幾せぬ山。 鹿をすかるなとやらはよろしく候。 代木。千代之草なとやうの事に候。 られぬ事多候。氷をうすらひ。ひすゝみ。菊を翁草。松を千 類多く候へ共。 山すみはよい。彼佛このましからす。かのきし。彼國は無子 衣。の文字あらまほしく候。墨の衣はよし。山すみわろし。奥 世捨人は宜候。昔人。古人。の文字なきはよろしからす候。すみ 逢なとやうにとまりたる。ふつゝかにて不宜候。捨人不宜。 候。 人。ありの文字不審。かりゆく。いもかり流 の終二五月雨。夕立。自妙。 みたれて。船こきて。如此詞上句のとまりに不宜候。又下句 あた契。 とけ氷。とけ霜。夜霧。 かこたれて。したはれて。 候。 あた夢。 。いもかり通ふなとはよし。 如此用捨は人の所好によるへし。 殊無下に候間。 ある先達被申候。 とはれねは。緑の道不宜。こひ路はよし。 ちるそめてたき。 戀の詞は殊にやさしくあらまほしく 此條々古歌より出ぬは候はし。 田守。里田。もみつる捨子。 永日。長夜。道のへ。在明。入 注に及はす候。又異名にうけ おもやせて。ねかはれて。 舟にねて。霧ましつけき 鶴をたつ。 右先哲庭訓 此比妹かりの道と云 ら也なとはよむまし 猿をましら。 耳にたつこと のふんあらあ z 妹 候。

家隆卿歌に。歌のあたりにもよすへからす。心ちあしきなとゝありしに。歌のあたりにもよすへからす。心ちあしきなとゝありしに。けからにて侍へしともあり。又ある抄に足家卵薄花さくらは侯。誰か又詞にいはゝ。よきもなくあしきもなし。たゝつ

りしかは。 れもよみやう。 しと中さんは定家かふかくなり。 あそはされたりし時二。いかに御にくみのうす花櫻にと申 讀たりしを。定家卿に 紅のうす花さくらほの わらひて。にくき物とおもひつれとも。 つ」けやらによるへきにやとあり。 みせ申しかは。 〈と朝日 めてたしと申されき。 いさよふ小はつせの 長點の おひた」しきむ 是をわろ Щ

明應元年壬子仲秋日。依或嚴命白地注之。耻外見云々。

「右らす花さくら舊本闕今以帝國圖書館本書寫校合」

#### 白髮集

句をむねとすへし。すとしも其時に違たるは不可然。春の夫發句をつからまつるに。春夏秋冬共に共時節に相當の發

述

作

を四季ともにしるし侍る也。季の物にても。正月の物二月のもの三月の物是有へし。然

正月の物 春三月分別すへきもの。

燒原。星をとなふる。梅。。瓊雪。氷消る。さえかへる。若菜。野への下嶌。荻の

正月一日歌に。

給へる事を。星をとなふると申也。 此歌は年中行事の歌合に。正月朔日御門の常年星をおかみ 皇の星をとなふる雲の上に光り長閑き春は來にけり

二月の物 二月の物 二月の物 二月の物

桃。(三日に限る。)花。巳日の殺。永日。藤。欵冬。躑躅三月の物

四月の物

夏三月分別可有物。

安夜。短夜。(三月にわたる。) 青楓。玉眞葛。醬。明茂る。加茂のみあれ。(神事なり。) 青楓。玉眞葛。醬。明衣更。(一日に限る) 卯花。時鳥。杜若。木々の若葉。藤

五月の物

六月の物

暑日。秋近き。來ぬ秋。蟬。(五六にわたる。)凉しき。雲の嶺。(六月西にたつ雲也。)白雨。撫子。常夏。

七月の物

風。霧。虫。鹿。(三月に渡る。)

八月の物

九月の物(九月にもわたる。) 夜寒。蘭。野山色付。忍草。尾花。(九月にもわたる。) 夜寒。蘭。野山色付。忍草。尾花。也。) 冷しき。野分(是は秋一度吹大風也。) 身にしむ。 衣打(九月にもわたる。) 鴈。 櫻の栬(諸木の中にはやき

る。晩稻守《田を守也。おくて也。)る。晩稻守《田を守也。おくて也。)氣。(秋の詞をへて。)を近き。木葉且散。虫の吾よは時雨。(秋の詞をそへて。) 紅葉。潭散。 菊。(九日にかき

**社薬散。** 风。時雨。草枯。冬かまへする。

十月の物 冬三月分別すへき物

字。髎。氷。(三月にわたる。) 朽葉。神樂。

集

冬の梅。年の暮。春近き。年木こる。なかる1年。(歳のゆ

をなし給ひ候は」。 行汀の原の草かくれより。 櫻なとも花をほのめかすらんと思ひしより。 の煙り長閑やかに打なひくをたよりとして。舟さす袖の霞 のみとりもらすくこく見えわたるに。をちなる澤邊より水 は。青み渡る山の梢に。木のめ春雨しめくと降に。 ぬ境より發句なとをまふくる物にて候也。 らの折節に發句杯思案候はゝ。心境界にらはゝれて。 き曇り。雨か雪かとそる多寒き春の氣色なと打詠て。 しらぬ霞に鳴り。梅の匂ひ打しめりたるに。東風吹空のか **宦初心の時は。春來ては霞初る山の朝朗の躰。野邊の鶯の** 歌を取やう分別なくして。當座の用にた」ぬ物にて候。 事大事不可有。 湖の風景を有のまゝに見るやらに仕出し候はんより外の 時發句なとを作るには。如何にも正直に有へき也。 をつかふまつらんに。其時節の用心の爲に。 物。又共季三月に渡りて不苦物なとの事しるし侍り。 かやうの詞たれもしれる事なれとも。其月人へに いとおかしき風情なと見給ひて。心にしめ句 餘の歳初心の時は。歌なとを覺えても。 をのつからさかひに入給ふへくや。 雲雀なとの床はなれして夕日に 又二月の比ほひ 消る雪まの草 一端最初心の 山河江 あたる 今や 求め かや 發句 只

る歌に。

白雲も花の名残とおもひ。是は真平の歌に。かやらの面影なと思合せ。又落花の陰を見ては。峯に残るかやらの面影なと思合せ。又落花の陰を見ては。峯に残るかやらの面影などはり立田の奥にかくる白雲

散花のわすれかたみの峯の雲そをたに殘せ春の山かい

をくる 1 櫻花ひとり吹るをみては。 とくる 1 櫻花ひとり吹るをみては。 をのつから心の師かやうの詠歌の俤。又山の梢の茂渡りたる隙よりも。 春にかやうの詠歌の俤。又山の梢の茂渡りたる隙よりも。 春にか からの詠歌の俤。又山の梢の茂渡りたる隙よりも。 春にか くる 1 櫻花ひとり吹るをみては。

疑ひ。或は月かと詠て。などの本歌を思ひ合せ。卯花のさかりを見ては雪の垣ねとなどの本歌を思ひ合せ。卯花のさかりを見ては雪の垣ねとり咲らん

かやらの本歌をも思合すへし。又波かと詠て。

**かとくもよめり。又卯花に時鳥を待或は聞相かなへり。** 卯花の咲ぬる時は白妙の波もてゆへる垣根とそ見る

語の歌に折句の題にをきてよめり。杜若牡丹なとも四月の物也。是はさのみかえす。伊勢物りもすくなき物也。杜若なとの歌もさのみかえす。伊勢物・中花の垣ねならねと郭公月の桂の影に鳴なり

は。五月雨に軒のあやめのかほるにも。 唐衣きつ」なれにし妻しおれは遙々きぬる旅をしそ思ふ ちなる物を。發句なとには案し給ふへくや。五月に至りて うなる物を。發句なとには案し給ふへくや。五月に至りて りなる物を。登句なとには案し給ふへくや。五月に至りて りなる物を。登句なとには案し給ふへくや。五月に至りて は。五月雨に軒のあやめのかほるにも。

なとユ云へるを思食。或は花橋のかほる風を聞ては。打しめりあやめそかほる子規啼や五月の雨の夕暮

の月の木葉かくれに成行をみては。 をとの歌を心にかけ。梅の雨を聞ては。花の時を思ひ出。 早苗のそよくを見ては。來ぬ秋風を俤にきゝ。若竹のなひ早苗のそよくを見ては。來ぬ秋風を俤にきゝ。若竹のなひくを読ては。花なりつる枝もかく成物よと觀し。又夜はたるを見ては。花なりつる枝もかく成物よと觀し。又夜はの月の木葉かくれに成行をみては。

を 骨禰好忠詠しけるなと思ひ合せ給ふへし。或は草の茂りを は散し庭の木末も茂りあひて天照月の影そまれなる

夏草は茂りにけりな玉ほこの道行人もむすふ計に

さけるを見ては。旅立時かへらんしるしに結ふと也。又樗の旅原元眞の讀るなと思ひしめ給ふへくや。道行人の草を結

は。 と真忠のよめるを 思ひらかへ 給ふへし。養のとふ をみてと真忠のよめるを 思ひらかへ 給ふへし。養のとふ をみて

漁火のむかしのひかりほの長んほびを見ては。後頼歌かやうの歌なと思より給ふへし。六月に至ては。暑日に凉かやうの歌なと思より給ふへし。六月に至ては。暑日に凉かやうの歌なと思より徐ふへし。六月に至ては。暑日に凉かであれば強よりけにもゆれとも光みえはや人のつれなきしき影をしたひて。夕立の雲のよそほびを見ては。後頼歌したりでは、またいと、大きないというない。

**叉川邊なとの凉しきには。** とをちには夕立すらし久かたの天の香久山雲かくれ行

樹上の蝉の聲を聞ては。二條院讃岐。

は。西行上人。
は、西行上人。
は、西行上人。
は、西行上人。

秋風にそゝや荻の葉とたふとも忘れぬ心我身やすめて

れをさしてとも筆に及す。

そは秋の哀

ふかきは 此時成を

葛の葉に風のわたるを聞ては家持

秋萩のたはやかなるをみては。永線法師。 神なひの三室の山の葛かつらうら吹かへす秋は來にけり

丸

秋萩をおらては過しつき草の花すり衣露にぬるとも

草にも木にも色くへの心のたより詞の種なる物多し。いつ なけれは申に及す。八月に至りては。 はかやらの景氣思ひしめ給ふへくや。 なるへく候程 野の鐘の一聲の夜かくる折節なと。 **鼠冷敷て。雲まもりくる月影は堤の水にたゝよひて。** らしなと、思ひ。麓の村を詠れは。 木の生かさなりたる緑のかけより一筋立のほるは。人家有 様あやうきなと見え。深き谷にのそみては。 渡は。なかる」水しろく落て。苔地圏につ」く岩尾の末に。 たえく、立のほるに。嶺の松の村々願れて。遠なる木間を見 かやうの名歌共思ひわたり給ふへくや。惣而秋の山邊に霧 小男庭の朝たつ小野の秋萩に玉とみるまて置る白 た。 古人の胸中を尊るまてもなく。 **賤か苅田の通路に夕の** 句をなす心のたよりと 秋も半 七月の事はこと限 名も知ぬ常磐 の事なれ 初學の時 する

はぬ氣色也。 又夕立の晴のほりたる空のけしきに月の出たるは。又も 道のへ の清水なかる」柳陰しはしとて社立とまりつれ 賴政の歌に。

又一興の物也。是は炎天の時結ふ水迄也。飛泉といへる。 ほきは。納凉自雨なとの数をつくしてよめる歌共侍り。 よめる歌有 かやうの詞 つくしき姿迄也。巖撫子。 幾せさる詞也。床夏撫子のみ風景深き物に非す。 とよみ給へるも當座 の事なるへし。本歌を見るにも。 庭の面はまたかはかぬに白雨の空さりけなく澄る月哉 一つけれは。さのみ聞なれす。六月にも歌なとおいりにと思うない。本夏の花なと の景気なるへし。 大和なてしこ。 雲の嶺なと今時分庶 からなてしと。 た」其

讀り。七月に至ては。 下く」るとは。瀧の落たる下に又水は有物なれはかやらに 下く」る水に秋こそ通ふらめ結ふ泉の手さへ凉しき 一葉散より荻吹風のさひしきに心を

崇徳院の御歌に。 ふまて余所に忍ひし下荻のする葉の露に秋風そ吹

つしかと获のはむけの片よりに空や秋とそ風も聞ゆる 定 卿

白 髪 集

集

は月のたくひなき時 色外に顯はれ。 作り。 浉 江人 海邊の月といふ題にて宮内 の花おとろへ。 おのつから作意を備す折なるや。 なれは。古人も色と 山の音しよはり。 様んへに心を塩 木葉 殊十五 小も移 夜 5.

見え待り。 月影の澄わたるかた天のはら雲吹はらふ夜牛の嵐に 大江の千里かよめる也。古人は八月は多分月の歌 ある小島 連歌にも發句なとは此月は月耳心にかくへきと か今符 夜半の嵐の雲吹はらふをみては。 の海士のたもと哉月やとれとはぬれ の月の曇るへき小倉の f 經信卿歌に。 名をやかふ覧 いわ物 から のみ

立田山夜半に嵐の松ふけは雲にはうとき恭の 月影

臨の來る伏見の里に夢覺てねぬ夜の施に月 鷹の羽風に晴ぬらん降する空に すめる月かけ をみる設

攝政太政 大

秋とたに忘れんとおもふ月影にさもあやにくに打衣哉 まとろまてなかめよとてのすさひ哉麻のさ衣月に 里はあれ の月やあらかと恨ても誰後芽生に衣打ら 打壓 Ĺ

Ш 人の 折袖にほふ薬の露打はらふにも千世を經わへし 成

> 移りては。 なし。 夜の歌。 の偈を書付て。 彼童子に傳給。 と云山になかさる。 菊水の事。 のみて仙術をえたり。是を菊水の宴といへり。又十三夜に 谷川の菊の 我宿の菊の白露けふことに幾代積りて淵となるらん 然に有時天子の御枕をとゆる科により。 通信朝 十五夜の名残忘ね心さしを案給ふへくや。 周穆王の臣下に慈童と云童あり。 下露 其菊より落る露たまりて水となり。 彼はるの山にて落る源にて弱の葉に此二句 いかなれはなかれて人の老をせくらん 其時穆王尺尊御傳の法花普門品秘法を 穆王寵愛 てつけん山 是を童 十三 限り

此等の歌はいつれも十三夜の心を讀り。 用る歌幾はく有へし。 秋の夜は衣さ遊かさねても月 秋はつる小夜更かたの月みれは袖も残らす露そ置ける 花園左大臣歌に。 0 U 132 りに **独宛には初心の時** しくも のそなき

九重にうつろひぬとも菊の花もとの笆をおも ひわするな

とれをみなゆへある歌也。木葉を見ては。 (18般) (18般)

ふ人も嵐吹そふ秋は來て木葉に埋む宿の道芝 俊 成 磨

問

集

蟋蟀のこゑを聞て西行上人。

**葢夜さむに秋のなるまへによはるか聲の遠さかり行** 

好 忠 不

時雨の比ほひ松をなかめては。

俊成卿

への紅葉のをくれ先たち散くるをみて。 れいとくしく打しきりて。時雨の雲の絶まより。山のかたいひならへたる特也。稽古の手本なるへし。十月に至ては。かやうの歌はいか計かんせい有へくや。此歌なと只有の儘かとや紅葉はすらん立田山松は時雨にぬれぬ物かは

らすくこく散絶薬を先たてゝ色くに吹山颪かな

又山家の落葉をみて藤原秀能。日くるれはあふ人もなし正木ちる峯の嵐の吾はかりして日くるれはあふ人もなし正木ちる峯の嵐の吾はかりして神無月風に紅葉の散ときはそとはかとなく物そ悲しき藤原高光

又木葉館るゝ音の時雨にまかふを聞て藤原資隆。山里の風冷しき夕くれに木葉みたれて物そ悲しき

是は無常を觀したる歌也。時雨かときけは木の葉の降物をそれにもぬるゝ我秧哉

慈圓

▲雲を見ては。西行。 前の歌に心さしひとしき歌也。或は月を待山の端にしくる前の歌に心さしひとしき歌也。或は月を待山の端にしくるかない。

月を待高根の雲のはれにけり心あるへき初時雨哉

絶はをなにおしみせん木間より洩くる月を今夜こそみれ具率親王

卿

詠つム養度補に曇るらん時雨にふくる有明の月家 隆

吹はらふ嵐の後の高根より木の葉くもらて月や出らん 丹 後

葉殘りたる霜の上に月かけのさえわたるをみては。 おやうの名歌の粉骨思ひしめ給ふへくや。又は枯野の村をかやうの名歌の粉骨思ひしめ給ふへくや。又は枯野の村をかやうの名歌の粉骨思ひしめ給ふへくや。又は枯野の村をかやうの名歌の粉骨思ひしめ給ふへくや。又は枯野の村をかやうの名歌の粉骨思ひしめ給ふへくや。又は枯野の村をかやうの名歌の粉骨思ひしめ給ふへくや。又は枯野の村をかやうの名歌の粉骨思ひしめ給ふへくや。

多枯の森の朽葉の霜の上に落たる月の光りさやけき 湯輔朝臣

卷

後德大寺左大臣

後芽生の露の名残に置霜の更行色を見てやは

篠の葉の深山もさやに打戦き氷れる霜を吹嵐哉 攝政太政大臣

輔

家の冬の歌に。 獨やね なん笹の葉の太山もそよとさやく霜夜に

君こすは

源宗行朝臣

山里は冬そ寂しさまさりける人めも草もかれぬと思へは 式子內親王

見るま」に冬は來にけり鴨のゐる入江の汀薄氷りつ」 寂しさに経たる人の又もあれな歴りならへん冬の山里 西

志賀の浦や遠さかり行浪まより氷りて出る有明の月 俊

家

隆

卿

獨りみる池の氷りにすむ月のやかて袖にもうつりぬる哉 之

鳥羽玉の夜の更行は楸生る清きかはらに衝啼也 白浪に羽打かはし濱衡かなしき物は夜半の一こゑ

夕されは鹽風こえてみちのくの野田の玉川千とり鳴なり 能因法師

夕なきにとはたる街浪まより見ゆる小島の雲に聞ゆる

能因法師

閨の上にかたえさしおほひ外面なる葉廣柏に霰降 式子內親王 也

狭莚に夜半の衣手さえくて初雪しろし岡のへの松

降初る今朝たに人のまたれつる太山の里の雪の夕暮 寂蓮法師 家 卵

はせし歌に。 是のみに心をかけ。 あるへからす。十二月に至ては。 誠山家の雪の深きも哀成物也。大概此歌ともにもるゝ氣色 より落る風のいたくはけしきより。外は眺望もなく。 待人の麓の道や絶ぬらん軒端の杉に雪おもる也 此時の心にかなへり。 四方の山くに積れる雪 太上天皇のあそ

此とろは花も紅葉も枝になししはしなきえそ松のしら雪

草も木もふりまかへたる雪もよに春待梅の花の香そする 讀 人不知

又古人は蔑暑に述懷の歌おほくよみ待り。 雪降て年のくれぬる時にこそつゐに紅葉ぬ松も見えけれ 髮

集

#### 行上人

自 つからいはぬをしてふ人や有と休らふ程に年の暮ぬ 上西門院兵衛

力 りては身にそふものと知なから暮行年を何 したふ質

おもかけかきくらし雪とふりぬる年の暮哉 卿

隔行よるの

嘆つく今年も暮ぬ露の命いける計を思出にして 俊惠法師

Ę.

年の明て憂世の夢の覺へくはくる共けふは厭はさらまし 入道左大臣

5 そ かれ ぬ年のくれとそ哀なれ昔は余所に聞し春かは

此道の深旨を書墓し給へは。 たの無常を觀し知のみならす。 哀ふかき事也。 ならす四季の景物を色々の事に見なし聞なし讀置り。誠に ゆへからす。古人の心をみるに。春は花秋は月。それ 是等の歌作者の粉骨也。 ん方なけれは。さまくの心懷を詠し霊し給へり。先達の かそふれは年の残りもなかりけり老ぬる計悲しきはなし 年の暮は今年のかきり。 たやすく見給は」。 rþ: 此歳暮より老の積る道よき 々申に及はす。 こ」より來れるか 和泉式部 其神妙の處聞 此十二月 のみ

> 給ふへからす。それも先達にもなり境に入時は。 候。 事をかへりみさるへし。 の歌をも麁に入給ふへ し給ふへし、たくみなるかた。 の時左様に風躰を學ひ候へは。句のすかたをくるゝ物にて に聞ゆる也。 共にめにたゝぬ物を取出し侍れは。發句のがらもすくやか 月なと様の物は。 ともに指出たる物を案し給ふへからす。其故は春は花秋は なる事よりふかきに至給へとの憤氣より。 めなれは。 心つかひの事。 又初學の時なと大様に心かけ。 嬰兒の竹馬草鶏におなしたるへし。 上手のうへは物ならぬ物をよく取成。 千の一も相かなふへきならねと。 をのつから景気を以て出る物也。 初學の發句を案し候は 細工かましき言葉を心かり 正直ならん歌を旨と案 みつからの んに。 此あさは、 いかやら 初學 みれ 四 0

花に見ぬ夕暮ふかき青葉かな 風ゆるく花からはしき朝かな 日の御影花に匂へるあした哉

同

敬

備

廣

智

小松生撫子咲るいわほ

力

成かたなく。扨又頼くは出來かたき物也。 此等の發句さしむきたる儘の正直なる物共也。 かやらの發句の躰を學ひ給ふへくや。 名もしらぬ小草花咲川邊か 初心なとの時、 20 たくみ

一初心の時。 りて。 くや。 にはやく分句を守給ふへし。其後句を案候へは。心落付靜ま 給ふへし。 にて候。受許の出 に。必しをくれ ぬ懐帋には。 しき詞抔取出さぬ物にて候。いかにも無事なるを本躰とし かきたてぬ物也。 也。 300 心して。 人さしたる時。 へとは此時の用心也。一順なとのふかく沈思殊に案せぬ物 其故は 凡前へ 先發句出 再返の の句第 かやらの事も察しらると物に候。先一句もとまら 一順なとは聊爾に出來ぬ物也。脇の句より案し給 又懐話移りにはいつれの紙にも四句 のかぬ句にて 一順なとは席にて候物に候程に。事をつくしみ 連歌にあひ侍らん座中 心をくれて面をすりやせんなと、思ひ候程 句一順と同前たるへき物也。一順にことく 三案し給ふへし。さて四旬め五句め心懸ぬに。 **待らんに。 我つから まつるへき 所ならすと** 前より連歌心なき時は。 70 さのみ人に待れぬを。しつけと仕給ふへ 心肝要と覺候。 いかやらの比與なる句もせられぬもの 候は」。 輕くとあそはし給ふへ にて。 始而知ぬ人にあふ 色々の 五句めの内 心遺侍るへ

也。かやうの句偏に花の事を云る成へし。花なとは思ひかたらす。凡の句に春を仕出し候事。上手の嫁ふ物にて候。北の過さらん懐紙のうらなとに春の句能候。金言の句抔は

のなとゝ招かけたる風情を黛侍る也。

間。季の字大切成をや。のいたも夏にても。月の句出來候はんに。其句に秋なと付を事也。夏の月杯に夕の露の秋近き比なといへる句に。ひも事也。夏の月杯に夕の露の秋近き比なといへる句に。ひと秋を付候はん事心なくや。露と云字前の夏の句に出候。と秋を付候はん事心なくや。露と云字前の夏の句に出候。

片山かくれ霜日に。なとにて尺したる心のかるへくや。連歌はかやうに候。風も音せぬこそは長閑に候へ、雨過るを二度となへたる物にて候。多分尺する所の分別なき人の私長閑にて。かやうの句はよろしきやうに候へとも。前句風も音せぬ春のさひしさなといへる句に。雨過る夕山かく

一拳の桁の秋しらぬ色なと云句に。松の葉になる、時雨の晴 侍り。 其句の心を便りとして連歌をし給へる人。世におほ 初心の時先達の名句とも多く書集て。 然其名句の内を丸くと忘てつからまつる物にて候。 物也。前句の峯の桁の 前とおなし物成へし。付所よきやらに聞えて前を尺し やらて。松の葉の露いたつらに置馴てなと」い 當座のたよりをうる事は尤に候ても。 あきしらぬ色こそ松や槇にて候へ。 事として日夜見て。 ともすれ へるは。 く見え がは自 見 たる 叉

さなるへし。 句より四といへは東と答る句なれ。 吹入ぬ。 の好 散 は西といへは東と答る様に句をなす物 先世上の雑談の返答をなすに似たり。 ひかれて。 かめしく つらめなと」返答をしたるやらに有へき也。 士及かたき事也。 松原の陰に鳴たつ小夜千鳥。 吹つるかなと传らは。 遠山松の夕くれの陰。 今付る句もさひしきやらに有へきなり。 至らぬ時學給は 宗砌法師の 10 さこそいつくの花も残 旬 たくみなるかた細工かま E 此等は至極 あすや 姓灯 也。 さても 心 下。 左樣 都たに つへ 昨 の道 叉至 の後の 目の 、き湊江 四 B でやら 連歌 方 は尋常 風 L は、 0 0

後

は

わ 0 0

名所の 物 句は所に讀たる物抔ならては。 度の句に付様しらさる名所なとすへからす。 也。 句。 公間 名 たム誰も 所の 句をは上手も付にくき由 開 なれしれる所なと覺えたりと たム心 はかり にては あ 其故は名所の 1) -かぬ 好· 士: 宁

初學の時ひえさひたる姿杯とひねかひ給は」。 此 くさらそくして。 中に哀もさひしさも侍るへき也。 さひしき句の るへし。 心の時はい 萩の 此姿なとも 境に入至 花 上の露たはやかにやとりたるなるへし。 程 かに P のもとなとに出たるやうと先賢中され 秋の野に鹿鳴。 も饒敷。若殿上人なとのいつくし 極の人の心 此比初學の人なとの我 夕の 風そよくと かく あかる事を へき道 しき物となるへくや。

かく有へ

く候。

誠に古人の思德有かたき事也。

はよ。

力いらすして。

みつからの句のさし

のひ。

をえん事はかたくとも。大方彼今新古今二部の間を隨身して。

大方彼集の歌詞なと取て句をなし

自見をもなし給ふへし。

'n,

なとも只

々くみ

しり給ふへくや。

V

かさま初學の時より古

ん好士に意地を開覺え給は」。

其力を以古今新古今集の歌 此歌とも分別あきらかなら

詞をたゝしよみ給ふへし。

外越度の第一たるへくや。

かにも自體歌百

かるへし。上手の連歌をは。一度成ともぬすみ候では。

歌の心詞幾度もそれを取給りて。

へくや。 しはりて。

て心をとめさら

ん事

可然候。

た

ム上手なとの

I) の云。 者たるへし。 付物につまり給ふへくや。 かさま立田 の出來侍 是を以て知ぬ。 野の る時 今も中比の作者はかやらの事心得す也 に有物三句に 然者前後の辨もなくして作らは。 歌 いつれもえ付ぬへき物心になき山中給 五首三首其名所の歌覺え給はん人は。 十首はかり覺侍れとも。 蔦紅葉と云句に立田 わたるへくや。 夕付鳥關鹿 と付ては。 中比 吉野と云 0 なと 作

る。 心至淺き時は。 所は筆にも難及し。 は餘にく 此歌二首は今の を面白く覺る事侍り。 ましなる所を至極と。 蔦かゝる谷の埋木幾秋かをのかえならぬ紅 是等は不堪の覺悟也。 0 くと有明の月の月かけに絶吹おろす山 へるは。 やすく打ひらめたるやらの物 他に むきたるま」に 細工かましき發句た」句杯。 4 かほとも 尤用心肝要成をや。 古人は云置給 ほのくくとの歌は打聞えたる (3) 正 蔦か」るの 直に見る物 へり。 也。 至極 歌を 此歌の至 楽し 正直ならさる 一風の 物共に の無上の連 至極 V2 カン 3 極 あり 所 0

て。かやうに取置るはひか事なるへし。上代の名歌共によに聞知人なくしてなとゝ。 我句のいひ終ぬ 所をは 藪すしの耳に落さる句は惡かるへし。左樣に仕出したる我句。世我心一としていひはてぬ句をきこえにくゝ作りなして。人

岩にさへ苔のころもはきる物

同

IJ. 1 うありて。いはぬ俤残れるを上手の至極仕態と心得へし。初 しきたる歌を。 初院は例の人丸の再誕と被仰。定家卿は五代集に及てそ きさまの歌とて。定家卵 一首も見えす。 へるにも。 後共に稽古の本意と學へき連歌は。 此上人の歌に平懷躰の歌多分有て。 今の世の秀歌抔とて。様々の抄物共事を鑑して云給 先聞えぬは 縱令歌も連歌も聞えたるうちにたけしなゆ 後西行上人讀直されけるなとゝ褒美し給 一首も侍らす。 のしるし給へ る詠歌 扨又四行上人を後島 聞えさるは百首に 0 大概。 秀 歌

親のゆるさぬ器染の袖 月かすむ題干 あらはとおもふ親のいに 夜は更けりと人も音せ をまつ岩まの苔 よりたつる煙りを月に見て 夕くれことにかこちやらは 拾る身は中く科 我よりも年のまされる人をみて は中人 つかは - の浦 と」ろなかりき の陰を出 0 0 埋 泊 と成 まし IJ オレ 心にけ 水 40 l) 13 27 UT

公言可可し一、日是	心を思ひよるへし。森なとに付待らは。ね	一心を籠てと云分別の事。太山と云句に鳥と	なく。散も落も同事に侍る也。	の事を盡し沙汰し置侍り。連歌しの拙きは	花の散と云句の姿。かやうに可有候。かや	月に散花はこの世の物ならて	此等なとは落てと云て。淋敷哀深き詞也。	花落て小篠露けき山路哉	落るは淋しく靜なる姿也。	隔なるをや。又散花はさいめきてきやしや	は。かほるなと」有へくや。匂ふとかほる	との花をは匂ふと可有候哉。都の花。雲上	にさ」めきたる風情也。柴の戸。谷の戸。	一花の匂ふはさひしく靜なるかた也。花のか	宗祇在	舟下す小夜更かたに月出て	水さむけにも千鳥鳴なり
1 是 憲		云句に鳥と付侍らは。獨鳴		しの拙きはかやらの分別も	候 <sub>°</sub>	心 数	き詞	心敬		てきやしやなる風情也。花	ふとかほるとの境。天地の	0	0	花の	祇	救濟	

秋寒き峰の庵りに人住て

同

获吹かせに衣らつなり

頓

呵

ふるさと」なるまて人の猶住

砧

の音そたかく聞ゆる

く心なるへし。 市なとゝ侍らは。 只集りたる風 情なる

前に十二月をしるし侍る所に。 冬野枯野なと云句に草苅抔は不似合。爪木取なとの様の事 來此星は天上に天河を隔てすめ らによみ侍り。 可然候哉。 可然候哉。 光心得をなす儀也。 又夏野草深き野なとく云に。 然を上代の歌に我身即二の星成や IJ. 七夕の事注し残し侍り。 此星七月七日に 柴取薪取なとは不 あ る 元

宗祇在判

もかな けり 哉 發句切字十八之事 露や色花の木ぬれの朝朗 染湿せ紅葉むらこの片時 降くれよさてとそ秋のみ雪哉 松青し陰に色つく秋 秋そめし露か木葉の朝氷リ 雨そ花ふれはひらくる初櫻 草はあり櫻に秋の花 神無月紅葉も春に成 遲く來て見残す花の夕かな 人にけり の草 もかな 丽

五.

氷れた」さてこそうへにみつの雪

卷 勞 匹 Ĕ カ + 7

ょ か そ

世

一大まはし。 かなっ らん いかに す ねゅつ 以上。 はいの詞。そ 0 け うたかひの詞。 と物を見たる詞。 色なき詞。よ。らたかひたる詞。又はせめたる詞。し。推量 る詞。今一物をよひたる詞。ぬ。はやして見たる詞。 うたかひの詞。哉。うたかひの詞。けり。みたす詞。 るイ す。かんする詞。意たる詞。めつらかにかんする詞。 ゆたんの詞。へ。さいそくの詞。又は物によそへてと ねかひたる詞。 花は 雪の花青葉になりぬ松の風 かしらまはし。三切なと有事は。 風 ふけ鼠花なき春の青木立 雪待て花に散そへ下紅葉 よもふらし薄雲まての松 一摩は思ひもあへすほと」きす よりも日数にたらん花 いかに木の下やみの松の雨 らん。俗たる詞。又しらぬ詞。し。目前の詞。 み け。おとろかしきる詞。うつみせいはひ 賴みてせいはいする詞。 ×Ε 楽は せ。くたしたる詞。 か。ふかくうたかひたる詞。よ。せい をそき秋の の春 の雪 草 人に文字の有 つ。したうた ( ) もとの B

> つム開 汝七條善阿もとに行給ひてありし時。自も汝に打そひて行 父母とも可謂也。 書により。人に上書をさへ題さす待る。 るに。 0 詞 へきにこそとかなしく。 朝尾上の花のかたみ草と侍りつるにては。切字なしやと云 自心の箱をふたりの間に是を語也。其故いかんとなれは。 人のせひたるへし。汝より外は此義しるへからすと思ひ。 V 一十八の相傳にしらぬによりてなりと思ひて。我は是十八 也。是を汝にとらすると被仰下詞なれは。倩御姿を見 口傳有によりて。各心をかよはす間。此十八の字自 白髮老人の形と見え給ふにより。 した。 三百韵めの發句をし給ひしに。其句に月は今 座に有て相思ひしによりて。 連歌の道共姿とも 白髪集と新外題を 未 カン 此

すてや 中のや 連歌やに七の次第 かくしても身のあるへきと思ひきや 鳥歸る雲や霞に日の入て 散花や嵐につれて迷ふらん

きるや

はのや 疑のや すみのや 思ふやと逢夜も人を疑ひて 思へはや鴉鳴まてとまるらん 今はゝやとはしと月に鳥鳴て より見る色のふかみ草

口合 رجي のや うたかひものにもかよふへし。又知ぬにも似たり。 月や花

切

所をたにみせす。先此十八の切字につゐて能取なさは。我

0 らぬ。 らは。

は 又よとの情はのちのなみたにて 風もなき荻をね覺の枕にて

からぬ b 偽りに思ふといふもうらみに 戀しさに身は惜からぬ計にて

有文無文の連歌。なからと付るに二義有。 らは 如斯五字にておさへねは。皆發句のことく哉ととまるへし。 絕て逢ならひのあらは別にて

したひなから。

IJ.

とをそ

たる時は。うたかひの

心あやふみたるに似

すみのや

此

やにとく云字をそへねは。

はのやに

似

た

疑のや 拾や rþi

うたかひなからとかめて。底に悅たる詞也。

ひくつしたる詞成へし。又は大方推重のとは

0

ep

まきれる詞にも似たり。 ふてたる詞に似たり。

數多

いはん為也。

はのや

た

成へし。

此

内のやにて。にてと留る分。中のや。

はのや。すみのや。

らんととまる分。切や。疑のや。

そかよの三字之事

7

ľ なっ 2

又よとはとむる情にいひ捨て 里人の山はふるかと雪まちて うき世そとおもふ涙に袖ぬれ

如此そかよの事は。そとかとよとなといひて。てととまる

同

へし。但そかよはかりにて。とをそへすはとまらす。され

日合のや

是程位おとらさる間にて。口合に云へしとなん。

句の中可然玉しゐならん人に合て云也。

叉

とめなから。

したひなから 有文之句 したひなからと云は。 瀧の響そちかくきこゆる

月に吹太山颪の摩なから 柴の戸さむく秋そしくる

とめなからと云に 露のもる軒端は松の風なから 猶しくれ 行秋とこそなれ

**嵐吹雲間は月の影なから** 苔の衣のはるとしもなし

とめなから

らけてにをはの事 櫻さく山の陰には住なから

出てけふ幾日なるらん族ころも 來てこそ道の遠きをもしれ か」る旅そとつけもやらはや

てととまるに五の次第有。

かよあれ共不聞。

大切の口傳。

はそとかとよといふすゑにてとゝまらす。

一句を聞に。そ

千百十七

爸 第

重詞之事 舟にては枕の下の異消波

ふきかへて苔なき軒の板庇 いたく今年は霰をそ聞 みちしらは薪の友よまてしはし

柴の戸あけて山見えにけり

花を見し春は残れと思ひしに 浦人は何と聞らん松のかせ 月にはいとふ秋のむら雲 山にてもた」うきは夕暮

うつみ付之事 さむさそまさる山風の色

くもる夜の月の雪には晴まにて 名残はいまた都なりけり

秋の行闘のこなたや時雨るらん

ふみかへて行道はるか也

心付之事

鹽みちて干潟や海に成ぬらん との浦の月と雪とに夜は明て なこりやをしき出る舟人

體付之事

霞には禁も見えす山見えて 月に行舟路に春の夜は明て 花のうへより夜は明にけり **霞にとをき浦の松原** 

風情付之事

詩の心付之事 水の上の泡と見えてや消ぬらん あたなる身をは露にたとへて

川こそうすき氷り成けれ

橋ならはあやらくとても踏へきに

うけてにをはの事

なかるゝ浪をうつむらき草 夏河の岩まの水の絹へに

生後生の罪たるへし。三世ともに共罪重かるへし。 傳云。是を汝にしらす。初心の人に是を見すへからす。

4

寶可謂歟。作者不詳。校合次記之而已。 永祿六年清和上旬

右此一册者依津田經灰所望仍景染筆云々。

出葬分別。

至

天正六年菊月廿五日書之。

紹巴在判

紹 與 卷第

天正九年菊月廿六日

此两帖透網院殿御筆也。永子孫に可傳。可秘々々。

勝 延

答

第

# 續群書類從卷第四百九十七

### 連歌部廿七

心敬僧都庭訓

きにて大かた心らへし。
着温の八景の題に春のなもつはら詩にも秋冬をつくれり。満温の八景の題に春のなれ。春は季すくなき物なり。秋はなにとなくさひしき物にれ。春は季すくなき物なり。秋はなにとなくさひしき物にれ。春は季すくなき物なり。秋はなにとなくさひしき物にれる連歌の外に。よしなき所にて。春をとりいたす事なか

とするとなかれ。とする事なかれ。又わさと付にくからむ一花のまへといはんとき。春の句なとしたる。比與のことなー

上手にならむとおもは」。先上手にきらわれぬように連歌

をしならふへし。あひてに戀しのはる」程に成ぬれは。を

らめにふつとよき句つくましき也。うつくしき句のしかも り句なと見給ふへし。皆異相不思議の前句とも也。 りて名譽の句をも付いたすことまるあり。 いふ句。付にくき取上也。異相の句は難儀なれとも。 理なき。又ととはりの過たる。又世俗に人のうちひらめと ふといふは。第一たらくの多くとりこみたる句。又一句の あるましけれとも。よくはかくるましきなり。上手のきら にて。きとくにかけといはんかとし。 大きに物もしらぬ事なるへし。たとへは手書にわろき紙筆 上手ならは句のよしあしをいはす付てこそといふ人あり。 のつから句をもき」とり。とうも入て上手にもなるへし。 とに罪科。釣たる」。柴しるなとにひまなきわさ。 かむねより出たる句は寂上也。 いさりする。 けにはたる物にては 古人の名句かた かりするな うちひ さけ個 かへ

ぬ物也。よくで~心うへし。し。かならす下手のとのむ物也。今よくもあしくも付られた。かならす下手のとのむ物也。今よくもあしくも付られなといいふ句にいましめ。如此のたくひいかほともあるへ

下手のこのむ物とも。 しきかと覺るなり。君干秋万歳といはふなる。動撰にもか ね千代萬代 ももつはら祈禱になる也。法樂にも誠はいたつら事のつか まんさひなとといふ物の。千代萬世さまくへのいはひなと 神祇祝言なとはしまぬ物にて候。無用の時とりいたすまし なとはことくく地獄のさた空のことはりなり。 といへとも。 にするにや。あさましき事也。それによるへくは。せんす 田守。又水邊の三旬めなとに。とまや。あしのや。ま砂。 かようの事をこのむは。その亭主なとのついせら 鹤台。 誰人か祈禱なとにさせん。大般若仁王經心經 神のゐかき。 松の落葉。 みしめなはなとはなるま さひしき。すこき。 しかれ 鳥羽

て後。からひたるはよし。初心中つ比迄もたゝしくすへし。すのひけのおひたるやうなり。をのつから年も老こうも入りさうにといふ心なるへし。こせこせとしたるは。七八のやめに水をかけたるやうにすへし。大に見るく、と物になやめに水をかけたるかたをこのむへからす候。たゝしくう初心の時からひたるかたをこのむへからす候。たゝしくう

也。これほとのともかはる也。たゝ虫といふはからひたるたゝ虫といふはうつくし。きりくゝすといふはからひたる

上手の句を見るか肝要にて饒。但上手の句を見るにとりて上手の句を見るか肝要にて饒。但上手の句を見るにとりてもとより上手の句にも。いか程もまなふへき句あるへし。又ちなる物のまなふは。毒をのみたるほとの事なるへし。又ちなる物のまなふは。毒をのみたるほとの事なるへし。又ちなる物のまなふは。毒をのみたるほとの事なるへし。又ちなる物には用を付へし。用には躰を付へし。但事によるへし。海浦なとゝいふ句にも、かれるとしたるなとやらぬからす。中と絕たるやら也。

一よき句といふは、我もしらすふと出くる物也、録字とはみえかのき案するは、かたはらいたくこそあれ、数字とはみえなのき案するは、かたはらいたくこそあれ、数字とはみえなのき案するは、かたはらいたくこそあれ、数字とはみえいのき案するは、かたはらいたくこそあれ、数字とはみえず。それを聞しるましきとおもふかむねんなり。

Ŧ

上手のあひてになりてする時は。心をわか分よりはひきさ んとうつへからす。まけんとうつへからすと云。連歌にお けてもつへし。或素打のいはく。上手とうたん時は。かた

下手のことは中にをよはす。よき程の人も前句にすつへき 枕ことはのもの」ふのやそをはすつへき也。このたくひ毎 治川なと」あらん句には。うちの事とのみと」ろえて。 たてすすてたる也。連歌に大切の事也。もの」ふの八十字 ひとをうちかへせはとひなり。まへにいろくへの事をいひ さも候はす。ひとこそかつり候へといふをとひととくなり。 みをとうく、と打ならし。鬼こそかへり候へ。いやそれは なり。たとへはなそくへと云物に。笛ひつとふきて。つ」 所をえすてすして付るほとに。無用のほねを折又こうへる なし事也。 句にあるへし。 いやそれはさも候はすといふほとに。みな用に

へし。

るなり。 ひもてゆくほとに。さくらも紅葉もつけねとも。よく付た ひとり暮行木からしのかせと付たりしはやさしき也。い 櫻ちりもみちはくつる山里にといふに。

はくゝみたてしちゝはゝの跡 海山の心にうかふね覺して

> なるへし。 ぬかよく付て候。 にたとへたる事。 是も或人付候し。 誰もしりたる事に候。此ね覺してをつけ との外ほめられ候つる。 夜分まくらなと入候ては。さんくへの物 父母 0 恩を海 Щ

一宗砌の旬に。

秋さむけなる木からしそ吹

しく不便なるかたは候へ。是程の分別肝要なり。心え給ふ にけつこうにて候也。かた山もとの草 此句さむけなるをつけんとて。遠山とをきたれとも。 をしねもる遠山もとの草の庵 そ。きひ

するにより。もとの下手まて也 よし。古者はりやらしやらすれ共。 き人に物をとふへし。關東にもきのふけふする人は皆心え により。あらためられかたき物也。 下手になるなり。もとをしへられたる人をひいきの心ある 比與の者のをしへをらけて。 無上の器用なる人も。 さるにより入門よりよ 心もとのかたをひいき 無下の

一心はこと葉をころし。 尤と思ふ也。と葉をかさりいたはる程にといろはなく。い たなく。ふしくれたちたるをしらす。よくくへ心らへし。 つもの事のみ也。また心をもと」たくむほとに。と葉のつ 詞は心をころすと云。故人の言葉也。 訓

うちきくに面白けれとも。

やかてさむる物也。又

事にて候。他人にの給ふましき也。なからん時は。詞をよくしたて候か一の事にて候。是は秘一くはあるましきなり。またいかに案するとも。さしたる心た」を主き葉はらつくしくやましく。心はあたらしからんにし

第三なとは又いかにも一角すへし。 第三なとは又いかにも一角すへし。結構する句はこ事にて候。他人にの給ふましきもなき。いつもの事をとりかへしするは。人の心をおとししつめしませんかためなるにや。そのとく一順にて連嵌心になすへきなり。しからは猿樂のしき三番と心えてすへし。一順にこれはと思ふらは猿樂のしき三番と心えてすへし。結構する句はこ事にて候。他人にの給ふましき也。

て旅の字残すへし。あるものゝ句に。へからす。旅まくらかりまくら同し物ならは。かり枕としへからす。旅まくらかりまくら同し物ならは。かり枕としつからす。にまる物。二ある物。五句さりてある物。よく~~分一百韻に一ある物。二ある物。五句さりてある物。よく~~分

るあちはひなけれとも。いつきくもあかぬ物也。めつらし一無上のよき連\といふは。湯水なとをのむとくなり。させ寒。嶺。旅。いつれも一二より外はなき物也。あらしやさむき嶺の旅人とせし。道をしらぬもの也。嵐。

へは。うちひらめになりてめもさめぬ也。かくいへはとて。初心よりさやうにさせるともなくあてか

一器用の人を初心より見しるやう。人にとつとわらはる、句をもし。又思よらぬ句をもあてかふか。物にはなるさうなり。それは上手にそひ稽古修行すれは。わろきかたはうせて。おもひよらぬあてかひはいよく~つのる也。上手にかならすなるへし。はしめよりうつくしく科もなき句の。させる事なきをのみするは。 さしたるして にはならぬ 物なせる事なき をのみするは。 さしたるして にはならぬ 物なり。

一歌はた」もろく一の難題ややすき題やにて。 なむ執するとて。 くへし。そのことくよき句は胸の底にあるへし、連歌をたし 事あるましきなり。しけく汲てくみかへは。底より清水わ 也。にこりたる水をすこしつ」汲てすめるをまたは。すむ もよみ。連歌は上手とも下手ともよりあひ。 くする人は物にはなりか ちなる毒気ぬけて後ならては。誠のわか句いてきかたき物 をも百韻をも。 又前句付をもいひすてをもすれは。 座にあふ事をものうく思ひ。 ったし。 百首千首万首 あけくれ 何をすくな 胸のう

によるへきことにて候。句を多くする人にむきては。い外は仕候はす候し。それをつねにいさめられ候ひし。人私云。雜載その比たしなむなと申て。百韻に一二句より

にも連歌は案せよと又申され候

たり。時々香のにほひ空たき物なとこそ おもしろくは候 て。善悪の分別の候は」こそ。 雜談なとする物は。 も胸にさしはさみ候は」。何事かいはれ候はん。さやらに る也。 きりにて候。一人なれともましり候へは。みなのあたに しな面かけ餘情なといふやうなる。さまくの ゆめく、ませ候ましきにて候。さし合輪廻遠輪廻 しいねふりなとするものは。そのみはさたのか しみこほり神も佛も影向なりつへらすみわ けにもたはとのやうなる事をのみし候 かへすく、あたりへもよす 大事と 句

一宗砌かいひしは。 用もあるましきか物意なるにくきなり。上古は座を一度た つ人をも不思儀のやらに中候し。 候。けにもとおほへて候。 るもわろし。始よりあふ人のはてぬに立たるもわろしと中 つかへ。又人のつかさとる人なとは。ひまくへにあへるも もふ也。さもあらぬいたつらもの」。さらに はしめより會席にあはぬ人の中ほとに來 但佛法者學文にひまなく。又君に

一古人のよきらたをつねに見て。 歌を心らへし。人のつねに歌は何のらたをみてよく候はん と印候。其返事かはるへきにて候。しやらとく作者あてか 上下の句のつきやうにて連 U

> にて候。 のね しと。ひとへに心敬は取置て候。 たけてかける人には。た、俊成為家もしは草庵集なとを見 何の御詠なとを常にといるかくへしといふ。 又あまり心 よとをしゆる也。いつれにも新古今にすきたるものはあら ふりめなる人には風雅玉葉集なとを見よ。 心る詞も川にたちて重致 定家慈鎮和

一心もち肝要にて候。常に飛花落葉を見ても。 あはぬ連歌したまふましきにて候。心敬等都をいて」ひと いふ。曲なき事なり。 といひ。さひしきとをさひしきといひ。閑なるとをしつかと はらいたくこそ候へ。しみとほりもせす候。 ちきなき。 かひにて。と葉はかりにて。らく。 も。心をとめたる人のいひ田すは。同し夕曜なれともかく くちまねにするはいたつらとと也。春の曜をも 給ふましきにて候。 あすしらぬ心の句をうらやましかり。若き人なとのまなひ へに流人のとくなりはて」。年よりくちたるもの」。 へつの物也。 やさしく。 かめても。此世の夢まほろしの心を思ひとり。 幽玄に心をとめよ。春の曙秋の夕暮とき」とる 世をいとふ。身をすつるとのみいへとも。 心はふとく欲心をかまへ。 心にふくむへきにて候。又其身 つはいまくしくまとしからす候。 つらき。 あた」かなるあて 哀なるとを哀 草木の露をな かなしき。あ ふるまひを 秋 ふけ に似

庭

訓

り也。 西行上人の歌なと。 古人もな似せそとをしへける。 此とは

一此道はたゝ一大事の物とたに心えてたしなまはあかるへき 一歌にも連歌にも。 也。 K はみくるし。見くるしとてしらぬは無下也。俊成卿六百番 事。歌にても古事にても。又萬葉伊勢物かたり源氏さ衣な うかふはいかにもおもしろし。 とをも。よくく、見心らへし。 8 あんへいに心うへからす。 又をのつからよりきたる所にてはよろし。共歌 源氏見さらん歌人は無下のとなるへしと申されし。 本歌をとる事このむへからす。 さてそれを毎々とり出す事 いつれにも世にあるほとの 力 の面影 なはぬ

十躰のうちに。事可然躰 けてまなふへし。連歌そんせぬやう也。 と云かある也。 初心の時は心にか

あらしのひまの曙のゆめ 妻とふ庭の摩そ深ゆく

Щ

住もまたやうき世にか

るらむ

高砂や松に尾上の風落 ららさひしくも春かへる比

もしほやく煙に霞陽鳴て

る連歌は何ともならぬ物也。 此外恩句なれとも無為なる外也。 心え給ふへし。 初心のときよしひ[9期] カン ~ みた

> 一下手は冬野のかはりたると云句に。 ふといへは弱を付。 水のおつるといへは。 P かて瀧なとを付。 草のかれ 籬の花の秋 たると付。 にほ Щ

花に櫻をつくる。 用心すへし。

一心もちに三重あるへし。 田に鴈金はよし。かりに田は好へからす。 初心 くも一途にさたまらぬやらにすへし。 とく玄妙神變のかたへ心をやり。人の耳をもおとろか ぬかよき也。下手はや」もすれは戀の句をいたすも 初心のほとはくるしからす。中つ比にもなりては。 旅の道。 て上手になるさかひに入ふしては。道をまもる心をも 心にかけ。 なとやらにのみすれは。 大事の物なるへし。うき人の戀しくてあひたき。 人にもきとくといはれて。よく聞たる句をのみすへし。さ の時の句をもし。きとく神愛をも現し。 をのつからしらるへき物也。 **徐情面かけひえやせたるとは。上手のくらゐ** 戀の道。ひた」けたると葉也。このみたまふな。 先口なれ候やうにすへし。 初心の時は。 あた」かなる物也。 習傳 かやらの心も 中程になりては。き た」しくうつくしく か たき物也。 又ふかくも後 惣してこのま ち肝要 戀の旬 の也。 たる

むへし。つれく、草に此とわり書たるなるへし。 人の歌道の程はしらるい物也。 はつかしき事なり。 たし 73

一かすかなる所に心をかけ給ふへし。ひとへ白梅の竹の中 とのやうなるはこのましからす候。 重紅梅のさきみたれたる末をきりつめ。八月十五夜の月な り咲いて。雲間の月を見る如くなる句かおもしろく候。八 į

才覺あれとも下手はある也。才覺なくして上手あるましき 抄物もあつまる也。 數寄といふ二字を愚極と申名聖にかくせ本尊とさため。又 物也。たゝすきといふもの肝要にて候。されは招月庵主は やかて給にすきを書て。 、ふ歌。讃にかき給し。數寄たにあれは師匠にもまみゆ。 あめかしたなるすきそこのすきと

らに愚意にはあふき候。又御信仰のやらに見申候之間。 かたく候。 を。いまものゝ中より見いたして候。共比は何ともおも をしへられし。其時わすれ候はしとて。物に書付て置候 此條々。心敬法印。爺載か若年の比。連歌心もちのやう せ候はて。御覧し可被下候。若御同心にて候はゝ。此心 随分の庭割にて候 ひ候はす候しか。たるいまよく見候へは。みなくるり ちより外は我らも候はす候。其雜談のま」に書候間。 此道にてはかの院主の詞をは。佛の御法のや へはしるし進之候。 あひ構て人に御見

> 候。 無下にたゝ詞共にて仮。 にて候あひた如此候。御一覽之後。やかて仰破あるへく さりなから理 たにきこへ 候 はは」

長享二年戊大簇上旬 古市殿

兪

載

まり八日。 此書は俊明ねしよりもとめて。資周か筆してうつし侍ぬ。 いとしも数のかしこかりけり。明和七の年霜つき十日あ 周

[右心敬僧都庭訓以東京帝國大學圖書館本校合]

## ひとり言

り侍れとも。かはかりつたなき時世の末に生あひぬるこそ淺 千万の人釼に身をやふり一ろせまとひ侍れとも。今に露はか れよりこのかたは。天か下かた時も治れる事侍らす。三十とせ ましく侍れ。五十年あまりの事はあきらかに見きゝ侍り。そ の中にして。くるしみみちてひまなき事。まのあたりさとりし さても此世の事はみなまほろしのうちなから。三のさか の比より。はからさるにあつまの鼠れ出來て。年月を經。幾 ひ火火

年の落より。 けうせ侍るなとしるしをけるをこそ。 倉の邊よりはしめて。 内に二万余人はかりは死人侍り。大風に火さへ出て。 し鴨長明方丈肥といへる双格に。安元年中に日照りて。都の 人といふとをしらす。まのあたり世はかき道となれり。 道のほとりに物を乞。 に此七とせはかりのさき。 れ。都もおとろへ果て。萬の道万か一も残らすとなり。 うはひとると。 近き世よりおこりて。 ふれて。 入て。ひとへにしら浪の世となして。 々にとりくみて。 畠の毛一すちもなし。都部万人上下つかれてらかれ出。 たちまちにか さまくの まれり。 京兆金吾のあひた物いひ既大やふれとなりて。 あまさへ背間も傳へぬ徳政なと」いへる事。 つやくいとまなし。 よるひるのたゝかひ侍れとも。一所おちつ 亂れかたふきたる世の積りにや。 くる世をみる事。 人數を盡して失侍り。 伏まろひ失侍る人數。一日の内に十万 中御門京極まて火とひありきて。都や 年人一邊都の土民十方より九重に聞れ なかりくしく日てリて。 淺ましくも偽とも思ひ ひとへに寝劫末世の三 万人をなやまし。 かるかゆへに民もつか 君臣たかひに我國 あまか下 6. 樋口高 むか さる 資を にし 侍て。 木枯の紅葉よりも跡をとくめす。都のうち目の前に修羅地獄 說。 やかてと契て出しかとも。 東の方にあひしれる長敏といへる人便船を送りて。 なく成侍れは。かりそめに参宮なと中侍て心をの となれり。さて數にもあらぬ心敬等まて。 のム草葉を結ひて。 に富士なと此ついてにと传れは。波にひかれた」よひ侍り。 ( 。一塵も殘所なく。大野やけ原と成て。 にきひしくかまへ侍り。其外洛陽の寺社。 り逆茂木を十重廿重に引けり。金吾の方にも彼亭以下を用

の一葉のかくろへも枯果て。ひとつの露のよすか

都のほとりには草

侍るに。

け

にしてくれまとひ。四方に散々なり行侍るありさま。

介等なり。

内裏仙洞殿中をはしめとして城槨にかまへ。

武家諸家地下の家

上下万人足を空

嵐の花

六角宮內大輔政高。

大內新介。

一色。土岐美濃守。

0

田

管領畠山尾張守政長。六角四郎。赤松の灰郎法師。武田 行幸なりて。京兆 一家の讃岐守。 天か下ふたつにわかれてけり。 ひに斯波治部大輔義門。自山右衛門佐義就。 夫信賢等也。 金吾一 阿波守。伯父右馬頭。下野守以下。 一所に玉臺をしめ給ふ。 味は一家相摸守。兵部少輔政清以 か」る程に金輪仙 其外京兆 同名左衙門佐養 洞 ならひに は F 殿 म्

る所なし、 事なといてき。

諸家の内さへ思ひくに君臣同僚のあひた領れや

後は年々歳々天下つえつくはかりも長やかな

おさまる道なし。

其後いく程なくて。

赤松の亭にての御

しに。

Ŧ

海路山路の便をもうしなひ侍れは。

都のみたれいよし

へ設ましく成行

夜のかり髪とおも

ひしか共。

はからさるに武豪

り也。 おかましきやうに侍れは。(こ駅駅) 忍ひくに歌連歌などの事をもたかひにかたらひ侍事よりよ 70 夢を送侍 It 家。冷泉雨家。武家には京兆亭。同 りとに。 作られは。 に録ることたひく さま。 道。 京大夫。武田大膳大夫。 としての へ昔の十か 外正微和尚。 阿波守一色左京大夫。武田大膳大夫。 冷泉黃門。自山匠作。同名阿波守。 しき食席所々に侍りしなり。公家には一條大問。飛鳥井 和歌の心さしの人。色このみなとも殘侍て。 ある人の都ほとりよろつの道むかしにかはり果ぬる有 ことに歌連歌なとのなり行侍ることなとひそかに勢ね 法師。 見聞侍しことも跡なく忘れはて。 1) さまく 中の比までは。 あらり 腹ふくる」なと」古人も申侍れは。 一とこそ聞 都はるけき境なれ 日正三位 堯学法印の會。在々所々月次の會當座褒贬な 智温。 ~ 近き世に見しとのはしをうち出侍り。 になりぬれは。 會席 外郎。 してい 入道常間以下數をしらさりし。 歌連歌の名匠先達世に残りて。 小笠原備前入道。 数しらす。共席作 返事にもあたはさり 常佐已下。其外には清巖和尚。 共席に有し好士。 ともの ,典廐亭。同阿波守畠山匠作。 むねに思ふ事うちさらし 53 同名左衞門佐。一色左 仰勢守。小笠原 又いさ」かのとも 東下總守。 者先達。飛鳥非黃 ^ 0 草の枕のひと ١ 今の世には をのつか 人 あなかち 舊跡 近藤入 其比さ **%備前。** きら まと ٤

3000 2000 人も 樣。 いかは きりし。 りも詮なし。殊清岩和尚 入侍らん。まとに十方常晴冥の時にや。 ひ。いかなる友にあひて。故質をもあきらめ。 あさましくも悲しくも侍る哉。 不堪愚鈍の事侍れは。 残らすなり侍り。 一のとをも耳にと」めす。 かりの器用利根の人世に生れ待るとも。 今は千たひ悔足すりをし侍る斗也。 誠興 に三十とせは日夜のことに侍 盲 П 時の いさ」かのさとりをもえ侍 の前の紅 す 心敬彼席ともに望 0 夢となり 牛の前の調筆よ 此頃ふしきに 誰人の 此 大悟に か かと 3 宿

白牙は子期うせて琴をわりしと也。 とけぬ輩になれて。邪なる却入侍らん好士つや~~詮なくや。 自樂天は元結をなけき此情をあつめ。 (位)

孔子ば類回獨をこそ惜み悲み給

は 佛も迦葉一人をこそ微吹給ひ 給ふ。目蓮須彌の土はおほく。御爪の上の 月蓮にとひ給 を過給へるに。 給へは。さとれるものは御爪の上の土のとしとの給へ おほろけにも有かたき哉。佛目蓮をつれ給ひ へり。 土をとりて御爪 此 土と須彌の土とい L 0) カコ 上にすこしをか まことにあ 土はすこしきとこた 0 12 力 86 7 73 15 せ給ひて。 须蹦 力 力 なる人 りとの りつい 0) 松

て。ましはりくらすこそ獨あやらけれと。又樂天とふ。

4

あやしく待る物かなといへは。

和佝答。

鳥の巢の輝

削なと」名つけて。

和尚の栖

まりにはかなきとにた

へ侘て。

木の末にのみ住侍しを。

もろこしに道林禪師といへる人は。

とくまり作る。 るは空のみなりと云。

露をいまた見残し侍るとかたるとなり。

月に別れん事也。

古賢の

ふりたるひはたの軒なとのつらく。

の滲又ひらさむし。

のひらかに俤もうかひて。

も水ほと感情ふかく清涼なる物なし。

許渾水三子とて。一期の間水の詩はかりを作りしと也。

かるへしと也。

つれの道

も人間

の無常遷變を念々に忘れす。

は。壁にむかつて。ほときをかふりて。一生を送侍るかとく とほりはかりえんなるはなし。苅田の原なとの朝らすこほり。 とちたる風情。おもしろくも艷にも侍らすや。いにしへの歌 へはかりの詩をつくると也。されは杜子美一生られといへり。 二人此世の事をむつ物語せしに。獨は世に余波のおしく侍 けにもいかなる岩木の心にか。月を艷に露をはかなく もろこしの詩人第一の杜子美は一生の問られ 秋の水ときけは。心も冷て清々たり。 いはく。大かた 歌道を しらさらん糧 なにとなく不便也。夏清水の本泉 枯野の草木なと。露霜の 春の水といへは。いも (と歌) 獨は世には露のみ心 汝かこの世を忘れ なさけ深く心高 此世のあ あまり かな 白樂 哀な 又 人ならへいひ 傳へ侍ると。 梵灯港主口情き 事と彼 を申侍るものかな。 周阿は心き」てとり合せ。 也。有かたふこそ覺侍れ。 き物なとにてさとり知へく哉。昔の救済周阿を侍坂とて世 對論に及へからすと有し。有難き御言葉也。けにも手跡晋曲 哉。又好士等ね奉る。 を尋申侍しに仰給ひしと也。 藝學問佛法なと」ての」しりあへる。おろかなるかな。た」春 手の一生の塚上の句と。 金言におほえり。一大事はかはかりのあしきうちに作るへ 出さむは下手なるへし。 くしく聞よきさまに句を作らんは上手なり。 也。不堪の句は箕作佛師經師 とく也。昔二條大閤にある人の連歌の堪能と不堪との心 の雪にて佛を作りて。 このとはりは三歳の嬰兒もしれり。 ろしの身をは忘れて。 いへれは。白樂天三禮してされり。 は三歳の嬰兒もしれり。行する事は るか是佛法と。 和 何こた ふ。 堪能の次の句は堪能の物なるへし。 常住有所得のみに落て。 上手の句の内 我ために堂塔婆なとをかまへ待る おなし位に侍るへく哉。 はかなき一ふしの御こと葉なれ てたり上手とみえ待り。 けにも救濟に周阿及い 佛師經師箕作といへら 諸惡英作。 なと」てさるへ に第 和尙 まとに唯今をしらぬ 八 何の老翁もまとへりと 諸善奉行。 一のあしき句 いはく。 L つまつきてい からす 無下の けにも しれること 申け ん程 かい 天 るよ あて かと まほ 5 の館 下 < あ 2

理 言

千百二十九

腰にさすかたなひきなる花すゝき海士人の濱田かりしほみちぬるに

雲あれは出る山にも月入て

救濟句。

ふる郷に跡をつき木の花吹て

としにさすかたなの文字を取分て

おなしとから様なれ共。しなたけえんの句ともさまくいつ出て雲まの月に成ぬらん

にみ

柴の戸ほそをた▲く秋風と云に。え侍と也。同周阿旬に。

今夜とは契らぬ人の月に來て

によらさるか。月に人はこてと有へきや。此句秀逸とてしるし侍り。しかはあれと心うるはしく。前句

後京極攝政御詠に。

冬さく梅にましるくれ竹

るに竹をよせ給へるは。古今集に。 此脇句二條大閤様もあそはしをけり。しかあれと草木とい

置侍るをみるに。大かた前の句をからす。又かたりあ れとも。 此本歌にてよせ給は」。 といへり。 け侍る句おほかるへし。 宗として。輪廻前句の難句なとには。とをすてゝ人の句をたす には。かならすいひ捨たるものおほかるへし。 別数なとくて。圓成圓数の所よりは淺くや。 り。しかはあれとうるはしき先達とはみえすや。 作者にて侍りけるや。かたり句なとしてさまくしいひつた 行侍る歟。其比河内良阿とて名をえし好士侍り。 によらす。まなこうせ侍りて。た」ならへ置たる句のみになり や。かやらのかろくしきとより。 をきかては、 をきくにも。 は竹と諸人付侍る。あきらめたく侍りて。おそろしきとにて侍 しろき所に心をとゝめ侍しにや。さ様の人をは佛法にも頓敎 の輪廻なとのあつかひによりて。地連歌定句も感情ある 木にも非す草にもあらぬ竹のよのはしにも我は成にける哉 いさ」か尋侍るはかり也。古人秀逸とて諸人しるし さのみるり句ゑり歌にのみ心をと」め侍らは無念 前の句の沙汰なし。此事無念にや。連歌は前 いかはかりの玄妙の句所詮なくや。 草木の心をとはり度哉。草木 古人の歌にもつ」りに錦を織ませよ ひとへに心もと葉も前句 まとの先達の何 當座の粉骨を きとくお ねんころ 打越

りたらん。よろしかるへし。凡堪能不堪の人の句作れるさ てんし侍るを心え侍らては。他人諫句なとの手をはなちたる るか。俊成卿のかたり給へるは。原俊賴はすへて歌をしらぬ 誰としもしらぬ別れのかなしきはまつらの沖をいつる舟人 されはとてねふり目におたしくのみ歌をよめとにはある まとの大切の人数と申へく哉。たしなみ 劫のみ入たる人のきょしるへきにあらさ 連歌は大かた歌をこゝろみ侍らては。 かはかりの下手にても。器匠のつく 此言葉艷ふかく修行高き事なる くたけふし ほうひ おほろ かり 心の 細 開 あ 0 カン らはし侍るへ 句を出す歟。 句の題たるへく候哉。詩聯句なとにも先題を披露して。 物の沙汰侍りて定給へるとおほつかなし。 に此頃賦物をとるさま不審 葉集などの歌とも。注とはり先達に尋ねあきらめて學 好士たちいかはかりつたなきこと葉をも代々集にあり。 上の好士なとの世を名の世たゝ世なといひならはし や。あまさへ此頃は發句の作者をはさし置て。滿座ほしきま」 り果たるには。 と也。上古は代もあかり人の心もすなほにて。今の世の 偏まなはん事は用捨なくては無念の事侍るへしと也。 らすと也。又證歌なとにはい より代々つきさまの歌ともいれ待り。 哉。古今集なとさへ秀歌のみにはあらすとい よろしからぬなまくしく あらくしき 歌もお ぬならひ也。とに上臈權門たち数をしらす入給へは。 ムか用捨有へくや。代々集にもゑせ歌とも入侍らてはか の本歌とて。 ムにくム候哉。 に定侍る。此事年久不察に侍り。又かたはらの會なとに。 用心なくあらく、敷ともいひちらし侍る。 L. あはぬ事の うちませて世ふたつなとならは。 からは先賦物を定めて。 それは幽遠余情をくれ侍るへし。 に侍り。發句を讀進して已後。 みおほかるへし。 かはかりの歌ともたつへ 撰者の越度には有 發句を出参ら 大かた賦もの かたつ田舎 ~ I) 。 ほかる かた 待る。 < 共內 神代万 せ候 後 は發 なは いさ への < へか 賦 座 た

卷 九 + t 10 敬 僧 都 比 登 言

千百三十

のもろとしへ行なと」い

ひ

此歌を不堪の人の筑紫は旅の別

此うたににてとはり侍るへく哉

<

れたち侍るへき敷。

工の小刀なとにて家を作り侍ることくなるへし。

所なとにたとり侍るへく哉。

連歌はかり偏稽古の好

大士は。

あきらかにはさかひに入かたくや。

歌の上下の續さまの

けにも有かたくこそ。

このさかひをさとりあきらめ侍らん好士。

か。

を詠し侍れは也との給ひし。 好士也。その故は每

々座々にこのもしくおもしろき歌は

修行おろそかに

お

とささらん好士。

りの所まても心をつけ。

毎々句々に耳こゝろのとときて。

するは諸人のうへにて。

思ひ入はつかしき句ともましり侍へくや。

いかは

の事也。

このもしくめつらしき句ともをきょしりて。

初心末座の人のさせるふしなき句

卷

百

ŋ 待り。 さ、117 の此三十年さきまて在世の人なり。此後は建仁 とり りの明匠わたるらめとも。 也。 寺心田和尚とて。 かるへ IJ 3 にうせ侍り。立殿主とて都ほとりに談義なとせし。八旬に及た あ 和尚也。萬のさま世の人にははるかかはり侍ると人々かたり なしく禪門修行の明匠とて。數をしらすきこえ侍れとも。 て此二三百年の此かたならへて云へき人なしと也。 おほく作り。 しりあひ侍 感涙おさへ ~ 110 世に行儀も心地も世の中の人に の年の暮に忍ひて立出。 老僧あり。 作る。 足も十とせはかりさきに失給へり。 し。 家おとろへて。近き世は禪學達の中に明匠ともの聞え 此門流に和泉の堺にて果給し南江。ひ出たる詩人と中 いきし作るを取。 是も行義心地異相不思議の人とい 歌 かたふとそ。 ありかたふ気ふかし。とに愚 中にも近き世には南禪寺惟行和尚大かた日本に 是もまなこある僧なと」中侍し。此四五年 の席なとにて。 共。 詩聯句も昔は公家にもつは ならひなき詩人。 我見所得にとちられて身を情と。 老後の終焉のつたなからん事を思ひ 萬人諸宗我人口 勢田の橋にてひそかに身を失ひ侍 その人はかりは聞え侍らすや。 名の世 かはり侍と聞えぬるは一体 批問ゆるし侍るはかりと たる世なとるい 今の世にもいかは 詞はにては賢くの 僧か知人にて侍 らの事にて侍 ~ IJ . 十とせさき 設一の 此界の ひ侍るは はか しか 今 作 33 カ> な 7

00 りしと云はかりの人と中あへり。恭をうち侍し(お兄男)ならひなかりし寂第一と也。是ち、二三百年の 校をは字治の平等院の實驗にこめたきなとまて利口し給 は。 恩僧見及侍しは。平家物語かたりしには千都檢校といへるも 浦民部といへる上手勝負なき計也。 もの也。 つとくうらやましくこそ侍れ。凡天下に近き世の無雙の人々。 らひなるに。 に失て 聞え侍る人なく哉。 残りし也。い る人も。 て侍れとも。二人に及へきにあらす也。 かしより今に生ぬ の上手には大山の衆徒大闘といへる也。 此風流をうけ侍り。 き世には増阿とて發持のもの侍てふき出 へり。いつれも坂口の坂阿 のも 昔より第一のものといへり。 齋持無双の上手といへり。大かた彼物語かたりはしめ 同しき心繪かく人数をしらす。さる中に 近くは天下には清阿口阿とて。 11 侍り。 有難くも思ひとり待る。 つれも小年さきにうせ作り。 此 十年は は 彼か門弟に頓阿とて。 無雙の かりの 尺八なととて。 カリ 上手锭 か門弟也。 もの也。 前に身まかり作 清岩和尚 上上也。 此二人の人の手あひ。 かれ A P 人ふき侍る中に 今に彼二人か余流 0 二輪二翅のとく 早歌なと」てう ら失て後も。 おなし比 増阿か跡をつき。 したり。 内の給 れ 其後はか 是も三 0 1) し近き世 學者より も周 + 今に あつまに 力 此 华 11= れら n J: 文禪學 千都檢 九 70: I 後は 天 か U F 上 た 11 IJ

なり。 ŋ の比 享年中に諸道の明匠出うせ侍るにや。今より後の世には。そ 世に無雙不思儀の事にて。 名をえたるはさの 十韻なとに 萬葉よりはしめて。 えたる人ひとりも聞え侍らぬにて思ひ合するに。應永の比永 耳 りは天下に都部中傳へ侍り。 阿彌か門流を學ひつたへ侍り。 リ世に其後みち侍り。彼のち應長の比ほひより。善阿法師とい 々にいれり。近くは後鳥羽院の御比より盛にもて出て。百韻五 々さかりなりしより。代々好士の名をしるし侍り。 いにし春の比失侍り。今春大夫又齋持の上手と四十餘年はか のまゝ注し侍り。程なく今の世に萬の道すたれ果て。名を の道古きを尋ねしる。まとの人情ふかきと也。凡連歌世 は延喜一條院の御代なとのとくしのひ侍るへく哉。 是又設上手のよし萬人申あへり。都にて開傳へ侍るとを 今の世の嵌一の上手といへる音阿彌今春大夫なとも。 殊我道の名譽をつくし侍るなと」人々申あへり。 なれり。 み世 此集にさほ川の句なと入侍し已後代々集 千句は爲家卿嵯峨にてひとり申給へるよ に聞え侍らす。 色々さまし、の能とも作りをき侍 かれか子に七郎大夫親の跡をつ 音阿彌は近くは天下無雙の者 猿樂にも世阿彌とて。 又連歌は もろ 是も 世 瑞禪。 道歡。 也。 H1

廣。杉原伊賀浮信。 き作者侍し。この内にも宋の世まて發り。世一の先達の名を えしは梵灯庵主也。 道助。遁世者には中宜菴主。頭阿。自阿なとムて。やむとな は。今川了俊。成阿法師。梵灯竜主。波多野。外山。平井入道 師。成穆。成阿法師。素阿。琳阿なと。その外諸人か 阿。祖阿。 九十五類齢をへて。二條大閤様門弟とし奉。 法師。十佛法師。 へるもの盛にもてはやし。 にも宗砌法師智薀法師は名聞え堪能なりしとなり かれら失侍りて。應永年中の比より世に聞え侍る人々に 應仁二年仲呂晦 赤松の 尊慶。 忍誓。 春阿彌。 禪門なと也。此外近き 世まての 好士は真下游 良阿なと」て侍し。 宗砌。 蜷川周防信永。相阿。 その比大家には勘解由小路道孝。 濱名備中法育。森下入道。 智道。 彼か門弟に救済。 遁世者には左阿。萬阿。 彼らか後まて救 梵阿。 重阿。 承 新。 ならひに周阿法 順覺法 淨隆。 心敬作 此等の 0 信 人

于時文明十一年已亥神無月十日辰刻校合畢。

明圓判

續 群 類 從 卷 第 几 百 九 + 八

## 連歌部: 许八

なり。 かし。 は。 連 合璧集と名付侍り。をのつから おちょりても 見給へらん人 たくて。なましひに見聞し事のはしくを書つらね よと侍しかは。能もしらぬ事とは思侍れと。 いときなきわらはの。連歌の寄合といふなるもの書であた 珠合壁集 此錐の海にひろひ殘せる玉のひかりをみかきそへ給 然はいときなきもの」もてあそひ物にうらみなからん いなとは て。 V ひか 連珠

## 目錄 上

吹 海 天 物 邊 象 H 光 時 水 節 邊 物 六 地 時 绺 畅 分 + 七  $\equiv$ 山 降 物 類 郡 +== 四

> 雜 戀 述 居 人 熈 部 懷 偷 所 類 # 世九 <u>+</u> 衣 釋 草 人 虫 類 数 躰 類 類 廿六 世二 十四 魚 木

> > 類 類

十九 十五

貝 鳥

廿

類

十六

名 物 雜 管 合四十二 類 絃 冊八 食 神 夢 詞 色

物

火

類 旅

祇 類

羇 人 態

廿八 廿四

世三

類 類

廿九

數

字

禁

册六

## 連 珠合璧集上

重 人

詞四十一

引

空とアラハ。(あまつ空。大空。み空なといへり、) 天象 上

天の原とアラハ。(空の事也。) みとり。海。水なき。鳥の道。 凡天象の類皆可付之。

富士の煙。なる神。くもりふたかる。

秋のよの月やをしまの天の原明かたちかきおきの釣舟を下の原ふりさけみれは春日なるみかさの山にいてし月かも天の原ふりさけみれは春日なるみかさの山にいてし月かも安都仲丸

らに付へし。以下是に准すへし。朱をもていさ」か引わ これらの歌の中の詞を取て。其歌をとれりときとゆるや

あまの戸とアラハ。へあまのいは戸とも。いは戸の闘ともい ふ。皆空の事也。あくるよしに事よせていふ。)

關に。)とりの聲。(同。) 又あまのとは海人の家居のと に。)をしあけかた。(天の月に。) 年こえて。(いはとの あくる。出る日。千代ともさ」し。雲井。神代。(いは戸

鳴神とアラハ。(源氏すま明石の卷には神なりさはくとあり。) ふみところかし。からうすのをと。(源氏夕顔。) ほそなとに取なしても付へし。

いかつちとアラハ。 なる神の音にきょつ」まきもくのひ原の山をけふみつる哉

をつる。とき。(迅也。) 風はけしき。八色。(日本紀。) 岡。(万。) あま雲。(万。) つ」みのをと。(万。) なる。

> 「虹とアラハ。市。雲の梯。 雨。雲間。イ」 朝日。 夕日。 目をつらぬく。 村

日とあらは。

ひかり。

かけ。

はれくもる。

てる。

出る。入。

夕。なかき。(春日に。) みしかき。(秋冬の日に。) あか

あさ目とアラハ。(あさつく日ともいふ。) ねさす。(紫なとに。) 天てらす神

夕日とアラハ。(ゆふつく日ともいふ。) 出。さす。里。山。(字治。) 寺。(小野。)

にほへる山。

入。さす。山のは。入あひ。 かたふく。

入日とアラハ。 をかくす。をかむ。(彼岸の日に。)紅。 西。雲ま。木のま。 拳。岡。とよはた雲。 かへす。影

日影とアラハ。

月とアラハ。 糸。かつら。(葛也。)あそふいとゆふ。(草。)

舟。友。心のくま。霜。雪。 空行。林。

光。かけ。出入。久堅の空。

秋の夜。柱。

月桂とアラハ。

枝。木高き影。花。木枯の風。男。手にはとられぬ。(伊

三日月とア 久堅の月の柱も折はかり家の風をもふかせてしかな 給遣

弓張月とアラハ。(七日八日をは上の弓張月といふ。廿二三日 花なかす濁をも見るへき三日月のわれて入ぬる山の遠かた程古今曲水宴を をは下の弓張月と云也。 の空。 ほのかに。 三月。かたわれ 舟。ほそき。

入。高まと山。 引とめ かたき。 よはき。(凡弓の付合。)

つれなくたてるしか へんない 田のからし。 末たのむ。

夕月夜とアラハ。 カコ の島哉 弓張の月の入にもおとろかて

もち月とアラハ。(十五日の月也。) 春くれは木かくれおほき夕月よおほつかなしな花の影にており夜さすや岡への松の葉のいつともわかぬ戀もする哉女 のめく。 をくら山。 藤のうら葉。(源。)池のかムみ。

十五日にきえてその夜ふるなり。 こま。秋の锭中。みちたる。 かけぬ。 富士の御雪。八六月

いさよひの月とアラハ。 をなしくは花の下にて春しなん其二月のもち月の比響を V 兩說有事也。 (十六日の月也。 又いさよふりとも

のは。 いた戸。 ゆくりなく。(源氏夕かほ。不意の心也。)まき

> もろともに大うち山は出つれと入かたみせぬ ら共 此外十七日の月をはたちまちといふ。 3. 或は山のはつ 心して付へし。 十九日をはふし待ともね待とも かになと歌にはよめ 又廿日の月をはた」は いる 十八日をは居待と いさよひ 力 同し月なか 0 月と の月

有明とアラハ。(廿日より後は皆有明也。) Пi さくら。

**\$6** 有明の月の向後をなかめてそ野寺の鐘はきくへかりける等古一等とんといひしはかりに長月の有明の月を待出るかなっていひしはかりに長月の有明の月を待出るかない。 ほろ月夜とアラ

方 (同。) 千里。(歌八名也。) 0) かほり。 おほろけならぬ。 (源花宴。)

ほし月夜とアラハ 今はとてたのむの勝もうち侘ぬおほろ月夜のあけほの てりもせす曇もはてぬ春のよの朧月よに しく物 そなき

足とアラツ。 かまくら山。きく。

鹿の子。

あまつ。北。 (以下似物也。 かひ。となふる。 林。 やとり。 まつる。 \_ -[-いた」く。 あふ夜。 旗。 ほたる。 0

になったとアラハ。(ひこほしは男也。七夕は女也。) たなはたとアラハ。(ひこほしは男也。七夕は女也。) かんなはる ~ 夜のほしか川への強かも我住方のあまのいさりか

糸。あふ嶺。一夜。かちの七葉。たちぬふ事。(七夕に。) り。つまむかへ舟。やすのかはら。としの戀。いそ枕。り。つまむかへ舟。やすのかはら。としの戀。いそ枕。天の川。かさゝきの橋。紅葉のはし。玉はし。年のわた天の川。かさゝきの橋。紅葉のはし。玉はし。年のわた

つったはないます。花のかつら、壁の衣。いまるで、全たき物。秋のしらへのとのね。庭のともし火。 なっ空たき物。秋のしらへのとのね。庭のともし火。

七夕のいをはた」て、おる布の秋さり衣たれかとりみると少のいをはた」て、おる布の秋さり衣たれかとりみる

よひの間。光のま。てらす。露にやとる。石のひ。山のいなつまとアラハ。(秋のはしめの物也。)

三学物 有明の月まつ宿の袖の上に人たのめなるよひのいなつま 家隆

たつる。とむる。風長閑なり。衣。 袖。さほ姫の衣。霞。夕霞。八へ。うすき。ふかき。たなひく。たつ。へ霞。夕霞。八重霞なといへり。よこ霞ともよめり。)霞とアラハ。(詞にはかすむといふ。春かすみ。うす霞。朝

關。浦。網。

ない、(うす雲、村雲、うき雲、あた雲、夕雲なといいまとアラハ。(うす雲、村雲、うき雲、あた雲、朝ぬる。夕白。八重、あまとふ。いさよふ。よこきる。朝ぬる。夕むる。たつ。ある。きゆる。雨。まよふ。ゆきけ。山。花、うきたつ。あたなる。 浪。かゝる。へたつる。花、うきない。あたなる。 浪。かゝる。へたつる。花、うきない。あたなる。 浪。かゝる。へたつる。 おりないました。

春のよの夢の浮稿とたえして嶺に別るム横雲の空質も今時。有明。山櫻。別。ひく。浪にはなるム。

紫の雲とアラハ。

紫の雲ちにさそふとの音にうき世をはらふ嶺の松かせ質も、聖衆変異也。)宮の中。

朝霧とアラハ。(秋霧。らすきり。夕霧。朝霧なといへり。)霧とアラハ。(秋霧。らすきり。夕霧。朝霧なといへり。)

タ霧とアラハ。 はれまもまたぬ。源。) かりのくる嶺。(古。) 人がはれまもまたぬ。源。) かりのくる嶺。(古。)

とはなくして。(万。) 山里。(源。) 草の葉の露。(同。) 色ときいね。(同。)やあしのは。(万。) 友まとはせる鹿。 哀をとむる。 小野の

て付へきにや。「假は夕霧に小野の山里。 草葉露なと付めなる事也。いかにもにつかはしきよりあひをもとめ出めれはとて。よりもつかぬ事を。口にまかせて出すは無い運気をそふる夕霧に立いてん空もなき心ちして

霧の飾とアラハ。

侍らん類也。~]

新古 秋の田。花のあさしめり。 少暮。たちとまるへき。(源。) しかのたゝすむ。(同。)

煙とあらは。(夕けふり。うすけふり。) 山里に霧の籬のへたてすは遠かた人の袖もみてまし 好思 新古

嶋。鹽かまの浦。り火。しほやく。柴とる。 ふし。民のかまと。室の八り火。しほやく。柴とる。 ふし。民のかまと。室の八たつ。くゆる。思。あさけ。 わらひ。 荻のやけはら。松

なせふともしらしな心かはらやに我のみけたぬ下の煙は 監索

雨とアラハ。

つ。古鄕。鑑ふく舟。たのむ木。相。 水をと。 笠。みの。 木葉。松風。櫻かり。 まとらふる。 さはる。 やまぬ。 ぬるゝ。ゆふへ。 身をしる。

春雨とアラハ。

たいき空。(歌。) あまねき御代。(同。) をとなき。いとなしき空。(歌。) あまねき御代。(同。) をとなき。いとしくく、木のめ。衣。野山のみとり。梅の花かさ。む

ときはなる山の岩ねにむす苔のそめぬみとりに春雨そふる新古をみたせる。

限。みをしるし。さなへとる。田子のもすそ。はれぬ思。もかる。郭公。あやめの露。あを葉色付。軒はくつる。日かすふる。水まさる。 うちたれかみ。夏引の糸。まこ五月雨とアラハ。

夕立とあらは。 月はつれなき。あふち。花橋。

**いする。** 草葉に露すかる。雲もとまらぬ。空くも

ををちには夕立凉し久かたの天のかく山雲かくれ行 の面はまたかはかぬに夕立の空さりけなくすめる月哉 庭の面はまたかはかぬに夕立の空さりけなくすめる月哉

きゆる。

あたなる。

ぬる」。

むすふ。葉のほる。

淚。 類。 玉。 カュ ع ع 風を待。 野。 草。 簽。 中。 命。 雨之

時雨とアラハ。 成也。 こ時雨なといへり。) 村しく (露時雨とつゝけ。或又秋の詞を入ては秋に 時雨。 朝しくれ。 夕時 前。 初時雨。 ょ

雪けの雲。 山 めくる。 泪。 雲間の日影。やいやき。もみち。 川音。 山かきくもり。 松かせ。 みかさ山。(歌。) 草木をそむる。 鹿。 露。 まきの 木のは。 月を待。 いいた 3.

霜とアラハ。 時雨の雨まなくしふれは横のはも争ひかねて色付にけず無川ふりみふらすみさためなき時雨そ冬の始也ける終 こほり。 身のふりて。 霜くもりなといへり。) (露霜なといひては秋也。 ふるの神杉。(歌。) 初霜。 朝霜。 夕霜。

の葉色つく。夏の夜。 なは きゆる。ふる。 赔。 かれ野。 かね 月。 むすふ。さむき。草のうら枯。木 山の聲かる」。 きく。 白妙の衣打。 まさこ。をくての もとゆひ。

霰とアラハ。 間のわたせる橋にをく霜の白をみれは夜をふけにける。 電の葉は深山もさやに打そよきこをれる霜を吹鼠哉 なり。 後見 、たく。 (玉あられ。 玉。 又たはしるなといへり。) 深山。 王さ 4。 松原。 おとろく

> カン ij

千蔵ぶるか| 月さゆる氷の上にあられふり心く た 剉 0 孙 0 ムかり衣 82 れ たくる玉川 ぬ宿かす人し なけれは長龍 里

雪とアラハ。 ゆきは行幸。 (初雪。 御幸をもいふ也。) あは雪。 白雪。 らす雪なとい ŋ み

ふる。 く。月。ふし。 あつむる。 つもる。 (雪をふく風也 こしちの山。 ふかき。 きゆる。浪。花。梅。櫻。 あさき。 友待。 自。 鏡の影。 は らいら 白 ゆふ。 うの花。 あと。 松。 5

**きとアラハ。** 

雪つもる峯にふゝきやわたるらんこしの御空, 君きかはなけ郭公くろかみのふゝきになれる。 花。 しの。 なのしは山。(後賴歌。) れる我もをとらし にまか ふ白雪に

風わたる花のあたりの春雨は冬の空にも有ける物を春雨にちる花みればかきくらしみそれし空の心ちこそな雨にちる花みればかきくらしみそれし空の心ちこそなれとアラハ。(雨雲のましりてふる也。)

中宿。 ひわ。 松かせ。 辟 鳥 雲まの月。

村雨とアラハ。

(小雨ともいふ。)

村雨の露もまたひぬまきのはに霧立のほる秋の夕くれい

まそ」きとアラハ。

琵琶。(源氏紅葉賀卷源內侍事。)

あつまやうたふ。(同。)

千百三十 九

卷

第

四 百

九

+

八

連

珠

合

壁

集

Ŀ

よもきふの宿。(同。蓬生卷。)

あま夜とアラハ。 立ぬるゝ人しもあらし東屋にうたてもかゝるあまそゝき哉麽

しなさため。(源。) しめやかなる。(同。) 鬼一口。(伊勢

ひちかさあめとアラハ。 みたゝのむ人は雨よの月なれや雲はれれ共西へこそ行物語。) あはらなるくら。(同。) 梟。くらき。物語。 (にはか雨を云也。)

(源。) もか門 過かねて。(催馬樂。) すまのみの日 のはら

五吹物

風とアラハ。

吹。(笛なとに。) の空。便。扇。すきま。 摩。きく。 目にみえぬ。天つ空。らは

嵐とあらは。 (あさ嵐。夕嵐。はつ嵐。)

行。(新古。) 下。)九かさねの中。(古。)野への草木。(同。) 山。松。嶺の木の葉。(歌。) 逢坂。(古。) 水上。(歌見 闘の杉

野分とアラハ。

はた寒き。秋の花。しほる」。くろ木あかきのませをゆ ふ。(源。)おとくのかはら。(同。)草村の露。 玉のをみた

> 一同。 る。 同。 夕霧の大將の文。 虫の領に 露を かふ。(同。) かるかやの文。

風さはき村雲まよぶ夕にも忘るゝまなく忘られぬ君野みたる風のけしきに女郎花しほれしぬへき心ちこそすれ際

木枯とアラハ。

森。笛。(源。)

秋の色をはらひはてゝや久方の月の桂に木枯の風質白世のしつのまつかきひまをあらみいたくな吹そ木莳の風像

山おろしとアラハ。 なといふ。 (遠山おろし。 深山おろし。 ふし お

麓の里。(歌。) 昨日にかはる。(同。) 紅紫。

[うかりける人を初瀬の山颪はけしかれとは いの らぬ間のへの里のあるしを尋ねれは人はとたへす山おろし b も傍風朝

氷をとく。

こちとアラハ。

(とちは東風也。朝こちなといふ。)

こち吹は匂ひをこせよ梅花あるしなしとて春な忘そ 又あゆの風といふ めり。こしの図の いふ説もあり。 かたとはひ つしさるの風をなつく。 人の詞也。 も東風なり。 あなしとはいぬる風 家持か越中守の時歌によ たつ みの風 を ع

松風とアラハ。

たる。(同歌。) 雨。きよふけて。(源。) 浪。琵琶。(同。) 大井の里。(同。) きょしにょっことのね。里。高砂の嶺。山。浦。玉川の里。桂の里。

、 六時祭

子日とアラハ。(正月始の子日也。はつねとも。はつねの日

けこ。ひわり籠。(同。)とま野。紫野。二葉松。姫小松。御まへの山。(源。)ひとま野。紫野。二葉松。姫小松。御まへの山。(源。)ひ松をひく。初春。若菜。鶯。千年をいはふ。春日野。ひ

ま。(若草の名也。) 高野の山。 桃の盃。有明。さいたつやよひとアラハ。(いやおひともいふ。)

卯月とアヲハ。

月とアラハ。れ、いみにさす。 榊とる。 神まつる。 かもの御あ衣かへ。 いみにさす。 榊とる。 神まつる。 かもの御あ

ありとアラハ。 花橋。郭公。むきの秋。

卷節

四百九十

八

連珠合璧集上

六月とアラハ。

初秋とアラハ。 なこしのはらへ。(夏の祓とも。) てる日。秋近き。

一葉

長月とアラハ。

神無月とアラハ。 秋の夜。有明。木末の秋。衣打。野宮の別。きく。 長月とフラノ

詞。(十月を小春といふゆへ也。) 霜のしらゆふ。冬のくる。時雨。行ていのらん。紅葉のぬさ。春といふ

年の暮とアラハ。

はかり。(暦のをく。) わかくろかみ。 雪つもる。 春秋。一夜春のとなり。松きるしつ。月日。冬木の梅。なやらふ。

七時分

明石。(源。)

千百四十一

苍

第

みしかよとアラハ。(夏の夜也。春をもいふ也。)あたら夜の月と花とを同は哀しれらん人にみせはや僧明

少。郭公の一聲。有明。わかたけ。夏かりのあし。

けの鷄(きり~~すの名也。)山とりの尾。あしのね。辯衣。すか莚。あふ人から。す長き夜とアラハ。(秋のよ也。冬にもあるへし。)

夜とアラハ。

とまり。月のまへの友。松。笛 竹。らかれ妻。星あひ。玉さゝ。もろこし船の

歌とアラハ。 歌とアラハ。 歌とアラハ。

ひるねとアラハ。 もの、かたふかね日影。槿のしほる」。 を今日とやいはん昨日とやいせん のである。 のでる。 のである。 のである。 のである。 のである。 のである。 のである。 のである。 のである。 のである。 のでる。 のである。 のでる。 のである。 のでる。 ので。 のでる。 ので。 のでる。 ので。 のでる。 のでる。 のでる。 ので。 ので。 のでる。

(源。雲非のかりの事也。) かひなを枕にて。(同。) 夢。 朽たる木。 (論語。) よもきふの宿。 (源。) とこ夏。

へる木こり《或柴人。) 人まつ。ねに行鳥。秋。 羅染。(杣とも衣とも。) 引。かね。宿問。舟とむる。

ゆふへとアラハ。

かかた。(くれに。) 夕の付合墨染の外は雨以下皆上にをかかはるへく候。)

たそかれ時とアラハ。(たれ か れ と も又た れとき ともいつ(にかこよひは宿をかり衣日も夕暮の嶺の嵐に空間

の一なのる。ほの~みつる。(源。)藤のうら葉。(同。)

光ありと見し夕かほのらは欝はたそかれときの空め成けりとくへし。

けるよびとアラハ。

月。

やみとアラハ

夕やみは道たと~~し月待てかへれわかせと共まにもみん人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまよひぬる哉後 ね。うつゝ。あやなし。にしき。後の世。 五月。木の下。ともし。いさり。 夕。 瞻。色こそみえ

物には松樹。生類には鳥窓なとよし。詞には。たかき。山とアラハ。峰とも谷とも由類のより來れるを付へし。又植八山類

壁 集 JŁ, へたつる。 とゆるなと付へし。

遠山とアラハ。 (伊勢。) 鳥。櫻。すり衣。まゆ。ひわ。 都。古郷。ふし。 きいち。 あしやの海。 あのム松原。

深山とアラハ。

深山には松の雪たにきえなくに都は野への者なつみけり 篠のは。霰。鳥の一郎。水音。櫻。庵。奥。鳥。

まさきのかつら。柴の下草。 闘。ふかくらぬ。 あきしの」里。(此外名所略 外山とアラハ。

山かけとアラハ。 吉野なるなつみの川の川よとに鴨そなくなる山陰にして の宮。(此社は山かけの中納言はしめて詩せし也。) 雪の夜。(故事。友を歸る事也。) (片山かけ。深山かけともいふ。) 友を轉る。(同。) 吉田

山もととアラハ。 鼠ふく遠山本の村かしはたか軒はより雪はらふらん 旅にして物懸しきに山本のあけのそは船おきにこくみゆ (遠山もとともいふ。)

尾上とアラハ。(嶺の事也。)

松。里。鹿。山鳥。高砂。鐘。

麓とアラハ。

里。野人。寺。庭。

岡とアラハ。

(同。) 水くき。行き。やかた。入口。夕月よ。(歌。) 松のは。 つ」し。わらひ。こゆる。草かるおのと。(拾

節方 遺。) みまくさ。(同。) 明石。(源。) くす薬。 さを庭のつまとふ山の岡へなるわさ田はからし霜は置とも人丸

谷とアラハ。

光なき。驚。河。戸ほそ。 氷のとさし。 打出る浪。(古。)

春の初花。(同。) 柴橋。

其

瀧とアラハ。(瀧津濱。瀧川なとつ」けては水邊にとる。 外は山類水邊をかねたり。)

をつる。ひひく。岩ね。柴橋。河。天の川。布さらす。

ら糸。浜。雨。櫻。枕。 白玉。水上。 川上。

、瀧津瀬の中にもよとはありてふをなと我こひのふちせとも

そはとアラハ。

なきょ

かけち。 (かけはしとも。) はた。 たつ木。

畑とアラハ。 ふるはたのそはのたつきにゐる鳩の友よふ聲のすとき夕暮 新 片!にはたやくおのこかのみゆるみ山櫻はよきてはたやけ らちおろす。 かく。

土左國。

洞とアラハ。

千百四十三

谷

川人のすみ家。 みとり。霞。 つる。 具。

杣とアラハ。

川。川。まき。 伶原の山。 よもき。 おの」え、水をきる。 くれ。 みほ

はなれ。うきたる。 おきつ。川。ふところ。よもき。つ

やく。こりつむ。 よこ山。(河内。) 煙。まき。小野。 雪のむらきえ。 大原山。しからき。

リイ」
「長が行なられとも炭かまは年のあくるをくゆるなりけ、長が

九海邊

わたの原とアラハ。 八十嶋。(歌。) あまのつり舟。(同。) (海名也。) 炭竈とアラハ。 坂とアラハ。 嶋とアラハ。 梯とアラハ。 ち早ふる神やきりけんつくからに千年の坂もみえぬへら也 き山。 峰。谷。雲。きそち。あやらき。 こゆる。老。 ΙΠ 我か立。 をのい音。朽木。 (山類也。又水邊也。) 类。 上る。下る。杖。膝代。 しからき。泉。 いは。

> わたつらみとアラ 반 はまの眞砂。 おきつ鹽あひ。浪の花。いはふ。

> > ጡ

湖とアラハ。

名所多也。) しほやかぬ浦。にほてるをき。しかのからさき。(近江の たこの前。(越中。藤よめる所。)

ふせの

浦。(同。)

渙とアラハ。 磯とアラハ。 小しま。鹽あひ。かもめ。舟。中川。玉も。

強とアラハ。 題みては入ぬる磯の草なれやみらく少くこふらくのおほき 岩ね。山。松。千鳥。へちふむ。みるめかる。

千里。吹あけ。眞砂。松。ひさき。荻。つはき。

千鳥。

江とアラハ。(海にも川にもあり。) あらき浪風。とまひさし。 恭の石。田。

名所略之。)

にとる。みさひ。

あし。にしきをあらふ。

難波。(餘之

入江とアラハ。

松。まこも。あし。すとり。大井河。よと川。

あし鴨のさはく入江の白浪のよにすみかたき我身なりけり

Ŀ

湊とアラハ。 しほむかふ。袖。さはく。春。秋。 (海と川との行あひ也。 湖にもあり。

岸とアラハ。 (海にも川にもあり。)

かた山。 川。柳。住吉。三室山。山吹。 ねなし草。浪

干潟とアラハ。(しほのひたるあと也。) 打。 姫松。 忘草。(すみよしの岸に。)

遠。か」み。(同形。)

風とアラハ。

潮とアラハ。 き。おつる。 さす。みちたる。ひく。くむ。燒。かなひぬ。煙。から

おつる。あかつき。 十水邊 かもめ。

川とアラハ。

水なかれ。ふち。潤。舟。いかたの類。又泪。思なとい ふ詞にて付へし。

つらくつはき、(万。) 瀧。玉島。檜原。

河上とアラハ。

水上とアラハ。

桴しよまてととはん水上はいかはかり吹山の鼠そ新古なみた川。もみちなかれて。 ● まま

打とアラハ。 り。又寒汀鷺立といふ本文の心を。源氏に汀をすさきとよ (汀の字の心は 水際也。 歌にはなきさとよめ

るへし。) める也。たとへは同所なれと事くによりてもちいかへた

なかれすとアラハ。

すさきとアラハ。

寒き。鷺。(かさ」きともいへり。源。)字治川。

淵とアラハ。

す。さてさす。うれしき。あふうき。たきつ。ふむ。あ あさき。山吹。(字治。) くたり舟。(のほり舟。) あゆふ

た浪。

ふち瀬とアラハ。 あすか川。

堤とアラハ。 桐とアラハ。

瀬とアラハ。 そこひなき。ふかき。みとり。いはかき。竹川。 池。柳。人目。(つくむ心也。) つく。 うき鳥。鳰。つる。 む。うき草。戀。淚。身をなくる。せになる。 森。とまや。千鳥。松。大井川。 かはる。 ふかき淺き。昨日けふ。

のそ

川。(流もやらぬ。)

池とアラハ。

から人。 魚。 飲。すかた。いひはなつ。中嶋。藤浪。水鳥。蓮。寳。

沼とアラへ。

光こもり。 おやめ。杜若。うき草。みぬまぐ不見万也。)

澤とアラハ。

る。
登。ちはら。さまよふ。
略たつ。ねせり。あし。つ

古井。寺井。あか非なといへり。) おとアラハ。(いた井。山の井。さらし井。いは井。玉井。

さらし井の木の下陰に雪ふれは衣手寒しせみはなけ共むすふ手のしつくに、とる山の井の凌き心をわか思はなくにいまか山陰さへみゆる山の井の凌き心をわか思はなくにれ門のいた井の清水里遠み人しくまれはみ草生にけり

出揚とアラハ。

の火。

氷室とアラハ。

智の雪。松か崎。高津宮。(仁徳天皇を中。氷室の始也。)山。まかせし水。冬の名殘。上なたらなる。 四。富士

たとアラハ。 水とアラハ。

氷とアラハ。

し。岩間。みきは。くさひ。水とり。

とく。ふむ。は

やり水とアラハ。

懸槌とアラハ。

竹。山田。もる。たえく。山里。

木。なかれ木。思なから。(昔なからなと。) ふみ見る。れま。かさゝき。舟。川。朽木。まきのいた。むもれたる。たゆる。かくる。つくる。はしら。かよひち。橋とアラハ。(うきはし。つきはし。ふなはし。)

岩はしとアラハ。

をたえ。夢へうきはしにこ

拾りたえて。苔むす。くめち。

たなはしとアラハ。(人の門なとにたなのやうにいたをわた岩橋のよるのちきりも絶ぬへしあくる侘しきかつらきの神

したる橋也。

天川。わか門。わたす。

泡とアラハ。へみなはとも。うたかたとも。水にも海のしほ まてといは、ねてもゆかなんしゐて行駒の足をれ前の棚橋

消。雪。あたにちりにし花。川の潤。

にもあは」あり。

染とアラハ。 わかの浦やおきつ鹽あひに浮出る哀我身のよるへしらせよ
無川たえす流る、水のあはのうたかた人にあはてきえめや (庭のたまりたる水也。)

白浪とアラハ。 五月雨。雨。軒のしつく。行方しらぬ。數まさる。玉ゐ へおきつしら浪。 水の白浪。 あさせ しらな

よする。うつ。かへる。ぬす人。

後着 住吉の松を秋風吹からにこゑうちそふるおきつ白波 関吹はおきつ白浪たつた山よはにや君かひとりこゆらん

方。 リつみし高根のみゆきとけにけり清瀧川の水の白なみがする。 があるの風吹にけらしな住害の松のしつえをあらふ白なみになっています。 天川あさせ白浪たとりついわたりはてねはあけそしにけるが、大川あさせ白浪たとりついわたりはてねはあけるしたり (さいら浪とも。小波をいふ也。)

> みかは水とアラハ。 とほり るししかのから ちとけてさい 浪よする春風 そ吹い 宮の雅院にてもいへり。 (御溝也。禁中にかきらす。古今には春

らかふ。あくた川。 櫻花。(古。) 梅か枝。(源。) たき物のつほ。(同。) はを

汚水とアラハ。

野中。闘。おほろ。 いた井。むすふ。くむ。磯。

みをつくしとアラハ。

侘ぬれは今はたをなし難波なる身を盡しても逢んとそ思ふ しるし。ほり江の川。住吉まふて。(源。)

土とアラハ。

あらかね。壁。 目にさくる。 のかよひち。佛をつくる。すさのをのみことの歌。てる あらを田をかへす。黄なる色。國。

つちくれとアラハ。 はと。やふらす。雨。

野原とアラハ。

草木の類。

もしは里あれて。庭ふりてなと付へし。

野中とアラハ。 いほ。森の

千百四十七

百 九 + 連 珠 台 壁 集 上

卷

第

匹

しかの浦。

田とアラハ。 古の野中の清水みるからにさしくむ物は涙也けり

かけ樋。(下極共。) ますらお。 て。山。澤。岡。湊。濱。門。庭。外面。むしろ。櫻。 つくる。うふる。 もる。かる。かりの身。ほ。水せき入

容の田とアラハ。

返。うちをこす。 かとひ。水くちまつる。かはつ鳴。くはひょろふ。雨。 なはしろ水。しめはへて。種。あせの

夏の田とアラハ。

月雨。 早苗とる。ふしたつなへ。 ひくしめなは。 秋近き。五 わさほのかつら。郭公。草かる。むろのはやは

秋の田とアラハ。

ね。おくて。 守。かる。いなは。かりしほ。はつほ。はやわせ。をし (。日日)。( ふる。(永也。) いねかて。する。(山田もる物也。) ひたのかけなは。なると。かかし。 おとろかし。庭。鳫。鳥おとろかす。 おちほ。いなむしろ。ほやつくる。 そら 紅葉 ひた

冬田とアラハ。 秋はつる。をちほひろふ。 ひつちほ。 庵あれて。 もり

すつる。

くろとアラハ。 霜さゆる冬田の木葉ふみしたきむれゐる鴈も秋をとふらし (山田のくろともいふ。)

村す」き。ゆつる。あらそふ。

あせとアラハ。

は。 豆懸。 つたふ。 かとひ。ほそ道。うき土。(西行。)

75

いはほとアラハ。 かはれる也。) (只岩とも岩ねともいふ。 同事のいさ」か

と。(岩ほに。) 小松。(岩ねに。) 山。瀧。うこかさる。 なつる。苔のむす。あまのは衣。中。(いはほの中。)か とある。松。とすけ。(岩に。)つ」し。(同。)なてし

石とアラハ。

沙とアラハ。(まさことも。いさことも。) はる。かとくし、火を打。碁。すころく。帶。

かたき。たつる。さゝれ。しつく。玉。とらをいる。

かす。霜。玉しく。はま。庭。河。白。

塵とアラハ。(ちりひちともいふ。) 床。鏡。床夏。麓。山となる。花。 あとをつく。うつはり。たつ。つもる。拂。ましはる。 のは。松葉。千代に一たひ。枕。 紅。

木

なこそ。もし。はゝかり。忍。もる。中。戀。鷄。こなた。あなた。衣。人めしけき。もる。中。戀。鷄。こなた。あなた。衣。人めしけき。すへて。こゆる。へたつる。とをさぬ。ゆるさぬ。とますへて。こゆる。へたつる。とをさぬ。ゆるさぬ。とま

關戶とアラハ。

關屋とアラハ。あくる。さす。かたむる。

し。 旅すかた。(同。) 石山まうて。(同。) 不破山。 板ひき あふ坂。あはた山。(源。) 打出のはま。(同。) 車。(同。)

むまやとアラハ。

(むまやのおさに。)あつまち。一たひ。よる山とゆる。あふ坂の關。すま。あつまち。一たひ。よる山とゆる。あふ坂の關。すま。(むまやのおさに)

水むまやとアラハ。

すゝ鴨。すゝ船。たけかは。(源。) 男踏歌。(同。)

十二國郡

〔杜とアラハ。しつく。しめなは。郭公。下草。うたゝね。

[林とアラハ。 つる。山。かた山。 紅葉をたく。かつら。

竹。雲。鏡。~〕

都とアラハ。

か。難波。うつす。すま。手ふり。玉しき、九重。たつ花。月。竹。四方。遠山。鳥。にしき。ふし。なら。し

國とあらは。

也。) 六十餘の國の名。いつれにてもよりきたれるを付本。吉野。難波。 はつせ。 敷鳥。 あはち鳥。(我國の初大八島。 あきつす。あしはら。 玉かき。 みつほ。 日の

郡とアラハ。

へし。

ひなとアヲハ。 (真。) 忍。(同。)

もろこしとアラハ。(から國同事なれと。付合にかはれり。)あまさかるひなに五年すまゐして都のてふり忘られにけり古中ち。すまゐ。人。うくひす。

もろこしも天の下にそありと聞てる日の本を忘さらなんおほゝえす袖にみなとのさはく哉もろこし船のよりし計に思す。とかはちかゝりき思はぬ中そはるけかりける古

さよ姬。袖ふる山。虎。

一夜とまり。人の國。吉の山。から衣。

から紅。

卷第

とらふすのへ。へから國に。) 舟をうかへて遊べから人に。

から國に名を残しける人よりも向後しられぬ家居をやせん響き 柚ふる事。(同。 の國は北にあるゑひす也。王昭君か胡國の王のきさきに るは。石川の歌の事をかやらに取なしてかけり。舞樂の左 まといふ也。源氏きりつほの卷にこまら人にあひて相せ 功皇后の三韓をたひらけ給へる事に中つたへたるは。あ 抑みちひの珠といふ事は地神第二代の時の事なるを。 とこそいひしか。末の代にはさもなきこそ心もとなけれ。 徳太子のえ給へる金からしのす」も。くたらよりわたれ 此外百濟國をはくたらといふ。佛の御法の始て我か國に られし事。花のゑんにこまら人に扇をとられてなとかけ まやりをもてあやまりをつたへたる事也。高らいをはと ほりてほしとならんかきりは。御つき物をたいてんせし らきの君のちかひのことはに。東の日は更に西よりい の御代始てしたかへ給て。御つきをそなへし也。此時し るよしみえたり。又新羅國をはしらきといふ。神功皇后 た經なとを奉しよりの事也。源氏若紫の卷にいへる。空 わたりし事は。百濟國より聖明王といひし王の佛の御か あれなれかはの水はさかさまになかれ。河の石のの 右はこまかくとて。笛なともかはれる也。胡 神

> 初國をとこよとしるされたり。 海をへたて」。世はなれたる國なるへし。八雲御抄には しくのかくのみといへり。 もてとしは。とと他の國よりもてこし也。それをはとき とこ世と歌にはよめり。 つけし也。とこ世の國とは仙境をいへり。蓬萊山と書て といひし物胡の國にとらはれて。かりのつかひに書を事 なりて行とき。馬の上にて琵琶をひきし事あり。 も。日本紀にはとこよとよませたり。又鴈の古郷をも。 又たちまもりといひし人花橋を 如何様とこ世といふは。あら

「つくしとアラハ。紫。くし。心。にし。 「あつまとアラハ。鳥かなく。こと。闘。 の闘。玉かつら。 自雲のたな引方。イ 野。春くる方。イン 北野の神。もし

十三居所

家とアラハ。

ŋ つくる。 風。 はなれて。梨。犬。くものい。かたつふ

殿とアラハ。

窓とアラハ。 とのとのはむへもとみけりさき草の三は四はに殿作りせり僧馬栗龍。釣。まひ。木のまろはしら。 梅。竹。萤。 書。 燈。 丽。 ŧſ あくる。 北

戸とアラハ。

たつる。あくる。さす。た」く。(此等の詞いつれの戶に てもいふへし。)櫻。松。柴。竹。

松。杉。桑。よもき。むくら。はしら。柳。法。あまね き。たつるなといふ詞は戶におなし。

庭とアラハ。

古紫。をしへ。あした。うへ木。つき山。玉しく。

外面とアラハ。 さとはあれて人はふりにし宿なれや庭も離も秋の」ら也

小田。あふち。道。國。

故里とアラハ。(古郷にしなく、あり。古き都を古さと」い ふ。又今住里のふりたるをも云。又旅に出て我かたを古郷

り。なら。しか。芳野山。すま。(此外尚多。)宿もる あさちか原。庭あれて。軒あれてなと付へし。萩。か

隣とアラハ。(人の家の五まてをはとなりといふ也。) 中かきをへたつる。近きあたり。はる。軒をならふる。 タかほの宿。(源。) ぬかつく。(同。) きぬたの音。 はなひる。

> 垣とアラハ。(垣ほとも。かきねとも。又中垣。 垣。竹垣。草垣なと云。) 袖かき。 松

に。)青つ」ら。(同。) へたつる。かこふ。八重。一重。隣。山かつ。へかきほ

蘆垣とアラハ。 まちかき。吉野山。難波の里。かきわけて。 うたふ。(催 馬樂。)藤のうらは。(源。) 夜をへたつる。 年へにけ

籬とアラハ。 「八重垣とアラハ。出雲。梅。つくる。雲。イ」

り。(催馬。) この家。(同。)

島。たけ。霞。霧。雲。田。きく。草花。

蘆屋とアラハ。(あしのやともいふ。)

里。たく火。海。(あしやに。) あまのいさり火。世にす

とまやとアラハ。 蘆のやのなたの鹽やき暇なみつけのを櫛もさょすきにけり

岩屋とアラハ。

舟。雨。浦。海人。

草の庵を何露けしと思ひけんもらぬいはやも袖はぬれけりの 苔の衣。雨のをとせぬ。明石。

かはらやとアラハ。

卷 第 匹 百 九 + 八

連 珠 合 壁 集 Ŀ

下たく煙。 軒の松。 寺。賀茂

あつまやとアラハ。 あまそ」き。(さきにしるす。) 宇治。(源。) やりとをさ して。(同。) ひたのたくみ。(同。) 車。(同。) よもきの

さしこむる律やしけきあつまやの餘程ふるあまそ」き哉 「ふせやとアラハ。木質。は、木々。しつ。イ」 まろれ。(同。)

柱とアラハ。 「火燒屋とアラハ。衞士。野宮。宮尊。イ」

まき柱とアラハ。 宮。うつほ。まろき。 めくる。 なおっ 帆。はし。霜。たつる。

人にゆつる。(源。) る水。(同。) ときはの森。(同。) ひはた色のかみの文。(同。) やとも

床とアラハ。 なれきとは思いつともなにゝより立とまるへきまきの柱で 今はとて宿かれぬともなれきつるまきの柱は我を忘るな

夜。うつら。ふすね。むなしき。 ちり。山

ゆかとアラハ。 玉。あなららむすふ。(坐禪事。)

かちかしあなかまよはの整夢にも人のみえもこそすれ

壁とアラハ。

しこ草。隣。石の文はこ。ともし火をそむる。耳あり。 ぬる。うかつ。むかふ。いつまて草。きりくす。

庵とアラハ。 むすふ。かり。さす。草。柴。小田守。川下。 (いほり共いへり。)

かりは。

楓とアラハ。

なは。松。 たけ。 らるをす雨

甍とアラハ。 ならふる。 co ふれて。寺。

室の戸とアラハ。

北山。(源。) ひしり。 とつる。

いは。

さしともる。

ついちのくつれとアラハ。 海。たかの山。

すまのなか雨。(源。) (同。) ふみあけたる。(伊勢。) あつまや。(同。) わか通ち。(同。) 池の水かけ。

もり。(同。)

園とアラハ。 竹。桃。鹿。

こてふ。花。

きく。

から神の社。

春草とアラハ。 十四草類

もゆる。(下もえとも。) 雪ま。 霞かくれ。 野を燒煙。

若草とアラハ。

けにみゆる。(伊勢。) 駒のいはゆる。もゆる以下の詞春草に同し。 ねよ

春日野はけふはな焼そ若草のつまもこもれり我もこもれり

夏草とアラハ。

まかさき。 事しけき。 むすふはかり。さゆりは。玉まくくす。のし かりにくる人

冬草とアラハ。 秋草とアラハ。 (此付合不見。不審。)

竹とアラハ。(連歌には竹は草木に二句へたてゝ付也。) 霜枯。人目かれたる。霜の花。露氷る。殘菊。

木にもあらす草にもあらぬ吳竹のはしに我身は成ねへら也古 見の里。またらなり。とよら。たゝす。つりさは。窓。 世。(夜とも。)ふし。川。笛。ち色。しのへ。草木。伏

竹の子とアラハ。(たかんなともいふ。)

子。(たかんなとアラハ。) 雪の中。親思ふ人。(孟宗か事也。) よこふへ。(源。) ち かき林。(同。)山にはれるところ。(同。)いとけなき

今更になに生出ん竹の子のうきふししけき世とはしらすや らきふしも忘すなから吳竹のこはすてかたき物にそ有ける かける大將事也

竹の林とアヲハ。 世中にふるかひもなき竹のこはわかへ ん年を奉る也

七のかしこき人。寺。酒。とら。

篠とアラハ。(小さ)。玉さし。小篠か原。さしのくまなと いふ。

は。たゝさゝの生たる所也。宇治はし姫の卷にあり。又 夜。世。ふし。深山。あられ。岡へ。庵。さるのくまと ひのくま川によめり。

若菜とアラハ。

つむ。雪間。 ふひの野守。 いく田の小野。(此外名所數不知。) 君かため。袖ふりはへて。都は野

||蕣とアラハ。(からなつな。) ₹°)

庭に生る。あをし。垣ねの中。 都の木末。

一芹とアラハ。(ねせり。ふかせり。)

はくらめ。君に奉る。あらふ。 つむ。ねにあらはれて。澤。御かきか原。(俊賴歌。)

ゑくとアラハ。(ゑくのわかなと云。)

つむ。山さは。納ぬれて。み山への里。(歌。)

わらひとアラハ。(さはらひ。初蕨。下はらひ。かき蕨。) 紫のちり。物うき。折。ほとろましり。 かしこき人。草

卷

今そさかへん。

のけふり。(源。字治。)つくくしを籠に入て。(源

母子草とアラハ。 岩そゝくたるひの上のさ蕨のもえ出るよにあひにける哉驚―――

阿倍市。(するか。) 三日のよのもちね。よと光イ

杜若とアラハ。(連際には夏の物也。)

紫。池。澤。ぬま水。かこふ。八橋。(三川也。在中將か 春のへたて。(垣によせていへり。) きぬにする。(万。) から衣の歌によめる所也。

菫とアラハ。 (つほすみれとも。すみれくさとも。) 紫。つむ。 たみ。野をなつかしみ。 あれたるやと。 一夜。をのゝしはふ。春のか

山吹とアラハ。(八重山吹。)

花色衣。 いはぬ色。 とへとこたへす。 口なし。 かはつ 鳴。ゐての里。(名所猶多。) あかたの井戸。とのはしけ

藤とアラハ。(藤浪。藤かつら。) 浪。紫。松。かる。かさし。杜。 なる海。夏かけて。廊をめくる。をよはぬ枝。(源。) 浦。三笠の森。ときはの橋。(此外名所猶多略之。) 鳥井。池。たこの

花の かけ

膝のうら葉とアラハ。 あたり。(同。) 北 ふたらくの岸。

いくかつり露けき春を過しきて花のひもとく折にあふらん源日さす藤のうら葉のうらとけて君し思は、我もたのまん 後袖。(同。) 蘆かきうたふ。(同。) まつにちきれる。(同。) 臺のまへ。(源。) まつよりすきて。(同歌。) たをやめの

葵とアラハ。(もろかつらとも。もろは草とも云也。かけさ すかたの歌はからあふひの日のさすかたにかたふくをよめ 別の物なるをひとつに用たる也。)

ŋ 二葉。その神山。みあれ。かくる。神のかさし。

あふひ草でる日は神の心かはかけさす方にまつなひくらん場合 やそうち人。いつきの宮。かりねののへ。

廿日。花のもと。(歌。)

ふかみ草とアラハ。(牡丹也。)

あやめとアラハ。へあやめ草とも。又さうふとも。花さそふ 共いへり。)

池。ふく。うちしめり。 530 ま弓のひおり。さ月。くす玉。水のほとり。(源乙女にさ まの岩垣。 よとの。 かつらにかくる。 いつか。(同。) ひく。かる。れ。草の庵。郭公。五月雨。軒のしつく。 駒もすさまぬ。(源。) かりねの床。 わかこま。くわかこも也。 かほる。

まこもとアラハ。 **櫻ちる宿をかされるあやめをは花さらふとやいふへかる覽** (みこも。すこも。すかこもといふ。)

かる。 みたる」。枕。淀の澤水。ほす。

陸奥のとふのすかこも七ふには君をわさせてみ ふ儀有。 とふに兩説あり。 とふは郡の名也。又十ふにあみたるとい ふに 我ねん

いた舟。田子。 〔早苗とアラハ。(初なへとも云也。) むろのはやはせ。 とる。 五月雨。 竹田。

はつなへにらすの玉えをとりそへていくしまつらんとし握。 くりみに俊頼ィ」

はなかつみとアラハ。

32 る。 あさか のね 450 カン つみる人。

蓮とアラハ。 とりにしまぬ。 胸。池。 杀。 (花はちす。 か つまたの池。(はちすなし。) はちすのうきはなといふ。 うてな。 10

むまれはやめくるとならは小車の輪にまかふなる池の蓮に油の選ばのはいにそ人は思ふらん世にはとひちの中におひつと難はの上はつれなきうらにこそ物あらかひはつくと云なれり 蓮はのにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむくせいよりは露の命もおしからすはちすの上の玉と契れはけかよりは露の命もおしからすはちすの上の玉と契れは

撫子とアラハ。

二は。 その。(源。) しめゆふ。 親の心。 ませ。 王 D> からのやまとの。(源。) つら。 もとのねさし。(源。)

この花

我のみや哀と思はん日暮しのなく夕かけの山となてしる古者のとこなつかしき色をみはもとの垣れを人や暮れん無常質しかつの垣ほありとも折くくに哀をかけよなてしこの露山かつの垣ほありとも折くくに哀をかけよなてしこの露 領は、き、

常夏とアラハ。 花は常はの。 (撫子同物也。 から國にをれる錦。 わか獨りぬ る。 床夏の花

打はらふ袖も露けき常夏にあらし吹そふ秋はきにけり

塵をたにするしとそ思ふ咲しより

8

と我的

3

夕顔とアラハ。

宿。はしとみ。(源。) 方人。(同。) されたる戶口。(同。) ゑみのまゆひらけたる。(源。) こかしたる扇。(同。) 遠

折て社それかとも見めたそかれにほの心あてにそれかとそみる白露のひかり心を しつか家 る。 かりそへ たる夕額 みつる花 2) 夕颜 花

あちさるとアラハ。 「あちちさゐの下葉にすたく螢をは よひの間。花のよひ~~。

月。

四

ひらの数の

そ

ŝ.

カュ

٤

そみる定家へ」

百台とアラハ。

(きゆり。

C

めめゆ

ij

<

さい

か

ゆ

IJ

さゆ

九 + 八 連 珠 合 星 集 上

卷

第

りは。ゆり花。)

舞野嶋か崎。(さゆりは。) ともし火。

盛とアラハ。(山あゐ。からあゐ。) 夏の野の茂みにさける姬ゆりのしられぬ戀はくるしき物を

ね。はたけ。しかまの里。(播磨。) . やしほそめたる。かくる。 ほす。 あほき。 から。 つか

がおさのおふの下草しけれた、あかて別し花のかたみに腰あさのおふの下草しけれた、あかて別し花のかたみに腰の立枝にゆふかけて夏みな月の敵へをそする庭にたつあさてかりほししきしのふあつま女を忘給ふな庭にたつあさてかりほししきしのふあつま女を忘給ふな庭にたつあさてかりほししきしのふあつま女を忘給ふなどのです。

り庵。 花すり衣。 高まと《野。) 宮木野。(名所猶多。紫。紅葉。庭。古え。本の心。鴈の涙。錦。秋の田のか恭とアラハ。 (秋萩。糸萩。村秋。小萩。初萩。萩原。)

女郎花とアラハ。(五月にさく花也。)図の名。しめちか原。(下野國。) なす野。(同。) 女によせてもよめり。4〕

うしろめたく。おほかる。男山。一時。妻とふる鹿。

紫。きてぬきかけし。さゝかにの糸。のとに。 夢。白藤袴とアラハ。(らにといふ。源氏にはらんの花とかけり。)名にめてゝおれる計そ女郎花我おちにきと人に語るなさか野。花のすかた。馬。(遍照。) むせる栗。

様とアラハ。 | されなしの | 露にやつる | 上藤袴哀はかけよかを計もでなしの | 露にほ ころひ ぬらしふ ちはかまつ | りさせてふ養なくななしの | なのでかり。かり衣。すそ野。

蔦とアラハ。 くすとアラハ。(まくす。くす花。 紫菀とアラハ。(しをにと云。鬼のしこ草は紫菀の名也云々で) 朝かほを何はかなしと思ひけん人をも花のさこそ見るらん 見し折の露わすられぬ様の花のさかりは過やしぬらん 恨る。 夕貌。) きりの籬。(同。) 露をおとさて。(同。) ぬ山かつ。(同。) 有か無か。(同。) かれたる花。(源。 しぬきのすそ。(同。) 露けき花の中。(同。) なさけしら にくちぬる。)あたなる。らつるてふ名。(源夕貌。) 日影待間。 玉まく。 若紫。色なき露。らすものゝ裳。〈紫菀の色に。〉 かへる。 3 ね。 朝霧。面影淺。しの」め、千年經松。(つね はふ。 秋風。 神のいかき。 風さはく。 くすかつら。 秋にはあへす。 200

J

「都にも今や衣をらつ、の山夕霜はらふったの下みち定家」 もみち。下道。底。うつの山かつら。

获とアラハ。 秋風。秋とつけつる。 そよく。 そゝや。そよとこたふ

源うつせみ る。 演。軒は。古郷。

薄とアラハ。 (しのす」き。 花薄。 の飲合。徳に出る。みたる」。 薄。しのゝおすゝき。しのすゝきはほに出ぬをいふ也。薄 ほのめかす風につけても下荻のなかはは霜に結ぼしれつい ほのかにも軒はの荻のむすはすは露のかとを何にかけまし 村海。一村す」き。 糸

小花とアラハ。(初小花。) まのし入江。浪よる。かりふき。 なひく。まねく。 袖。草の袂。うつら。あしけの駒。

かるかやとアラハ。 (たか」や。かや原。 ねしろたか」や共

りんたうとアラハ。(りうたんとも書也。) らに。) 野分。(源。) 文 (源。) いつくの野へ。(同。) みたる」。したをる」。せきもり。面影。(まの」かやは

菊とアラハ。(白菊。八重菊。村菊。そか菊と云。まさり草 ともいふなり。

かれたる下草。(源あふひ。) 紫。武藏野。

花。なかれを汲。菊名所の、みなせ。大さはの池。紫野。 闘。網代濱。)わたきする。盃。霜。 たみのゝ鳥。吹上。大井のとなせ。さほ川。あふさかの なか月。九日。 露つもりてふちとなる。 つむ。 又さく おひせぬ秋。花待とを。ぬれてほす。山ち。白妙の袖。 一本。紫。うつろふ。霜。秋なき時。ねさへかれめや。

月くさとアラハ。(露草也。鴫頭草とかく。) うつりやすき。花たの帶。

たてとアラハ。(ほたてをいふ。) 月草に衣はすらんあき露にぬれての後はうつろひぬとも

くれない。ほ。からき。水。大。虫。かはへ。こまもす さめぬ。

菅とアラハ。(小すけ。いはこすけ。自すけ。) 莚。 なかきれ。深山。しのき。(すかのれに。) ありま。あさ は野。(たつみはこすけ。)石もと。しのや。鷄。笠。

あさ家とアラハ。(あさち原とも。あさちふともいふ。) あさちふとアラハ。 あれたる庭。色つく。やたの野。(越前國。)

新古小野のしの原。宿。

里はあれぬ月やあらぬと恨みても誰あさちふに衣らつらん。

つはなとアラハ。(ちはなの事也。春の物也。夏もよめり。) あさちふや袖に朽にし秋の霜忘ぬ夢をふく嵐哉 卷 第

みちのしはふ。春雨。ぬく。荒たる宿。

遊とアラハ。(よもきふとも。)

麻の中。すくなる。かみ。門。しま。杣。あやめ。まろ 露をはらふ。むまのふち。(源。)あまそ」き。(同。)み ね。車をつくる。宿。(よもきふに。) もとの心。(源。)

変とアラハ。

かきさふらふ。(同。)

うき草とアラハ。 つる。(うきつる。) いけ。沼。とる。ひとへ。角。

ち。狼の花。らへはしけれる。 さ月。ねをたえて。さそふ水。水の面。夢。池。沼。ふ | 苔とアラハ。(さかりとけ。)

玉裳とアラハ。(おきつも。かるも。たくもなといふ。) 鹽。煙。(たくもに。) かつく。床。すむ虫。(かるもに。) 結ひあけて。磯。 靡。あまのかる。よるかたなき。うき浪。おき。川せ。 ねくたれかみ。(歌。) さる澤の

芝とアラハ。(しはふとも。芝草とも。) 道。小野。(しはふに。) 砌。野かひの駒。

忘草とアラハ。(忘るゝ草とも云。是に二種あり。忍ふを忘しまさきのかつらとアラハ。

は是也。) 草と云。又萱草をわすれ草と云。住よしのきしのわすれ草

住吉とあまはいふともなかるすな人忘草おふとい 古軒は。しのふ。心のたね。わかしたひも。

忍草とアラハ。

たる」。 ふるやの軒は。昔。軒のいたま。ほに出る。すり衣。 みちのく。 2

蘆とアラハ。へみたれあし。しほれあし。なかれあし。 あし。)

鴨。焼火。めもはるに。

世。夜。さはる。かり。うきふし。夏かり。難波江。

ポとアラハ。 (うけらか花。) な。莚。岩ほ。松かね。朽木。しつく。

あをつるらとアラハ。(はまつるら。夕つるら。) 武蔑野。さきてひらけぬ。 駒のつまつく。

さねかつらとアラハ。 なかき。くる。籠にくむ。

くる。ゆふてもたゆき。

Щ

あふさか山。

玉かつらとアラハ。 と山なる。色つく。くる。松にはふ。 つ女かくる 玉かつらとかよはして付へ

タかほ。(同。) はふ木あまた。 くる。花さく。みならぬ。つくし。(源。)

ひかけ草とアラハ。

行力かつら。かくる。あまてる神。かさす。をの山。 あかれさす朝日の里の日影草とよのあかりのかさし成へし

芭蕉とアラハ。

風吹はやふる。 あふき。古寺。鹿。

八重。門。さしこもる。さはらす。

八重雑しけれる宿のさひしきに人とそ見えれ秋は來にけり としならは華の宿にねもしなんひしき物には袖をしつ」も

羊蹄とアラハ。へいちしはともいふ。) ぬなはとアラハ。(ねぬなはともいふ。) うき。くる。みたる」。なかく。池。 ぬま。

はなにさく。みちのく。

はまゆふとアラハ。

みくりとアラハ。(みくりなは。 かさなる。も」へ。いくへ。三熊野の浦。

> くり返し。ひく。 かくれぬ。ねにたて」。さ山のいけ。

つくまえのぬま。

判とアラハ。 野なられみくりや何の筋なれはうきにしるかくねをと」め劔 しらす共葬てしらん三島江におふるみくりの筋はたえしを

かみ。みち。鞭。

とくさとアラハ。

かる。みかく。その原山。

も」よ草とアラハ。 「さしも草とアラハ。 しめちか原。いふき山。もゆる。イ」

なきとアラハ。(水なきともいふ。春の物也。) 父母。かとのしるへ。いゑのその。しちのまろね。

まく。つむ。ぬま。さは田のあせ。はなさく。 あつ物。

なのりそとアラハ。(神馬藻也。) いそかくれ。浪にゆらる」。きのまろ殿。(名のるによせ

みるめとアラハ。

て付へし。)しきつの浦。

うきみるとアラハ。 かる。いせのあま。朝な夕な。大よとの浦。

わかめとアラハ。 あしやの里。みなみの図の

千百五十九

第 四

のと山。

きる。

いそ。かる。 春の日にほす。<br /> とゆるきの磯

くはいとアラハ。 ひろふ。あら田。

瓜とアラハ。 りかくなり。こまのわたり。つくる。なつめ。やまと。 から。からす。 五色。あをき門。水にうかむ。ほそ。かほ。つる。とな

おもたかとアラハ。

いけ。

栗とアラハ。

女郎花。むせる。 新根山。春日野。まく。飯。

十五木類

らへきとアラハ。

庭。たね。つき山。玉。

若木とアラハ。

老木とアラハ。 梅。櫻。ねこしてうつし。 花咲初る。

くち木とアラハ。 古郷。昔を忍ふ。 松。苔むす。くつる。

村。み山かくれ。 心の花。はし。

舟木とアラハ。

らつほ木とアラハ。 とふさたつ。 足から山。 紅葉こかる」。

やとり木とアラハ。(やとり木はほやを云。又源氏にはつた くまの住山。とけのすたれ。(うつほの物語。)はしら。

を云。是も木にかられる故也。) ほや。桑。紅葉。つた。(源。) 木たに。(虫也。源。)

は」き」とアラハ。 荒はつる朽木の本をやとり木と思ひをきける程のはかなさいとり木と思ひ出すは木の本の族ねもいかに淋しからましゃ。 そのはら。ふせや。ありとはみえてあはぬ。紅葉しにけ り。心をしらて。(源。) あるにもあらぬ。(同。) 中川の

宿。

浮木とアラハ。

むもれ木とアラハ。 天河。 のる。 かめ。 あへる。舟。

黒木とアラハ。

潮々。あらはる」。

名取川。

たに。はし。くつる。

常盤木とアラハ。 鳥井。ませ。なら山。數珠。

森。はかへせぬ。松杉の類。春秋しらぬ。

草木とアラハ。 (草と木と也。)

上

竹。野 もみち。 山科の宮。 野山。 佛のたね。古郷の庭。 花

しほりとアラハ。

新古山道。しはとる。

芳野山去年のしほりの道かへてまたみぬ方の花を禁ん

梅とアラハ。

雪。驚。誰か袖ふれし。色香。月。山里。軒は。柳。垣 あるし。春や昔。はやくおつ。南の枝。櫻。八

紅の梅とアラハ。(二月盛の物也。) 色とき花。日影。匂ふ。此外紅のよりあひを梅にとり合

冬木の梅とアラハ。 て料簡すへし。

春待。ふりをける雪。

櫻とアラハ。(山櫻。庭さくら。遅櫻。初櫻なと云。) 雲。雪。八へ。瀧。山。(深山とも。)

棒櫻とアラハ。(かには櫻とも云ふ。)

花のとちめ。ふゑ。ひつかは。 霞の中。やはきの里。

ひもの」里。 まく筆。

櫻戸とアラハ。 (山さくら戸とも。)

山。雲。とつる。あくる。あるし。 しほり。雪とふる。

あふさから

「名もしるしみねの嵐も雪とふる山櫻戸の あけほの \空 定 あし引の山櫻戸をあけおきて我まつ君を誰かとかむるイン

隆イ」

同家イン

「あふさかの山櫻戸の闘守は人やりならぬ 花やみるらん家

櫻かりとアラハ。

櫻かり雨はふりきぬ同しくはぬるとも花の陰にかくれん かた野。花の雪ちる。しらおのたか。

【又やみんかたの」みの」機かり 花の雪ちる春の 明ほの俊

成~〕

花とアラハ。(初花。花さかり。) 春の植物には梅。柳。櫻なと有へし。似物には雲。雪。

花によせある詞也。一々にしるすに不及。 瀧なと可付之。ちる。らつろふ。さかり。身。 心なと皆

柳とアラハ。 糸。煙。まゆ。玉。川。岸。なひく。かみ。鷺。みと

門。門。

青柳とアラハ。 糸よりかけて。 梅花かさ。 うたふ。(催馬樂。)

驚のは

かつらき山

千百六十一

Ŀ

卷

物いはぬ。 盃。紅。ふる里。やよひ。みかの原。

三千世へてなるてふ桃のとしより花さく春にあひにける哉

吾園。垣は。からふり。(李下不正冠といへり。) 雪。山 かつ。庭にちる。はたれ雪。

躑躅とアラハ。へいはつゝし。をかつゝし。下つゝし。

日さす。山のをかへ。よしの川。羊。火。 紅そめ。山下てらす。大江浦。みほの浦の白躑躅。)入

卯花とアラハ。(初卯花。うつきなといふ。) 浪。玉川の里。神山。白川關。 かきね。雪。月。ぬのさらす。郭公。白ゆふかくる。

古郷。昔。五月まつ。袖の香。郭公。五月雨。風。軒 かけふむ道。とこよの國。

花柑子とアラハ。 橘はみさへ花さへそのはさへ枝に霜をけすまし常磐の木 (源氏にも伊勢物語にも 柑子といふ 詞あ

IJ この比はいせにしる人音信てたよりうれしき花からし哉 は 円

> 外面。とのへもる身。 岡へ。 かもの川原。

雨。五月雨。

一桐とアラハ。

桐の薬もふみわけかたく成にけり必人を待となけれと質がおち薬。井。すむとり。きさむ。一は。壺。

紅葉とアラハ。(初紅葉。下紅葉。らすもみち。) 染。一入。 千しほ。露。時雨。 てる。錦。 たつた姫。(山

石かき。色。

しら

作とアラハ。

森。さほ山。泉川。いはたのをの。

まゆみとアラハ。(しらまゆみ。) 岩かき。ほそかは。 あたちの原。秋霧のたなひく。

かへてとアラハ。 紅薬。ちとせ。 (若かへて。青かへて。) かしは木。枝さしかはす。(源。)

手折

はしもみちとアラハ。 もすのゐる。たち枝。 枝。うつろふ色。

かたの」原。

かきのはとアラハ。

本。文をかく。

ひさきとアラハ。 をの」あさち。 きよきかはら。片山陰。

はま。

柱とアラハ。

ひ風。月。

棍とアラハ。

椎とアラハ。 柴。紅葉。ひろふ。車。身にしむ。秋。(源。やとり木。)

とる。とわたる船。(天川。) 露の玉つさ。七。

家にてはけにもる飯を草枕旅にしあれはしゐのはにもる

枝をましへ。秋は下葉とに見所有。冬はつるに紅葉ぬお 松は山にも浦にも野にも庭にもいつくにも有物也。常磐 なる色なから。春はみとりの色一人まさり。夏は茂る梢に かみさをいあらはす。雪の比にも成ねれは。又たくひ

すくなき木たち也。あたゝかけにふりつみたるも。下お

松とアラハ。 みの」を山。なるお。しかのからさき。へ一木の松と云同

ひならはし侍れと。落はは有物也。其心を得て連歌には れたるも。皆見所あらすと云事なし。ちりうせぬとはい

事也。)たくひなき。

そなれ松とアラハ。 すま。たかしのはま。いらこかさき。(いせ。) あらねの

畸。(武藏。)

柳。一枝。入江。紅葉。あふひ。川。神山。みあれ。お

松かねとアラハ。

まきとアラハ。(まき柱なと云也。眞木也。よき木を云。ま 枕。浪うつきし。あらはれて。

きのはなと云は木の名也。されとまきといへは同より合に

柱。板戶。杣。しけ山。つきはし。霧立のほる。あらそ

ても付へしい

椿とアラハ。 ふ。島。

玉。(しら玉共。) はま。つらく、二たひ。 かけあらた

り。高砂。いつのたけ。 まる。八千とせの春秋。八みね。葉かへぬ。つるのとほ

杉とあらは。 しるし。門。みわの山。逢坂の闘。あや。庵。坂。二本。

檜原とアラハ。 (はつせ川。) 又もあひみん。ふるの社。 川上。杣。みわの山。かさしおる。

いなり。

柏木とアラハ。 老。くもる。

千百六十三

卷

事。)玉。ならのは。なかめ。 のは。(源。) 岩ねの松。(同。) る。(源。) 神のしるし。(同。) 戀しぬる。(同。 衞門督 森。(三笠山。) はもりの神。ならしかほなる。すゑあへ この手。うちつけなると

とる。 は。さのみちかはさる事にや。 れは。いはねの松なとを付きたれり。是は木と木となれ の御息所によめる也。岩ねの松の事は。其まきにはあれ 柏木の歌は。衛門督の身まかりて後。夕霧の大將の一條 かほる大将の事にて別の事也。されとも柏木とあ

つきの木とアラハ。(ゆつき。いはひつきといふ。) も」枝。(はつせ。) 弓きる。

ならの薬とアラハ。

後<sup>給</sup> 柏。時雨ふりをける。名におふ宮古事。

烈とアラハ。 |神とる卯月になれは神山のならのはかしはもとつはもなし |好点 (花は春。實は秋也。つきなし。夏なし。つま 一柴とアラハ。(ふし柴。ならしは。下しは。しい柴。)

つま。からふり。壺。かたえ。なる。身。

山なしとアラハ。 片枝さすおふのらら梨初秋になりもならすも風そ身にしむ 宮内卿

世中をうしといひてもいつくにか身をは隱さん山なしの花 かれんかたなき。(あけまき。源。)

「櫻あさのおふのうらなみ立かへりみれともあかす山なしの 花る

榊とアラハ。(まさかきと云。いせには玉くしのはといふ。) 山。野の宮。かゝみをかくる。ゆふして。しめの外。 ねこして。おる。らたふ。かくはし。天のかく山。

(源。)

なきのはとアラハ。 あへ物。みくまの。

桑とアラハ。 (桑原とも。)

かしとアラハ。(かたかし。しらかし。かし原。) 田上山。を車のわ。花。

こきたれて。かふと。(まゆ。) 弓。園。

くぬきとアラハ。 さほの川原。色つく。おほ川のへ。 (~ぬき原。ふしくぬき。 わかくぬき。)

ま。しはく ほす。取。かる。戸。(施とも。)煙。舟。車。ゆふ。す

一権とアラハ。(しきみか原。)

曉おき。山路の露。 あをにひのかみの文。(源わかな。) あまねき門。(同。)

への木とアラハ。

み。もり。 ひろふ。三室山。葉かへぬ。柱。

むろとアラハ。 いそへ。とつる。とほそ。ともの前。(備後。)

からかとアラハ。(合歡木也。ねふの木と同也。) かたみ。大内山。 身ならぬ。

ゆつりはとアラハ。

りくとアラハ。 あらくま山。御井。おく山。 折。かさす。山人。春をむかふる。なつる。老のしほみ。

むくとアラハ。 いそ。こまつまつく。神さふる。ね。

も」しきの大は。おちは。みかく。 十六鳥類

鳥とアラハ。(鳥は諸々の鳥也。又鷄をも鳥と云。句により てかはるへき也。)

かなくに。)林。かへる。 深山。花。むれゐる。曉。雲に入。跡。別。あつま。(鳥 おとろく。

はなち鳥とアラハ。 あすか川。めをすくる。はや舟。

とふ鳥とアラハ。

総鳥とアラハ。(一説ふくろふ子也。一云。らつくしき鳥也。) お、千鳥さえつる春は物とにあらたまれ共我そふり行 月。花。春野。聲ほのかなる。霞かくれ。草のねしけき。

かほよ鳥とアラハ。 やとり木。(卷一名。) しけみを分て。(源。やとり木。)

かけみる。むこ川。山河のなくわ。大井川。

浮鳥とアラハ。 すとりとアラハ。 (洲の鳥也。) をしかも。池。川舟。床。下やすからぬ。

入江。むこ川。

篇とアラハ。(初鶯。) たにより出る。梅。柳。朝なく。さそふ。たけ。わか かきにうつる。 き。老。ひな。花の宿。またる」物は。こほれる災。た

郭公とアラハ。(初時鳥。山郭公。) 雲間。一摩。五月。なきふるす。忍ね。ね覺。森の雫。 鶯。(かいこの中にあり。) 卵花。花橋。山。村雨。月。

沢なそへそ。

百千鳥とアラハ。 籠。いけ。

千百六十五

卷

第 四

百

新古 けさきなきいまた旅なる時鳥花橋に宿はか きかすともこ」をせにせん郭公山田の原の杉の村たち らなん

隠とアラハ。 よふ。都。思つ」ぬる。とこよ。 玉つさ。舟。かす。涙。雲井。衣。田。落る。とち。友 (初鴈。 とふ鴈。頼かり。 衣鴈かね。)

歸鴈とアラハ。(別の鴈とも。)

みちゆきふり。 たのむのさは。 花なき里。 別。 古鄉。 としの海。 三芳野

雄さ、す とアラハ。 容の野。子を思ふ。 。かた野。

霞かくれ。

野を燒く煙。

しらをのた

ひつきのかり。ほろく、小鹽山。(源。) 御幸。(同。) とアラハ。

雲雀とアラハ。 雪深き小鹽の山にたつきしのふるき跡をもけふは尋ねよ 枝。梅の枝。時なるかな。見えかくれ。

春の野。 あかる。 おつる。 あはつ野。 しはふ。 馬の毛。

燕とあらは。 つはめともつはくらめともいふ。 ならふ。 うつはり。 (鴈に行ちか かたる。 ふ物 也。 せり。 故 カコ ねたむ。 へるつはめは秋也。 か り 。 行

5

かっ 3. 石。 こやす貝。 巢

よふこ鳥とアラハ。 人待よる。 ね覺の聲。 6. とか山。 待かれ

しのたの

遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふと鳥哉 森。ないし

水鶏とアラハ。

0

鵜 とアラハ。 た」く。まきの戶。夏の夜。木末。あかし。 へしまつ鳥とも。 まとりとも云。

なる。) うなての杜 つかふ。 石。あらいそ。 魚をとる。舟。あへ島。(津國

鵜川とアラハ。 たつ。やみ。 かつら川。大井川。宇治川。 かしり火。八

らかひ船哀とそみるもの」ふの八十字治川の夕やみの空気 十とものを。 五月。瀬々をとめ。

鹑とアラハ。 稍負鳥とアラハ。 山田守秋のかりほにをく落すいなおまとようのでは、たる我門にいなおほせ鳥のなくなへにけさ吹風に腐は來にけり去る々。) 堀川百田 たくらのはしをそたれもわたれ共稲負鳥そ過かてにする の稻負鳥の (かたうつら。 (定家說庭た」き。家隆説たか。或説馬名 こかれはも木の葉もよほす露や おくらん家隆

あはち鳥かよふ千鳥の鳴摩にいくよねさめぬすまの闘守

野とならは鶉となりて年はへん狩にたにやは君はこさらん 鴨とアラハ。 あをは。かね。はかひの山。山。川。あしへ。山かけ。 (あしかも。 うきかも。)

芳野なるなつみの川の河よとにかもそ鳴なる山陰にして (歌。) なつみの川。

鴛とアラハ。

池に住。うきね。獨ね。つるきは。

ふすま。

いくた川。

つかはぬ。紫。物いはぬ

鳰とアラハ。 下道。通路。玉もにすむ。 (鳰のうきすは夏也。) あそふ。あしま。あふみの

鷗とアラハ。

海。おき中川。水の關。

聴。 うしほ。お 100 白。 ふちえの浦。

あちむらとアラハ。

山のは。さはく。

秋沙とアラハ。

**眺鳩とアラハ。** 山きは。わたる。

鶴とアラハのまなつる。ひなつる。しらつる。 魚とる。はとやの際。

子を思ふ。毛衣。林。霜。かける。莚山。

鳴とアラハ。

夕されは野への秋風身にしみて鶉なくなり深草の里 うつらなくまの、入江のはま風に尾花浪よる秋の夕暮

小鷹人。衣。床。

色鳥とアラハ。 心なき身にも哀はしられけり鳴たつ澤の秋の夕くれ曉のしきのはねかき百はかき君かこぬ夜は我そ敷かく時間。ふす。たつ。はね音。

態とアラハ。 しと」とアラハ。 垣根。おりゐる。雨にぬる」。みと。

わたる。小から。

山から。ひは。ぬか。らそ。秋の田。

庭た」きとアラハ。 はしのたち枝。尾花かすゑ。草くき。時鳥。

みとのまくはひ。いなおほせ鳥。物おもふ。

千鳥とアラハ。(さよ千鳥。友千鳥。村千鳥。浦千鳥。濱千 鳥。川千鳥。 海川にあり。ゆふ浪。友なし。あと。浦つたふ。 磯千鳥。) たち

思ひかねいもかり行は冬のよの河風寒み千鳥なく也に

卷

たつとアラハ。(同物なから付合かはる事あり。あしたつ。

たつかね。

さはへ。雲井。蘆へ。鹽みちくれは。わかの浦。

鶏とアラハ。(庭つ鳥。)

すてに。闘。坂。合。あか月。

逢坂の闊。立田山。神かき。別。

狐。よふかくなく。せなをやる(、歌。)(たかけとアラハ。(いせ物語にあり。家にかふ鷄也。)

長き夜。みたれ。あかつき。かけのたれおとアラハ。(鷄の尾を云也。)

ふ。つくれる小田。み山。月よ。やもめ。森。うかれ。かしら白。市。わら鳥とアラハ。(朝鳥。夜鳥。太鳥。山からす。)

後とアラハ。(村雀。夕雀。)

夕の雲。わたる。なるこ。おとろく。かしかまし。きひ

雀子とアラハ。

鵄とアラハ。 紫。鳥。ふせこ。北山。ひなあそひ。(以上源。)

金色。弓のはす。琴。尾。

ひらかの鷹。(出羽。) だかね。二上山。つくはね。然とアラハ。(かゝなくわし。)

際とアラハ。(はしたか。ましろのたか。しらふのたか。若とアラハ。(はしたか。ましろのたか。しらふのたか。若

ふ。あはする。犬飼。遠見。とまり山。ならしは。かりは。 戀。心のおく。山かへり。 軒は。 すゝ。たか。やかたおのたか。)

たか詞數しらす。別に註すへし。

此外

つか

小鷹とアラハ。

等。尾花。つかり。あしを。はつかり衣。

々。)とやこめの鷹とアラハ。(鷹のと やたしは 七月 十五日也云

忍ふ。 夏かい。 毛をかふる。 いくかへり。 あふ事しら

山鳥とアラハ。(遠山鳥。)

ほろく~となく。 尾上。か、み。ひとりぬる。つまこひ。 嶺をへたて」。

鷺とアラハ。(白さき。あをさき。 五位のかうふり。 みの鷺とアラハ。(白さき。あをさき。みとさき。あま鷺。)

かさゝきとアラハ。(まつはからす也。鷺をもかさゝきとい

ふ。かよはし用る也。

**嶺飛越る。橋。木をめくる。寒きすさき。(源。)** 

都鳥とアラハ。

渡し守。住田川。ほりえの川。

名にしおはよいさととはん都鳥我思ふ人はありやなしやと 禁平

鳩とアラハ。(山はと。家はと。)

ふく。まふしさす。杖。みね。八幡山。友よふ。そはの たつき。夕かほの宿。家ことに。雨け。

はこ鳥とアラハ。

ねえとアラハ。 あくる。二上山。三室山。

佛法僧とアラハ。 雨に又水そひぬらんよもすから物思ふ宿にぬるの撃して

松のお山。三のたから。

らとふやすかたとアラハ。 そとのはま。みのかさ。

梟とアラハ。

谷一。鳥のから聲。 十七熙類 おそろしき。雨夜。

鹿とアラハ。(おしか。さほ鹿。)

秋萩。紅葉。 時雨。 しからみ。 夢野。

妻戀。

通路。山

田。たちと。たくすむ。高砂。 (一説蜂の名也。常には庭の名に用る也。)

すかるとアラハ。

秋萩。野。

かせきとアラハ。

山。きねく。 きたらす。ほたい。

夏野鹿とアラハ。 (かのと共云。)

馬とアラハ。

里。心。大津の里。くら。たけイ **らかへる雲。道をしる。かちより行。法の道。こわたの** ほし。またら。ともし。つの。つかのま。

駒とアラハ。

隙行。 つなかね。 もとこし。春野。若草。 あしけ。 わかは。もち月。(信乃。)切原の牧。(同。) た

「青馬とアラハ。春の七日。ひく。わかな。 ちの。(武藏。) みつの御牧。(甲斐。) つなひく。

家持べ 水鳥のかもの羽色の青馬をけふみる人はかきりなしといふ

よもきふのや

黒駒とアラハ。 甲斐。すまの里。風にあたりて。

駒迎とアラハ。 (駒引共いふ。)

千百六十九

さかの山千代の古道跡とめて又露分るもち月の駒智古 引わけ。闊の岩かと。くつは虫。逢坂の闊。宝家

牛とアラハ。(ことねの牛はお牛也。) あけ窓。ゆきのしま。つの。車。桃の林。黑。時の簡の

くひさす。

犬とアラハ。(里の犬。村犬。)

またら。あたる。かむ。けた物の雲に映。藥をなむる。 隠かり。 うちの里。(源。) とかむる。いへ。さとひたる。ほし。

猿とアラハ。

月をとる。ひえの山。 水のは。さけふ。衣をうるほす。桁をつたふ。とのる。

ましらとアラハ。

わひしら。山のかひある。

ふするとアラハ。

かるもかく。 矢さきにかるる。 たけき。 **ゐなのさ」は** 

熊とアラハ。(あらくま。)

おく山。月のわ。うつほ木。て心。うらにあふ。かる。

すかのあら野。黑。

羊とアラハ。

あゆみ。車。 かみ。竹のは。 つ」し。

虎とアラハ。 またら。ふす。石。矢さき。もろこし。たけ。身をか

狐とアラハ。(おひ狐。 若狐。 ふる狐。 又きつと はかりも ふ。うへたる。曉おき。もろこしの原。(するか。)

元。

ひる。ふるつか。火をともす。はかす。くたかけ。あた 蓬生のやと。(同。) こんといふ。 ちの原。いなり山。かけろふ。(源。) 夕顔の宿。(同。)

死とアラハ。

月。萩の露。筆の毛。かりは。雪野。流を走る。馬。 Į,

たぬきとアラハ。 あな。ふすふる。

猫とアラハ。(からねと。)

つな。まり。(源。) 柏木。(同。) ねら~(同。)

かき

鼠とアラハ 懸わふる人の形みと手ならせはなれよ何とで鳴ねなるらん なて」。(同。) 虎。

題とアラハ。 草のねをはむ。 白黒の月。火。

Ŀ

おく川。 鳥待。 随おくる。森。 梢。高まと山。 三國山。

十八山の類

虫とアラハ。

命。かる」。なく。露。淚。野面。籠に入る。松。す ム。草。あさちか原。よはりはてぬる。

松山とアラハ。(人まつむし。)

風山。吾羽山。秋風。あらし。露の床なる。

す」虫とアラハ。

笛。(源。) 霜のふる。 故鄉。 なるみの。馬やつたひ。 小鷹かり。

きりくくすとアラハ。 かへの中。深草。つゝりさせ。いたくなゝきそ。長き思

はたおりとアラハ。 ひ。蓬か柏。ゆかのあたり。蓬生の月。霜よいさ雄。

しつか衣。 摩のあや。しものたて露のぬき。萩のにしき。いと薄。

蟬とアラハ。(うつせみ。)

羽衣。貝。あけたては。をりはへ。

うつせみとアラハ。

身をかへてける。(源。) から衣。もぬけ。玉の向道。はにをく露。むなしき世。 碁。(同。)

日くらしとアラハ。

山の陰。朝ほらけ。山里。山と撫子。秋風。

強とアラハ。

秋風。かり。雲の上。ほし。思。もゆる。あつむる。袖

(源。) 窓。草くちて。

につ」む。みさほ。いさり火。

蘆屋の里。 儿帳の性。

夏虫とアラハ。(火取虫共螢共いふ。)

後ともし火の影。けたぬ思。むなしくきゆる。 つ」め共かくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひ成けり

蛙とアラハ。

井て。山吹。 あひ宿り。かひやか下。苗代水。水に住。

かへるとアラハ。

蝶とアラハ。(こてふ。) 足引の山田のほうつうち佗て獨かへるの音をのみそ鳴後

夢。花その。まひ。

るはあやまりなり。こてふは來といふことは也。虫のこ 古今月よゝしの歌を取て。こてふににたりといふ詞を付 てふにはあらす。た」しそれも又事によるへし。

蚊とアラハ。

山をおふ。まつけ。はしら。

第 四

さいかにとアラハ。(くもとも。) かけろふとアラハ。 蚊遣火とアラハ。 ありとみて手にはとられすみれは又向後もしらす消しかけるよ 糸。衣にかしる。雲のふるまい。かけつくり。軒は。そ ふすふる。をく。賤かふせや。煙。いふせき。 ありやなしやと。あたなる世。軒。 (蚊火共云。) もゆる。春日小野。

かいことアラハ。 あな。山。巣。 さす。 たるき。すかる。 はちとアラハ。

とをりひめの歌。

たらちねの親のかふこの闘籠いふせくも有か妹にあはすて (0,76) まゆ。桑。ふたこもり。糸ひく。つくはね。へにわくはま

いもりとアラハ。 しるし。さ月五日。

いとゆふとアラハ。(遊絲は陽氣也。生類にはあらす。八雲 侍らす。) 抄にしはらく虫部に入たれとも。虫にはきらふへし共覺え

蝸牛とアラハ。 のへの馬。霞の衣。遊。日影。みとりの空。みたる。

> かはほりとアラハ。 つの」上。 あらそひ。家。

簑虫とアラハ。 扇。とひかふ。古寺。鼠。

梅の花かさ。雨。

玉虫とアラハ。

われからとアラハ。 色。身をかふる。 もにすむ。ねをこそなかめ。 から。はかなき。

十九魚類

龍とアラハ。

わたつみのそこ。女。 のほる。たき。雲に住。鯉。雨。あをふち。(万。)

FF]

魚とアラハ。

鯉とアラハ。 ひれふる。いけのはちす。水に住。戀。 たつの門。なかる」。 あそふ。

ふなとアラハ。 淀川。はしる。

鮎とアラハ。(わかあゆ。さひあゆ。 つくみやき。かたの浦。ふしつけし。 めつらしき。松浦。玉嶋川。 おちあゆ。あゆこ。) あかもたれひき。西

合

壁集 上 尾。山。なく。池。劫つくす。目一。らき木。岩ほの

龜とアラハ。

上。 萬代。 蓬かしま。 せなか。うら井。

貝とアラハ。

玉。かたし。いたや。ほら。いそ。うつせ。すわら色。 ひろふ。 おほふ。塩。 あはする。ふところ。わすれ。

櫻貝とアラハ。

浪の花。八への鹽ち。霞のあみ。伊勢海。

梅花貝とアラハ。

付合梅貝も同し。

あわひ貝とアラハ。

玉。あつもの。 かた思。

鯨とアラハ。口。

とよ玉ひめ。

鰐とアラハ。

網代。紅葉。

たまふ。よる。うち川。田上川。

氷魚とアラハ。

櫻。さかひの浦。あちるかたのみ。(□名也。)

つり舟。ひれふる。秋風。藤江の浦。ひかたの浦。

鯛とアラハ。

鱧とアラハ。

柳のは。とこ夏。(源。)つり殿。(同。)

かつら川。

瀬にふす。

う舟。

ひかる。

すまの入江。

鰹とアラハ。

庭貝とアラハ。 吹上の濱。より もにかるる。

あみの日。蘆や。

紫の貝とアラハ。

鳥貝とアラハ。

藤嶋。(伊勢。)

二かたの浦。

雀貝とアラハ。

しら」のはま。(伊勢。)

海月とアラハ。

うみの月。

ほね。

廿月類

終とアラハ。

釣。千木。

蟬貝とアラハ。 竹のとまり。

かたし貝とアラハ。 村竹の岸。(伊勢。)

千百七十三

二見浦。 文禄三年 甲千 孟頭下旬 あふ事なき。

斯集上下卷故入道殿御作也。初學之輩尤可熟見之。愚自[1]本奧彥]

爲懼當座之廢忘寫留之者也。莫言々々。 竹馬之昔聊志雪螢之學。結春日野草茅。翫莵久波言葉。

贵門羽林(花押)

## 連珠合壁集下

廿一人偷

宮人とアラハ。(大宮人とも。)

月。秋。恭。須磨。

雲の上人とアラハ。 宮人に行てかたらん山櫻風よりさきにきてもみるへく 資氏票 一百敷の大宮人はいとまあれや櫻かさしてけふもくらしつ 赤人 (殿上人を云。又内裏の女房をも云。)

八十氏人とアラハ。 (諸姓の人を云。)

とゝしく虫の音しけきあさちふに露置そふる雲の上人

動人とアラハ。 もの」ふ。字治川。 あふひ。吉野川。

めくらす。とてふ。入あや。左右。紅葉の陰。

かさしの花。

あしふみ。

入日をかへす。

南まっ

Щ 1)

あひの 雪を

賢人とアラハ。

山人とアラハ。 竹の林。七。 (山に住人を云。 よしのゝ川原。 叉仙人をもいふ。) わらひおる。

るにのる。たちぬはぬ衣。 花の陰にやすらふ。

たき」おへる。(きるとも。

非。

0

遠かた人とアラハ。 山人のおる袖句ふ菊の露打はらふにも千代はへぬへし、ののの

夕顔の宿。(源。

山里に霧の籬のへたてすは遠方人の袖もみてまし打わたす遠方人に物申我そのそとに白く吹るは何の花そも

かち人とアラハ。 たれとぬれぬ。(いせ。) しかまのある。馬。逢坂の闘。(いせ。)木はたの里。 しかの大わた。

すは

の海の

企

琵琶。

市。うる。 p, 3 たつ。 能きぬきんる。

盗人とアラハ。

あき人とアラハ。

さよふけて。 立田山。同しかさし。白浪。みとりの林。 春日まつり。 蓬生の宿 心を取。(歌。) 下

門たて 4戸はさしたれと盗人のゑれる穴より入てみえけり 4

わひ人のわきて立よる木の下は憑む陰なく紅葉散けり

ま。すむへき宿。思ひ子。

秋にはあへす。(後。) 我身ふるせる。(古。)あた人とアラハ。(あたなる人也。)

タ霧。(源。) 男。

海人とアラハ。

へ。すま。難波。恨。いせ。しか。かひつ物。る。さへつる。とまや。蘆や。浦。舟。 衣。 星のしるほる 4 心也。) いきり。 心なき。 あみひく。 みるめかつりする。鹽やく。(くむ共。) しほたる 4。(詞にてはしつりする。

あまの子とアラハ。

たはふれ。夕顏。

自波のよするなきさに世をつくす蜑の子なれは宿も定めす

あらちをのかるやのさきにたつ鹿もいとわれ計物は思はし

ほくしの松。ねらふ。鹿。木の下やみ。 さつをとアラハ。(五月にともしする物を云。)

しつのをた卷とアラハ。

たをる。あさ衣。なかき。いにしへ。くり返し。 昔を今に。(伊勢。)

衣らつ。は

山かつとアラハ。

すき。垣ほ。撫子。時うしなへる。(源。)

いはゝいはなん。高砂の尾上の櫻。とかむる。氷室。山守とアラハ。

山ふしとアラハ。

満。くま野。かつらき山。吉野山。するかけ衣。とねり苔の袖。するわくる袖。をい。貝ふく。火を打。なちの一苦の袖。するわけ衣。とれり、

の関。

となり。火をこふ。おそ。宿かす。たはふれをとアラハ。(風流士と万葉にかけり。)

宇治。中川の宿。よゐまとゐ。(夕まとひの事也。)

杖に

老人とアラハ。

高圓山。

翁とアラハ。人なとかめそ。みたり。(三人也。)

千百七十五

る。伏見。 いたたく。 なみのしわ。 しらぬ。ひえとり。つりす

野守とアラハ。

しまもりとアラハ。 鏡。飛火の原。 若な。今いくか。出てみよ。いほ。 (おきつしまもり。)

宮木守とアラハ。

にね。おきつ。

あらたまる。

杣。志賀。霞たなひく・

時もりとアラハ。

つくみ。よるひる。香の煙。

斐太人とアラハ。 (ひた」くみともいふ。)

ま木なかす。にふの川。うつすみなわ。(ひたの工。) 宮 やり戸。(同。) つくる。(同。) てをのをと。(同。) 位山。あつまや。(源。)

たをやめとアラハ。

わかせことアラハ。 动にまかへる。藤のうらは。雲るのはし。 (男をも女をもかよはしていふ。)

衣はる雨。櫻花。花かつら。くへきよひ。くものふるま

乙女子とアラハ。(たゝおと女ともいふ。) 納ふる山。みかさの山。櫻。雲の通路。すかた。日影の

> 乙女こも神さひぬらん天津袖ふるき代の友よはひへぬれは 電。(源。) 天のは袖。(源)。 あをすりのかみ。(同。) をとめこも乙女さひすもからたまを快に卷て乙女さひすも

わきもことアラハ。(妻を云。) わきもこかねくたれ髪を猿澤の池の玉もとみるそかなしき人九人九 ねくたれかみ。さる澤の池

らなひことアラハ。 (童子也。らなひ乙女は童女也。)

あけまきとアラハ。〈童の名也。又いとにてくみたる車なと はらの歌より出たり。) のかさりをもあけ卷と云。かよはして可付也。源氏又さい

**蓬生の宿。はなちかふ馬牛。(源。以上童。) なかき契。** (たゝりはいとよる物也。) むすふ。よりあふ。(以上いとのあけまき。)たゝりの糸。

らかれめとアラハ。(らかれ妻とも云。海川のほとりの遊女 也。又山或野なとにあり。あそひおはくとつといふ。傀儡 とかく。遊女をは流の君と云。 上くるつ。) ろ。(以上遊女。) 野上の里。鏡山。たつた山。草枕。(以 江のほとり。(琵琶引の心なり。) 舟の中。かりの宿。 遊たはふれ。(遊女歌の詞。)一夜。契さためぬ。浪枕。 む

子とアラハ。(思ひ子とも。みなしこともいふ。)

たけ。

妹かりとアラハ。 妹とアラハ。 妻とアラハ。 山城のみつのゝさとにいもを置ていし度淀に舟よはふらん 思かね。河風さむみ。千鳥なく。 かり行は。山。わかの松原。 ともる。 鹿。きょす。わか草。なし。軒のあやめ。我宿。衣紅。 (忍つま。遠つまなといふ。)

あそふ。

らみ

女とアラハ。 男とアラハ。 いもかりとむまにくらをきい駒山打とえくれは紅葉散つム人丸 つよからぬ歌。青。ねたむ。 山。月のかつら。昔。まめ。 女郎花。

父母とアラハ。(かそいろと云も。)。 か山。(古序。)やしなふ。民。花の春雨。生ぬさき。ほ あめ土。ひるの子。(神。) ふたり。て習人。難波津あさ 車。五のさはり。三にしたかふ。たつ。 ゑにかける。

おやとアラハ。(たらちねとも。) ろくとなく。(行基。) かふと。いさめ。うた」ね。心のやみ。

爸

四 百

ひ。くも。くま。七夕。左右。 さへきる。 うつ。 占。 まい。

ゆひと[アラハ県]

十。月をさす。おる。かそふる。ふし。

足とアラハ。

あらふ。ふむ。あゆむ。駒。かりの文。雨。雲。日。 船。車。まり。くつ。浦。難波江。(蘆にかよはして云

ひちとアラハ。

むねとアラハ。 まくる。枕にする。かさ。鷹。すふる。

思。あはぬ。こかる」。さはく。くるしき。けふのほそ

布。月。煙。蓮。ふし。いた間。

こしとアラハ。

山。おひ。はかま。折。のへて。

髪とアラハ。(黑かみ。朝ねかみ。ねくたれかみ。おちかみ なといふ。) とくる。むすほ」る。柳。なかき。ゆふ。かきやる。け りわけて。蓬。五月雨。曉。くし。鶴。馬。 

ふりわけ髮とアラハ。(おさなきもの」かみをいふ。)

らせつ、井つ」。(いせ。) 雪。霜。駒。 くらへこしふり分髪もかた過ぬ君ならすして誰かあくへき

らちたれかみとアラハ。

さほひめ。玉柳。

つくもかみとアラハ。(老人のかみを云。)

かいまみ。むはらからたち。(伊勢。) も」とせに一とせたらぬつくも要我をこふらし面影にみゆ

髪そきとアラハ。 紫の上。千ひろの海。みるふさ。あをひ。(以上源。) 午の日。山橋。山すけ。

かしらとアラハ。

しらかとアラハ。 雪。霜をいた」く。白山。鳥。馬。

鏡。瀧の糸。數。 廿三夢類

なく。

夢とアラハ。 見る。おとろく。さむる。歸る。あたなる。はかなき。 夜之詞可付之也。

まほろしとアラハ。 ち。うき橋。うき草。とてふ。もろとし。花。春秋。凡 あはする。語る。昔。(いにしへ。)世。身。面影。た」 下

夢らつ」とアラハ。 葬行。 玉のありか。(玉の向後共。) 空に通ふ。

他の中。有てなき。明暮。朝夕。うつの山。

かきくらす心の闇にまよひにき夢うつ」とは世人さためよ 君やこし我や行けん思ほえす夢からつくかねてかさめてか

らた」ねとアラハ。

治よひ。戀しき人。夢。

まろねとアラハ。 たらちねの親のいさめし轉寢は物思ふ時のわさにそ有ける

ねふりとアラハ。 しちのはしかき。百夜。よもき。 おひとかね。

老。杜。めさましくさ。つる。思さます。曉。

廿四人態

木こりとアラハ。

山。柳。歌。 虫。

草かりとアラハ。

野。をのこ。 かの岡。笛。牛。わらは

ともしとアラハ。

いさりとアラハ。 山。宮城野。

松。やみ。庭。 ほし。 立あかす。 あふ。 小藏山。 二村

> 盤。我すむかた。 やみを待。 たく火。舟。

> > あまのなわたき。

あしのや。

塩やきとアラハ。

蘆のやのなた。いとまなみ。たき木取。衣。難波の水。

すま。からき。

柴取とアラハ。

施。煙。ほす。をの山。舟。うち。すま。ゆふ。車。 廿五述懷付憑舊

世とアラハ。へうき世。あたし世。露の世。夢の世。世中。 世の向後なといふ。又世にすむと世をすつると其心弁知

すむ。すつる。まよふ。出。竹。あし。夢。露。

拾身とアラハ。

有増とアラハ。 山。世の外。かくれ家。あれ田。 吉野山。

山。月花を待。夕暮の雲。身の向後。

隱家とアラハ。 しはの庵。山のおく。世のうき時。芳野山。鳥の落草。 市の中。

器染とアラへ。 共いる。) (衣袖なとにいふへし。 又只墨の袖すみの衣

千百七十九

タ。我たつ杣。 櫻。(深草山。 但禁忌 事也。) 筆。 そむ

著衣とアラハ。(苔の衣。苔の楠なともいふ。)

命とアラハ。

鳥。いけすの魚。さよの中山。(歌。)長き。みしかき。つれなき。 あたなる。 露。 花。 虫。

玉のをとアラハ。(命の事也。)

き。みしかき。琴。淚。あふ事は。かた糸。よはる。たゆる。なからへて。ゆらく。なか

老とあらは。(老らくとも。)

を戀。いにしへ。驚。み。 ねふり。 坂。山ふし。 門さして。(老らくに。) 昔っつれなき。 命。ねさめ。友。涙もろき。松。つる。年なっれなき。

思出とアラハ。

古とアラハ。
月。花。昔。(いにしへ。) 夢。老その森。

昔とアラハ。 
しつのおたまき。野中の清水。物忘せぬ。老。

語。友。夢。しのふ。しかの都。故郷。

廿六釋教

佛とアラハ。

うてな。 月の御かほ。 世に出る。 二月の別。 花のさかられいの海。寺。御法。 三世。 いける。光。彼國。蓮の

歸る。松か本。鐘。軒のかはら。麓。野。 寺とアラハ。

嵐山。

さかの

山。はつせ。難波。(此外名所多之。)

法とアラハ。
めかきおかき。鐘の聲く

諸の佛。

世。さとリの道。船。馬。駒。門。花。とく。もとむる。三の車。

すゑの

法師とアラハ。

の浮橋。(同。) 船渡し。 世のとはりをとく。(同。)

夢

尼とアラハ。

かたちをやつす。 からら島。くたらの國。しほくまね。 心ある。うつせみ。いむ事うくる。松

らはそくとアラハ。

ひは。 おこなふ道。こん世。かつらき。うち。みたけさうし。

彌陀とアラハ。

釋迦阿彌陀とアラハ。 雨夜の月。蓮の上。西。世にとゆるちかひ。御國。

彌勒とアラハ。 よふもをくるも。さかのふる寺。

其曉。後の佛。 みたけさらし。 夕額の宿。(源。) たつのはなふさ。 かさき寺。三井の寺。

文殊とアラハ。

御かほ。けふみつる哉。つるき。くせの戸。をのかし

普賢とアラハ。

のり物。するつむ花。

迦葉の舞とアラハ。 とのね。こゑにめくる。しゐかもと。(以上源。)

不輕とアラハ。 鶏の足。 (不輕とは人をおかむ行也。)

> 字治。 ぬかつく。こゑ。汀の千鳥。曉のしも、、源。

たるまの弓とアラハ。

たる。 九とせ。かへに向ふ。ちいさき林。あしのは。西よりき

佛のうふゆとアラハ。

卯月の花。五色の水。獨たらとき。ふなつ」み。(經佛の 布施也。)七あゆみ。

たつの女とアラハ。

らひ。(源。)八の歳。 佛となる。五のさはり。南にゆく。玉をさょくる。てな

優曇花とアラハ。

一たひょらく。佛の御法。

菩提のらへ木とアラハ。 うとんけの花待えたる心ちしてみ山櫻にめこそうつらね

つるの林とアラハ。

身はこれ。鏡のうてな。我立そま。

きさらき。よ中の別。空かくれ。かる」。二千とせ。河 のほとり。なきかなしむ。

鹿の園とアラハ。

金色。

法をとく始。 三の車。

千百八十一

百 九 + 八 連 珠 合 壁 集 下

卷 第

74

爸 第 四

わしの山とアラハ。

法の花。常にすむ。 へたつる雲。

紫の竹。わたる。

ふたらくとアラハ。

須彌の山とアラハ。 ふたらくの南のきしにたらたてょ今そさかへん北の藤浪

夢かたり。あかし。月日。海にうかへて。(以上源。) そ

えふの身とアラハ。(閻浮提の人也。) めいろ。(蘇迷蘆といふは梵語也。それを染色に用へし。)

なをやます。(古で)南。さかひ。みとりの空。

味の雨とアラハ。

三の車とアラハ。(羊鹿牛の車也。) 三くさ二木。くすり。みかさ山。

一の門。火の家。

二界とアラハ。

やすき事なし。思の家

六の道とアラハ。 輪の中をめくる。

我憑七のやしろのゆふたすきかけても六の道に歸すな 熟練

みたけさらしとアラハ。(金峯山まらてをいふ也。) ぬかつく。夕顔の宿。(源。) 手習ひ。(同。)

数珠とアラハ。

玉のを。くる。黒木。けらそく。こんこうし。かさり。

露。

あか水とアラハ。

井。ふかきたに。一夏。 佛に花奉る。花さら。たな。むすふ。くむ。 をけ。

山の

一夏とあらは。

むすふ。安くゐる。こ」のそち。とく。花彩る。

其曉とアラハ。

たかのム山。 有明の月。 世に出る佛。

彼岸とアラハ。

奈落の底とアラハ。 くるしき海。舟。 いたる。時のた」しき。春秋。

くるしみ。隙なき。 み。紅のはちす。

もゆる火。とけぬ氷。

入ぬれは。

罪とアラハ。

後の世。 り。ふたか。 つくる。おもき。 廿七神祇 かりは。ともし。いさり。う舟。むくひ。 ふかき。 しつむ。をかす。きゆるはか

神とアラハ。

まつる。 祈る。 あまてる日月。 世。 かムみ。(凡神祇類皆

可付之。

社とアラハ。

あまつ。七。 いなり山。

井垣とアラハ。

とゆる。しめの外。 くす。鳥わ。

玉増とアラハ。

瑞籬とアラハ。 あけの衣。 國

鳥ゐとアラハ。 老かさし。

くろ木。野宮。柱。ゆふして。杜のかけ。つる。

かたそきとアラハ。

しめとアラハ。(しめなわ。御しめ。) もり。はゆる。ひく。ゆふ。田。野。うち外。かくる。 行あふ。住古。宮作。霜や置らん。かやふき。

・ぬとアラハ。(大ぬさ。御ぬさ。) しらゆふとアラハ。(ゆふして。ゆふたすき。ゆふたゝみ。) 花。雪。霜。さか木。鷄。かくる。なひく。三室山。 さかき。なかき。とゆる。

手向。とる。紅葉の錦。はらへ。ひく手。

夏はらへとアラハ。(御そき同し事也。)

六月。あさのは。人かた。秋風。みな底の月。 し。(御そきに。) 神はらけすも。(同。) ありす川。夕は河。すかぬきかくる。いくしたて。懲せ

巳の日のはらへとアラハ。(三月上巳の日也。) 人かた。やよひ。すま。(源。)山陰。舟。(源。)

海つ

ら、(同。) ひちかさ雨。(同。) 笠も取あへす。(同。) 又

なき風。(同。)

野宮とアラハ。 しらさりしおほ海のはらへ流きて一方にやは物はかなしき

かの山。有す川。 夕月よ。榊。月の入かた。(源。) 西川の御稅。長月。さ 黒木の鳥ゐ。神つかさ。火たきや。物のね。しめの外。 別。松風。秋の草。淺茅原。虫のね。小柴垣。いたや。

鈴鹿川やそせの浪にぬれ~~すいせまて誰か思ひをとせん。 としまもるくにつ御神も心あらはあかぬ別の中をとはれる。 月に東川にて御禊有て賀茂に参し給ふ。源氏榊の卷にい は九月に西川にて御そきし給て伊勢へ下給ふ。齋院は四 宮といふ。齊院は紫野。齋宮は有す川に共所あり。齊宮 申事也。野宮と云事も。齋院齋宮のまします所をは皆野 抑いつきの宮とは伊勢の寮宮をも賀茂の寮院をもともに

卷

第

るは。齋宮の野宮と心得へき也

神樂とアラハ。 庭火たく。(本末。) 榊。あさくらうたふ。あかほし。石

御てくら。たちからを。(神名也。) うすめ。(同。) か 戸あくる。笛、おもしろき。 かなての袖。やまとこと。

ら神。そのこま。 II.

夏かくらとアラハ。

川やしろ。榊とる、こうとはまの葬。宮人。 篠。弓。杖。ひさこ。 人の長。取物。イン きりくくす。

里かくらとアラハ。

かとかましき。

すさのをの神とアラハ。

八雲立いつも。そか 歌の始。たけき。 の里。 いなたひめ。村雲のつるき。

ひる子とアラハ。

あしのは船。ひろ田の社。(西の宮。)

下てる姫とアラハ。 かそいろはいかに哀と思らんみとせに成ねあした」すして、 (天わかひこの妻也。)

事也。)をかたに。久かたのあま。玉の御すまる。 かつら木。(ゆつかつら。)ないしきし。ひなふり、(歌の

豐玉姫とアラハ。へふきあはせすの御ことの御母也。龍神の

女也。玉より姫は豐玉姫のいもうと也。

武内の神とアラハ。 うのは。をきつとり。光ある。なきさ。子をやしなふ。

八幡。弓矢の家

菅原の神とアラハ。

きさらき。 し。梅。 つくし。 北野。なき名。

一夜松。

風月のある

石神とアラハ。

うこかね。

きねとアラハ。 つるみ。 袖ふる。 あふ事をとふ。 する。なきさの宮。しらけたる。

ねき

事。

はふりことアラハ。 三輪。賀茂。すわの社。

いみにさすとアラハ。 らと濱に天の羽衣まれにきてふりけん袖やけふのはふりこはふりこか祝ふ社の紅葉はもしめをはこえてちると云物を 後着

卯月。た」すのたけ。 廿八羇旅

旅とアラハ。

草枕。宿。船ち。あさ立。らかれ妻。都。故郷。我方。

ፑ

関路。かりね。(かり枕。) あつま路。うき世。つくしち。便り文。日かすふる。 野を分衣。山分衣。山越て。

宿とアラハ。

ちふ。 かりの世。かり枕。立よる。月。花。一よ。夕質。あさ

中宿とアラハ。

便文とアラハ。 月。花。 村雨。木陰。らち。初瀬まらて。版のかれは」。山路の

の使。 にさきのはこ。 かり。 もしの關。みちのくの忍ふ。伊勢

廿九戀部

想とアラハ。

鷹。いけすの魚。くさ。 ふち。山。

思とアラハ。

しま。 煙。袖に螢をつゝむ。尾花か本。草。ふし。川。室のや

灰とアラハ。

の類。) 玉。おつる。 もろき。袖。衣手。 營。郭公。 をく。 つ」む。なかる」。こほる」。海。 かり。 瀧。川。氷。露。時雨。(凡ふる物 鳥のなく。

> 書とアラハ。(玉つさともいふ。) り。烏は。鯉。 かく。おく。よむ。あなかしこ。名。恨。一くたり。 つ」みやき。(鮒。) しちのはしかき。き

カュ

ぬのうす様。

名とアラハ。

て。人目をつゝむ。 忍ふ。つくむ。たつ。もらす。なかる」。文。 おしむ。

あらはれ

錦木とアラハ。

待心とアラハ。 錦木はたてなからとそ朽にけれけふの細布むねあはしとやりたつる。千つか。門のまへ。くつる。紅葉。花・ 館図

夕暮。夕よゐ。夜のふくる。僞。夢にとふ。獨ね。 空た

のめ。

逢心とアラハ。 新枕。したひもとくる。むつ事。別を惜む。夢。程なく 明。ふたり。

別心とアラハ。 む。衣々。涙。又と云。後の暮。とめかねて。形見。う 有明。横雲。曉。うき。鐘を恨。鳥をかこつ。 つり香の一袖。まくら。衣なとに。)又ね。名残。きかへ 面影。 叨を惜

面影とアラハ。

花。月。雪。まのゝかや原。鏡。玉かつら。(伊勢。)夢。

新枕とアラハ。(新手枕とも。) とせ。(伊勢。) あふも別も始。あかしの宿。むつと。 夢かうつしか。 契り。 としのみ

ひとりねとアラハ。

低とアラハ。 納のたき物。山鳥。 月にわかる」。

忍とアラハ。 まちふくる。 人のとのは。鳥のそらね。雲を花とみて。

恨とアラハ。 人日。沢。閼。軒の草。みちのく。 みたる」。 鷹。

文。くす。衣。海邊の詞。

同世とアラハ。(一世も同也。) 命。ちきり。 中。竹。あし。

形見。而影。 よるの衣。 梅。 橋。

移香とアラハ。

想死とアラハ。 思の煙。いく田川のをし鳥。 の魚。後世のむくひ。夏川のいを。 柏木。

かりはの鳥。いけす

卅衣類

衣とアラハ。

雲。關。河。鴈。恨。玉。 たつ。きて。ひとへ。重る。 をる。 ま遠。 なる」。 霞。

衣手とアラハ。(袖同也。) 〔夏衣とアラハ。かとりのきめ。 たつ。 らすき。 かふる。イン

森。淚。

抽とアラハ。

みちしろ衣とアラハ。 (o無) みなと。尾花°(薄°)(雲。霞。涙。浦。かき。露。

ひちかさ雨。

「小忌の衣とアラハ。 降雪のみの白衣うちきつ wをきにけりとおとろかれぬる 修理 あかひも。山の井。すり。日かけく

から衣とアラハ。 さのイ

あさ衣とアラハのあさきぬとも。 山かつ。しつからみを。きそち。櫻。 紅。らつ蟬。返すく。末つむ花。(源。) 和歌。(同。) あさのきぬ共。)

か はなとアラハのかはきぬともの

苔衣とアラハ。 ふる木。蓬生の宿。雪の山人。扇はなたす。(萬。)

岩屋。捨人。深山かくれ。朽木。松。世をそむく。(歌。)

夜寒。(秋寒。) 後ちふの宿。しつ。かり。月。雪。おき

市の里。玉川の里。 あかす。聲の恨る。故郷。伏みの夢。さらしなの里。十 あまの磯や。夕顔の宿。やとやから

きぬたとアラハ。(檮衣同事也。)

宿。となり。 ちたひうつ。つちの音。白妙の衣。くたくる。 夕願の

きぬとアラハ。

衾とアラハ。 小車。こす。をとなひ。妻。かさね。ひとへ。から紅。

て。電。海のおもて。誰と友に。 冬の夜。ねや。をし。おほふ。またら。かさぬる。あさ

したひもとアラハ。

關。花。とくる。 むすふ。衣。しるし。

帶とアラハ。

むすふ。みち。行めくる。細谷川。横雲。花田。石。ひ たちで、かしまの神。)しつはた。三重。

花田の帶とアラハ。

夏衣。石川。(催馬樂の歌。)

絶はかとやおふとあやらさにはなたの帶は取てたにみす

常陸帶とアラハ。

かしまの神。 かこと。 祈る。

ねての下帶とアラハ。

あかもとアラハ。(くれないのもすそ。又あから裳なといふ。) 玉島川。(松浦。) あゆつる。 あま乙女。 すそ。 ふなの みてくらの使。(大神社。) 子。むすふ玉の。

錦とアラハ。(以下衣類にあらす。便をもて是をのす。) 立。をる。よる。やみ。小車。ひも。花紅葉。萩。 り。しほみつる。

かへる。立田山。はた。あらふ。から。もみち。

綾とアラハ。

雲鳥。おりへのつかさ。(総部司也。今の大とのゐの事也)

終とアラハ。

二村山。米。杉。

長き。ふる。 聞る」。よる。 春雨。時雨。 へて。佛の御手。 たき。 たゆる。ひく。 日かけ。 くる。ふし。 さ」かに。竹。柳。薄。

綿とアラハ。

布とアラハ。 衣の妻。ひとへ。重る。 し。しらぬひのつくし。 あしの花。 きく。 かつく。ふ

四 百 九 --八 連 珠 台 壁 集 下

卷 第

千百八十七

郡。(陸奥。) てつくり。さらす。 うち。さほ川。 あさ。 むねあはぬ。 卯花。 けふの

卅一食物

酒とアラハ。

泉。にこれる。よるひかる玉。(萬。) おほきひしり。 たけのは。なかるゝ霞。きく。あたゝむる。三輪山。

かれい」とアラハ。 (同。) 罪をつくる。三の友。(琴詩酒也。) 三室山。

さかなとアラハ。 家にあればけにもるい」を草枕旅にしあれば椎の葉にもる 八橋。(仲勢。) 栗をかしく。旅。つゝむ。

もちるとアラハ。 あるし。とゆるきの磯。わかめかる。もとむ。

とつむ。紫の上。 はかため。かゝみくさ。鏡山。ねのと。三日のよ。はら

あつ物とアラハ。

なきのは。ひしほす。となきつむ。

火とアラハ。 卅二火類

あくた。いさりのあま。石の中。うちいたす。松の煙。 こかる」。きゆる。むね。萤。隣。あし。もしほかく。

たき物。

衞士のたく火とアラハ。 雲井の庭。室の八島。

埋火とアラハ。 ねや。寒きよ。おきなから。春近き。

あたり。はいしれ

70

ほた」くとアラハ。

山かつ。さしあはせ。きる。

か」り火とアラハ。

篝火にたちそふ戀の煙とそよにはたえせぬほのほ也けれ ら舟。 造水。 まゆみの木の下。(源。) 夏の月なき。(同。)

燈とアラハ。

浦。夏虫。 そむくる。かりくる。まと。かへ。常。ほたる。明石

卅三雜物

あま小船とアラハ。 船とアラハ。 池。よるへ。海。とまや。やかた。鴈かね。 うきたる。とまり。こかる」。一は。あま人。つなく。

はつ潮。

もろこし船とアラハ。

つくし船とアラハ。 との音。すまの浦浪。(源すま。) 大しま。 きのなた。からとまり。箱崎。かねのみさき。(源玉かつ 山。しかのうら。よこの海。まのゝ浦。夜をこめて。 ら。) むらさきのこかたの海。 西の海。ひょ

舟中とアラハ。 薬をもとむる。龜のをの山。 33

帆とアラハ。(まほ。方ほ。) あくる。をろす。つかふ。風。 走る。 蘆。 湊田。 鴈の

いかりとアラハ。 つなてとアラハ。 をろす。なは。

とまり。

からろとアラハ。 ひく。くる。 とく。 長き。たゆたふ。

なはの浦。

かちとアラハ。(まかち。やかち。) をす。鴈かね。 らのみさき。 しけぬく。とる。天川。枕。しつく。こたへ。

お と。

カン いとアラハ。 しつく。たへかたし。と渡る船。天川。

第 四 百 ナレ -1 八 連 珠 台 駐 集 下

卷

あさつま舟とアラハ。

ほり江。

いつて船とアラハ。(五手船也。一説伊豆の國より出船也。)

卷

さほとアラハ。

さす。とる。 人。川。橋。雪。 しつく。みなれ。いかた。衣ほす。竹。釣 駒。

とまやとアラハ。

おほふ。ふく。 とる。 酮 はまひさし。

いかたとアラハ。

る。大井川。となせ。いは浪たかし。まてと」はん。水 くれ。た」む。かさぬる。床。さす。くたす。相川。の 上。山のあらし。

網とあらは。

る」。雀。あこきか浦。 ひく。をく。かけほす。うけなは。目にかいる。鞠。も かた」の浦。霞。

梁とアラハ。

のほる。 くたる。 うつ。魚。田上川。

さてとアラハ。

さす。あゆ。瀬。

車とアラハ。 是を見よ六田のよとにさてさしてしほれし暖かあさ衣かも

やる。めくる。水。柴。力。かさり。よへの鳥。流るい 三法。羊。鹿。牛。網代。ひさし。蓬。袖。椎。

しち。

あけまき。忍。

みあれ。淀。かもの河原。あ

手車とアラハ。(手にて引車也。) つまや。 月の輪。 籬。 枯口。 ひおりの日。

きりつほ。中のへ。(内裏事也。) ゆるさる」。

力車とアラハ。

牛。つむ。戀草。

水車とアラハ。

田。川。鳴。月の輪。氷のくさひ。字治の網代。

一簾とアラハ。(こすとも。みすとも云。又玉たれ。) まく。おろす。あくる。かくる。あみめ。蘆のすたれ に。いよ。(同。) 貝。(同。) 竹田。(御簾に。) 山。(同。)

こかめ。(玉たれに。)

席とアラハ。

疊とアラハ。 しく。まく。菅。かや。あや。苔。をになる。

茵とアラハ。 八重。ゆふ。

几帳とアラハ。 しく。錦。はし。おとし文。(源かしは木。)

帋とアラハ。 かたひら。螢。はし。 たつる。をしよせて。 さす。 風にまかせぬ花。(源まほろし。)

薄様とアラハ。

きぬ。竹。紅。紫。かさね。

筆とアラハ。

かさ。ゆふ。そむる。春の木。土筆。林。つか。海。う の毛。紅。

墨とアラハ。

砚とアラハ。 する。松の煙。衣。袖。輪。こきうすき。鳥。空なき。

きる。紫の石。水。池。むかふ。わる。かはら。はこ。 かめ。面。

盃とアラハ。

(春盃に。) 峯の影。めくらす。 らく葉。石にさはる。桃。きく。弓のかけ。涙おつる。

かはらけとアラハ。

かされ。うれめの歌。あるし。花橋でいせ。

笠とアラハ。

義とアラハ。 さす。ぬふ。かくれ。梅花。こすけ。花。松。竹。袖。 きぬ。さき。月。雨。(凡降物。)一目。しからき。

意。虫。かくれ。山。

卷第 四

百九十八

連珠 合

壁集下

枕とアラハ。

袖。岩。松かね。そは立る。草。すか。浪。さ」。 の小くし。かち。瀧。ふかき、(夜分をつくへし。)

館とアラハ。

くもる。みかく。面影。恨。ひかた。七子。野守。山 玉手箱。らつる。老らく。ふれる自雪。市の中。わりな 鳥。わたり。山。さかきの枝。日のまへ。月。池。友。

玉くしけとアラハ。

きっかさ」き。

ふた。身。あくる。あふ。

玉手箱とアラハ。

ふた。身。あくる。あふ。浦島か子。我身はなれぬ。

櫛とアラハ。 (源。)

つけ。つま。 けつる。曉。別。(野宮。) なつる。(同。) さす。 ひく。はをしけみ。つくし。

花かたみとアラハ。(只かたみとも云。籠事也。) 目ならふ。若菜つむ。しきみ。

装とアラハ。

うつ。みたれ。いきしに。かちまけ。石。はま。白黑。 をの」へ朽る。山人。うつ蟬。(源。) 軒端の获。(同。)

つか。

(。同。) 却。手習。(伊勢。) 竹川。(同。)いよのゆけた。(同。) かけ物。へさくらき

双六とアラハ。 うつ。石を打火。いちはにたてる。一石。すま。(源。)

冠とアラハ。 わかせこか額におふる双六のこといの牛の角のうへのかさ 近江君。(同。) さい。

いた」く。うる。李。みとりのせみ。た」しくす。ゑひ をするむる。

沓とアラハ。 ねく。はく。 かも。まり。馬。うり。一卷の書。砂にひ

く。玉つくり。え。 さや。つか。帶。ぬく。やく。かさり。まきゑ。枕にを

たちとアラハ。

つるきとアラハ。 銀のめぬきの太刀をさけはきてならの都をねるはたか子そし杖とアラハ。

す。 は。をしのは。林。池。さひ。 秋の霜。つかにかくる。 村雲。 石上。あつたの社。とを 草なき。とき。 きる。

かたなとアラハ。

さや。ねく。 竹。まもり。 ひし。 夢にみる。うつはり。こし。

鞠とアラハ。

ふむ。ける。 や。か」り。みすのすきかけ。(源。若菜。) (同。) 櫻をわきて。(同。) あかる。をつる。足。かす。 柳樱 下沓。

小弓とアラハ。

雀。かちまけ。まとる。

弓とアラハ。 かけ。かり人。もの」ふ。馬。高圓山。あつさ。 引。本。末。いる。はる。をして。そり。つる。月。盃の

針とアラハ。 なる。正。 たなはた。なへ。いと。釣。

つり針とアラハ。 あかめ。(鯛の事也。) たつのみや。いと。魚。

鐘とアラハ。 月。 け。はと。あかさ。狩人。 つく。かゝる。さゝふる。うつ。あたる。すかる。 親の子。千とせの坂。卯の

なる。つく。(詞也。) ゆふへ。 曉。 寺。 ひょく。 堅。

瀬山。(凡夜分を付へし。) 霜。おのへ。かも。花。ねよとの。 高砂。 さかの山。 初

入あひとアラハ。

鴨の鐘とアラハ。 山寺。山里。けふも暮ね。花そ散ける。春そつきぬる。

行。曉おき。 しきみの青葉。山かけ。

をの」えとアラハ。(をの」音なといふ。) 朽る。山人。 恭。かつらの里。こたふる。(をのゝ音に。) 一金とアラハ。

ひょき。(同。) 木をきる。(同。) 柴をつけて。(同。)

扇とアラハ。 我立构。(同。)

秋風。たまふ。繪。骨。女車。 をる。さす。妻。ひろくる。月にたとふる。閨。をく。

は かりとアラハ。

火取とアラハ。 かくる。をもき。 かるき。目。鳩。罪。稻。

たき物。虫。はい。ふせこ。人をねたむ。(源。) 槇柱 。

(同。)

はたとアラハ。

をる。たつ。錦。 いと。しつ。雲。七夕。薄。

玉たすきとアラハ。

かくる。 行ちかふ。

思はすはおもはすとやはいひはてぬなと世中の玉襷なる

寳とアラハ。

をもき。七くさ。三くさ。山。てをむなしくす。池。

玉とアラハ。

よるひかる。みかく。きす。露。涙。かさし。

鹽のみち

ひ。かす。つらぬる。衣。袖のうへ。

ほる。花さく。山ふき。きく。いさこ。みちのく山。

銀とアラハ。

たちのめぬき。鏡。あまの川。

まかねとアラハ。

うるしとアラハ。 きひの中山。 ふく。

黒。ぬる。川。花。 にかは。

卅四管絃

笛とアラハ。

たる。(笛のとゑ。) 吹。竹。青葉。隣。草かり。おつる梅。たきさし。一ふ し。あな。(詞也。あなかま。あなかなしの類也。) 花ちり

横笛とアラハ。

柏木。葎の宿。 虫の聲。(以上源。)

ととアラハ。 横笛のしらへはとにかはらぬをむなしく成しねこそ誰せね

人。きり。なけきくはいる。關のわらや。枕にする。 かきなす。ひく。てなれ。松風。秋のしらへ。春のしら ひさのうへ。したひ。岩こす浪。星の手向。わひ

ことちとアラハ。

鴈。たつる。

やまと琴とアラハのあつまともいふ。) 神樂。きり。孫えた。ひさの上。紫の上。(源。)

琵琶とアラハ。

と。馬の上。胡のくに。 引。なかはの月。遠山。江のほとり。村雨。さゝめこ あかし。うち。立きく。

琵琶撥とアラハ。

鼓とアラハ。 字治。橋姫。月をまねく。(以上源。) つけの木。

らつ。時もり。いさめ。瀧。川をと。苔ふかし。御法。

(源。)

絲竹とアラハ。

しらへ。聲々。あはする。終と竹との付合にて了簡すへ

女樂とアラハ。

[さいはらとアラハ。 うたふ。拍子。わか駒。高砂。貫川。 蘆垣。竹川。このとの。イン 東屋。あすかね。青柳。いせの海。 わかな。紫の上。きさらき。かつらきうたふ。(以上源。) あなたらと。梅か枝。

卅五色部

紅とアラハ。へから紅とも云。) く。梅。つゝし。染。淚。一しほ。草。ふりて。うす。ゆふ。くゝる。日。質。

はな。紅葉。き

紫とアラハ。

杜若。蕨。こかたのうみ。 らす。こき。若。はひさす。藤。萩。藤はかま。きく。 なき色。 つくし。雲。もとゆひ。上

線とアラハ。

ふか。あさ。若。うす。空。水。 松。竹。若草。野山。春雨。 たけ川のふち。髪。

白妙とアラハ。

雲。雪。霜。

まさと。

ふしの高根。衣。

卅六禁中

| すへらきとアラハ。(すへらともいふ。) てる。ひかり。神にしませは。(萬。)神の宮人。(同。)

ひしりの御代。 八すみしる。 御としの内、

御幸とアラハ。

百しきとアラハ。 うち聞しあさくもりせし御幸にはさやかに空の光やはみし を 大原野。小鹽山。たつきし。(源。) 御とし岡。今一度。

大宮人。紫の庭。御はし。櫻橋。雲の上。玉しき。御か

大内山とアラハ。(内裏也。又仁和寺に此山の名あり。)

春の宮とアラハ。 もろともに大内山はいてつれと入かたみせぬいさよひの月要するで花である。 松風。

つきの宮とアラハ。(斎宮斎院ともにいつきの宮と云也。) 東。あをき。光にあたる。

草。さかき。 伊勢。賀茂。紫の。有す川。竹の宮と。(いせ。) あふひ

ともの宮つことアラハ。 みかきもりとアラハ。(衛門也。) をさくし、(古。)とのへのあふら。

御さふらひとアラハ。(殿上人也。) 朝清め。此春計。玉の砌。柳の糸。(歌。)

卷

百 九 +

珠 合 壁 集 下

> 御かさと申せ。 宮城野。木の下露。

官とアラハ。 栖とアラハ。(くにすとも云。) よし野。にへ奉る。若なつむ。 しめし野。ふる。

位とアラハ。 百。神。まつりこと。

うねかふりとアラハ。(五位の冠をいふなり。) のほる。山。高き。みしかき。上下。あけみとり。

告男。ならの都。かりに行。(以上いせ。)

橘姫とアラハ (日本武尊の妻也。海に入てしにし人也。)

くれはとりとアラハ。(又あなはとり。二人の名也。仁徳天皇 の御時。吳の國より來れるきぬ」ひ也。 浪風。あつま。うすひさか。(上野。)

そとおり姫とアラハ。(允恭天皇の妾也。後に玉津島の明神と あや。きぬをぬふ。二むら山。なにはの宮。

あらはれ給ふ。)

ま。衣通姫。 ちぬの宮。(河内。) 濱藻。(なのりそともいふ。)

玉津し

さゝらかた錦のひもを解かけてあまたはねすに只一よのみわかせこかくへき背也さゝかにのくもの行ひ今背しるしも思起

千百九十五

F

むまやとの御子とアラハの聖徳太子の御名也の 南無ととなふる。もりや。法のはしめ。難波の寺。橋

前しまか子とアラハ。 しと也。) 寺。いかるかの宮。片岡山。 (蓬萊へ至て三百年計にて此國へ歸り

る。しろかみ。紫の雲。玉手箱。はとやの山。 住のえ。つりたる」。かめ。蓬か島。水の江。故郷に歸

松浦さよ姫とアラハの大件のさてひこか妻也。さてひこ入唐 せし時。ひれをふりてしたひしもの也。 夏のよは浦島か子か箱なれやはかなくあけてくやしかる堕 ひれふる山。妻戀。もろこし船。

櫻子とアラハ。(二人の男に思かけられて。せんかたなくして 自害せし女也。)

かさしにせん。いもか名。花ちらは。いやとしのは。 (萬。)あらそふ。

かつらことアラハ。(三人の男に慰られて。是もせんかたなく て。み」なしの池に身をなけし女也の

耳無池。

たけとりの翁とアラハ。へたかとりともいふ。かくや姫をやし なひし人なり。

物語。かくや姫。その世の契り。(源。) 雲井にのほる。

く。(萬。) とねすみ。富士の煙。給あはせ。(源。) たはれあふ。(顯照歌。) 春の野。 火をた

うなひをとめ。もとめつか。いく田川。おきつき。(つかちぬのますらをとアラハ。(又さゝた男。)

りとなん。委大和物語と云物にしるし侍り。身をなけし 同しく二人のつかをつき侍るか。後まてなをあらそひ侍 身をなけし也。其女のつかをもとめつかと申侍り。此二 にいあて侍り。此上はせんかたなくて。此女いくた川に は。其あてたる男にあはんと約束し侍れは。此男何も鳥 川にいくらもあるうき鳥を。 とらす心さしのわりなく侍しかは。はかり事に。 是も津國に有ける女。二人の男に思かけられて。何もお をいふ也。)うき鳥。 女の歌。 人の男もつ」きて水に入侍しかは。女のつかのそはに。 いつれ にても 射あてたら いくた

人丸とアラハ。 すみ侘ぬ我身なけてん津の國のいく田の川は名のみ成けり

歌。ならの御門。三のくらい。明石の浦。

林のもとつ葉。 られしけれ。

よし野山の櫻。

ひしり。

小野小町とアラハ。 野中。をちほをひろふ。そとおり姫。

女の歌。

さほ姫とアラハ。 霞の衣。春のすかた。玉柳。春の色を染。花のにしき。

紅葉。錦。山。秋の色。

たつた姫とアラハ。

山姫とアラハ。

山ひことアラハ。 布さらす。瀧。雲の衣。(袖とも。)まり。

(同。)

こたふる。聲。、ひょく。なにかしの院。(源。) 夕煎。

木玉とアラハ。(山ひこ同物也。)

きつね。(源。) 鬼。(同。) 宇治。(同。) 手習。(同。)

鬼とアラハ。 あかき。青き。 の宿。(伊勢。) 一口。一車。かはら。面。くろつか。葎

鬼神とアラハ。

日に見えぬ。歌。

天羽衣とアラハ。

雲の上人。 うとはま。はふりこ。君か御けし。(いせ。) (いせ。) 雲分る。紫の色とき。(定家歌。) 岩ほなつる。 とひたつ。

卷 第 四

百 九 十八

連 珠

合壁集

下

なやらふとアラハ。(鬼おふ事也。)

桃の弓。蘆の矢。ひな遊。(ひな也。源若紫。) いぬき。

(女名。同。)

歌とアラハ。

しのかす。ならの都。神代。鶯。かはつ。濱の眞砂。ゑ はひ。ゑひす。なかくみしかき。 やまと。なすらへ。そへいた」事。たとへ。かそへ。 あつま。た。よむ。

舞とアラハ。 す。袖ふる。おきな。 左右。やまと。するか。 もとめこ。こてふ。雪をめくら

らふ。あつむる。木こり。

古とアラハ。(ゆふけとも云。)

御調物とアラハ。 まさしき。あふ。とふ。みつのかしは。手。

あし。石。橋。心。はひ。つし。かめのこう。道。めと。

**御調物はとふよをろをかそふれはにまの里人数そひにけり** へとアラハ。 そなふる。八十船。ゆるす。民のかまと。さ」くる。

つととアラハ。 ひつき。はらか。くす人。もすのくさくき。

みちゆき。はま。家。都。みつのこしま。

下

荷とアラハ。

をもき。あふこ。はこ。おろす。つくる。

薬とアラハ。 あはする。おひせす。しせす。紅の雪。雲にとふ。よも き。かめ山。るりのつほ。

瓦とアラハ。

しつくとアラハ。 鬼。やく。 もと。抽。さほ。森。宋の露。石。雨。山。ぬる」。木 をし。硯。松。高。 なにかしの院。

々。とけ。

した」りとアラハ。

玉ほと。しほ。

おとろかしとアラハ。(又かゝし。) 田。鳥。庭。弓張の月。

そうつとアラハ。

山田。秋はつる。横川。

ひたとアラハ。(又鳴子。) 引。鳥をとろかす。ひたすら。(同。) うちはへて。

ひま行駒とアラハ。 はやく過る。 白。黑。月毛。日を過る。鳥。月のねすみ。おとろく。

手習とアラハ。

あまのさかてとアラハ。(人をのろふ事也。) うつ。このはふりしく。(伊世。)

門出とアラハ。

旅たつ。よき日。いく田の森。(歌。)

方たかへとアラハ。

あふとのかたふたかりて君とすは思ふ心のたかふ計そ

つら杖つくとアラハ・ なけきとる。

卅九詞類

引とアラハ。

ま。杣木。(宮木。)

打とアラハ。

た」くとアラハ。

堀とアラハ。

父母。いろは。をの」みち風。

後し。(同。)とりもしは~~なく。(同。) なる神。一夜めくりの神。中川の宿。(源。)いたつらふ

しほ。霞。よと雲。舟のつなて。弓。綱。琴。まゆ。と

くひな。門。戶。ふなはた。手。 窓の雨。浪。碁。衣。杖。石の火。

かへるとアラハ。 浪。鴈。弓。寺。鳥のかいと。葛。袂。 非。 池。 اال 太刀のめぬき。

ひろぶとアラハ。

さすとアラハ。 椎。つま木。 しほ。入日。あさ日。月。戸。門。船。 しほ木。玉。くわい。をち穂。

とくるとアラハ。

忍草。髪。かるかや。薄。柳。いと。

観とアラハ。

網とアラハ。 氷。髪。絹。船のつな手。

長とアラハ。 三日月。有明。遣水。山道。なは。帶。いと。

山鳥の尾上。かけのたれを。 髮。糸。命。玉かつら。春の日。 秋の夜。船のつな手。

みしかきとアラハ。

くるとアラハ。 玉のを。夏のよ。秋の日。

ついら。 つなて。糸。暖のをた卷。つ」らおり。みくりなは。青

卷

四

百

九十八

連 珠

合壁集

下

やるとアラハ。 文。車。心。使。

あくるとアラハ。

た」むとアラハ。 天の戸。まきの戸。浦島かはと。

いかた。あふき。文。ゆふ。

折とアラハ。 扇。手。枝。花。紅葉。

立とアラハ。 霞。雲。秋風。煙。錦木。衣。年浪。

たゆるとアラハ。 橋。花田の帶。中。

つなくとアラハ。 結とアラハ。 帶。夢。露。霜。草枕。岩代の松。ふみ。

さそふとアラハ。 うき草。灰。木の葉。花。船。水。

月口。船。こま。鷹。

かくるとアラハ。 こかる」とアラハ。 紅葉。舟。たき物。思。

千百九十九

千二百

かつら。帆。玉たすき。橋。浪。

妻。まゆ。霞。鬼。

まねくとアラハ。妻。まゆ。霞。鬼。初瀬。

ふるとアラハ。

木の葉。花。瀧。

落とアラハ。

山のかせき。ひはのはち。尾花。舟よはふ。袖。

**すゝ。**月日。雨。露。袖。糸。

まきのは。み山。つのゝ上。さくらこ。あらそふとアラハ。たく火。犬。まと。らつみ火。戸ぺ弓の事也。まと)

**造わけ船。雨。石。** 

いた」くとアラハ。

霜。星。すへらきのおほん神。祭。

闘。浪。年。山。まかき。

こゆるとアラハ。

紅。岩間。鳰の下道。袖の淚。

四十数字

一重とアラハ。

梅。衣。袖。墻。らす黑

三重とアラハ。

でで、気の

八重とアラハ。

玉椿。ほり川の水。

たけくまの松。

弓。紅。紅葉。染る一しほとアラハ。

四方とアラハ。

都。木末。山。あらし。

より~~とアラハ。かけひの水。通路。たえ~~とアラハ。四十一重詞

つれく、とアラハ。あふく。いと。舟。

村々とアラハ。雨中。

はるくくとアラハ。 雪間。煙。里々。 あしのかれは。

野くれ山くれ。から衣。旅をしそ思ふ。

とりくしとアラハ。 柴。たき」。花紅葉

かれくくとアラハ。

虫のね。草葉の霜。人目。

春の始の心ナラハ。 四十二引合

Ŋ 年越て。春立て。年のは。氷とけて。(氷きえて。氷なか し、《春さえて。さえかへる。)はつ春。驚のはつね。む一夏の末の心ナラハ。 る」。) 霞そめたる。 殘雪。(雪きえて。雪ま。) 春寒

暮春の心ナラハ。

かへる花。(落花。)藤。山吹。つくし。 とも。)雲に入鳥。(ふる巢にかへる鳥。) やよひ。春暮て。春のみなと。夏ちかし。春の別。(名残 老の鶯。根に

春の心ナラハのなといふ詞をそへては。何ともいふへし。 月のかすむ。(おほろとも。三日月。有明。おほろ月夜。) 春の日。) 春の曙。(朝あけ。) 春の夕。春の夜。春の 風長閑なり。浪のとか也。(うら」也。) 永日。(遅日。

> す。身の花。心の花。わかあゆ。つるの林。佛の別。東 風。白尾の鷹。(つき尾。)なき鳥。水のぬるむ。 松の綠。(はつみとり。)山なしの花。桃。川つ。鳥の かへす。なはしろ。いといふ。櫻。(山櫻。遲櫻。) (青柳。) 早蕨。 若草。(草の若葉。) もえ出る草。小田 も。)ひはり。梅。(紅の梅。) 歸る鴈。(別のかり。) 雨。(はるさめ。)鶯。 きょす。 つはくらめ。へつはめと 花。

夏の始の心ナラハ。

(青木立。) 櫻。(をそし。) 茂る木。郭公を待。(初音。) あふひ。神まつる。ひとへの袖。殘櫻。青梅。 夏のきて。卯月。衣かへ。春のとなり。卯花。夏木立。

夏もなし。(す」しき心也。) ひむろ。 らへ。みそき。) 櫻あさ。夕かほ。撫子。(常夏。) 蟬。 秋近し。 泉。(水をむすふ。) 夏はらへ。(みな月は 凉しき。(夕凉み。朝凉み。) 夕立。みな月。

夏の心ナラハ。

雨。さ月やみ。橘。あやめ。まこもかる。早苗。藍。と みしか夜。(夏のよ。明やすきよ。) 明安き月。郭公。く もし。あゆ。か遣火。鵜舟。、鵜川。よ河のか」り。 ひな。夏草。(草の茂る。) 夏山。 夏野。あふち。五月

とりの災。 ふる際。 毛をかふる鳥。)姿の秋。 わかたけ。(たけのと。)とやこめの鷹八毛を

秋の始の心ナラハッ

秋の末の心ナラハ。 ゆ。(をちあゆ。) 詞を入て。)蟬。(同。)梅の紅葉。 あきの來て。秋の立。初秋。ふ月。一葉ちる。盛。(秋の とやたしの際。扇をく。七夕の心。 いなつま。さひあ

秋の心ナラハ。 らかれ。(草野。)かれの」露。虫の音かる」。衣打。 やゝ寒し。(秋さむし。 夜寒。) きく。 野の宮の別。 なか月。有明。秋暮て。秋の別。時雨。(秋の詞露なとそ へて。) 秋の霜。 冬ちかし。かつちる紅葉。 (木のは。) 5

うき秋。荻。す」き。(お花。) 荻。女郎花。かるかや。 露。(露けき。)身にしむ風。芭蕉。すさまし。秋のよ。 す」虫。はたおり。きりくす。嵌中の秋。 生をはな 草。)千草。名草のかる」。そむる野山。つた。くす。 長よ。秋の夕。(あした。)霧。野分。月。(三日月。有明。) 鴈。(はつかり。鴈のくる。) 鹿。(すかる。) 虫。松虫。 槿。ふち袴。きく。紅葉。色付。(木末。野山。あさち の日。はと吹。ひさき。露燕。色鳥。ひやゝかなる。(風 つ。衣打。(きぬた。) 露霜。らつら。鵙。櫻の紅葉。秋

水なと。)

冬の始の心ナラハ。 をまつ。露の氷る。 冬のきて。はつ冬。 紅葉ちる。 神無月。時雨。木の葉。(落葉。)

冬のはての心ナラハ。

年暮て。(年の暮。) 木。)なやらふ。 春近し。 春まつ。 春の隣。梅。(冬

冬の心ナラハ。

戀の心ナラハ。 ま。(岩焼。) 草枯て。霜枯。(冬枯。) 木の葉。(落葉。) (炭型) る。あしろ木。あしろもり。千鳥。木枯。枯野。すみか 霜。あられ。風さむし。(風さえて。) 月窓し。月氷る。 日。米。(つら」。) 涙の氷。水とり。をし。かも。あし (有明以下同也。) 寒夜。(冬のよ。) 雪の花。雪。冬の

ま。(忍つま。一よつま。) 淚川。錦木。戀衣。袖ぬれて。 むる。戀しぬる。同し世。(一世。) かたみ。うとき。忘 (きて。) ふたり。獨ね。中。うき人。名殘。歸る。と (名の立。うき名。あた名。) 契り。憑む。とふ。くる。 別、(別ち。) 恨。(うらむ。 うらめし。) 名をおしむ。 戀しき。(戀しく。) しのふ。ついむ。まつ。僞。(まと。) る」。なく。夢にとふ。(夢にあふ。夢にきて。)遠つ

かた戀。(かた思。)いそ 水邊。(川の水邊也。)

人つて。かね言。

川。たきつせ。(瀧川。)川上。入江。ふち。瀨。 き。さは。池。みなと。(以上躰。)水。水上。なかれ。 し。(以上非躰用。) なみ。(以上用。)船。いかた。千鳥。水とり。 あし。は

海邊。

述懷の心ナラハ。(述懷懷舊引合て三句にすくへからす。)

の暮。又ね。又と云。(後といふ。) きかへ衣。

た。文。(玉つさ。) 衣を重る。新枕。枕をならふる。後 ひも。人目をついむ。 したふ。 たのむる。 かなたこな く。つらし。むつと。空賴め。思。情。あらはれて。下

有增。命。(玉のを。) 世をすつる。らき世。世の中。世

袖。) 捨人。身を捨て。うき身。まよひ。年たけて。(と の向後。世外。かくれ家。墨染の袖。(衣。) 苔衣。(苔の

思出。夢の世。身の夢。思子。いやしき。數

浪。しほ。うしほ。(以上用。) あま人。 海。おき。浦。いそ。はま。江。みなと。(以上躰。) み。千鳥。かもめ。蘆。(以上非躰用。) いまり船。

水邊の」き所。

夢のうき橋。小田かへす。布さらす。あやめふく。あふ て。(同。) 一しほ。恨。雲のなみ。かひなき。(以上海。) み。(としなみ。以上川。) あしや。とまや。松原。まさ せ。涙の川、泥の瀧。)みつわくむ。花のたき。老のな こ。霞のあみ。白鷺。蘆火。みるめ。(詞。) しほたれ

旅の心とアラハ。

告。いにしへ。身のふりて。かしらの雪。

行衞。うき。 あたし身。 身のさかり。 老。(老らく。) ならぬ身。心なき。(心ある。) 後の世。さきの世。身の

夢。ねさめ。曉。よひ。曙。あくる。しの」め。 く火のかけ。ほし。ぬるといふ。(詞。) め。かね。鳥。(鷄。) 枕。とこ。螢火。よこ雲。月。た ねや。莚。衣かたしく。袖をかたしく。 ともし火。やみ。 いなの

山類。 山。嶺。尾上。證。谷。(以上射也。) たき。かけはし。

(以上用也。)

(かりね。) 山こえて。 野を分て。(山を分て。) 旅やか 古郷。むまや。みなれぬ山。我方。閼こえて。かり枕。 旅衣。草枕。宿。(中宿。)舟。(船ち。)あさたつ。都。

夜分。

一よ妻。らかれ妻。らきねの床。東路。道。便文。

九十八 連珠合璧集下

卷節四

床。心のやみ。常のともし火。若むしろ。かものかね。床。心のやみ。常のともし火。若むしろ。かものかね。夢。花の夢。 その曉。 心の月。 うつらの床。 うきねの明はてょ。(明過て。) 朝あけ。朝ほらけ。世の夢。身の

以下一本〕

永禄十年卯五月中八日

取本歌事

の作者のよめる歌は。新古今集より後の集にありとも。撰集は新古今集まての歌を寄合には用へし。堀川院百首

せて證歌にせんとす。本歌の付合には用へからさる岑也。し。不可然。此抄の引歌は新古今集の後の歌をも是を引の本歌にとるへし。新式の法如此。近年任雅意これを用へ

中納言羽林為連歌稽古。聊以染翰墨。仍示愚老乞奧書斯集愚老為少年人所書也。而流布世上有寫之跫歟。爰

依是錄其子細耳。

南華老人(花押)

[右連珠合壁集以帝國圖書館所藏古寫本校合]

## 連歌部廿九

雨夜記

D, o 前句付句引合すれは心一にて。付句斗引放は心別に成句あっ字 長 編 梅か香のかすめる月を袖に見て 夜なくねはや花の咲陰 袖にやとしてみたる心地也。 右前句に引合はねかひ也。一 句は梅の匂ひに霞る月を

色ふかき秋の紅葉に袖ふれて 行へき道かいさや闘らん と也。一句は色ふかき紅葉に袖をふれたると云心なり。 引合て。月のかつらの紅葉に袖ふれて折ぬ事のかなし

月のかつらをおらぬかなしさ

雲か」る尾上の雪をふみ分て

るへしと也。一句は山路の雪をふみ分たる心なり。 引合は。高山の雪をふみ分ではいかて行ん。いさや歸

神中の小しまに海士の家有て いつるとみれは録るつり船

とみれは。家はなくして此方へかへる舟なりと付也。 引合は。沖の小島に海士の家有て。共家より出る舟か 一句は小島にも家有けるよと也

あらたに神の拜まれよかし 吹風にとはりの錦かつちりて

拜まれよかしと也。とはりは戸帳也。 引合ては。 かへは。紅葉の散ね心也。 神前の紅葉ちりて。 一句は神も形をあらはして 神の拜まれ給へとね

卷 第 四 百 九 + 九 雨 夜 記

第四百百

前句は人の事なるに。食歌草木の上にとりなせる句あり。 はなれかたしや古里の秋 はなれかたきはましはりの中 はなれかたきはましはりの中 はなれかたきはましばりの中 はなれかたきはましばりの中 はなれかたきはましばりの中 はなれかたきながったく もとのなみたにかへるおく山 庭そなく妻とふ野へや明ねらん さきの世や人に思ひを付つらん

きかすかほといかにうらみん のなくにも花はとゝまらて 気獣を人の上にとりなす句。 知らぬとりなし雪の夕暮 そとはかと鼠の花に迷ひきて 男庭の聲のしけき山本 ならの葉をふるき都にふみ分て ならの葉をふるき都にふみ分て ならの葉をふるき都にふみ分て ならの葉をふるき都にふみ分て

> 開てのみ人はうからしつらからし や夜月誰か手枕になれぬらん みるは思ひそ獪まさりける かるは思ひそ獪まさりける

人はむかしの言の変もうしたななくて軽はなからの橋はしらなるとなき我標草はくちねたるものはれなればかき絶にけり

あらはればればかき絶にけり 関な間の雲の遠山まゆにみて 雲吹風に月は出にけり へがかけぬいつまて人のまたるらん であったのでの字に付様もり。

お出い船ひとりうたひて出る江に海士小船ひとりうたひて出る江に 脚のなみたやともに落らん のなみたやともに落らん であばる秋のは山の夕日影

雪らつむ深谷の小川春寒て

音する水は氷とけけり

記

つくの人そ心はつかし

雅子なく茨の燒はら雨をちて 来るかすみはうすすみの色 暮るかすみはうすすみの色 なるかすみはらずすみの色

**猶**くちのこる櫻木の陰

梅かこちかきともしひのもと 花はたゝ陰も動す咲添て 本はたゝ陰も動す咲添て

**梅かほる夜の有明の月** 

らへてそ竹の陰に住ぬる

打わたす人そ行衞さひしき 打わたす人そ行衞さひしき

初せ山四方に花さく陰わけてたひねはいつく入相のかねいつく入相のかねり里の花にたゝすむ夕間暮

二道におもひらかれて夜も更ぬいつち行てか枕さためん

露の秋霞の春のあたし世にいつの夢とか身も消なまし

一山類に水邊を付。水邊に山類を付て。景氣を本としたてた露の秋霞の春のあたし世に

る句

小ふねすて置江こそくれぬれ 畑につ麓の里は木かくれて 畑につ麓の里は木かくれて 畑につ麓の里は木かくれて

 一前句の末の五文字を付句の枕詞にしたる句。

付句の七文字を半臂としたる句。

千二百七

詩の對句のことくに付る句。 あれぬれは尾花かもとの里ならてらつら鳴野と庭そなり行 神つ波月の千里に船出して 郭公あし 越にし山は八重の白雲 の忍ひになき拾て

自妙の雲の端山に蟬鳴て さよのほたるそあをく明たつ

の入日にからす鳴なり山陰の月や兎のふし所

前句にいへる事の端的の事を付たる句。 さひしさつらさ誰にかたらん

花をつる比しも雨を夜き」て 我心誰にかたらん秋の空

荻に夕風礼にかりかね しのはんとてや此比 の空

小萩散荻に風ふく夕まくれ

はかなきと云句にはかなき事を付たる句 いかにせはちらしと花にあくかれて は は かなき事を思ふ夕暮 かなき事を思ふもそうき

> 前句にいへる處の様をしたてたる句。 雲風にいひやる斗待侘て

かすむ野の竹一村に花咲て たれかはとはんかすむ山陰 田舎をとへは物そかなしき

道のへの柳木ふかく梅吹て

一前句にあちきなき事をいへるに引かへて。 句。

慰事を付たる

あた人となりてもくらせはなの春 二度は人とならしと思ふ身に 忍ふともやはかへるいにしへ

只月にめて花にくらさん

前句にとは」やといへる句を。不容なる事を付たる句有。 あまりらき世を人にとは」や

別れてふ事を誰身にはしむらん

世の古事を松にとは」や

花を風いつより散らしそめつらん

一前句の誰にかとはんといへるを。心なき物はかなしと付た 法をなとしめの内にはへたつらん とは」や神のそのかみのみち

る句。

夜記

景氣に景氣を付たる句。

深山の庵に衣らつ音

海士もなとかは心なからん

浦霞む難波の春の朝明に

秋のあはれを何にたとへん

前句に景氣二句續たるは心にて付る也。 心くたけたる句に景氣を付たる句。 付句の末にかなを添て心うる句。 遠山の雪の夕につりたれて 月のとる狩はの雪の朝ほらけ 待もせし恨もせしと云捨て おもふへきあはれは花にことつきて 月をたゝ住人なれや草の庵 別れしは霞斗の朝ほらけ らき身おもへはあちきなの世 罪のむくひはさもあらはあれ 誰に 薄霧にらかへる船の朝ほらけ のとるや木の葉山風の整 è. 秋になるかと誰にとはまし の末に頼む夕くれ か春の行衞とはまし 4

松の葉にかられる月はかすかにて

心の景氣の句。 子規雲間の月に待更て 天津鴈沖とく船のつな引て 日もくれなひのうす雪の空秋の夜の長等の山は鐘なりて 春の夜の月に一すし隔鳴て 平崎イ とす波の花のうき嶋明る夜に 虫の鳴野への遠山色付て 秋ふかき廣野の末に富士見えて 小船すて置江こそくれぬれ 橋霞む山本遠く夜は明て 時雨の跡の露そ身にしむ 霞に雪のたまれ遠山 山やね覺をかきり成らん 遠山の端の秋のさひしさ 引わかれ行横雲の空 露白き野の春雨の 煙たつ麓の里は木かくれて 跡

簾の内のきぬの音なひ

詞の景氣。 軒近き花の匂ひに刀更て

よしの山雪の古郷春さえて する吹風の音はいつまて

前句何を付ても付へし。又させる事有問數句に細なる事を 付出したる句。

あひに逢新枕沓に梅吹て 心られしき春は來にけ ij

職に残る有明の月

春の夜の棚なし小船音更て 起てみつからむすふあかつき

前何秀句過て聞にくきを。やすく取なして付たる句。 色つらきはなたの帶の別衣に

身に寒くなる初隔の聲

我袖のつとりさせとて鳴もうし

逢といふ詞に戀斗を付へからす。

音惡のとはりわかぬ末の世に あへは中く一言の葉もなし

影薄きかたわれ月の初秋に あはんかきりを空にこそまて

へは又心ならひの殆そひて

前句に侍る詞の内を捨て付樣有。 山路やすらふ夕立の雲

ひとりくれ行木からしの風 櫻散紅葉」くつる山里に

櫻紅葉不付。但木からしは取付也。

庭に入たつ水からしの風

寒き日は野への小鳥も人なれ 野への小鳥庭に入たつと付る也。木枯不付。寒日にて かへたり。 7

澤水の半は土にうつもれて

深田をらふる賤の哀さ

田植る賤か土に埋ると付たり。 の邊に澤水なかるへきかは。 澤水をは拾たる也。 但

わけつ」のほる日の影

山高み花の梢のあらはれて

日かけなかるへきかは。 高山の花に我分登る事也。

日影不付。

但花咲山の霞に

跡よりきゆる山のうき雲

行人の袖自妙に雪ふりて 行人の足の跡より雪消ると付る也。雲不付也。但雪山

に雲なからめやは。

月寒き夜の鹽干に隠落て

順に露をはらはせて秋風をはすつる也。<br />
但秋風の折節

行水も冬籠かと氷る日に かくれ住ぬる山のしら雪

雪の山水也。 氷の下に水のかくれてすむと付たり。雪の山不付。但

思へはのはといふ字に付様有。

思へはとはぬともうらめし

組ねた、見すしらさりし中そかしならして おもへは今に似たるいにしへ

とけてねし一夜を今は命にて

思へは雪ははやく消けり

昨日みし富士のねいつら朝霞 せはといふ心なり。 思へはといふはの字せいはい。思ひくておもひかへ

前句の心をあらぬやらにとりなしたる句。 世にあふまてと身をかくす人

老の後つかへん道も安からて

前句は商山の四皓か事也。付處は范蠡か事に取成し

いつの時かは春にまされる

世はいと」花散る比やらかるらん 前句は春のいみしき事也。付心はいつより春の空うし

梅か」のいつくよりかは匂ふらん と也。

朽木に咲る花の哀さ 梅の立枝に花一二咲て。匂ひのふかきと也。 前句はそこはかとなく包ひ來たる梅也。付心は朽たる

おそくみつるは悔し松しま

老ぬれは思ひし事のかひもなし

と也。 前句は行てみて云たる事也。付心は見はやと云内に老

いつくかは都にまさる春の花

遠山櫻豬尋ねみん 前句は都に増る花はあらしと也。付心はいつくにかあ

つれの峯か住よからまし らん尋はやと也。

尋しよ此世の外はなき物を

今一とゑをなけ郭公 前句は葬たる心也。付心は葬しとなり。

千二百十一

爸 第

前句は一壁鳴たる上に云たる心也。付心は夏なかんよ櫻さく末野の森の朝くもり

花盤秋のあはれも何ならてり此櫻の朝くもりに鳴かし云へり。

枯野の松の雪の夕くれ

秋の哀にも増れりと也。前句は春秋の箏也。付心は枯野の松の雪の夕暮は。春

たこれでは、 人こそ人をいさむとはきけ となるにはない。とかめて付たる句。

梅こそ春の色をあらはせ壁なと集めぬ窓を照らん

秋こそ人のおもひとはなれ雲殘る深谷の櫻陰寒て

誰も皆心うかる、春のそら

露こそのこれ秋の手枕 体法僧と鳥もこそなけ

山遠く月は入野の花すゝき

昔をは人の語るもはるけきに 松立てる遠山本の夕時雨 とまりとてこそ舟はよるらめ

> ーとかめな寸業有。身にしたかからと思ひ出てとはん事こそかたからめ 思ひ出てとはん事こそかたからめ なるで契りしくれなたかへそ

波こそ見えねいつち行覽とかめぬ付様有。身にしたかぶこそと云なり。

秋ふかき音羽の梢小倉山ほとなの月や西にこそなれ

はるしくとなきたる朝の打貨み

なき人の応に残る山さくら

ことたらぬ身そつかへ侘ぬる一そと云句に付様二種有。あたりて付たる句。

> 関そわかね峯のしら雲

青柳のかつらきしるく花咲て 櫻そわかぬ器のしら雲

あふさかの山さくら戸の鷸守は人歸る山さくら戸の暮る夜に

法の庭人は数〈\立よりて心のなきそ寺を過行

夜 記

又そふて付るそ有 櫻花風をいとへは雨ふりて むかしを忍ふ納そ露けき 色してわたる世の中そうき

里はあれて花のみひとり匂ふ野に 海上の衣そ又かへもなき

しほれたる袂を夜るは片敷て とふそまとの情なりける

いか」せん。心得様色く一有。 つかぬ事をもいふなり。 人を待宿に花ちる春くれて

思案分かたきをも云。又落

つれなさは身に限るとも如何せん よしやしはしは思ひなくさめ したは」せめて哀とをしれ

身に限るらき世なり共如何せん

人による恵み成とも如何せん 仕る君にららみのこすな

つれなくて誰にも果は如何せん 心よせめて一すしにあれ

とけぬを人のくせとたにみよ 身につらき心ならひは如何せん

> 絕てやはおもひありとも如何せん 力不及如何せんと打云たる心なり。

葎の宿の秋の夕暮

夢打覺で思ひやる床

戀ちにも長き闇をはいかゝせん 唐土まても知る人そ知る

いかやにしてよからんと思ひ煩て。打歎きたる心息。心なき秋のね覺をいかゝせん

いかにせん花を急はみねの雪 花をいそけは雪末になる。又雪をしたへは花跡に成。 いか」せんと我了簡に不及事なり。

物をといふ詞に二つの心有。當て付たる句。 らき世中よさもあらはあれ

ちらぬ花老せぬ人もなき物を

とくる心や神にまかせん

言の葉を人につくすはらき物を 前句に有も同し事也。

先きえ行は有明の影

あこやの松にさわる月かけ 陸奥は廣き國そと開物を

かへさる」文は我さへみぬ物を

千二百十三

又從て付たる句。

日の前にみ残す事はなき物を

春秋つくす底のつき山

むかしにはかへるためしもなき物を

老木をかくす花のあはれさ

更て後出へき月もある物を

前句にことはりをせめたる句には。付句はうきくと云なたのもしなあかつき契る月影のかねて住らんみよしのム縁

すへし。

武蔵野に秋の幾日を送るらん

身を含る<u>い</u>世になどない。

島の末の秋の夕くれ 齢の末の秋の夕くれ

おもはぬを思ふに我身つかれ來て

八山毎の華の春風

哀いつくに<br />
恭は行らん<br />
おにも<br />
根にも<br />
歸らす<br />
花散て

かり初の恨を我は花として真砂の敷そおもひとはなる

一ふしの恨となして捨ねたゝかたるも更に語り霊さし

又余りに安き句をは。やらかましく付候へし。

いつれそや花の明ほの夕月夜山ほとゝきす過て行空

春秋の哀いつれと分かねて

水鶏なく夜の月ほそき影

身をたすくるも神の哀み前句を分て別に付なす句。

人の身を田の箕になし。神を電に付なしたり。

第 は る色に 替る 浦風

霜白き椎のは山の秋更て

**世り。** が風を椎のはの裏に付なし。暮を 秋末になる 事にな

う船さし捨てかへるあかつきかすかなるかねを横川のしるへにて

身はなき物のなにかくるしき横川寺の鐘を夜の川に取なす也。

身を山吹の質の無に取なせり。 欵冬の花はいく枝も折てみん 夜記

名所の鳴門を戸のなるに取なせり。 鼠木の屋も住うき斗秋暮て

なるとよりさし出されし舟よりも我そ寄還のなき心ちせして立文字を付句まて用たる句。

契りきや時は長月花は菊夕の雲にむかふ遠山

特別が生に木葉ちりしは

今朝置霜に初順

の摩

小き物で大きなる物を付える。山里は花の匂ひに鳥の摩

大海の遠き鹽干に求食して大海の遠き鹽干に求食して

露の信をなくさめとなる。これに野は枯ているとなる。

みるさへうしや 筆の跡

見えす成行ふる里の山おく山の岩のとたえに水すみて雲間の月の影そすくなき

に事り能可に寸袋らり。 とすりとのむやとりと鳥のねて いなくる」とかひそ猶あはれなる など である。

人はなと詞をあたにもらす一大事の難句に付様あり。

飛鱶もへてはなにを思ふらん人はなと詞をあたにもらすらん

職ににたる人そしつけき 初瀬にますはよきの神垣

前に出ぬそ新参なる

ありへはとおもふに身をや頼らん

車の右にのりし歸るさ

人の見る馬塲のひをり時過て

、t ゕゝヹっし。 うきにつらきかなしきは同し趣なれとも。一句のうちに結

へは心少更る也。

にくからぬ人ゆへ愛はつらからて足もかたみの露のぬれきぬして

うらみ俗つく立やかへらん

うき時はつらしとおもふ宿そかし

同し思ひのなみたともかな

暮年に昨日のうきはつらからて

おもひわくうへこそ憂もつらからめ世のうきにかへはつらさはなき物を

人にしみたる心なになり

聞もひとりとおもふ世の中

誰か上か身のうき程はつらからん

きは一入ふかき心侍る也。

此句とも思ふに。らきと云は大身にて。つらきかなし

かけ手爾於葉。

朝な~~うつろふ野守田て見よ今幾夜かはありあけの影

夜も更は枕いつくにかりころも日も夕暮に宿やたのまむ

うらみもはかなおもひすてはや 秋風に名残おほくも立別れ 円幡の山の松そ久しき

明れは雲や立別らん

あやめも見えぬ秋の夕暮かへりこし身を浦島か玉くしけ

月待といへは汨のあやにくにあやめも見えぬ秋の夕暮

都田ていく夜旅ねのうつの山 うつゝといふもたゝ夢の内

一うけ手爾於葉。

浮雲にこほる、時雨玉あられん物かひとりなるやと 遊なる鹽干の浦の夕なきに やくや物思ひわかむねの内 なかむれは夕暮淋し素の松

あらしの花にたれをまつらんなために月いつるそら

又さなからと云心に付たる句。

淋しき空はた」のへの露

下葉ちる木すへのかたにむしなきてふるき都はた」秋の風

花にうらみ木葉に人を待铭て

たゝ一すしの思ひなりけり

鹽みては汀の松を沖にみて

雲雀鳴庭の芝生に里ふりて

身にそしむ心にやとれ秋の色

いつれる面々付句也。

面白付

也

夕の物とあはれなりけ

哀ともきけあかつきの雨

わか山とた」月は入けり

哀と云にあまたの心あり。 村雲も月に哀のそひやせん 梅かほる夜のありあけの月 り。恨きをかくる心もあり。 湖の汀に松の葉はおちて うきかりふしのあかつきの雨 淋しきもうきも心よ草の庵 猶こそたのめ待はよはらし 残りても哀は増る春の花 あはれむはいかなる人そ旅のやと おやを憐むと云はからくの心也。物をほむる心もあ 月を哀むといふはあいする心

一只と云詞二種あり。心のなき句、

人の身はかくみのうちのかたちにて

たゝ時の間にかはるうなはら

たゝありなしのちきりなりけり

字津の山へにむかふふしのねい

うらむへき理もなし夢らつゝ

詞に付る句。 住吉はたゝ此浦の名のみにて は古はたゝ此浦の名のみにて 秋更き木綿付鳥の聲すなり 是もいけるをはなつかみかき なとうくひすの竹に鳴らん

夜 and and

**春茂き遠山鳩の里に來** 

くの灯きへて更る夜に かみかき斗のこるあはれ

雪うちはらひいそく袖みゆ

前句に本歌詞多く出たるには。

付句は仄に其心を顯へし。

駒とめて袖打はらふ陰もかしさの」わたりの雪の夕暮 またる」や駒をもと」めあへさらん

前句に本歌の詞仄にあらは。付句に其歌と聞ゆる様に付也。 と」なかめもしつかなるころ

外なきにやくやもしほひ我思ひ

こぬ人をまつほの浦の夕なきに焼やもしほの身も焦れつ」 あらぬ心と継そなりたり

あらたかのいつなら柴のなれもみん

み狩する狩場の小野のなら柴のなれはまさらて戀そ増れる わか物おもひかきりやはある

長き夜も明ぬる閨の隙みへて

終夜物おもふ比は明やらてねやのひまさへつれなかりけり 川をさそふあ かつきのかね

老よはや身を浮草のねをたえて

人のあまねく知たる歌をは。詞を少とるへし。 俗ねれは身を浮草のねを絕て誘ふ水あらはいなんとそ思ふ

> 秋風に島ときいつる船みへて 朝霧かくれのこるありあけ

ほのくと明石 よものけしきも春めきにけ の浦の朝霧に島かくれ行船をしそおもふ ij

難波津のむかしをほゆる君 か世

難波津に咲や此花冬籠今を春へとさくやこの花 かへるさは時雨る泪かきくれて

又逢みんも定なの身や

神無月ふりみふらすみ定なき時雨そ冬の始とけり

音に知らるし秋のはつか 난

秋來ぬと目にはさやかに さやかなる色こそみへね夕月夜 くらき木陰の露分る道 みへ ねとも風の音にそ驚かれぬる

つたかえて色つく秋も今やら N

鐘さへそこと聞わかぬ聲 つたかえてと云て。字津の山とせぬ所宜とそ。

行心もろこしよりや遠から

つ」む名も世にかくれなく 成

盗なる唐士まても行物は秋のね覺の心なりけり

むかしなからのやまと言の葉

さゝ波やしかの都はあれにしを昔なからの山さくら哉

けふをまちえて神まつる里

ちきりせし数あらはさはつみもなし

近江成つくまのまつりとくせなん難面人のなへのかすみん つくまとせぬ所よろし。

夢の行衞はたゝ鐘の聲

杜字過るまくらをそはたてく

時鳥鳴つるかたをなかむれはた」有明の月そのこれる ひとりわかた」すむ方へ梅吹て

人のくるをそうくひすもなく

梅の花みにこそ來つれ鶯のひとくひとくといとひしもをる

もひらかる」空もはつかし

みぬ人をたゝふく風にこひそめて

世中はかくこそ有けめ吹風のめにみぬ人もこひしかりけ ń

袖におち來る瀧もはかなし

音にのみ有と聞こしみよしのゝ瀧はけふこそ袖におちけれ よそにのみ聞こし物をうきわかれ

かた糸の一むらす」きかる」野に

こなたかなたの松風のこる

前句に本歌の詞不出 を。付句に其歌の詞言出す句。

片糸をこなたかなたに撚かけてあはすは何を玉のお

にせん

らすくこきのへのみとりの言の葉に ふかきおもひそ病ともなる

薄くこきのへのみとりの若草に跡まてみゆる雪の村きへ 此歌を案して是合成なり。

したふ心のなにのこるらん

わすらる」人に命のたへもせて

忘れしの行末まてはかたけれはけふをかきりの命ともかな の袖はいつかとはれん

朽ん名もおしからぬまて戀俗で

ららみ俗干ぬ袖たに有物を戀にくちなん名こそおしけれ くる人なしのやとそふり行

いせのらみやおふのうらみは身につみて

何ゆへにそこの海松も生の浦に逢事ならの名には立らん 手にもたまらぬ俤そうき

拾ひ置て泪の玉はみせまほ

こきちらす瀧の白玉拾置て世のうき時の泪にそかる

きかた」いほり数多のほと」きす (し 脱無)

名のみ立しての田長はけさそなく庵あまたと疎まれぬ れは

第 pc 百 ル + ħ 雨 夜 記

卷 绾

本歌の 心詞を少取て付 たる句

さのみなと泪の袖に時雨らん 木の葉悲して冬は來にけり

やよ時雨物おもふ袖のなかりせは木葉の後に何をそめまし 捨たる世をはわすれはてけり

花鳥を深山の庵に友なひて

柴の戸に匂はん花は遮英なかめてけりなうらめしの身や わすれんとすれは 人の節

逢ぬ間もありつる身そと慰て

よし別れあはてたにこそ過しつれとは思へともぬる」補哉 大方の空も身にしむ物おもひ

大方は月をもめてし是そ此つもれは人の老となる物を 月をもめてし戀しさそそふ おもひそ増る秋ふくるとろ

在明に云し斗の月をみて

今來んと云し斗に長月の在明の月を待出つる哉

其歌の俤にて付たる句

いつはりの在世にたれをたのむらん ちきらし物よ我そはかなき

つはりの在世を知るも泪にて かはらん程を思ふさへうし

> つはりの ふる里淋 したれか又來ん なき世 なりせはい か斗人の言の葉嬉しからまし

あらしたに花 の跡とへ夕間 くれ

ちりにけり哀ららみのたれなれは花のあととふ春の山風 長閑にたれか身をはたのまん

風渡る秋の草木の露をみて

秋風のよもに吹來る音羽山何の草木 かすめる程そわく方もなき か長閑ケかるへき

けさは又去年か今年の空さへて

春立といふ斗にや三吉のム山 もかすみて今朝はみゆらん

春をは人のおしまぬもなし

花そらき何の心に 山陰にすまぬ心のいかなれやおしまれて入月も有世に ちりぬ らん

有し情をしたひてもみん

つらしとはおもへとたれをたの いつはりと思ふ物から今更に誰まことをかわれはたのまん 目にかる雲をになしや天の まるし

ふしにはれたる雪や高けん

はら

詞斗を云のこす句。 しさは夕くれのみか秋 をはけふかあすかと待かいの泪 の山 の識といつれ高けん 夜 記

空ふく風におきのはのこゑ 淋しさは夕暮のみに限らす。空ふく風も荻の聲かとい IJ,

いかにして都を思ひはなれまし

春を過せは又秋の月

春の興を過せは。

又秋の月にも名残おしきみやこそと

山に住身のいつをまつらん

治れる世は有ともの我よはひ 治れる世は有とても。我身老ねれはかひなからんと也。

夏は手に山の非ならぬ水もなし むすふ手の雫ににこる山の井のあかても人にわかれぬる哉

むすふ水。 毎にあかぬ心也。

つかひもおもふ程はつたへし

玉章にふての限は書やりて 玉章にも細に書。使にもくわしく云聞せても。我心の

本歌の心をかへて付やらあり。 書あらはしかたきと也。

閑なる谷にも松は風ふきて

世のうきよりは山の淋 しき

里は物の淋しき事こそあれ世のうきよりは住よかりけり

木の葉の後の陰そかはれる

秋は猶木葉かくれもくらかりき冬こそ月はみるへかりけれ 冬こそとおもひし月に小夜しくれ

君か代ははけしきかせも治りて 祈るしるしにあへるはつせ路

おもふ心のはかりもそなき 思いて あんしん しゅうかりける人を初せの山おろしはけしかれとは祈らぬ物を

逢事をかきりとたれか云つらん

我戀は行衞も知らす果もなし逢ふをかきりとおもふ斗そ

一本歌にうち任たる句。

たれをうらみんことはりもなし

世中はもにすむ虫の泪にて

蜑のかるもに住虫の我からと音をこそなかめ世をは恨めし 一句は我からの泪と云心也。

秋風寒み夜の長き比

我心なくさめ録つ更級やおはすて山に照月をみて ひとりねはおはすて山 の月なれ co

句はなくさめ筆たる心也。

もと云手に於葉に付やうあり。 なれもやもめのか らす鳴也

風さはく夕山本のひとつまつ

記

卷

PLI

前句に分かたき物二ついへるに。又別の物を取出したる耳をそく出れはあくる東雲に花も盛をみせぬ朝かほな・ はいしょう ひにて

水鷄鳴夜の月ほそきかけ春秋の哀いつれと分棄て何。

夢つゆのみかあたのことはり
である。

待も別れもうさはかはらし

むとりかすみをたのむ山陰のなき物に心を付句。

やまふきをしるへにかへる赤もうし花にゆかすは末やまよはん

おもふとおとやましる哀さあたらさくらそ一かたにちる

月影に花のやとかる草のつゆ

松に風かへるや花に別るらん更わたる月は雲をもたのむらん更わたる月は雲をもたのむらん

とはる、花を人はたをらし といる、花を人はたをらし

おもへともおもはぬをたれ思ふらん一重詞に又重詞を付たる句。

なれるへしむかしの人をこひ侘てといる人にも人のうきをきかはや

夢にもなさてなにうらむらん松風はうらむる花に縮ふきておしめははやく月の入山

真砂より雲に飛鷹数きへて 性ねる身にも年はそへけり 跡とそみへね千鳥なく也 跡とそみへね千鳥なく也

わかは、戀のあはさらめやは

夜 記

吳竹の此うきふしを人もしれ 雪中等の故事也。

有料と云句。述くわいのみに不限。何事にても付たり。 末も通らぬあらましの山

花に來てもみちをなとか忘らん あらましの徒ふしの月をみて

ちきらし物をあきかせそふく

雲か花かもあすやたつねん

あらましの山こそくる」なかめなれ

てはと云言葉の事。 はかなしや空にしめゆふ物思ひ 人はしらしのあらましのする

徒に行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ わすれては打なけかる」タかな我のみ知て過る月日を

夕波にきへてはもへてとふほたる 海士のたくものさそな露けき

いくたひならん月にうき態

秋の風時雨では又更やらて すしのおもひにさらはなし果よ

かなしきと云事は面白事もあり。 とたへては又花に山 風

> 須磨の前の有明の月になく千鳥かたふく月はなれも悲しき らかなしきと云は淋敷心又面白心也。 露をかなしむと云は愛する心也。 いたはる心也。子をかなしむと云は情をかくる心也。う おやをかなしむと云は

又と云字に付様あり。 又とふに人の誠はあらはれて

しはし程なき夕にもなせ

又時鳥つれなきもうし

うくひすのまたる」雪の山里に

又歸へき世ともおもはす

・今一めおさめぬさきに見まくほ 又うき事に袖やしほらむ

おもひ立身を一きはにすてもせて 又歸るさは千鳥なくなり

船のほる雪の夕の鴈のこゑ 又ともすれは物でかなしき

跡もなき苦路の花をひとりみ 又立歸るおもかけもかな 7

無名の鳥に名の鳥を付様あり。 たき物もおなしおもひの烟にて

おくれてかへる鳥のこゑく

記

签 第

村鴉ねくらやせはく成ねらん 春の鳥たになかぬおく山 春の鳥たになかぬおく山 の他の」とけさ 鳴色 く の他の」とけさ 場合さす堤の霜に腐なきて 冬の空にそ鳥をうらむる

をかなき鳥をかこつはかなさ鳥の摩さへ登めきにけり鳥の摩さへ登めきにけり

空寒み雪をつはさの夕からす

みなれぬ鳥のかよふ山本

高の音も聞へぬ方とすつる身に 山時島なとまたるらん 山時島なとまたるらん

今年の花もあたにちる比 をくらにかる」花はうらめし なくらにかる」花はうらめし

花にのみなと末の世のなかるらんをないほる聴毎におきいてよなかしのまゝの梅か香そするをは手折しきみをそつむ

山さくら朽木のあとに又生てれたこそもとの色はかはらねれてこれがくさん山櫻

。 れかひとも云也。又一方にてねかふもあり。これかひと云 也。これかひと云句。 試かてら琴ゆかはや さく花を木の下住のはしめにて

をましひは此世にひとつとゝまりて 別かみの白くなる迄なからへて 別かみの白くなる迄なからへて かはやつかふる君か行すゑ

君かあたりの雲とたになれ

入日のかけをとくねかはは

卷 第 筋の雲をたな引はしめにて 末は廣野にしくれ行空

音もあられのあらし木からし

付句より云もて來る句あり。殊更前句を付のくいし 木の本のもみちに月のこゑ有て 雲とみし昨日の花の夢覺て 月なきやみの空はいつまて 草のいほりに松風そふく

雨そ」く春の藤江の浦さひて

三は四はに家そさかふる

はなつやのいたる所は心にて

武士のゑひらの矢なみ數そひて

おもふれかひのはやき御手洗

とりなす句は云過したるも不苦

しほむかつらをなけく天人

墨の雲棚引谷に庵しめて

はかなくも身を秋ちかくとふほたる

わか住ほとや山をかくさん

きへはきゆへきおもひならはや

うき世の月よみへしなかめし

すつる身は木ふかき陰に庵しめて

瀧津樹の落葉か上に玉こへて つくくしつむのへの寒けさ

歸らしよふりにし人の花の陰 花はまたさかぬ木かけの下蕨 はや冬かれをうつす山の端 つゆうちはらひ侘つ」やねむ

小ねかひと云句。

新島守を君に見せはや

出かての霜夜の朝戸おし明て

おもくとも罪は心に消つへし

秋ふかき花のあるしは音もせて くれては春のいつち行らん 年はけふ逢坂山の闘こへて

かるム野の一村す」き一まつ ふくとしふけはすこき秋風

まてと云手爾於葉大切也。 高ねよりみれは一すし龍おちて 腐のなく有明の月に起出て 末はあまたの水のはや川 開は千里に衣うつ音

世にあふまてと身をかくす人

九

わすれしの人の談や夜半の月のこれでは一次の後つかへん道もやすからて、武蔵野を行々は秋過冬の來て、今こんまてとたのむ面影をつかった。

けに老まては知らぬつゆの身ちりつもる床におもはぬ海有て内まてとこそちきり置つれわすれしの人の談や夜半の月

秋寒けなる木からしそふく 秋寒けなる木からしそふく

花にさけ松の陰なる秋の草

水を友山をとなりの草の底やすけなる身もよそめとけり

けきの手爾於葉を付る事。

船下すふしみの月の更る夜に聞はさやけき澤水の音

山里のさやけき刀に人はねて

天の戸の明方遠き秋の空神代の月もかくやさやけき風や木の葉の衣うつらん

曇かとみれはきやかに空晴てかと云手爾於葉を付る事。 音そのとけきふる里の雨

東雲のあしたの山のらすかすみ木の葉の後は冬の夜の月

一此と云詞を付る事。

たのまれぬつゆのちぎりに秋は來て一此朝より人やかはらむ

此うち川のたち花の嶋 とや此木葉朽葉の岩ね松 をしぬもたる太山路の月 できひたる太山路の月

かほと云手爾於葉付る事。船のほる水の水上花咲て

きかすかほなりいかにうらみんことの葉も心の松はあらはさて

一つ」の手爾於葉を付る事。

ほたし多き世を難面くもわかいてる

響のはたてに人は見へつ 3 おもひ経またしとするも夕にて

なきかかへると夢に見へつゝ

一つつ」た」よふ雪に風ふきて

みれはこてらの空にとふかけ

なかめつる閉は鹿なく山もうしなきかかへると夢に見へつる

都はるかにすめるおく山 整なく雨夜の月の影更で 長閑にすめる春の川水

前句の末の字よりすみちかひに付様あり。十文字付と云。

かる \ 達はつゆものこらす
のあいにか、れるうおのかす \
のおいたが、れるうおのかす \
かる、

裏枯のすか簑ひとつ身にかけて秋の夕に小船さす人

引捨て麻干ちらす夏の日に

宮城のや松島まての月もみつ今そ心のあらましの果めつと云手爾於葉を付る事。

思ひこしあかしの浦の月は見つぶしのねの望斗に旅立てふしのねの望斗に旅立ている。

けになつかしきいにしへの人
けに哀なり鳥のなくこゑ
けに哀なり鳥のなくこゑ

去事みれはなかる A 水に似て 壁山かくれけに別なり の夢 のおくを文に見て

思ふに遠しいにしへの空覽と云に過去現在未來有。

記

卷

是は過去也。 蓬生にいつより月の澄ぬらん

しこき人こそふよしも**豊** たくすむ心になとか恥さらん

思はぬ浦のさをしかの聲秋風の舟路の末や山ならんかしこき人にそふよしも哉

時のうつるや水にしるらん 夕貌や筧の軒をめくるらん をかるム船に手をそかけたる

若葉のくつのかゝる埋木 にうかひ楓なかるゝ立田川

一うはさの句には當座を付へし。

是は未來也。

立田山木々の青葉のつゆを見て のほるもくるし拳の一村 のほるもくるし拳の一村

跡先もかすむひろ野の花に來て

翅やすむる鳥の一とゑ

おく山の花の盛に春くれて、よそにうつらふ程は見へけり、

尋はやうき世の外の山櫻 見るに心のらつろひやせん

太山にむかふ春の面影 大山にむかふ春の面影

おきなすかたになれるかなしさらへ置し庭の秋草うらかれての人のすかたにふれるつゆ霜

湾水せく岩ねの月は夏さへて 冬に一花さけるなてしこ 年わかきかつきの海士の身をつくし

かせやかれの 4月にふくらん 格野の月に山風そふく

住侘し草の庵に花咲て 萬ことたる心なりけり 成けりを付る事一切也。 卷

たら、 してにの みこっと りなりけり なに 付様あり。 とに 付様あり。 とに 付様あり。

さききなる松や冬木と成ねらん しおりとなるや煙一すし とないまという間山 におりとなるや煙一すし

是と云詞に付様あり。 うへ置し庭の小松の陰ふりて

真砂の月は夏のしら雪

は手にもたまらす又消で 場は手にもたまらす又消で

らきたる身とていつち行らんとてと云句に付様あり。

かす~、にふる事おもふ小夜しくれたか泪とて袖ぬらすらんときつれし夜船の月はかたふきてときったる身とていつち行らん

旅とてかなし草のかりふし 名のらすとても我としれ**人** うき中やむかふ時たに忘らん

池に住ひとりの蕎を身に知て とても戀路をあらはしやせん

色(の草はあれとも花さか旅ねかなしき冬の山里

7

維子なく藪しかくれに羽をのして 一木あはれにたてる秋の野

虫の音もよはると聞けは又なきてあかるひはりそ床はなれ行

鴨立宿の暮る淋しさ

又付句上の句にても心は同事也。

人は皆族立里にしはしねて

我まねくむかしの宿の花薄

千二百二十九

鷲のある川への浅ち色付て 船さしとめよ秋の水上

ほとく云手爾於葉の付やう。 入ぬへき道をも知らてよむ歌に おもひなくさむ程のはかなさ

昨日今日かくるちきりのはやたへて 難面をよそにわする」人もかな むくひの程の果をたにみん いく程からぬ身をそうらむる

なとく云手耐於葉の付様。

ねやも関枕も同し枕にて 夢よそなたになと歸るらん とむるをひとのなといそくらん

たのめすは侘つくもねむ雨のよに 獨さへ住めはすまると山里に 物おもへとはなとちきるらん

さてもと云手爾於葉の付樣。 夜そふくる行ても人を尋はや 扨もはかなやいひし言の葉 つをかきりに扨も待みん

先たつを聞は都もいそかれす

いかてと云詞 松の葉をたい朝夕のけふりにて 扨もうき世にかるる玉の緒 の付様。

あちきなやおもひの果の草の原 みれはたゝ汨そおつる秋の月 月にもはちすいかてねぬらん 君にいかてか名をは知られん 人をうかれといかて思は

雨聞てあかすたに有秋の夜に

問答したる付様。 うらみをも世のうき事にいひなして ぬるム納をやつ」み果まし

峰こす風に木の葉ちる音

柴の戸をとはゝ何とかこたへまし なき跡に心ほそくも獨ねて せめては小夜の夢にたにとへ

朝つゆのきへぬ風にも花散て 何をよすかにしはしとゝめん はかなの春や何にたとへん 何と云詞の付樣。

山里の花の跡とふみやこ人

比と云言の付樣。 はかりと云手爾於葉の付樣。 淺ちふやふるき都の月の本 あはすとてかよひはやまし夜はの空心をみてやいとゝ難面 山深み鳥たになかぬ花に來て 遠島を夜船の末の雪にみて それならぬ聲もうらめしほと」きす なき人の庵にのこる山さくら 春の夜の月にうきたる雲きへて 夕月夜袖より出る山とへて **戀しさはたゝ等閑の夕にて** 淋しきはかり物しつかなり 手にとるはかりちかき俤 きへむとはかり身をうらみつる 手にとるはかりみゆる俤 かたるはかりにむかふ面影 かすむはかりの わかれし人そみるはかりなる あけほの」山

> 春ふかくかすめはふしの漁汚で 春ふかくかすめはふしの漁汚で うらかれの野路の玉川すゑはれて 一前句に侍る事を喰に付る様。 けふれる方や含なるらん 飛鳥の末野の柳秋くれて たゝ名をゝしめ弓矢とるみち なくそうきかせきの山の時鳥 にての手爾於葉を付様。 山はたゝ人かけもせす園にて 尾上の杣木雲や引らん

と」の手爾於葉の付様

みてこそいとゝ戀しかりけれ

遠島松のかすむ明ほの

住なれてこゑひなひたる都人

さそなすかたもかはり行らん

しるへせよなかき山路の時島

心のやみはさそなかなしき

さそなの手爾於葉の付樣。

花ちる比そむかし催す

記

記

卷第

きへやらぬ淡路の山を雪にみて 契國をへたてたる名所。 教の夜のなからの山に鐘なりて 秋の夜のなからの山に鐘なりて

山の遠きやまつくれぬらん」が何の口傳之事。二五三四の句。 なにこひ行夜や更ぬらん なにこひ行夜や更ぬらん

是より三四の句。年もはやへぬいつをまたまし年もはやへぬいつをまたまし

の鐘にちる山さくら

いもにこひ行空や更ねる遺きみやこの便きかはや山の遠きや夕なるらん

みやこたに四方の木枯吹入ぬ一心付の句。

夕の鐘にさくらちる山

遠山松の夕くれの陰

無心所着の句。

是躰の句毎に工夫有へし。子目せしのへの松虫又なきて子目せしのへの松虫又なきて

青柳の朝氣の煙江にはれてよる船ちかき春の山本一営意則妙の句。

五月雨のふる川柳水とへて
幸材の草葉の州泊ににれて

木を草と云なし。草を木に取なして付へし。我を人に付。人を我に付。鳥けた物を我に付。我を鳥獣に付。一付樣心持。たとへは出ると云をかへると付。山を海に付。

立歸りみるや色こき小萩原

ますらをか心あらくまかり留ていつれもしぬをいとひこそすれ玉川過るのちのたひ人

あすとないひそあらましの山 おの葉こほす風をふきそふ がの葉こほす風をふきそふ 龍の音嵐ふきそふ山里に

夜 FC.

かすみけり逢坂こゆる夜牛の月 よもきふの宿は月さへ澄侘て いそかれぬ新島守の舟の道 なく基かすかなるころ さくらにのこる鳥の一こゑ

鏡のうへになみた落けり

自妙の雪の山の端鴈鳴て

わか心たれにかたらん秋の空

获に夕風雲に鴈かね

めかれせぬこすゑになれは花散て 人もね畳はかくる物かは かへる心や行かよふらん

老てこそ哀をもしれいとふなよ

秋寒き古郷人のはつ時雨 夕日にか」るしかの浦なみ

一日をする様。 暮るまでにや身をは頼まし

朝ほらけ船行あとの波をみて タくに隠のくる空

つゆ寒き萩の下葉の朝なり

一季をする様、

みな人の遊ふはむ月二月や 三月の空もはやく暮けり

一年をする様。

みやこかなさくらかつきは時鳥 月の夕くれ雪の明ほの

陰陽の連歌の事。たとへは前句を取かへたる句も。言もて

也。陰に陽かけたる句。 行は。取なしも。又發句をするにも。是を知らてはかなふ へからす。 陽はあらはれ たるかた也。 陰はかく れたる方

船の行衛そおもひやらる」

磯山にすくなる松の木を植て

又陰陽かけたる發句。

朝鳥の霜夜を眠る日影かな

又陰陽かけたる句。 遙々木曾の里のかりふし

かけ手爾於葉。又十文字付三句する樣 伯母捨の月を都の望にて

なるとをわたる波の村雨 ふるま」に世は何事もなると知れ

木の葉の後も落栗のこゑ

かけ手爾於葉。らけ手爾於葉。

千二百三十三

卷

四 百

又心てにをは。歌てにをは。 引小松こそ野にはまれなれ 山はまた去年のましなるうすかすみ 立称 しるき雪のあさ明

海士の衣や船にらつらん る月のあかしの信やあれしより

心とやわか古里のあれしより住 住 うかれたる世こそ秋なれ うかれたる世をはいとはん

又とかめてにおは。遠手爾於葉。

身をすてはやすかるへしと知りなから 何とてつらき世には住 らん

みたれ手術於葉。

\$

つにおもにの推柴のつゆ

いかなる雲の山かくすらん

千里をもへたてぬ物は心にて にしへ人そ月にとはる」

かけ手爾於葉。 今よりは身こそ獨の老の秋 重てにをは。

つゆ霜のはやふる炯のかたあらし あらしや秋の夕なるらん

たれそとみれはしらぬ俤

主かくす絹こそあまれ玉簾 たとへはあまりうきに海士小船。柴の応にしは をつくす。 つらに板ひさし。 つとめてに夙におきて。是等うけつかけつ心 濱ひさしに 久しく。

身をつくし

に身 た

重てにおは に任へし。

とちはつる葛葉の 待を知りてや月も出らん おつる松の戶に

月まつとい あやめもみへぬ秋の夕くれ と汨のあやにくに

餘情の句。

あなたらと春日のまた初草のねみん 原 造せ花さから なからへてたのむちきりのすへい のみかく玉津島 んともせす

かに

三段切の句。

さす花や瓶の上なる山櫻

n

H

0 春

の風

五月雨は峰の松風谷の水地のおれ宿さくらか本の夕月夜いつれ宿さくらか本の夕月夜いつれ宿さくらか本の夕月夜

雨 夜 記 鳥そなく花にねしをや思ふらん

夕哀になひく竹の葉

行袖の俤とおく野はくれて 草葉のつゆの自妙の色

前句を釋したる句。

られしき壁に初隔そなく 空に澄月やおもひをさそふらん

松風ふきておしかなく山

長高き躰。

嵐の音そ木々にのこれ

る

人歸る太山のまかね吹すてく

虎の臥太山おろしに花おちて 毛をふく世こそうらみおほけれ

老てこそ衰をも知れいとふなよ 人もね覺はかくる物かは

山本の春のあら田を打返し おもふにつけて増る総しさ

前句をそのまゝにてする句。是上手にならすはすへから

**春や知たか世にらへし山さくら** 

よし野の花のおくを尋ねん

いりほかの句。

月更る淀のわたりの時鳥

月代のとしては釘を打ける也。

待て心をつくす川船

す。

未來記の連歌。

まなひて可然外。

なかめすはららみやせまし夜半の月

一中古と當世の句の心もち。

風ならて月に習する友もなし

音せぬ月の夜はかなしとすへし。

獨ありその海をこく船

一前句にかくる句の事。

たひ人の手はあた」かにくつはきて 旅人の足あた」かにくつはきて

木立すさきをみれば鷺は居て

鷺のねてとしては釘を打ける也。

願ひをみれは千鳥なくなり

又あはん身は 旅にと人のいつるかさの しら菅のかりの世に

序の連歌。

みれは波よる遠のあら磯

ie.

船ならぬ終のとまりも知らぬ身に 鐘ははるかに明るとそ間く

おとろかはこん世の夢もさめつへし

天津鴈夜牛のわかれにこゑき」て

春よ心に夢な覺しそ

發句わき第三の事。發句はいかにも時宜に相當したる樣に すへし。脇の句は發句の心をうけて。時節の不遠様にすへ 第三はさのみ不付とも。長高く幽玄にすへし。 雨夜記畢。

まなく人めもしけるれは。雨夜のよひく灯の本にて書 此一卷は宗祇老人に年比相尋し事を。晝は世の中のいと つけ祇公へ捧けれは。 祇公くり返し御らんし。 はしは

> へからす。年は永正十六つちのとう。さ月かみの十日に ねに同し。此外なしとて御ちかひ有。連歌の奥義是に過 しもれたる事ともを譬加はへ給ひ。此道の趣向老人かむ

しるしおはりぬ。

[右雨夜記舊本闕今以內閣本書寫以刊本加校合]

宗 長判

淀乃和當里

〔右舊本闕〕

## 連歌部三十

連歌極秘之書號的中抄 地連歌心得之事

曙の浪に別る」かりないて そととしもなく霞む海つら

そことしもなく質むといふに歸鴈似合たり。海つらに宿 よせたり。

旅衣霧分ゆくは鴫立て

山路かすゑにつ」く荒小田

旅衣分るといふに山路を付たり。鴫に荒小田を取出たり。

なかれたえく、蛙鳴なり 古里の垣根あらはに打賞

古里の垣根になかれをよせたりけれなとの心也。蛙に霞 を付たり。 同時節也

卷

第

五 百

胸 中 抄

月ほのかなる夕かれの庭

鳴虫の音もむら薄風立て といふに。風のいさ」か打吹たる射也。 ほのかなるといふに薄を出せり。穂の緑也。夕かれの庭

虫の音は枕に近き月更て 野原の里にかり寐する暮

得なり。地連歌を能心得て。其上にて時々作意の句も。 句 野原の里に虫似合たり。假寐する暮に月勿論也。右の五 いつれものかれす。又奇妙奉る所もなし。地連歌の心

作骨連歇心得之事 又は氣氣殊之外の儀も有へき也。

花より後のほのくらき山 つつしちれる木の葉の重りて

千二百三十七

うしや我にもあらす也ゆく 前の句。 付句は花のちるに見なせり。葉の重るといふを。落花の 木すへかつく、茂る心にいへり。奇妙の作骨也。 ひとつつゝちれるといふに。木の葉の事なるを。

**毎の月の花に吹たつ夕**

捨る身にては花の事をも何とも思はさらましに。夕嵐の 莓の戸と云出したるは捨身の事也。共邊に必花有へし。

吹來て花をちらす見て。俄におしく思ふ心也。はしめの 心にあらすといふ所の付様は。捨身の心よはく成をうし

やかて替らん心とそ知

夜とは思ひあまれる契りにて

我心の替らんと也 只一夜逢たらは。やかて又逢たく思ふへきをかく言り。 前は人の他なるをいふ也。付所は難面人を思ひくて。

心にすてぬ身はかひもなし

類ましもことのはまての恨にて

前は捨る身の事也。真質捨る身ならねはかひもなしとい し也。 ふを。戀に付なしたり。つれなき人を恨みて。今は賴ま しといへとも。心中にすてねは。又やかて戀しくとふよ

> 野分せし庭の月影夜冴て 草木折ふす雪の明ほの

(12照) るを付たり。雪を月の雪にとりこせり。

景氣連歌心得之事

かすかにつくく野への古道

むらの竹の葉かしけ梅吹て

有さま見るやら也。 野むらの弥也。竹の葉かくれに。垣根の梅の咲わひたる

宿かり衣嵐ふくなり

いつくともしらぬ野原に駒留て 旅行の躰也。 原に駒打谷。 宿かりたる有様有へし。 日も夕くれの學の嵐なとに。そことなき野

鼠に雪もしふく笠の端

むら竹に棚なし小舟さし留て

に及へからす。 舟人の雪嵐をかなしみて。笠打かたふけて。 にさしよせ体ふ有様也。誠に唐繪なとのことし。凡慮是 むら竹の陰

雨なから花落霊す草の庵 心ほそくもぬる夜かなしも

落花の時分。雨中深夜。 まことに心細かなるへし。監山 抄

打つち高き麻の狭衣

雨夜草庵中といふ詩の心也。

芦邊にしろき鷺の一つれ

雨落る入江の浪に山暮て

鷲の一しほしろき仕立粉骨也。此五句氣氣斗の句也。上暮山の入江は麓なとに鷺のおり居たる躰也。夕になりて

取成連歌心得の事

のわさなり。

初心として數容及ふへからす。

いはぬ恨はいはてこそあれ

山吹の垣生荒ゆく春の暮

いはぬと取なせり。 唉ゆへ也。又垣は結ものなれは。荒ゆくにまかすれは。 前の句は戀なるを。山吹のいはぬといひて。日なし色に

是や御幸の氣色ことなる

夕嵐催す山のむら雲に

といふ所なとも。嵐の空に有へし。

**しのたの森の木の間もる月** 

付たり。信太の森は泉州也。氷は月をいふ。前は泉の事納凉なり。和泉の國にとりなして信太の森を

山賤の岨の古道跡見へて

リ。麻のさ衣は山賤にて付たり。 前は砧のつち なるを。 土の字に とりなして 古畑を付た

髪白くなる事そかなしき

衣への妻戸の障子明る夜に

なしきと云所。逢夜の明るをかなしむよし也。前の髪白くなるを紙の字にとりなして障子を付たり。

かっ

本歌を取連歌心得の事

知人もかな深き夜の月

しの友ならなくにと云歌を取也。深夜の月は秋風にてあ藤原の興風の歌に。誰をかも知人にせん高砂の松もむか高砂のまつ袖しほる秋風に

ひしらひたり。

袖は嵐の風そはけしき

都にも身を侘人の麻衣

有を。都にても侘人の上は。嵐のかせはけしく身に覺ゆ古は長歌に。九重のうちにては。嵐の風も聞さりきをと

ると云り。本説に引かへて付たり。九重とは都事也。

草の庵は限しられす

夜の雨晴るとすれはまたふりて

そ山郭公。此歌をとれり。 限しられすと云所より。 きりしられすと云り。 草の庵といふより夜の雨をと 雨の晴てはふりくする

へておもふ末はしらせよ

我恨真弓つき弓つきもせし ろし。 はしみせよ。つきりつきもせすといふ間のつゝきおもし 伊勢物語に。梓弓ま弓つき弓年をつて我せしかことうる

入相 むかしの人も似そある の鐘にもちらぬ花を見て

右二十五句之連歌者宗牧婦士の賢作也。はいつはりといへり。奇妙の作意也。 L そちりけり。 能因か歌に。 たり。 入相かねより後に花の有を見て。 むかしの歌は 山本の春の夕くれ來て見れは入桐の鐘に花 いつれ共なきに。此歌を取出 扨も能因か歌

龍山御判

以宗養自筆の本

令書寫之辈。尤可謂連歌之至實也。

かに見るへからす。まことに連歌の付合秘事を顯す所成 五句。者宗祇。注は宗牧也。 初心としておろさ

## 閣夜一燈

る處すくなし。 かく懇望せし、話出し。まことにしめ野の草の枯葉も。 花になり色にうつり。あたなることのはのみにして。まめな 情すくなしと。よりくいひしらせ給ふを。 下向の時。態態の床の夢打覺て。宗長にとしかた行末のとと 吟味し侍らは。 さ」きのかたらひをなし。金石の交をかたくするに。 し侍らす。皆人おもい所なれとも。是をむねとせされは。風 くもかたり給ふて。連歌には付所秘することとで。 にはいかやらにも眺望をめくらし。山家の句には景色を毎 出さは。夏冬の何はおのつから移りやすかるへし。水邊の何 夫連歌は梨壺のむかしを忍ひ。齋宮のいにしへをしたひ。 し。艷言大方しるし侍り。他見あるへからす、く。 の露の置處なりと。たかいに感しあへりとなん。今尊命に應 好士の巾せしは。先春秋の句に心をつけ學ひ 自然に関々玄々の境に入つへしとそ。祇公東 宗牧此道をふ 近然沙汰 人の心 紫野

付所詞

わかる 行 枕。 天地。横雲。夢。雁。春。秋。 年。 月日。 春。 秋。 水。 鳥。

感

雲。

摩	ふる	落る	沈む	うかふ	うかる」	雪	夢	重る	やむ	渡る	みる	きく	たつ	めくる		強る	さやか	きゆる	高台	むすふ
郭公。波。法。鳥。鹿。かね。風。水。舟。	雪。雨。しくれ。露。霜。世。	月。花。露。雨。日。淚。水。雁。鳴。木葉。	鳥。花。世。涙。水に月。	水。月。花。鳥。雲。淚。蛙。俤。	蝶。鳥。世。雲。思。	花。月。黑髮。波。	花。世。旅。春。秋。	山。雲。衣。岩。	雨。風。おもひ。うらみ。雪。	風。橋。世。舟。雁。鳥。鹿。	花。月。雪。夢。水邊。山類。	風。雨。かね。郭公。鹿の音。	鳥。霞。雲。春。秋。月日。名。烟。衣。旅。	車。月日。しくれ。	雲。	思。恨。袖の香。月日。露。霜。雪。春。秋。	月日。鐘。霜。風。水。	野科。露。霜。雪、雲。けふり。灯。命。	名。年。草。木。山。河音。いやしき。	草枕。糸。氷。水。夢。露。霜。帶。紐。
一すむ	示詠	一入出る	一浅き	一深き	一契	一うらむる	一かつく	一かくす	一つれなき	一他なる	一はかなき	一ろさつらさ	一はらふ	一松竹の烟	一水の烟	火	一過る	一まつ	おと	
水。山。月。世。庵。	月。等。花。雲。山。	野。山。舟。月日。	水。山。川。春。秋。	水。山。霧。霜。雪。	花山。荻の風。草の露。	虫。きりくす。世。身	露。淚。雁。	雲。霧。山。月。身。狩場の鳥。	命。松。有明。	露。花。命。世。身。名。	露。夢。花。世。	ひ秋。世。花の友。旅。	風。鴛。鴨のつはさ。露。	ともしさす。鵜舟のかゝり。	うかひ舟。いさり火。河。	<b>鬱。いさり舟。衣ほす。</b>	時雨。雨。風。春。秋。	月。花。郭公。春。秋。	風。かね。水。波。雨。	松。获。

千二百四十一

		_		_		_					_	_		_	_		_		_		
	51	<i>አ</i> ›	护	つなく	ひく	のふる	かたらふ	友	傾く	みち	あと	くる		とふ	歸る	むらく	ほのか	うつ	おとろへ	さそふ	Str.
	笛。鳩。あやめ。風。	もしほ草。松のは。琴。手。草。	花。わらひ。爪木。柴。草。女郎花。	舟。駒。馬。こゝろ。	<b>杣木。舟。橫雲。袖。菖蒲。汐。網。</b>	筵。命。こゝろ。	雲。水。鳥。袖。	月。花。雁。旅。鳥。	月。軒。よはひ。竹。橋。松。舟。	鹿。水。野。山。霜。雪。學。	野分。雨。鳥。鹿。古鄉。雪。霜。	春。秋。鳥。獸。糸。雁。	夢。	風。嵐。郭公。友。月。庭。時鳥。鳥。雁。	鳥。春。秋。雲。波。舟。雁。昔。水。	霧。雲。烟。松。竹。草。鳥。霞。雪。霜。	山。月日。夢。かね。花の香。	衣。きぬた。彼。	秋の花。むし。世。身。	水。胡蝶。雲。風。春。秋。舟。島。獸。	卷第五百 閣夜一灯
しとまる		一さす	ふし	一果て	一絶て	一長き	一かくる	ーつる」	ーとる	ーとくる	ーいふ	一短き	一をく	一をす	ーひらく	一おさむ	7 7	るるよ	一つ」む	一燒火	
<b>春。秋。移香。舟。心。狩</b> 塲。		舟。日影。笠。汐。棹。戶。垣	<b>笹。竹。糸。うき。</b>	春。秋。命。身。野。山。道。	道。命。橋。夢。傳。風。	日。命。綱。舟。夜。旅。	すたれ。笹かにのいと。野。山。	鳥。獸。雲。風。旅。雁。	螢。榊。棹。柴。扇。ぬさ。早苗。	下紐。こゝろ。氷。	垣。下紐。かみ。	夜。命。心。草。	際。霜。扇。身。	舟。弓。	花。戸ひら。	世。舞の袖。身。図。御調物。	かね。水。谷の摩。松。	露。霜。雪。旅。もしほくむ袖。	螢。袖の淚。うれしさ。思。	里。舟。もしほ。	千二百四十二
	雁。	0							E。 爪木。												11=

									_				41			-				
	きく		たつ		のこる		めくる		さやか		きゆ		結ふ		行	と云に	わかるゝ	春連歌	右篇他准之。	
櫻ちる野の宿の松風	見し人のなきを日毎にきょ俗で	鳥を啼花のいつくに歸るらん	霞立つ、日とそなかけれ	梅かほる夜の有明の月	残りてそ哀はまさる春の花	陰高き花に車の晉はして	めくれる雲は幾重なるらん	朝日いさよふ春の遠山	さやかにもみるへき花に雲霞	春さへとつる窓のしら雪	埋とも猶きえやらぬ老の床	春ふかき谷を氷やたのむらん	木陰にしはし水結ふころ	春の月日のたちそむるかけ	ゆかは花いつれとからん遅からん	天地と成て幾春立ぬらん	わかれしがそけふも食める	<b>廷歌</b>		菊。
ふる		<b>\$</b> 6		らか		<b>う</b> か		雪		夢		ops		み				ふし		_
3		ちて		かふ		かる」						t		3				L		
世中は何かふり行ことならぬ	み山の水の春の	ちり果し花と	雨さそふそこの蛙	春行水に浮ふ	春の野は胡敷にたに	<b>らかるな心櫻</b>	やすらへは排ふ計	ひたすら雪に	時しもあれけふ	なくさむ程の夢も	花の後なと雨風	うらみふかくてやみなんそうき	一むらの林の賤屋花	みれは寂しく	玉の緒はいとならねともくるし	旅はらきふしいかて多かる	篠のはのかりそめ吹る花ちりて	ふしとなるへきらさかつらきか	花を風いつよりちらし初つらん	遠き背は猶きかまほ

卷第五百

闇夜一灯

聲有明の月に山風の摩	流て遠くけふる川水	水けふる
萩すゝきいはむかたなき古郷に	飛螢行かたもなくさ夜更で	
	離小島に芦火燒影	火
朝かほのかれし夕かけ露見えて	盤とひかふ夜半の凉しさ	
数々竹の数~窓を寂しき	下萠の芦のむらく打磨	もゆる
朝かほに真垣かこはせ住や誰	ふけぬまの初音やいつく郭公	
他なる。露より他のこゝろとけり	過ゑしまのおもひもそそふ	過る
露句ふ花の薄きりはるゝ野に	村雲に撃も跡なき郭公	
かくす。雲な隱しそ秋山の色	いつさめてかはなをも待らん	待
月やとる庭の岩かき水越て	郭公過る枕をそはたて、	
ふかき 紅葉にふかき露は見えけり	夢の行ゑはたゝかねの聲	
いふ句に 夕露のふるき都の秋立て	蟬のはの薄き衣をけふかへて	
<b>うきと</b>	摩にや立ん袖の別路	擎
秋連歌	夏連歌	
夏虫のもゆるおもひは風もふけ	ことはに みよし野や櫻山吹春くれて	ے
身をつくさする戀や拂はん	なかれぬもなき花の瀧川	もと云
. 残る夜のは山のともしさし捨て	夕暮の霞に鳥も打鳴て	
松のけふり ふかきは松のけふる一むら	春のみならぬけふの別路	のみ
鵜舟のかくり夜をまつかけ	置つふる露こそ花に哀なれ	
水けふるなり川そひの道	うつろはんとはかねてしらすや	移ふ
いさり舟なきたる海にさしやらて	きのふの花は庭のしら雪	
千二百四十四	卷第五百 閻夜一灯	

卷第五百

闇夜一灯

千二百四十五

	r4-r			J.		∜m		+15		71		-1-		j879			1275		D.Y.
	庵	つる」		カ· く		細き		护		ひく		友		摩			傾く		跡
夜の雨はる」ときけは又ふりて	草の庵はかきりしられす聴を催しきぬる旅の友	打つれて行鳥の撃く	にほの海の汀に松の葉は落て	かき集るはた」もしほ姉	沛遠く菜しほのけふり打墜き	こゝろほそきは跡の夕くれ	春の野や柴の重荷も忘るらん	島さに手折つらし山吹	宮木をいそく九重のうち	引のほる淀の川舟おほからし	夕からす跡に一つれ行やらて.	同し友にもおもふもやなる	男庭啼月は有明のあはち山	なかき潮の曉の軽	雜連歌	舟はた白き雪の釣人	入口かけ傾きかくる沖つ波	落葉そ名残けふのあは雪	あともなき風の縁の夕ま暮
			季	蒙者也。	此旨	少し	右之		あふ				きゆる		灯		<u>ئ</u> ر		かく
B products there is demanded the state of th		長慶朝臣	季秋七日	也。	此旨於御背者。 住吉玉津島天滿 大自在天神	少しも残らす合書寫進覽之候。	右之一卷父宗牧菜かために闇夜の一燈として授與之。今	さまくの家をあらはす君か	あへるも風の便ならす	燈のたとへていへは常にし	きえまつまゝになきに成けり	沙合のあはと途に日は入て	酒行舟そ波まきえ	<b>芦原に蜑の釣せし舟朽</b>	盤のかけそ灯とな	<b>梅吹かけは笛の音もうし</b>	一しきり竹吹しほる風	明ぬまの雲の遠山眉	あらはれぬれはか

師君貴人亭主なとは。いかに句を付遲りたりとも。下句な 上句の時はあそはし候へと申へし。但下句なりとも。 との時。是にて遊はし候へと云へからす。景物なくとも。 雪月

て座へ出へし。

花能候は」。

景物有所にて遊はし候へと可申也。

初献三献なとの時は御座にて食すへし。 1 3 て可立なり。物して大小の用有て中座に立時も。文臺を右 に見なしてよるへし。膳を持て立時は。文臺を右にみなし 中ならは末座に居へし。貴人参候へと仰あらは。文臺を左 まはす。早々食果て可居なるを。隙明たりとても。 又は飯の時分。膳を持て下座に下へし。縱貴人如何樣成食 して可立也 にも句を可付と仰有とも立へし。さて末座にて左右にか 點心なと食の時。 上座食

執筆の人と出合の句の事。是も摩の前後いふへからす。 形に式代して越何を可書也。重々は式代をせぬかよきな 大

夢想の句引の時は。夢想の句をは作者より一字も二字もさ し上て可書也。 共外は指引なき也 仙洞或公家或將軍の作字は。 一字指上て書

作者書終て後。 年號月日を書なり。

> 家なとにて會をせは。我と文甍に紙ををき。硯をらへに置 師君貴人紙硯を召よせ。是文臺に置候へと。 候は」。文臺の眞中に紙を打敷。 共上に硯箱を可置也。 取 つか せられ 我

一懐紙を書果て。 付を可書也。 を略すへし。 月。此日ともは發句にて時節を聞ゆる間。 盡。卯月八日。 但如此作者失念して。只の發句なとならは日 五月五日。七夕。重陽。 年號月日を書損。正月七日。 九月盐。二夜の 年號月計書て 三月三日。 同

早連歌と披露あらは。面八句書で。質で年號月日を書 口傳とも云也。自然の儀也。 略義とも人あらは。面過て候と答ふへし。 是を切残の

一懷紙書果て作字讀あけ。三に押折て文臺に置。 ゆへ右筆と云也 今又立時も右になせは順にたつなり。 は。文臺を右にして立へし。始めさし寄時も文臺右なり。 加様に硯を右にする 立時の法様

一山はいつくそ。 一住吉の宮と。 ならはかやらに書へからす。 五音相通也。是執筆の習ひ。 難波の宮こ。 里はいつくそなと云句有。 宇治の宮こ。 古實也。 其時はいつこそと書へし。 吉野の 見若僧なとの 宫 月の

是等の時は都の字不可書也。 秘傳 たななの

第

卷

第

時はかな假字たるへしと云々。 し。亦一説。五文字假字の時ははな真名たるへし。真名のの時はかな假字たるへし。真名字の時はかな真名字たるへ 發句の末の哉と留る事。 ニケの大事あり。 末の五文字かな

ニッ。合て五ツ河書也。 發句の上の五文字の筆立は真字也。 るへし。惣して上の句には真字に三ツ。下の句には真字に 脇の句 の筆立は假字

た

3.

昭 明 明 治 治 机 四 四 六年三月 四 年 廿 三日 H 日 

複 不 許 製

發 印

行 刷 所

所

續

群

者

印

刷

東京市豊島區西巢鴨二丁目二五七四番地

誠

次

郎

發

行

者

田

藤

四

郎

續群書類從東京市豊島區池袋

完二丁目

會一代

表 者地

東京市豊島區西巢鴨二丁目二五七四 忠 丹 義 羽

東京市豊島區池袋二丁目 書 堂 一〇〇八沿地 印 番地 刷

所

振替東京六二六○七・電話大家七一八 類 從 完成 會









